

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（14）

団体営基盤整備促進事業（肆部合地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

うえんそん

上苑 A 遺跡 2

2021年3月

鹿児島県志布志市教育委員会

序 文

本書は、団体営基盤整備促進事業（肆部合地区）に伴い、平成 27 年度に実施した、志布志市有明町に所在する上苑 A 遺跡の発掘調査報告書です。

上苑 A 遺跡は縄文時代晩期末から古墳時代終末期の複合遺跡で、特に古墳時代後期末から終末期（約 1,400 年前）の成果が注目できます。

数多くの土器や須恵器、石器、鉄器だけでなく、竪穴建物跡が 20 基発見され、7 世紀頃の集落であったことがわかりました。県内において、7 世紀代と確実に判断できる集落遺跡が発見されることは珍しく、南九州の 7 世紀代の様相の一端を明らかにすることができました。

また、宮崎平野地域で製作された土器が数多く持ち込まれていることもわかりました。志布志と日向地域との強い関係がうかがえます。そして、製鉄・鍛冶関連資料も見つかっており、集落内で鉄器生産を行っていたこともわかりました。

このように、7 世紀頃の志布志の歴史を明らかにする上で、貴重な成果となりました。

本書が市民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、地域の歴史や文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力いただきました志布志市耕地林務水産課や鹿児島県教育委員会等の関係各機関ならびに発掘調査や整理・報告書作成に従事・協力していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

令和 3 年 3 月

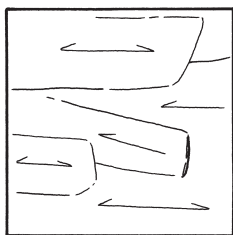
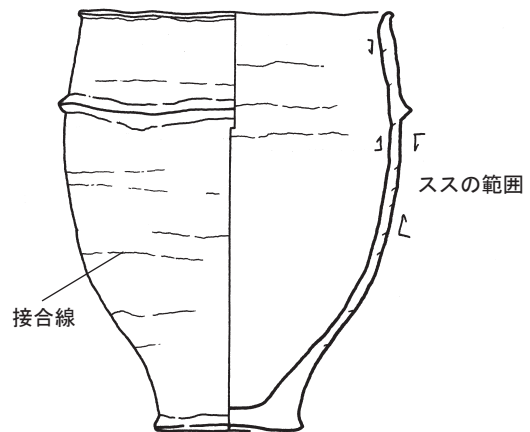
志布志市教育委員会
教育長 福田 裕生

例 言

- 1 本書は、団体営基盤整備促進事業（肆部合地区）に伴う上苑A遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県志布志市有明町野井倉字上苑に所在する。
- 3 発掘調査は、志布志市耕地林務水産課の依頼を受け、平成27年度に志布志市教育委員会が実施した。
- 4 整理作業・報告書作成事業は、平成28・30年度、令和元・2年度に志布志市埋蔵文化財センターにおいて実施した。
- 5 本書で用いた方位やレベル値、グリッド基準杭は、世界測地系に準拠したものであり、その測量はありあけ測量株式会社に委託した。
- 6 掲載遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。掲載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。
- 7 挿図の縮尺は各図面に示した。
- 8 遺跡位置図等の地図は国土地理院発行の1：25,000地形図『志布志』、1：50,000地形図『志布志』、大日本帝国陸地測量部発行の1：50,000地形図（明治35年測量）を利用した。
- 9 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、大窪祥晃、相美伊久雄、上田義明が行った。空中写真撮影は、株式会社ふじたに委託した。
- 10 遺物の実測・トレース作業は、臨時職員の協力を得て、相美、川路卓太郎が行った。遺構図と遺構配置図作成には、デジタル技術を用いた。
- 11 石器の実測・トレース作業の一部は、株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 12 遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて、西園勝彦氏（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）と鮫島えりな氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。
- 13 鉄器のX線写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて行った。
- 14 本報告に係る自然科学分析について、日鉄テクノロジー株式会社八幡事業所に鉄滓等の金属分析を委託した。
- 15 本書の執筆・編集について、第4章及び第6章の須恵器に関する執筆を川路が、その他の執筆及び編集を相美が行った。
- 16 出土遺物及び図面・写真の記録類は志布志市教育委員会で保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物注記の略号は「U S N. A」である。

凡 例

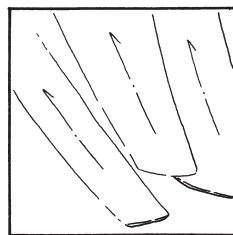
- 1 本書で用いた遺構記号は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき』（2010年刊行）に準拠している。なお、遺構番号は遺構の種類ごとに、検出された順に通し番号を付し、報告書まで固定している。
- 2 本書の遺構配置図は、1グリッド（1マス）が10m四方であり、各図に縮尺を提示している。
- 3 土層と土器の色調は『新版標準土色帳』に準拠した。
- 4 遺物挿図における古墳時代土器の網かけは赤彩部分を示す。
- 5 土器表面にススやコゲが確認されたものは、断面図に矢印でその範囲を示した（右図参照）。
- 6 土器の調整痕の表現方法は、下図のとおりである。



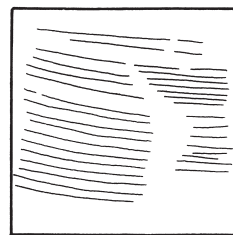
ナデ



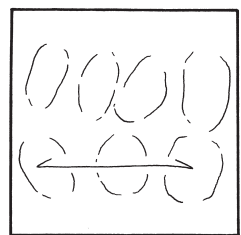
ミガキ



ケズリ



ハケメ



ユビオサエ / ユビオサエ後ナデ

本文目次

序文		第4章 調査の成果	
例言・凡例		第1節 縄文時代早期の調査	14
目次		第2節 縄文時代後期の調査	14
第1章 調査の経過		第3節 縄文時代晩期末～弥生時代初頭の調査	14
第1節 調査に至るまでの経過	1	第4節 弥生時代中期の調査	19
第2節 調査体制	1	第5節 古墳時代前期の調査	25
第3節 確認調査	1	第6節 古墳時代後～終末期の調査	29
第4節 本調査	1	第7節 包含層出土の古墳時代土器	143
第5節 整理・報告書作成作業	4	第8節 時代不明の調査	147
第2章 遺跡の位置と環境		第9節 包含層出土の石器・鉄製品等	151
第1節 地理的環境	5	第5章 自然科学分析	160
第2節 歴史的環境	5	遺物観察表	173
第3章 調査の方法		第6章 総括	
第1節 発掘調査の方法	8	第1節 平成16年度調査との関係	196
第2節 層位	10	第2節 縄文時代早・後期	196
		第3節 縄文時代晩期末～弥生時代初頭	197
		第4節 弥生時代中期	197
		第4節 古墳時代前期	197
		第5節 古墳時代後～終末期	197
		第6節 時期不明	221
		写真図版	
		報告書抄録	

挿図・表目次

第1図	遺跡位置及び周辺遺跡	4	第34図	14号竪穴建物跡 出土遺物	45
第2図	周辺環境の変遷	4	第35図	15号竪穴建物跡 平・断面図	46
第3図	グリッド図及びトレンチ位置図	9	第36図	15号竪穴建物跡 掘方平・断面図	47
第4図	土層断面図(1)	11	第37図	15号竪穴建物跡 出土遺物(1)	48
第5図	土層断面図(2)	12	第38図	15号竪穴建物跡 出土遺物(2)	49
第6図	土層断面図(3)	13	第39図	15号竪穴建物跡 出土遺物(3)	50
第7図	縄文時代早期・後期・晩期末～弥生時代初頭の出土遺物(1)	15	第40図	15号竪穴建物跡 出土遺物(4)	51
第8図	縄文時代晩期末～弥生時代初頭の出土遺物(2)	16	第41図	16号竪穴建物跡 平・断面図	52
第9図	縄文時代晩期末～弥生時代初頭の出土遺物(3)	17	第42図	16号竪穴建物跡 出土遺物(1)	55
第10図	縄文時代晩期末～弥生時代初頭の出土遺物(4)	18	第43図	16号竪穴建物跡 出土遺物(2)	56
第11図	弥生時代中期 遺構配置図	19	第44図	16号竪穴建物跡 出土遺物(3)	57
第12図	31号竪穴建物跡 平・断面図	20	第45図	16号竪穴建物跡 出土遺物(4)	58
第13図	31号竪穴建物跡 掘方平・断面図	21	第46図	16号竪穴建物跡 出土遺物(5)	59
第14図	31号竪穴建物跡出土遺物	22	第47図	16号竪穴建物跡 出土遺物(6)	60
第15図	弥生時代中期の出土遺物(1)	23	第48図	16号竪穴建物跡 出土遺物(7)	61
第16図	弥生時代中期の出土遺物(2)	24	第49図	16号竪穴建物跡 出土遺物(8)	62
第17図	古墳時代前期 遺構配置図	25	第50図	16号竪穴建物跡 出土遺物(9)	63
第18図	30号竪穴建物跡 平・断面図	26	第51図	16号竪穴建物跡 出土遺物(10)	64
第19図	30号竪穴建物跡 出土遺物	28	第52図	16号竪穴建物跡 出土遺物(11)	65
第20図	古墳時代後～終末期 遺構配置図	29	第53図	17号竪穴建物跡 平・断面図	66
第21図	10号竪穴建物跡 平・断面図	31	第54図	17号竪穴建物跡 掘方平・断面図	67
第22図	10号竪穴建物跡 出土遺物	32	第55図	17号竪穴建物跡 出土遺物(1)	69
第23図	11号竪穴建物跡 平・断面図	34	第56図	17号竪穴建物跡 出土遺物(2)	70
第24図	11号竪穴建物跡 掘方平・断面図	35	第57図	17号竪穴建物跡 出土遺物(3)	71
第25図	11号竪穴建物跡 出土遺物(1)	36	第58図	18号竪穴建物跡 平・断面図	72
第26図	11号竪穴建物跡 出土遺物(2)	37	第59図	18号竪穴建物跡 掘方平・断面図	73
第27図	11号竪穴建物跡 出土遺物(3)	38	第60図	18号竪穴建物跡 出土遺物(1)	75
第28図	12号竪穴建物跡 平・断面図	39	第61図	18号竪穴建物跡 出土遺物(2)	76
第29図	12号竪穴建物跡 掘方平・断面図	40	第62図	18号竪穴建物跡 出土遺物(3)	77
第30図	12号竪穴建物跡 出土遺物	41	第63図	18号竪穴建物跡 出土遺物(4)	78
第31図	13号竪穴建物跡 平・断面図	42	第64図	18号竪穴建物跡 出土遺物(5)	79
第32図	13号竪穴建物跡 出土遺物	43	第65図	18号竪穴建物跡 出土遺物(6)	80
第33図	14号竪穴建物跡 平・断面図	44	第66図	18号竪穴建物跡 出土遺物(7)	81
			第67図	18号竪穴建物跡 出土遺物(8)	82
			第68図	18号竪穴建物跡 出土遺物(9)	83
			第69図	18号竪穴建物跡 出土遺物(10)	84
			第70図	18号竪穴建物跡 出土遺物(11)	85

第71図	18号竪穴建物跡	出土遺物 (12)	・ ・ ・ ・	86	第111図	26号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	131
第72図	19号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	88	第112図	26号竪穴建物跡	掘方平・断面図	・ ・ ・	132
第73図	19号竪穴建物跡	掘方平・断面図	・ ・ ・ ・	89	第113図	26号竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・ ・	133
第74図	19号竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・ ・ ・	90	第114図	26号竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・ ・	134
第75図	19号竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・ ・ ・	91	第115図	26号竪穴建物跡	出土遺物 (3)	・ ・ ・	135
第76図	19号竪穴建物跡	出土遺物 (3)	・ ・ ・ ・	92	第116図	28号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	136
第77図	19号竪穴建物跡	出土遺物 (4)	・ ・ ・ ・	93	第117図	28号竪穴建物跡	掘方平・断面図	・ ・ ・	137
第78図	19号竪穴建物跡	出土遺物 (5)	・ ・ ・ ・	94	第118図	28号竪穴建物跡	出土遺物	・ ・ ・ ・	138
第79図	19号竪穴建物跡	出土遺物 (6)	・ ・ ・ ・	95	第119図	29号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	139
第80図	20・27号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	96	第120図	29号竪穴建物跡	出土遺物	・ ・ ・ ・	140
第81図	20号竪穴建物跡	掘方平・断面図	・ ・ ・ ・	97	第121図	包含層出土土器 (1)	・ ・ ・ ・	141	
第82図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・ ・ ・	100	第122図	包含層出土土器 (2)	・ ・ ・ ・	142	
第83図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・ ・ ・	101	第123図	包含層出土土器 (3)	・ ・ ・ ・	143	
第84図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (3)	・ ・ ・ ・	102	第124図	包含層出土須恵器 (1)	・ ・ ・ ・	144	
第85図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (4)	・ ・ ・ ・	104	第125図	包含層出土須恵器 (2)	・ ・ ・ ・	145	
第86図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (5)	・ ・ ・ ・	105	第126図	包含層出土須恵器 (3)	・ ・ ・ ・	146	
第87図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (6)	・ ・ ・ ・	106	第127図	時代不明 遺構配置図	・ ・ ・ ・	148	
第88図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (7)	・ ・ ・ ・	107	第128図	溝状遺構(SD1) 平・断面図 (1)	・ ・	149	
第89図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (8)	・ ・ ・ ・	108	第129図	溝状遺構(SD1) 平・断面図 (2)	・ ・	150	
第90図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (9)	・ ・ ・ ・	109	第130図	溝状遺構(SD1) 出土遺物	・ ・ ・ ・	151	
第91図	20号竪穴建物跡	出土遺物 (10)	・ ・ ・ ・	110	第131図	硬化面(SD2) 平・断面図	・ ・ ・ ・	152	
第92図	21号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	112	第132図	1号土坑 平・断面図	・ ・ ・ ・	152	
第93図	21号竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・ ・ ・	113	第133図	包含層出土石器 (1)	・ ・ ・ ・	153	
第94図	21号竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・ ・ ・	114	第134図	包含層出土石器 (2)	・ ・ ・ ・	155	
第95図	22号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	115	第135図	包含層出土石器・石製品	・ ・ ・ ・	156	
第96図	22号竪穴建物跡	掘方平・断面図	・ ・ ・ ・	116	第136図	包含層出土鉄製品	・ ・ ・ ・	157	
第97図	22号竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・ ・ ・	117	第137図	包含層出土鉄製品および製鉄・鍛冶関連遺物	・ ・ ・ ・	158	
第98図	22号竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・ ・ ・	118	第138図	包含層出土製鉄・鍛冶関連遺物および土製品	・ ・ ・ ・	159	
第99図	23号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	119	第139図	日中韓の出土塊鉱石・製錬滓と上苑A遺跡出土製錬滓の化学組成の比較	・ ・ ・ ・	165	
第100図	23号竪穴建物跡	掘方平・断面図	・ ・ ・	120	第140図	分析対象の土器片	・ ・ ・ ・	167	
第101図	23号竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・ ・	121	第141図	定性分析の測定ポイント (BSE像)	・ ・	167	
第102図	23号竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・ ・	122	第142図	SEM像 (スケール100 μ m)	・ ・ ・ ・	168	
第103図	23号竪穴建物跡	出土遺物 (3)	・ ・ ・	123	第143図	BSE像 (スケール100 μ m)	・ ・ ・ ・	168	
第104図	24号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	124	第144図	白色物質No.1の定性分析	・ ・ ・ ・	169	
第105図	24号竪穴建物跡	出土遺物	・ ・ ・ ・	125	第145図	白色物質No.2の定性分析	・ ・ ・ ・	169	
第106図	25号竪穴建物跡	平・断面図	・ ・ ・ ・	126	第146図	土器No.1の定性分析	・ ・ ・ ・	169	
第107図	25号竪穴建物跡	掘方平・断面図	・ ・ ・	127	第147図	土器No.2の定性分析	・ ・ ・ ・	170	
第108図	25号竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・ ・	128					
第109図	25号竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・ ・	129					
第110図	25号竪穴建物跡	出土遺物 (3)	・ ・ ・	130					

第148図	面分析による各元素の分布（1）	170	第1表	周辺遺跡地名表	7
第149図	面分析による各元素の分布（2）	171	第2表	供試材の履歴と調査項目	165
第150図	一次調査を含めた遺構配置図	196	第3表	供試材の化学組成	166
第151図	甗使用法想定図	201	第4表	出土遺物の調査結果のまとめ	166
第152図	土器編年比較図	202	第5表	白色付着物および土器胎土部分の化学組成	168
第153図	土器・須恵器変遷図（1）	206	第6表	土器・土製品観察表（1）	173
第154図	土器・須恵器変遷図（2）	207	第7表	土器・土製品観察表（2）	174
第155図	3号竪穴建物検出の軽石集積遺構	208	第8表	土器・土製品観察表（3）	175
第156図	3号竪穴建物出土の主な遺物	209	第9表	土器・土製品観察表（4）	176
第157図	主な鉄器のX線写真	210	第10表	土器・土製品観察表（5）	177
第158図	古墳時代後～終末期における竪穴建物 （無柱穴・6本柱）	214	第11表	土器・土製品観察表（6）	178
第159図	古墳時代後～終末期における竪穴建物 （4本柱）	214	第12表	土器・土製品観察表（7）	179
第160図	古墳時代後～終末期における竪穴建物 （4本柱）	214	第13表	土器・土製品観察表（8）	180
第161図	建替の可能性のある竪穴建物	217	第14表	土器・土製品観察表（9）	181
第162図	古墳時代後～終末期における 竪穴建物変遷図（1）	218	第15表	土器・土製品観察表（10）	182
第163図	古墳時代後～終末期における 竪穴建物変遷図（2）	219	第16表	土器・土製品観察表（11）	183
第164図	遺構間遺物接合関係	220	第17表	土器・土製品観察表（12）	184
			第18表	土器・土製品観察表（13）	185
			第19表	土器・土製品観察表（14）	186
			第20表	須恵器観察表（1）	187
			第21表	須恵器観察表（2）	188
			第22表	須恵器観察表（3）	189
			第23表	須恵器観察表（4）	190
			第24表	鉄器観察表（1）	191
			第25表	鉄器観察表（2）	192
			第26表	炉壁・鉄滓観察表	193
			第27表	石器・石製品等観察表（1）	194
			第28表	石器・石製品等観察表（2）	195
			第29表	製鉄・鍛冶関連資料一覧表	211
			第30表	竪穴建物属性表	212

写真図版目次

図版 1

- ①遺跡遠景（南から）
- ②遺跡近景（北東から）

図版 2

- ①基本土層
- ②SI31検出（北から）
- ③SI31掘方床面検出（南から）
- ④SI31掘方完掘（南から）
- ⑤SI30検出（南東から）
- ⑥SI30掘方床面検出（南東から）
- ⑦SI30掘方完掘（北から）

図版 3

- ①SI10検出（東から）
- ②SI10ベルト断面（南から）
- ③SI10掘方床面検出（南東から）
- ④SI10西壁断面（東から）
- ⑤SI11検出（北から）
- ⑥SI11床面検出（北東から）
- ⑦SI11遺物(89)出土状況
- ⑧SI掘方完掘（北から）

図版 4

- ①SI12検出（北西から）
- ②SI12・13作業状況（東から）
- ③SI12床面検出（北から）
- ④SI12棒状礫床着出土（南から）
- ⑤SI13検出（北から）
- ⑥SI13掘方完掘（北から）
- ⑦SI14検出（北から）
- ⑧SI14掘方完掘（北から）

図版 5

- ①SI15検出（北から）
- ②SI15床面検出（北東から）
- ③SI15須恵器(153)検出（東から）
- ④SI15南壁立ち上がり（東から）
- ⑤SI16検出（北東から）
- ⑥SI16遺物出土状況（南東から）
- ⑦SI16南北ベルト断面（東から）
- ⑧SI16掘方床面検出（北東から）

図版 6

- ①SI17検出（南東から）
- ②SI17遺物(270・287)出土状況（北から）
- ③SI17床面検出（東から）
- ④SI17炉検出（南東から）
- ⑤SI17掘方床面検出（南東から）

図版 7

- ①SI17炉断面（南から）
- ②SI17第二炉断面（南から）
- ③SI17炉・第二炉検出（南から）
- ④SI17掘方床面完掘（南東から）

図版 8

- ①SI18検出（北東から）
- ②SI18東西ベルト断面（南から）
- ③SI18床面検出（南西から）
- ④SI18炉検出（南西から）
- ⑤SI18炉断面（南東から）

図版 9

- ①SI18柱穴検出（南から）
- ②SI18作業状況（南東から）
- ③SI18掘方完掘（西から）
- ④SI19検出（東から）
- ⑤SI19南北ベルト断面（西から）

図版10

- ①SI19床面検出（南東から）
- ②SI19床着遺物(405・416・420・434)出土状況（南から）
- ③SI19炉検出（北から）
- ④SI19炉断面（南から）
- ⑤SI19掘方床面検出（南東から）

図版11

- ①SI20検出（北西から）
- ②SI20床面検出（南東から）
- ③SI20南北ベルト断面（南西から）
- ④SI20硬化面検出（南東から）
- ⑤SI20床面検出（南東から）

図版12

- ①SI20柱穴検出（西から）
- ②SI20土坑検出（北から）

- ③SI20炉検出（北西から）
- ④SI20炉断面（南から）
- ⑤SI20掘方完掘（南西から）

図版13

- ①SI21検出（南西から）
- ②SI21掘方床面検出（南西から）
- ③SI21炉検出（東から）
- ④SI21北壁断面（南から）
- ⑤SI22検出（南東から）
- ⑥SI22炉検出（南東から）
- ⑦SI22床着遺物(554)出土状況（北から）
- ⑧SI22掘方完掘（北から）

図版14

- ①SI23検出（南から）
- ②SI23床面検出（北西から）
- ③SI23掘方床面検出（北西から）
- ④SI23炉検出（北から）
- ⑤SI23掘方完掘（北から）
- ⑥SI24検出（北西から）
- ⑦SI24床面検出（南から）
- ⑧SI24床着遺物(596)出土状況（北西から）

図版15

- ①SI25検出（北西から）
- ②SI25床面検出（南東から）
- ③SI25掘方床面検出（南東から）
- ④SI25掘方完掘（南西から）
- ⑤SI26検出（南東から）
- ⑥SI26床面検出（南東から）
- ⑦SI26床着出土石槌（西から）
- ⑧SI26掘方床面検出（南西から）

図版16

- ①SI26炉検出（南西から）
- ②SI26炉断面（西から）
- ③SI28検出（東から）
- ④SI28床面検出（東から）
- ⑤SI28掘方床面検出（西から）
- ⑥SI28炉検出（西から）
- ⑦SI28炉断面（北東から）
- ⑧SI28掘方完掘（南東から）

図版17

- ①SI27検出（南から）
- ②SI27完掘（南東から）
- ③SI32検出（北西から）
- ④SI29検出（東から）
- ⑤SI29ベルト断面（南西から）
- ⑥SD1検出（東から）
- ⑦SK1検出（東から）

図版18 縄文時代晩期末～弥生時代初頭土器

図版19 弥生中期・古墳前期土器（1）

図版20 弥生中期・古墳前期土器（2）

図版21 古墳時代土器（甕1）

図版22 古墳時代土器（甕2）

図版23 古墳時代土器（甕3）

図版24 古墳時代土器（甕4）

図版25 古墳時代土器（甕5）

図版26 古墳時代土器（甕6）

図版27 古墳時代土器（甕脚・底部）

図版28 古墳時代土器（甗1）

図版29 古墳時代土器（甗2）

図版30 古墳時代土器（壺）

図版31 古墳時代土器（高坏・鉢）

図版32 古墳時代土器（小型壺・坏・高坏）

図版33 古墳時代土器（坏・高坏・鉢）

図版34 古墳時代須恵器（1）

図版35 古墳時代須恵器（2）

図版36 弥生・古墳時代石器（石槌）

図版37 古墳時代石器（石槌・鉄床石）

図版38 古墳時代石器（紡錘車・砥石・打製石斧ほか）

図版39 古墳時代鉄器

図版40 古墳時代製鉄・鍛冶関連遺物

図版41 古墳時代竪穴建物埋土内出土軽石

図版42 炉壁・製錬滓の顕微鏡組織

図版43 製錬滓の顕微鏡組織

図版44 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

図版45 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

図版46 含鉄鉄滓の顕微鏡組織

図版47 鍛冶滓・含鉄鉄滓の顕微鏡組織

図版48 鍛冶滓の顕微鏡組織

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

志布志市教育委員会（以下、市教委）は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

志布志市耕地林務水産課（以下、市耕地課）は、志布志市有明町野井倉肆部合地区において、平成27年度新規採択事業として、ほ場整備事業「団体営農山漁村活性化プロジェクト事業 肆部合地区」を計画し（平成29年度から「団体営基盤整備促進事業 肆部合地区」）、事業の実施に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について、平成25年度に市教委に照会した。その結果、事業対象地内に上苑A遺跡、木森遺跡、平B遺跡の三遺跡が存在することがわかった。

これを受けて、市教委と市耕地課は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るための協議を行った。その結果、事業着手前に上記三遺跡の確認調査を実施することになった。確認調査は、文化庁の国庫補助事業を利用し、市内遺跡発掘調査等事業として、平成26年度に実施した。

確認調査の結果をふまえ、あらためて遺跡の取り扱いについて市教委と市耕地課は協議を行った。その結果、工事着手に先立って、上苑A遺跡の遺物包含層に影響を及ぼす範囲について、市教委が平成27年度に本調査を実施することになった。

第2節 確認調査

詳細な遺跡範囲及び遺物包含層の状況を把握するため、平成26年8月25日から10月10日まで確認調査を行った。

調査方法は、計画範囲内に2×3mを主とするトレンチを6か所設定し（第3図参照）、重機により表土を剥いだ後、人力にて掘り下げを行った。その結果、1・2・4トレンチから古墳時代の遺物が出土し、4トレンチでは古墳時代の竪穴建物跡とみられる遺構も検出した。

調査体制は以下のとおりである。

調査体制（平成26年度）

調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	志布志市教育委員会	教育長	和田幸一郎
調査事務局	〃	生涯学習課長	樺山 弘昭
	〃	文化財管理室長	若松 利広
	〃	埋蔵文化財係長	上田 義明
	〃	主任主査	相美伊久雄
	〃	主事補	坂元 裕樹
調査担当	〃	主任主査	大窪 祥晃

第3節 本調査

本調査は平成27年度に実施した。調査体制及び調査の具体的経過は、以下のとおりである。なお、調査の具体的経過は、日誌抄を月毎に集約して記載する。

調査体制（平成27年度）

事業主体	志布志市耕地林務水産課		
調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	志布志市教育委員会	教育長	和田幸一郎
調査事務局	〃	生涯学習課長	樺山 弘昭
	〃	文化財管理室長	若松 利広
	〃	埋蔵文化財係長	上田 義明
	〃	主事	坂元 裕樹
調査担当	〃	埋蔵文化財係長	上田 義明 (8月まで)
	〃	主任主査	相美伊久雄 (9月から)
	〃	主任主査	大窪 祥晃
調査指導	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター	教授	中村 直子

調査の具体的経過

平成27年度の本調査は、平成27年6月1日から平成28年1月25日（実働120日）まで実施した。調査表面積・延面積は4,500㎡である。

【6月】

営繕用地・駐車場整地作業、コンテナハウス設置、電気・水道引込工事などの環境整備。グリッド設定。

G～J-7～10区の重機による表土剥ぎ、2・3層の調査。

梅雨入りした6月は雨天がとて多く、調査日数の確保に苦労した。

【7月】

G～J-7～10区2・3層の調査。4層上面遺構精査。11～16号竪穴建物（SI11～16）検出、調査。

C～E-2～3区重機による表土剥ぎ、2層の調査。

F～J-2～6区重機による表土剥ぎ、2層の調査。

【8月】

C～H-2～4区2層の調査。SI11～16調査。

G～J-7～10区の航空写真撮影。

【9月】

G～J-7～10区埋め戻し。

E～J-2～4区2層の調査。SI17・19検出。

E～H-2・3区下層確認トレンチ4層掘り下げ。

【10月】

D～H-4～6区重機による表土剥ぎ、2・3層の調査。

B～E-2～6区重機による表土剥ぎ、2・3層の調査。

SI10・18・19・20・21・22・23・24検出・調査。

D-2～4区溝状遺構1号(SD1)検出・調査。E-2区土坑1号(SK1)・硬化面(SD2)検出・調査。

【11月】

E～G-5～7区2・3層の調査。

D～G-5・6区下層確認トレンチ4層掘り下げ。

J～L-9～11区表土剥ぎ、2層の調査。

SI10・17・18・19・20・22・23・24・28検出・調査。

空中写真撮影。コンテナハウス等撤収。

【12月】

J～L-9～11区2・3層の調査。SI25・26・29・30検出・調査。

E～I-4～6区2・3層の調査。SI17・18・20・21・22・23・24・28調査。中村直子先生調査指導。

【1月】

SI17・18・20・23・28・29・31調査。調査範囲の埋め戻し。

本調査終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第4条第1項に基づいて、「埋蔵物発見届」（平成28年2月19日付）を志布志警察署長へ、「発掘調査実施報告書」・「埋蔵文化財保管証」（平成28年2月19日付）を県教育委員会に提出するなど、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

第4節 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、平成28・30年度、令和元・2年度に市埋蔵文化財センターにおいて実施した。

各年度における調査体制及び作業の内容・経過は以下のとおりである。作業の具体的経過は日誌抄を月毎に集約して記載する。

調査体制（平成28年度）

調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	志布志市教育委員会		
	教育長	和田幸一郎	
調査事務局	生涯学習課長	榊山 弘昭	
	文化財管理室長	若松 利広	
	埋蔵文化財係長	上田 義明	
	主任主査	大窪 祥晃	
	主事	坂元 裕樹	
調査担当	主任主査	相美伊久雄	

作業の具体的経過

【4～3月】

遺物洗浄、注記。

調査体制（平成30年度）

事業主体	志布志市耕地林務水産課		
調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	志布志市教育委員会		
	教育長	和田幸一郎	
調査事務局	生涯学習課長	若松 利広	
	文化財管理室長兼		
	埋蔵文化財係長	上田 義明	
	主任主査	大窪 祥晃	
調査担当	主任主査	相美伊久雄	
調査指導	大分県大分市教育委員会文化財課		
	主査	長 直信	
	鹿児島県指宿市教育委員会社会教育課		
	技師	松崎 大嗣	

作業の具体的経過

【4～6月】

土器接合・復元、石器分類・選別、遺物データ処理。

【7月】

土器接合・復元、遺物データ処理、鉄器X線写真撮影、石器実測委託

【8～12月】

土器接合・復元、遺物データ処理。

【1月】

土器接合・復元、遺物データ処理。長直信氏・松崎大嗣氏調査指導。

【2・3月】

土器接合・復元、遺物データ処理。

調査の体制（令和元年度）

事業主体	志布志市耕地林務水産課		
調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	志布志市教育委員会		
	教育長	和田幸一郎	
調査事務局	生涯学習課長	萩迫 和彦	
	文化財管理室長兼		
	埋蔵文化財係長	上田 義明	
	主任主査	大窪 祥晃	
調査担当	主任主査	相美伊久雄	
調査指導	愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター		
	センター長	村上 恭通	
	宮崎県埋蔵文化財センター		
	主査	今塩屋毅行	
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター		

教授 中村 直子
 鹿児島大学総合研究博物館
 研究支援員 寒川 朋枝
 鹿児島国際大学実習支援課
 係長 鐘ヶ江賢二

調査の体制（令和2年度）
 事業主体 志布志市耕地林務水産課
 調査主体 志布志市教育委員会
 調査責任者 志布志市教育委員会
 教育長 和田幸一郎
 （令和3年2月23日まで）

作業の具体的経過

【4～9月】

土器選別・実測。

【10月】

土器実測、金属分析業務委託準備。

【11月】

土器実測、土器復元・着色作業、鉄器X線写真撮影、村上恭通先生調査指導、今塩屋毅氏調査指導。

【12月】

鉄器実測、土器復元・着色作業、中村直子先生調査指導、寒川朋枝氏調査指導。

【1月】

鉄器実測、遺物写真レイアウト・撮影。

【2・3月】

鉄器実測、鉄器保存処理依頼、鐘ヶ江賢二氏調査指導。

調査事務局 〃 生涯学習課長 江川 一正
 〃 文化財管理室長 上田 義明
 〃 生涯学習課長補佐 小村 美義
 調査担当 〃 埋蔵文化財係長 相美伊久雄
 〃 技師補 川路臯太郎

福田 裕生

（令和3年2月24日から）

作業の具体的経過

【4～5月】

土器実測、遺構トレース。

【6～10月】

土器実測、遺物トレース。拓本。

【11月】

土器実測、遺物トレース、原稿執筆。

【12月】

石器実測・トレース、原稿執筆、観察表作成。

【1・2月】

入稿、校正、遺物収納。

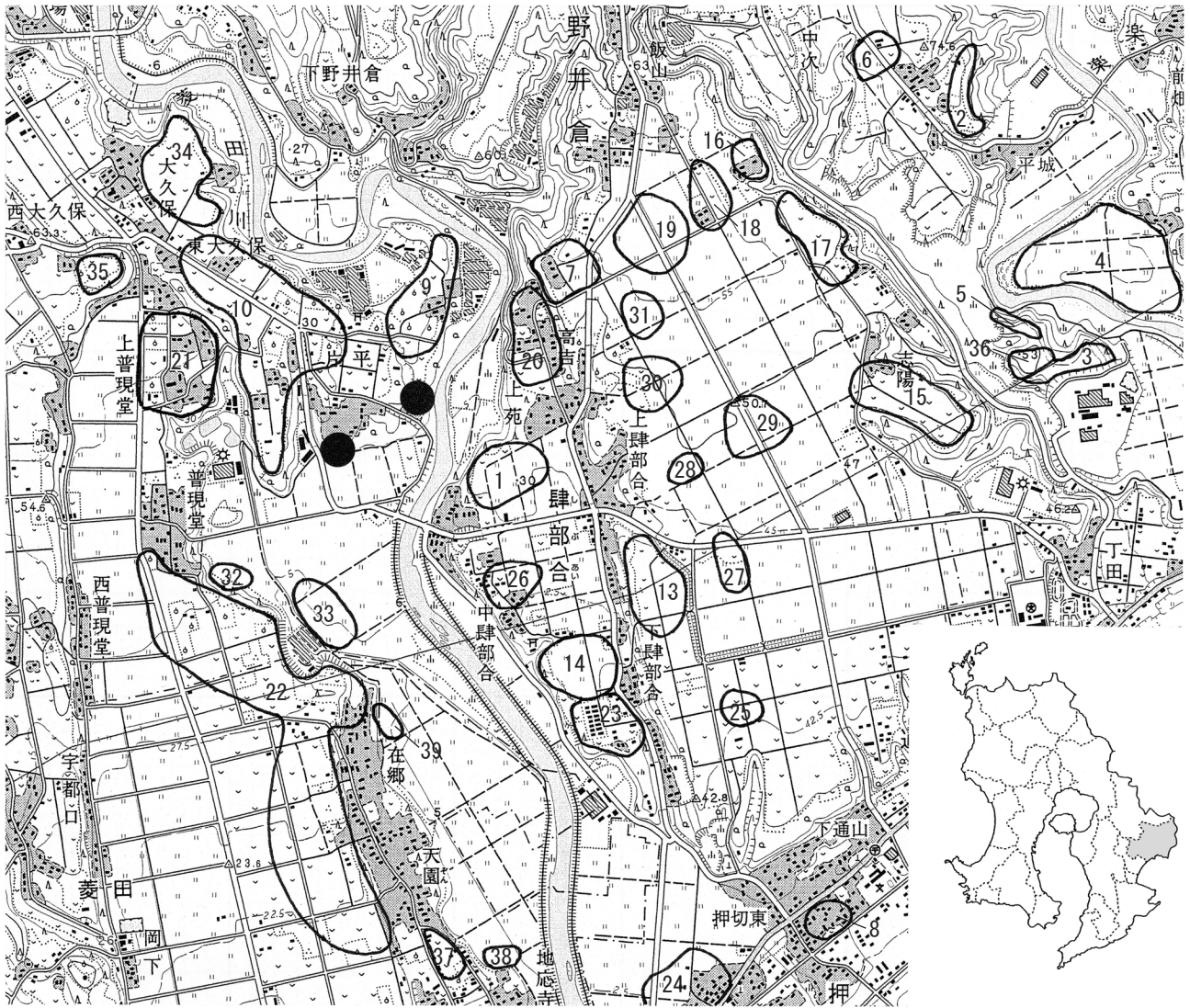
【3月】

印刷・製本。

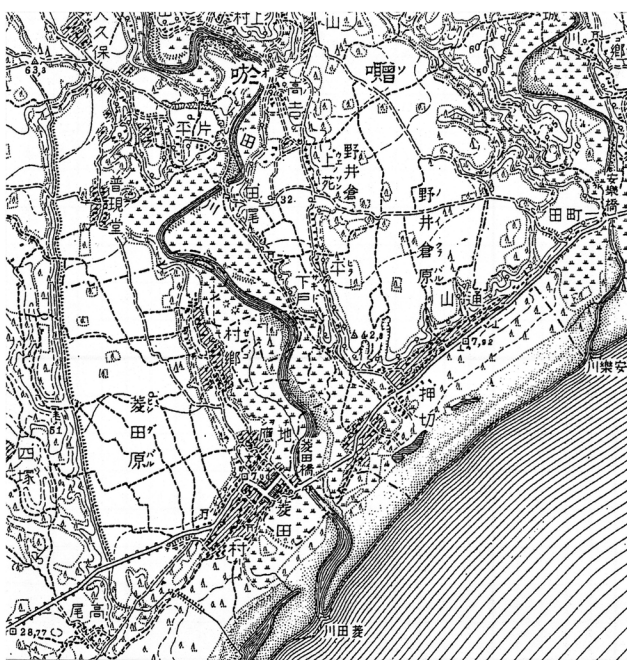
第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世
1	221-466	上苑A	有明町野井倉字上苑ほか		○	○	○	○	○
2	221-211	二重堀A	志布志町安楽字二重堀			○			
3	221-235	小牧古墳群	志布志町安楽字小牧				○		
4	221-242	水神松	志布志町安楽字水神松				○		
5	221-284	安楽小牧A	志布志町安楽字小牧						
6	221-301	二重堀B	志布志町安楽字二重堀			○		○	
7	221-313	高吉	有明町野井倉字高吉ほか		○	○			○
8	221-348	松原	有明町野井倉字松原ほか			○			
9	221-354	下水流	有明町蓬原字下水流ほか			○	○		○
10	221-367	仕明	有明町蓬原字仕明ほか	○	○	○	○	○	
11	221-370	片平古墳	有明町蓬原字仕明ほか				○		○
12	221-381	片平城跡	有明町蓬原字下水流ほか						
13	221-383	大代	有明町野井倉字大代ほか		○			○	
14	221-384	平B	有明町野井倉字平ほか					○	
15	221-385	次五	有明町野井倉字次五ほか					○	
16	221-388	東	有明町野井倉字東ほか			○			
17	221-389	横堀	有明町野井倉字横堀ほか		○	○	○		
18	221-390	下段C	有明町野井倉字下段ほか		○	○			
19	221-391	下段B	有明町野井倉字下段ほか			○			
20	221-405	上苑	有明町野井倉字上苑ほか		○	○	○		

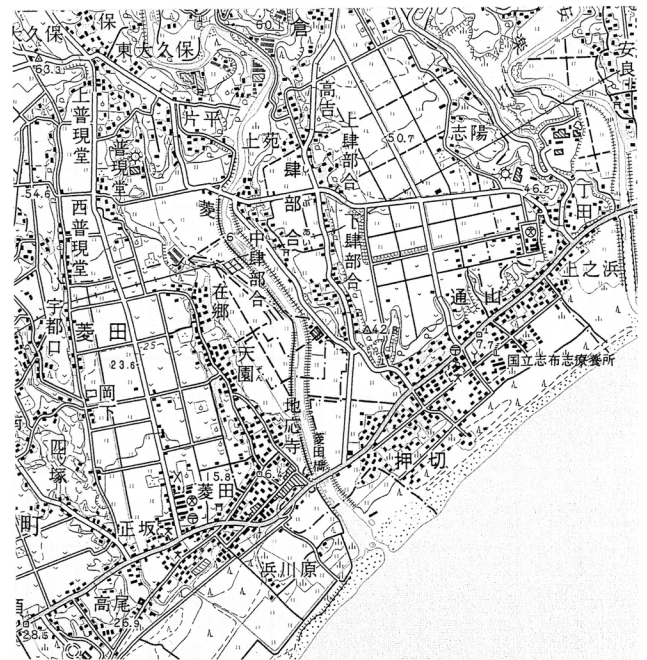
No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世
21	221-406	牧	有明町蓬原字牧ほか	○	○	○	○		
22	221-423	春日堀	有明町蓬原字春日堀		○		○		
23	221-427	平A	有明町野井倉字平ほか					○	
24	221-456	塩入	有明町野井倉字塩入ほか				○	○	
25	221-457	坂上	有明町野井倉字坂上ほか						○
26	221-458	木森	有明町野井倉字木森ほか		○				○
27	221-459	鎌迫	有明町野井倉字鎌迫ほか			○			
28	221-460	上苑上	有明町野井倉字上苑上						○
29	221-461	甚堀	有明町野井倉字甚堀ほか			○			
30	221-462	上苑B	有明町野井倉字上苑ほか						○
31	221-463	下段A	有明町野井倉字下段						○
32	221-464	中牟田	有明町蓬原字中牟田ほか					○	○
33	221-465	田尾下	有明町野井倉字田尾下						○
34	221-501	大園B	有明町蓬原字大園ほか					○	
35	221-507	牧ノ上A	有明町蓬原字牧ノ上		○		○		
36	221-	安楽小牧B	志布志町安楽字小牧	○	○		○		
37	468-40	地応寺	大崎町				○	○	
38	468-74	菱田和田	大崎町				○		
39	468-132	竹安	大崎町					○	○



第1図 遺跡位置及び周辺遺跡 (1 : 25,000)



(明治35年)



(平成12年)

第2図 周辺環境の変遷

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

志布志市は、鹿児島県の最東部に位置し、宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曾於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向け湾口を開く志布志湾に面する。平成18年1月1日に志布志町・有明町・松山町の三町が合併して誕生した市である。

本市の地形は、東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は、西側に旧期砂丘・新期砂丘に二分される砂丘海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の北東部には御在所岳(530.4m)・笠祇岳(444.2m)・陣岳(349.3m)など、日南層群が構成する急峻な山岳地帯がある。

その西側には入戸火砕流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主体をなす。「原(ばる)」と呼ばれる比較的平坦な台地であるシラス台地は、南流する前川・安楽川・菱田川など大小の河川の浸食作用による深い浸食谷(「迫(さこ)」)により細かく刻まれ、大小の狭長な台地となっている。

このシラス台地からは、北部の霧岳(408.3m)や中央部の岳野山(274.3m)、西部の宇都丘(179.1m)・草野丘(268.4m)など、市北東部同様の日南層群が構成する山岳・丘陵が突き出ている。

前述の三河川の流域には、高位・中位・低位の三段の段丘が認められる。低・中位段丘では、段丘崖下からの自然湧水により集落が形成されてきた。一方、高位段丘では、地下水位が深いために集落形成が困難であり、「蓬原開田」や「野井倉開田」などのように近～現代に開かれるまでは、畑地として利用されるにとどまっていた。

この地域の地質は古いほうから、日南層群－阿多鳥浜火砕流－夏井層－阿多(夏井)火砕流－旧期ローム層－入戸火砕流－新期火山灰層となる。日南層群は、主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多鳥浜火砕流は、夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は、下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多(夏井)火砕流は、黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.5～10.5万年前とされる。入戸火砕流は、海岸に沿った地域では海拔40m程のシラス台地を形成する。下部には、大隅降下軽石層が存在する。

上苑A遺跡は、菱田川河口から約1.5km上流東岸の河岸段丘上に位置する。この段丘は、「野井倉原」と呼ばれるシラス台地西側に12～20mの比高差で一段低くなっている中位段丘である。この中位段丘は、長さ約2km、最大幅約170mで、二等辺三角形状に広がり、上面はほぼ

平坦で標高約30mを測る。眼下には、菱田川が流れている。

第2節 歴史的環境

上苑A遺跡は、平成8年度に実施された農政分布調査で発見された遺跡である。平成16年8～11月に、農村総合整備統合補助事業による農道整備に伴い、今回の調査範囲に隣接する道路部分を対象に、旧有明町教育委員会が発掘調査を実施している。その調査成果は、平成19年度に刊行された、市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)にまとめられている。

本遺跡が所在する志布志市には、現在約500ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が認められている。戦前には、大正5(1916)年に六月坂横穴墓群について報告を行った瀬之口伝九郎氏や昭和19(1944)年に出口A遺跡採集の独鈷状石器を紹介した梅原末治氏の調査研究がある。戦後は、河口貞徳氏・諏訪昭千代氏・上村俊雄氏・酒匂義明氏の学術調査・研究に加え、海老原行秀氏・瀬戸口望氏という志布志町在住の研究者による熱心な調査・研究が行われており、学史上重要な遺跡も多い。

1980年代になると、主に志布志町において圃場整備に伴う発掘調査が行われ、縄文時代の調査事例が増加した。

2000年代には、主に有明町において農道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の様相が明らかとなった。最近では、地域高規格道路(都城志布志道路)や東九州自動車道に伴う大規模な発掘調査が行われ、質量ともに充実した資料が増加している。

本市は現在の行政区分では鹿児島県に属するが、過去は日向国に属しており、明治4(1871)年の廃藩置県後も一時期、都城県や宮崎県に属した歴史もある。したがって、この地域の歴史・文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地方の影響も考慮する必要がある。

旧石器時代

中須B遺跡・蕨野B遺跡では剥片尖頭器・角錐状石器等が、安楽小牧B遺跡ではナイフ形石器が出土している。

次五遺跡や和田上遺跡、中原遺跡では、哇原型細石刃核が出土しており、硬質砂岩や珪質頁岩を利用している。哇原型細石刃核が濃密に分布する宮崎平野地域との関係や石材の原産地を考える上で注目される。

縄文時代

志布志町では瀬戸口氏等の調査によって、「縄文銀座」と呼ばれるほど多数の遺跡が見つかっている。

草創期 学史上重要な東黒土田遺跡がある。隆帯文土器や舟形配石炉、貯蔵穴が見つかっている。特に貯蔵穴

から出土した堅果類は日本最古である。安楽小牧B遺跡では、爪形文土器が出土している。

早期 前半期の堅穴建物や集石、連穴土坑が多数見つかった倉園B遺跡や春日堀遺跡、前半期の連穴土坑や多数の集石、被熱破砕礫が見つかった稲荷迫遺跡・高吉B遺跡・下堀遺跡・横堀遺跡・次五遺跡、塞ノ神A式壺形土器等の良好な資料が出土した夏井土光B遺跡、耳栓が出土した稲荷上遺跡・横堀遺跡・安楽小牧B遺跡など、シラス台地縁辺部に遺跡数が多い。

前期 曾畑式が出土した別府石踊遺跡、野久尾遺跡、本村遺跡などがあるが、調査事例は少ない。

中期 この時期も調査事例は少ないものの、春日式期の堅穴建物が見つかった前谷遺跡、野久尾式や深浦式・船元式が出土した野久尾遺跡のように重要な遺跡がある。このほか、宇都遺跡や山ノ口遺跡では大平式の良好な資料が出土している。

後期 代表する遺跡として中原遺跡と片野洞穴がある。中原遺跡では在地系の宮之迫式・指宿式と瀬戸内系の中津式・福田KⅡ式・宿毛式の良好な資料が多数出土している。片野洞穴では西平式～御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨角器が出土している。

市内は、中岳Ⅱ式の遺跡が多く認められており、下原遺跡では堅穴建物跡と埋設土器が、稲荷迫遺跡では埋設土器が見つまっている。

このほか、後期のほぼ全ての型式が出土した家野遺跡、独鈷状石器が見つかった出口A遺跡がある。

晩期 井手上A遺跡や上苑遺跡では入佐式深鉢の埋設土器が見つまっている。

小迫遺跡では黒川式期の良好な資料が認められており、クズの葉と推定される木葉痕をもつ組織痕土器が出土している。

弥生時代

縄文時代に比べると調査事例は少ないものの、学史上重要な遺跡が存在する。一つは京ノ峯遺跡で、中期後半の円形・方形周溝墓が多数見つかっている。南九州では稀有な墓制であり、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられている。

もう一つは土橋遺跡で、明治40(1907)年、中広形銅銚が見つまっている。県内唯一の、さらに本土最南端の発見例である。中期後半に位置づけられるもので、中広形銅矛は高知県中央～西部、豊前～豊後地域に分布が集中することから、豊後水道地域における地域間交流の過程でもたらされた可能性が指摘されている。

稲荷迫遺跡では中期前～中葉の incoming I・Ⅱ式期の土坑墓が検出された。

この遺跡では、本遺跡のように刻目突帯文土器の良好な資料が認められている。刻目突帯文土器が主体を占める遺跡は大隅半島では稀であり、注目される。小迫遺跡

で出土した刻目突帯文土器期の可能性がある精製浅鉢からは、イネやエゴマの圧痕が見つまっている。

井手上A遺跡では、中期中葉の incoming Ⅱ式期の堅穴建物が見つまっている。中期後半の山ノ口Ⅱ式期になると堅穴建物の検出例が増加し、高吉B遺跡、長田遺跡、本村遺跡、下原遺跡、井手間遺跡、前谷B遺跡がある。

京ノ峯遺跡や高吉B遺跡、稲荷迫遺跡では瀬戸内地域から搬入された土器が出土している。夏井土光遺跡では柱状片刃石斧が出土している。

古墳時代

集落遺跡は、有明町において調査事例が多い。仕明遺跡や春日堀遺跡では弥生時代終末期～古墳時代前期の、屋部当遺跡では辻堂原～笹貫式期の、長田遺跡では笹貫式期の堅穴建物が見つまっている。志布志町でも、稲荷迫遺跡において笹貫式期の堅穴建物が見つまっている。なお、春日堀遺跡で見つかった古墳時代前期の花弁形建物跡は県内最大である。

市内は、本遺跡のように笹貫式新段階期(7世紀代)の調査事例が多く、宮脇遺跡、安良遺跡、仕明遺跡、春日堀遺跡がある。春日堀遺跡では、堅穴建物・掘立柱建物・溝が見つかっており、7世紀中～後半頃の集落跡とされる。溝は、安良遺跡でも見つまっている。

市内では、県内での出土例が少ない6世紀末～8世紀前半頃の須恵器が多数認められており、様相が不明瞭な7世紀代の南九州を考える上で、重要な地域である。

古墳は、前方後円墳の飯盛山古墳と小牧1号墳、円墳の原田古墳がある。飯盛山古墳は出土した埴輪から中期初め(4世紀後半)、原田古墳は出土した須恵器から中期中頃(5世紀中頃)、そして小牧1号墳は採集された須恵器から後期後半(6世紀後半)に築造された可能性ある。

高塚古墳以外には、原田地下式横穴墓群や馬場地下式横穴墓群がある。平成29(2017)年12月に発見された原田3号地下式横穴墓からは、完全な形の短甲が出土した。完全な形での出土例は、鹿屋市祓川地下式横穴墓出土例以来67年ぶり2例目となった。短甲以外にも長頸鎌、圭頭鎌、ヤリ先、鉄剣、刀子、有肩鉄斧、U字形鍬鋤先、鑿子状鉄製品など40点程の副葬品が見つまっている。地下式横穴墓としては県内最大級の規模をもち、県内最多の副葬品数である。志布志とヤマト政権との関係を考える上で重要な発見となった。また、春日堀遺跡と安良遺跡でも地下式横穴墓が見つまっている。ともに溝を掘り込んで玄室を構築しており、注目される。

県内では2例しか認められていない横穴墓が、市内には存在していた。それは六月坂横穴墓群であり、明治42(1909)年に旧制志布志中学校敷地整地の際発見されたもので、後期末～奈良時代初め(6世紀後半～8世紀前半)の須恵器などが見つまっている。

六月坂横穴墓群や志布志湾岸では希少な6世紀代の

前方後円墳である小牧1号墳の存在は、後に日向国諸県郡に属することになるこの地域を考える上で注目される。

古代

水ヶ迫横穴墓で須恵器の蔵骨器が見ついている。墨書土器が小迫遺跡、安良遺跡、牧ノ原A遺跡、井手上A遺跡で出土している。製塩土器が野久尾遺跡、宮脇遺跡、稲荷迫遺跡、仕明遺跡など出土している。

8世紀代の須恵器が宮脇遺跡や安良遺跡などで出土しているように、8世紀代までは市内でも遺跡が確認されるものの、9世紀以降は様相がはっきりしない。調査事例が乏しいこともあるが、7世紀代に比べると遺跡自体が少ない可能性もある。

中世

この地域は中世において日向国諸県郡救仁院・救仁郷とされた。また志布志の名が史料で確かめられるのは、正和5(1316)年のことで、「日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地…」(『沙弥蓮正打渡状案』)とあり、万寿3(1026)年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

室町時代以降も交通の要衝として栄えていたようであり、永禄5(1562)年に著された明の海防・倭寇対策書である『籌海図編』巻二(倭国事略)には、薩摩・大隅の港の一つとして記された「審亭署」は志布志とされる。

このような交通の要衝であった志布志を巡って、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り返された場所が国指定史跡の志布志城跡である。

志布志城とは、内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。志布志城は文治5(1189)年頃の救仁院氏の居城に始まって以来、楡井氏・島山氏・肝付氏・島津氏など数々の領主に変遷した。

平成18(2006)年以降、保存整備目的で継続的に発掘調査が行われ、華南三彩のような中世後期の中国産陶磁器や東南アジア産陶器も出土している。

市内にはこの他、建久(1190~1198)年間に地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる安楽城跡、文治4(1188)年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期(1359年)に救仁郷氏の居城とされる蓬原城跡などが存在する。

中世山城以外の調査事例では、安良遺跡が注目できる。この遺跡では、掘立柱建物や竪穴建物が見ついている。また、中世前期の輸入陶磁器や国産陶器のほか、畿内系羽釜・楠葉型・和泉型瓦器碗も出土している。炭化ご飯塊と炭化糲塊の出土も注目される。安良遺跡から約1km北に位置する安楽城跡や明治26(1893)年に境内から青白磁四耳壺の蔵骨器や鏡・太刀・青白磁合子などが見ついている安楽山宮神社を含めて、その歴史的背景が注目される。

長田遺跡や仕明遺跡では、中世墓が見ついている。

宇都上遺跡では、石塔類や輸入陶磁器、国産陶器、そしてタイ産四耳壺等が埋まっていた大型土坑が検出された。

近世

日向国諸県郡志布志郷とされ、東を秋月藩と接することから陸海ともにきわめて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麓」を形成していた。この「志布志麓」は、令和元年5月に日本遺産に認定された。

藩米等の集積・積出港であった前川河口には、津口番所が置かれていた。藩政末期には琉球を通しての密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は密貿易屋敷と呼ばれていた。

これら地頭仮屋跡・津口番所跡・密貿易屋敷跡では、確認調査が行われ、陶磁器類が出土している。

船迫遺跡では、県内遺跡からは初の出土例となった二分金が見ついている。

近代

明治4(1871)年の廃藩置県によって、鹿児島県諸県郡志布志郷となり、同年11月には新設の都城県に属した。明治6年には宮崎県の所管に移されたが、明治9年に宮崎県が鹿児島県に編入されることに伴い再び鹿児島県に属することになった。そして、明治16年宮崎県再設置の際は鹿児島県に残り、鹿児島県南諸県郡に属した。

この時期の遺跡では戦争遺跡が注目できる。太平洋戦争末期、連合軍の南九州上陸作戦(オリンピック作戦)を予想した日本軍は志布志湾沿岸に洞窟式の地下陣地を造った。その現存している一つが、権現島水際陣地跡である。また、野井倉台地には昭和20(1945)年に海軍航空隊志布志基地(野井倉飛行場)が建設された。

(参考文献) ※発掘調査報告書は割愛した。

有明町誌編さん委員会 1980『有明町誌』

梅原末治 1944「大隅発見の異形石器」『人類学雑誌』59-7

大木公彦・内村公大 2012『夏井海岸の地形・地質調査報告書』志布志市教育委員会

大西智和・鐘ヶ江賢二・松崎大嗣 2012「志布志市有明町原田古墳の測量調査」『鹿児島考古』42 鹿児島県考古学会

志布志町誌編集委員会 1972『志布志町誌』上巻

志布志町教育委員会 1982『志布志の郷土史読本』第2集

志布志町教育委員会 1985『志布志の埋蔵文化財』

山畑敏寛 2009「志布志港の「みなと文化」」『港別みなと文化アーカイブ』

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法

1 発掘作業の方法

調査範囲は、ほ場整備によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲である。調査対象表面積は、4,500㎡である。工事の掘削深度の関係上、アカホヤ火山灰層（VI層）以下は調査を行っていない。

調査区の基準軸は、業者に委託して、世界測地系に準拠して設定した。南北方向にA～F、東西方向に1～23とする10×10mのグリッドを設定している（第3図）。

このグリッドを基にして、遺構・遺物の測量作業を行った。トータルステーションで測量作業を行う場合、測量座標はA-1区の左下を原点（0、0）とし、縦軸をX、横軸をYとした。

今回調査のグリッドは、平成16年度調査時のグリッドと重なるように設定している。ただし、平成16年度調査時は、北から南へA～Z、a～f、西から東へ1～34とする5×5mのグリッドである。今回調査のA-1区は、平成16年度調査のe・f-1・2区に相当する。

レベルは、委託業者が設置した基準点「GP-2」（海拔31.882m）を用いた。

発掘作業は、表土を重機により除去し、II層から人力（鋤簾・山鋏）による掘り下げを行った。人力掘り下げの際、出土遺物が少ない場所では鋤簾を中心に用い、遺物が集中している場所はねじり鎌を用いた。

出土した遺物は、トータルステーションを用いて、番号を付して取上げた。番号を付したものは、包含層と遺構内出土合わせて約27,000点である。小型の遺物や特徴のない遺物は、グリッド毎に一括して取り上げた。一括取上げ分を含めると、50,000点以上（コンテナケース450箱分）になる。

遺物出土状況の写真撮影は、時期比定可能なものなど、特徴的なものを主な対象とした。なお、遺構調査状況を含め、撮影時に使用したフィルムは、35mm判のカラー・白黒・カラーリバーサルの3種類である。また、デジタルカメラも使用している。

土層断面図は、調査区の地形が表現できる箇所を選んで実測した（1/20スケール）。

2 遺構の調査方法

検出した遺構には、竪穴建物跡、土坑、溝状遺構、硬化面がある。これらの遺構は、7区以西では主にIV層上面で、7区以东では主にVb層上面で検出した。当時の掘り込み面に限りなく近いレベルでの検出ができるように調査を行ったものの、結果的に判別しやすい地層面での検出が多くなった。

竪穴建物跡は検出した順に「SI」の略記号を、土坑は

「SK」の略記号を、溝状遺構と硬化面は「SD」の略記号を用いた。

これらの遺構は、検出状況の写真撮影後、土層観察用ベルトを設定し、掘り下げ、出土遺物の写真撮影・取上げ、土層断面実測・撮影、完掘、完掘状況実測・撮影を行った。

竪穴建物の掘り下げは、十字形にベルトを残す方法を用いた。土坑の掘り下げには半截法を、溝状遺構の掘り下げには任意の箇所にベルトを残す方法を用いた。そして、埋土の違いを比較しながら移植ゴテで掘り下げた。

出土遺物は、トータルステーションを用いて、番号を付して取り上げた。なお、小型の遺物や特徴のない遺物は、一括取上げを行った。

実測について、竪穴建物跡は1/20スケールで、土坑は1/10スケールで行った。溝状遺構と硬化面はトータルステーションを用いた。

調査中及び終了後、遺構の検出層や埋土状況、遺構内出土遺物、土層断面等の情報から、遺構の形成時期や性格等の検討を行った。

3 整理作業の方法

図面整理は、土層断面図と遺構実測図に区分し、さらに遺構実測図は種類別に仕分けを行い、台帳や遺物との照合及び再確認を行った。

洗浄について、土器・礫石器・礫・鉄器はブラシを用いて土の除去を行った。

注記は、遺跡名を表す「USN.A」を頭に、包含層出土遺物は続けて「グリッド区」「層」「取上番号」の順で記入した。遺構出土遺物は「USN.A」に続けて「遺構記号」「取上番号」の順で記入した。

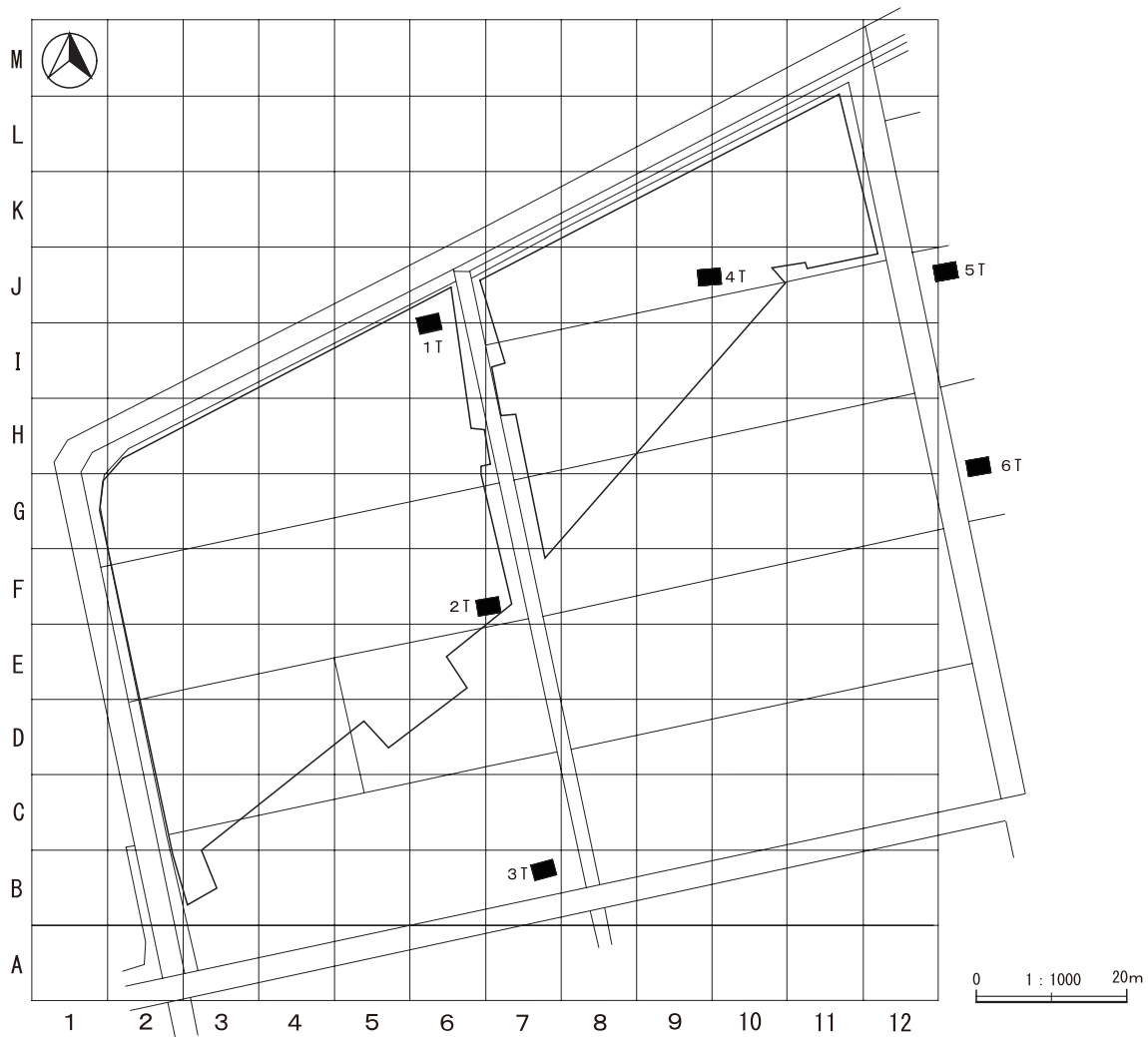
包含層一括取上げ分の遺物は、全て職員による観察を行ったものの、時間的制約から無文胴部片の洗浄・注記は行っていない。

土器の接合は、時代ごとに大きく分類した後、型式・様式、さらには器種ごとに細分して行った。

包含層出土遺物のうち、遺構検出レベルより上位で取上げを行っているものの、竪穴建物跡の平面範囲内に含まれている遺物は竪穴埋土内遺物の可能性が高いと考え、それらを抽出して竪穴埋土出土遺物とともに接合を行っている。須恵器は、竪穴建物間の接合も試みた。なお、時間的制約もあり、遺構内出土遺物の接合を優先した。

接合後、報告書掲載遺物の選別を行い、実測・拓本・トレースを行った。

石器は、器種ごとに細分した。分類後、報告書掲載遺物の選別を行い、実測・トレースを行った。一部石器の実測・トレースは、作業の効率化を図るために業務委託



第3図 グリッド図及びトレンチ位置図

を行った。

鉄器は、器種ごとに細分した。分類後、報告書掲載遺物の選別を行い、実測・トレースを行った。実測時には、X線写真を用いて形状の把握に努めた。

製鉄・鍛冶関連遺物の鉄滓などは、種類ごとに細分後、報告書掲載遺物の選別を行い、実測・トレースを行った。なお、遺跡内での鉄素材・鉄器生産の様相を把握する目的で、金属分析を業務委託した。

実測遺物には、実測番号を付して作業管理を行った。遺物のトレースは、ロットリングペンを用いた。遺構配置図と遺構図は、デジタルトレースを行った。

4 出土遺物の分類・選別の方法

(1) 土器

土器はⅡ層や遺構内から出土しており、縄文時代後期～古墳時代終末期に属する。分類は、まず時代ごとに分

け、その後既存の型式・様式、さらに弥生～古墳時代土器は器種ごとに細分した。出土した土器の多くは、文様のない胴部片であった。古墳時代の甕形土器と坏形土器は細分を行っており、詳細は第4章において述べる。

報告書掲載遺物の抽出について、出土数が多いものは残存率が高いものや特徴的なものを優先した。小片であっても、分類した中で数が少ないものはできるだけ抽出している。

(2) 石器

石器も土器とⅡ層や遺構内から出土しており、縄文時代後期～古墳時代終末期に属する。竪穴建物跡から出土したものは時期比定可能であるが、包含層出土のものは時期比定が難しい。そのため、包含層出土石器は第9節で一括して報告している。

石器は器種ごとに分類した。なお、石鏃は細分をおこなっており、詳細は第4章において述べる。

報告書掲載遺物の抽出は、器種の中で出土数が少ないものはそのほとんどを、数が多いものは特徴的なものを優先した。

(3) 鉄器・鉄滓等

鉄器と鉄滓等は、Ⅱ層や古墳時代の竪穴建物跡から出土している。包含層出土のものは、確実な時期比定は難しいものの、古墳時代後～終末期に属すると考えている。

鉄器は器種ごとに分類した。その際、村上恭通先生の指導・助言を受けている。報告書掲載遺物の抽出について、器種の中で出土数が多いものは、残存率が高いものを優先し、数が少ないものはそのほとんどを抽出した。

鉄滓等の分類は、村上先生と鈴木瑞穂氏（日鉄テクノロジー株式会社）の指導・助言を受けて行った。また、分析遺物と報告書掲載遺物の抽出の際にも、両氏の助言を受けている。

第2節 層位

1 層位（第4～6図）

基本層位は、平成26年度に実施された確認調査時のものを参考にした。ただし、地点によって堆積状況は異なっている（特にⅠ層）。

Ⅱ層の上位は、調査区内の大部分で削平を受けており、10区以東ではⅡ層そのものが認められない。アカホヤ火山灰層下位には、鬼界カルデラ噴火で発生した地震に伴う噴砂起源の砂質土（Ⅵb層）が部分的に存在する。

地形は、東から西へ緩やかに傾斜している。

地層の詳細は以下のとおりである。

Ⅰ層：現耕作土・旧耕作土・造成土などである。色調や含有物により、数枚に細分可能である。層厚は約30～40cm。

Ⅱ層：黒褐色（10YR3/1）のシルト質土で、締まりが弱い。5mm程の白色軽石（池田降下軽石か？）や1mm程の黄橙色パミスを含む。Ⅲ層より色調が淡く、締まりが弱い。層厚は約15～25cm。縄文後期～古墳時代遺物包含層。

Ⅲ層：黒褐色（10YR2/1）のシルト質土で、締まりがある。1mm程の黄橙色パミスを含む。層厚は約5～15cm。

Ⅳ層：黒褐色（10YR2/2）のシルト質土で、締まりがある。御池火山灰含む。層厚は約15cm。

Ⅴ層：黒褐色（7.5YR2/2）のシルト質土で、締まりがある。池田降下軽石を含む。含有率により、2層（a・b）に細分可能である。層厚は約15cm。

Ⅵa層：明黄褐色（7.5YR5/8）のシルト質土で、締まりがある。アカホヤ火山灰層である。下部には黄橙色軽石を多く含む。層厚は約30cm。

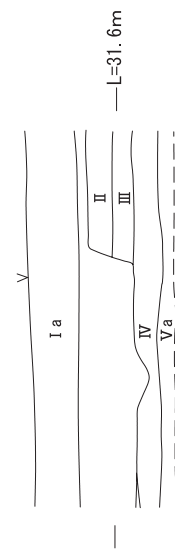
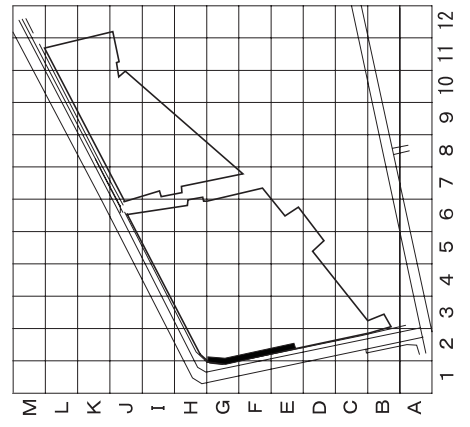
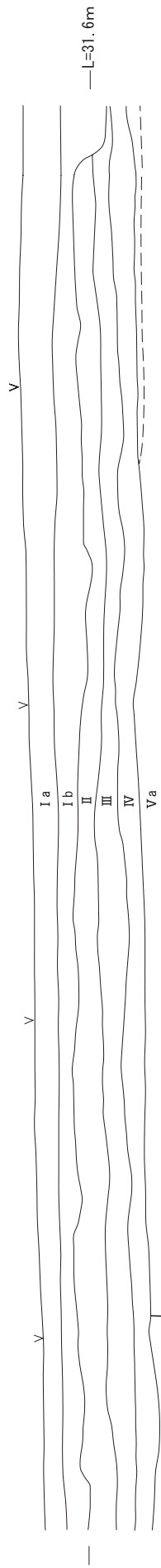
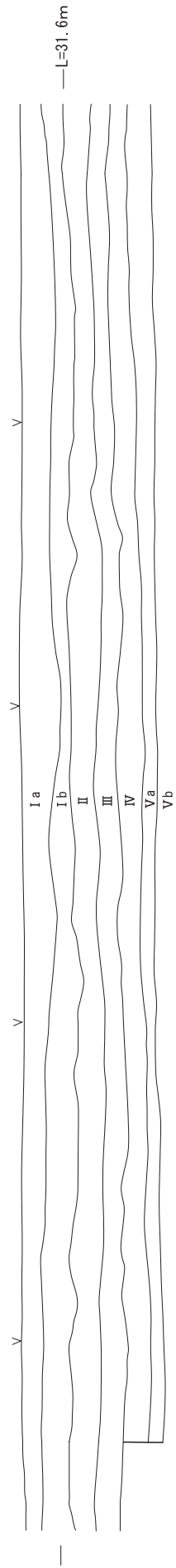
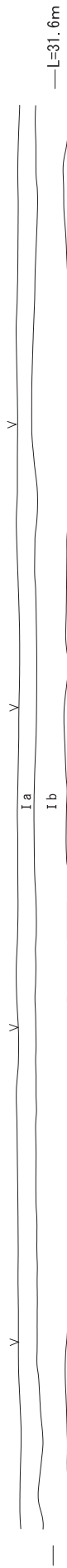
Ⅵb層：明黄褐色（7.5YR5/8）の砂質土で、締まりはない。噴砂起源である。層厚は約20cm。部分的に存在する。

Ⅶ層：暗褐色（7.5YR3/3）のシルト質土で、硬質である。1mm程の黄橙色パミスを含む。層厚は約20cm。

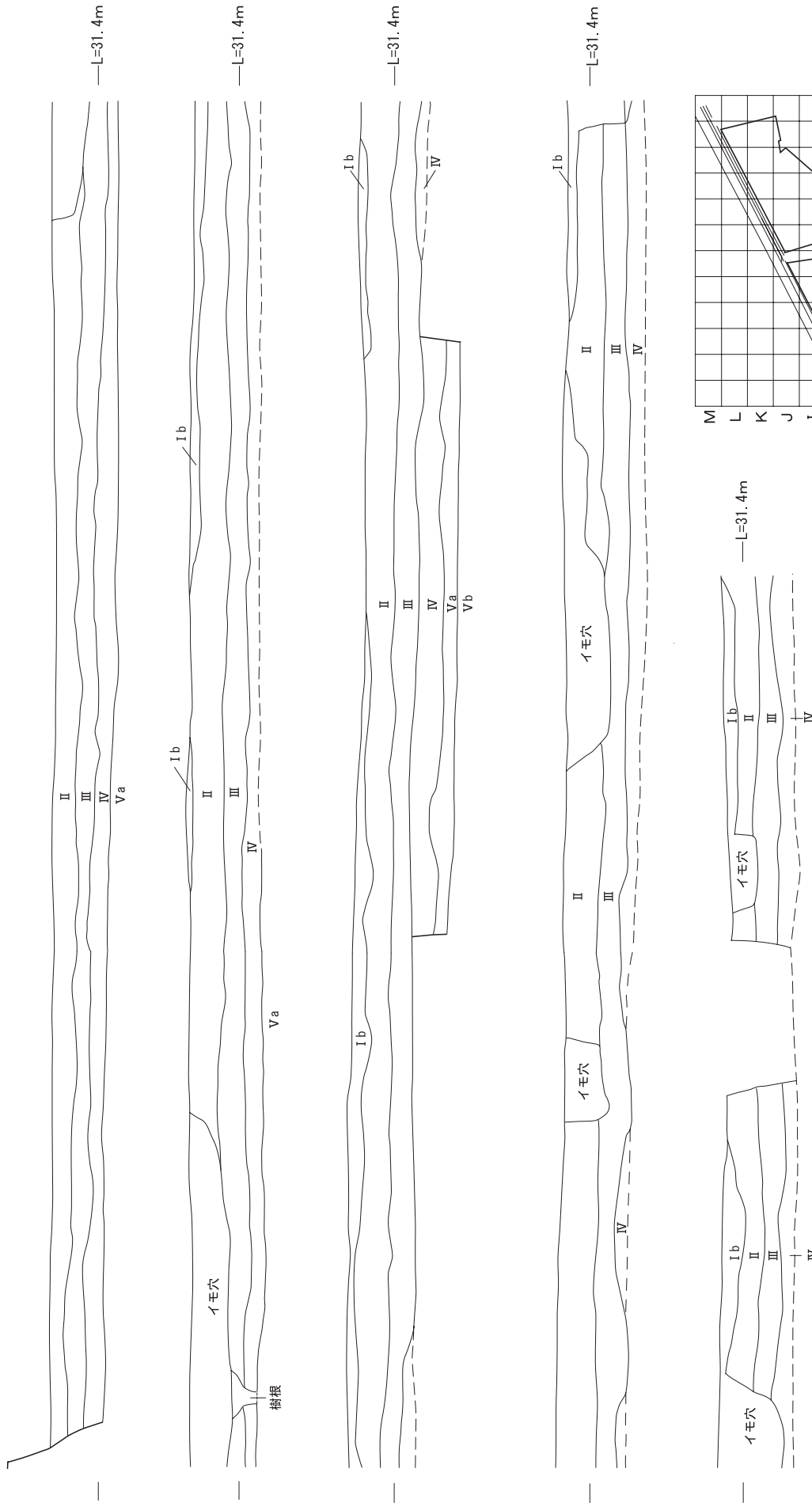
Ⅷ層：暗赤褐色（5YR3/3）のシルト質土で、硬質である。粘性もある。Ⅶ層より赤みが強く、白色粒を含む。層厚は約20～30cm。

Ⅸ層：黄褐色（10YR5/8）のシルト質土で、かなり硬質である。薩摩火山灰層である。層厚は約40cm。

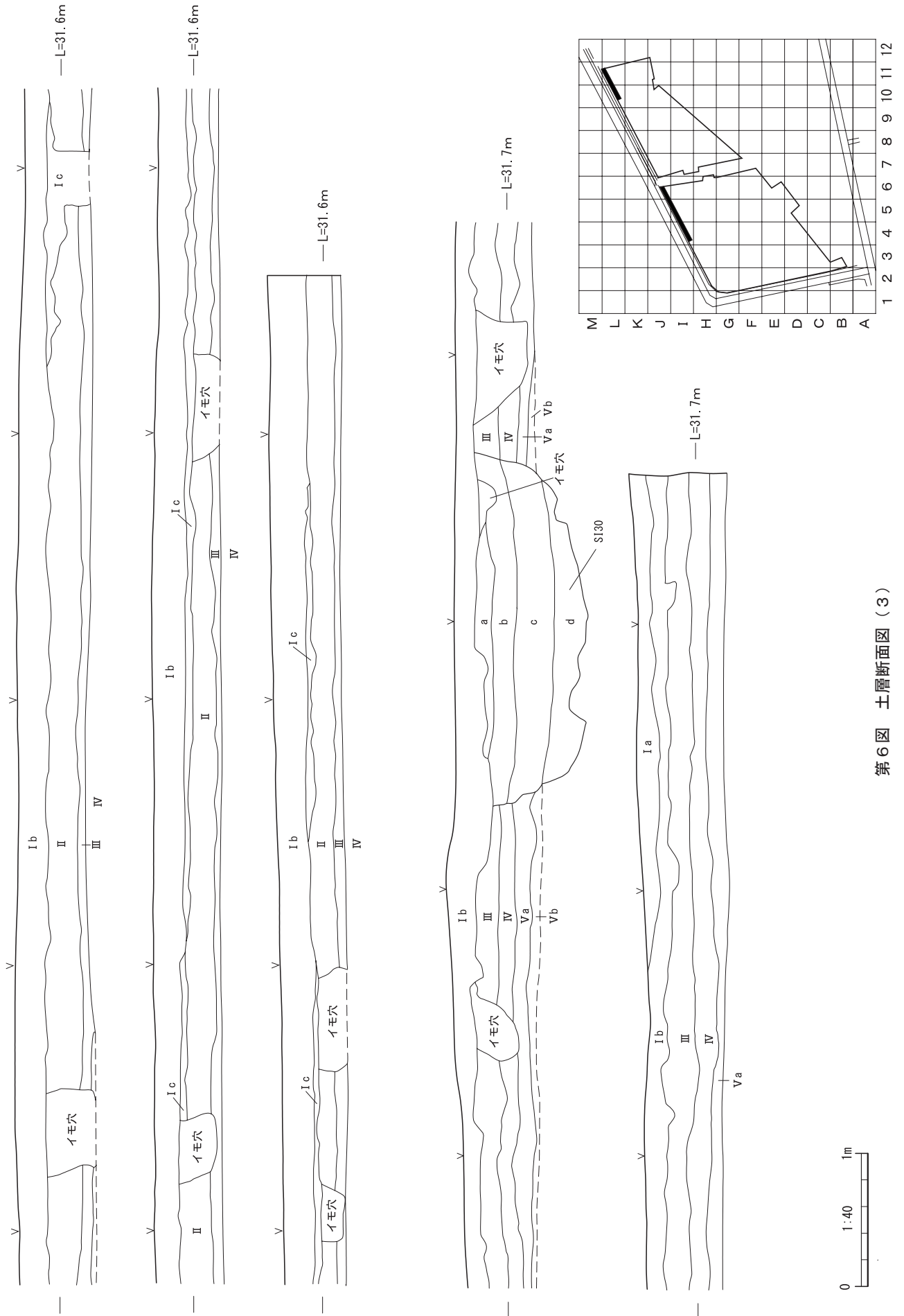
X層：にぶい黄褐色（10YR4/3）の粘質土で、締まっている。層厚は約10cm以上。



第4图 土层断面图(1)



第5図 土層断面図 (2)



第6図 土層断面図 (3)

第4章 調査の成果

第1節 縄文時代早期の調査

1 調査の概要

ほ場整備工事の掘削深度の関係上、アカホヤ火山灰層以下の調査は行っていない。しかし、18号竪穴建物の貼床土内から、縄文時代早期土器が1点出土している。

この建物跡は、掘方の掘削がアカホヤ火山灰層下位まで及んでいることから、その際に土器が掘り出され、貼床土内に混入したと考える。

2 土器（第7図1）

1は、直行する口縁部で、上端に横位の貝殻刺突文を、その下位には縦位の貝殻刺突文を密に施す。

第2節 縄文時代後期の調査

1 調査の概要

縄文時代後期と判断できる土器が、3点確認された。その内訳は、口縁部2点、底部1点である。

口縁部2点は、10区以東から出土しており、縄文時代後期遺物の出土の中心は、今回調査区よりも東に位置すると考える。

なお、縄文時代後期と判断できる遺構は、確認できていない。

2 土器（第7図2・3）

2は、凹点文と凹線文を組み合わせるものである。3は、編組製品の圧痕をもつ編物底である。

第3節 縄文時代晩期末～弥生時代初頭の調査

1 調査の概要

縄文時代晩期末～弥生時代初頭の土器は、主にⅡ層から出土しており、調査区全域からまんべんなく認められる。また、弥生時代中期以降の竪穴建物跡埋土内からも出土している。本遺跡出土土器の中でも、出土量が多いほうであり（番号取上分で約550点）、本遺跡の主体となる時期の一つである。

石器について、打製石斧など当該期に含まれる可能性があるものも出土しているが、打製石斧は古墳時代にも認められることから、第9節で扱う。

なお、縄文時代晩期末～弥生時代初頭と判断できる遺構は、確認できていない。

2 土器（第7～10図4～39）

器種により、甕と浅鉢、組織痕土器に大きく分類した。

（1）甕（第7～10図4～27）

口縁部や胴部に刻目突帯文をもつ。

胴部が屈曲するもの（5～12）、緩やかに屈曲するもの（13～16）、屈曲のない砲弾型を呈するもの（17～23）、底部（24～27）がある。

口縁部の突帯は、口唇部に接して貼付するものがほとんどであるが、少し下がった位置に貼付するもの（6・7・14・19・22）もある。4・13・21の突帯は、他に比べると小さめである。

胴部に突帯が確認できないもの（14・16・21・22・23）もあり、胴部屈曲のない砲弾型を呈するものに多い。

刻みは、ヘラ状工具によるものが多いものの、指頭によるもの（14・17）、二又状工具によるもの（6・7）、幅広工具によるもの（18）があり、さらに刻みのないもの（8・15・20）もある。

器面調整は、板状工具によるヨコナデ調整やヨコナデ調整、ミガキ調整を行う。

胎土に石英あるいは白色の火山ガラスを多く含む特徴がある。

8・9は、口唇部にドーナツ状貼付文を施す。さらに9は、胴部屈曲部に口唇状の貼付文を施す。

12・19・20は、補修孔が認められ、さらに20は未穿孔の孔も認められる。

（2）浅鉢（第10図28～37）

28・29・30・32・33は、逆「く」字形を呈する。28・30は、口縁端部が肥厚し、29はやや肥厚する。34は、ボウル状を呈する。35は、口縁部が大きく開くものである。31は、甕の可能性も考えたものの、器壁の薄さから浅鉢とした。渦巻状貼付文を施す。

器面調整は、ミガキ調整あるいは丁寧なヨコナデ調整を行う。

29は、口唇部に三本の粘土紐を貼付する。30は、口縁部外面に沈線文を施し、口唇部の8箇所ドーナツ状貼付文を施す。胴部屈曲部には突帯を施す。

32は、外面に二つ孔をもつ円形貼付文を施す。

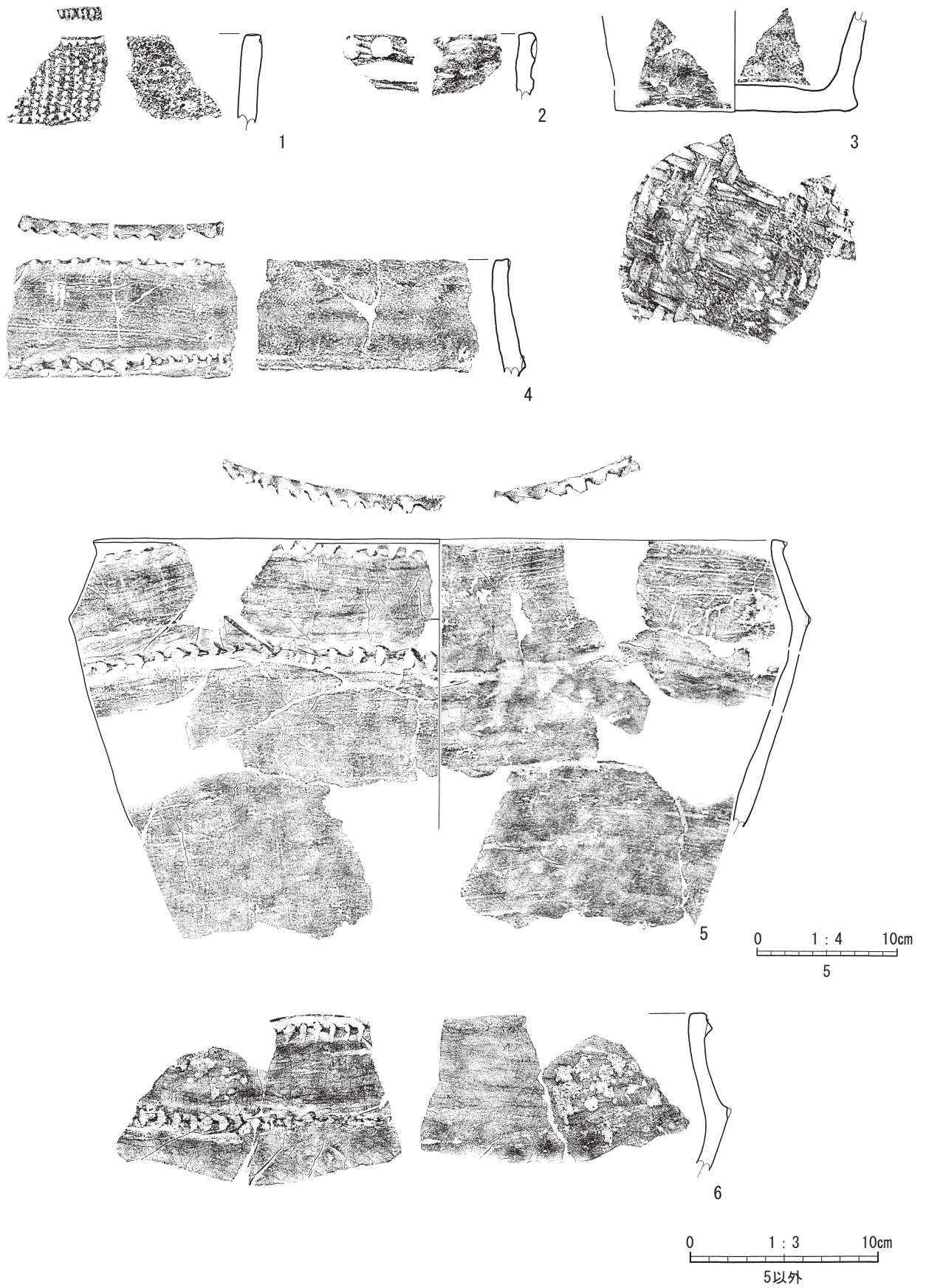
34は、外面にススが付着する。口縁部下位がわずかに膨らんでおり、逆「く」字形屈曲の名残と考える。

（3）組織痕土器（第10図38・39）

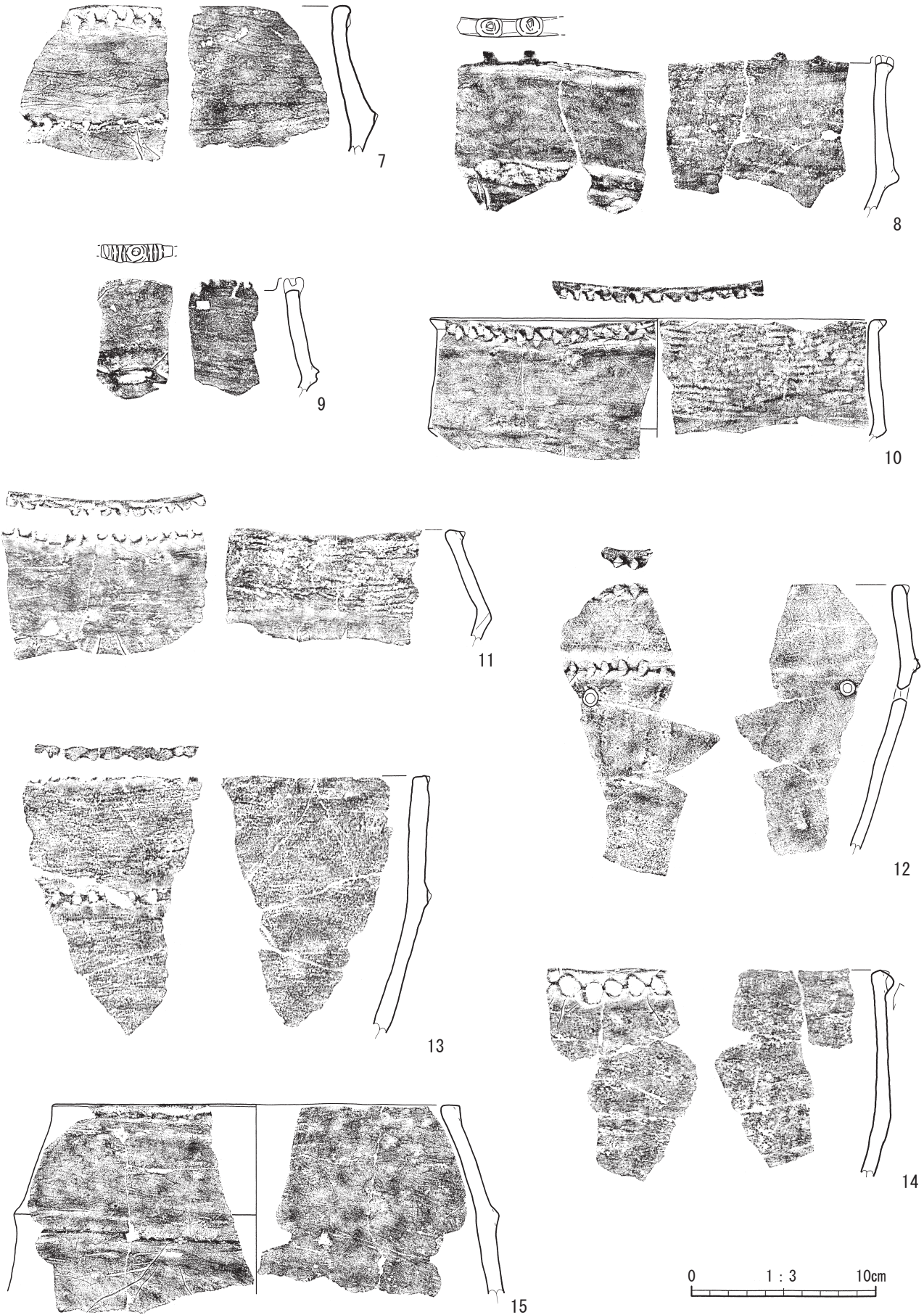
胴部外面に組織痕が認められるものである。

口縁部外面はヨコナデ調整を、内面は板状工具によるヨコナデ調整を行う。

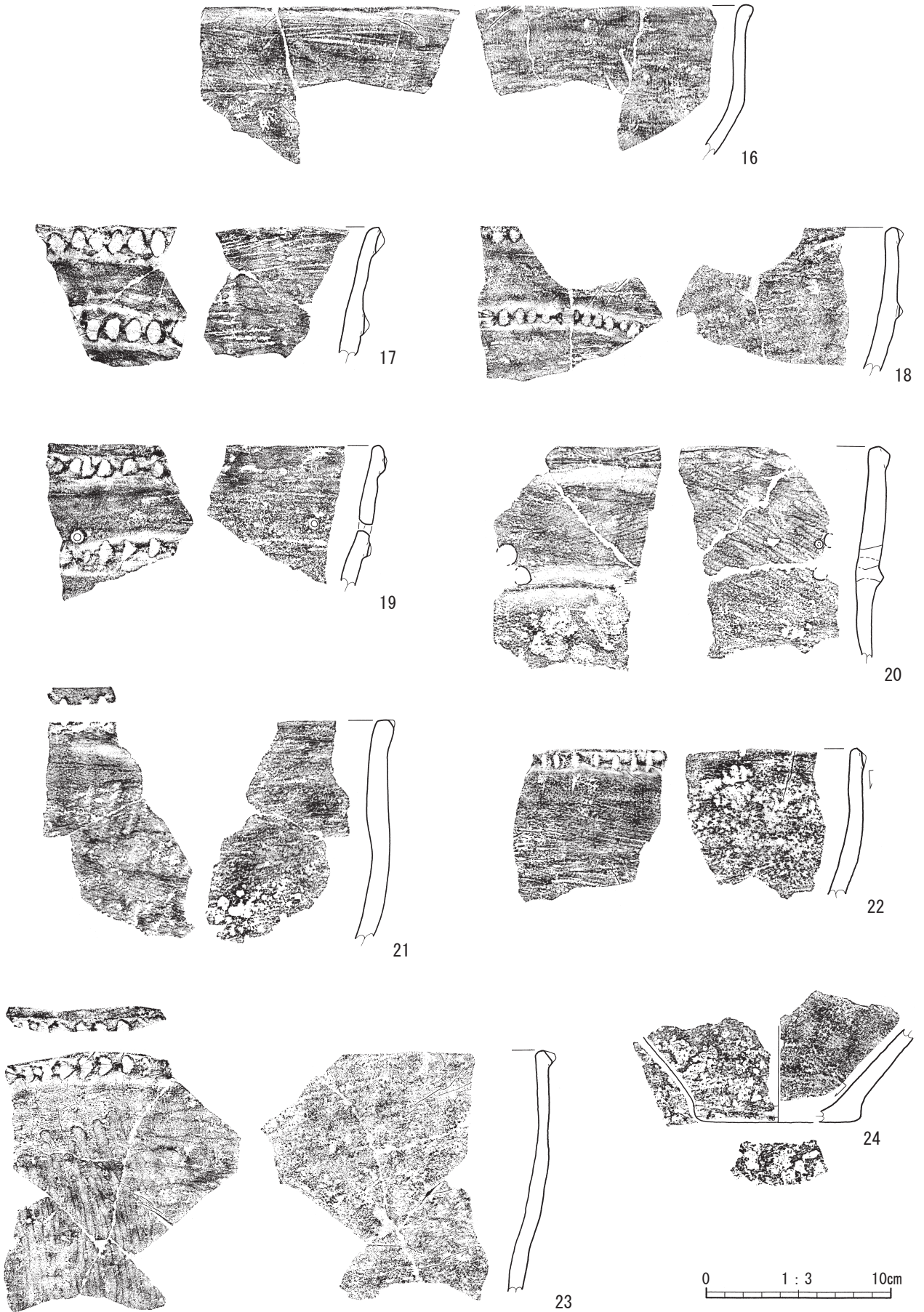
38の組織痕は、不明瞭である。39の組織痕も不明瞭であるが、網目圧痕の可能性はある。



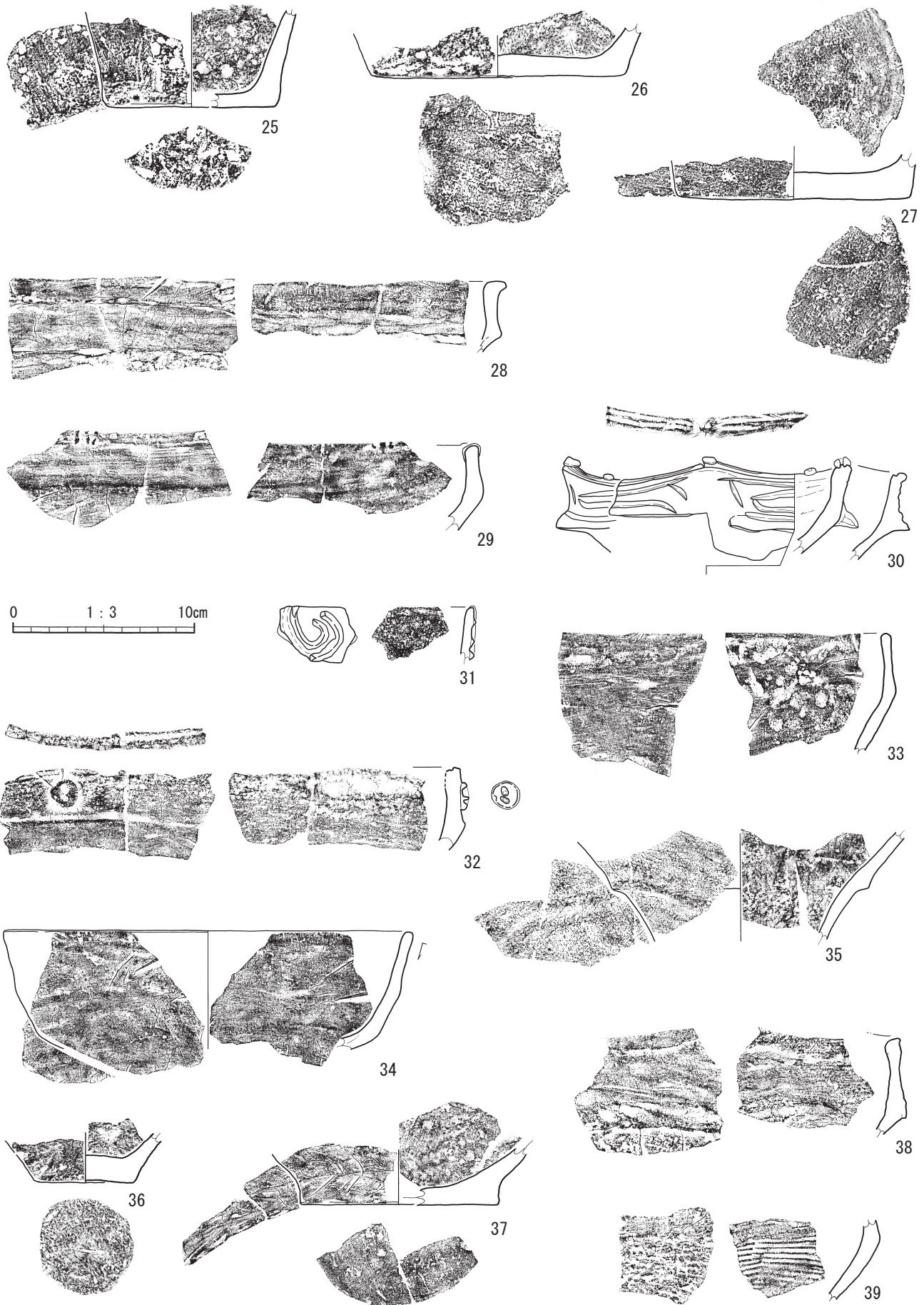
第7図 縄文時代早期・後期・晩期末～弥生時代初頭の出土遺物（1）



第8図 縄文時代晩期末～弥生時代初頭の出土遺物（2）



第9図 縄文時代晩期末～弥生時代初頭の出土遺物（3）



第10図 縄文時代晩期末～弥生時代初頭の出土遺物（4）

第4節 弥生時代中期の調査

1 調査の概要 (第11図)

遺構は、D・E-3区において堅穴建物 (SI31) が1基検出された。

遺物は、主にII層から出土しており、調査区全域からまんべんなく認められる (番号取上分で約350点)。また、古墳時代の堅穴建物跡埋土内からも出土している。

2 31号堅穴建物 (SI31) (第12・13図)

(1) 検出

D・E-3区のIV層上面で検出した。検出レベルは、31.16~31.02mである。当初、埋土bがドーナツ状に見えていたため、周溝状遺構と考えていた。しかし、ミニトレンチを設定して確認した結果、堅穴建物跡であることがわかった。

平面形は、5.3×5.2mの円形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

堅穴埋土は5層 (a~e) に分けられ、埋土a~dは

堅穴廃絶後の埋土 (以下「堅穴埋没土」)、埋土eは貼床土である。レンズ状堆積をしている。

a : 黒色 (7.5YR2/1) シルト質土で、締まりが弱い。

b : 暗赤褐色 (5YR3/2) シルト質土で、締まりが弱い。

アカホヤ層 (VIa層) 土や御池火山灰を含む。

c : 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト質土で、締まりがある。

アカホヤブロックを含む。

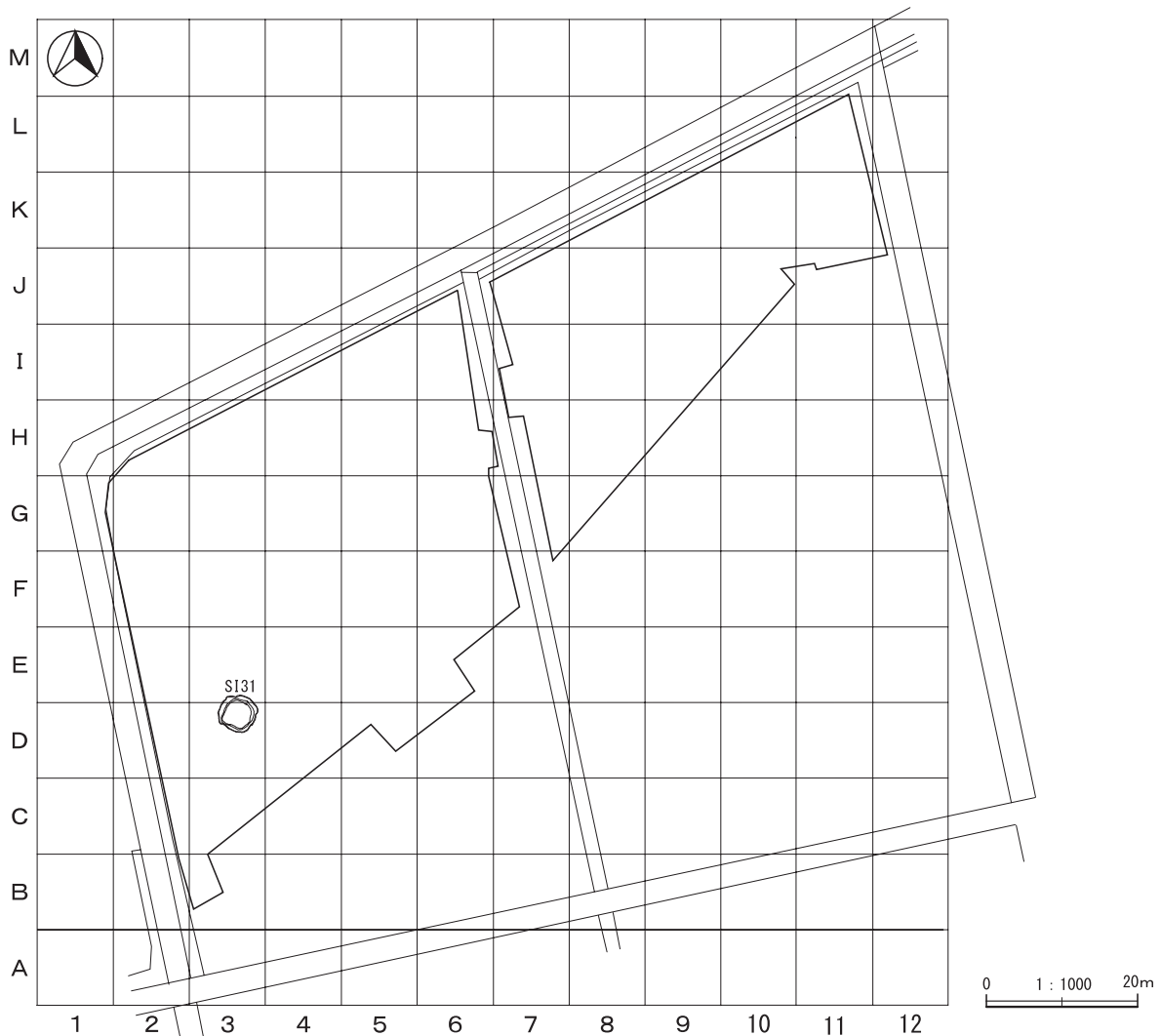
d : 極暗赤褐色 (10YR2/2) シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土を多く含み、赤味が強い。

e : 暗褐色 (10YR3/3) シルト質土で、硬く締まっている。アカホヤブロックを含む。層厚は約10cm。

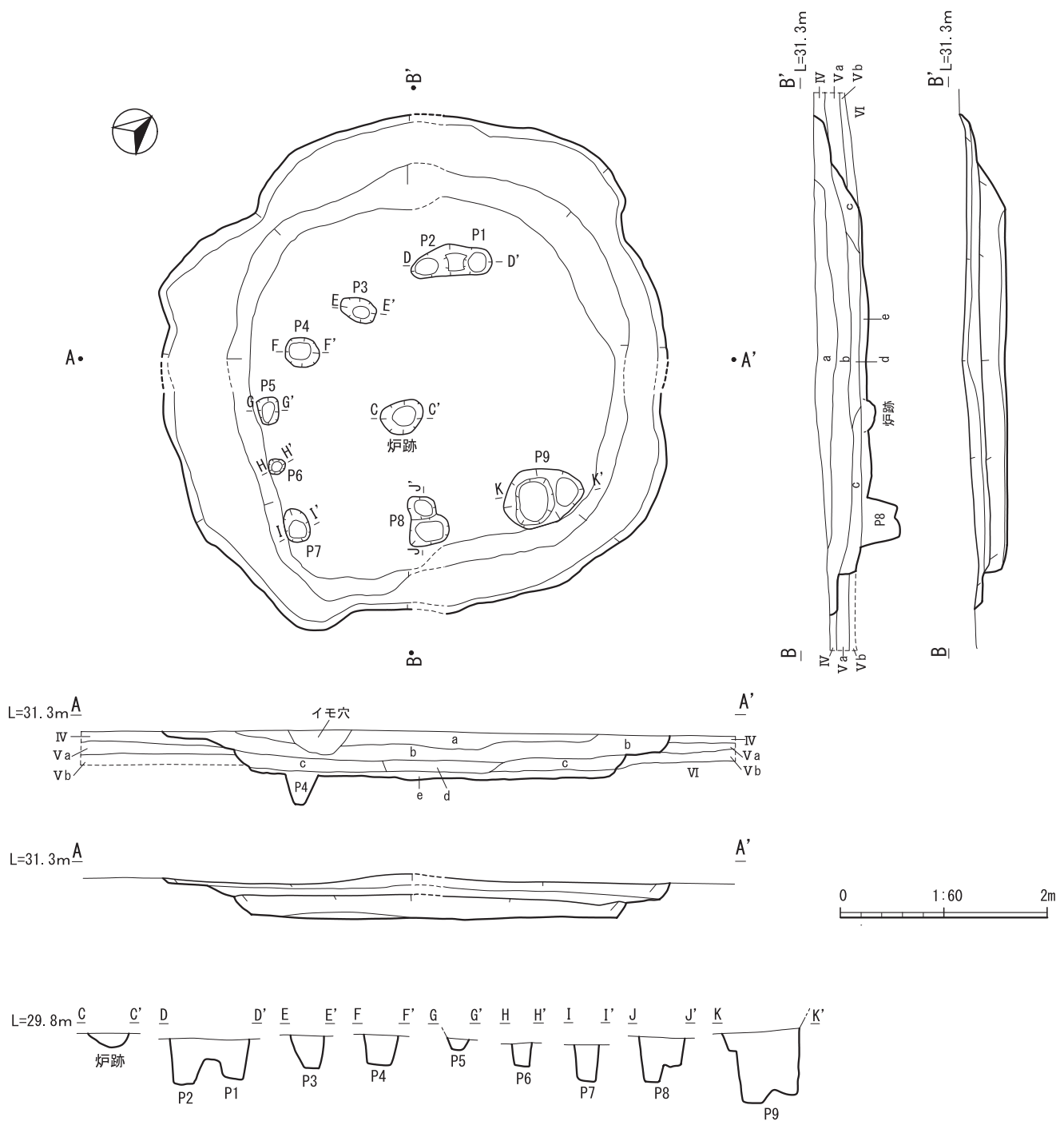
(3) ベッド状施設

掘り下げを行うと、全周でベッド状施設を確認した。ベッド状施設は幅約0.1~0.6mで、遺構検出面からの深さは6~20cmを測り、床面はVa層である。

ベッド状施設の立ち上がり、つまり堅穴建物の立ち上りを検出することはとても困難で、サブトレンチを設定するなどして判断した。



第11図 弥生時代中期 遺構配置図



第12図 31号竪穴建物跡 平・断面図

(4) 床面

ベッド状施設から一段落ちていた箇所を掘り下げると、埋土eを検出し、その面を床面（生活面）と捉えた。

床面の検出レベルは30.76~30.70mで、遺構検出面からの深さは約45cmを測る。なお、硬化面は確認できなかった。

(5) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り

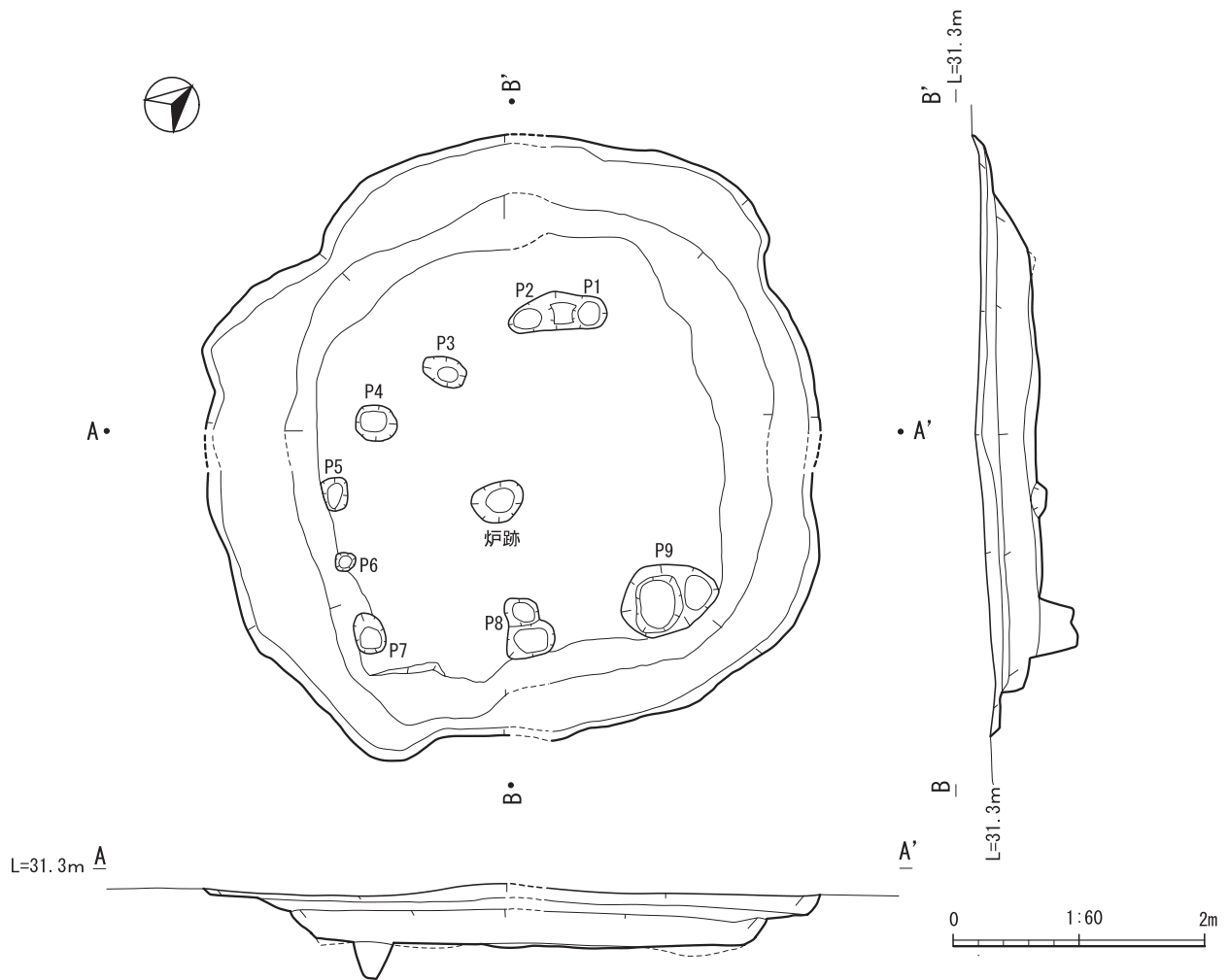
下げを行い、掘方床面を検出した（第13図）。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは30.60mで、遺構検出面からの深さは約50cmを測る。掘方床面には掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(6) 炉

炉は床面検出時には確認できず、掘方床面において検出した。

平面形は、0.40×0.35mの楕円形を呈する。深さは約13cmを測り、床面はアカホヤ層で、床面が焼けている。



第13図 31号竪穴建物跡 掘方平・断面図

埋土は褐色（7.5YR4/4）砂質土で、締まりがなく、アカホヤ層土を含む。炭化物や灰は認められなかった。

(7) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは、床面では確認できず、掘方床面において9基検出した。これら柱穴・ピットは「U」字状に並んでおり、規則性は認められない。

埋土は全て黒褐色（10YR2/2）シルト質土で、締まっており、アカホヤ層土を含む。各柱穴・ピットの属性（長径×短径×深さ）は以下のとおり。

- P 1 : 0.28×(0.26)×0.40m
- P 2 : (0.38)×0.25×0.45m
- P 3 : 0.35×0.23×0.32m
- P 4 : 0.35×0.30×0.30m
- P 5 : 0.27×0.25×0.10m
- P 6 : 0.17×0.15×0.23m
- P 7 : 0.35×0.25×0.35m
- P 8 : 0.50×0.43×0.45m
- P 9 : 0.80×0.56×0.70m

(8) 遺物（第14図40～47）

遺物は番号取上分で54点、包含層出土として取上げたものの竪穴埋土内遺物の可能性が高いもの（以下「竪穴埋土内可能性遺物」とする）を含めると68点を数える（一括取上分除く）。

土器、石器、棒状礫、軽石が認められ、8点図示した。

ア 土器（40～44）

土器は、甕と壺を確認した。

甕（40・44）

40は口唇部に凹みをもち、口縁部下位に一条の突帯を施す。44は甕の中実脚台で、端部に凹みをもつ。

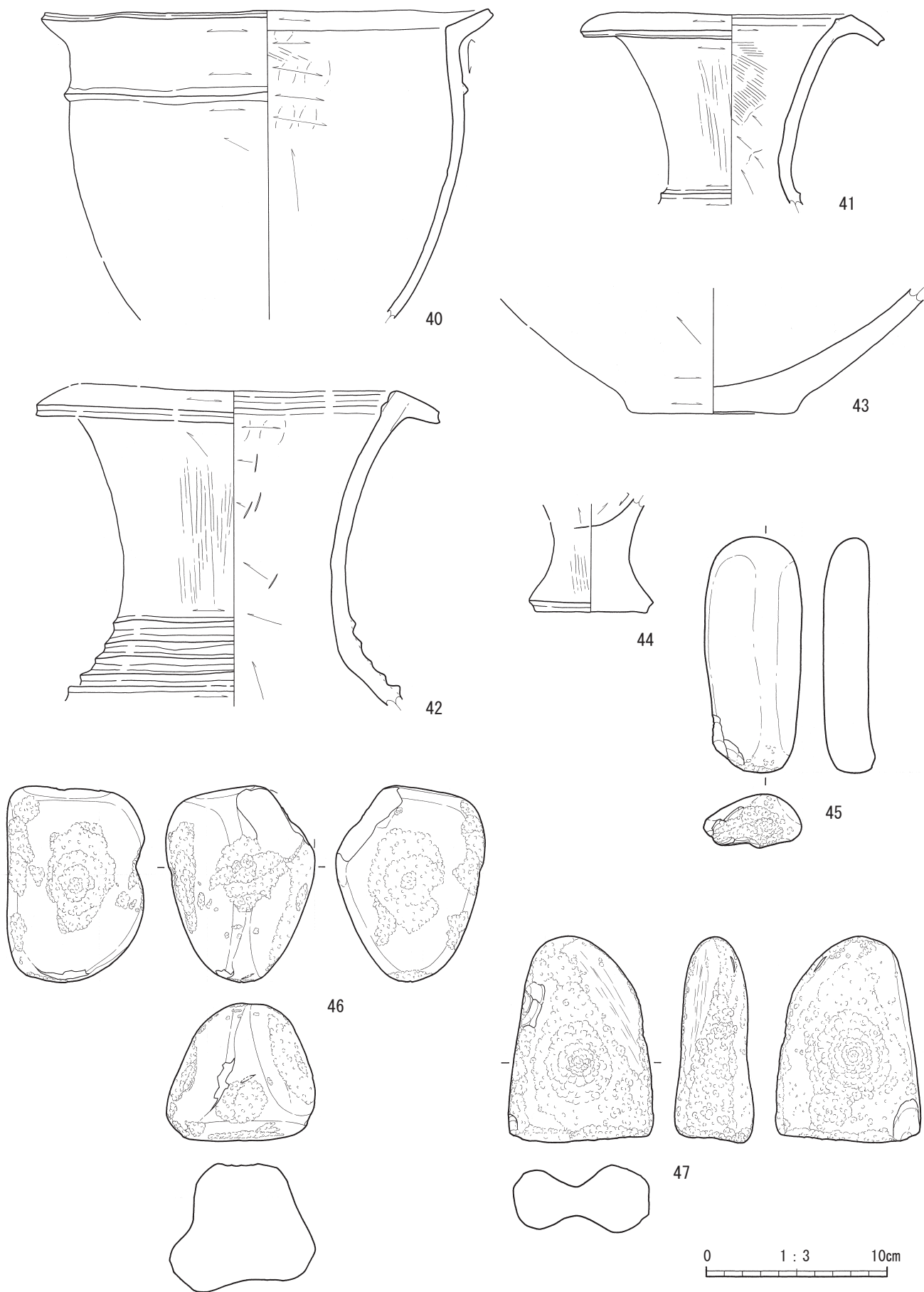
壺（41～43）

41・42は、頸部が長く、口縁部が「へ」字状を呈する。頸部に多条の三角突帯を施し、口縁部内面にも突帯を施す。41～43は胎土に金色ウンモを含む。

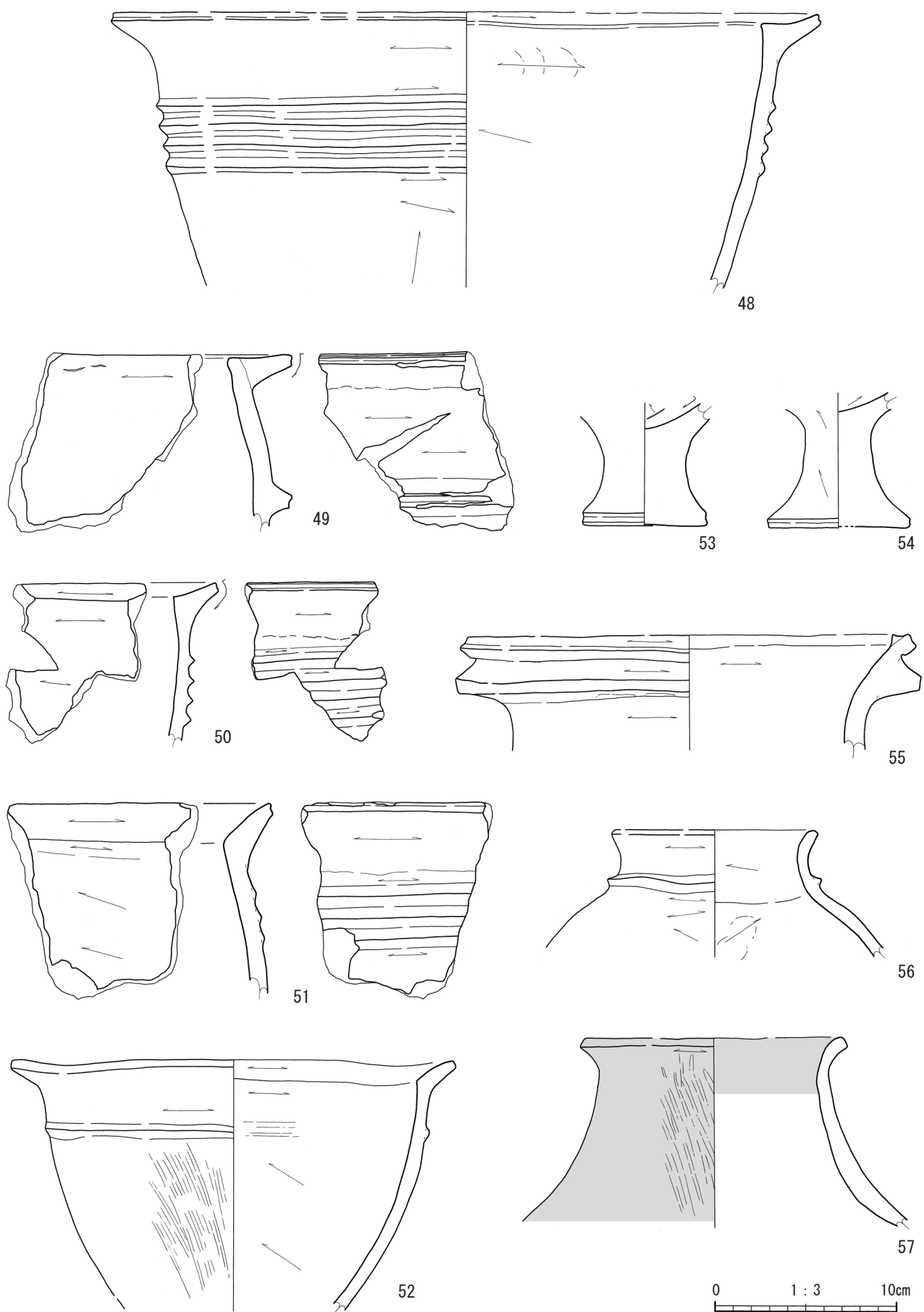
イ 石器（45～47）

石錘と砥石を確認した。45～47は石錘である。

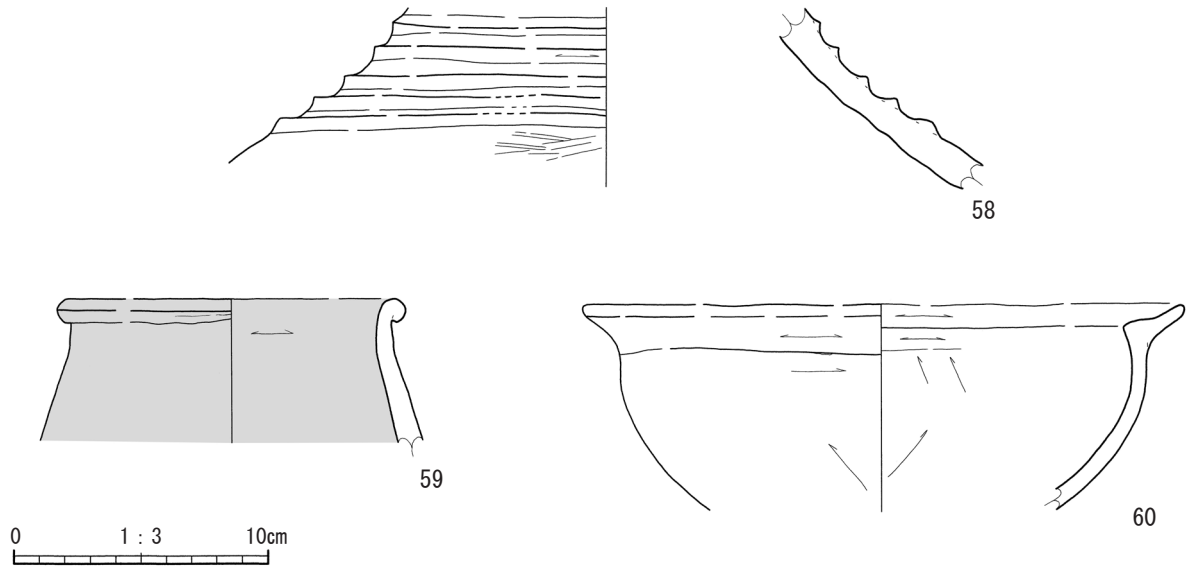
45は棒状のもので、下面のみ敲打痕が認められる。炉



第14图 31号竖穴建物跡出土遺物



第15図 弥生時代中期の出土遺物（1）



第16図 弥生時代中期の出土遺物（2）

埋土内出土である。

46は肉厚な礫を利用しており、上面以外に敲打痕が認められる。敲打痕の周辺がやや赤化している。

47は断面扁平なもので、正・裏面が凹むほど使用しており、凹みに鉄分が付着している。

ウ 棒状礫

5点確認した。

エ 軽石

6点認められ、棒状のものもある。

3 包含層出土遺物（第15・16図48～60）

包含層出土石器については、磨製石鏃や石鎚の一部などは弥生時代中期に属する可能性があるものの、断定はできないため、第9節で取り上げることとする。

そのため、ここでは土器のみ取り上げる。土器は、甕、壺、鉢を確認した。

甕（48～54）

48・50は、口縁部上面が凹み、口唇部にも凹みをもつ。口縁部下位に多条の突帯を施す。50は胎土に金色ウンモを含む。

49は大型甕の口縁部で、口唇部に凹みをもち、口縁部下位に断面「M」字状突帯を施す。

51は、口縁部が立ち上がって伸びているもので、二条の突帯を施す。胎土に金色ウンモを含む。。

52は口唇部に凹みが認められず、口縁部下位に一条の突帯を施す。胎土に金色ウンモを含む。

53・54は中実脚台で、端部に凹みをもつ。54は胎土に金色ウンモを含む。

壺（55～59）

55は二又状口縁をもつ。56は短頸で、頸部に一条突帯を施す。

57は、頸部が長いもので、突帯は確認できない。外面と口縁部内面に赤彩がなされるが、口唇部は赤彩されない。58は多条の三角突帯を施す。胎土に金色ウンモを含む。59は内外面に赤彩される。

鉢（60）

鉢の可能性のあるもので、口縁部上面が凹む。台付鉢の可能性もある。

第5節 古墳時代前期の調査

1 調査の概要（第17図）

遺構は、L-10・11区において竪穴建物（SI30）が1基検出された。

包含層出土遺物の中で、古墳時代前期のものとして確実に判断できる、あるいは可能性が高いものは、土器が2点のみ確認できた。それらは、第7節で言及する。土器のほとんどは、古墳時代後期～終末期のものとして判別が困難であった。

2 30号竪穴建物（SI30）（第18図）

（1）検出

L-10・11区のVb層下位において検出した。検出レベルは31.40～31.34mである。Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ時にも遺物が出土し続けていたため、遺構の存在が予想されていた。北半分は調査区外に延びる。

検出時の平面形は、0.46×(0.33)mで、3つの張り出しをもつ花弁状を呈する。ベルトを十字形に設定して掘り下げを行った。

（2）埋土

竪穴埋土は4層（a～d）に分けられ、埋土a～cは竪穴埋没土、埋土dは貼床土である。なお、埋土a・bは調査区北壁において確認している。

a：黒色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層（VIa層）土をごくわずかに含む。

b：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土をわずかに含む。

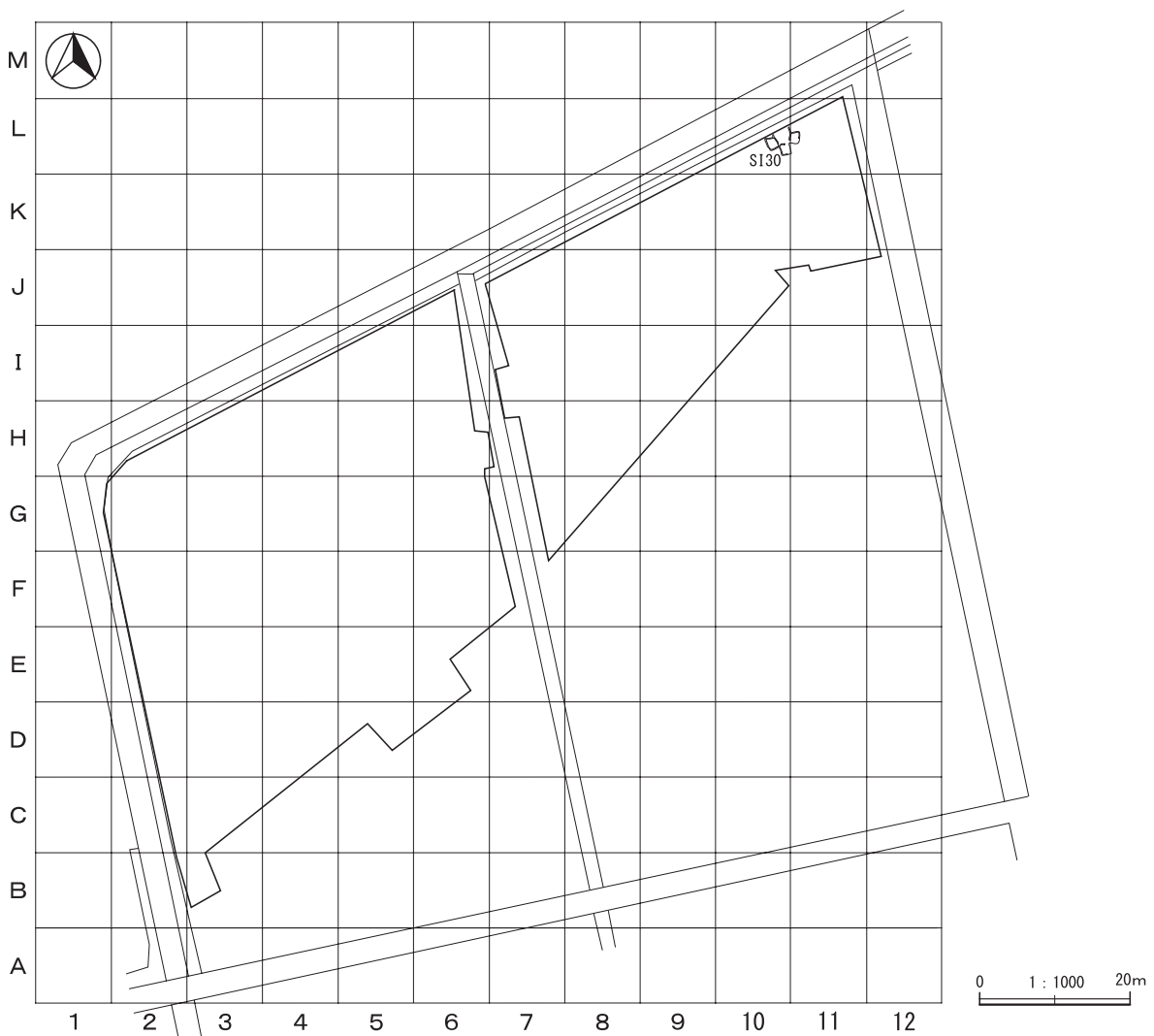
c：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石（1cm以下）をわずかに含み、下部にはアカホヤ層土をわずかに含む。

d：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロックを含む。層厚は5～15cm。

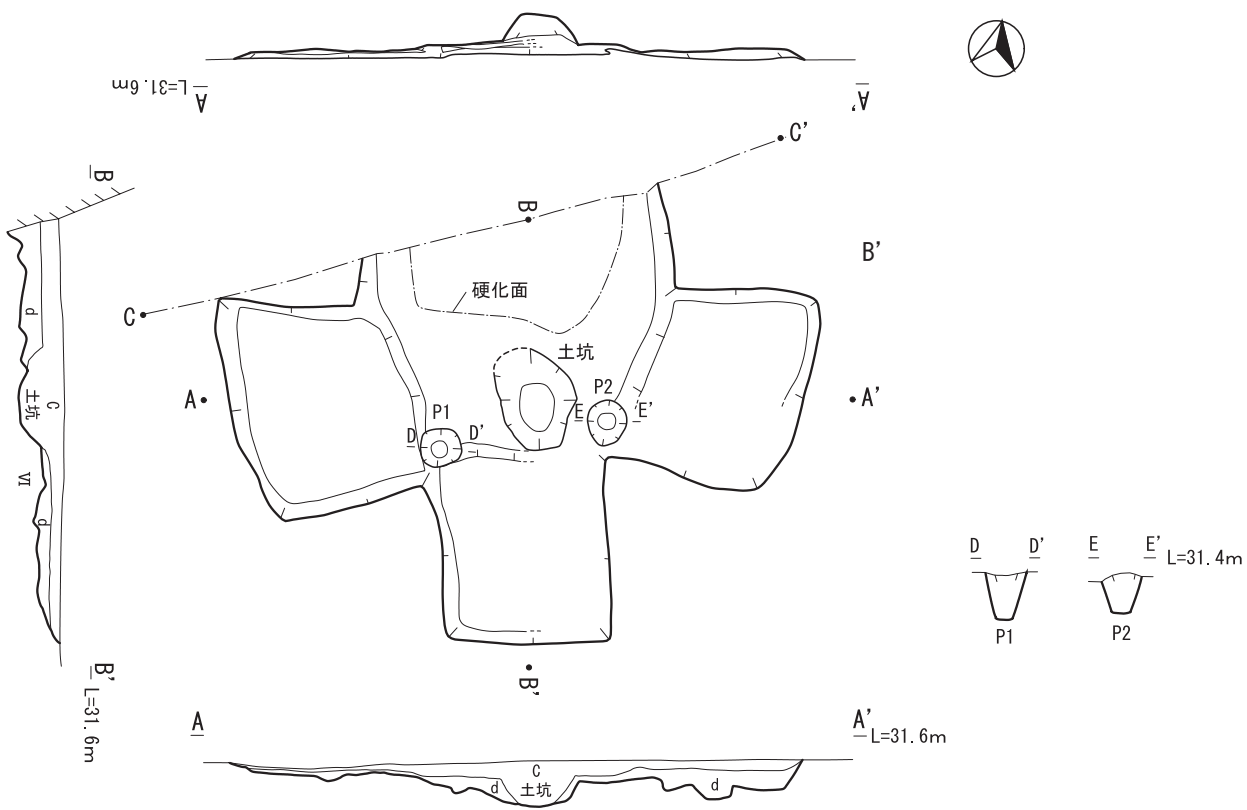
（3）張り出し部

張り出し部は現状3つあり、0.8～0.7×0.7～0.6mの方形を呈する。掘り下げを行うと、張り出し部は、すぐに床面が検出され、ベッド状施設となっている。

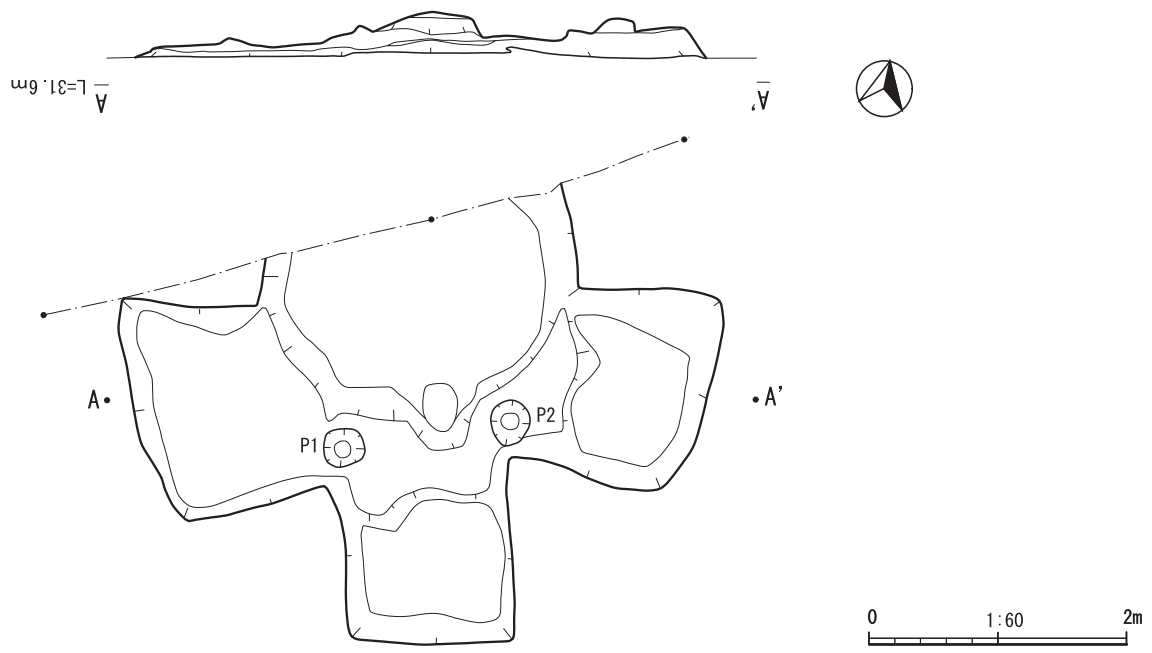
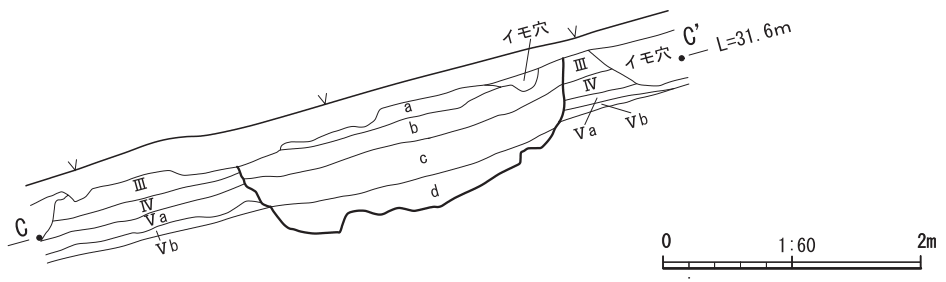
遺構検出面からの深さは5～10cmで、床面の基盤層はアカホヤ層である。



第17図 古墳時代前期 遺構配置図



(床面検出)



(掘方床面検出)

第18図 30号竪穴建物跡 平・断面図

東側と南側の張り出し部の一部は掘り過ぎたため、床面の下場が確認できていない。

(4) 床面

竪穴中央部は、張り出し部よりもわずかに一段落ちており（比高差10cm以下）、その中央部の掘り下げを行うと埋土dを検出し、その面を床面（生活面）と捉えた。

床面の検出レベルは31.20～31.18mで、遺構検出面からの深さは約15cmを測る。

竪穴中央付近では、アバタ状の凸凹をもち、移植ゴテでは容易に削れないほど硬化した面を検出した。

(5) 炉

炉は確認できなかったが、調査区外に存在している可能性がある。

(6) 土坑

床面検出時、段落ち部の南端において土坑を確認した。平面形は、0.8×0.6mの楕円形を呈する。深さは25cmを測り、床面はアカホヤ層である。埋土は、竪穴埋土cと同じである。

(7) 掘方

竪穴床面下場と硬化面を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した（第18図下）。

掘方の基盤層はアカホヤ層（VIa層）だが、竪穴中央付近はVII層まで達している。最深部のレベルは31.04mで、遺構検出面からの深さは約35cmを測る。

掘方床面には、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(8) 柱穴

柱穴は床面において確認できず、掘方床面において2基検出した。床面はVII層に達している。

埋土は黒褐色（10YR3/1）シルト質土で、締まりが弱く、アカホヤ層土を含む。

各柱穴の属性（長径×短径×深さ）は以下のとおり。直径や深さなど、規格性が高い。

P 1 : 0.32×0.30×0.35m

P 2 : 0.35×0.32×0.32m

(9) 遺物（第19図61～68）

遺物は番号取上分で37点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると116点を数える（一括取上分除く）。土器と石器が認められ、8点図示した。

ア 土器（61～66）

土器は、甕、壺、鉢、小型壺を確認した。

甕（61・62）

61・62は、ともに口縁部が「く」字状を呈する。61は器高に対して口径が大きく、胎土に金色ウンモを含む。外面はハケメ後ナデ調整を行う。一方、62の外面はハケメ調整を行う。

壺（65）

口縁部が長いもので、胎土の特徴から、都城盆地部からの搬入品の可能性がある。

鉢（63・66）

63は、台付鉢の底部の可能性はある。

小型壺（64）

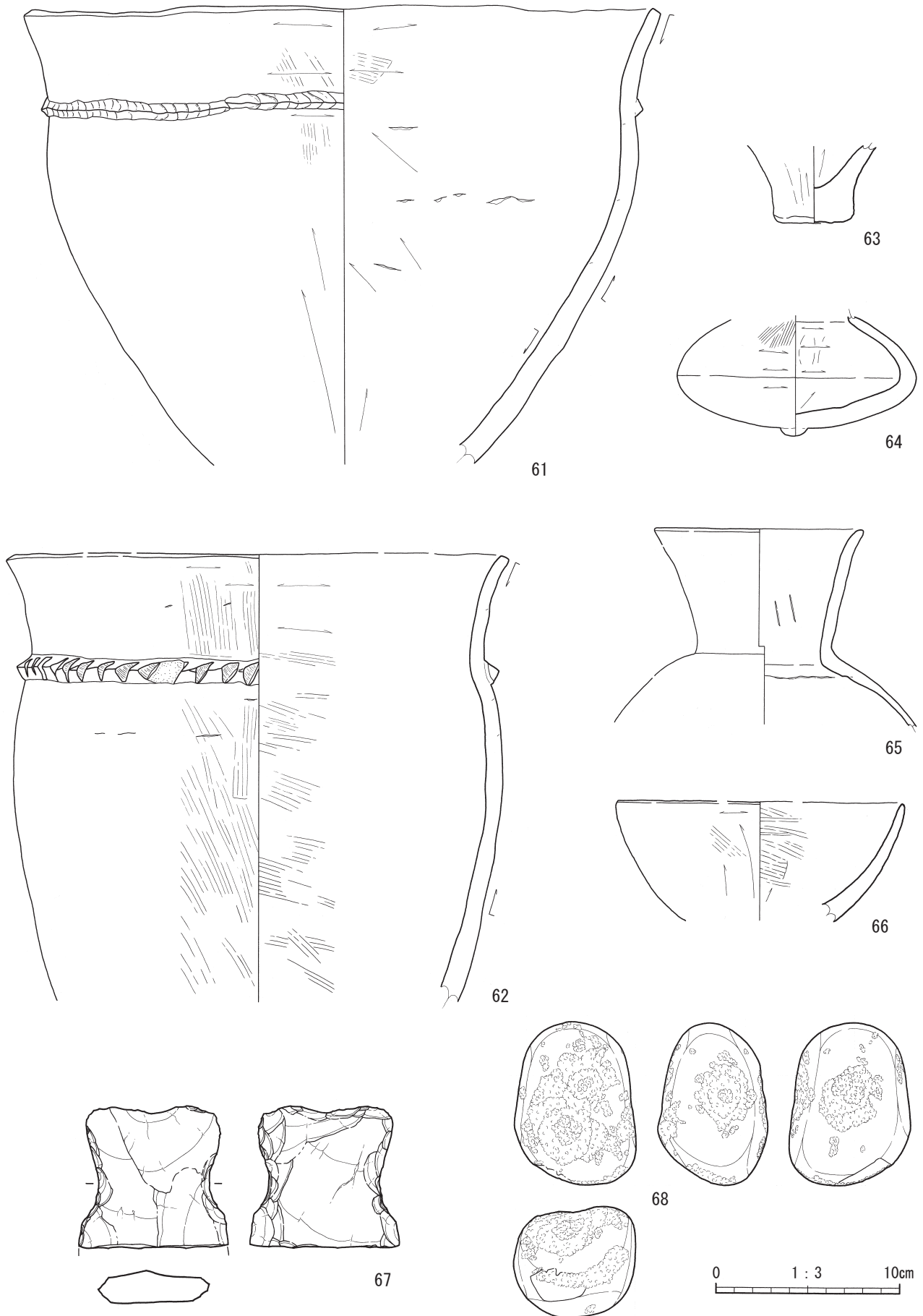
胴部がそばんの玉状に膨らんでおり、外底面にボタン状突起を貼付する。

イ 石器（67・68）

打製石斧と石鎚を確認した。

67は打製石斧で、両側面に抉りのあるへら形を呈する。

68は石鎚で、肉厚の石材を利用している。正面は凹むほど使用されている。



第19图 30号竖穴建物跡 出土遺物

第6節 古墳時代後期～終末期の調査

1 調査の概要（第20図）

（1）遺構

遺構は、調査区全域において竪穴建物（SI）が21基（10～29・32号）検出された。そのうち、32号竪穴建物は、事業者側との協議の結果、調査を実施せずに現地保存されている。

遺構検出面について、1～6区は比較的レベルが高いところ——主にIV層（御池火山灰含有層）上面——で検出できた。その中には、II層の掘り下げ時から周囲とは様相が異なる——土色が違う、白色化した池田降下軽石を多く含むなど——ことから、遺構の存在が予想された竪穴建物もある。

一方、7～11区は、レベルが高いところでの検出が難しく、11～16号はVb層（池田降下軽石を多く含む層）上面で、25・26・29号はIV層を少し掘り下げたところでの検出となった。そのため、遺構検出面から竪穴建物の床面まではとても浅くなっている。

遺構番号について、当初検出順に1号から番号を付していた。しかし、1次調査時の1～9号竪穴建物と重複して混乱するおそれがあったため、10号から番号を付け直している。

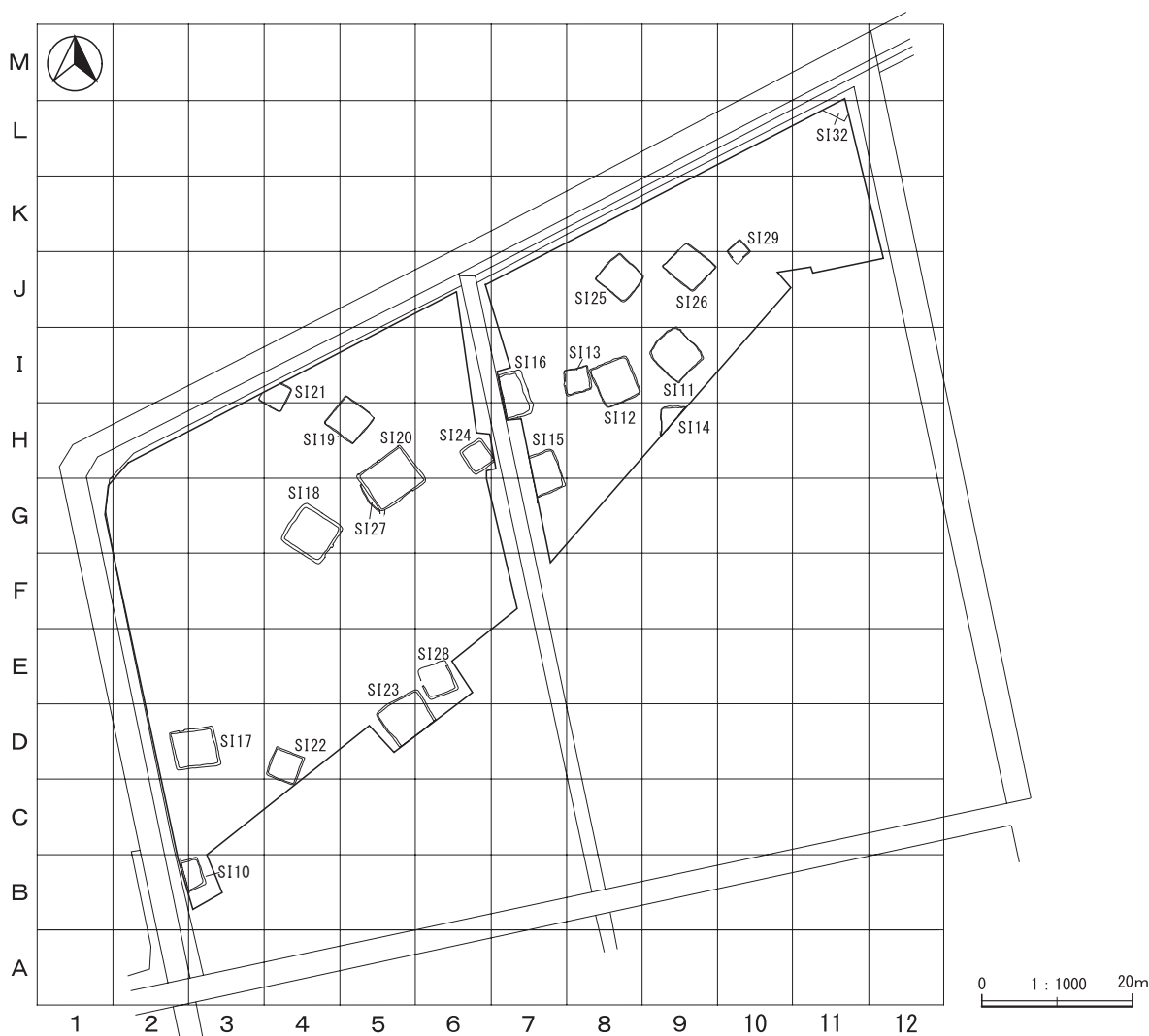
（2）遺物

遺物は主にII層から出土しており、調査区全域からまんべんなく認められる。土器や須恵器、石器、鉄器、製鉄・鍛冶関連遺物などが認められた。

包含層出土土器のほとんどは、器形や器面調整などの特徴から、後期～終末期に属すると考えるが、第7節で古墳時代前期の土器とともに取り上げる。

包含層出土石器は、古墳時代後期～終末期に属すると確実に判断できないことから、第9節で弥生時代中期に属する可能性があるものなどとともに取り上げる。

包含層出土の鉄器や製鉄・鍛冶関連遺物は、弥生時代中期や古墳時代前期の竪穴建物から鉄器や鍛冶関連遺物が認められないことから、古墳時代後期～終末期に属する可能性が高いと考える。第9節で取り上げる。



第20図 古墳時代後～終末期 遺構配置図

(3) 分類について

出土量の多い甕、坏、石錠については、細分を行った。

ア 甕

甕は在来のものと搬入品の二つに大別でき、在来のものは口縁部形態から5つに細分した(1~5類)。詳細は以下のとおり。底部形態は、脚台と平底があり、平底には外底面に木葉痕が残るものもある。

なお、甕として扱ったものの中で底部が欠損しているものには、甕の口縁部も含まれている可能性もあり、注意されたい。

1類：口縁部が内湾するもの。

強く内湾するものやわずかに内湾するものがある。

2類：口縁部が直行するもの。

3類：口縁端部でやや外反するもの。

内湾口縁で端部のみ外反するものや、直行口縁で端部のみ外反するものがある。

4類：口縁部が突帯上位から肥厚するもの。

内湾するものや直行するもの、口縁端部でやや外反するものが認められる。

5類：口縁端部で外湾するもの。

6類：器形や胎土、器面調整から搬入品と判断できるもの。

胎土に赤色粒や頁岩類の小円礫(いわゆる「宮崎小石」)を含むものは、宮崎平野部からの搬入品と考える。

イ 坏

坏は在来のものと搬入品の2つに細分した。

1類：在来のもの。厚手のつくりで、黒色処理が行われるものもある。

2類：胎土や色調の特徴から搬入品と判断できる、あるいは搬入品の可能性が高いもの。

ウ 石錠

石錠は、形態から4つに細分した。

1類：肉厚な礫を利用するもの。

2類：全体形が棒状のもの。断面形状は円形や方形、三角形のものがある。

3類：断面形が扁平なもの。

4類：小型で、上面と下面に剥離痕あり、一見石錠様のもの。

2 10号竪穴建物(SI10)(第21図)

(1) 検出

B-2・3区の調査区西壁側のIV層上面で検出した。検出レベルは、31.05~31.00mである。西側は調査区外に伸びる。

平面形は、4.1×(2.5)mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は4層(a~d)に分けられ、埋土a~cは竪穴廃絶後の埋土(以下「竪穴埋没土」)、埋土dは貼床土である。埋土cは壁際の一部にのみ存在する。

a:黒色(10YR2/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層(VIa層)土と池田降下軽石をわずかに含む。埋土aは、II層よりもアカホヤ層土と池田降下軽石の含有率が高いという違いがあるだけで、II層と埋土aの境は判別できなかった。

b:黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石(1cm以下)やアカホヤブロックをわずかに含む。細かいアカホヤ層土がまんべんなく混じる。

c:黒色(10YR2/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土(1cm以下)をわずかに含む。

d:黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック(3~5cm程)を多く含む。層厚は10~15cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土dを検出し、その面を床面(生活面)と捉えた。

床面の検出レベルは30.44~30.42mで、遺構検出面からの深さは約60cmを測る。硬化面は確認できなかった。

(4) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第21図下)。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは30.28mで、遺構検出面からの深さは約75cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(5) 炉

床面や掘方床面検出時において、炉は確認できなかった。しかし、西壁断面の竪穴中央付近で土坑のような落ち込みが認められたことから、その位置から炉の可能性を考えた。なお、断面で確認したため、平面形は不明である。

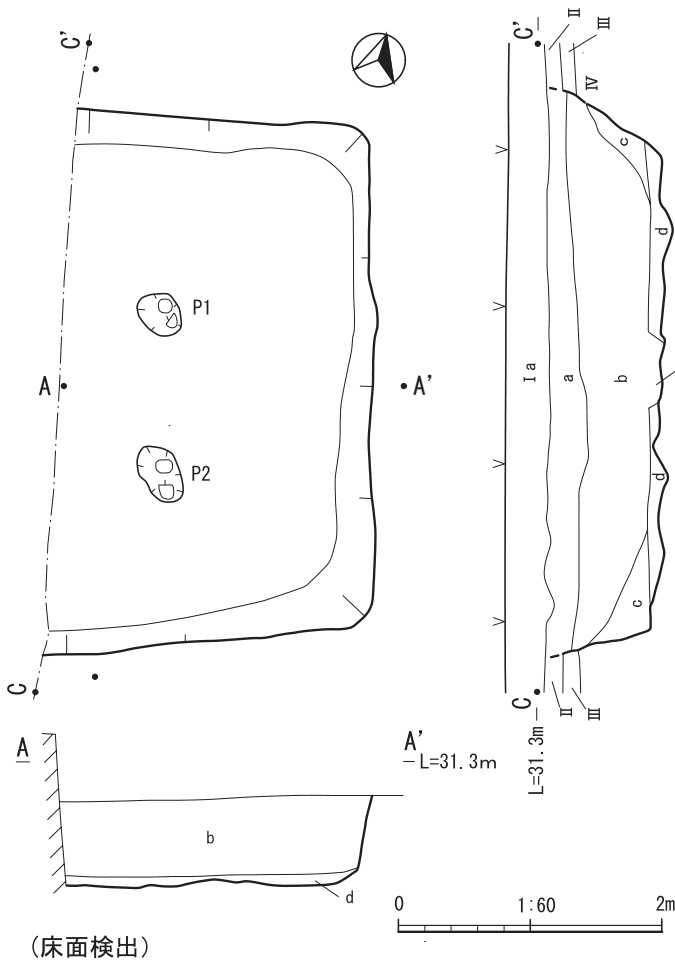
(6) 柱穴

柱穴は床面において確認できず、掘方床面において2基検出した。床面はともにVII層に達している。

埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤブロックを多く含む。

各柱穴の属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

P1:0.40×0.30×0.57m



P 2 : 0.50×0.30×0.56m

その配列から、4本柱建物と考える。

(7) 遺物 (第22図69~80)

遺物は、番号取上分で99点、包含層出土として取上げたものの竪穴埋土内遺物の可能性が高いもの(以下、「竪穴埋土内可能性遺物」)を含めると117点を数える(一括取上分除く)。遺物は埋土b上位に多い。

土器、須恵器、石器、軽石が認められ、12点図示した。

ア 土器 (69~78)

土器は、甕、壺、坏、高坏を確認した。

甕 (69~73)

3類 (69)

口縁端部で外反するもの。外面はヨコナデ調整後にタテナデ調整やミガキ調整が行われており、他の甕3類に比べると違和感が残る。床着出土。

脚台 (70・71)

71は低脚であり、鉢の可能性もある。70・71ともに床着出土。

平底 (72・73)

73はやや上げ底気味で、外底面に木葉痕が残る。

壺 (74・75)

74は、へら状工具による刻みを施す突帯をもつ。75は、外面にススが付着する。

坏 (76・78)

78は、へら記号と推定される沈線が認められることから、坏の底部片と考えたものの、接合痕の場所に違和感が残る。

高坏 (77)

精製赤彩土器の脚部である。

イ 須恵器 (79)

須恵器は、甕のみ確認した。

79は甕の胴部である。内面に同心円文当て具痕がみられ、外面には平行文タタキ後回転ナデ調整が行われている。

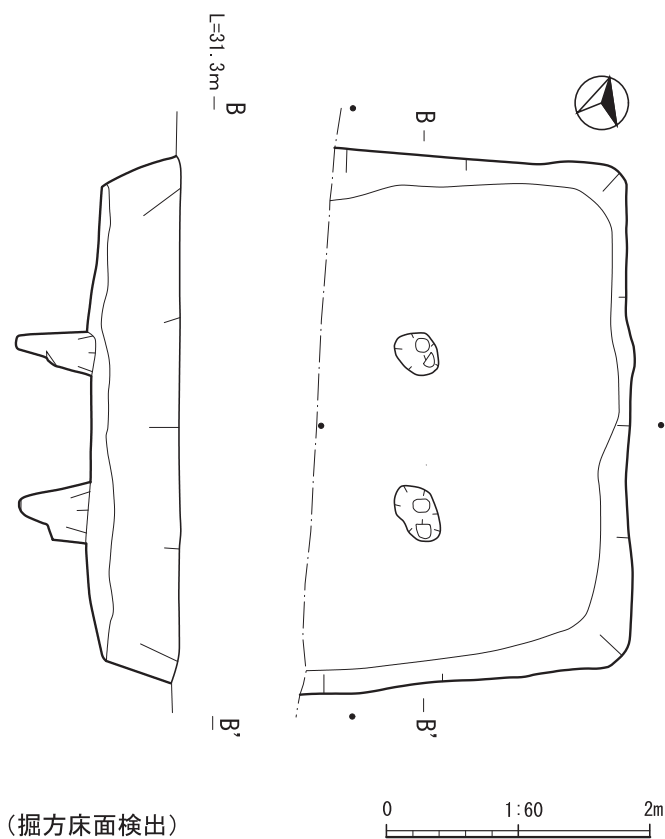
ウ 石器 (80)

石器は、石鏃のみ確認した。

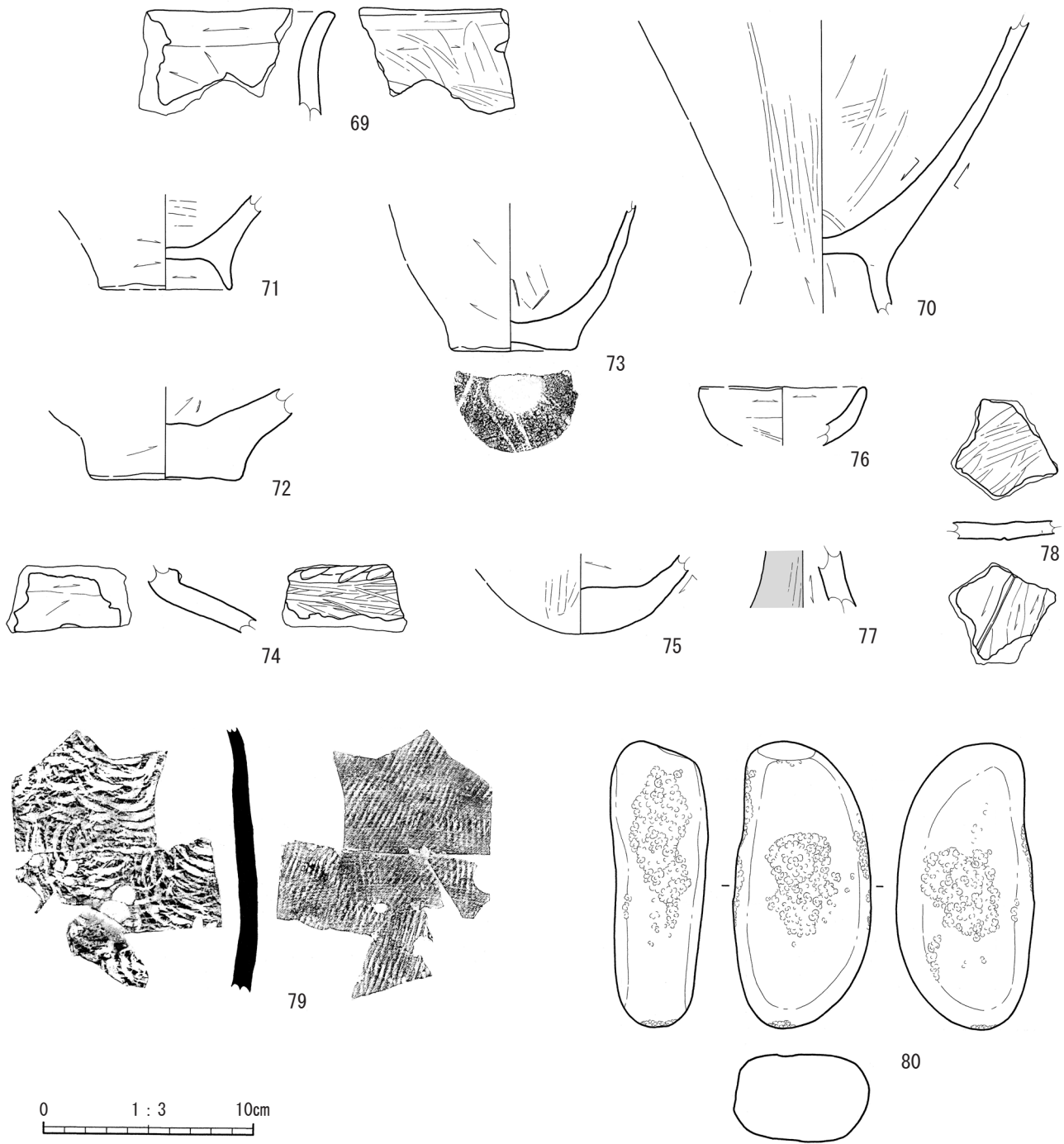
80は棒状を呈する2類で、表・裏・左側面に敲打痕が良く残る。

エ 軽石

2点認められた。



第21図 10号竪穴建物跡 平・断面図



第22图 10号竖穴建物跡 出土遺物

3 11号竪穴建物 (SI11) (第23・24図)

(1) 検出

I-9区のVb層上面で検出した。検出レベルは、30.20~30.15mである。

平面形は、5.9×5.4mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は2層(a~d)に分けられ、埋土a~cは竪穴埋没土、埋土bは貼床土である。

a:黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、池田降下軽石とアカホヤ層(VIa層)土を含む。

b:黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロックを含む。部分的に白砂を含む。層厚は15~20cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土bを検出し、その面を床面(生活面)と捉えた。なお、竪穴北壁側はアカホヤ層(VIa層)を床面にしている。

床面の検出レベルは30.12~30.06mで、遺構検出面からの深さは10~15cmを測る。

硬化面が認められたことから、その広がり把握するために精査を行ったが、残存していたのは中央付近のみであった。なお、床面の竪穴中央付近では、白色砂粒が薄く広がる箇所も認められた。

(4) 炉

床面検出後、ベルト沿いにサブレンチを設定し、その部分を先に掘り下げて掘方床面を確認したため、炉を面的に把握できていない。ただし、ベルト断面では確認できたため、そこから炉の大きさを推定した。

推定平面形は、0.90×0.75mの楕円形を呈する。深さは約10cmを測る。貼床土除去後に掘方床面基盤層のアカホヤ層土が赤化している箇所を確認したことから、そこが床面になると考える。

埋土は暗褐色(10YR3/4)シルト質土で、締まりがなく、炭化物を含む。アカホヤ層土や池田降下軽石を多く含む。底面近くでは焼け締まっており、アカホヤブロックが赤化した箇所もある。

(5) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第24図)。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは29.88mで、遺構検出面からの深さは約35cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(6) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは床面において確認できず、掘方床面において12基検出した。床面は全てVII層に達している。

埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト質土で、アカホヤ層土や池田降下軽石を含む。

各柱穴・ピットの属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

P1:0.40×0.28×0.28m

P2:0.28×0.25×0.30m

P3:0.35×0.28×0.30m

P4:0.28×0.25×0.26m

P5:0.28×0.25×0.20m

P6:0.23×0.20×0.30m

P7:0.30×0.25×0.27m

P8:0.53×0.5×0.43(0.41)m

P9:0.30×0.28×0.33m

P10:0.30×0.28×0.30m

P11:0.35×0.30×0.36m

P12:0.33×0.23×0.40m

その配列から、「P1-P2-P3-P4」、「P5-P6-P7-P8」、「P9-P10-P11-P8」の3セットが考えられ、増築を2回行った可能性がある。

P12は、平面が不定形であることから、柱穴ではない可能性もある。

(7) 遺物(第25~27図81~96)

遺物は番号取上分で316点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると385点を数える(一括取上分除く)。

土器、須恵器、石器、棒状礫、軽石が認められ、16点図示した。

ア 土器(81~92)

土器は、甕、壺、坏を確認した。

甕(81~90)

1類(81・83)

口縁部が内湾するもの。

81は、口縁端部に白色物質が付着する。

83は、平底に粘土をドーナツ状に貼付して上げ底状を呈する。絡縄突帯に指頭のナゲ上げによる刻み(以下、「ユビナゲ上げ刻み」)を施す。

2類(87・88)

口縁部が直行するもの。

87は、突帯をつまんだ際の爪痕が残る。88は、突帯が認められず、器面の凸凹が著しい。87・88はともに床着出土。

3類(85・86)

口縁端部でやや外反するもの。

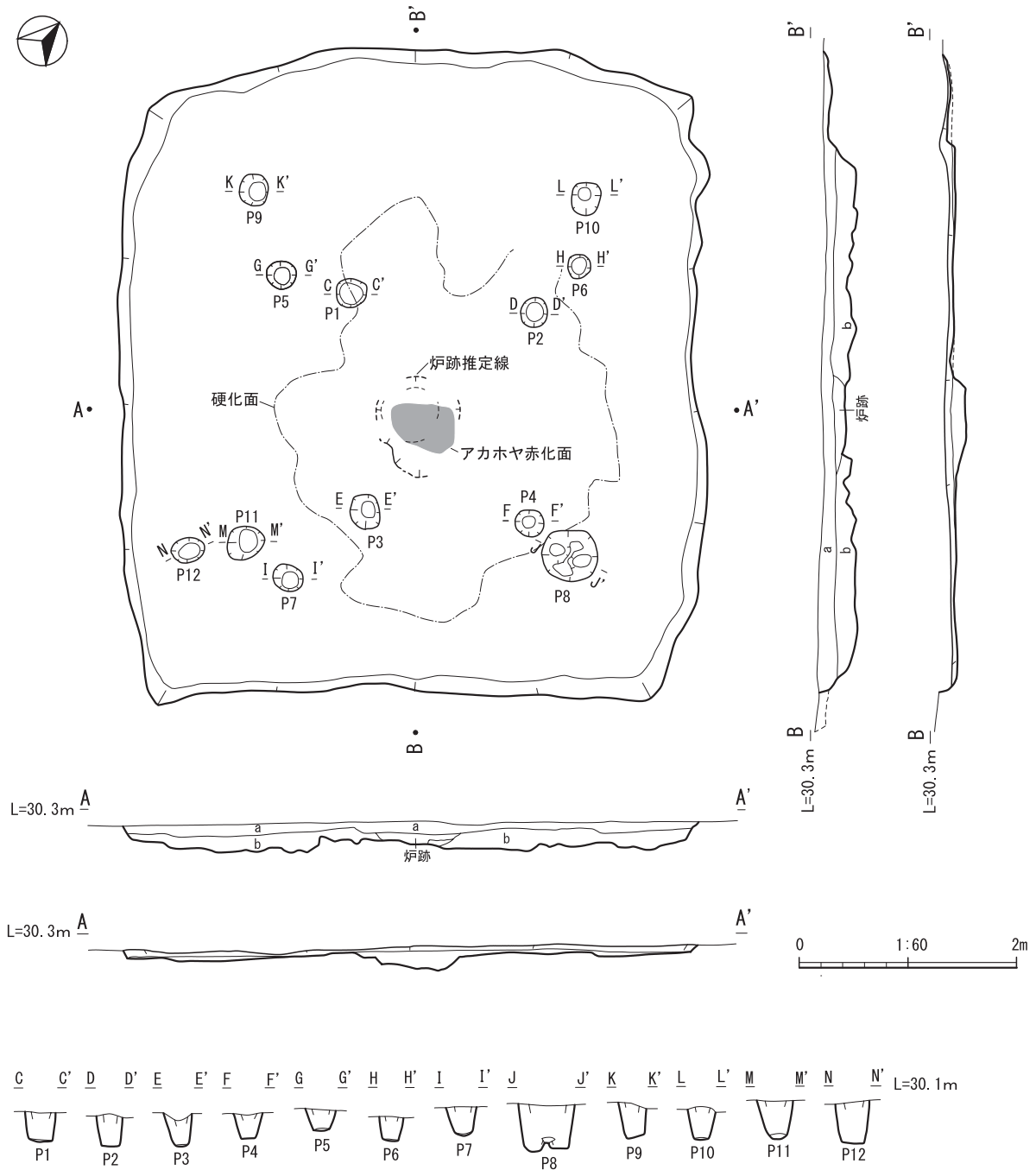
85は、突帯に密な刻みを施す。黄橙色系の色調を呈する。86は、突帯をつまんだ際の爪痕が明瞭に残る。

4類(82・84)

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。

82は、口縁端部に白色物質が付着する。絡縄突帯にユビナゲ上げ刻みを施す。

84は、絡縄突帯に指頭押圧による刻みを施す。大きさ



第23図 11号竪穴建物跡 平・断面図

の割に重量感がある。床着出土。

5類 (89)

口縁端部で外湾するもの。口縁部外面下位は、ハケメ状工具によるタテナデ調整が行われており、木目が明瞭に残る。突帯の貼付が弱く、一部剥離している。床着出土で、口縁部を下にして出土した（写真図版参照）。

脚台 (90)

脚端部に白色物質が付着する。

壺 (91)

煮炊きで使用されており、外面にススが付着する。

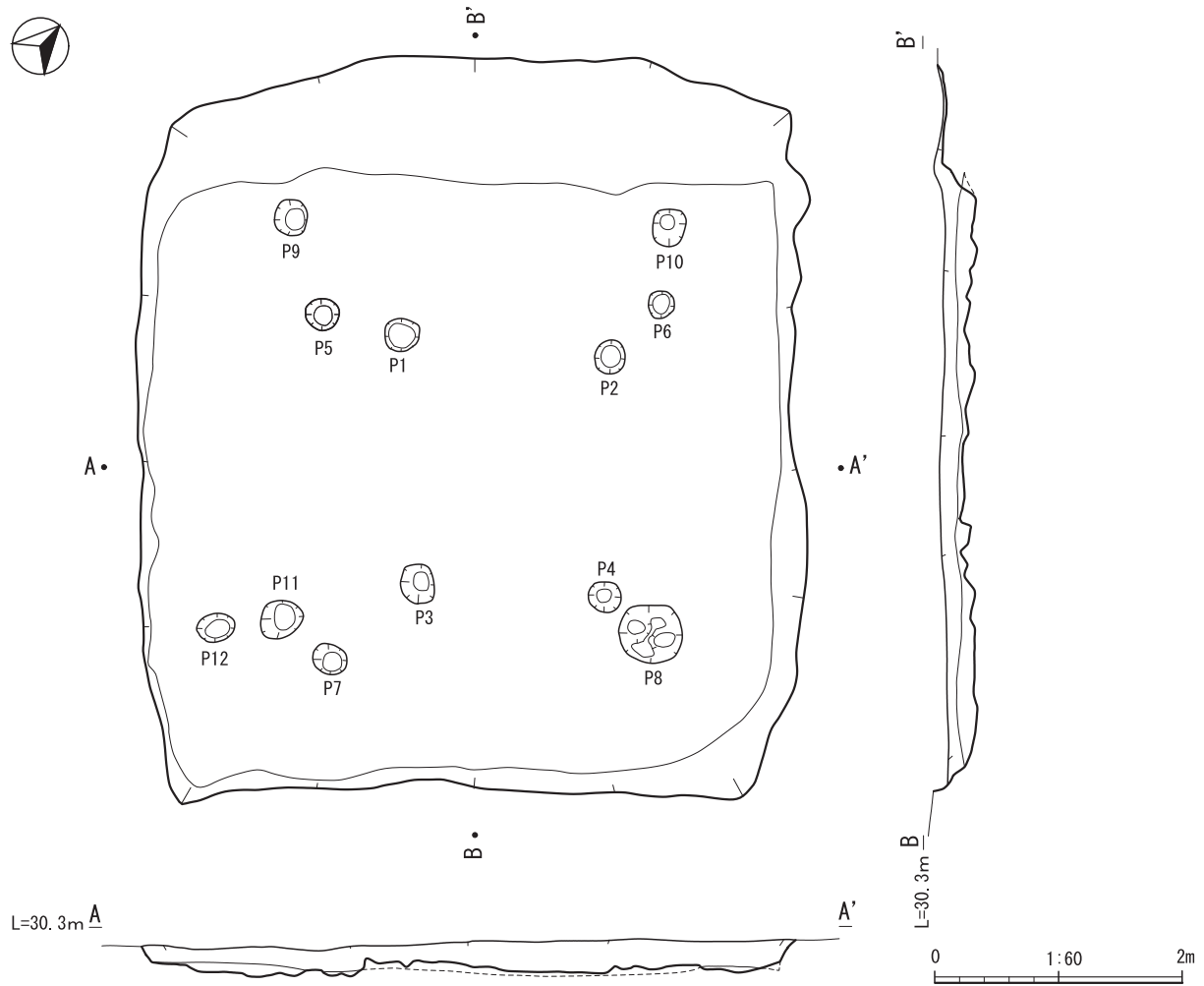
坏 (92)

1類で、在来系のものである。

イ 須恵器 (93)

須恵器は、坏蓋のみを確認した。

93は坏蓋で、口径は10cmほどと考える。表面は滑らかで、全体的に白い焼成となっている。



第24図 11号竪穴建物跡 掘方平・断面図

ウ 石器 (94・95)

石器は、石錘と砥石が認められた。

94は棒状を呈する2類の石錘である。全面に敲打痕が確認でき、特に両側面は抉れるほど使用している。

95は砥石で、正・裏・側面を使用しており、特に正・裏面の使用が著しい。正面には使用時の傷があり、その凹みには鉄分が付着する。敲打痕がわずかに確認できる。

エ 棒状礫 (96)

7点確認した。96は、器面の一部が黒化しており、鉄分が付着している。

オ 軽石

10点程認められ、長径30cm程のものもある。

4 12号竪穴建物 (SI12) (第28・29図)

(1) 検出

I - 8 区の V b 層上面で検出した。検出レベルは、30.18~30.10m である。

平面形は、5.7×5.2m の方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

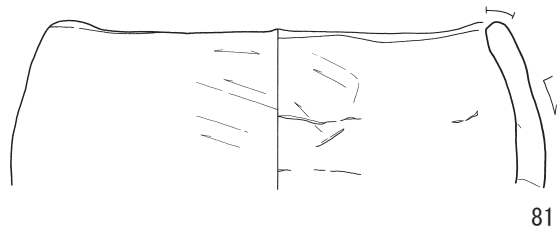
竪穴埋土は2層 (a・b) に分けられ、埋土 a は竪穴埋没土、埋土 b は貼床土である。

a : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、池田降下軽石やアカホヤ層 (VIa層) 土を含む。

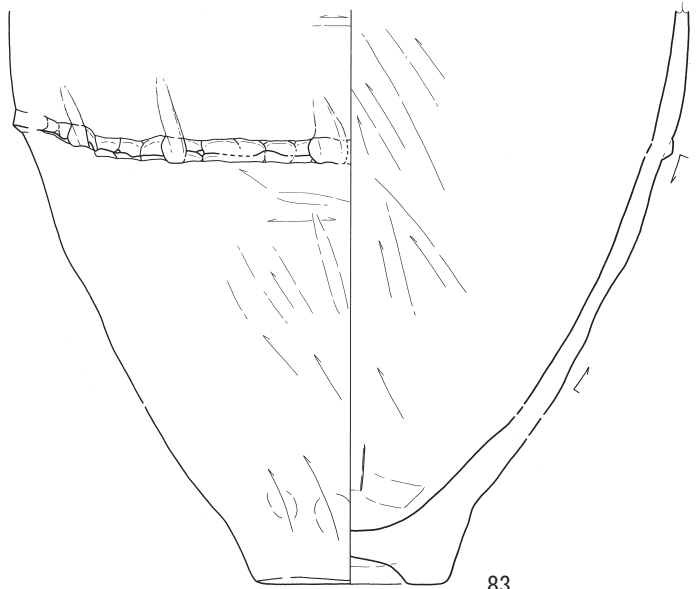
b : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロックを含む。層厚は10~15cm。

(3) 床面

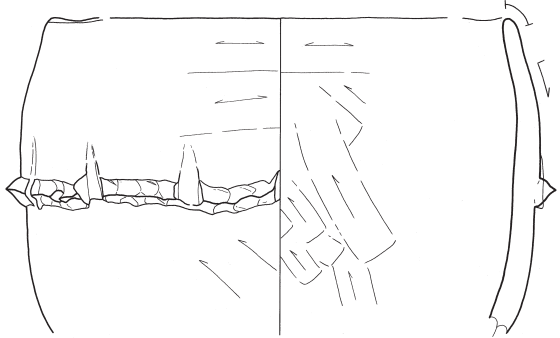
埋土掘り下げ後、埋土 b を検出し、その面を床面 (生活面) と捉えた。なお、竪穴北壁側はアカホヤ層を床面



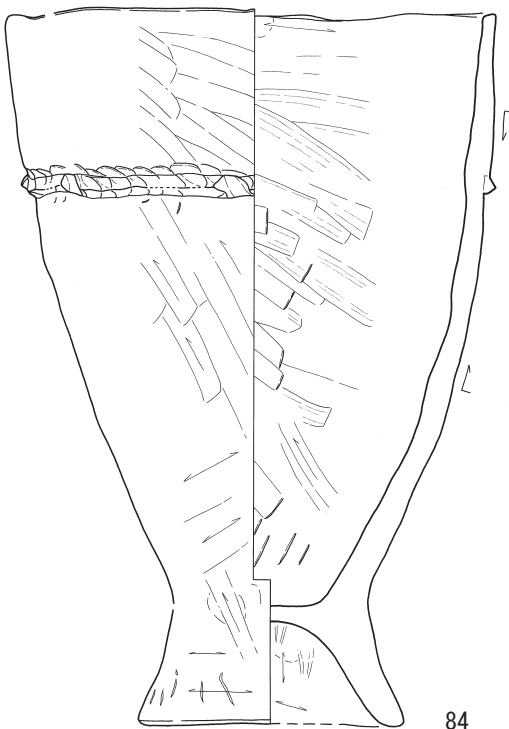
81



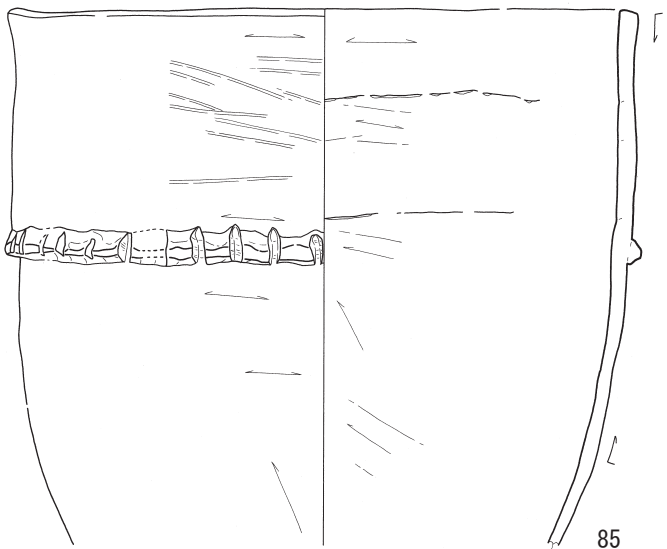
83



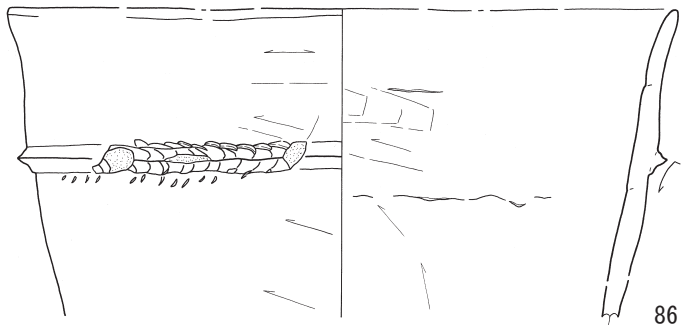
82



84



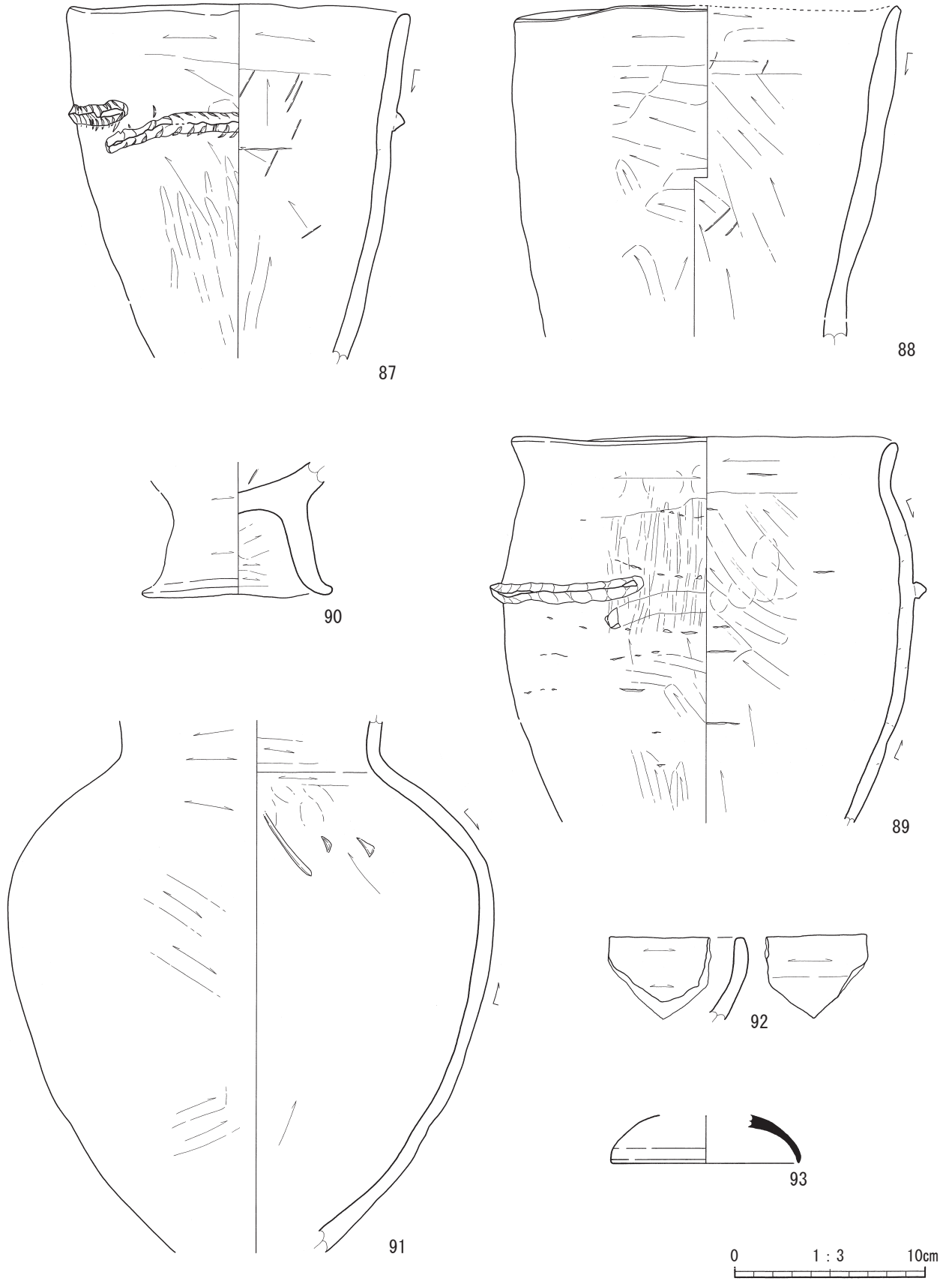
85



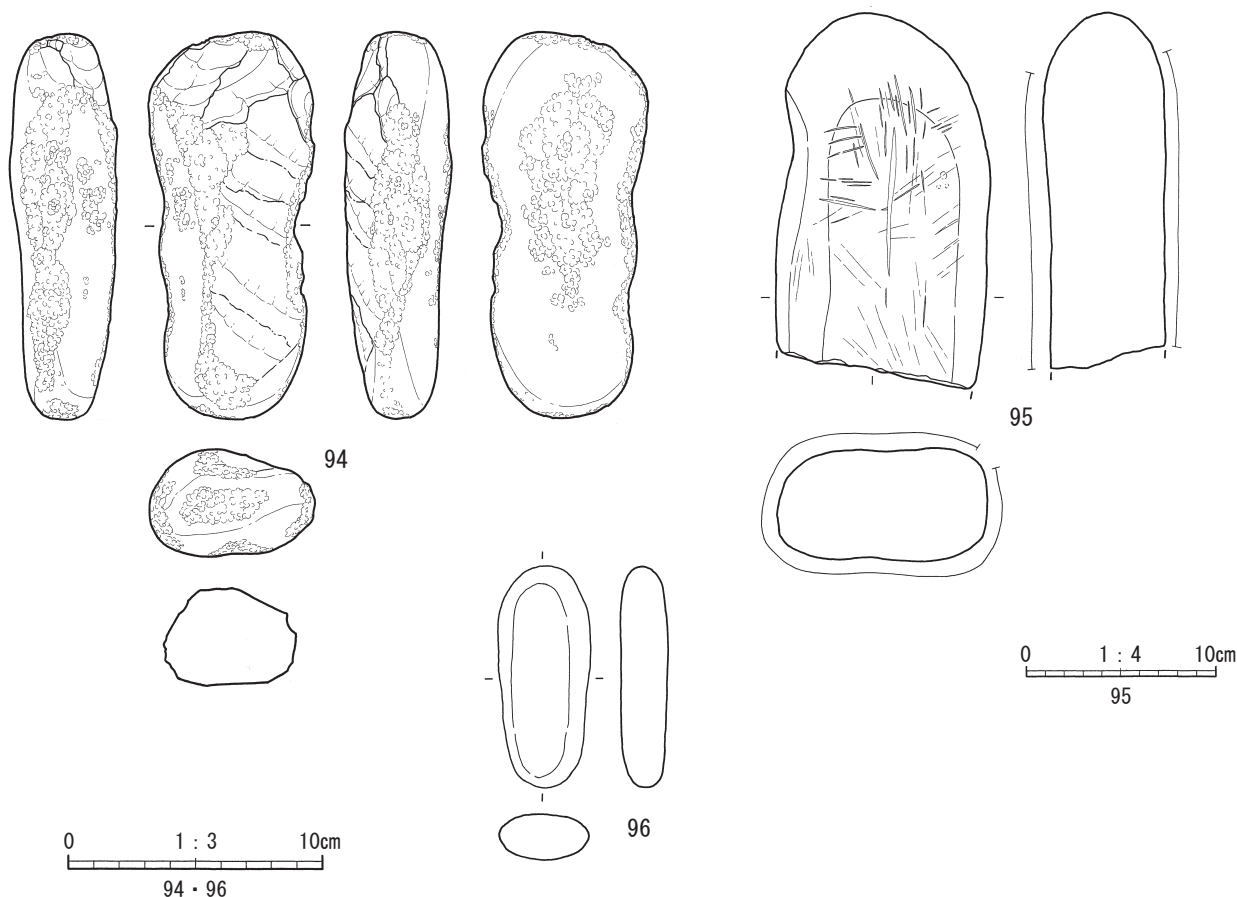
86

0 1 : 3 10cm

第25图 11号竖穴建物跡 出土遺物 (1)



第26图 11号竖穴建物跡 出土遺物（2）



第27図 11号竪穴建物跡 出土遺物（3）

にしている。

床面の検出レベルは30.02～29.98mで、遺構検出面からの深さは約20cmを測る。

硬化面の広がり確認できなかったが、部分的に残存している。

（4）炉

床面検出後、ベルト沿いにサブレンチを設定し、その部分を先に掘り下げて掘方床面を確認したため、炉を面的に把握できていない。ただし、ベルト断面では確認できたため、そこから炉の大きさを推定した。

推定平面形は、1.35×1.00mの楕円形を呈する。深さは約10cmを測る。床面はアカホヤ層で、焼けたところも認められる。

埋土は暗褐色（10YR3/4）シルト質土で、焼け締まったアカホヤブロックを多く含み、底面付近ではにぶい黄褐色（10Y/R4/3）を呈し、アカホヤブロックと黒色土が混ざった土が硬く焼け締まった部分もある。

（5）土坑

床面検出時に竪穴南壁際において土坑を確認した。平面形は、0.9×0.7mの楕円形を呈する。深さは約18cmを測り、床面はアカホヤ層である。

埋土は2層に分けられ、上層は竪穴埋土aと同一である。下層は、黒褐色（10YR3/2）シルト質土で、締まりがなく、アカホヤブロックをわずかに含む。

（6）掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した（第29図）。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは29.84mで、遺構検出面からの深さは約25cmを測る。

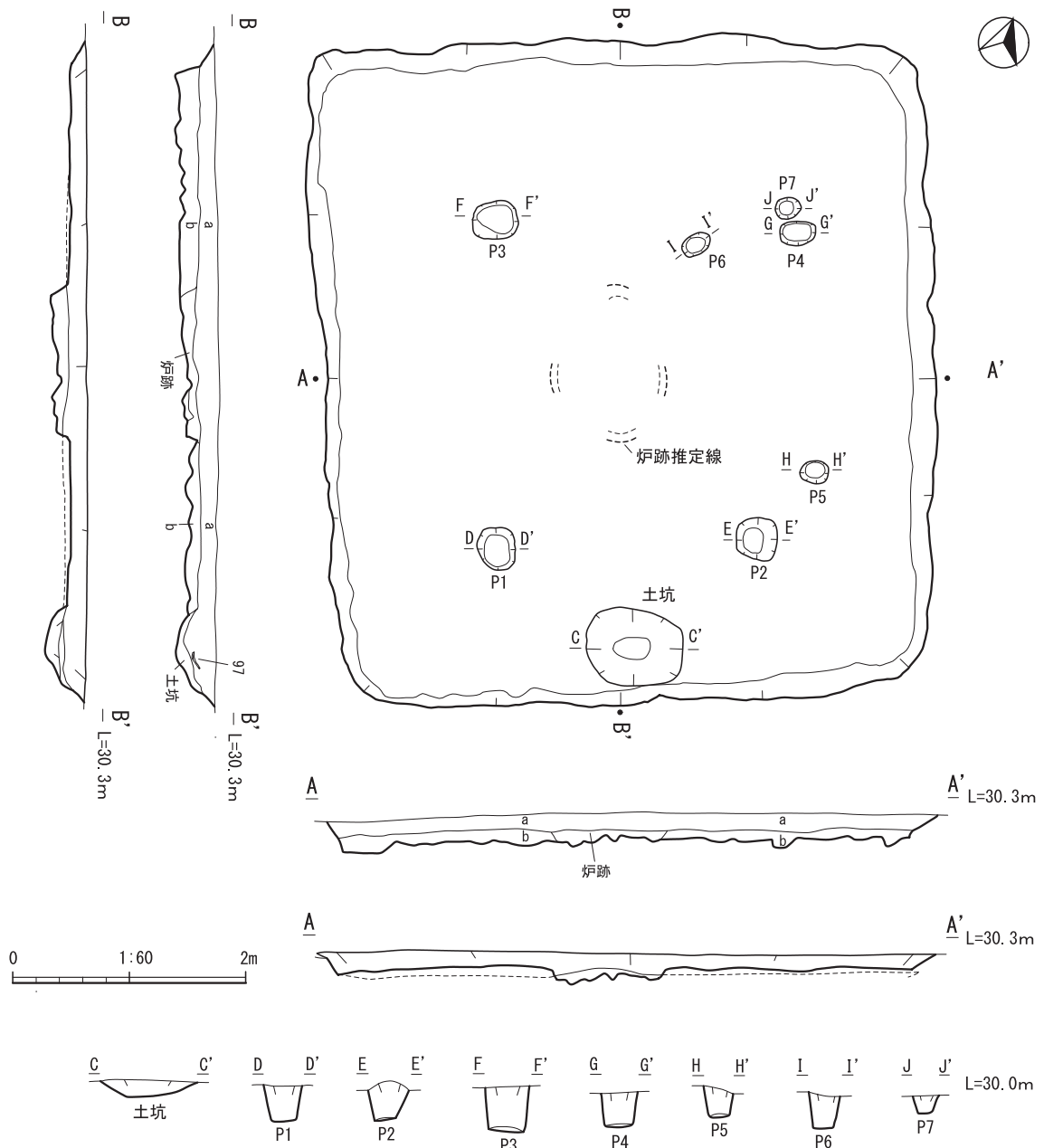
掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

（7）柱穴・ピット 柱穴・ピットは床面において確認できず、掘方床面において7基検出した。床面は全てⅦ層に達している。

埋土は黒褐色（10YR2/3）で、アカホヤ層土を含む。

各柱穴・ピットの属性（長径×短径×深さ）は以下のとおり。

- P 1 : 0.38×0.35×0.32m
- P 2 : 0.40×0.40×0.25m
- P 3 : 0.40×0.35×0.40m
- P 4 : 0.30×0.20×0.30m
- P 5 : 0.25×0.20×0.27m
- P 6 : 0.28×0.20×0.30m



第28図 12号竪穴建物跡 平・断面図

その配列から、「P1-P2-P3-P4」の4本柱建物と考える。

(8) 遺物 (第30図97~111)

遺物は、番号取上分で101点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると161点を数える (一括取上分除く)。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄滓、軽石が認められ、15点図示した。

ア 土器 (97~103)

土器は、甕、甗、坏、高坏、小型壺を確認した。

甕 (97~100)

1類 (97)

口縁部が内湾するものであるが、直行気味となる箇所もある。ユビナデ上げ刻みを施す。刻みは部分的に集中して施しており、そこから間隔をあけて刻みを施している。床着出土。

脚台 (98)

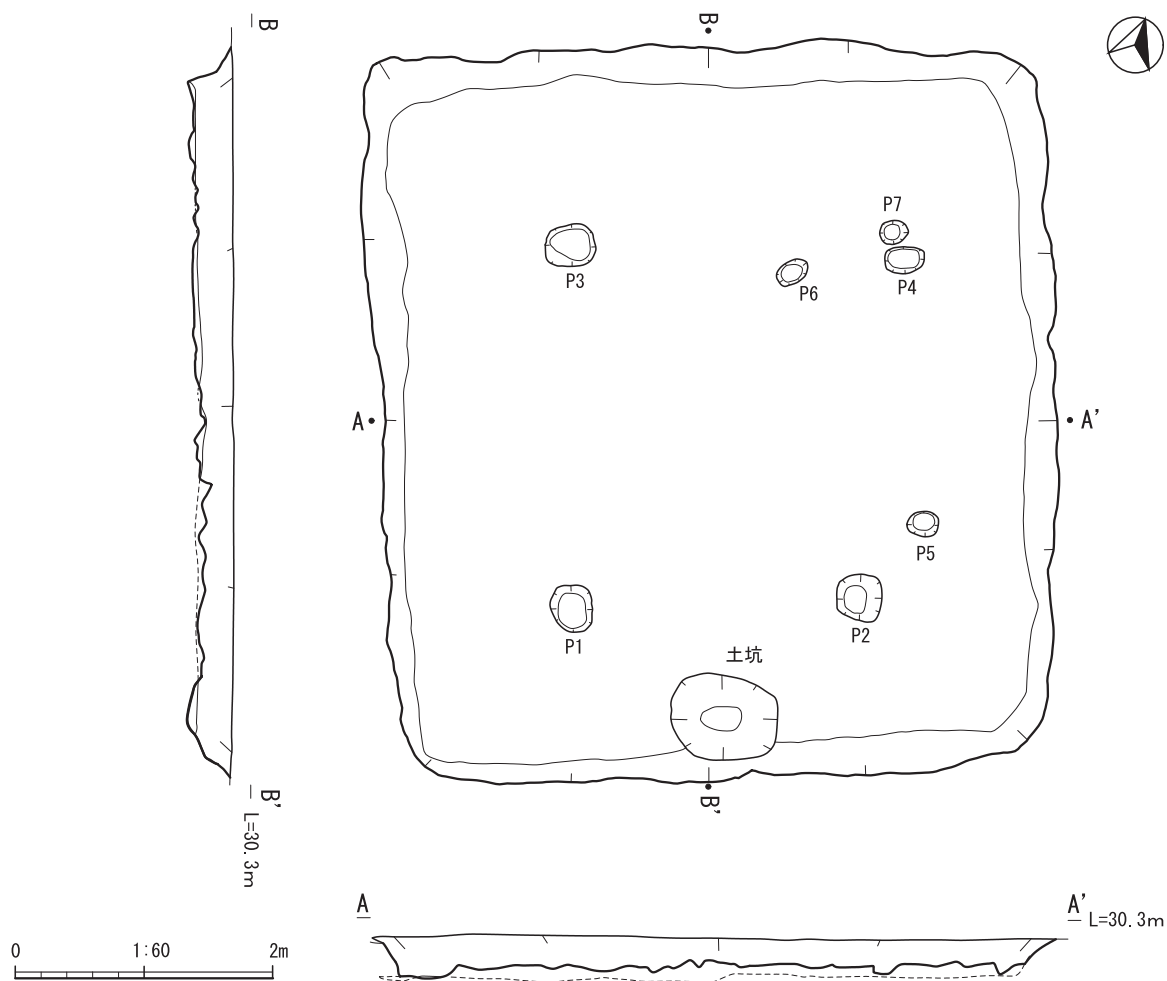
胴部と脚部の境に突帯を貼付している。

平底 (99・100)

100は、外底面に木葉痕が残る。

甗

筒抜け形の底部片を1点確認した。竪穴埋土内可能性遺物である。



第29図 12号竖穴建物跡 掘方平・断面図

坏 (101)

1類で、在来系のものである。口縁部に意図的な打ち欠きが認められる以外欠損のない完形品である。黒色処理が行われる。

小型壺 (102・103)

102は丸底を呈するもので、床着出土。

103は、口縁部と胴部の境に段が認められることから、他の埋土内出土遺物よりも時期的に古い可能性がある。

高坏

精製赤彩土器の脚部片を1点確認した。

イ 須恵器 (104・105)

須恵器は、坏蓋と甕を確認した。

104はかえりをもつ坏蓋で、つまみの有無は不明である。床着出土。

105は甕の口縁部である。形状は外反しながら端部で少し外側に膨らみ、内側につまみ上げる。表面は全体的に白く焼成されており、断面は薄い橙色である。床着出土。

ウ 石器 (109)

石器は、石鏃と砥石を確認した。

109は砥石で、穿孔が認められることから、提砥である。裏面は節理面で剥離しているが、その面も使用している。

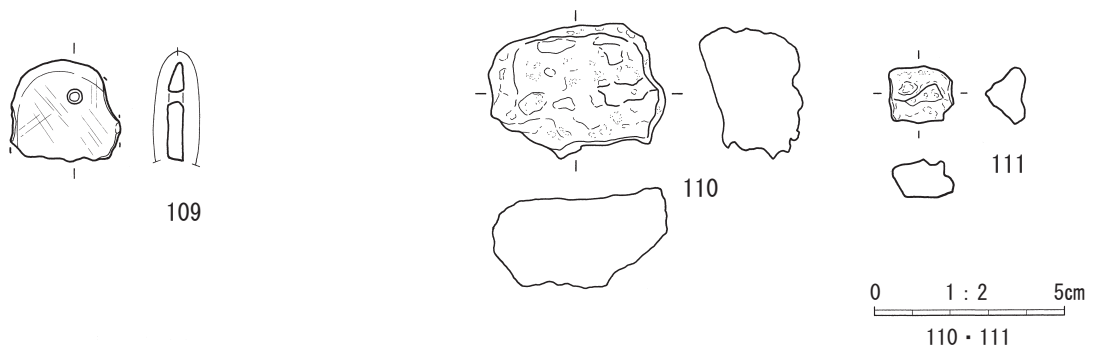
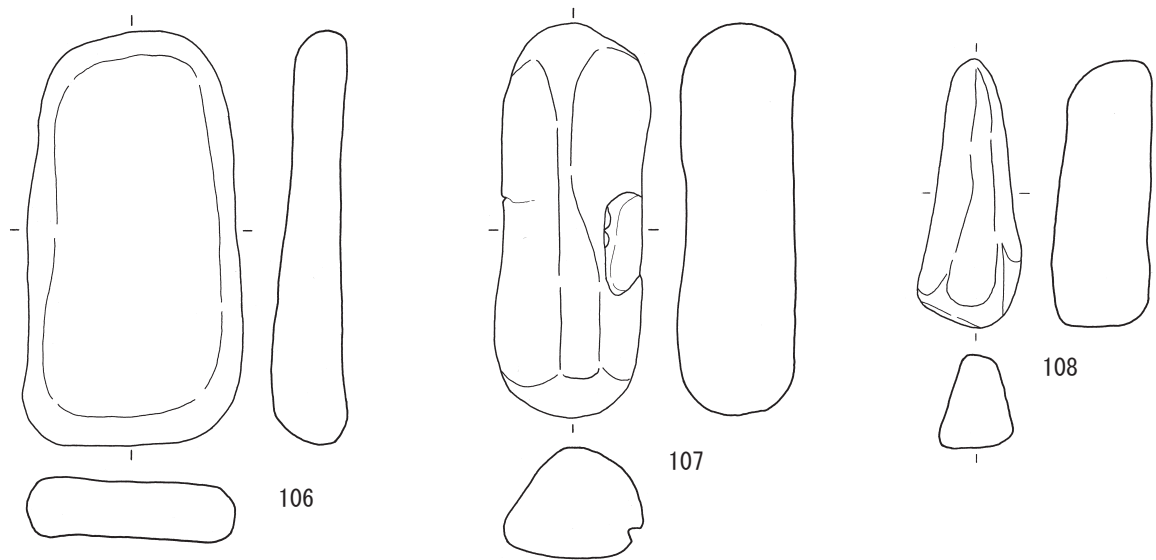
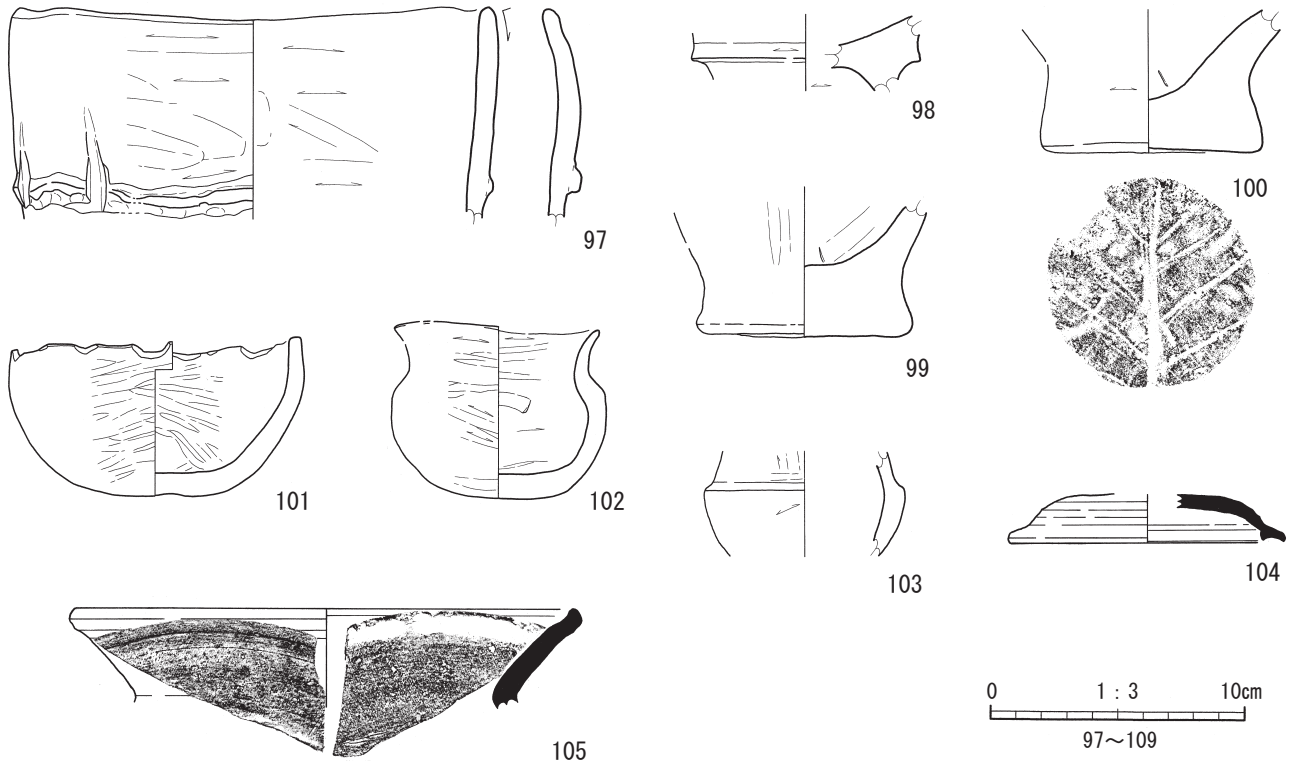
棒状礫 (106~108)

棒状礫が床面近くから13点出土している（写真図版参照）。106~108も床面近くから出土したもので、106・108は器面に鉄分が付着する。

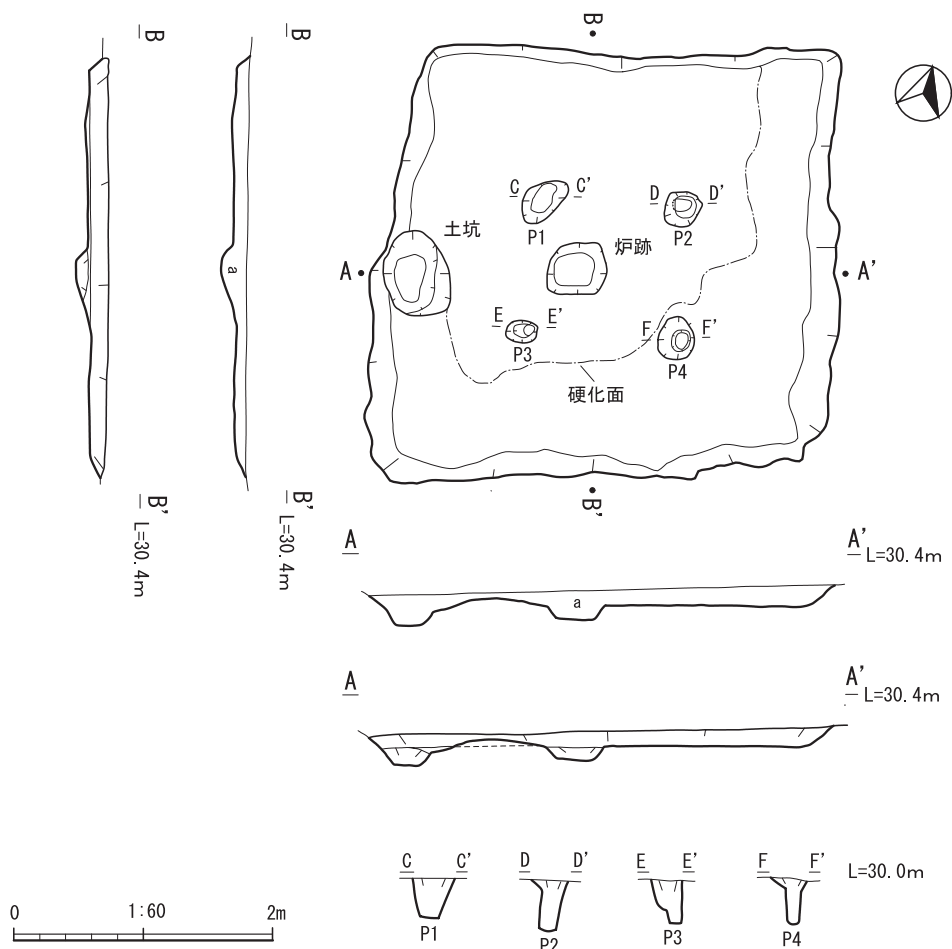
エ 鉄滓 (110・111)

110は碗型鍛冶滓で、ガラス質化している箇所がある。金属分析試料No.6である。

111は鍛冶滓と考えられるもので、金属分析試料No.10である。



第30图 12号竖穴建物跡 出土遺物



第31図 13号竪穴建物跡 平・断面図

5 13号竪穴建物 (SI13) (第31図)

(1) 検出

I - 8 区の Vb 層上面で検出した。検出レベルは、30.16~30.10m である。

平面形は、3.6×3.4m の方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は単一層 (a) で、竪穴埋没土である。

a : 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質土で、池田降下軽石やアカホヤ層 (VIa 層) 土を含む。

(3) 床面

埋土を掘り下げると、アカホヤ層土を検出した。その面の一部に硬化している箇所が認められたことから、床面 (生活面) と捉えた。

検出レベルは30.00m で、遺構検出面からの深さは約10cm を測る。

(4) 炉

竪穴中央付近に土坑があり、半裁した結果、底面が焼けていたことから炉と捉えた。

平面形は、0.45×0.40m の円形を呈する。深さは、約

10cm を測り、床面はアカホヤ層である。埋土は黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質土である。

(5) 土坑

竪穴西壁際において土坑を確認した。平面形は、0.65×0.55m の楕円形を呈する。深さは約12cm を測り、床面はアカホヤ層である。埋土は黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質土である。

(6) 柱穴

柱穴は床面において4基検出した。埋土は黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質土である。各柱穴の属性 (長径×短径×深さ) は以下のとおり。

P 1 : 0.45×0.25×0.32m

P 2 : 0.28×0.25×0.38m

P 3 : 0.25×0.18×0.33m

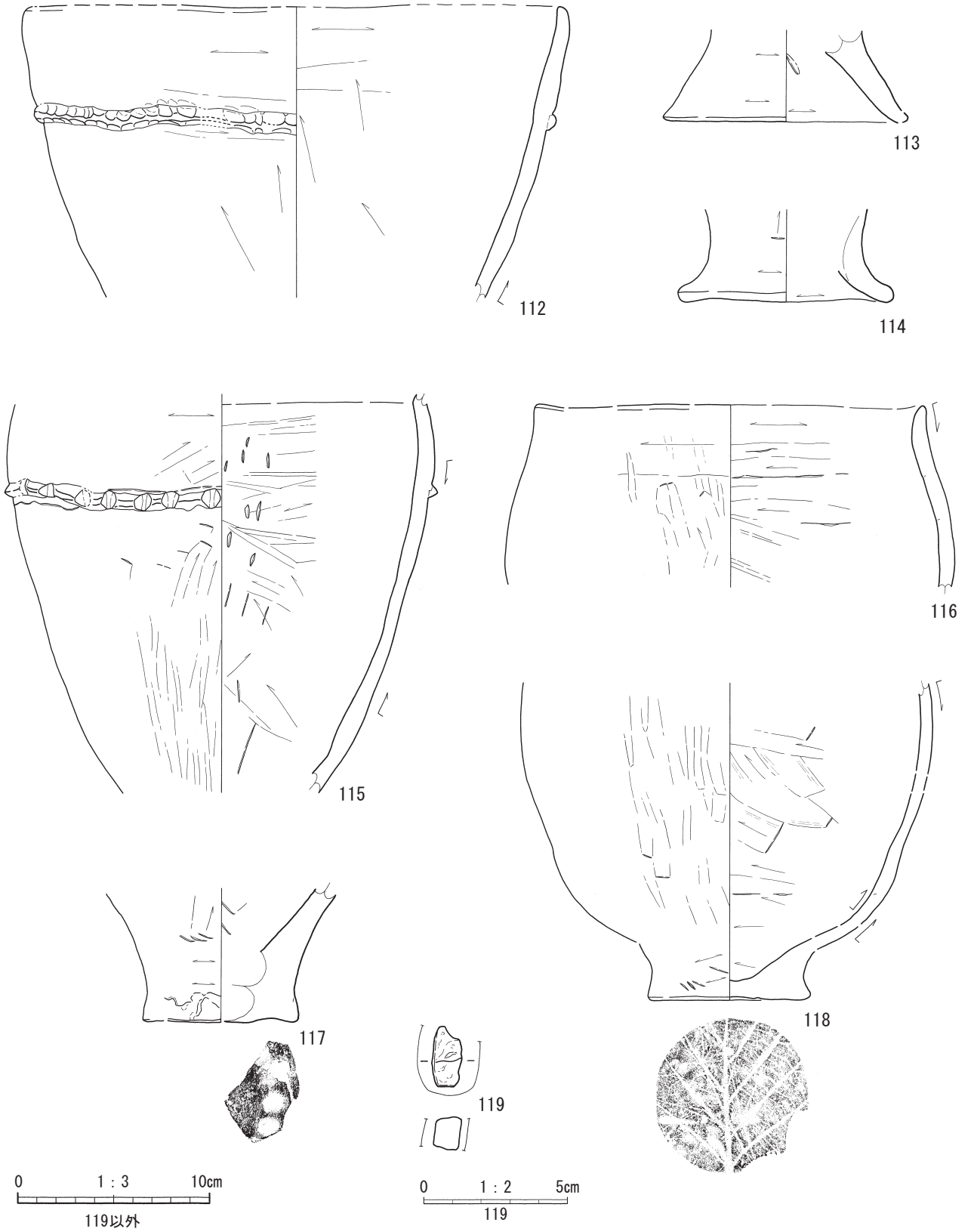
P 4 : 0.35×0.30×0.35m

その配列から、4本柱建物と考える。

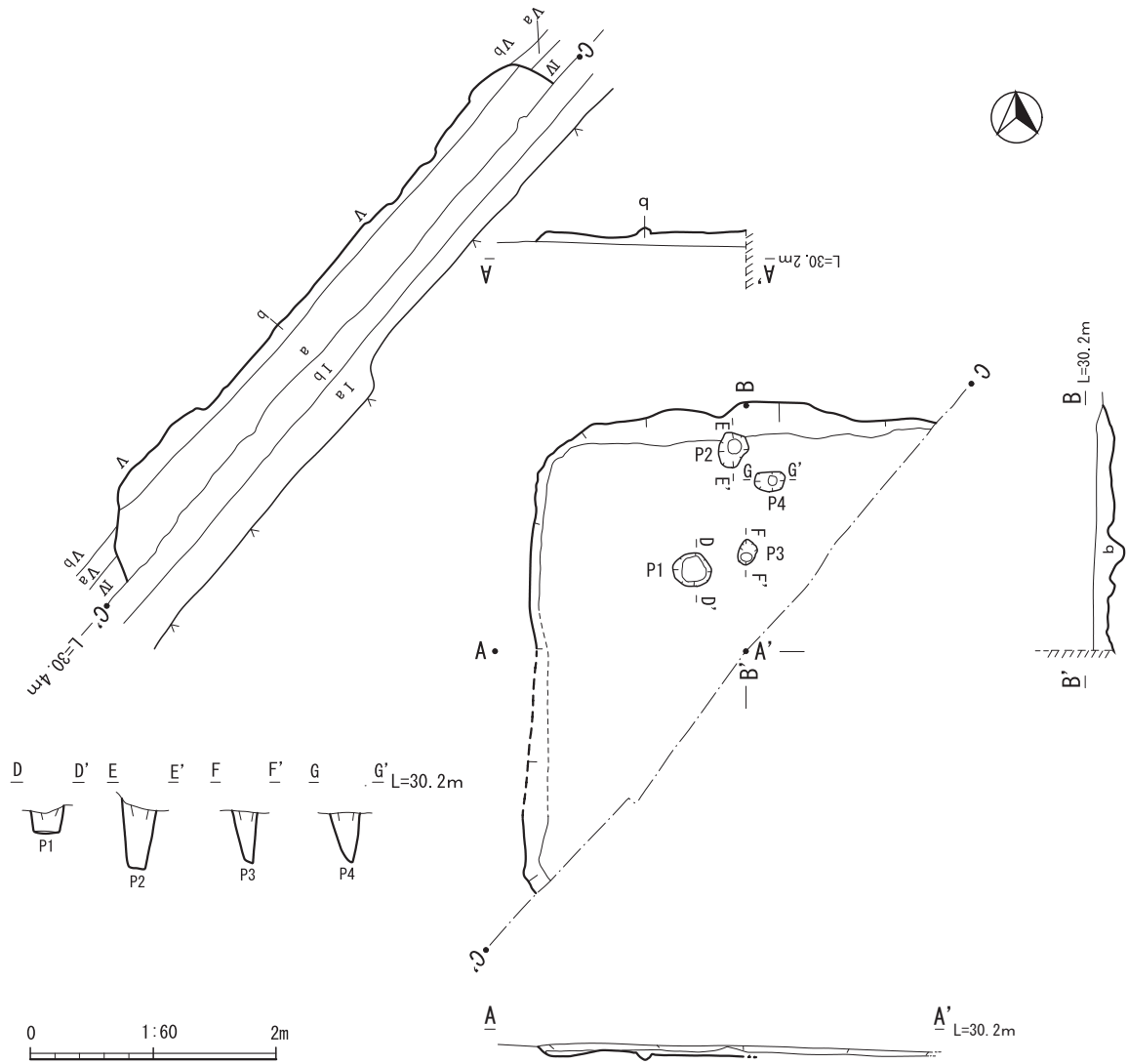
(7) 遺物 (第32図112~119)

遺物は、番号取上分で69点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると189点を数える (一括取上分除く)。

土器、棒状礫、鉄滓、軽石が認められ、8点図示した。



第32图 13号竖穴建物跡 出土遺物



第33図 14号竪穴建物跡 平・断面図

ア 土器 (112~118)

土器は、甕、甑、高坏、坏を確認した。

甕 (112~118)

3類 (116)

口縁端部でやや外反するもの。突帯が確認できない。

118と同一個体の可能性が高い。

4類 (112・115)

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。

112は、ススが外面に厚く付着する。

115は、肥厚部分が突帯下位に認められる箇所もある。

口縁端部で外反するようである。指頭による刻みを密に施す。内面には、調整工具の打ち込み痕が明瞭に残る。

胎土に金色ウンモを含む。

脚台 (113・114)

114は接合痕で剥離しており、胎土に金色ウンモを含む。

平底 (117・118)

117は、外底面に成形時のユビオサエ痕が巡る。底端部外面に粘土貼付痕が残る。

118は、重みで潰れたように胴下半が膨らむ。外底面に木葉痕が残る。

甑

筒抜け形の底部片を1点確認した。

高坏

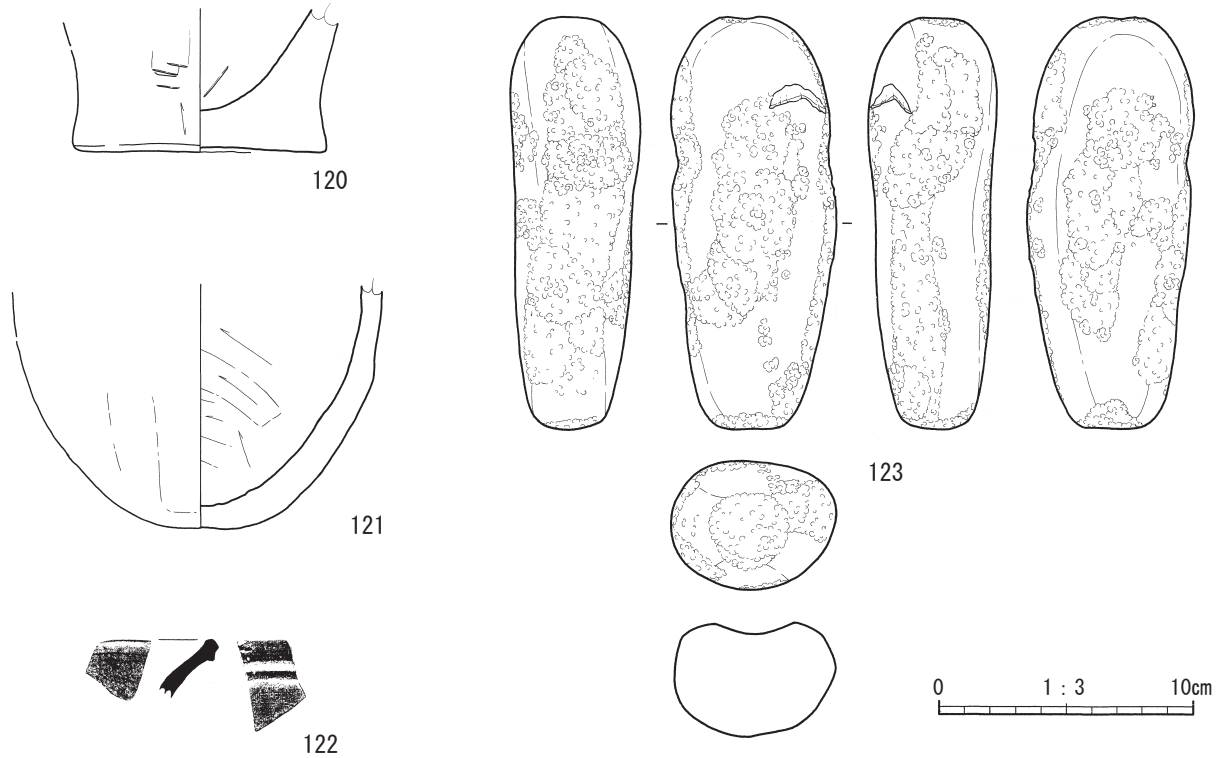
精製赤彩土器片を1点確認した。

坏

口縁部片を3点確認した。

イ 鉄滓 (119)

製錬滓の可能性があるので、三面にハツリ痕が認められる。



第34図 14号竖穴建物跡 出土遺物

ウ 棒状礫

2点確認した。

エ 軽石

長径5cm程のものが1点認められた。

6 14号竖穴建物 (SI14) (第33図)

(1) 検出

H-9区調査区南壁際のVb層上面で検出した。検出レベルは、30.10~30.06mである。東南部の大半は調査区外に延びる。

平面形は、(3.5)×(3.2)mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竖穴埋土は2層(a・b)に分けられ、ともに竖穴埋没土である。埋土aは調査区南壁において確認している。

埋土bは貼床土の可能性も有り得たものの、遺物が出土していることから、その可能性は低いと考えた。

a : 黒褐色(10YR2/2)シルト質土で、池田降下軽石やアカホヤ層(VIa層)土を含む。

b : 黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、アカホヤ層土を多く含む箇所もある。

(3) 床面

埋土を掘り下げるとアカホヤ層土を検出した。一部にやや硬化しているところもあったことから、その面を床

面(生活面)と捉えた。なお、床面は凸凹が目立ち深く掘られている箇所もあることから、薄く貼床をして平らに仕上げている可能性もある。

検出レベルは30.02~29.98mで、遺構検出面からの深さは約20cmを測る。

(4) 生活施設

炉や土坑などの生活施設は確認できなかった。

(5) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは床面において4基検出した。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト質土。各柱穴・ピットの属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

P 1 : 0.30×0.25×0.23m

P 2 : 0.30×0.25×0.50m

P 3 : 0.20×0.15×0.45m

P 4 : 0.25×0.15×0.45m

その位置からP 1が柱穴の可能性がある。

(6) 遺物(第34図120~123)

遺物は、番号取上分で42点を数える(一括取上分除く)。

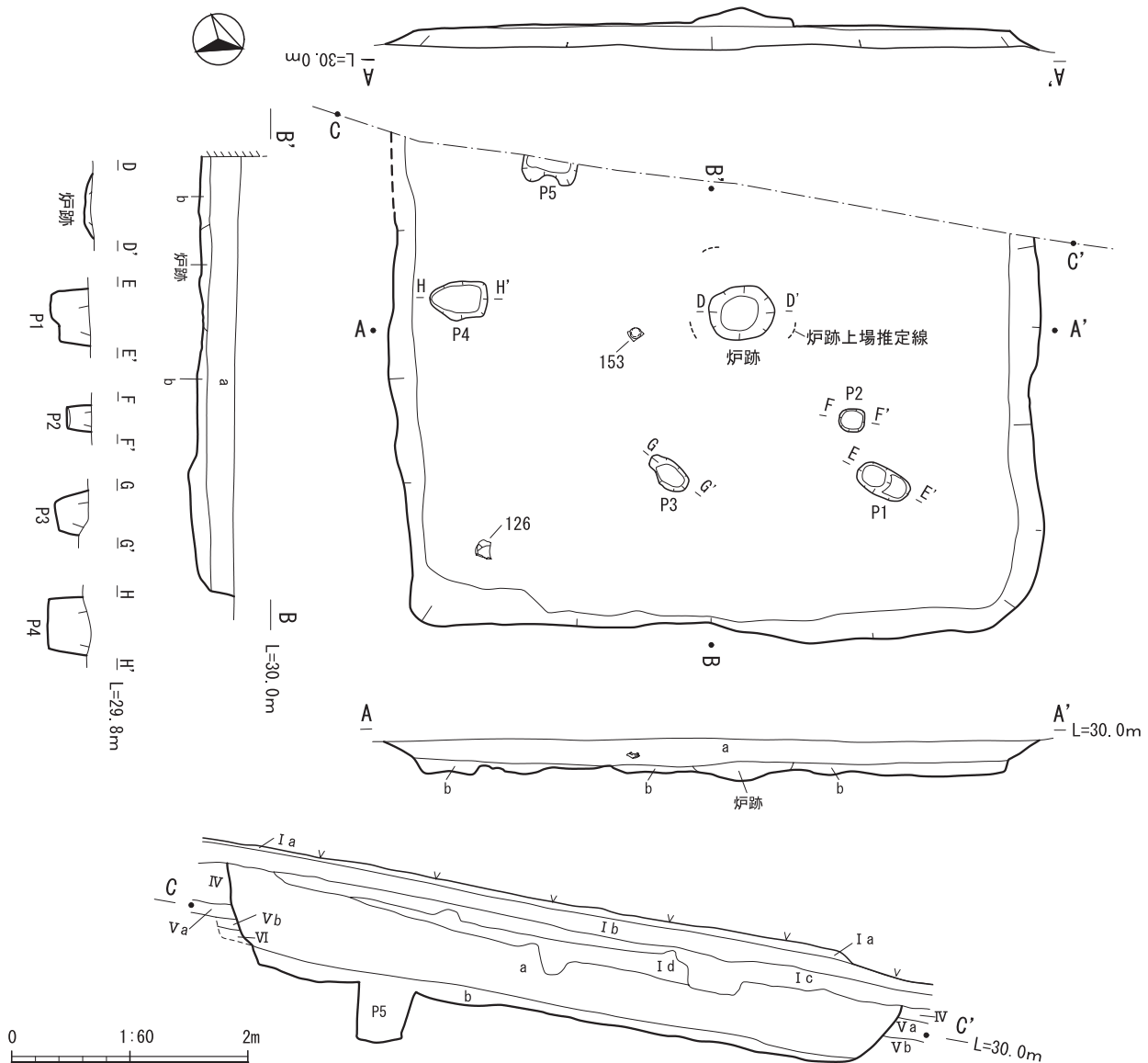
土器、須恵器、石器、棒状礫が認められ、4点図示した。

ア 土器(120・121)

土器は、甕、壺、坏を確認した。

甕(120)

平底で、床着出土。



第35図 15号竪穴建物跡 平・断面図

壺 (121)

丸底を呈するもので、床着出土。

坏

小片を4点確認した。

イ 須恵器 (122)

須恵器は、口縁部片を1点確認した。

122は提瓶、あるいは薄手の甕の口縁部と考えられる。

外面に突帯が1条施される。

ウ 石器 (123)

石器は、石鏃を確認した。123は棒状を呈する2類である。正面が凹むほど、両側面は抉れるほど使用されている。

エ 棒状礫

1点確認した。

7 15号竪穴建物 (SI15) (第35・36図)

(1) 検出

G・H-7区の調査区西壁際のVb層上面で検出した。検出レベルは、29.92~29.90mである。西側の一部は調査区外に延びる。

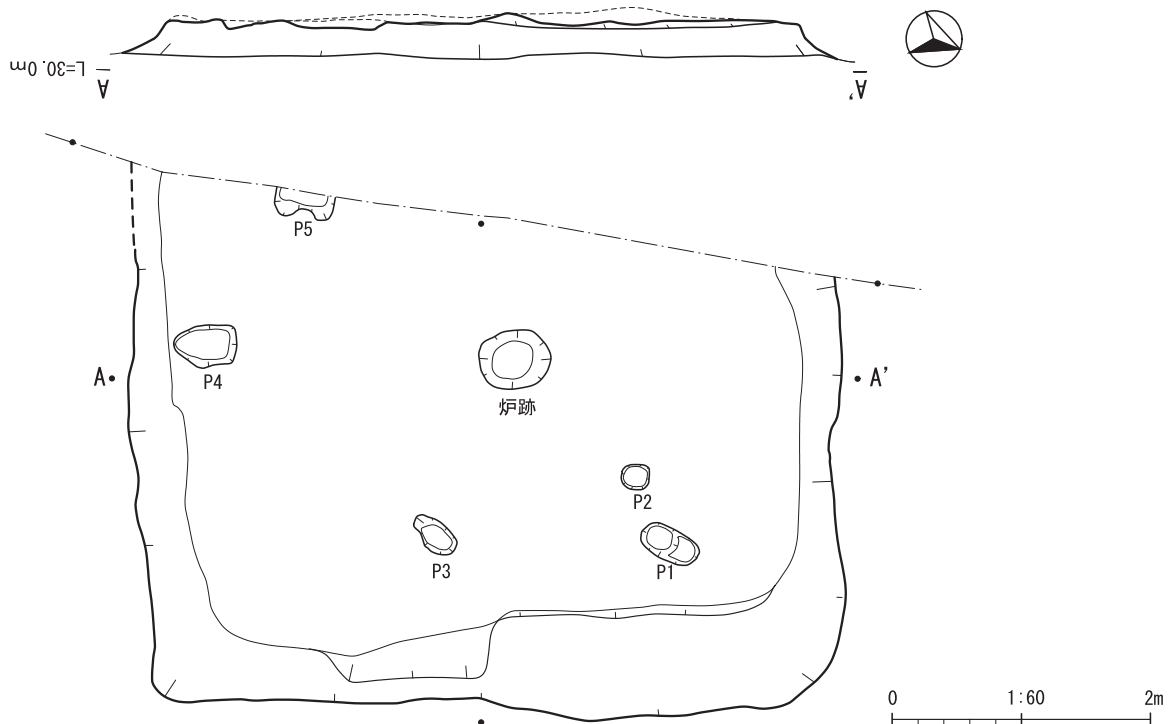
平面形は、5.5×(4.1)mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は2層(a・b)に分けられ、埋土aは竪穴埋没土、埋土bは貼床土である。

a: 黒褐色(10YR2/2)シルト質土で、締まりが弱い。アカホヤ層(VIa層)土や池田降下軽石を含む。

b: 黒褐色(10YR2/2)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロックを含む。層厚は5~15cm。



第36図 15号竪穴建物跡 掘方平・断面図

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土bを検出し、その面を床面（生活面）と捉えた。

床面の検出レベルは29.66～29.70mで、遺構検出面からの深さは20～25cmを測る。硬化面は確認できなかった。

(4) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した（第36図）。東側はベッド状に残り、二段となっている。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは29.52mで、遺構検出面からの深さは約35cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(5) 炉

床面検出後、ベルトを残したまま貼床土の掘り下げを行ったため、結果的にベルト内に存在していたことになった炉跡を床面では検出できなかった。そのため、炉は掘方床面で検出した。なお、ベルト断面では炉を確認できたため、炉の上場ラインを一部推定できた。

掘方床面検出時の平面形は、0.55×0.45mの円形を呈する。深さは10cmを測り、床面はアカホヤ層で、一部焼けている。

埋土は褐色(10YR4/6)シルト質土で、締まりがなく、さらさらしている。

(6) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは床面では確認できず、掘方床面において5基検出した。

埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト質で、締まりが弱い。各柱穴・ピットの属性（長径×短径×深さ）は以下のとおり。

- P 1 : 0.50×0.25×0.34m
- P 2 : 0.20×0.23×0.20m
- P 3 : 0.40×0.20×0.27m
- P 4 : 0.50×0.33×0.38m
- P 5 : 0.43×(0.20)×0.45m

(7) 遺物（第37～40図124～160）

遺物は、番号取上分で357点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると607点を数える（一括取上分除く）。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄器、軽石、石製品が認められ、38点図示した。

ア 土器（124～151）

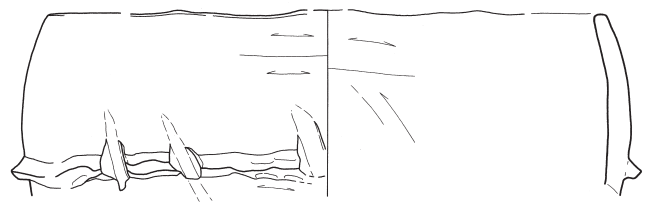
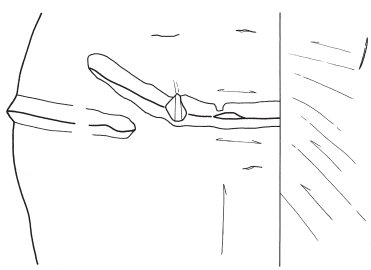
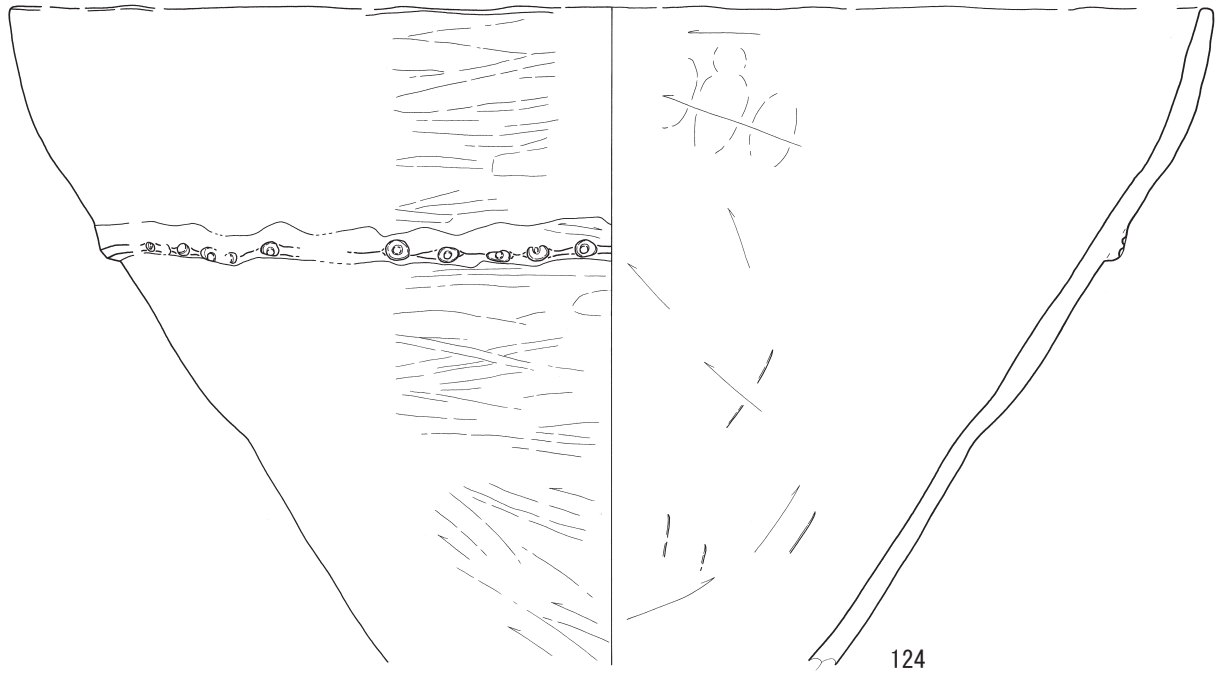
土器は、甕、甑、壺、鉢、坏、高坏、小型壺を確認した。

甕（124～137）

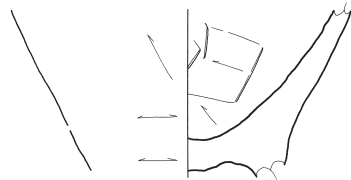
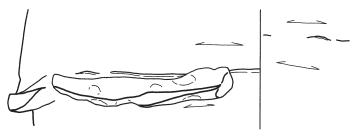
1類（124～126）

口縁部が内湾するもの。

124は口径が大きいもので、突帯に竹管文を施す。黄橙色系を呈し、胎土に火山ガラスを多く含む。



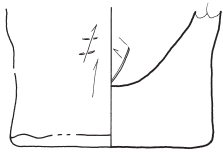
128



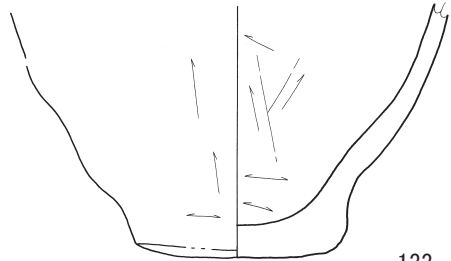
132



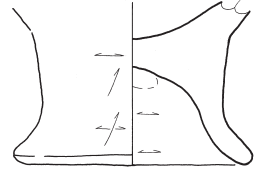
134



136



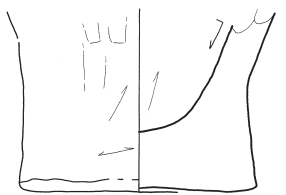
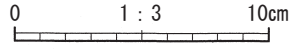
138



140

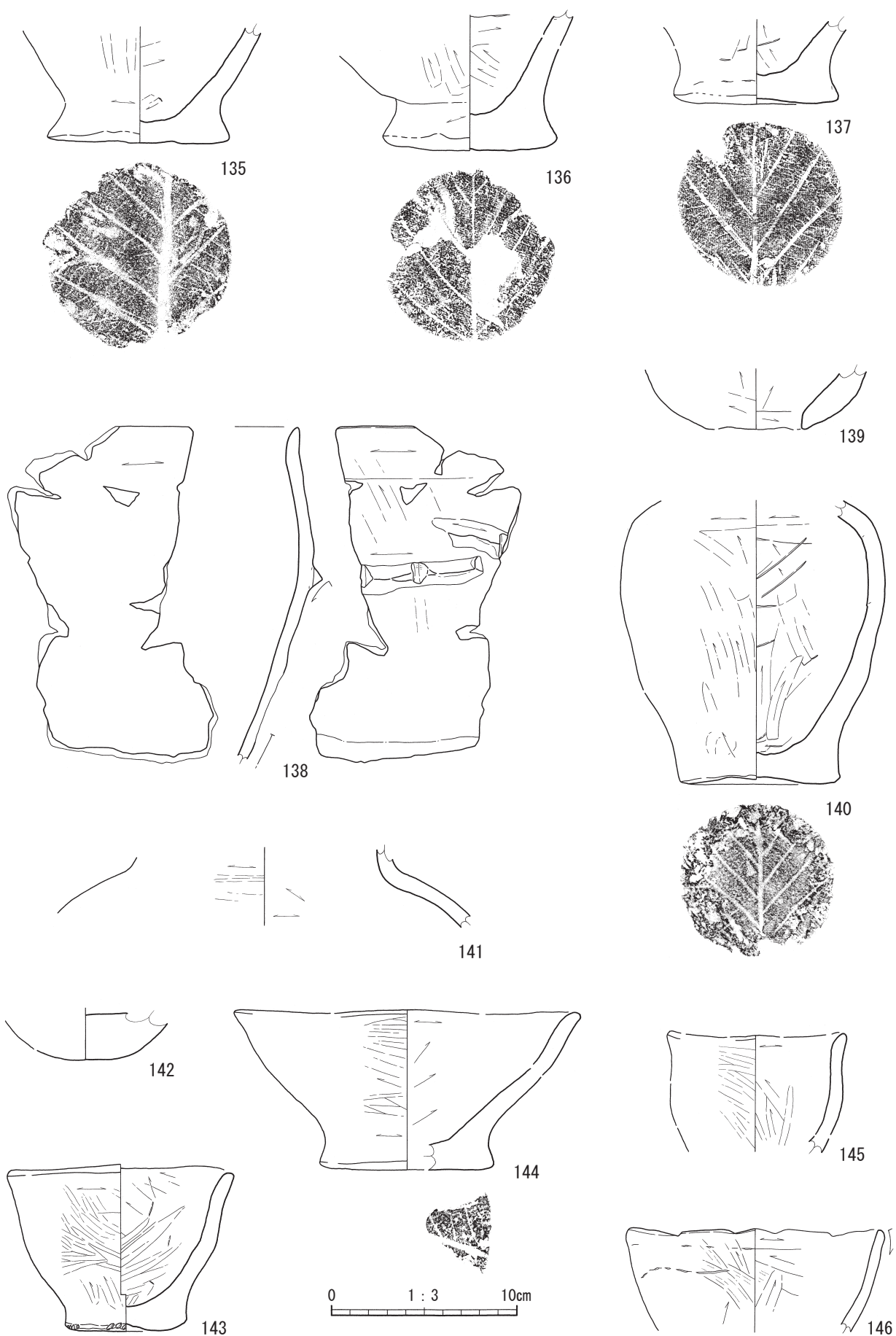


142

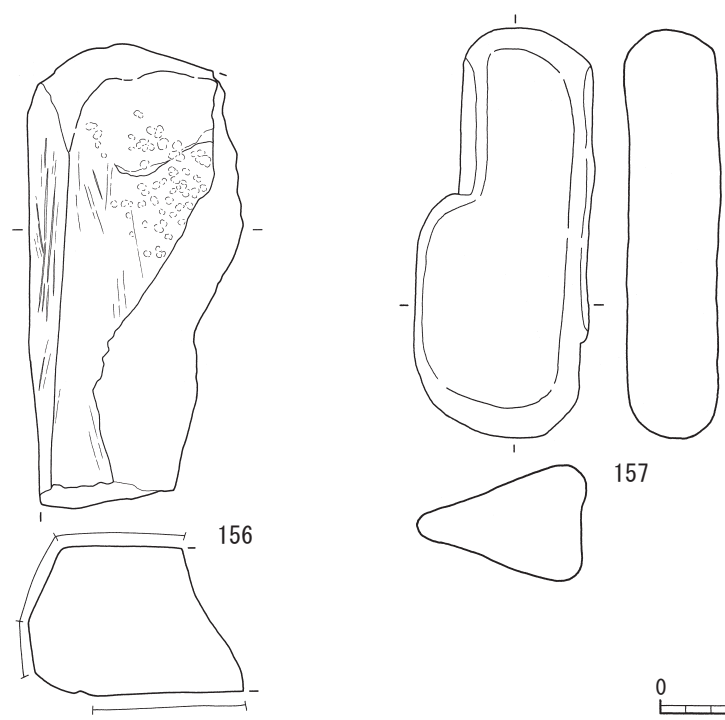
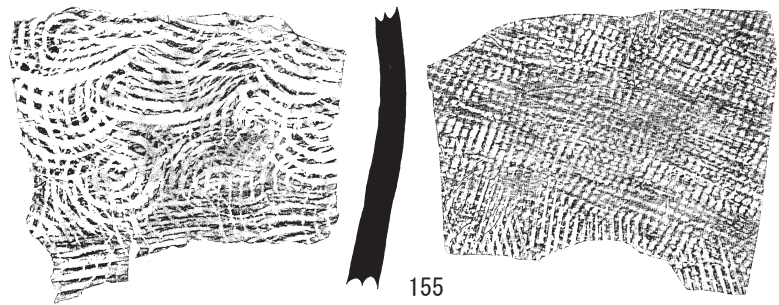
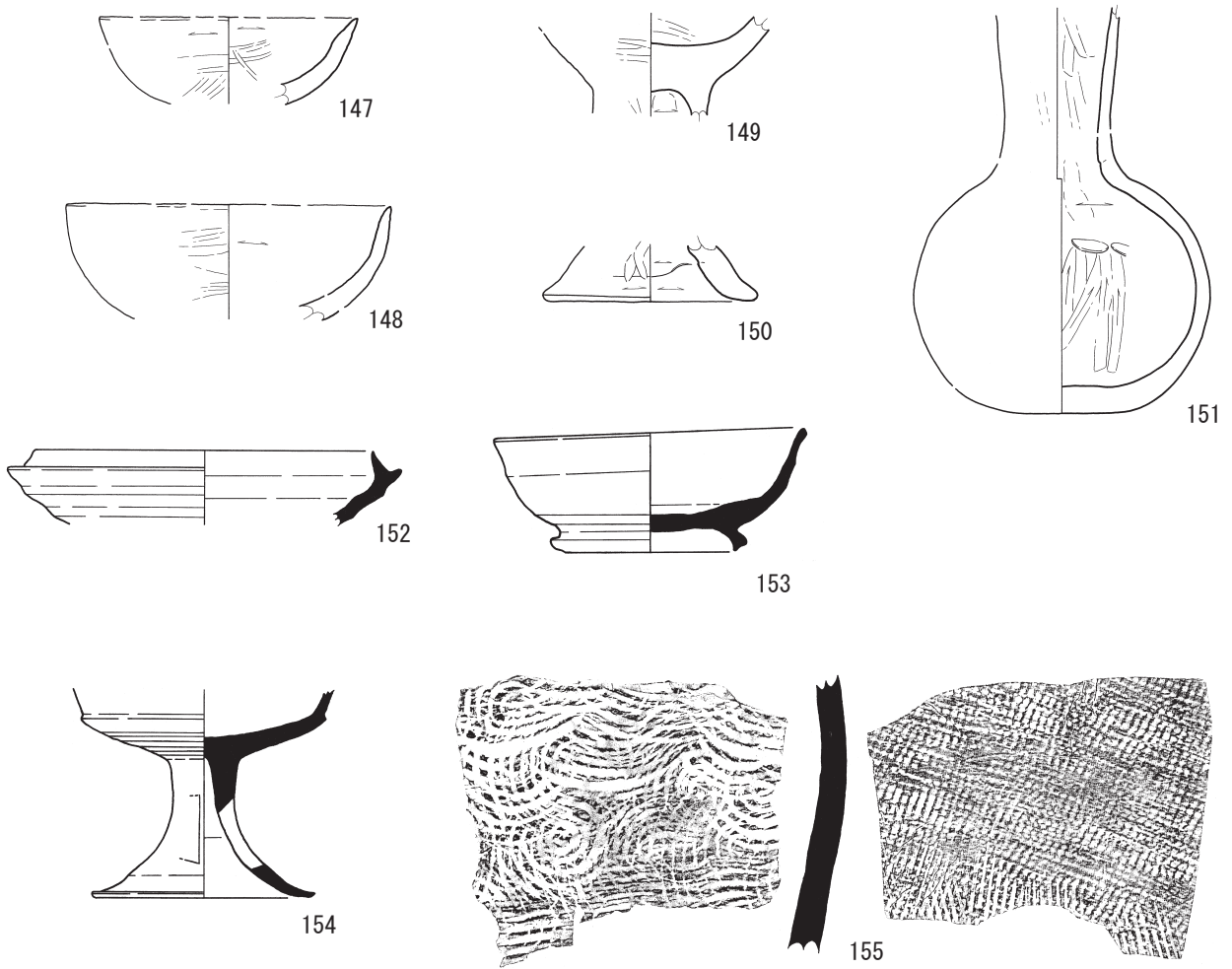


144

第37图 15号竖穴建物跡 出土遺物 (1)



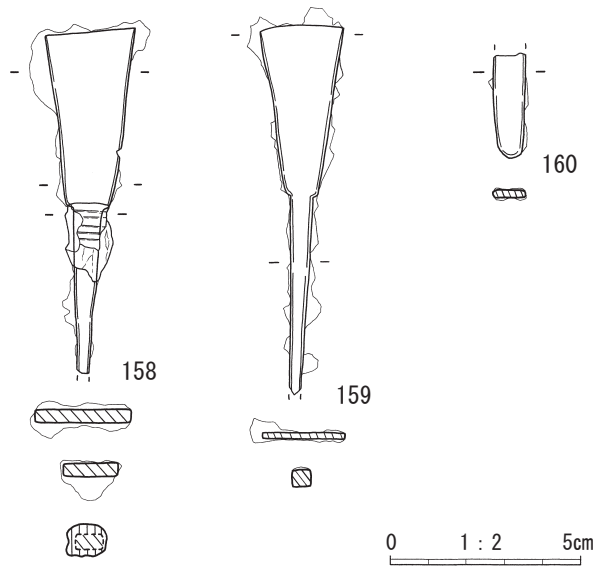
第38图 15号竖穴建物跡 出土遺物(2)



0 1 : 4 10cm
156

0 1 : 3 10cm
156以外

第39图 15号竖穴建物跡 出土遺物 (3)



第40図 15号竪穴建物跡 出土遺物（4）

125・126は突帯にユビナデ上げ刻みを施す。125は胎土に金色ウンモを含む。126は床着出土。

4類 (127)

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。肥厚部分が段をなしており、突帯上位に確認できる。

脚台 (128~130)

128は、内面に調整工具の打ち込み痕が明瞭に残る。

平底 (131~137)

132は、外底面に豆粒状の圧痕が残る。135~137は、外底面に木葉痕が残る。136は、器形が歪んでいる。137は底端部に粘土を貼付し、張り出しを作出している。

甑 (138・139)

138は、胴部下位に白色物質が付着する。139は筒抜け形である。

壺 (140~142)

140は壺としたが、壺形を呈する甕の可能性もある。外底面に木葉痕が残る。141は突帯のない頸部である。

鉢 (143~146)

全て厚手のつくりである。143は口縁部の一部が欠損している以外は完形である。外面底端部に工具痕が認められる。146は、外面にススが付着する。

坏 (147・148)

147は1類で、在来系のものである。黒色処理が行われる。

148は2類で、胎土の特徴から搬入品と考える。

高坏 (149・150)

149は、黒色処理が行われる。150は胎土の特徴から搬入品と考える。

小型壺 (151)

須恵器の長頸壺を模倣した可能性がある。胴部内面に調整工具の打ち込み痕が残る。

イ 須恵器 (152~155)

須恵器は、坏身、高坏、甕、提瓶を確認した。

152は坏身で、表面はゆるやかな凹凸がある。床着出土。

153は坏身で、残存状態が良好な坏Bである。体部はややS字状に外反し、高台端部は内側に折り込む。床面に近いところから出土した（写真図版参照）。

154は高坏である。坏部には沈線が巡り、脚端部は少し外側にはね上げる。器高から小型高坏と考えられ、一段二方向の透かしが施される。

155は甕の胴部である。内面の同心円文当て具痕と外面の格子目タタキが明瞭にみられる。

ウ 石器 (156)

石器は、砥石と石槌を確認した。

156は砥石である。正・裏・左側・上面に磨面があり、特に正・左側面が顕著である。左側面には使用時の傷が残る。正面には、敲打痕がわずかに残る。裏面は、鉄分が付着する。

エ 棒状礫 (157)

15点認められた。157は大型のもので、断面が三角形状である。

オ 鉄器 (158~160)

鉄器は、鉄鏃を確認した。

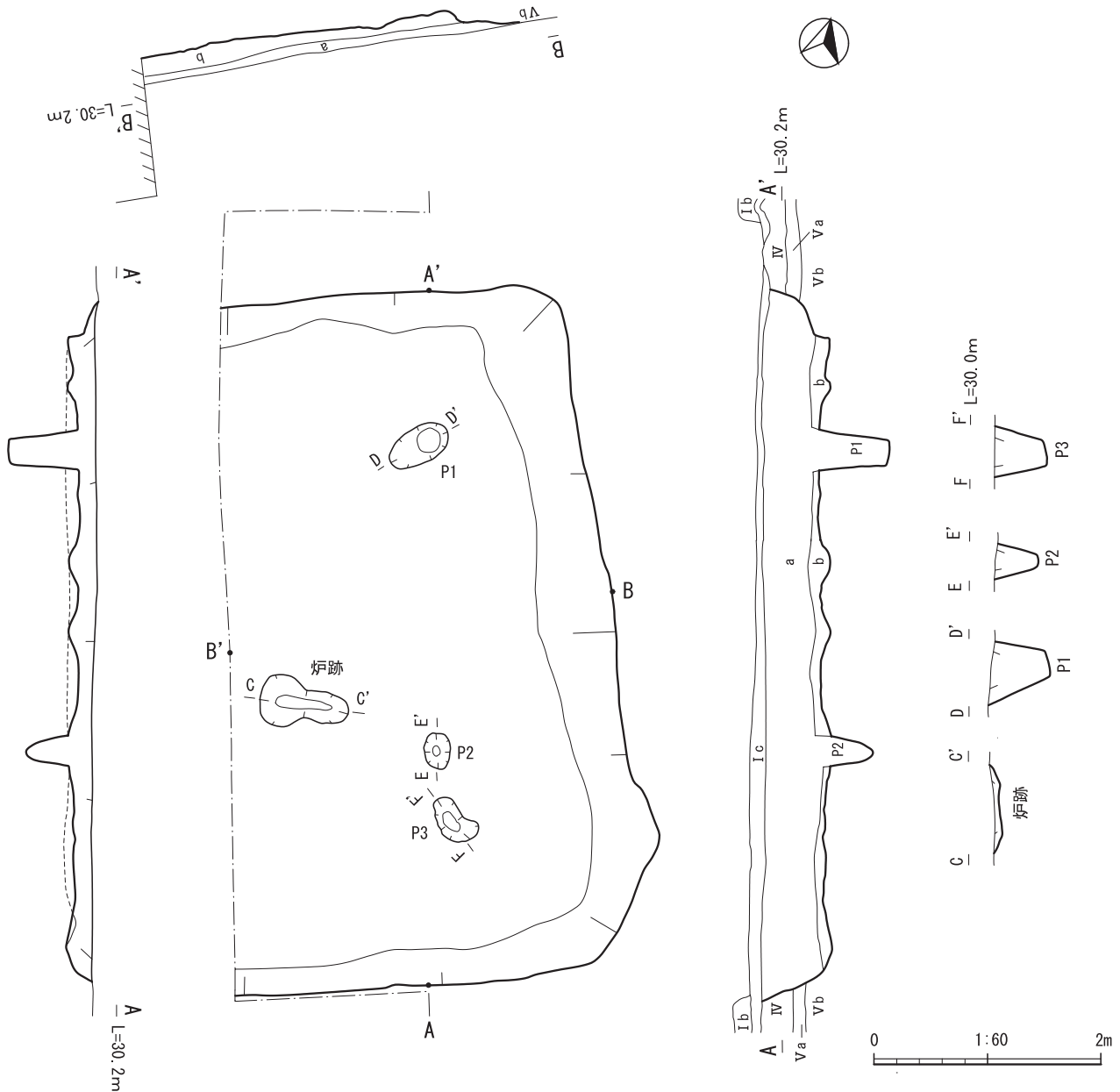
158・159は方頭斧箭式である。158は、矢柄が口巻き部下端1cmまで残る。ナデ関である。159は、直角関である。160は、鉄鏃の茎部の可能性がある。

カ 軽石

長径30cm程の、赤化したものが10点程認められた。

キ 石製品 (第135図764)

勾玉と考えられるもので、竪穴埋土内可能性遺物である。詳細は第9節で述べる。



第41図 16号竪穴建物跡 平・断面図

8 16号竪穴建物 (SI16) (第41図)

(1) 検出

H・I-7区の調査区西壁際で検出した。表土を剥いだ後、掘り下げ直後から遺物が多数出土したため、遺構の存在は想定できたものの、平面プランを確実に把握できたのはVb層上面であった。西半部は調査区外に延びており、調査範囲を一部拡張して掘り下げを行っている。検出レベルは、30.04mである。

平面形は、6.0×(3.6)mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は2層(a・b)に分けられ、埋土aは竪穴

埋没土、埋土bは貼床土である。

a : アカホヤ層 (VIa層) 土や池田降下軽石を含む。

b : アカホヤブロックを含む。層厚は10~20cm。

なお、a・bともに色調の観察記録漏れである。

(3) 掘方

ベルトを残して床面を把握しないまま掘方床面を検出した。そのため、床面下場は記録できていない。したがって、第41図の下場は掘方床面のものとなる。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは29.78mで、遺構検出面からの深さは約20cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(4) 床面

上記のとおり、床面は面的に確認していないものの、ベルト断面では確認できた。そのレベルは29.90～29.98 mで、遺構検出面からの深さは約5 cmを測る。

(5) 炉

掘方床面において炉の可能性が高い土坑を確認した。平面形は、0.80×0.45mのひょうたん形を呈する。深さは約8 cmを測り、床面はアカホヤ層である。なお、埋土所見の記録漏れである。

(6) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは、掘方床面において3基検出した。各柱穴・ピットの属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。なお、埋土所見などは記載漏れである。

P 1 : 0.55×0.30×0.52m

P 2 : 0.30×0.23×0.38m

P 3 : 0.45×0.23×0.46m

その配列から、4本柱建物と考える。

(7) 遺物(第42～52図161～260)

遺物は、番号取上分で1,361点、堅穴埋土内可能性遺物を含めると1,900点を数える(一括取上分除く)。これら遺物はまとめて出土しており、堅穴廃絶後に一括廃棄された可能性が高い。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄器、鉄滓、軽石が認められ、100点図示した。

ア 土器(161～236)

土器は、甕、甑、壺、高坏、鉢、坏を確認した。

甕(161～208)

1類(161～168)

口縁部が内湾するもの。内湾の度合いは様々である。

161は突帯にユビナデ上げ刻みを広い間隔で施す。粘土紐による器面の凹凸が顕著で、器形も歪む。

162は突帯にユビナデ上げ刻みを施す。一部床着出土。

164は、突帯の刻み間隔が狭い。胎土に金色ウンモを含む。165は黄橙色系の色調を呈する。

166は、口縁端部に白色物質が付着する。絡縄突帯にヘラ状工具による刻みを施すが、全体の1/4には刻みが施されていない。

167は外面に接合痕が目立ち、薄手のつくりである。

168は突帯に竹管文を施し、外面に接合痕が目立つ。外底面に木葉痕が残る。黄橙色系の色調を呈する。

2類(169～174)

口縁部が直行するもの。

169は、突帯の刻み間隔が狭く、胎土に金色ウンモを含む。

170は、口縁端部に白色物質が付着する。胴部外面には、製作時に器面をナデ付けた痕跡が残る。

171は、外面に接合痕が目立つ。

3類(175～181)

口縁端部でやや外反するもの。

175は、口縁部に白色物質が付着する。

178は口縁端部と突帯の間隔が広く、突帯にユビナデ上げ刻みを施す。胎土に金色ウンモを含む。

179は脚台をもつもので、胎土に金色ウンモを含む。一部床着出土。

180は口縁端部に白色物質が付着する。外面に接合痕が目立つ。外底面に木葉痕がわずかに残る。

181は口縁端部に粘土紐を貼付し、突帯状を呈する。

4類(182～185)

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。

182は口縁部外面に粘土板を貼付して肥厚させ、その直下に突帯を貼付する。突帯にユビナデ上げ刻みを施す。

185は突帯に浅い刻みを狭い間隔で施す。

5類(186～188)

口縁端部で外湾するもの。

186・187は、口縁端部に白色物質が付着する。186は、突帯の一部分にのみ竹管文を4つ施す。

6類(189～192)

胎土や器形、器面調整から搬入品あるいは搬入品の可能性が高いもの。

189の外面は、タテナデ調整後、口縁部にヨコナデ調整を行う。190の外面は、タテケズリ調整後、口縁部にヨコナデ調整を行う。口縁端部に白色物質が付着する。

191は、口縁部が緩やかな逆「L」字状を呈し、長胴で、丸平底を呈する。外面に接合痕が目立つ。胴下半部にタタキ痕がわずかに残る。胎土に頁岩類の小円礫を多量に含むことから、宮崎平野部からの搬入品である。

192は胴部が球形となるもので、口縁端部外面に粘土紐を貼付し、肥厚させている。

脚台(193～198)

長脚のものや低脚のものなど、様々である。198は接合痕で割れている。

平底(199～208)

外面はタテ工具ナデ調整あるいはタテケズリ調整を行い、器面調整工具の打ち込み痕が残るものが多い。

202・203・205～208は、外底面に木葉痕が残る。204は何らかの圧痕が残る。206は、器形が歪んでいる。

207はやや上げ底気味のため、中央付近は木葉痕が不明瞭である。

208は胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品である。

甑(209～213)

全て筒抜け形である。

209・211は胴部外面に白色物質が付着する。白色物質の下端径は、209が17.5cm、211が19.0cmである。211は突帯に竹管文を施す。

210は、器高より口径が大きいもので、外面に接合痕

が目立つ。

212は口縁部のみだが、その傾きから甗と判断した。突帯に竹管文を施す。

壺 (214~218)

頸部に突帯を施すものや突帯を施さないものがある。底部は丸平底を呈する。

214は胎土に金色ウンモを含む。215・216は同一個体で、器面があばた状に剥離し、部分的に砂が固着している。

高坏 (219~221)

219は、口縁部が直行気味である。221は、口縁部が外反する。219・221ともに脚台径が大きく、脚端部で外湾している。221の内外面には、製作時に発生したひび割れを補修するための粘土貼付痕が認められる。

220は、219・221より小型で、胎土も異なる。なお、精製赤彩土器の破片も確認できた。

鉢 (222~228)

全て厚手のつくりである。大きさや形態にバリエーションがある。223・224は、内面に丁寧なナデ調整を行うことから、鉢の底部と考えた。228は欠損のない完形品である。

坏 (229~236)

232・233・235・236は1類で、在来系のものである。232は、外底面にヘラ記号がある。233は、平面が楕円形を呈する。

229・230・231・234は2類で、搬入品の可能性が高いものである。229は平底となる。231・234の外表面は、口縁端部にヨコナデ調整を行うことで、凹んでいる。

イ 須恵器 (237~242)

須恵器は、坏蓋、坏身、壺、甕を確認した。

237・238はかえりをもつ坏蓋である。238は、つまみの痕跡もみられる。扁平なつくりで、表面は自然釉によって吸着した砂粒で凸凹している。床着出土。

239・240は坏身である。239は、立ち上がりが短く内傾する。240は坏Gである。

241は頸部が広口の壺である。肩部には自然釉がかかっている。15号堅穴埋土内可能性遺物と接合している。

242は甕の胴部である。外面は灰被りになっており、調整が確認できない。

ウ 石器 (243~248)

石器は、打製石斧、石鎚、砥石を確認した。

打製石斧 (243)

両側面に抉りの入ったヘラ形を呈する。

石鎚 (244~246)

244は、棒状を呈する2類で、正面に凹みがある。

245・246は断面が扁平となる3類である。245は周縁に敲打痕があり、被熱により赤化している。246も赤化し

ている。

砥石 (247・248)

247は正・裏・下面を顕著に使用しており、正・裏面は敲打後磨っている。器面には、使用時の傷が残る。

248は正・裏・側面を顕著に使用しており、使用時の傷が残る。器面に鉄分が付着する。

エ 棒状礫

19点確認した。

オ 鉄器 (249~257)

鉄器は、鉄鏃、刀子、棒状工具などを確認した。

249~251は鉄鏃である。249・250は方頭斧箭式で、ナデ関である。251は、刃部が欠損しており、ナデ関である。

252は棒状工具あるいは鉄鏃の茎部と考えられる。

253~256は刀子である。255はややねじれている。

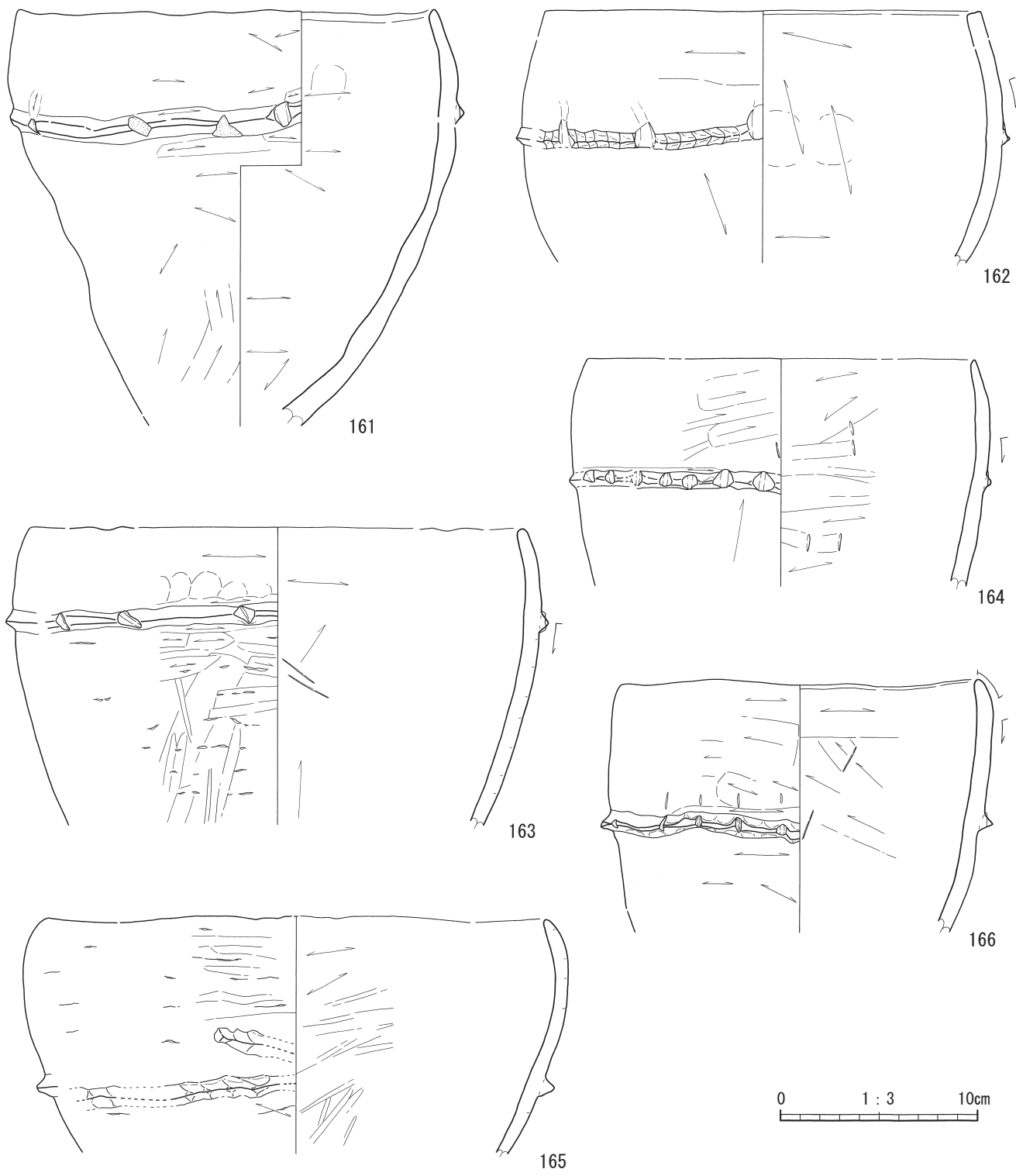
257は鍛冶の際の残片と考えられる。

カ 鉄滓 (258~260)

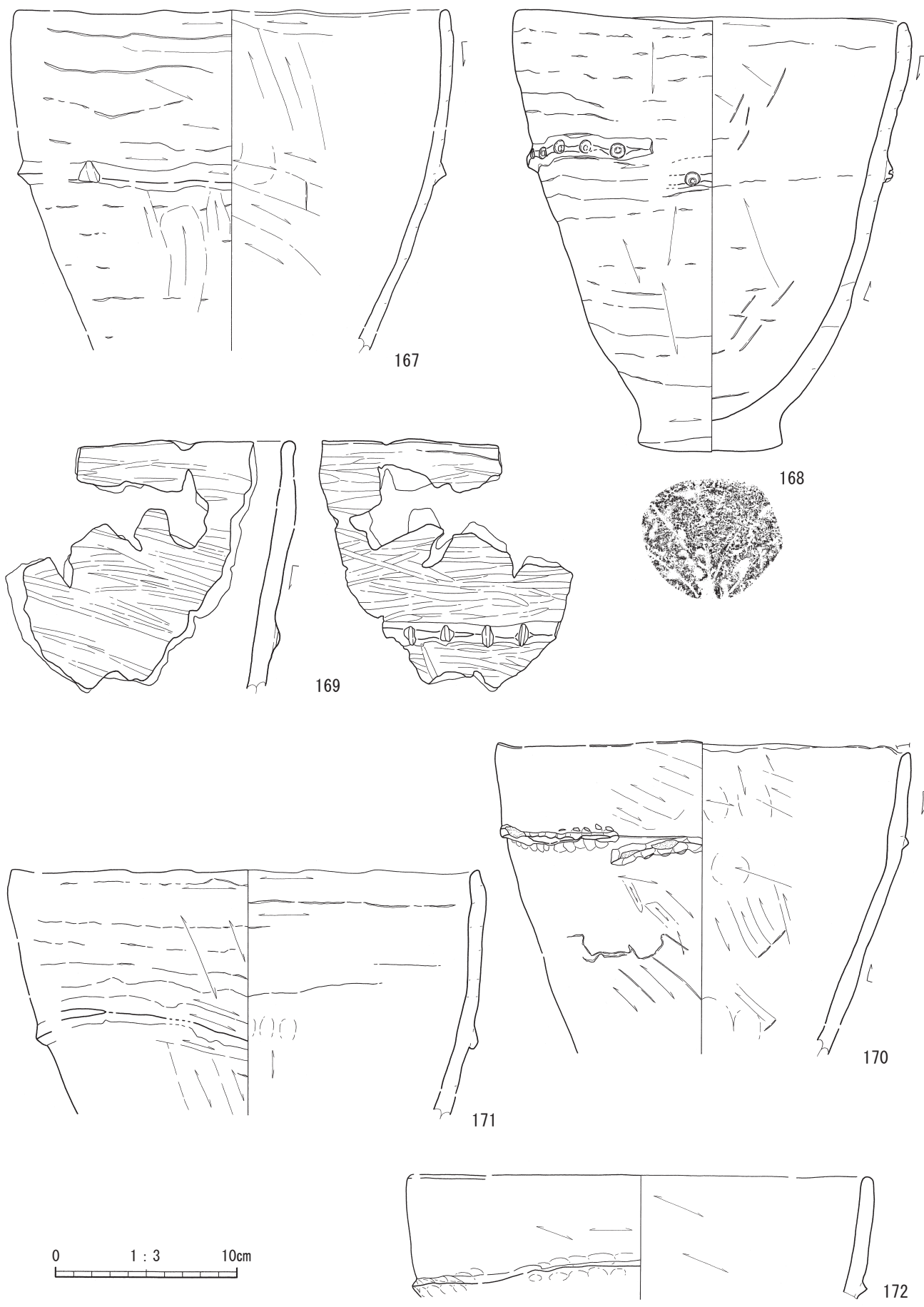
258は炉壁で、裏面にササ痕や砂粒が認められる。259はガラス質鍛冶滓で、器面の一部がガラス質化している。裏面には、砂粒が付着する。260は製錬滓と考えられるもので、3面にハツリ痕が認められる。

キ 軽石

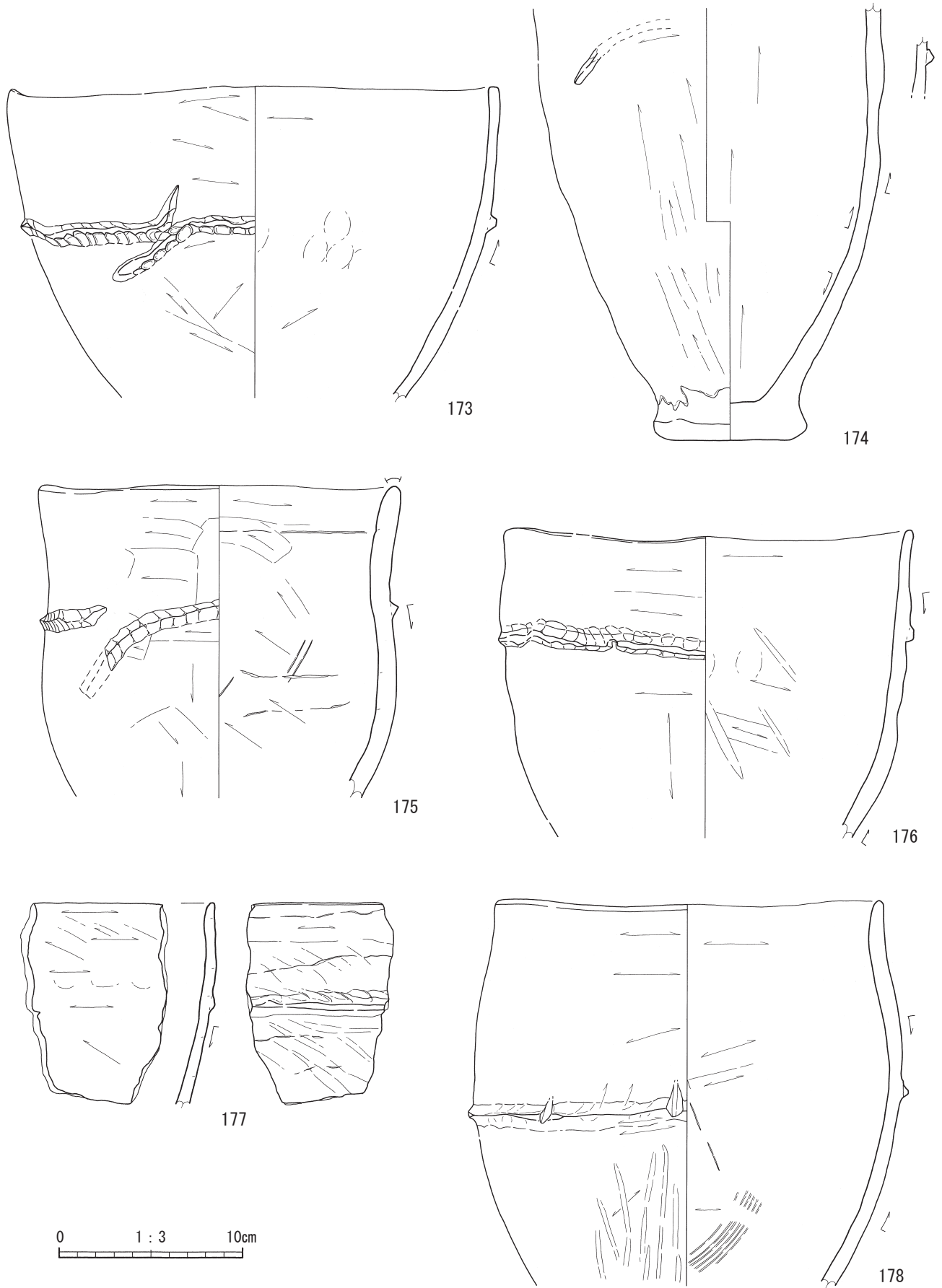
20点程認められ、赤化したものや加工痕らしきものが認められるものもある



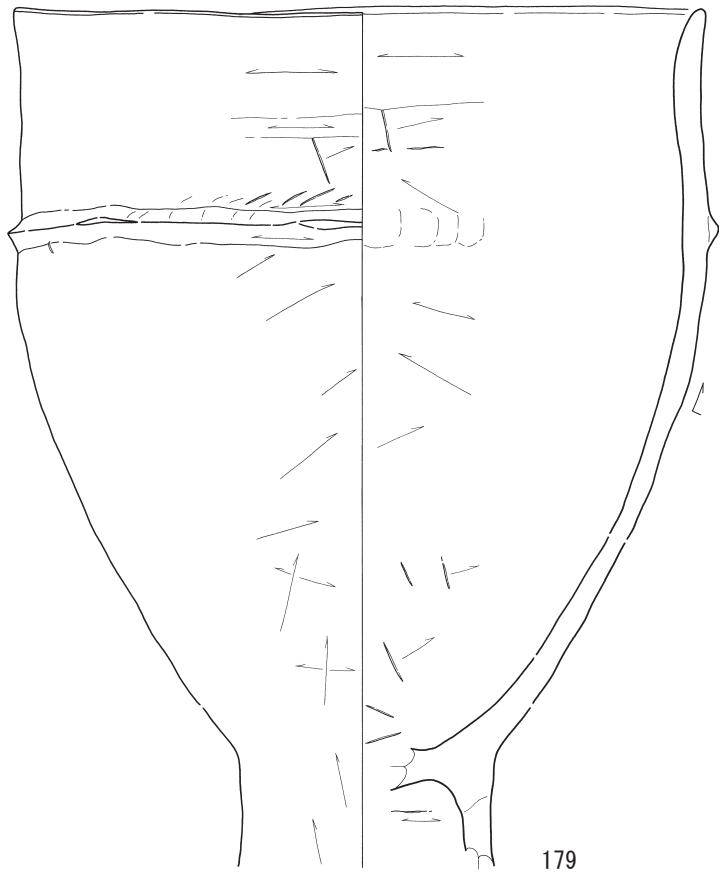
第42图 16号竖穴建物跡 出土遺物(1)



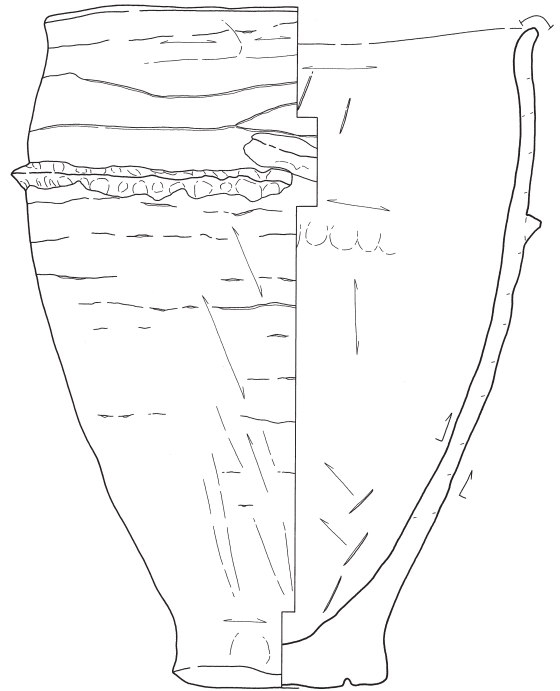
第43图 16号竖穴建物跡 出土遺物（2）



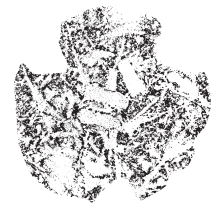
第44图 16号竖穴建物跡 出土遺物 (3)



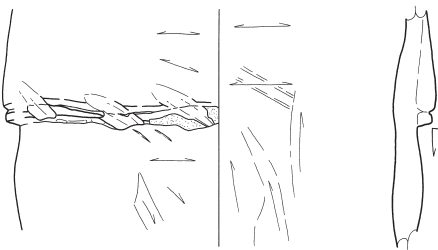
179



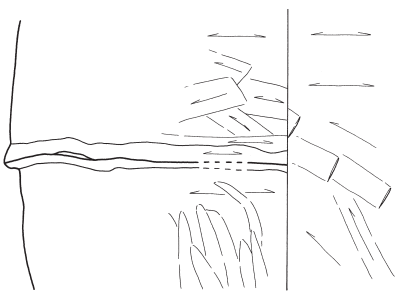
180



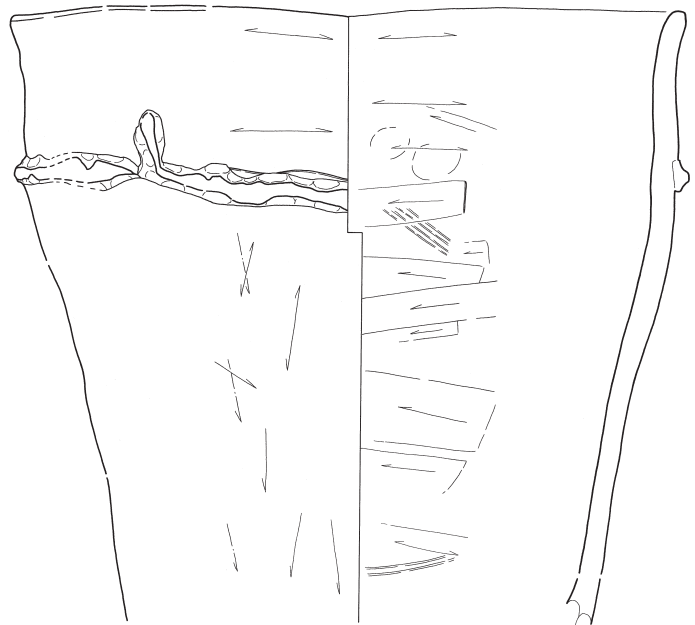
181



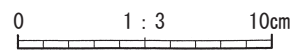
182



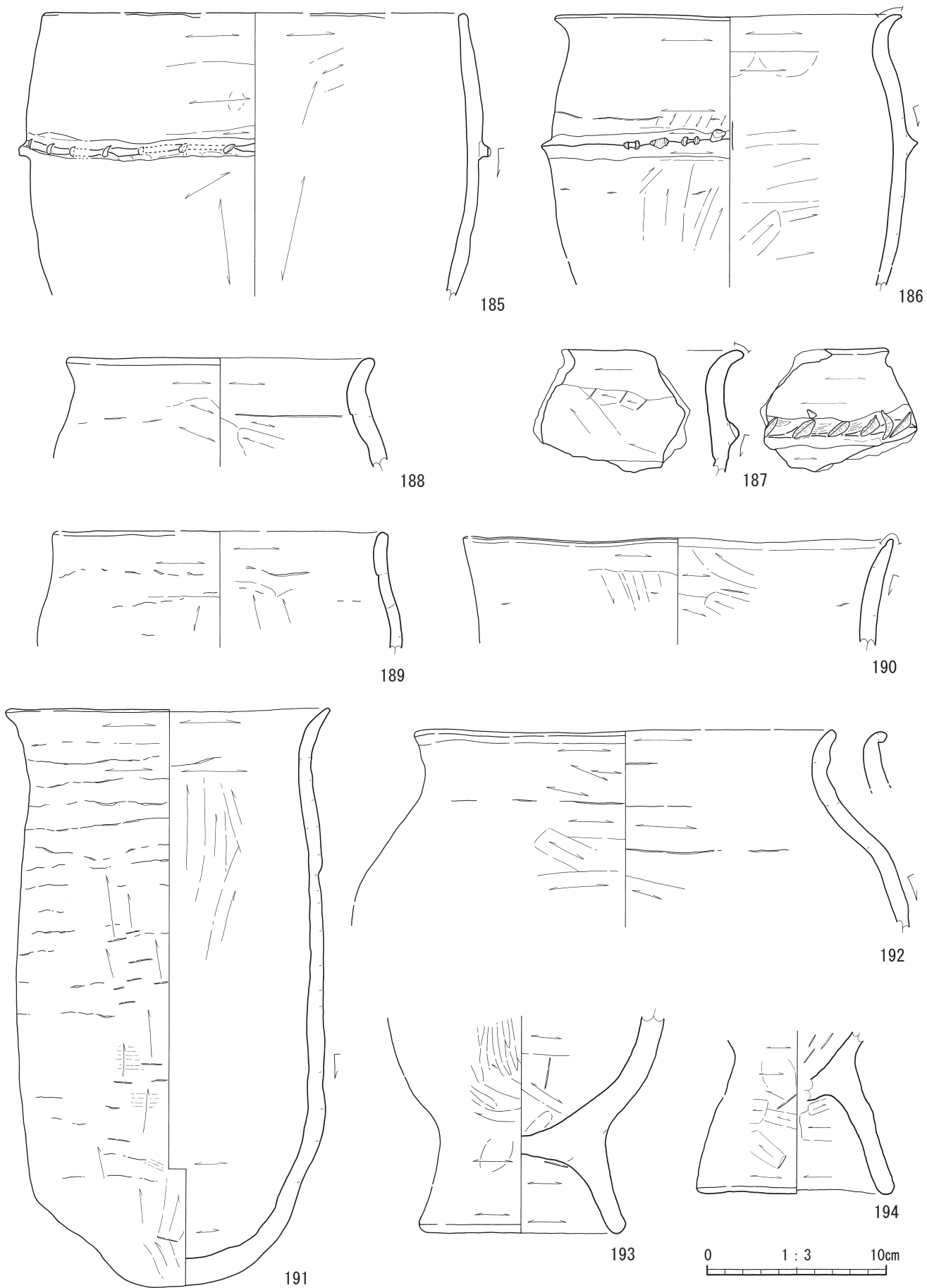
183



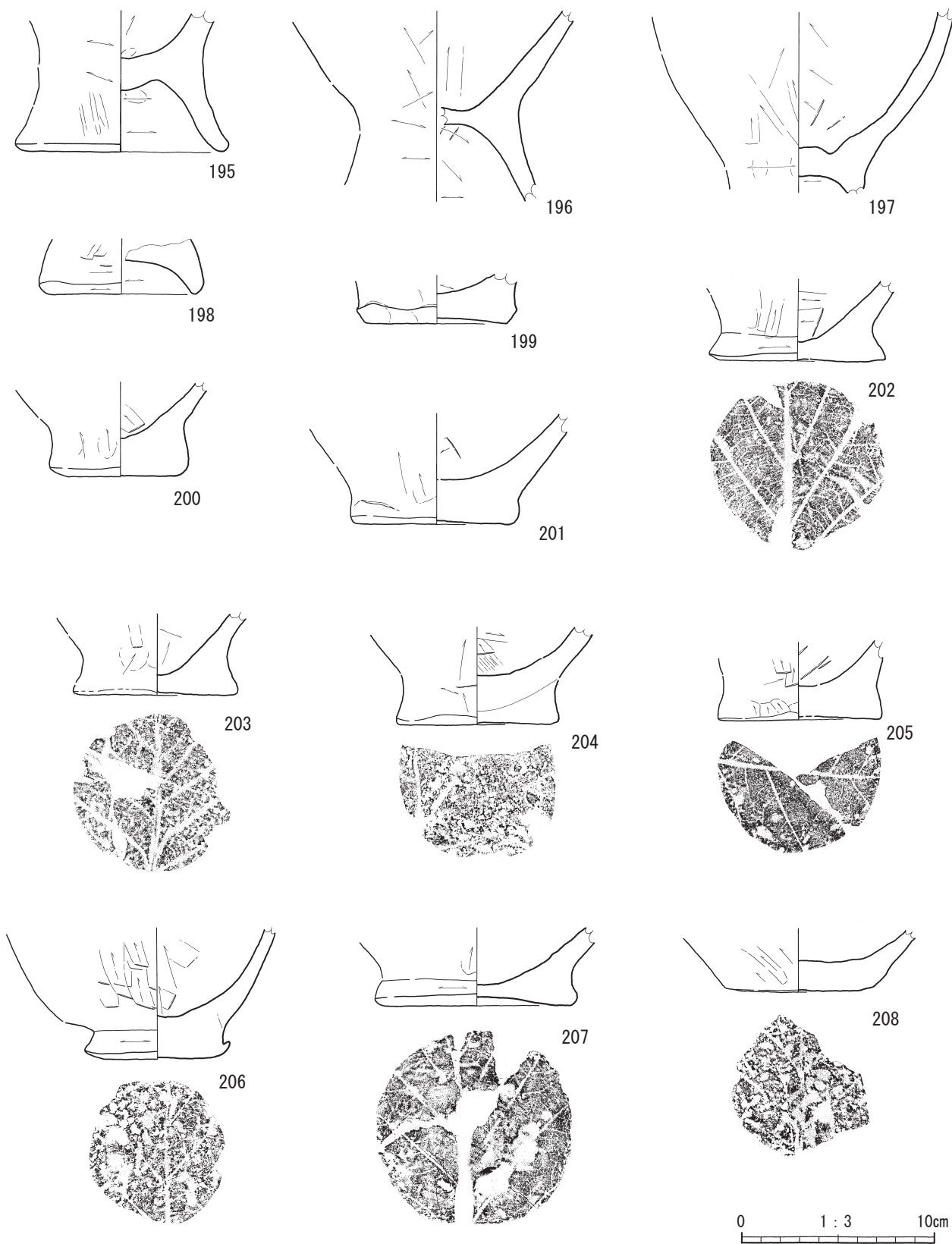
184



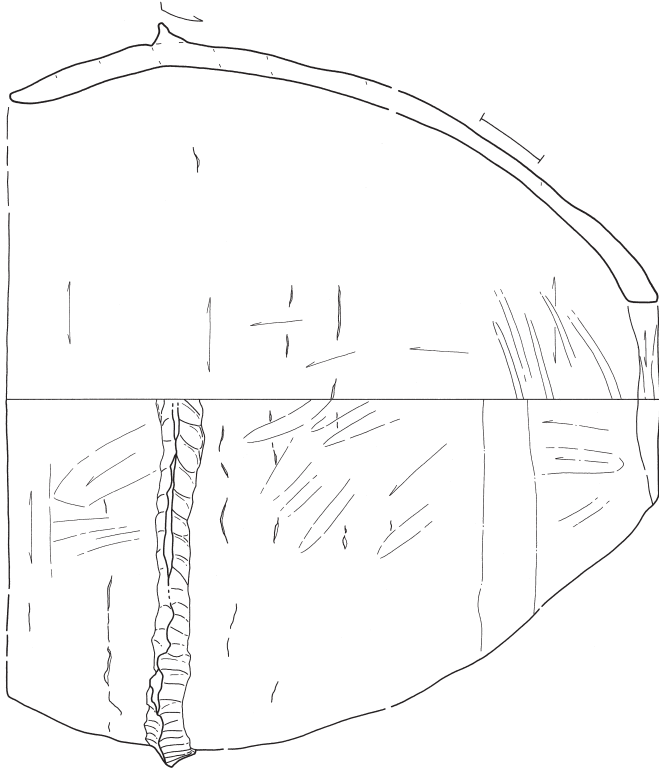
第45图 16号竖穴建物跡 出土遺物(4)



第46图 16号竖穴建物跡 出土遺物(5)



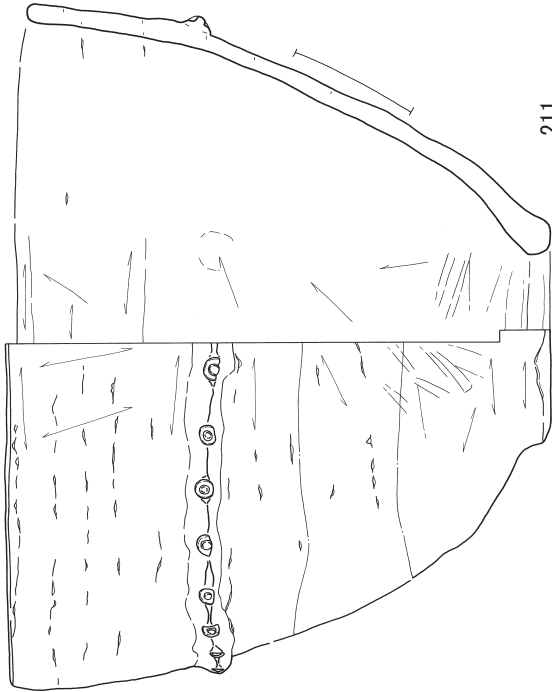
第47图 16号竖穴建物跡 出土遺物(6)



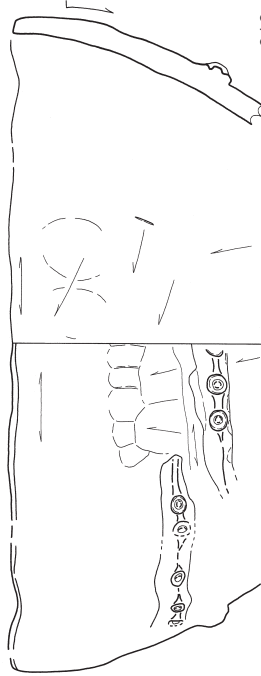
209



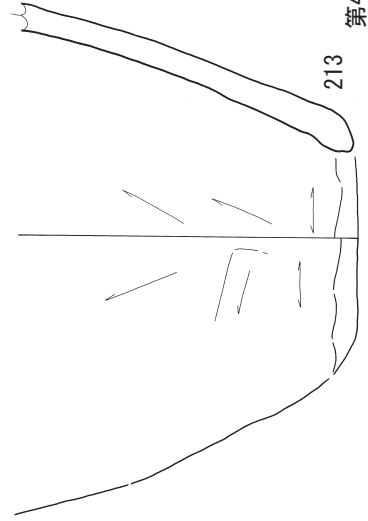
210



211



212



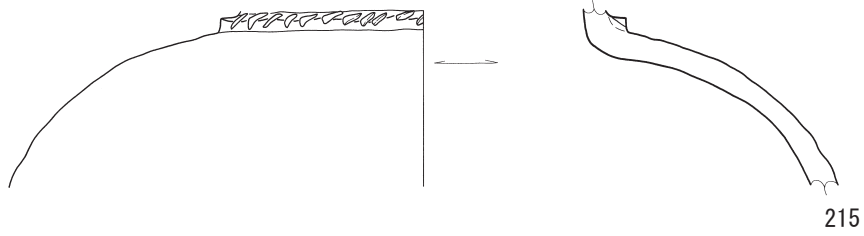
213



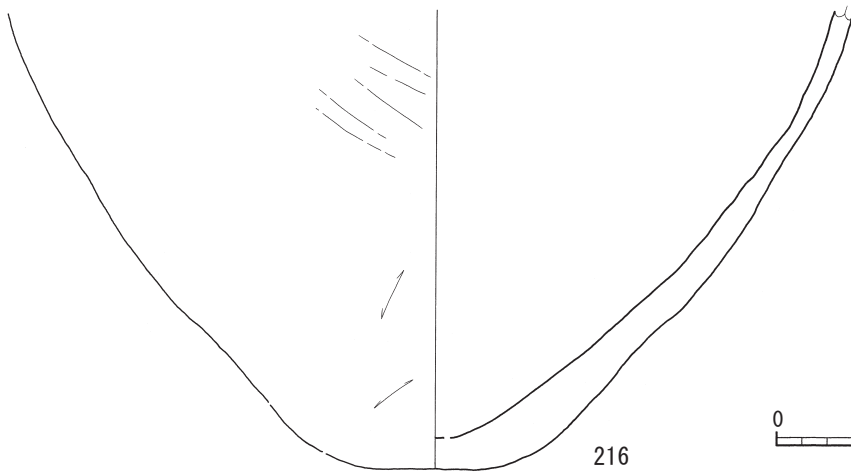
第48图 16号竖穴建物跡 出土遺物(7)



214

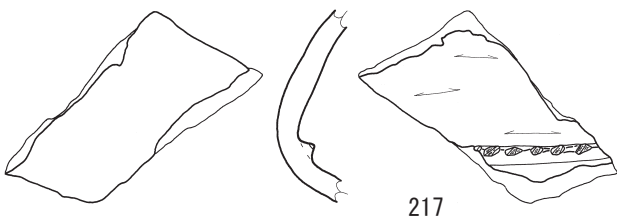


215

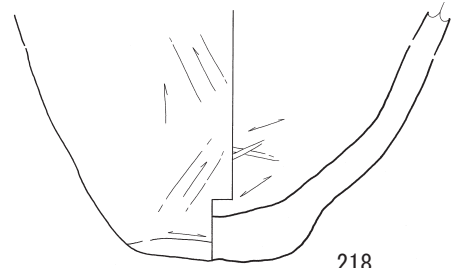


216

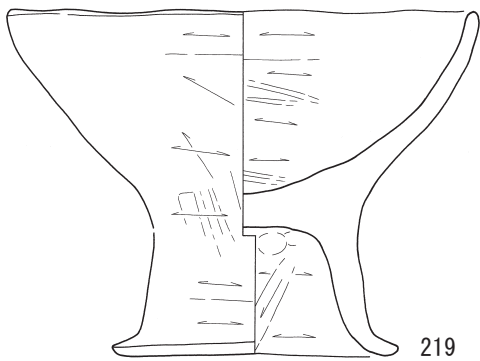
0 1:3 10cm



217



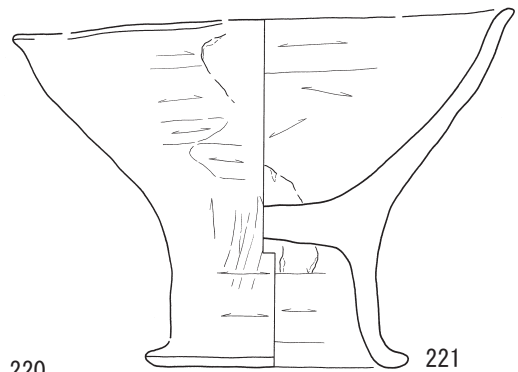
218



219

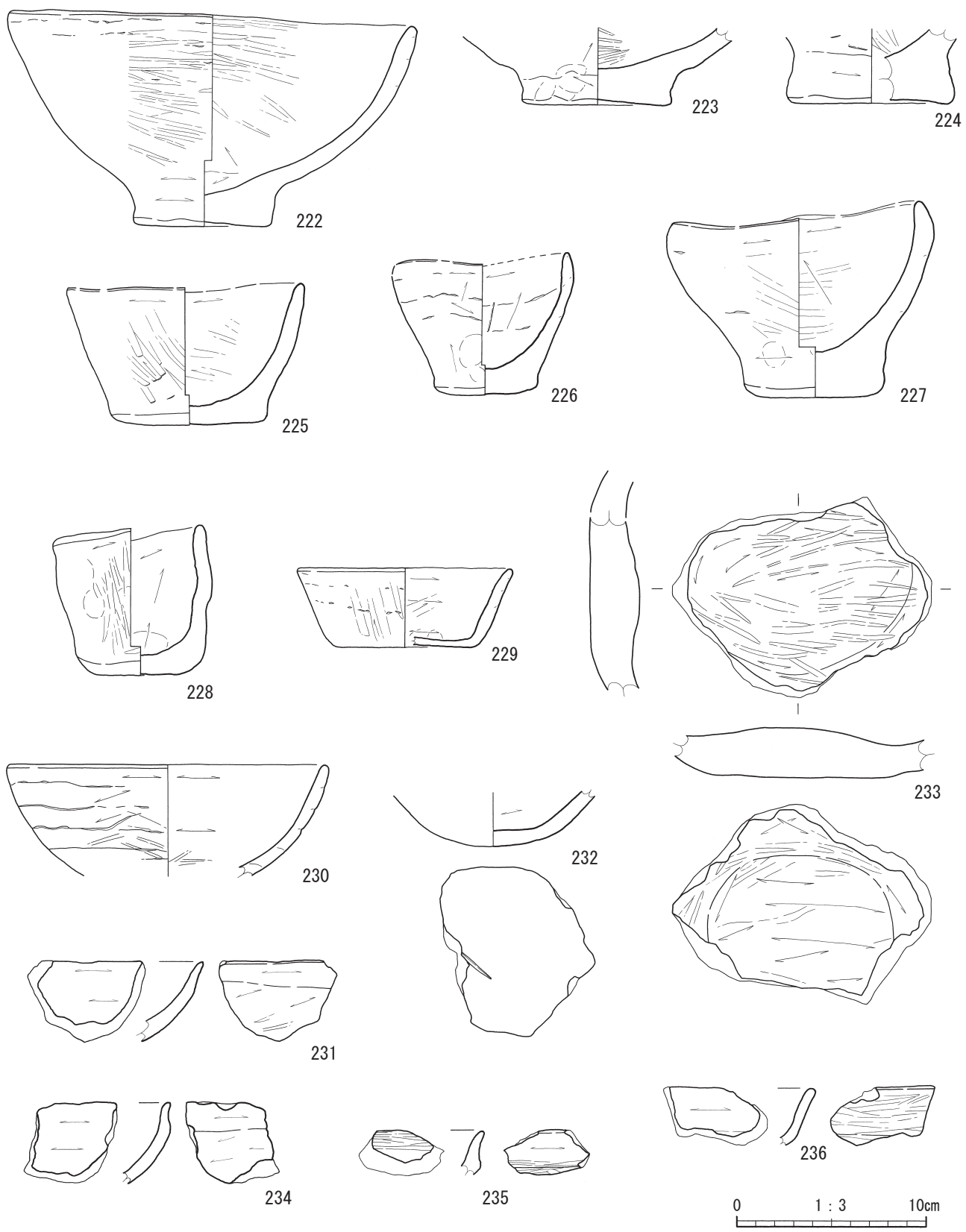


220

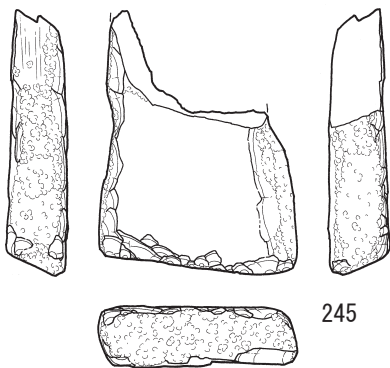
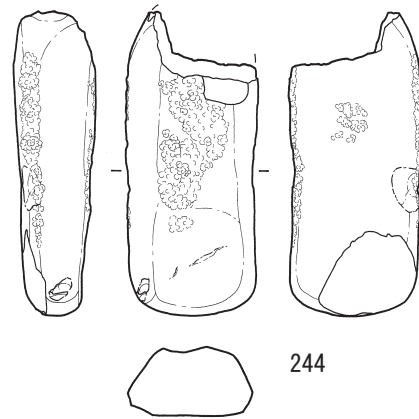
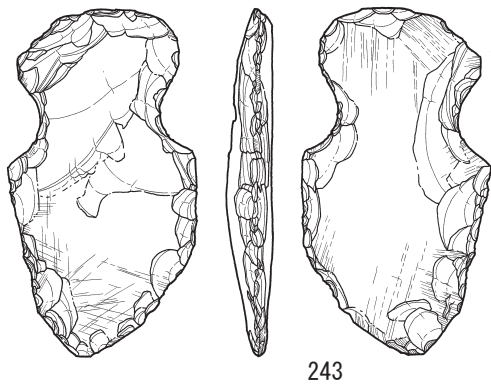
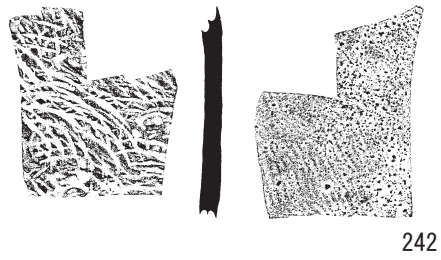
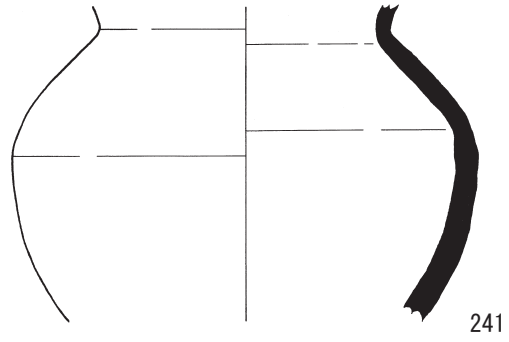
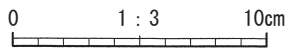
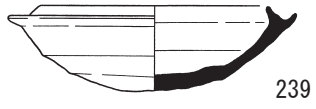
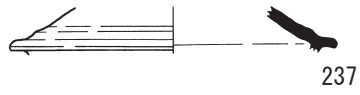


221

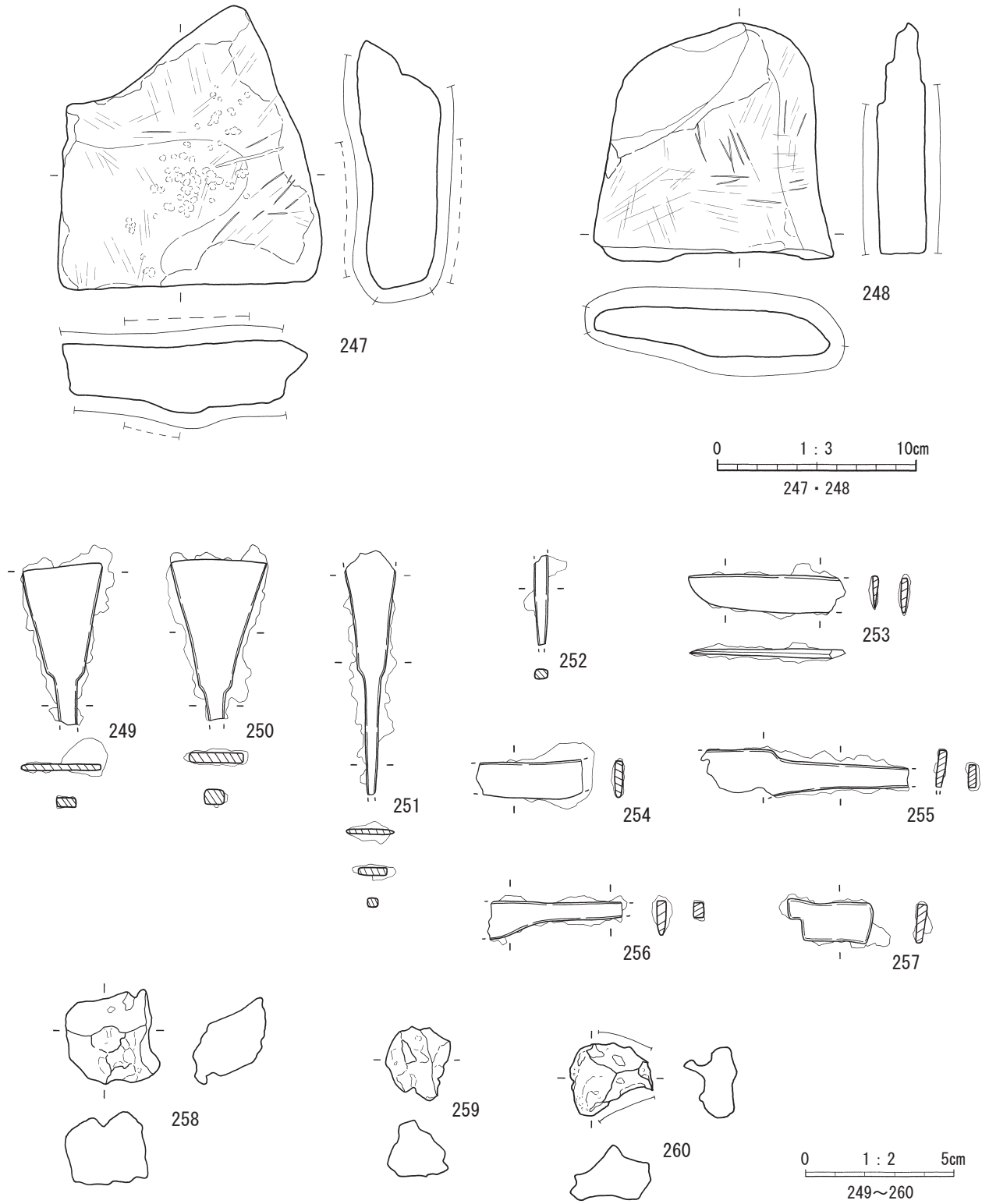
第49图 16号竖穴建物迹 出土遗物(8)



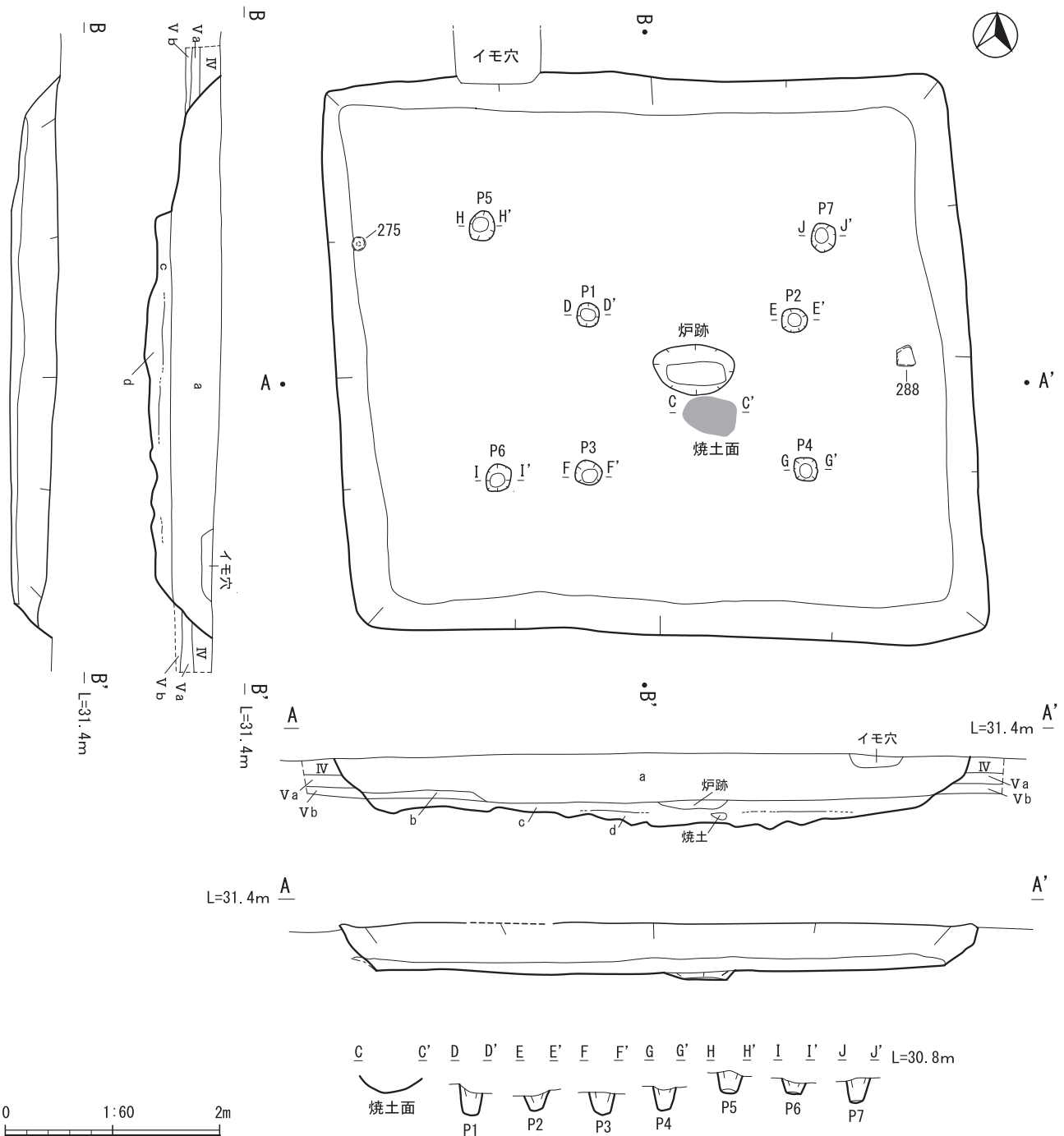
第50图 16号竖穴建物跡 出土遺物 (9)



第51图 16号竖穴建物跡 出土遺物 (10)



第52图 16号竖穴建物跡 出土遺物 (11)



第53図 17号竪穴建物跡 平・断面図

9 17号竪穴建物 (SI17) (第53・54図)

(1) 検出

D-2・3区のIV層上面で検出した。検出レベルは、31.10~31.18mである。

平面形は、5.9×5.2mの長方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

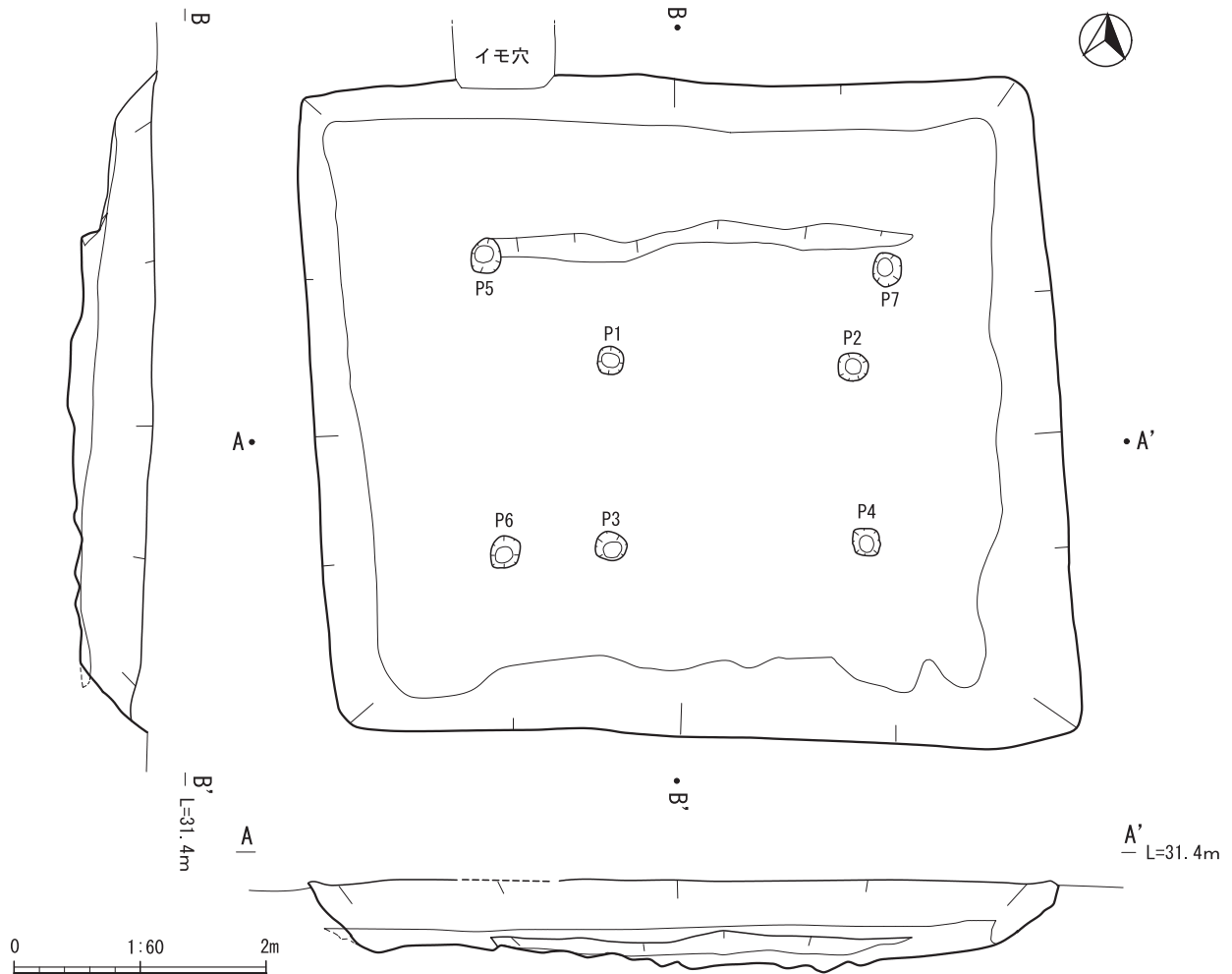
竪穴埋土は4層 (a~d) に分けられ、埋土 a・b は竪穴埋没土、埋土 c・d は貼床土である。埋土 b は部分的に存在する。

a : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層 (VIa層) 土や池田降下軽石 (0.5cm程)、御池火山灰をわずかに含む。

b : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック (3~5cm程) を含む。

c : 黒色 (10YR2/1) シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック (3~5cm程) と池田降下軽石 (1cm程) をわずかに含む。他の竪穴建物と比べると、アカホヤブロックの含有率が低い。層厚は約10cm。

d : 黒褐色 (10YR3/2) シルト質土で、かなり締まりが



第54図 17号竖穴建物跡 掘方平・断面図

ある。アカホヤブロック（2～3 cm程）を多く含む。増築前の貼床土であり、色調だけでは埋土cとの分別は難しい。層厚は5～15cm。

なお、埋土aとIV層が類似しており、竖穴の立ち上がりの検出が困難であったため、サブトレンチを設定して確認した。

ベルト断面では認められないが、埋土c直上において、水成作用によると思われる粒の揃った白色砂粒が部分的に認められた。竖穴廃絶後に水が溜まっていた時間があった可能性がある。

（3）床面

埋土掘り下げ後、埋土cを検出し、その面を床面（生活面）と捉えた。なお、北側はアカホヤ層が床面となり、レベルが高い。

床面の検出レベルは30.70～30.80mで、遺構検出面からの深さは約50cmを測る。硬化面は確認できなかった。

（4）炉

竖穴床面下場の実測後、ベルトを床面まで掘り下げる

と、竖穴中央付近で赤味を帯びた土の範囲が認められたため、炉と捉えた。

平面形は、0.75×0.45mの楕円形を呈する。深さは約7cmを測り、床面は貼床土（埋土c）である。

埋土は暗赤褐色（5YR3/3）シルト質土で、締まりがなく、赤化したアカホヤブロックを含む。

（5）焼土面

炉周辺の貼床土を10cm程掘り下げたところ、0.50×0.35mの範囲で広がる焼土面（第二炉）を確認した。

その特徴は、色調が暗赤褐色（5YR3/3）シルト質土で、締まりがなく、赤化したアカホヤブロックを含む。掘り込みの確認は困難であった。

（6）第二床面

焼土面（第二炉）を確認し、さらにその時点では7基の柱穴を確認していたことから、増築の可能性を考えた。そこで、増築前の床面を把握するために焼土面と同じレベルで精査を行った。

その結果、床面の面的な把握は困難であったが、ベル

ト断面において硬化している箇所を部分的に確認できた。そこで、その面を増築前の床面と判断した。検出レベルは30.60～30.64mである。

(7) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第54図)。北側はベッド状に一段高くなっている。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは30.48mで、遺構検出面からの深さは約70cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(8) 柱穴

柱穴は床面では確認できず、掘方床面において7基検出した。床面は、P5・P6はアカホヤ層下部、それ以外はⅦ層に達している。

埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土をわずかに含む。

各柱穴の属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

P1 : 0.25×0.20×0.25m

P2 : 0.25×0.25×0.14m

P3 : 0.25×0.25×0.24m

P4 : 0.25×0.25×0.24m

P5 : 0.30×0.25×0.20m

P6 : 0.28×0.25×0.14m

P7 : 0.30×0.25×0.23m

その配列から、「P4-P2-P1-P3」の4本柱建物から「P4-P7-P5-P6」の4本柱建物へ増築したと考える。

増築前の建物に伴うものが、焼土面(第二炉)と第二床面で、掘方床面で一段低くなっている箇所が、増築前の掘方床面と考える。その掘方床面から推測すると、増築前は4.5×4.5m程の大きさであったと考える。

(9) 遺物(第55～57図261～292)

遺物は番号取上分で581点を数える。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄器、軽石が認められ、33点図示した。

ア 土器(261～279)

土器は、甕、甑、壺、小型壺、坏、高坏を確認した。

甕(261～267)

3類(261・262・264)

口縁端部でやや外反するもの。

261・262は刻みのない突帯をもつ。ともに胎土に金色ウンモを含む。262は一部床着出土。

264は、口縁端部と突帯の間隔が狭い。

4類(263)

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。突帯に竹管文を施す。なお、261～263は、脚台をもち、口径や器高など規格性が高い。

脚台(265・266)

平底(267)

外底面に木葉痕が残る。

甑(268)

筒抜け形で、床着出土。

壺(269・270)

270は、内外面ともにミガキ調整を行い、丁寧なつくりである。

坏(271～276)

271・272・274・275・276は1類で、在来系のものである。275は、口縁部に意図的な打ち欠きが認められる以外、欠損のない完形品である。床面直上で、口縁部を上にして出土した。

271・274は一部床着出土。276は外底面に木葉痕が残りと、黒色処理が行われる。床着出土。

273は2類で、搬入品の可能性がある。271～275は全て口縁部が外反あるいは外傾している。

小型壺(277)

胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品の可能性がある。

高坏(278・279)

278は胎土や色調の特徴から、宮崎平野部からの搬入品の可能性がある。

279は、裾部が中空になるもので、黒色処理が行われる。このほか、精製赤彩土器の脚部片も認められる。

イ 須恵器(280～287)

須恵器は、坏蓋、坏身、平瓶、提瓶、甕を確認した。

280は坏蓋である。口縁端部は残存していないが、天井部に回転ヘラケズリ調整が施されている。

281・282は坏身である。281は、底部に粗い回転ヘラケズリ調整が施される。282は、立ち上がりが少し高い。床着出土。

283は頸部に向かってすぼまる平瓶の口縁部で、端部は灰被りになっている。

284～286は提瓶である。284は口縁部で、沈線が1条巡り、口縁端部は平坦に作られる。内面下部に接合痕がみられる。285、286は胴部である。285は胴部側面で、外面にはカキメと把手の痕がみられる。286は胴部正面中央の部位で、内面中央部にユビオサエ痕がみられる。

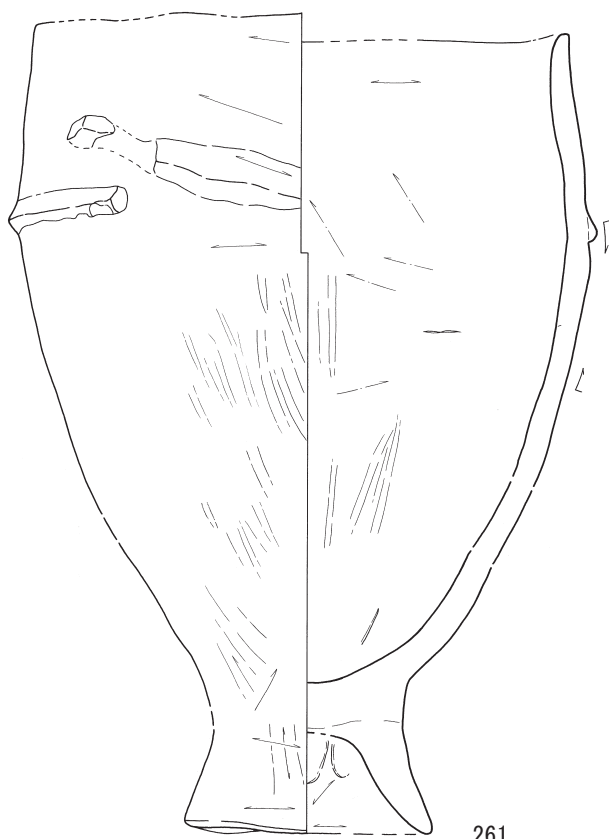
287は甕である。胎土は焼成不良により、白く脆い仕上がりになっている。断面は橙色で、頸部にヘラ記号が施される。

ウ 石器(288・289)

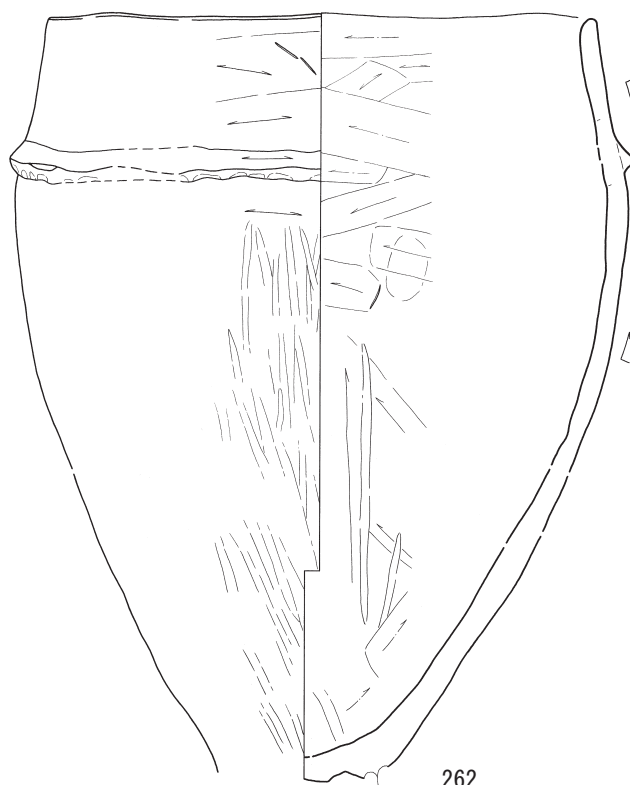
石器は石鎚、砥石、鉄床石、打製石斧を確認した。

288は鉄床石である。正・裏面は顕著な磨面をもつ。両面とも敲打後に磨っている。使用時の傷が残りと、凹みには鉄分が付着する。床着出土。

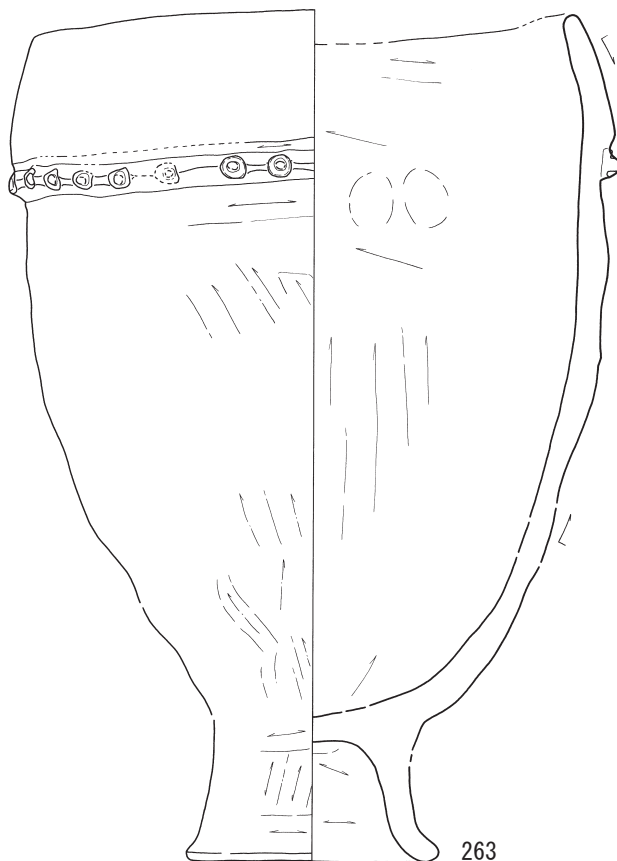
289は砥石で、正面は顕著な磨面をもち、使用時の傷が



261



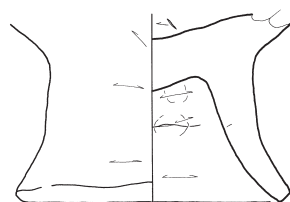
262



263



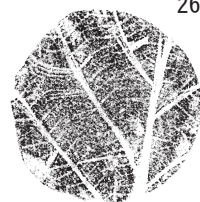
264



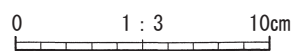
265



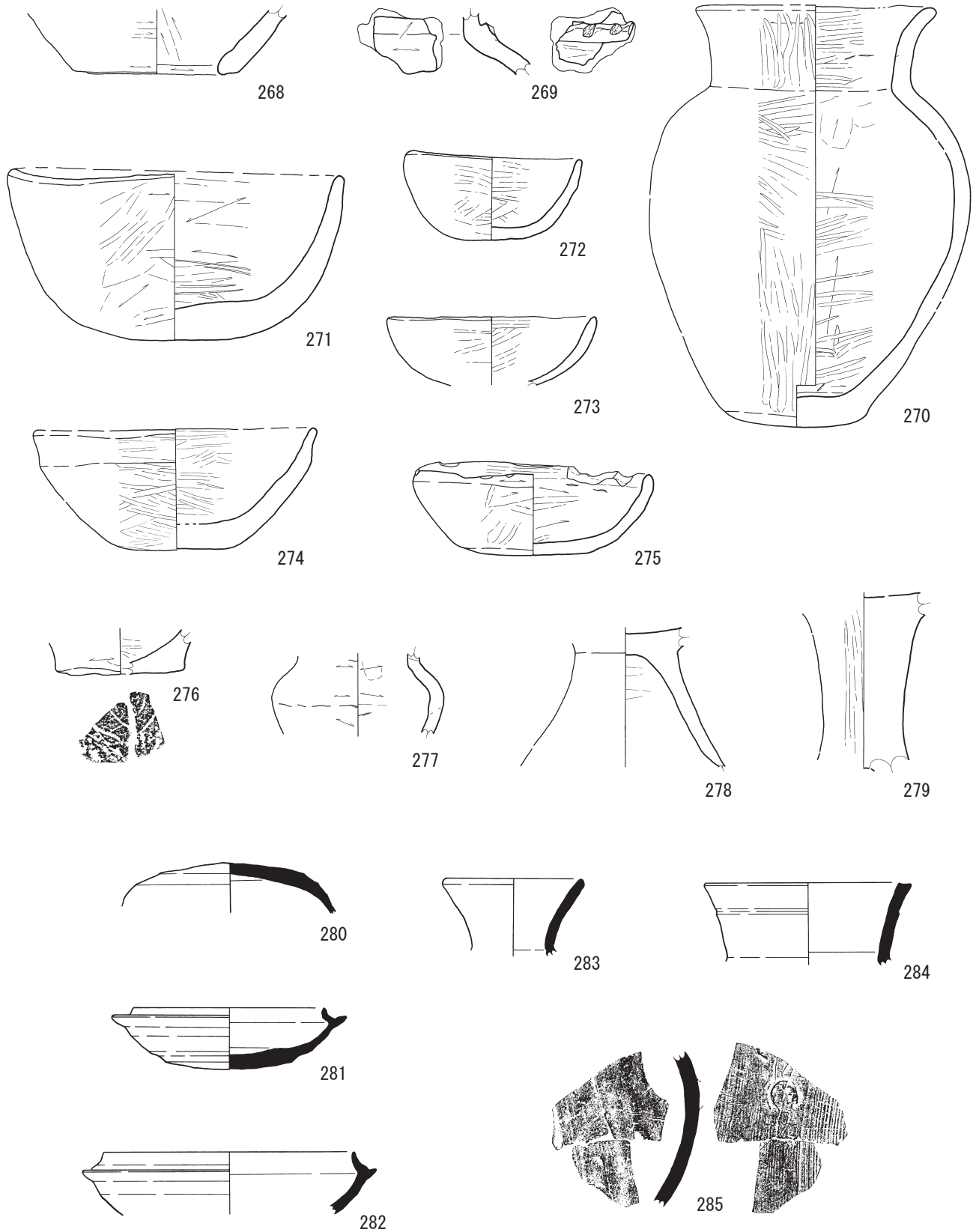
267



266

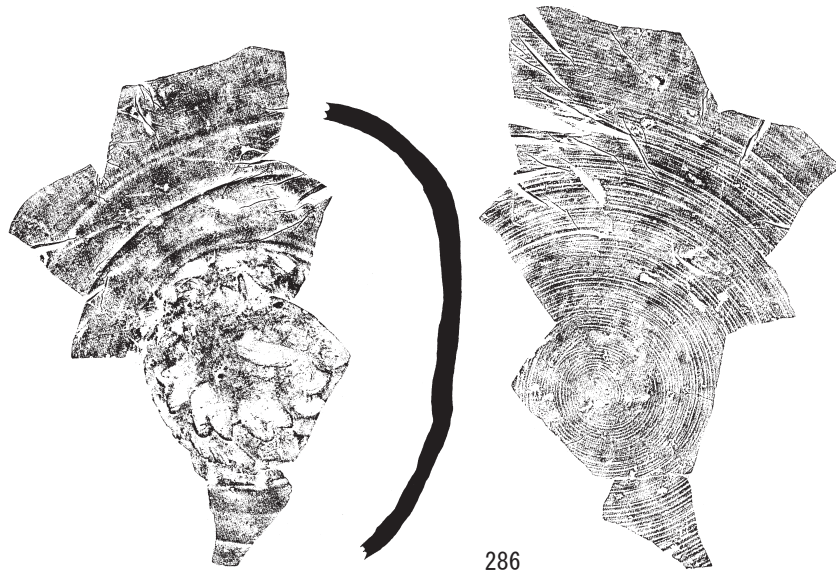


第55图 17号竖穴建物跡 出土遺物(1)

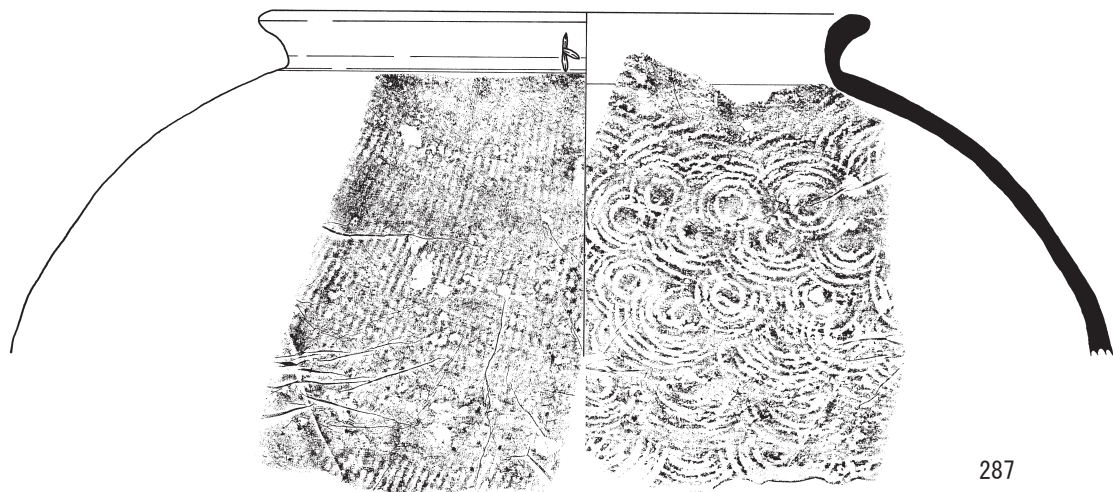


0 1 : 3 10cm

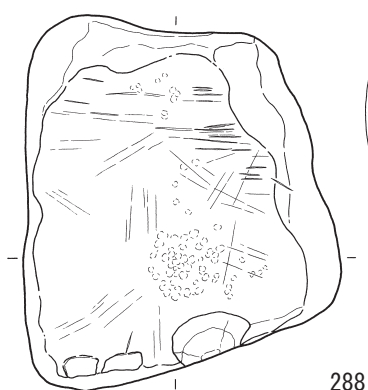
第56图 17号竖穴建物跡 出土遺物 (2)



286



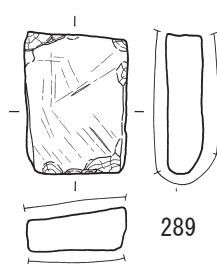
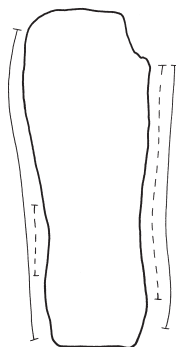
287



288



0 1 : 4 10cm
288

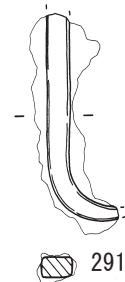


289

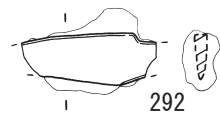
0 1 : 3 10cm
286 · 287 · 289



290



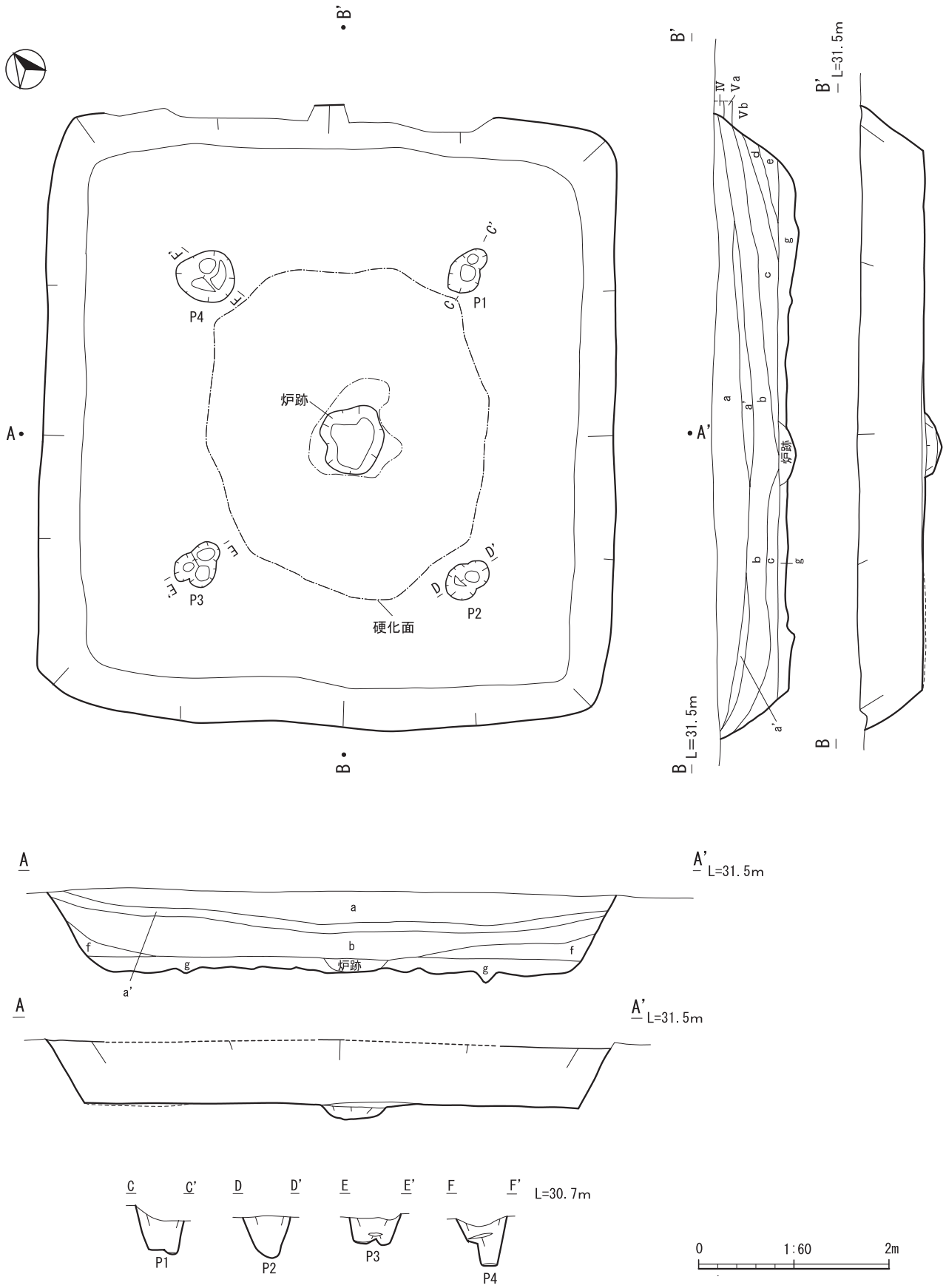
291



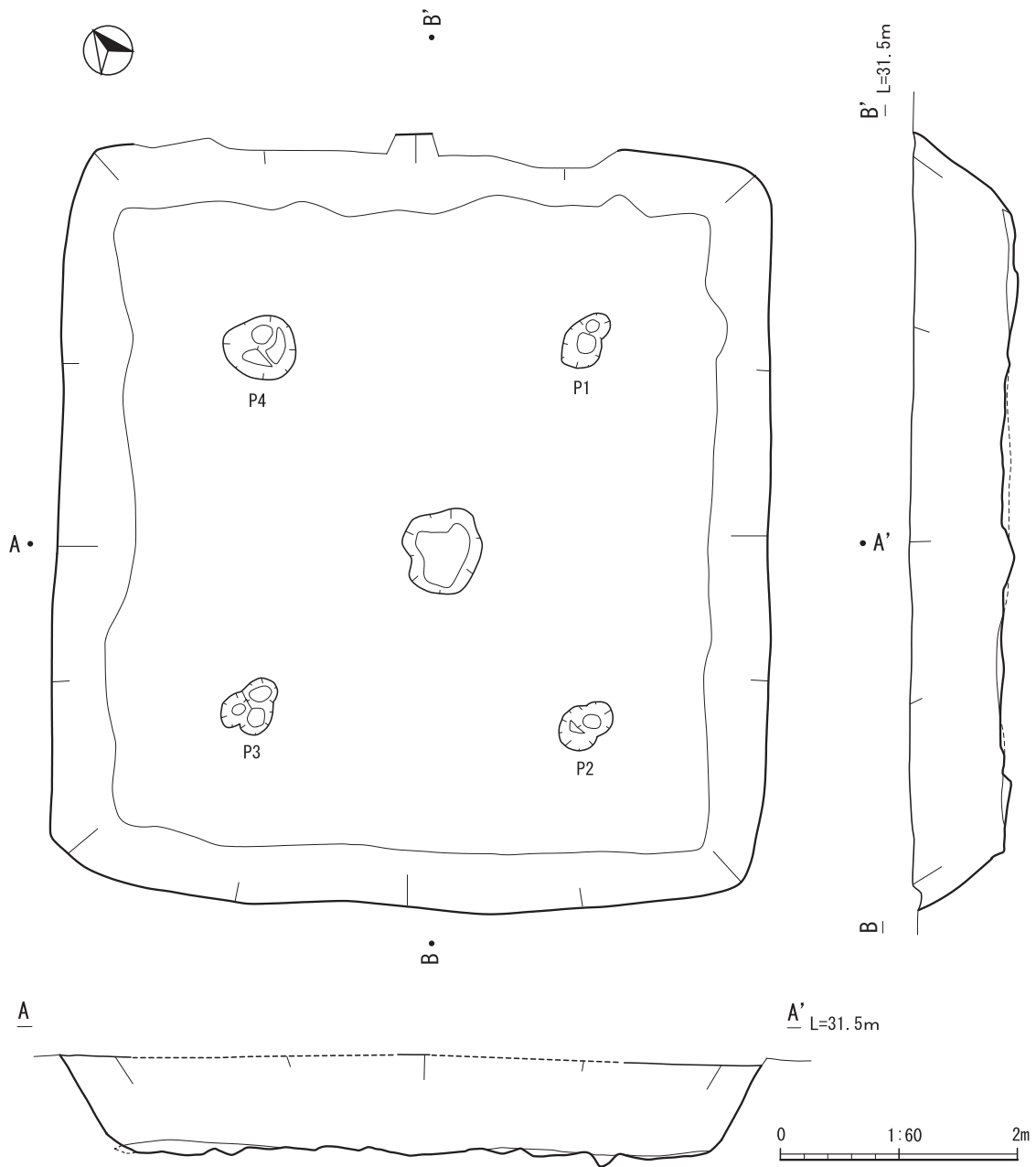
292

0 1 : 2 5cm
290~292

第57图 17号竖穴建物跡 出土遺物(3)



第58图 18号竖穴建物跡 平·断面图



第59図 18号竪穴建物跡 掘方平・断面図

残る。器面に鉄分が付着する。

エ 棒状礫

16点確認した。

オ 鉄器 (290~292)

鉄器は、建築部材、刀子、棒状工具を確認した。

290・291は端部が曲がっており、建築部材の可能性はある。292は刀子である。

カ 軽石

長径20cm以下のものが5点程認められた。黒化したものもある。

10 18号竪穴建物 (SI18) (第58・59図)

(1) 検出

G-4区のIV層上面で検出した。検出レベルは、31.32~31.24mである。II層掘り下げ時から、周囲よりも遺物や白色化した池田降下軽石の出土量が多く、遺構の存在が予想されていた。

平面形は、6.5×6.0mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

検出時は、平面プランが明確ではなく、その状況で掘り下げを行ったため、北東側の立ち上りを掘りすぎている。

(2) 埋土

竪穴埋土は8層(a～g)に分けられ、埋土a～fは竪穴埋没土、埋土gは貼床土である。埋土d～fは壁際にのみ存在する。

a：褐色(10YR4/1)シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石(0.5cm程)を多く含む。

a'：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石(0.5cm程)をわずかに含み、細かいアカホヤ層(VIa層)土を含む。

b：黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土(1～2cm程)を多く含む。池田降下軽石(0.5cm以下)を含む。かなり締まっている箇所がある。

c：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土がまんべんなく混じる。

d：黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、締まりがある。細かいアカホヤ層土を多く含む。cより赤みを帯びる。

e：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土(0.5cm以下)をわずかに含む。

f：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。細かいアカホヤ層土を多く含む。dに類似する。

g：黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック(2～5cm程)を多く含む。VII層土も含む。層厚は10～20cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土gを検出し、その面を床面(生活面)と捉えた。

床面の検出レベルは30.60～30.58mで、遺構検出面からの深さは約70cmを測る。

竪穴中央付近で、アバタ状の凸凹をもち、移植ゴテでは容易に削れないほど硬化した面を検出した。この硬化面の広がり把握のために精査を行ったが、残存していたのは中央付近のみであった。

(4) 炉

竪穴中央部に土が赤化している箇所があり、そこを炉と捉えた。

平面形は、0.75×0.70mでの円形を呈する。深さは約17cmを測り、床面はVII層である。

埋土は、にぶい赤褐色(5YR4/4)シルト質土で、締まりがなく、さらさらしている。黒褐色土をわずかに含み、アカホヤ層土が赤化している。炉周辺には、硬化面が認められない。

(5) 掘方

竪穴床面下場と硬化面範囲を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第59図)。

掘方の基盤層はVII層である。最深部のレベルは30.32mで、遺構検出面からの深さは約90cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(6) 柱穴

柱穴は床面において確認できず、掘方床面において4基検出した。床面は、P3がVII層、それ以外はIX層(薩摩火山灰層)に達している。

埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土を多く含む。

各柱穴の属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

P1：0.55×0.35×0.36m

P2：0.50×0.35×0.43m

P3：0.55×0.40×0.32m

P4：0.60×0.55×0.49m

その配列から、4本柱建物である。

(7) 遺物(第60～71図293～400)

遺物は、番号取上分で5,003点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると5,341点を数える(一括取上分除く)。埋土aからの出土多く、貼床土からも出土している。

土器、須恵器、石器、石製品、棒状礫、鉄器、鉄滓、ふいご羽口、軽石が認められ、108点図示した。

ア 土器(293～343)

土器は、甕、甑、壺、鉢、坏、高坏を確認した。

甕(293～314)

1類(293・294)

口縁部が内湾するもの。

293は、突帯に刻みが認められない。294は、内外面に接合痕が目立つ。

2類(295・296)

口縁部が直行するもの。

295は突帯にユビナデ上げ刻みを施す。器形が歪んでいる。口縁部外面にオキ火上蒸らしの痕跡がある。外底面に木葉痕がわずかに残る。

296は突帯に2条1単位の刻みを施す。口縁部に補修孔が認められる。

3類(297・300)

口縁端部でやや外反するもの。

297は突帯に4条1単位の刻みを施す。刻みに布痕が残る。

300は、口縁部上位に段が残るほどの強いヨコナデ調整が行われる。

4類(299)

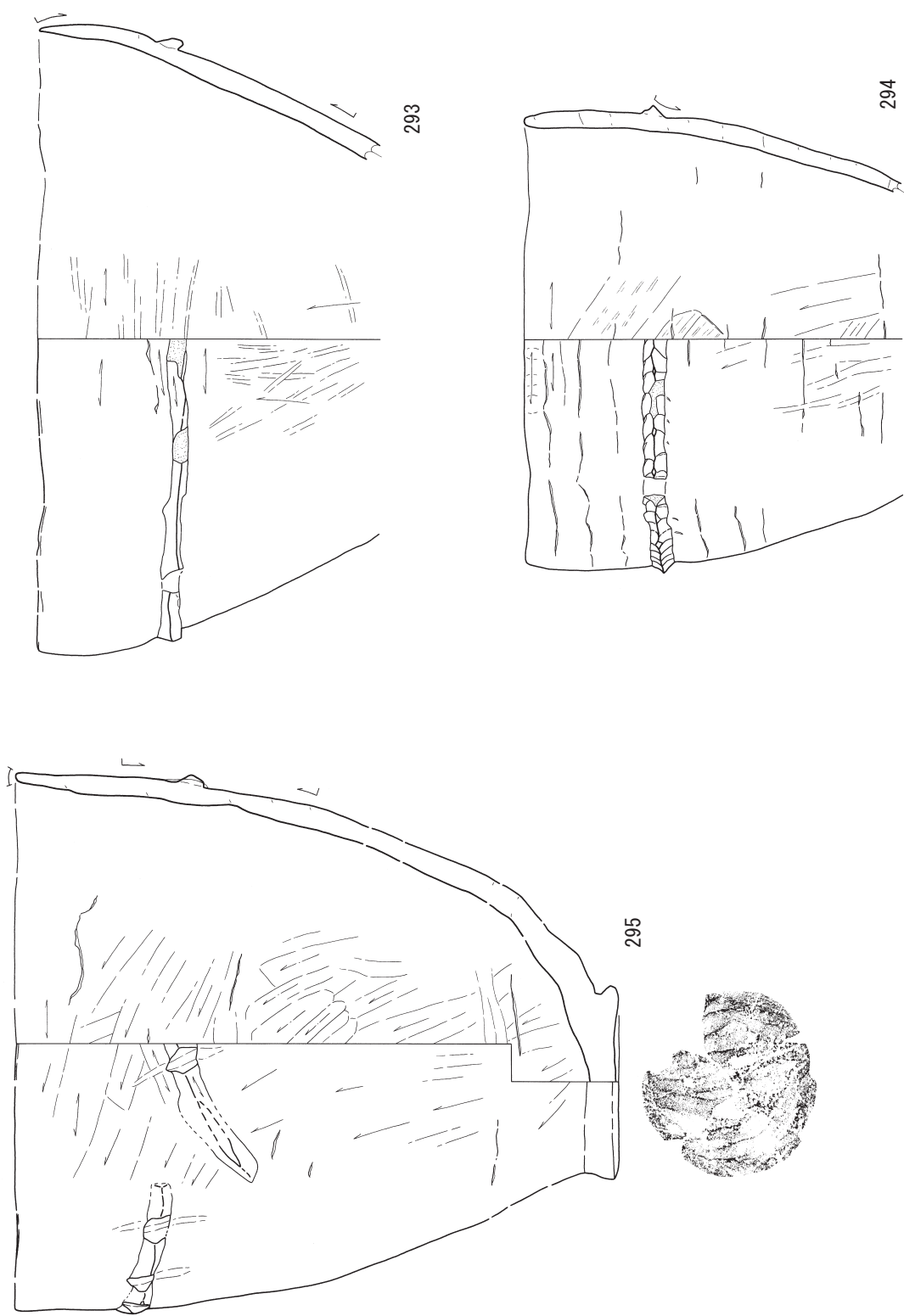
口縁部が突帯上位から肥厚するもの。突帯上位に肥厚部下端の稜線が確認できる箇所がある。

5類(298)

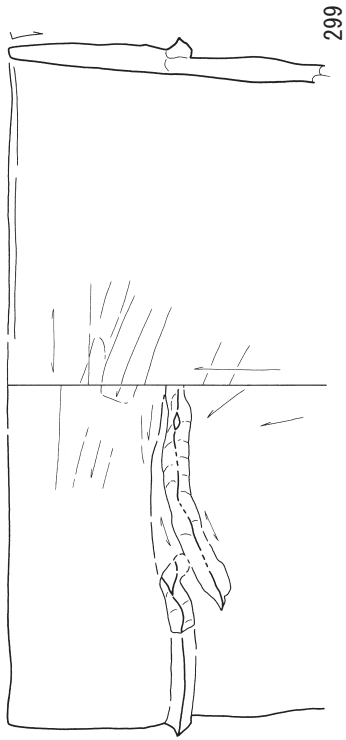
口縁端部で外湾するもの。壺形を呈し、突帯が認められない。

6類(301)

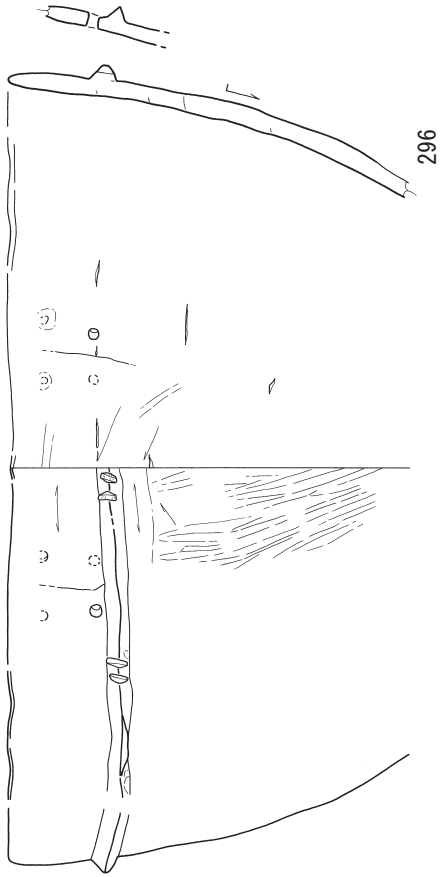
搬入品と考えられるもの。壺形を呈し、突帯が認められない。298に比べると、薄手のつくりである。黄色系を呈する。色調などの特徴から、宮崎平野部からの搬入品



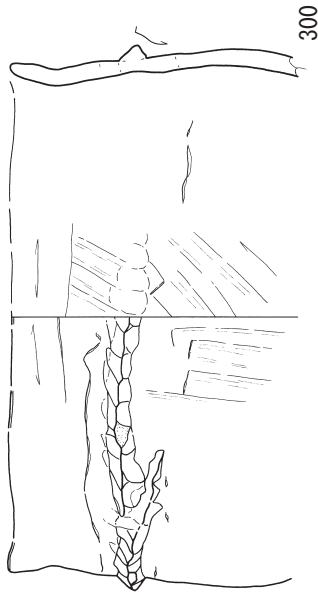
第60图 18号竖穴建物跡 出土遺物 (1)



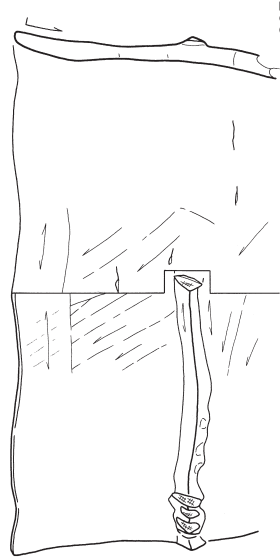
299



296



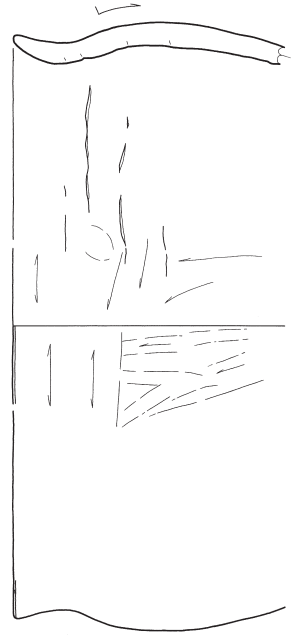
300



297



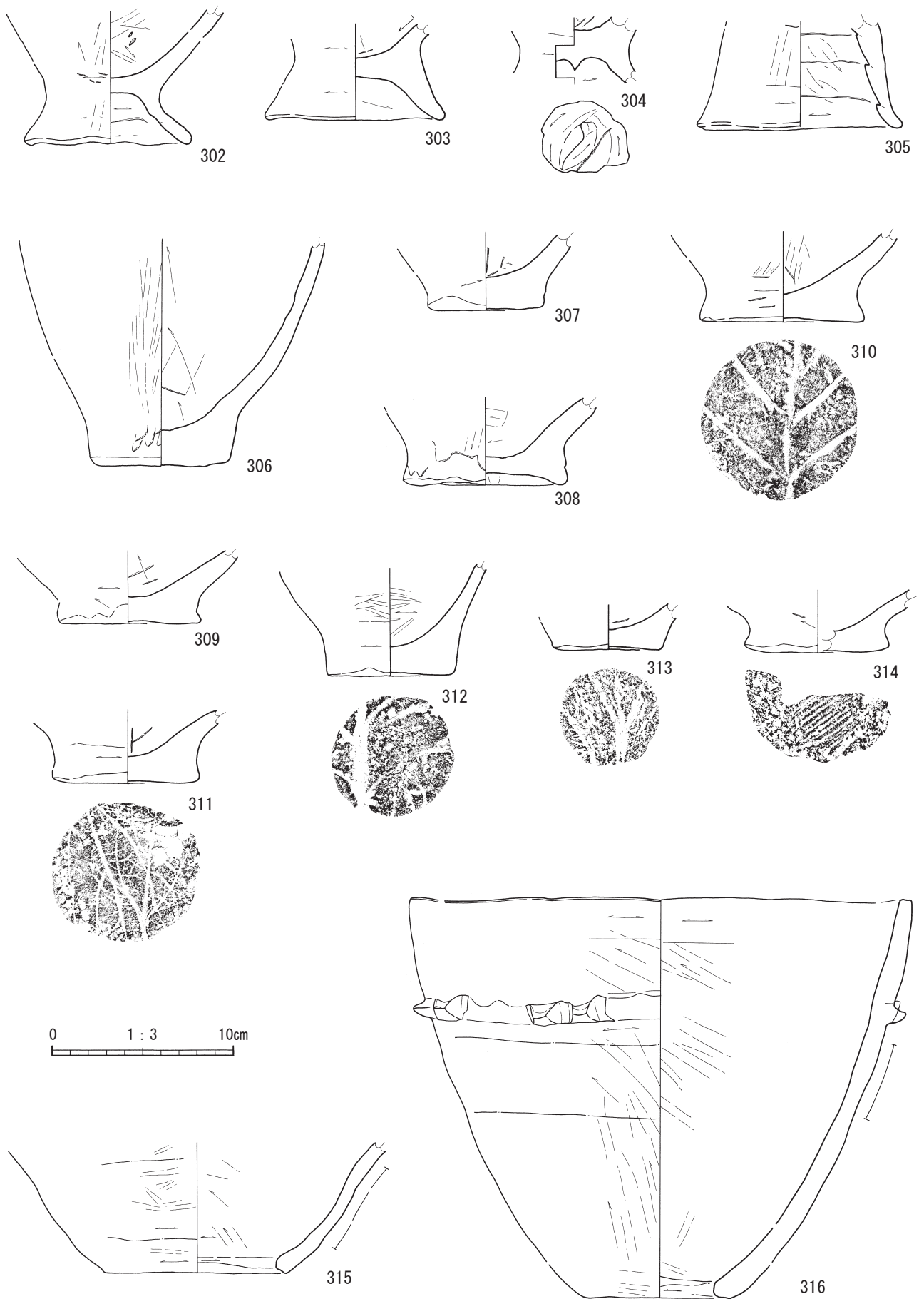
301



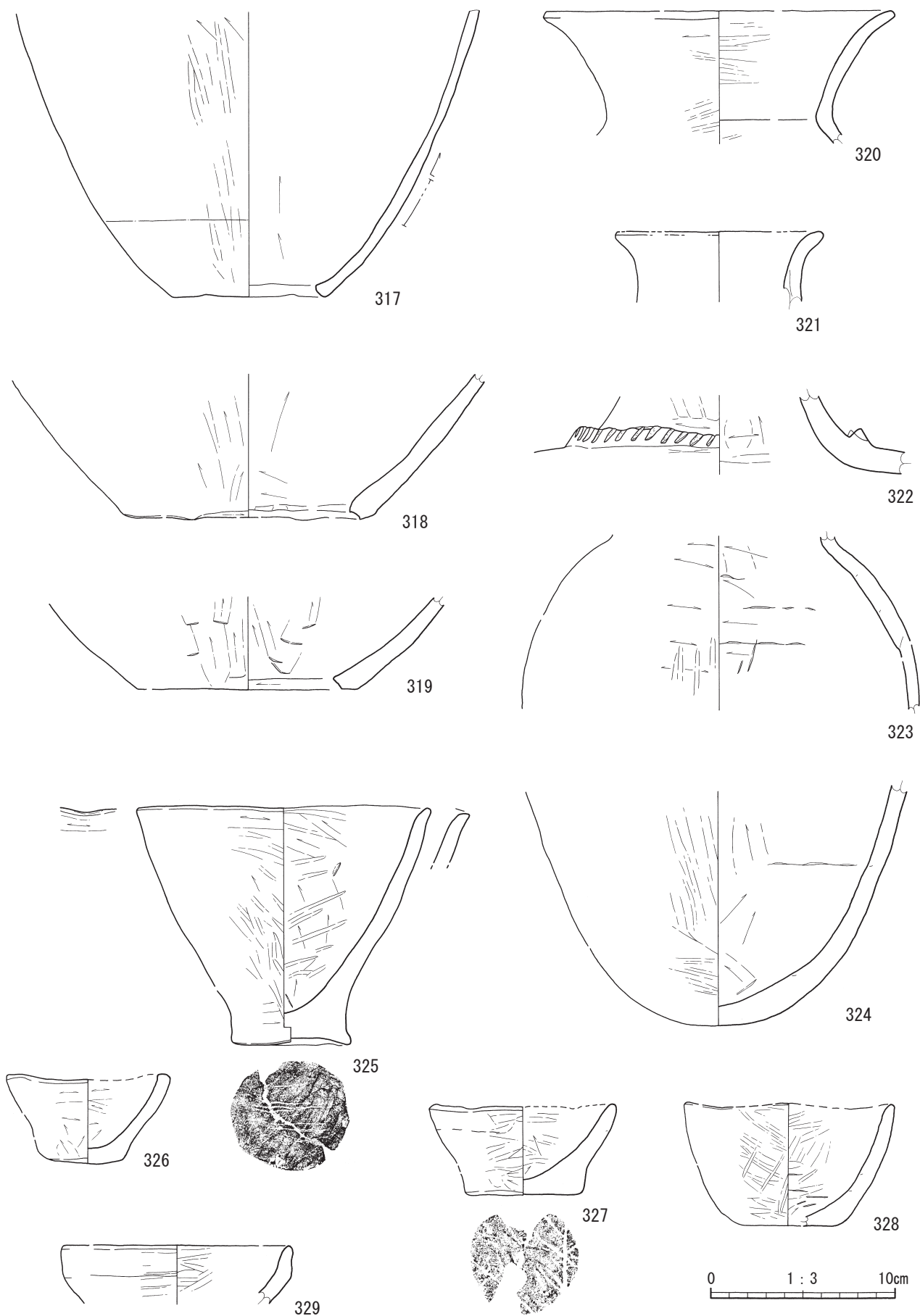
298



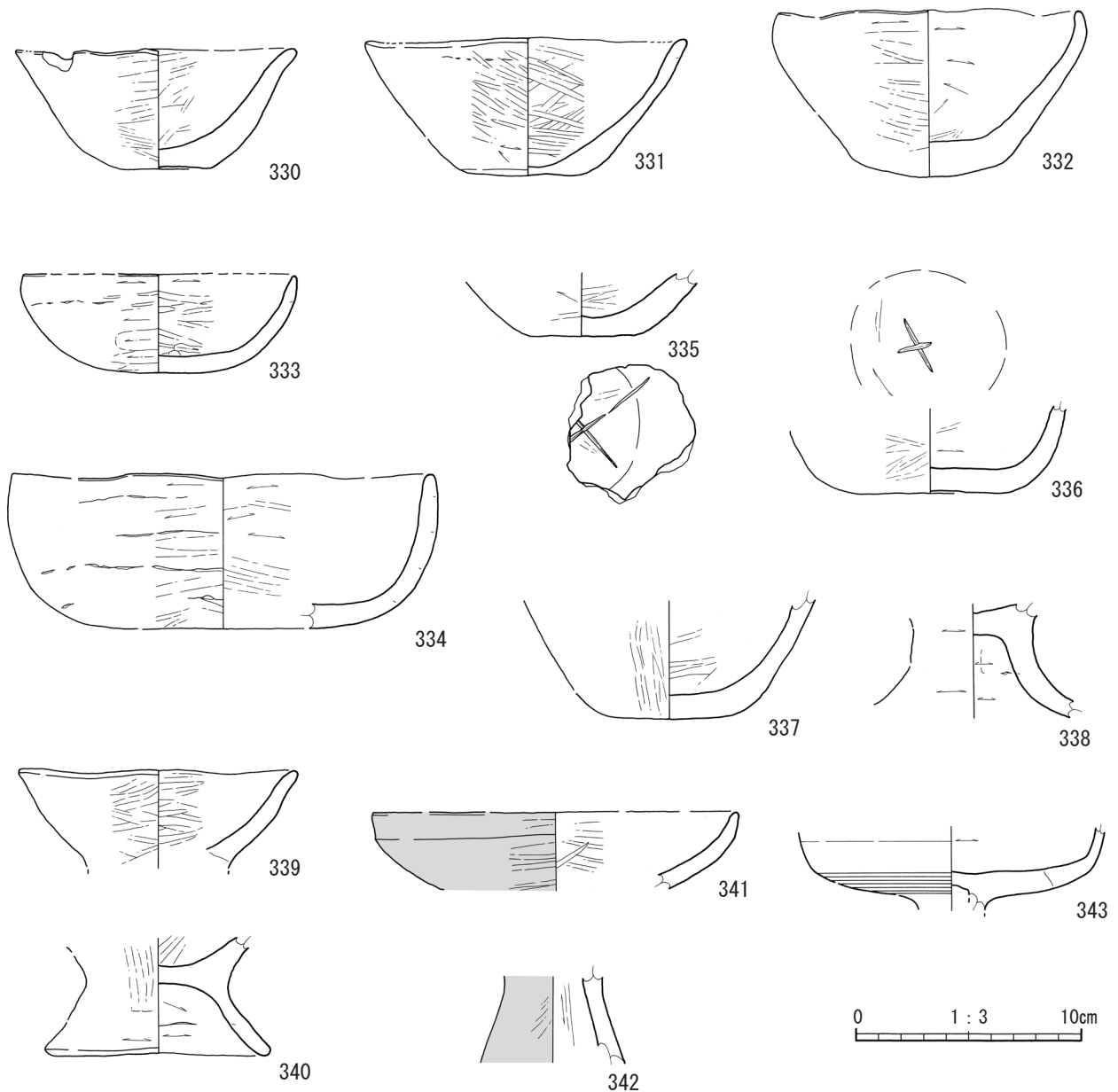
第61图 18号竖穴建物跡 出土遺物(2)



第62图 18号竖穴建物跡 出土遺物 (3)



第63图 18号竖穴建物跡 出土遺物(4)



第64図 18号竪穴建物跡 出土遺物（5）

と考える。一部床着出土で、SI20埋土内出土遺物とも接合している。

脚台（302～305）

304は、脚内面天井部に「一文字型」の突起が認められる。305は、内面に接合痕が目立つ。胎土に金色ウンモを含む。

平底（306～314）

306は、底部外面に調整工具の打ち込み痕が残る。
308は、外面に器面調整時に生じた胎土のしわが認められる。上げ底気味で、外底面はユビオサエ調整を行い、木葉痕がわずかに残る。
310～314は、外底面に木葉痕が残る。314はオオタニ

ワタリの木葉痕である。

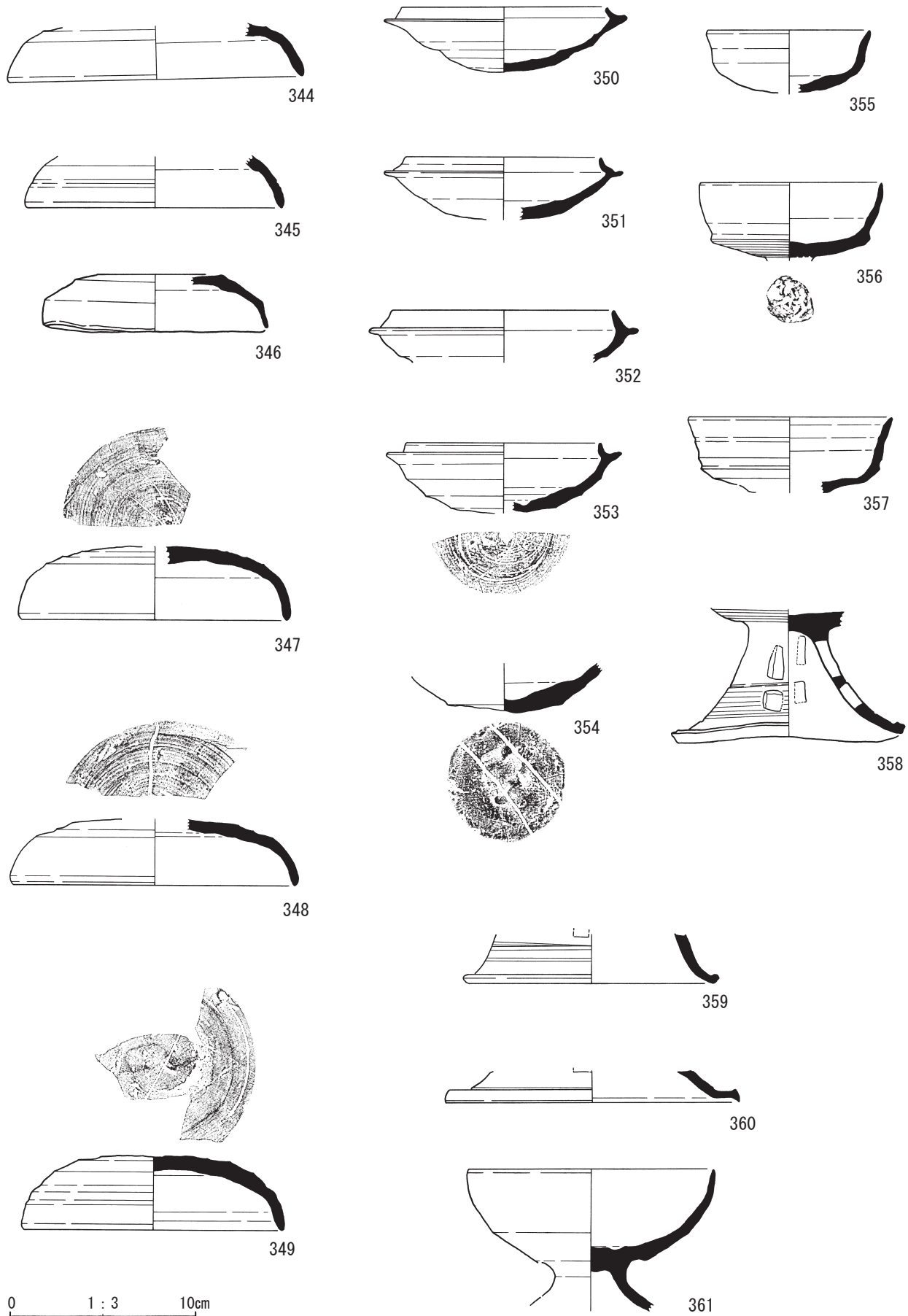
甑（315～319）

全て筒抜け形である。

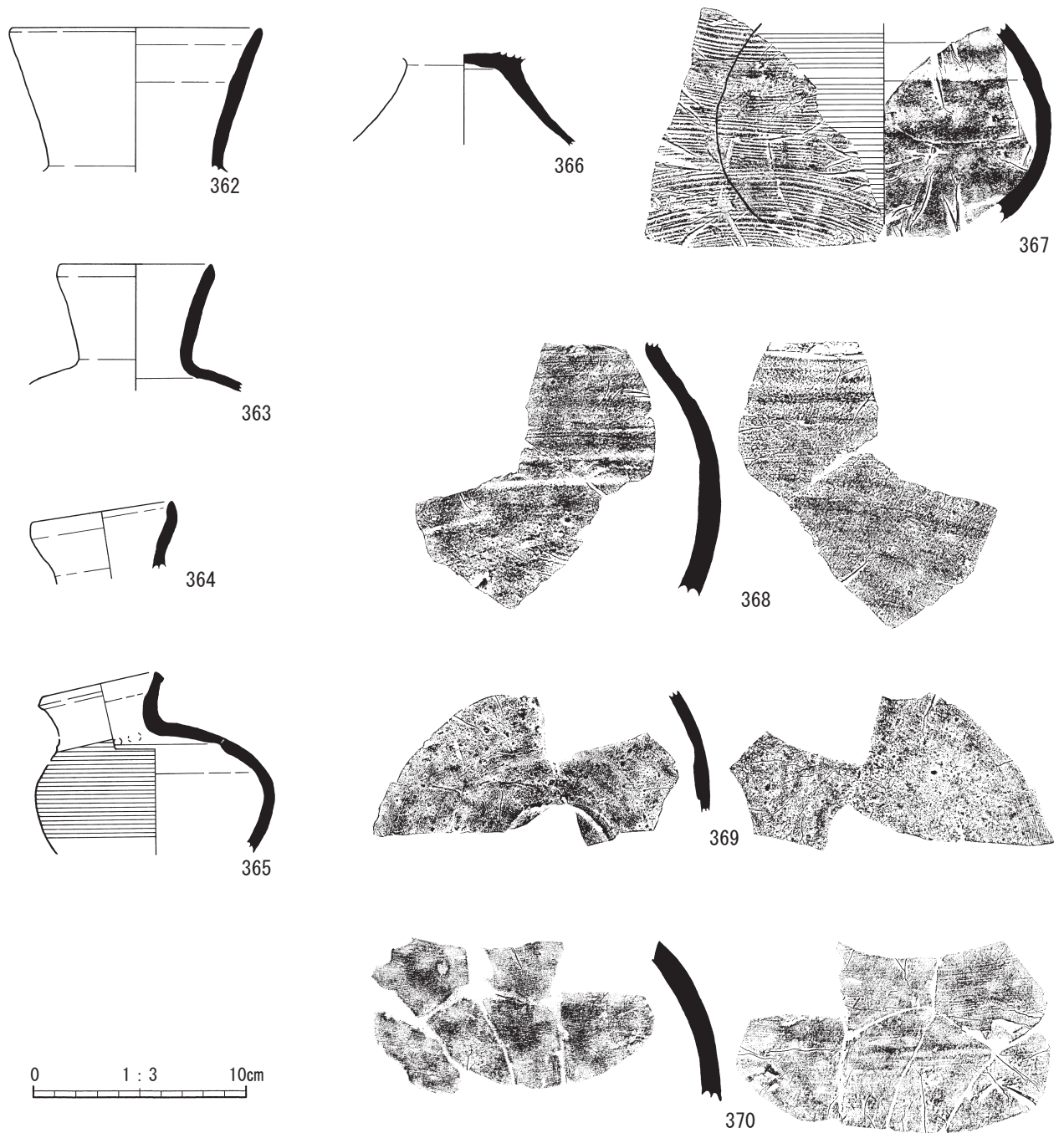
315は、外面に白色物質が付着する。白色物質下端径は14.0cm。

316は突帯に指頭押圧による刻みを施す。胴部外面に白色物質が付着する。白色物質下端径は21.6cm。

317～319は胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品である。317は、外面にススが付着し、ススの下位に白色物質がわずかに認められる。白色物質下端径は15.8cm。白色物質下端ラインに対応した内面ラインの上位は、器面があばた状に剥離している。



第65图 18号竖穴建物跡 出土遺物(6)



第66図 18号竖穴建物跡 出土遺物（7）

壺（320～324）

321は胎土の特徴から、都城盆地部からの搬入品の可能性がある。

323はナデ肩のもので、頸部に突帯を施さない。胎土に金色ウンモを含む。

鉢（325）

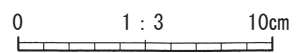
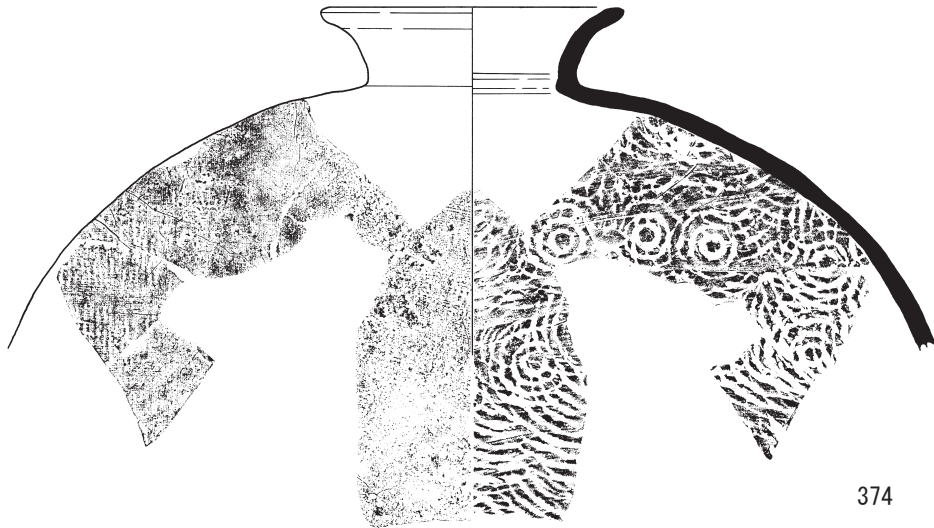
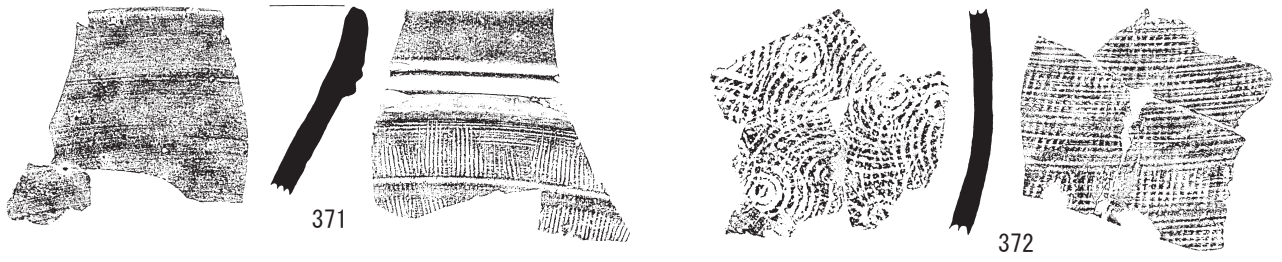
口縁端部の一部が凹んでおり、注口状になっている。外底面に、工具による線状痕が認められる。

坏（326～337）

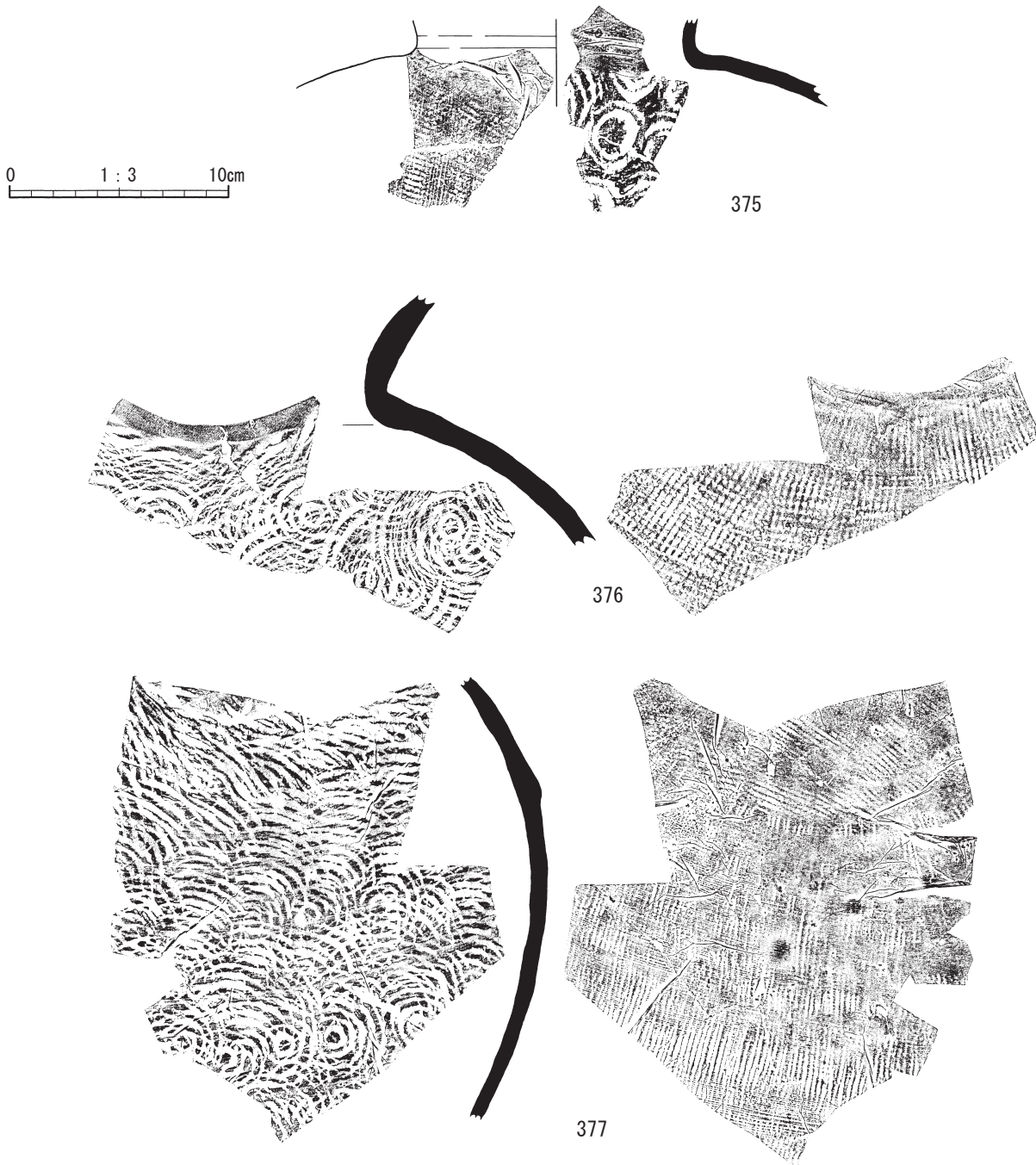
326～332・334～336は1類で、在来系のものである。

327は、外底面に木葉痕が残る。329は、口縁部が逆「く」字状に屈曲する。330は、口縁端部に意図的な打ち欠きが認められる。331は一部床着出土。

334は大型のもので、外面に接合痕が目立つ。335は外底面に、336は内面見込み部にヘラ記号がある。326～329・332・336は、黒色処理が行われる。



第67图 18号竖穴建物跡 出土遺物(8)



第68図 18号竪穴建物跡 出土遺物（9）

333・337は2類で、搬入品の可能性がある。333は、内面見込み部にヘラ記号のような沈線がうすく残る。

高坏（338～343）

338は、脚部内面にユビオサエ痕が残る。胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品と考える。339は、黒色処理が行われる。341・342は精製赤彩土器である。343は回転台土師器で、外面にカキ目が認められる。

イ 須恵器（344～377）

須恵器は、坏蓋、坏身、高坏、平瓶、提瓶、壺、甕を

確認した。

坏蓋（344～349）

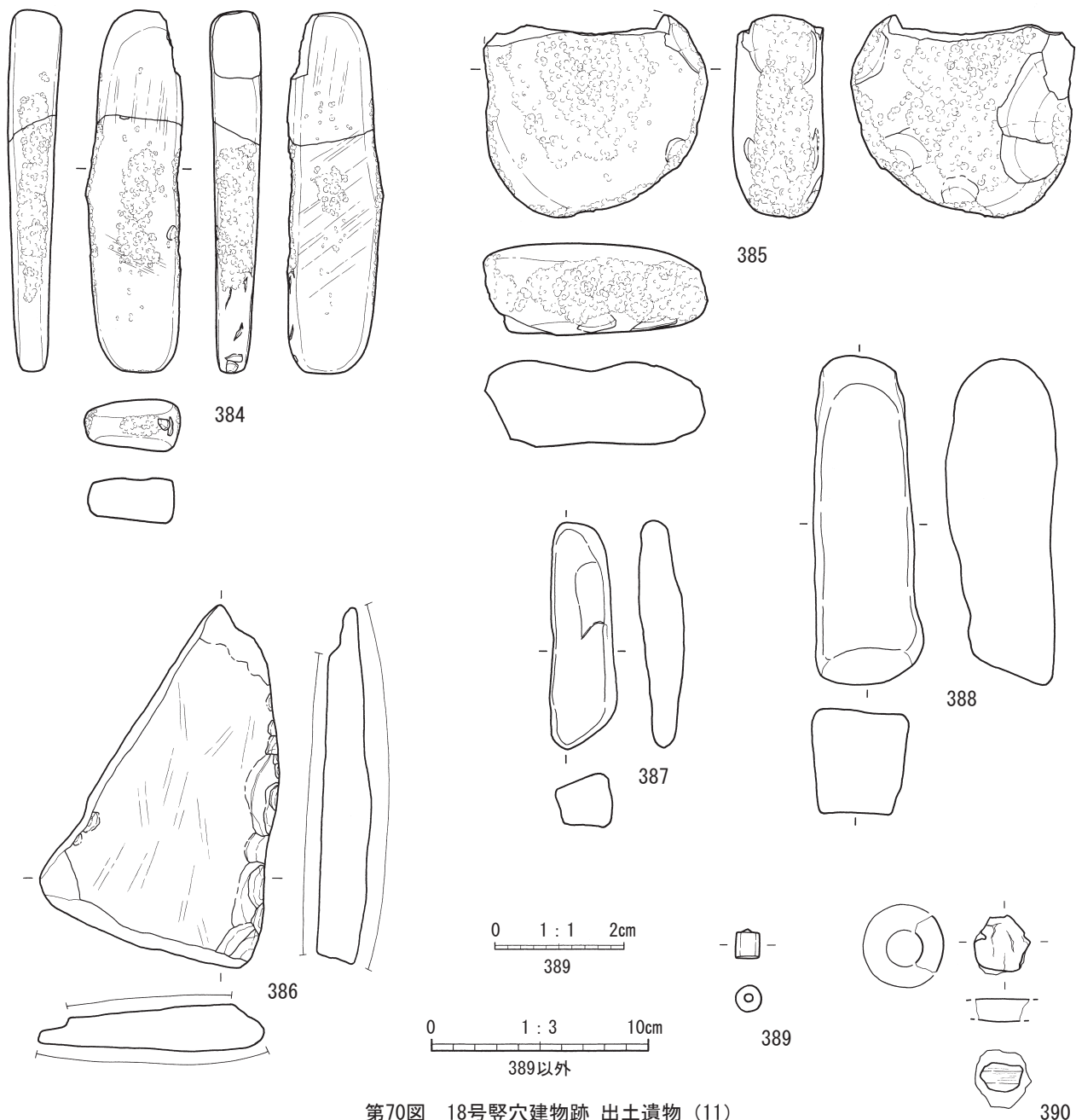
口径は12.0～15.0cmの範囲となる。

344・345は、天井部調整が不明である。346はヘラ切り未調整で、347～349は回転ヘラケズリが施されている。

345には、沈線のような段が一段巡っている。347・349は厚手のつくりである。347～349の天井部には、ヘラ記号が施されている。



第69图 18号竖穴建物跡 出土遺物 (10)



坏身 (350~354)

口径は10.5~12.0cmの範囲となる。

352以外の立ち上がりは短く、350・351は内傾している。底部調整は、352が欠損のため、351が灰被りのため不明だが、354はへら切り未調整、350・353は回転へらケズリが施されている。353・354の外底面には、へら記号が施されている。354は厚手のつくりである。

355は、底部の調整や残存状態、体部の立ち上がりから、坏Gの坏身と考える。ややS字状に外反する。竪穴埋土内可能性遺物である。

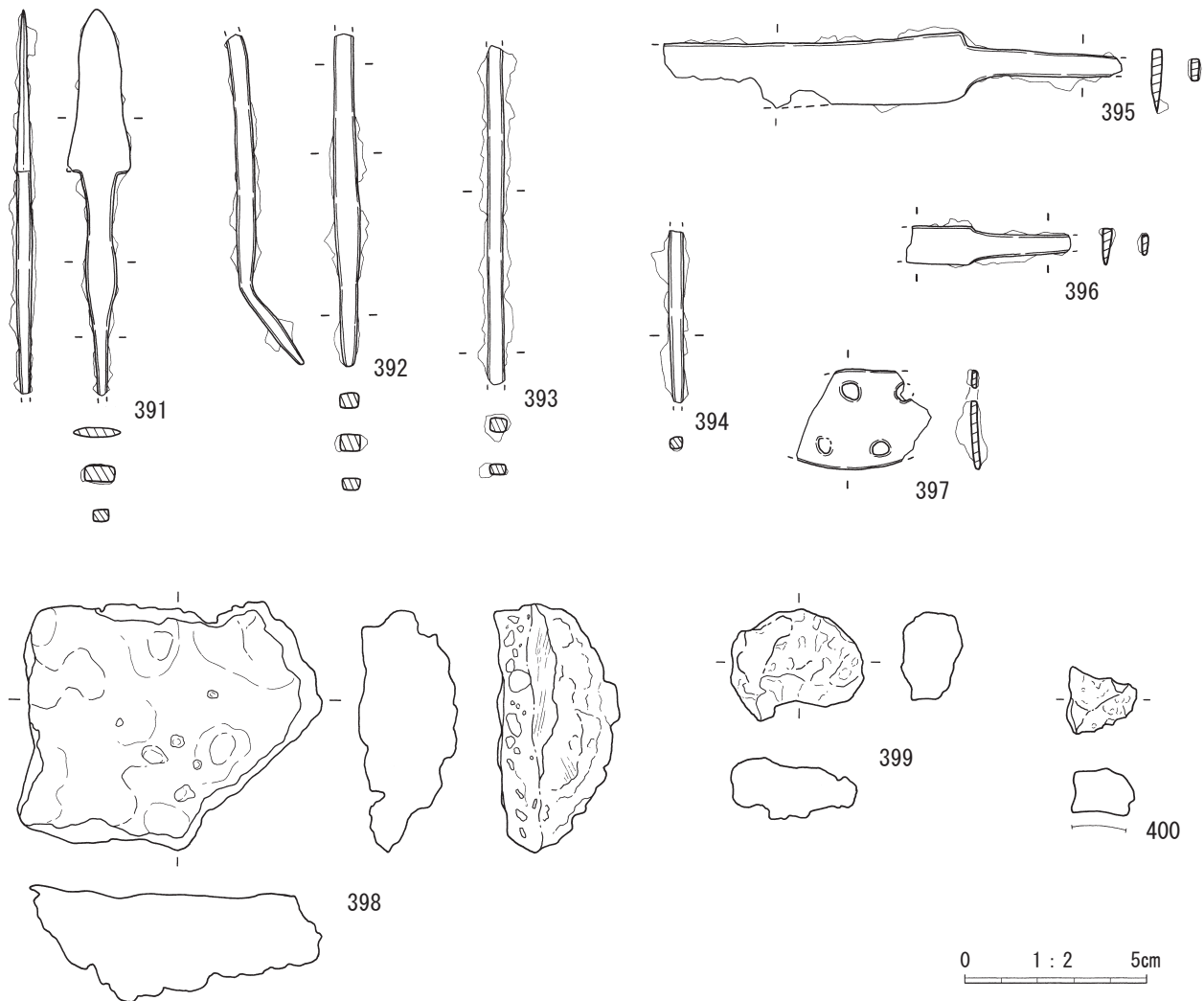
高坏 (356~361)

356・357は坏部である。356は下部にカキメが施されている。また、坏部と脚部の接合部断面には、へらによって刻まれた沈線がみられる。357には、明瞭な沈線と浅い沈線が2条巡らされている。貼床土内出土。

358は、坏下部から脚部が残存している。脚部には二段四方向の透かしが施されている。脚端部は外側に肥厚してはね上げており、器形はやや歪んでいる。

359と360は脚部のみで、どちらも透かしに沿って割れている。359は端部で丸みをもってはね上げており、伊藤田窯系高坏C I 3類の特徴に当てはまる。

360は端部を下方に鋭利につまみ上げている。



第71図 18号竪穴建物跡 出土遺物 (12)

361は焼成不良により全体的に白く、坏部は丸みを帯びている。

壺・平瓶・提瓶 (362~370)

362は、壺あるいは大型の平瓶の口縁部と考えられる。363は壺、364は平瓶の口縁部と考えられる。いずれも沈線などは施されない。

365は平瓶である。外面にはカキメが施され、内面にはくり抜き痕とユビオサエによる調整がみられる。

366・367は壺である。366は台付壺の脚部で、367は胴部である。367は外面にカキメが施されている。

368・370は壺の胴部である。368は内面上部に光沢のある部位がみられる。370は、断面に接合痕があり、接合痕に沿って割れたと考える。SI20とSI21の埋土内出土遺物、そして包含層出土遺物と接合している。

369は提瓶の胴部である。外面は灰被りによって調整が確認できないが、内面にくり抜き痕がみられる。

甕 (371~377)

371は口縁部である。2条の突帯が巡り、櫛歯文の文

様が施されている。

372・377は胴部で、372は焼成不良により白い仕上がりになっている。SI19埋土内出土遺物と接合している。

377は外面に自然釉が薄くかかっており、外面に5~6箇所ほど気泡のような膨らみがある。SI20とSI21の埋土内出土遺物、そして包含層出土遺物と接合している。

373・374は口縁部から胴部が残存している。どちらも、胴部の径に対して口径が半分程かそれ以下になっている。374は、SI19とSI20の埋土内出土遺物と接合している。

375・376は、頸部から胴部が残存している。375は少し薄手の作りになっており、外面と内面に磨滅した部位がある。

ウ 石器 (378~386)

石器は、石鎚と砥石を確認した。

石鎚 (378~385)

378~382は、棒状を呈する2類である。

378は、正・裏面に凹みがある。379は、正・裏面に凹みが認められ、上・下面も敲打痕が顕著である。

380は、下面に抉れるほどの敲打痕が認められる。381は、正・裏面がかなり凹んでいる。382は床着出土。

383～385は、断面が扁平となる3類である。

383は、正面がかなり凹んでいる。そして周縁は抉れるほど使用されている。

384の正面と両側面は、著しい敲打痕が認められる。磨面も確認できる。

385は、正・裏面に凹みがあり、周縁の敲打痕も著しい。赤化している。

なお、378・382・383について、寒川朋枝氏に残存デンプン粒分析を行っていただいた。しかし、デンプン粒は検出されなかった。

砥石 (386)

正面を顕著に使用している。器面に鉄分が付着する。

棒状礫 (387・388)

41点確認した。387・388を含め、床着出土は6点である。

石製品 (389)

炉埋土の一部を水洗した結果、389のような5mm以下の玉製品を3点確認した。

エ ふいご羽口 (390)

外面は被熱により灰白色を呈し、ひび割れも認められる。内径は1.7cmである。

オ 鉄器 (391～397)

鉄器は、鉄鏝、刀子、棒状工具などを確認した。

391は長三角形式の鉄鏝で、貼床土内出土。

392・393は鉄鏝茎部の可能性があるもので、392は下部で折れ曲がっている。

394は棒状工具と考えられるものである。

395・396は刀子で、395は錆化が著しい。397は器種不明で、孔が4箇所認められる。

カ 鉄滓等 (398～400)

398は炉壁で、内面はガラス質化している。

399は、鍛冶滓の可能性があるので、裏面に砂粒が付着している。

400は製錬滓の可能性があるので、裏面にハツリ痕が認められる。

キ 軽石

160点程認められた。長径50cmを超えるものが複数床着出土している。被熱し、赤化したものや加工痕が認められるものもある。

11 19号竪穴建物 (SI19) (第72・73図)

(1) 検出

H・I-4・5区のIV層上面で検出した。検出レベルは、31.38～31.35mである。II層掘り下げ時から、アカホヤ層土 (VIa層土) が混ざった土が確認されており、遺構の存在が予想されていた。

平面形は、4.9×4.7mの方形を呈する。やや平行四辺形気味である。東壁の一部は新しい攪乱により切られている。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は7層 (a～g) に分けられ、埋土 a～f は竪穴埋没土、埋土 g は貼床土である。竪穴埋没土は、下位ほどアカホヤ層土が多くなる。埋土 c は部分的に、埋土 d～f は壁際にのみ存在する。

a : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石 (1cm程) やアカホヤ層土を含む。

b : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土 (1～5cm程) や池田降下軽石を含む。

c : 暗褐色 (10YR3/4) シルト質土で、締まりがある。白色軽石 (1cm程) を多く含む。土が酸化して、錆びている感じである。

d : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土 (1cm以下) を含む。

e : 黒色 (10YR2/1) シルト質土で、締まりがある。御池火山灰が目立つ。IV層土に類似する。

f : 黒褐色 (10YR3/2) シルト質土で、締まりが弱い。アカホヤ層土を多く含む。

g : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、硬く締まっている。アカホヤブロック (5～10cm程) を多く含む。層厚は10～25cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土 g を検出し、その面を床面 (生活面) と捉えた。

床面の検出レベルは31.00mで、遺構検出面からの深さは約40cmを測る。

竪穴中央付近で硬化面を検出した。この硬化面の広がり把握のために精査を行ったが、残存していたのは中央付近のみであった。

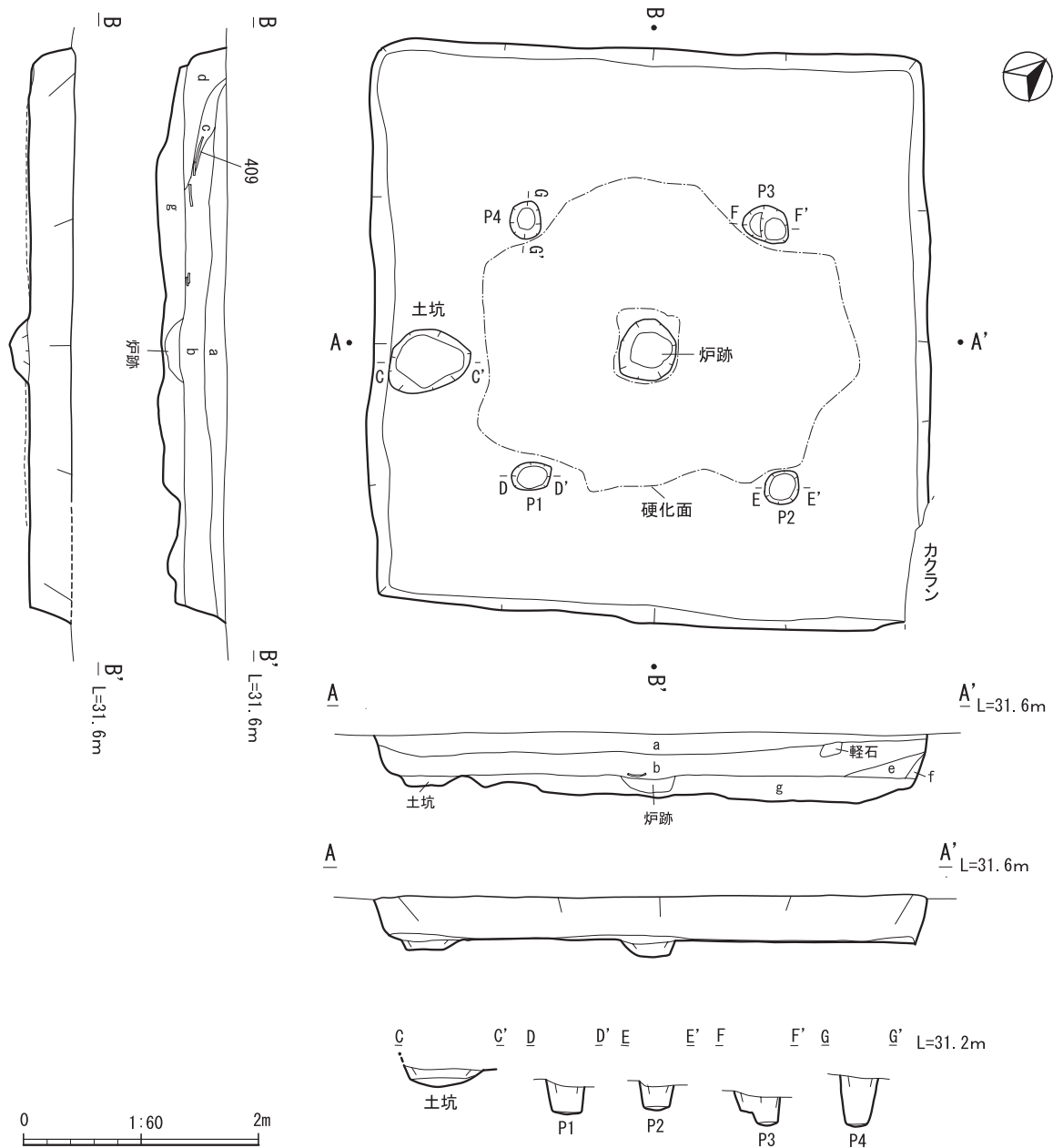
(4) 炉

ベルトを床面まで掘り下げると、竪穴中央に硬化面が認められず、赤味を帯びた土が広がる箇所があり、そこを炉と捉えた。

平面形は、0.5×0.5mの円形を呈する。深さは約13cmを測り、床面は貼床土 (埋土 g) である。

埋土は、褐色 (7.5YR4/6) シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土が焼けたような感じである。炭化物や灰は認められなかった。

炉内埋土と炉周辺のベルトの土壌は、サンプリングを



第72図 19号竖穴建物跡 平・断面図

行っている。炉内埋土の一部を水洗したもの、何も抽出されていない。

(5) 土坑

床面検出時に竖穴南壁際において土坑を確認した。

平面形は、0.70×0.53mの楕円形を呈する。深さは10cmを測り、床面はアカホヤ層である。

埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりが弱く、下部にアカホヤブロック(3cm程)を多く含む。

(6) 掘方

竖穴床面下場と硬化面範囲を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第73図)。

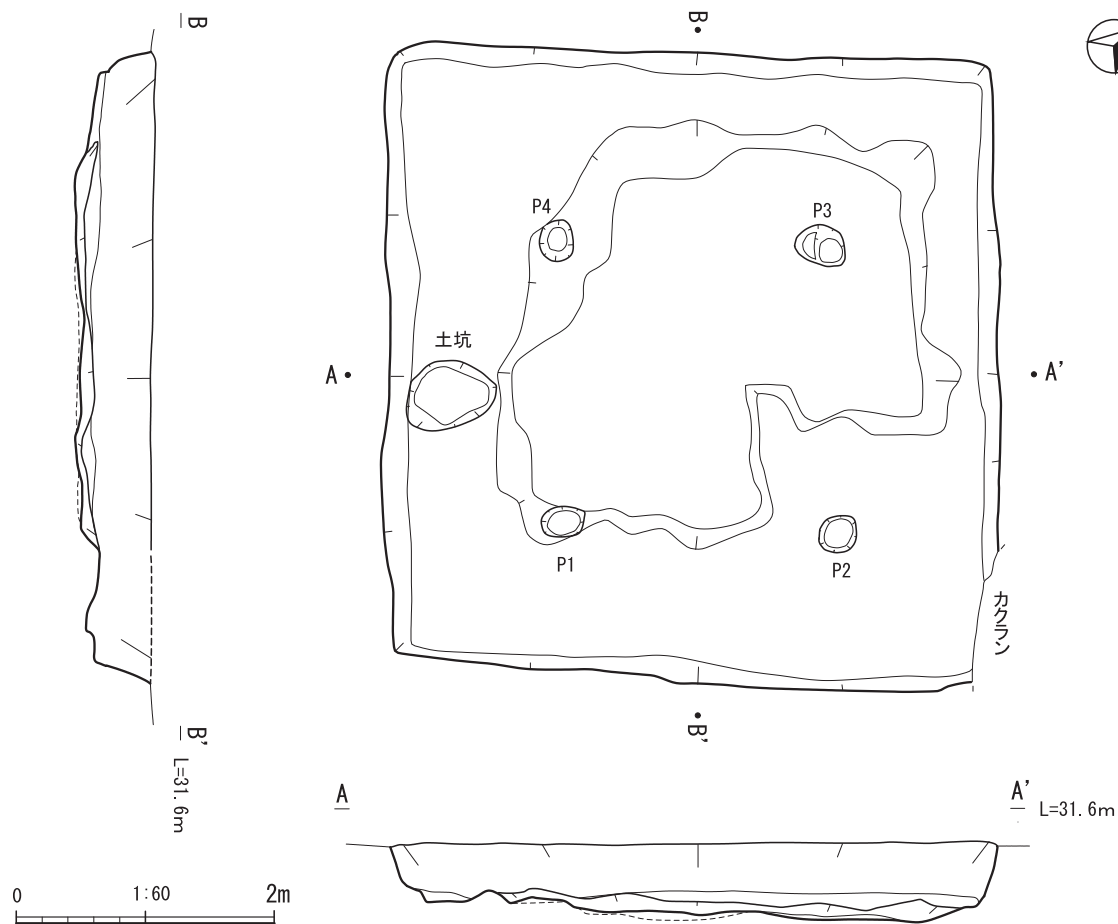
掘方の基盤層はアカホヤ層で、場所によってはアカホヤ層下部に達している。掘方は二段になっており、最深部のレベルは30.78mで、遺構検出面からの深さは約60cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(7) 柱穴

柱穴は床面では確認できず、掘方床面において4基検出した。床面はⅦ層に達しており、底面がとても締まっている。

埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土を多く含む。



第73図 19号竪穴建物跡 掘方平・断面図

各柱穴の属性（長径×短径×深さ）は以下のとおり。

P 1 : 0.35×0.24×0.20m

P 2 : 0.33×0.30×0.20m

P 3 : 0.42×0.31×0.24m

P 4 : 0.33×0.27×0.44m

その配列から、4本柱建物である。

(8) 遺物 (第74~79図401~440)

遺物は、番号取上分で376点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると687点を数える（一括取上分除く）。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄器、鉄滓、軽石が認められ、43点図示した。

ア 土器 (401~426)

土器は、甕、甑、壺、鉢、坏、高坏を確認した。

甕 (401~414)

1類 (401)

口縁部が内湾するもの。突帯に3条1単位の刻みを施す。刻みには布痕が残る。内面に接合痕が目立つ。

2類 (402~406)

口縁部が直行するもの。

402は突帯に密な刻みを施す。大きさの割に薄手である。一部床着出土。

403は突帯にユビナデ上げ刻みを広い間隔で施す。内面に接合痕が目立つ。底部内面に炭化物が残る。床着出土。

404は、器高より口径が大きいものである。突帯にユビナデ上げ刻みを施す。

405は、突帯に刻みが認められないものの、一箇所だけ指頭押圧しているところがある。

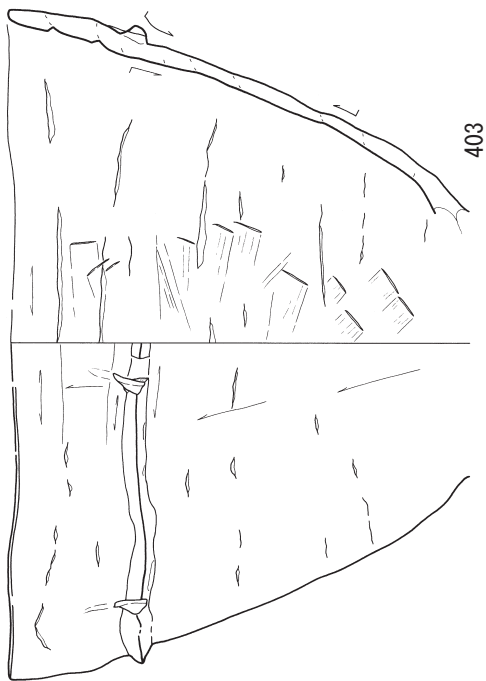
406は突帯にユビナデ上げ刻みを広い間隔で施す。脚端部に白色物質が付着する。405・406は脚台をもつ、大きさの割に薄手、口径がほぼ同じ、胎土に金色ウンモを含むなど、規格性が高い。そして床着出土である。

3類 (407~410)

口縁端部でやや外反するもの。

407・408は突帯にユビナデ上げ刻みを狭い間隔で施す。408は、内面に接合痕が目立つ。一部床着出土。

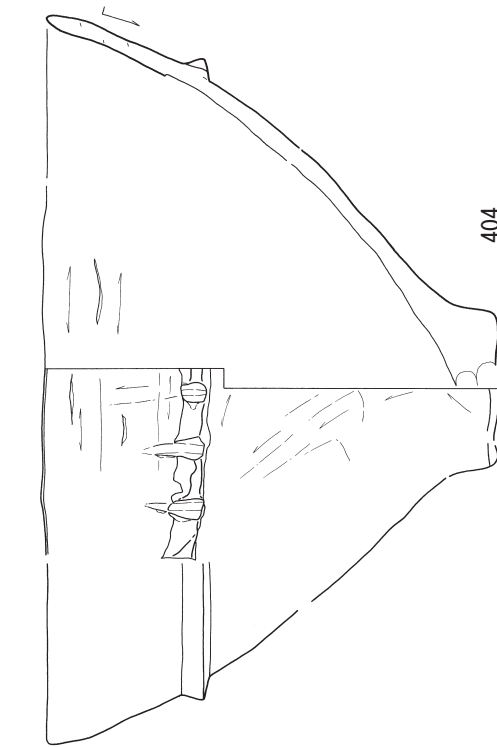
409は、間隔が広いところがあれば狭いところがあるなど不規則に刻みを突帯に施す。胴部下位に残る器面調整工具痕から、平底になると考える。内外面に接合痕が



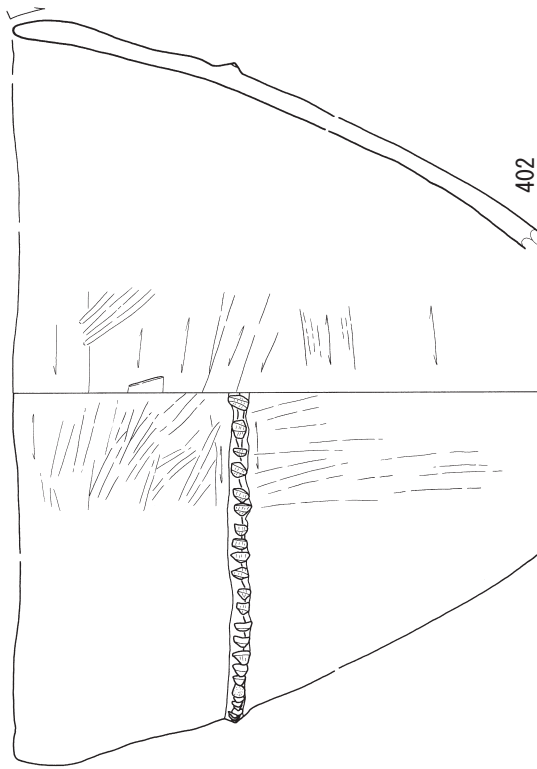
403



401



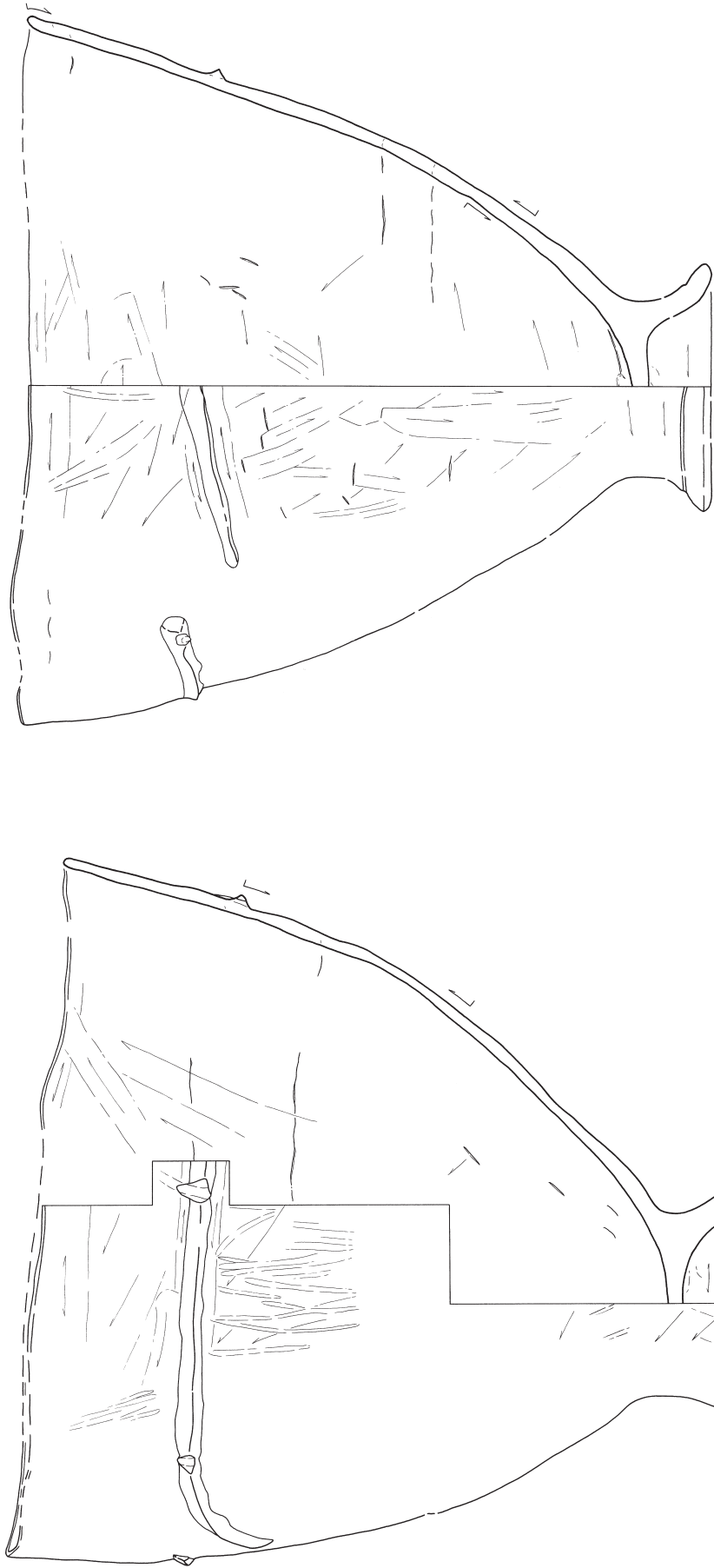
404



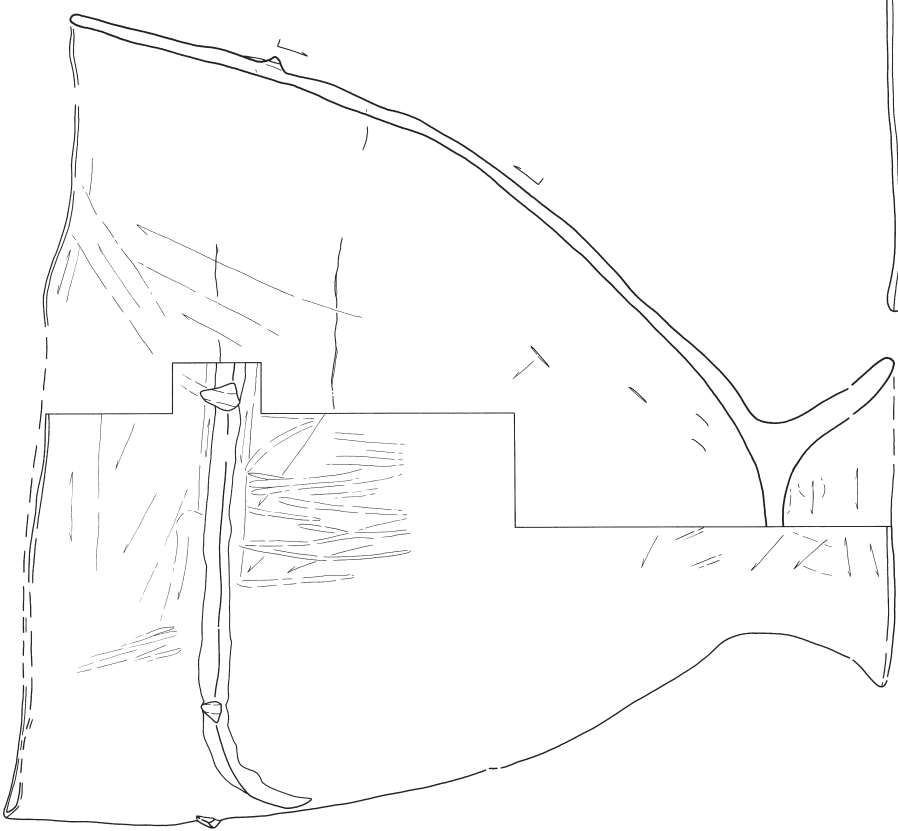
402



第74図 19号竖穴建物跡 出土遺物 (1)



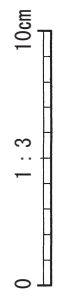
405



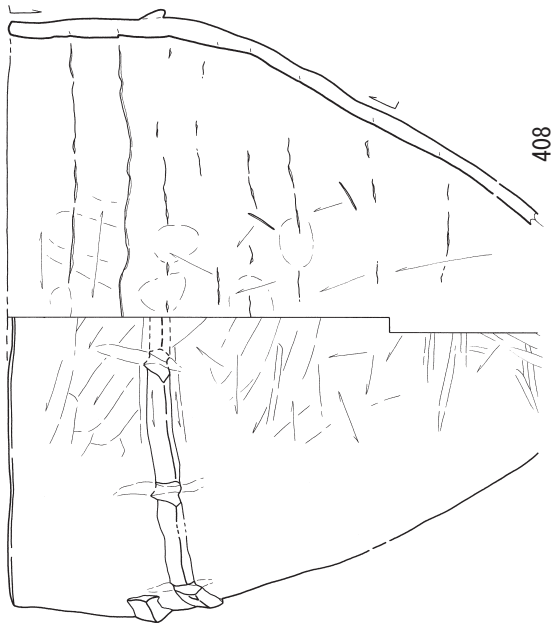
406



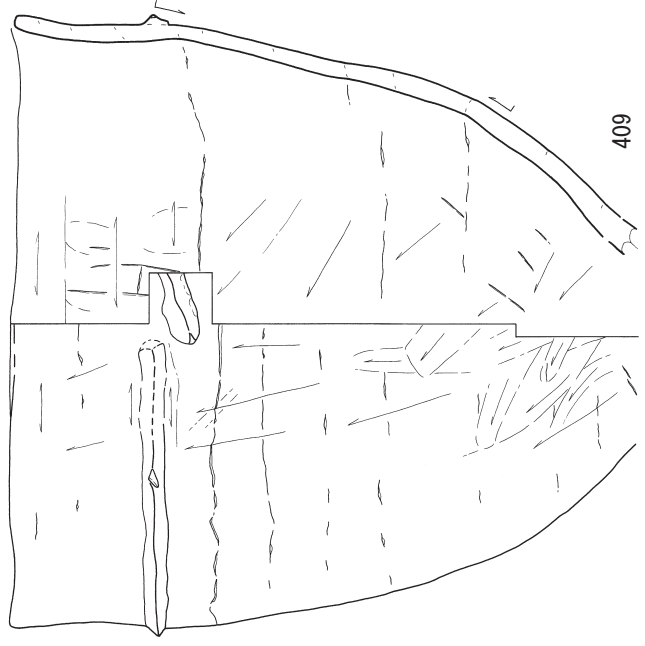
407



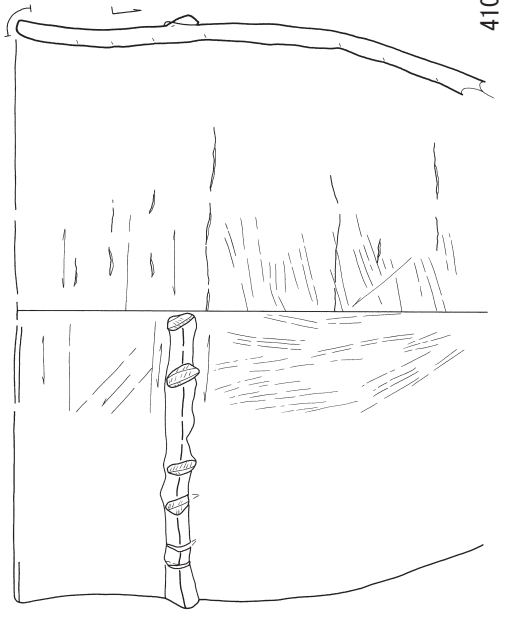
第75图 19号竖穴建物跡 出土遺物 (2)



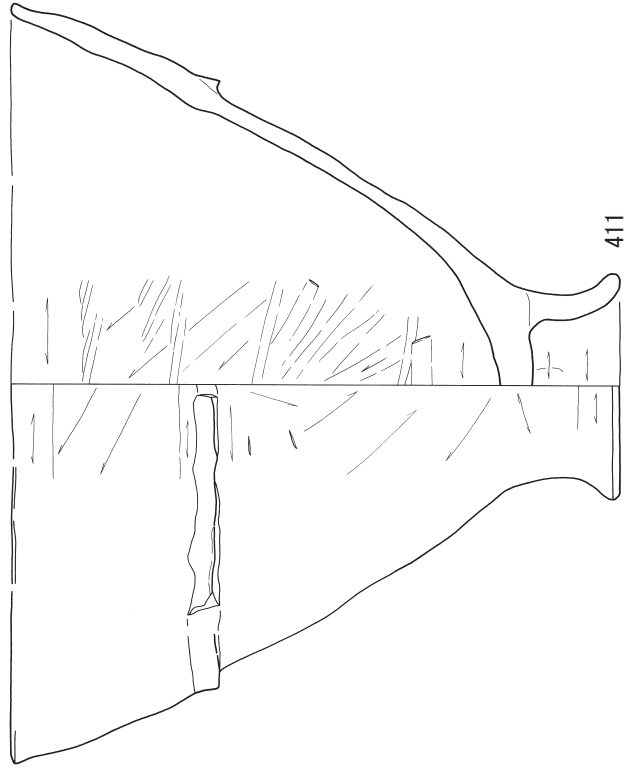
408



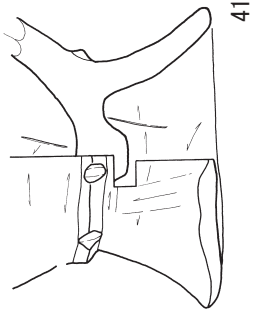
409



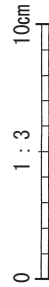
410



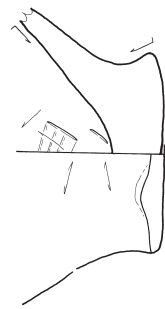
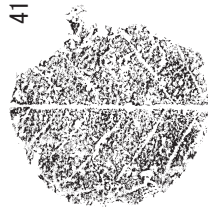
411



412



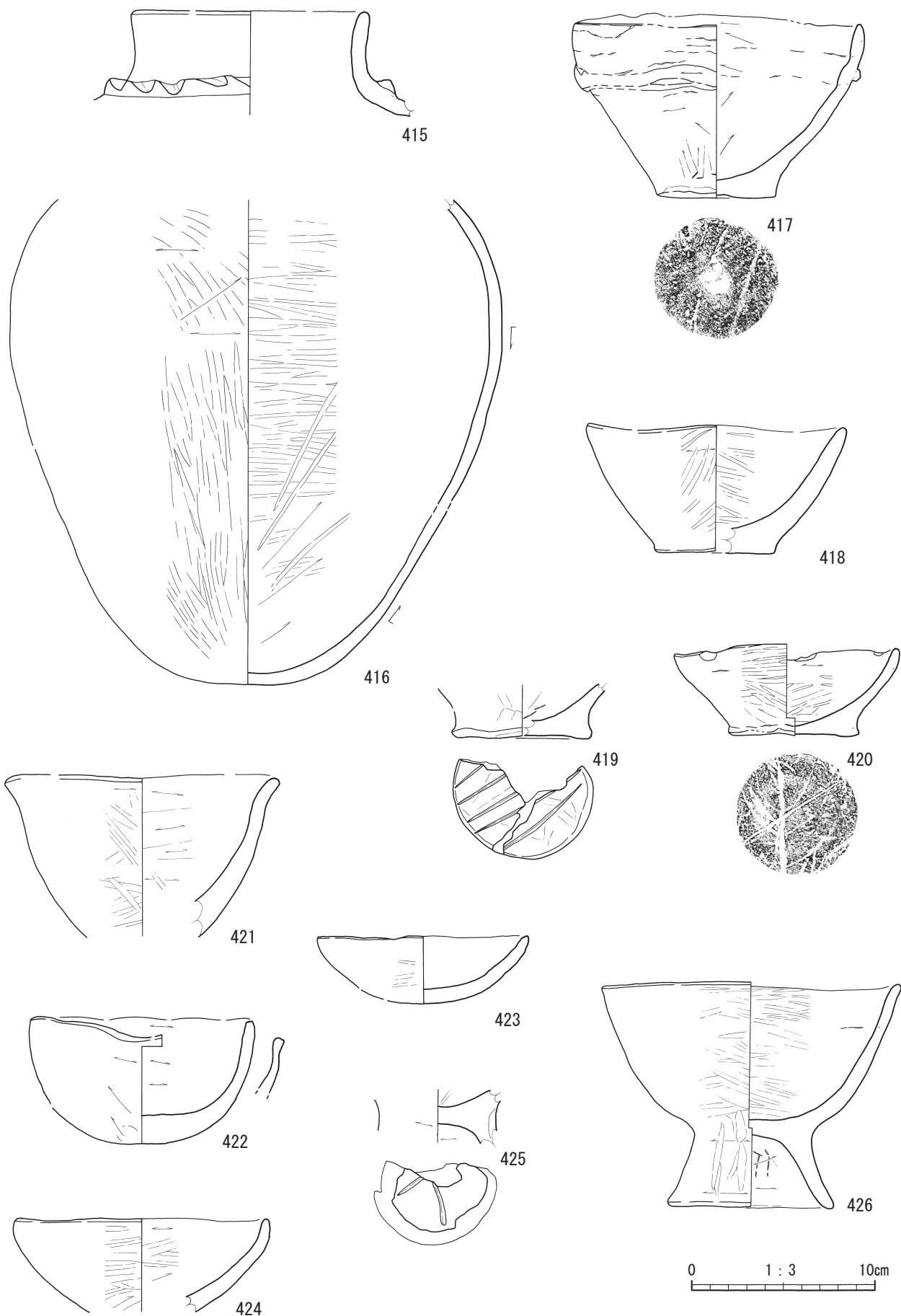
413



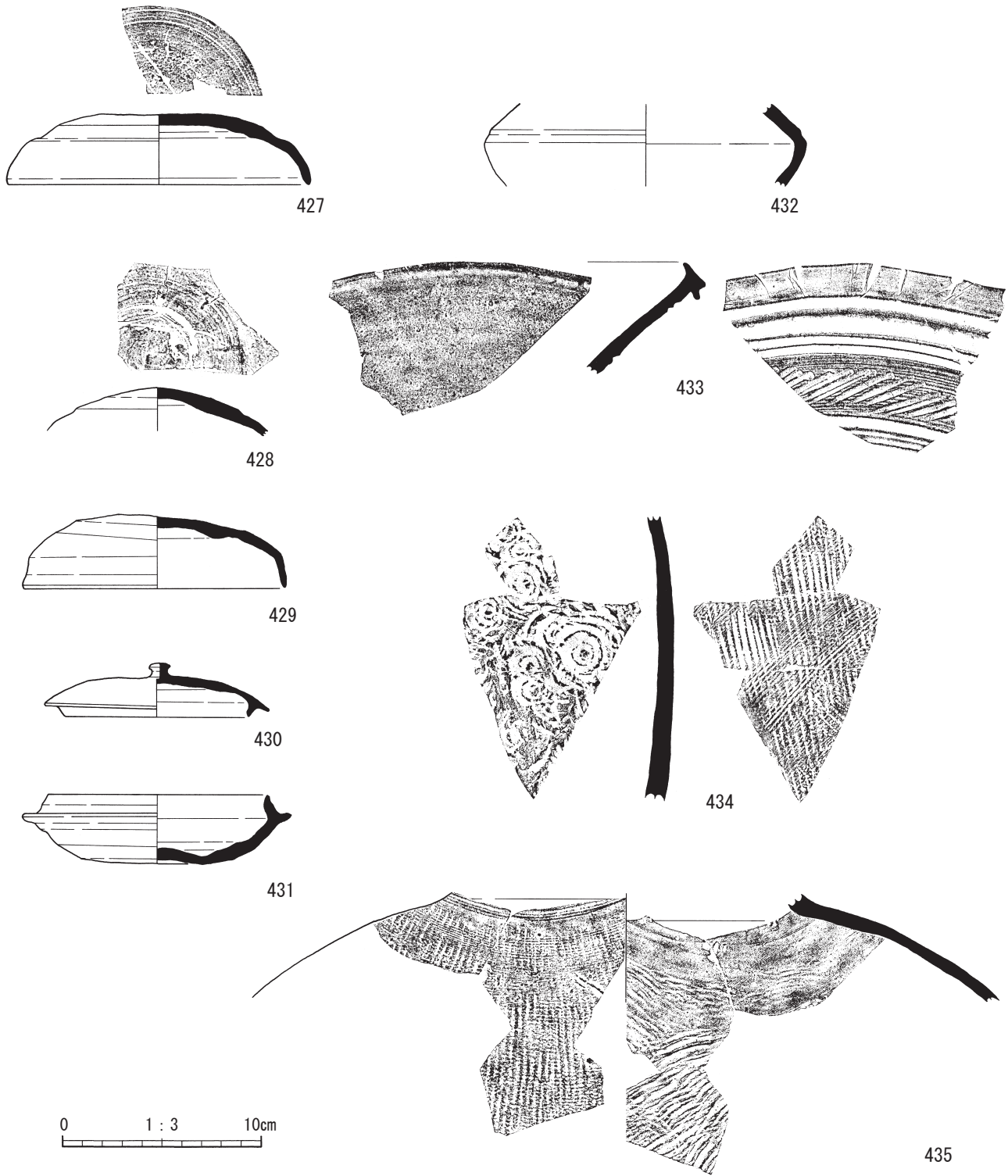
414



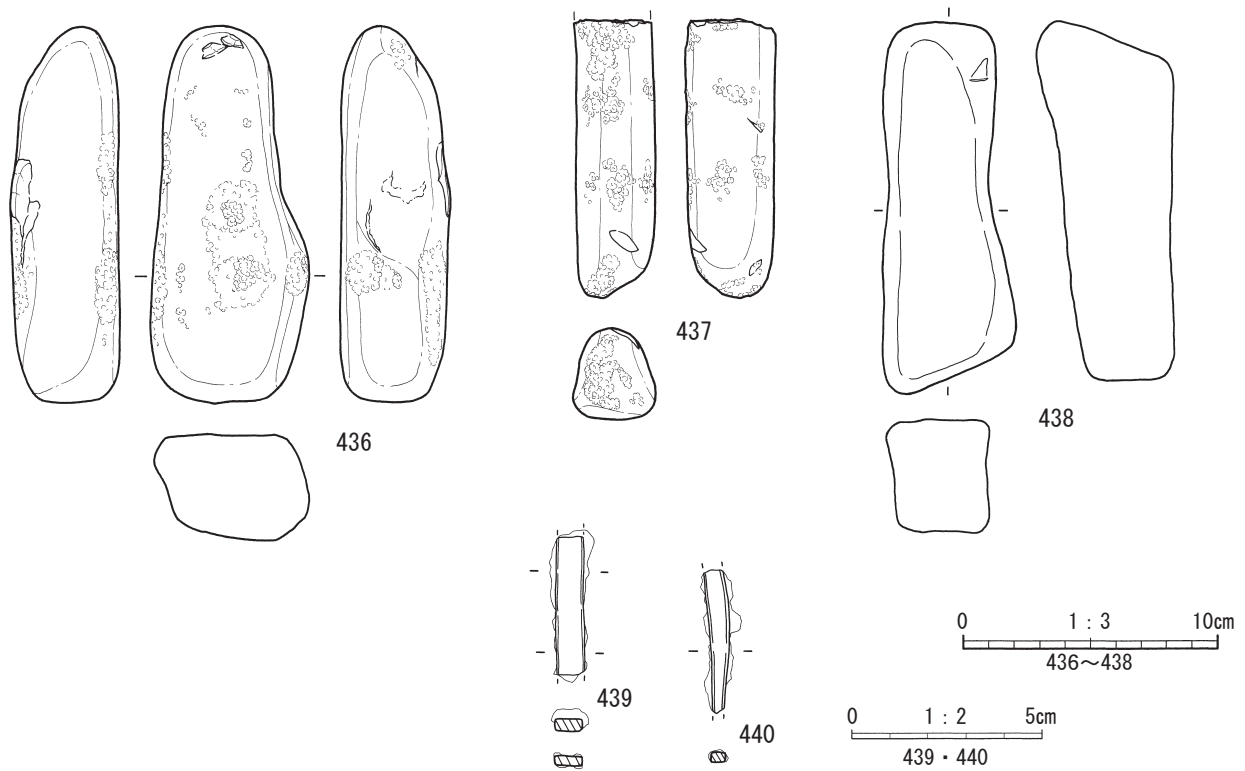
第76图 19号竖穴建物跡 出土遺物 (3)



第77图 19号竖穴建物跡 出土遺物(4)



第78图 19号竖穴建物跡 出土遺物（5）



第79図 19号竪穴建物跡 出土遺物（6）

残る。

410は突帯に2条1単位の刻みを施す。口縁端部に白色物質が付着する。薄手のつくりで、胎土に金色ウンモを含む。

4類（411）

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。器高より口径が大きい。突帯に刻みの有無は確認できない。器面に鉄分が付着している。

脚台（412）

胴部と脚部の境に突帯を施す。脚台内面天井部が円柱状に突出する。

平底（413・414）

ともに外底面に木葉痕が残る。413は胎土の特徴から都城盆地部からの搬入品の可能性がある。414は、外底面に白色物質が付着する。

甑

外面に白色物質が付着する胴部片を確認した。

壺（415・416）

415は短頸のものである。416は、外面にススが付着する。大ききの割に薄手で、胎土に金色ウンモを含む。一部床着出土。

鉢（417・421）

417は突帯を施すもので、外底面に木葉痕がわずかに残る。

坏（418～420・422～424）

418～423は1類で、在来系のものである。

419は外底面に5条の沈線が施されており、木葉痕を模した可能性がある。黒色処理が行われている。床着出土。

420は、口縁端部に意図的な打ち欠きがある以外完形である。外底面に木葉痕が残る。床着出土。

422は、口縁部が凹むところが一箇所あり、注口の可能性がある。一部床着出土。423は黒色処理が行われる。

424は2類で、胎土の特徴から搬入品の可能性がある。

高坏（425・426）

425は、脚台内面天井部にヘラ記号が認められる。胎土の特徴や色調から搬入品の可能性がある。

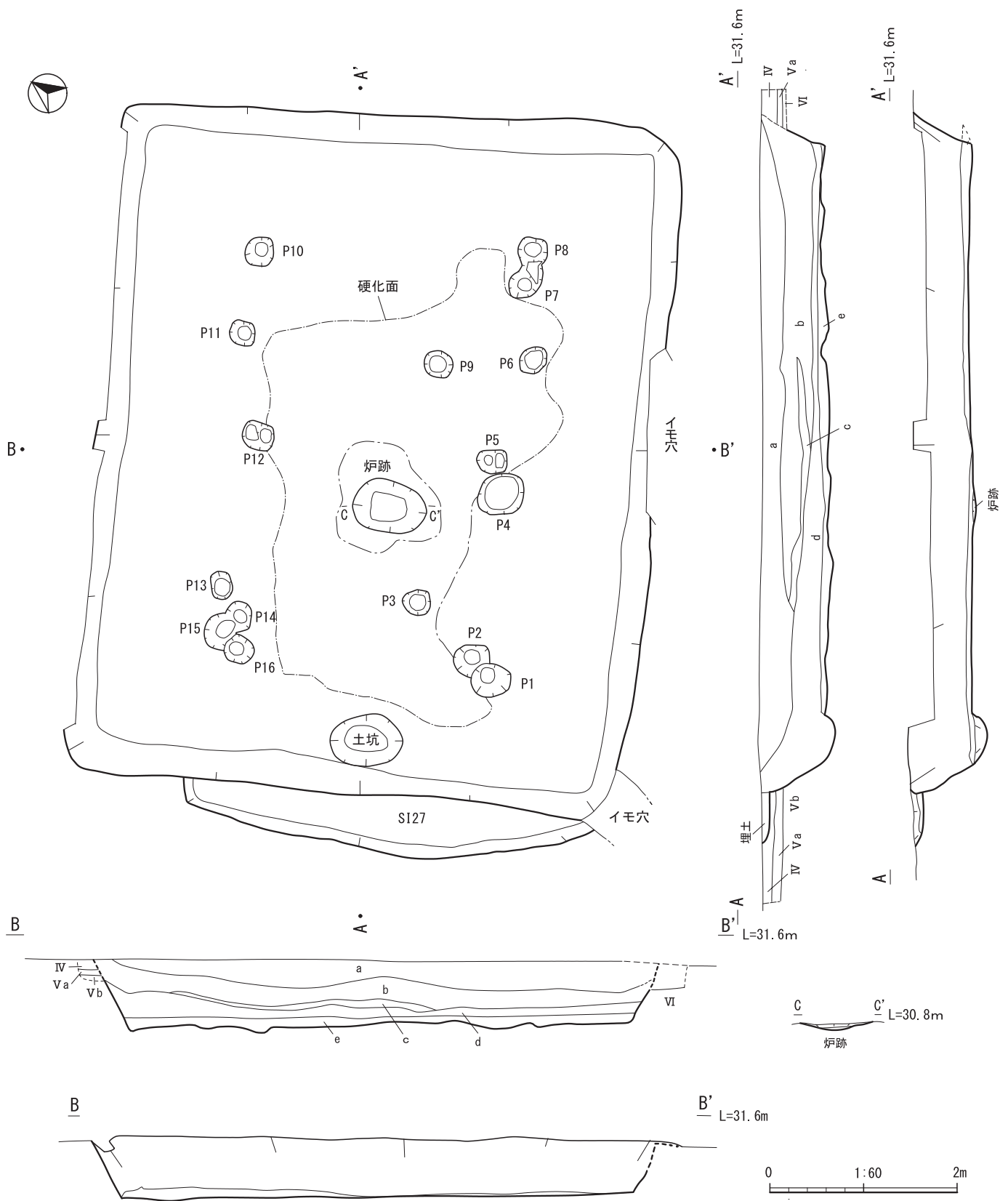
426の脚部外面は暗文風のタテミガキ調整を行う。床着出土。このほか、精製赤彩土器の破片を確認した。

イ 須恵器（427～435）

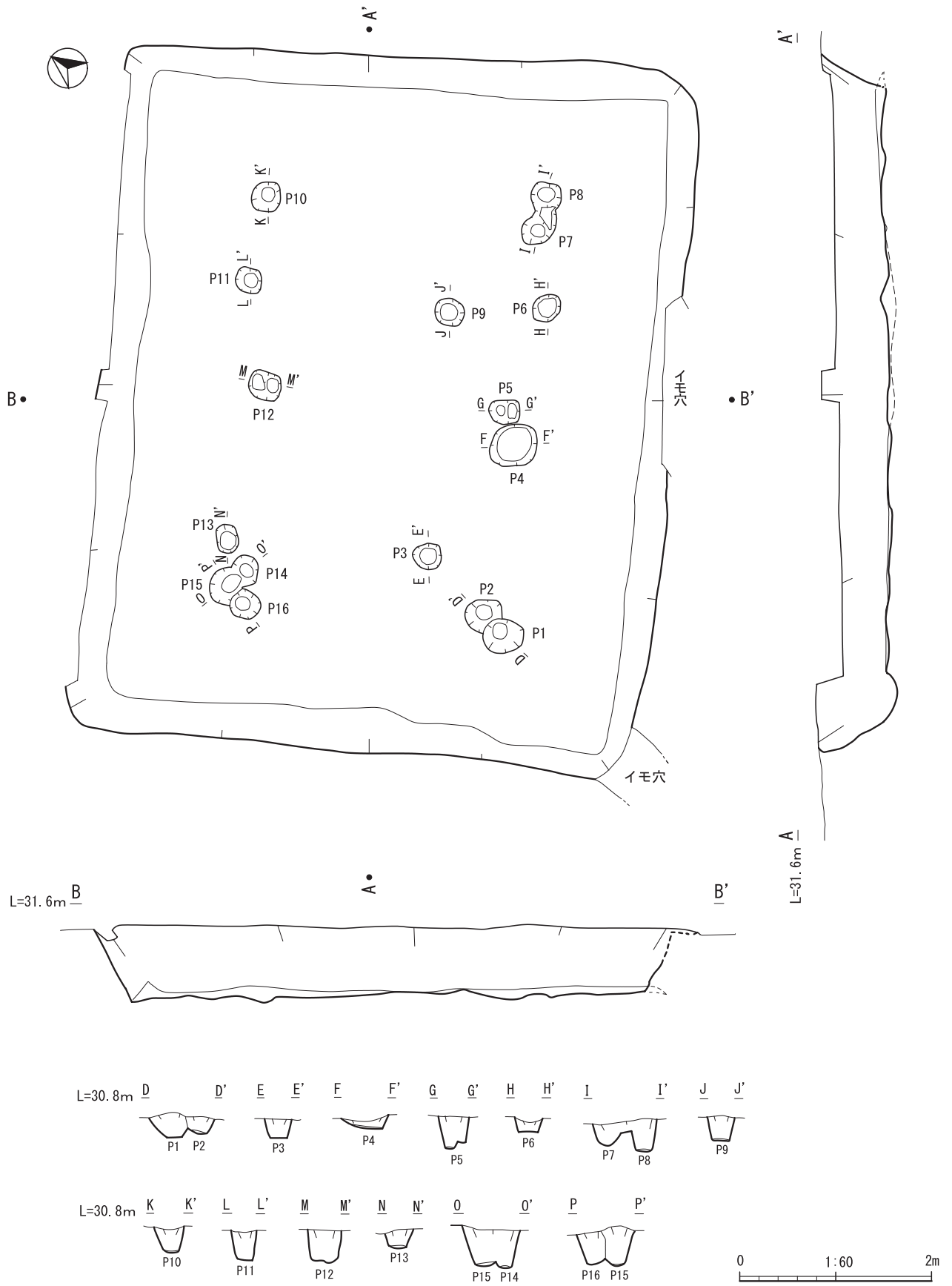
須恵器は、坏蓋、坏身、壺、甕を確認した。

427～430は坏蓋である。427～429の天井部調整はいずれも回転ヘラケズリである。427・428はヘラ記号も施されている。428は貼床土内出土。429は床着出土。430はかえりつつまみを有し、外面は灰被りによって調整が確認できない。

431は坏身である。立ち上がりは少し高く、底部はヘラ切り未調整である。床着出土。



第80图 20・27号竖穴建物跡 平・断面图



第81図 20号竖穴建物跡 掘方平・断面図

432は壺の肩部で、沈線が1条施されている。

433～435は甕である。433は少し薄手の口縁部で、垂下するように突帯が巡る。端部は内側につまみ上げ、ヘラによる斜線文が施されている。SI20埋土内出土遺物と接合している。

434・435は胴部である。434は焼成不良により白い仕上がりとなっており、435は断面が紫褐色である。434はSI20とSI21の埋土内出土遺物と接合している。435はSI21埋土内出土遺物と接合している。

ウ 石器 (436・437)

石器は、石槌と砥石を確認した。

436・437は棒状を呈する2類の石槌である。437は正面の敲打痕が著しい。貼床土内出土。

砥石は天草石を利用したものである。

エ 棒状礫 (438)

14点確認した。438は床着出土。炉埋土内から出土したものもある。

オ 鉄器 (439・440)

鉄器は、鉄鏃の可能性のあるものを確認した。

439・440は、鉄鏃茎部の可能性がある。

カ 鉄滓 (第137・138図789・799・800)

全て遺構検出レベル上位出土のもので、竪穴埋土内可能性遺物である。789は炉壁、799・800は流動滓である。詳細は第9節で述べる。799は金属分析試料No.3である。

キ 軽石

長径5～30cm程のものが多数出土している。炉埋土内からも1点出土しており、赤化している。

12 20号竪穴建物 (SI20) (第80・81図)

(1) 検出

G・H-5区のIV層上面で検出した。検出レベルは、31.38～31.32mである。II層掘り下げ時から周囲よりも白色化した池田降下軽石が多く認められ、遺構の存在が予想されていた。

平面形は、7.3×6.0mの長方形を呈する。南西側は、27号竪穴建物を切っている。27号との関係を見るために27号を含んだ形でベルトを設定して、掘り下げを行った。

検出時は、平面プランが明確ではなく、その状況でベルトを設定したためにベルトの軸と竪穴建物の軸にずれが生じている。さらに北西部は掘りすぎたためにVb層上面での上場ラインとなっている。

(2) 埋土

竪穴埋土は5層(a～e)に分けられ、埋土a～dは竪穴埋没土、埋土eは貼床土である。レンズ状堆積が認められる。

a：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石(1cm以下)を多く含む。アカホヤ層(VIa層)土をわずかに含む。

b：黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、かなり締まりがある。アカホヤ層土を多く含む。かなりしまっていることから、当初床面と思っただけである。

c：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土(0.5cm程)やIV層土を含む。

d：暗褐色(10YR3/3)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土を多く含み、ブロック状(2～5cm)のアカホヤ層土もある。池田降下軽石(1cm以下)をわずかに含む。

e：黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック(3～5cm程)やアカホヤ層土を多く含む。池田降下軽石やVII層土を含む。層厚は10～15cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土eを検出し、その面を床面(生活面)と捉えた。

床面の検出レベルは30.76～30.70mで、遺構検出面からの深さは約60cmを測る。

竪穴中央付近で、硬化面を検出した。この硬化面の広がり把握のために精査を行ったが、残存していたのは中央付近のみであった。

(4) 炉

ベルトを床面まで掘り下げると、竪穴中央付近に硬化面が認められず、やや赤味を帯びた土の範囲が確認されたため、そこを炉と捉えた。

平面形は0.80×0.55mの楕円形を呈する。深さは約5cmを測り、床面は貼床土(埋土e)で、赤化している。

埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土をわずかに含み、下部はさらさらして

いる。炭化物や灰は認められなかった。

炉内埋土の土壌は、サンプリングを行っている。炉内埋土の一部を水洗したもの、何も抽出されていない。

(5) 土坑

床面検出時に、竪穴西壁際において土坑を確認した。

平面形は、0.80×0.55mの楕円形を呈する。深さは約15cmを測り、床面はアカホヤ層である。

埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土をわずかに含む。

(6) 掘方

竪穴床面下場と硬化面範囲を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第81図)。

掘方の基盤層はアカホヤ層下部からⅦ層直上である。最深部のレベルは30.58mで、遺構検出面からの深さは約70cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(7) 柱穴・ピット 柱穴・ピットは床面において確認できず、掘方床面において16基検出した。床面は全てⅦ層に達している。

埋土は、黒褐色(10YR3/1)～暗褐色(7.5YR2/3)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土やⅦ層土を含む。

各柱穴・ピットの属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

- P 1 : 0.45×(0.40)×0.40m
- P 2 : 0.40×(0.30)×0.35m
- P 5 : 0.35×0.25×0.43m
- P 7 : (0.40)×0.30×0.45m
- P 8 : 0.32×(0.30)×0.35m
- P 10 : 0.35×0.30×0.47m
- P 12 : 0.35×0.30×0.32m
- P 14 : 0.30×(0.25)×0.38m
- P 15 : (0.40)×(0.30)×0.42m
- P 16 : 0.30×(0.30)×0.34m
- P 3 : 0.30×0.30×0.20m
- P 9 : 0.30×0.30×0.24m
- P 11 : 0.30×0.25×0.30m
- P 13 : 0.30×0.25×0.20m
- P 4 : 0.55×0.45×0.15m
- P 6 : 0.35×0.30×0.15m

その配列から、「P 3－P 9－P 11－P 13」と「P 1 (P 2)－P 5－P 8 (P 7)－P 10－P 12－P 15 (P 14・P 16)」の2セットが考えられる。長方形を呈する平面形から、後者の6本柱建物の可能性が高い。

なお、前者のP 3とP 9は硬化面の下から検出されており、前者の4本柱建物から後者の6本柱建物へ増築した可能性を考える。

また、P 4は形状や深さから、増築前の4本柱建物に付属する土坑(竪穴建物の壁際で検出されることが多い

土坑)であった可能性もある。

(8) 遺物(第82～91図441～528)

遺物は、番号取上分で1,949点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると2,286点を数える(一括取上分除く)。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄器、ふいご羽口、軽石が認められ、88点図示した。

ア 土器(441～489)

土器は、甕、甑、壺、坏、高坏を確認した。

甕(441～477)

1類(441・442)

口縁部が内湾するもの。

441は、器高の割に口径が大きいもので、突帯の刻み間隔は狭い。外面に接合痕が目立ち、外底面に木葉痕が残る。底部内面の成形の際に、円錐状の粘土板を貼付している。黄橙色系を呈する。

2類(443～450)

口縁部が直行するもの。

443は突帯にユビナデ上げ刻みを狭い間隔で施す。外面にススが厚く付着する。

444は突帯に3条1単位の刻みを施す。口縁端部に白色物質が付着しており、その部分にはススが付着していない。底部は接合痕で割れており、脚台が付くと考える。一部床着出土。

445・446は突帯にユビナデ上げ刻みを狭い間隔で施す。446は薄手のつくりで、大きさの割に軽い。胎土に金色ウンモを含む。一部床着出土。

447は、口縁部外面に斜位の工具痕が認められる。胎土に金色ウンモを含む。

448は薄手のつくりで、大きさの割に軽い。胎土に金色ウンモを含む。床着出土。

449は突帯にユビナデ上げ刻みを広い間隔で施す。

450は、突帯貼付時に器面が凹んでいる。上げ底となる。床着出土。

3類(451～455・458・459)

口縁端部でやや外反するもの。

451は突帯に2条1単位のユビナデ上げ刻みを狭い間隔で施す。薄手のつくりで、大きさの割に軽い。胎土に金色ウンモを含む。

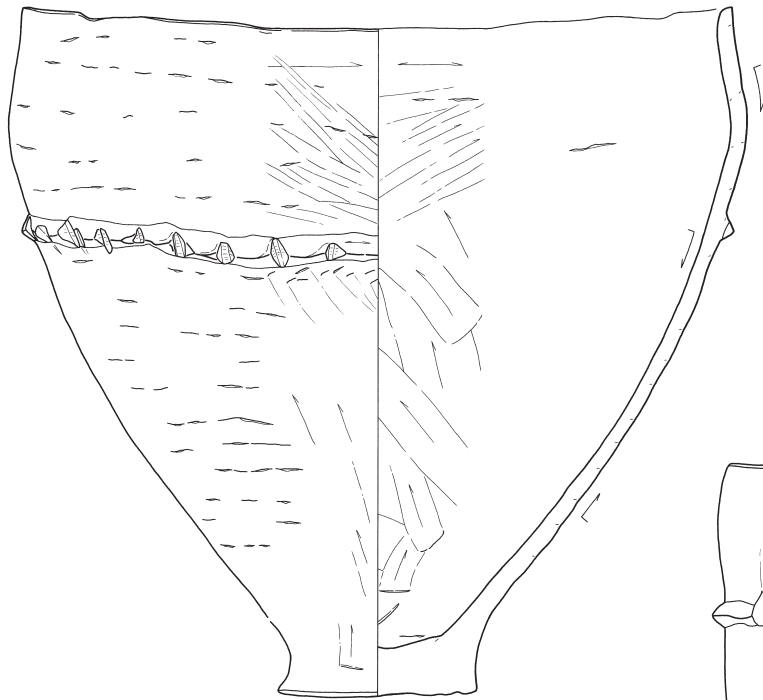
452は、口縁部に補修孔が認められる。つぶれた突帯を施す。

453は突帯に2条1単位の刻みを広い間隔で施す。口縁端部に白色物質が付着する。

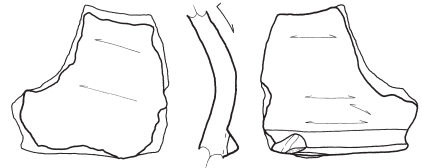
454は突帯にユビナデ上げ刻みを狭い間隔で施す。

455は、口縁端部に白色物質が付着する。突帯の刻み間隔は広い。内面に接合痕が目立つ。

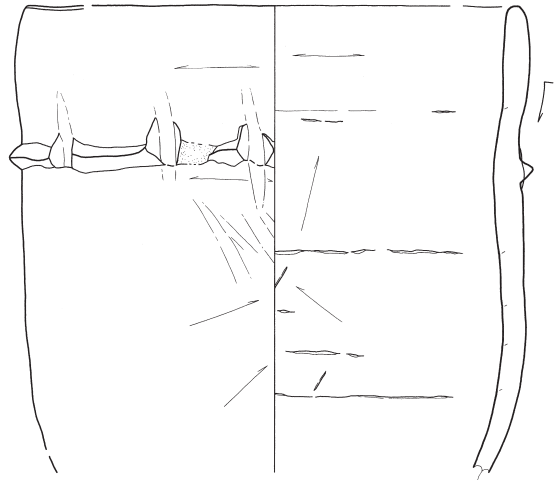
458は突帯にユビナデ上げ刻みを施す。胴部上半の表面は著しく剥離しており、被熱による影響の可能性はある。



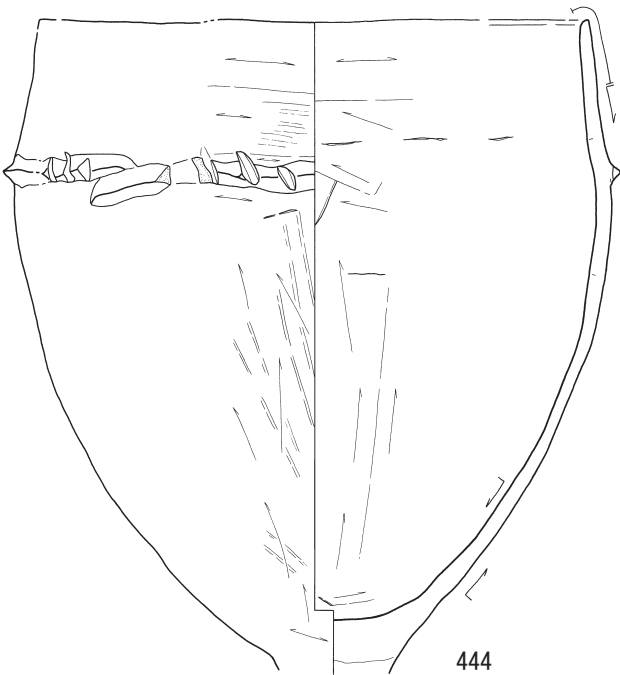
441



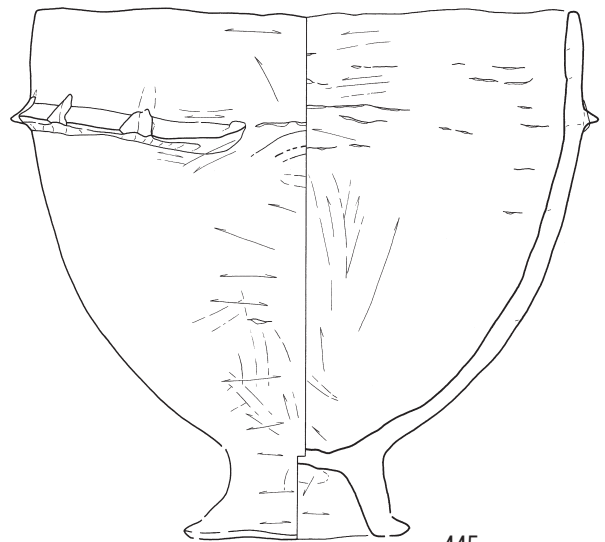
442



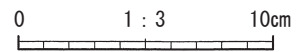
443



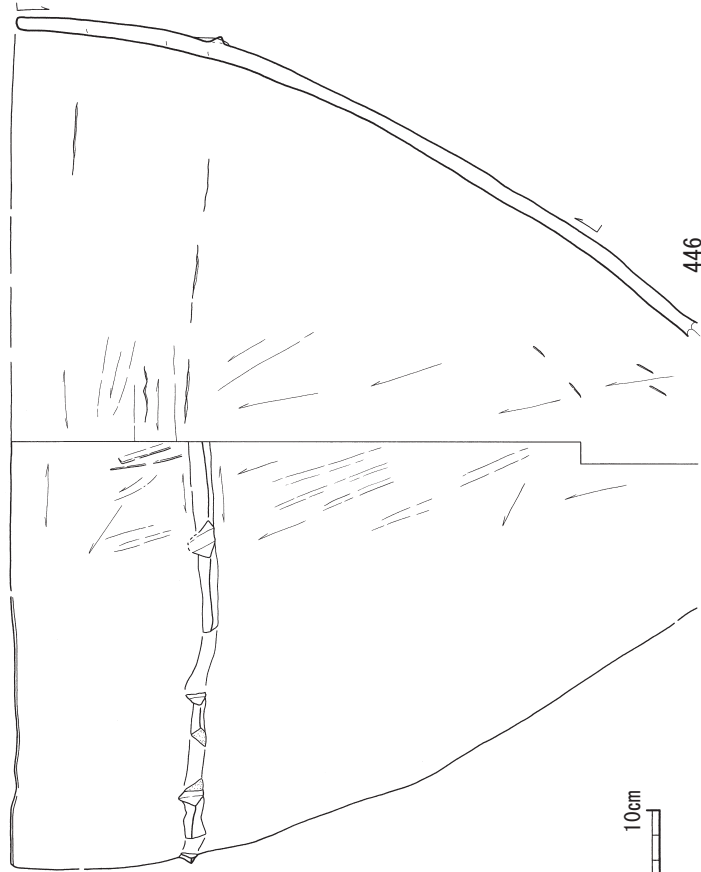
444



445



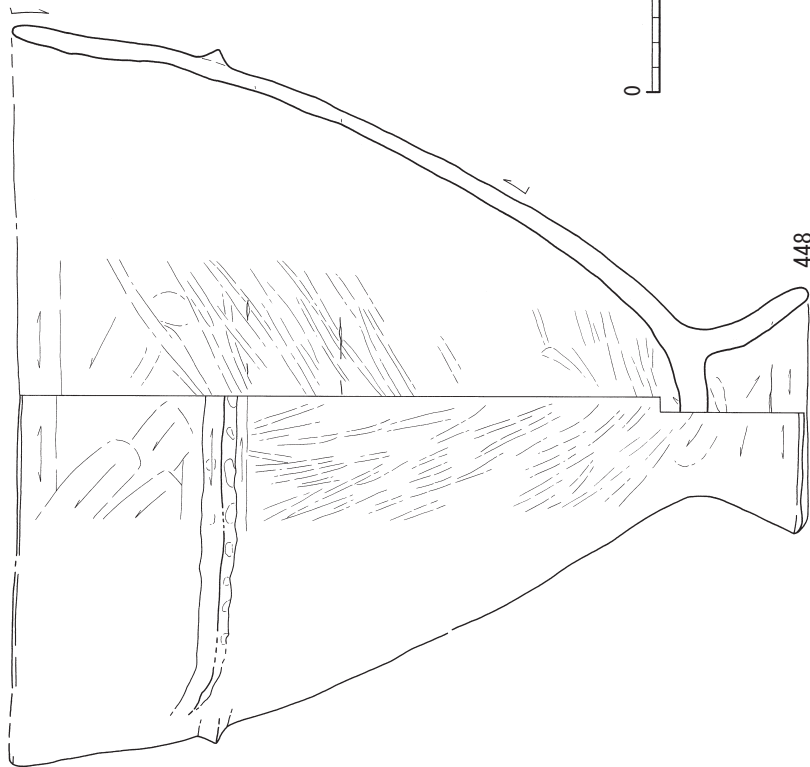
第82图 20号竖穴建物跡 出土遺物(1)



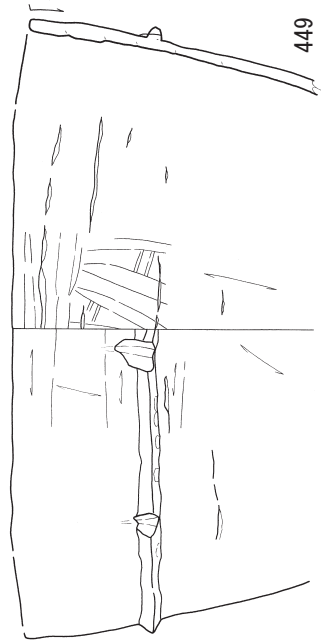
446



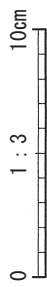
447



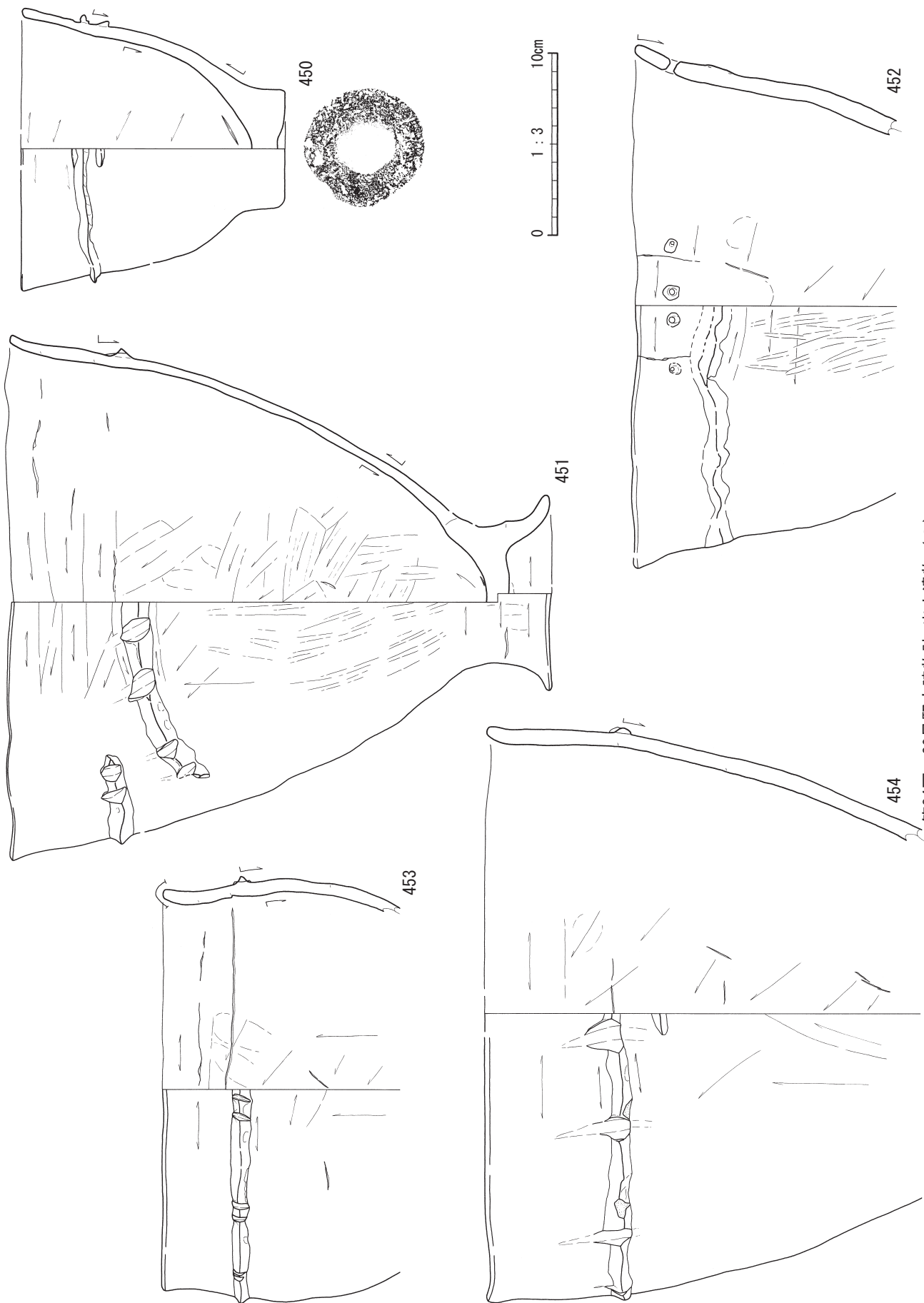
448



449



第83图 20号竖穴建物跡 出土遺物 (2)



第84图 20号竖穴建物跡 出土遺物(3)

459は突帯にユビナデ上げ刻みを広い間隔で施す。口縁端部に白色物質が付着する。胎土に金色ウンモを含む。

5類 (456・457)

口縁端部が外湾するもの。

456の刻みは2条1単位の可能性がある。

457は突帯に2条1単位の刻みを施す。内面に接合痕が目立つ。一部床着出土。

6類 (460・461)

器形や胎土、器面調整から搬入品と考えられるもの。

460・461は、突帯が施されないものである。461は、口縁端部に白色物質が付着する。他類とは調整が異なる。

脚台 (462~468)

463・465は胴部と脚部の境に突帯を貼付する。463は胎土に金色ウンモを含む。一部床着出土。465は床着出土。

464は、脚台内面天井部に「一文字形」の突起がある。接合痕で脚台が剥離しており、剥離面にユビオサエ痕が残る。

466は、脚台内面天井部が円柱状に残り、その表面に木葉痕が残る。

467・468は低脚のもので、胎土に金色ウンモを含む。

平底 (469~477)

472~477は、外底面に木葉痕が残る。

473は胎土の特徴から、都城盆地部からの搬入品の可能性がある。475は、外底面に木葉痕が残り、白色物質が付着する。476は木葉痕に加えて、何らかの圧痕が認められる。477は胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品である。

甌 (478・479)

478は、胴部下外面に白色物質が付着している。白色物質下端径は18.2cm。479は胎土や色調の特徴から、宮崎平野部からの搬入品の可能性がある。

壺 (480~482)

481は、突帯に刻みが確認できない。482は胎土に金色ウンモを含む。

坏 (483~487)

全て在来系の1類である。485以外は、黒色処理が行われる。483は、口縁部が逆「く」字状に屈曲する。

485は、平面が楕円形を呈する。487は、外底面にヘラ記号があり、床着出土。

高坏 (488・489)

488は胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品である。489は精製赤彩土器である。

イ 須恵器 (490~511)

須恵器は、坏蓋、坏身、高坏、提瓶、甕を確認した。

坏蓋 (490)

回転ヘラケズリ調整が行われた天井部にヘラ記号が施されている。

坏身 (491~504)

口径は9.3~13.4cmである。底部調整は、491~496は回転ヘラケズリが行われており、497・498はヘラ切り未調整となっている。

口縁部の立ち上がりは、491が少し薄手で高くなっているものの、それ以外は低く内傾するものがほとんどである。501は床着出土。

504は底部のみだが、体部の立ち上がりから坏Gと考える。器壁は厚く、底部はヘラ切り未調整である。遺構検出レベル上位出土のもので、堅穴埋土内可能性遺物である。

高坏 (505・506)

505は、坏部との接合部からハの字状に広がる脚部である。

506は、二段二方向の透かしが施され、坏部と脚部にはそれぞれ2条ずつの沈線が施されている。脚端部は肥厚させている。

提瓶 (507)

507は胴部で、内面はくり抜き痕が確認できる。

甕 (508~511)

508は口縁部である。端部は内面を少しつまみ上げ、外面には垂下するように突帯が巡っている。櫛状工具による刺突文が施されており、沈線が文様を挟むように3条巡らされている。断面が紫色と灰色の層になっている。

509は底部である。内面は灰被りになっており、部分的に土器が膨張している。

510・511は頸部から胴部が残存している。510の内面は、同心円当て具の後にナデを施しており、当て具痕が不明瞭になっている。

ウ 石器 (512~520)

石器は、磨製石斧、石鎚、鉄床石を確認した。

磨製石斧 (512)

床着出土で、縄文時代のものを転用しようとした可能性がある。

石鎚 (513~519)

513~517は、棒状を呈する2類である。

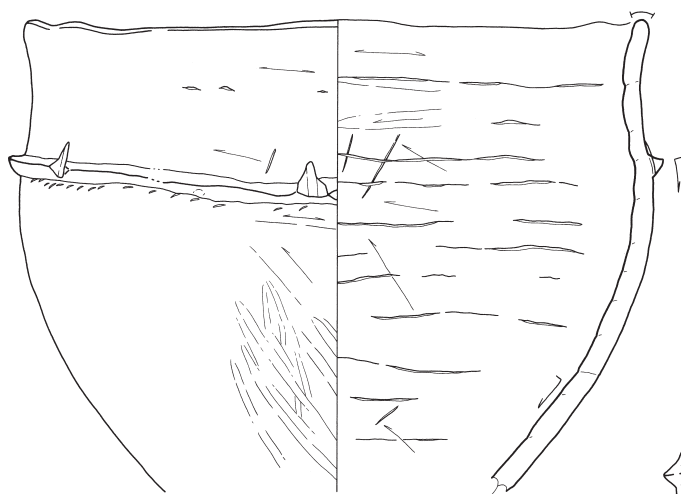
513は、下面に敲打痕が認められ、下面から中央にかけて被熱により赤化している。

514は赤化しており、床着出土。516は、器面に鉄分が付着する。517は、左側面が抉れるほど使用されており、床着出土。

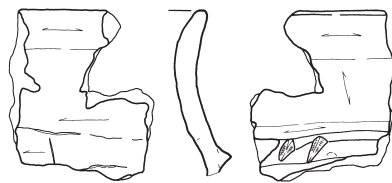
518・519は、断面が扁平となる3類である。ともに床着出土。

518は全面使用しており、磨面も認められる。凹みに鉄分が付着する。寒川朋枝氏に残存デンプン粒分析を行っていただいたが、デンプン粒は検出されなかった。

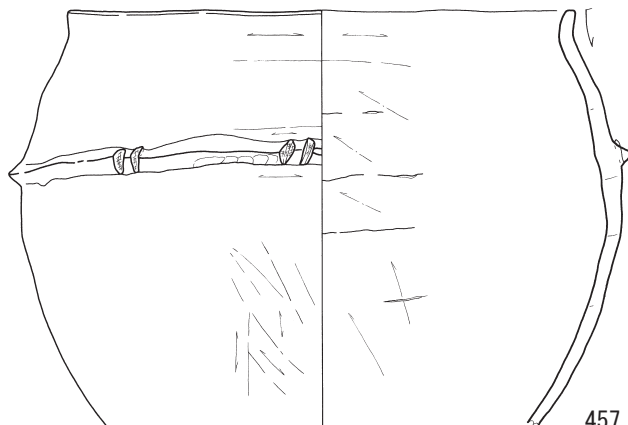
519は、正・裏・下面に敲打痕が認められる。被熱により赤化し、破碎している。石鎚としたが、鉄床石の可能性もある。



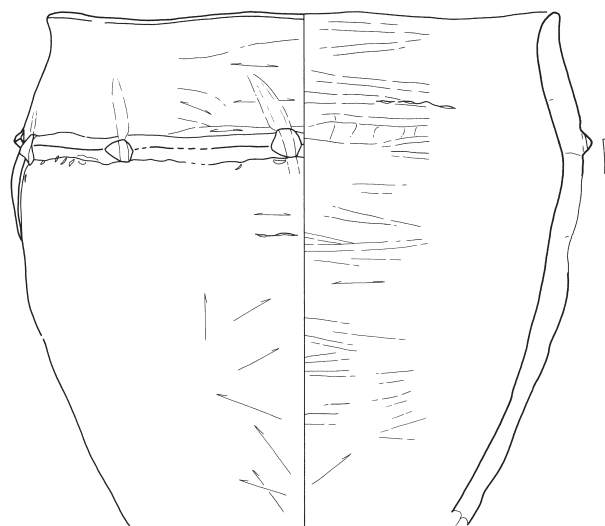
455



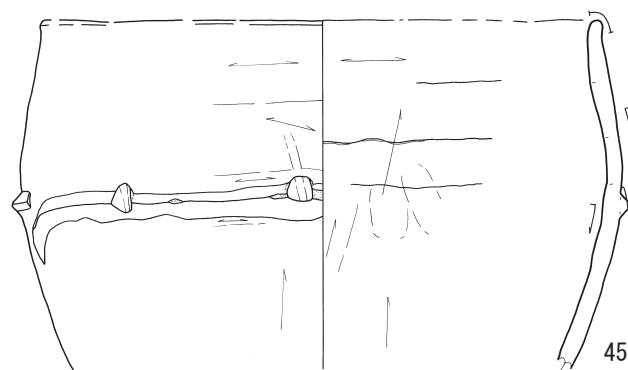
456



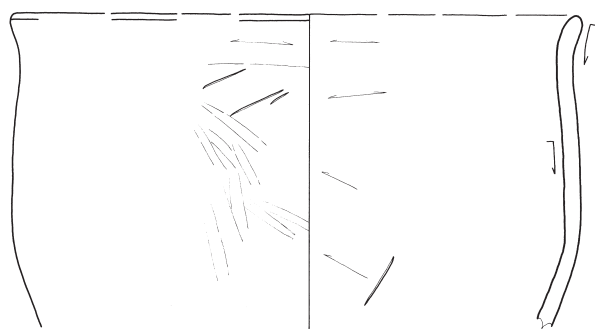
457



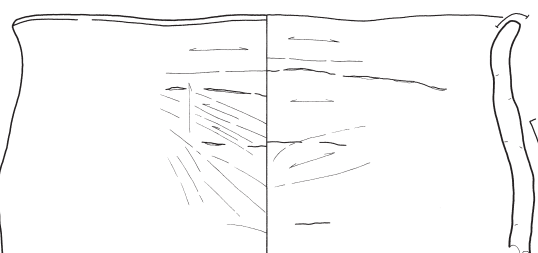
458



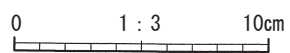
459



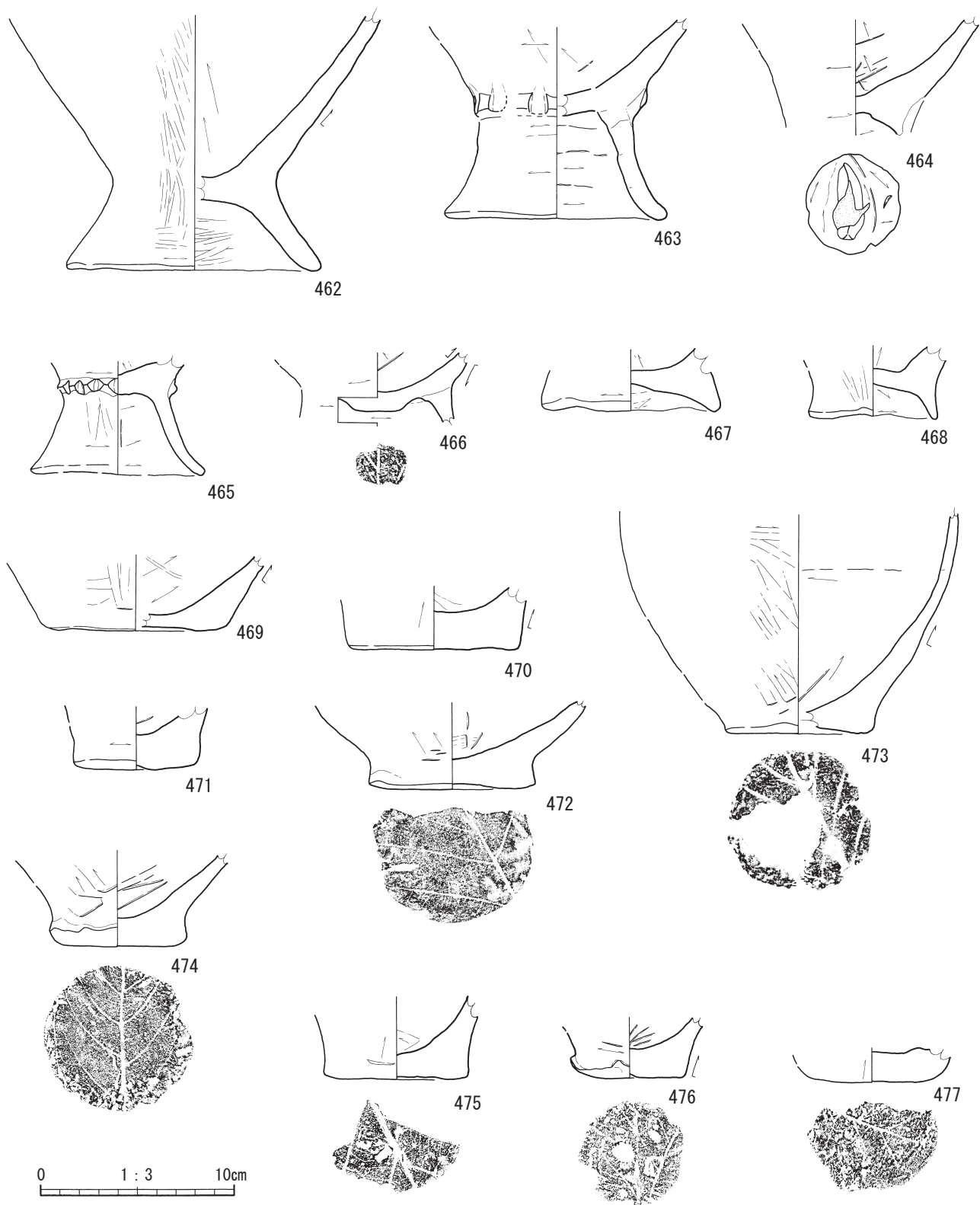
460



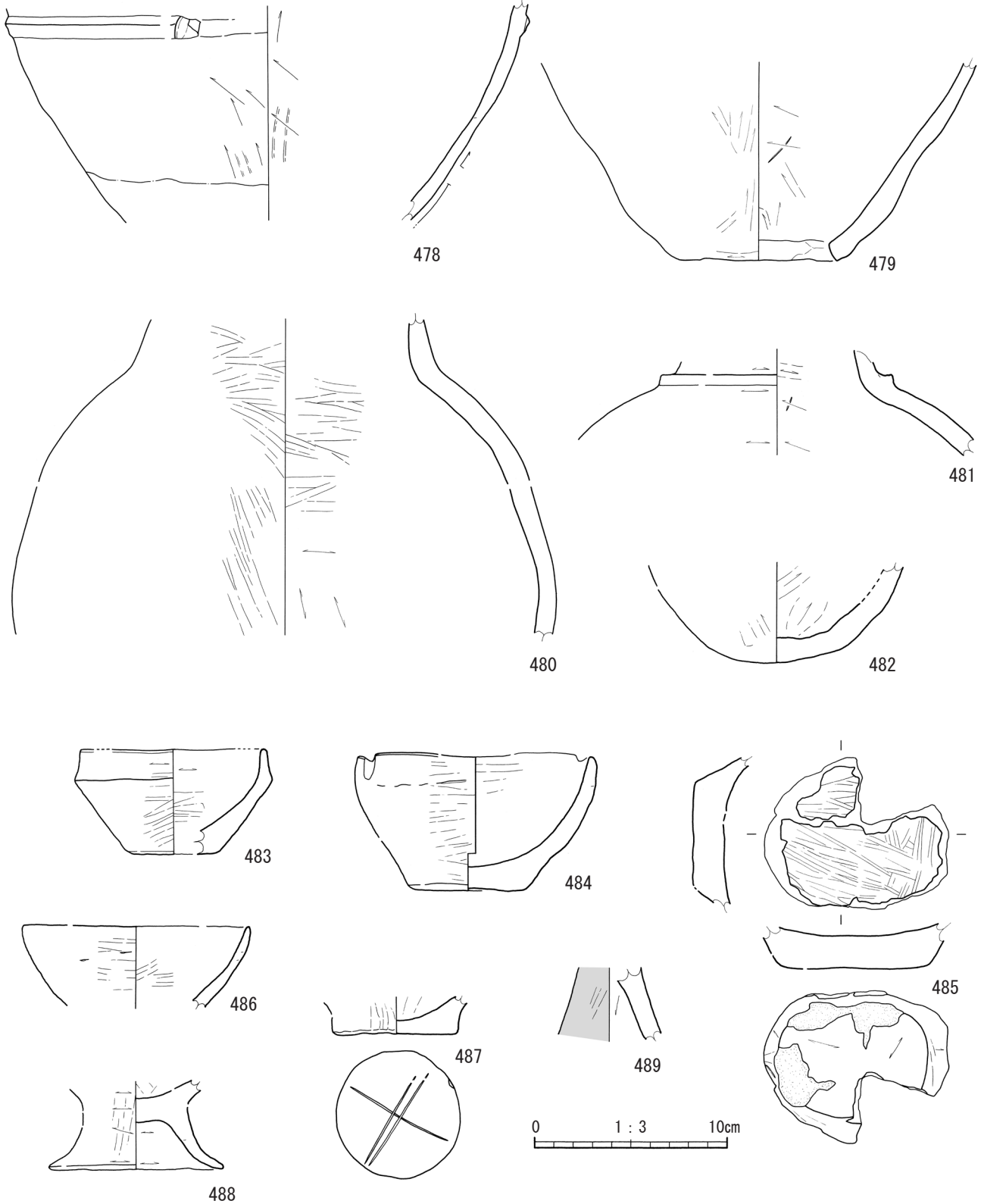
461



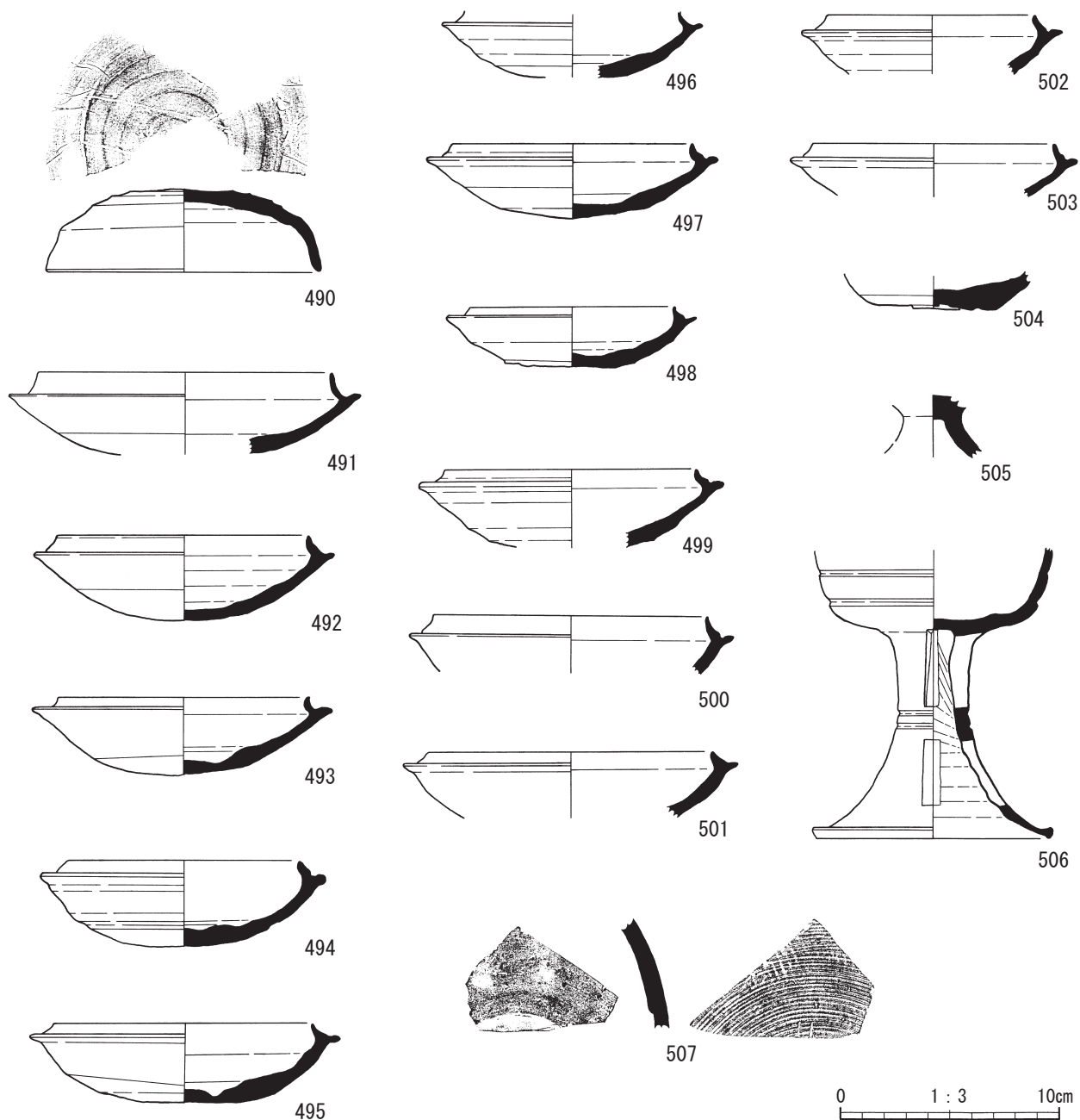
第85图 20号竖穴建物迹 出土遺物(4)



第86图 20号竖穴建物跡 出土遺物 (5)



第87图 20号竖穴建物跡 出土遺物(6)



第88図 20号竪穴建物跡 出土遺物（7）

鉄床石（520）

正・裏面の使用が顕著であり、使用時の傷が残る。凹みに鉄分が付着する。一部敲打痕が認められる。床着出土。

エ 棒状礫（521）

18点確認した。

オ ふいご羽口（522）

外面の口～中央部は、被熱により黒～灰白色を呈する（範囲は1点破線）。口部外面には、鉄分が付着しており（図面の斜線部）、重量感がある。内径は2.7cm。

カ 鉄器（523～528）

鉄器は鉄鍬、刀子、棒状工具、建築部材を確認した。523は方頭斧箭式の鉄鍬で、直角関である。

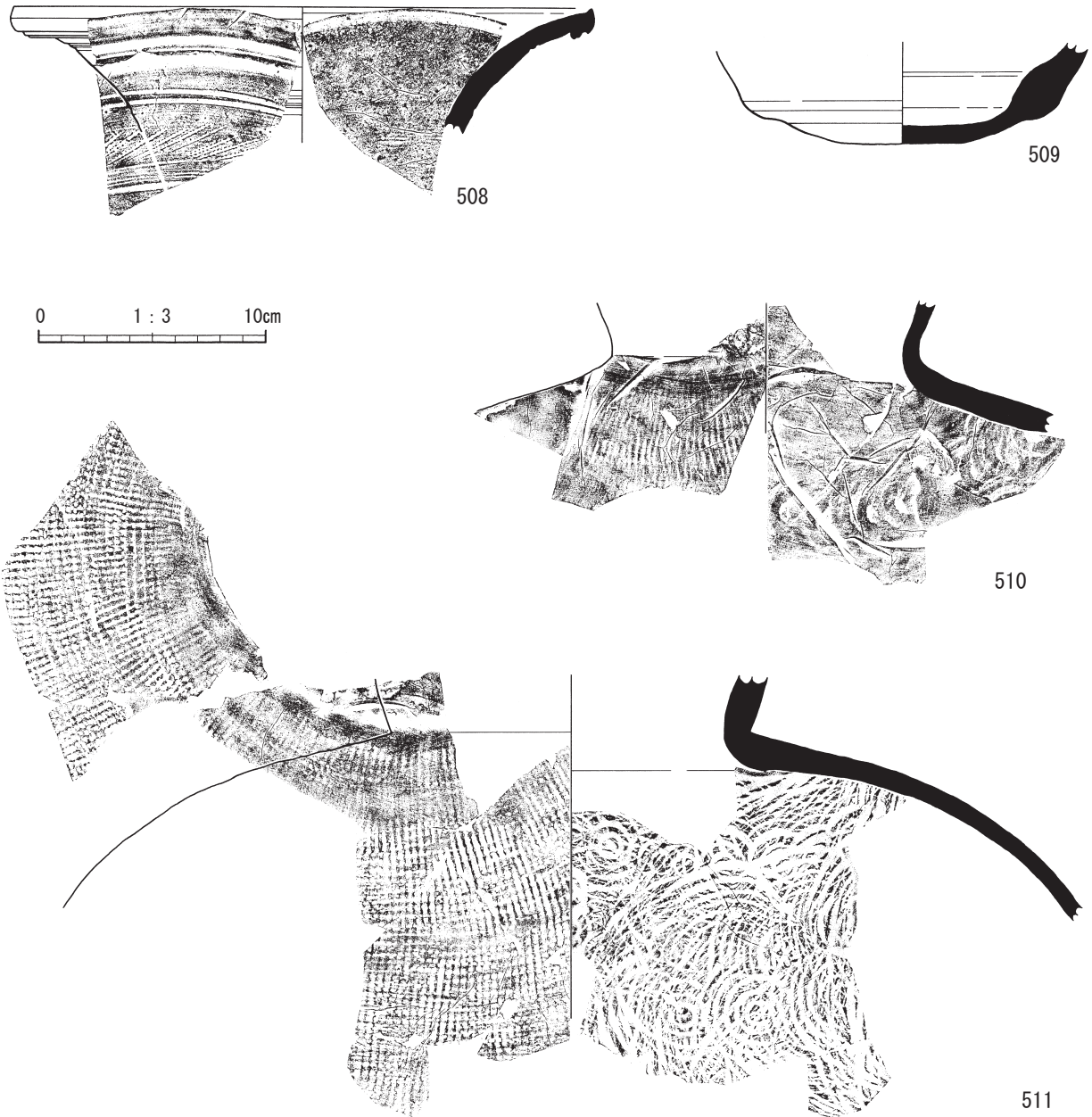
524は、鉄鍬基部の可能性はある。525は、鉄鍬基部あるいは棒状工具の可能性はある。

526・527は刀子である。527は、木質が付着する。

528は、建築部材の可能性はある。

キ 軽石

60点程認められた。長径30cmを超え、加工痕があり、赤化したものが10点程床着出土している。



第89図 20号竪穴建物跡 出土遺物（8）

13 27号竪穴建物（SI27）（第80図）

（1）検出

G-5区のIV層上面で検出した。大部分は20号竪穴建物に切られている。検出レベルは、31.34mである。

平面形は、(4.3)×(0.6)mでの方形を呈する可能性が高い。一般的な土坑の可能性も考えたが、その規模と24号竪穴建物のように浅いものも存在することから、竪穴建物と判断した。

（2）埋土

竪穴埋土は単一（a）で、竪穴埋没土と考える。

a：黒褐色（10YR3/1）シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石（1cm以下）を含む。20号竪穴建物の埋土aよりもわずかに淡い。

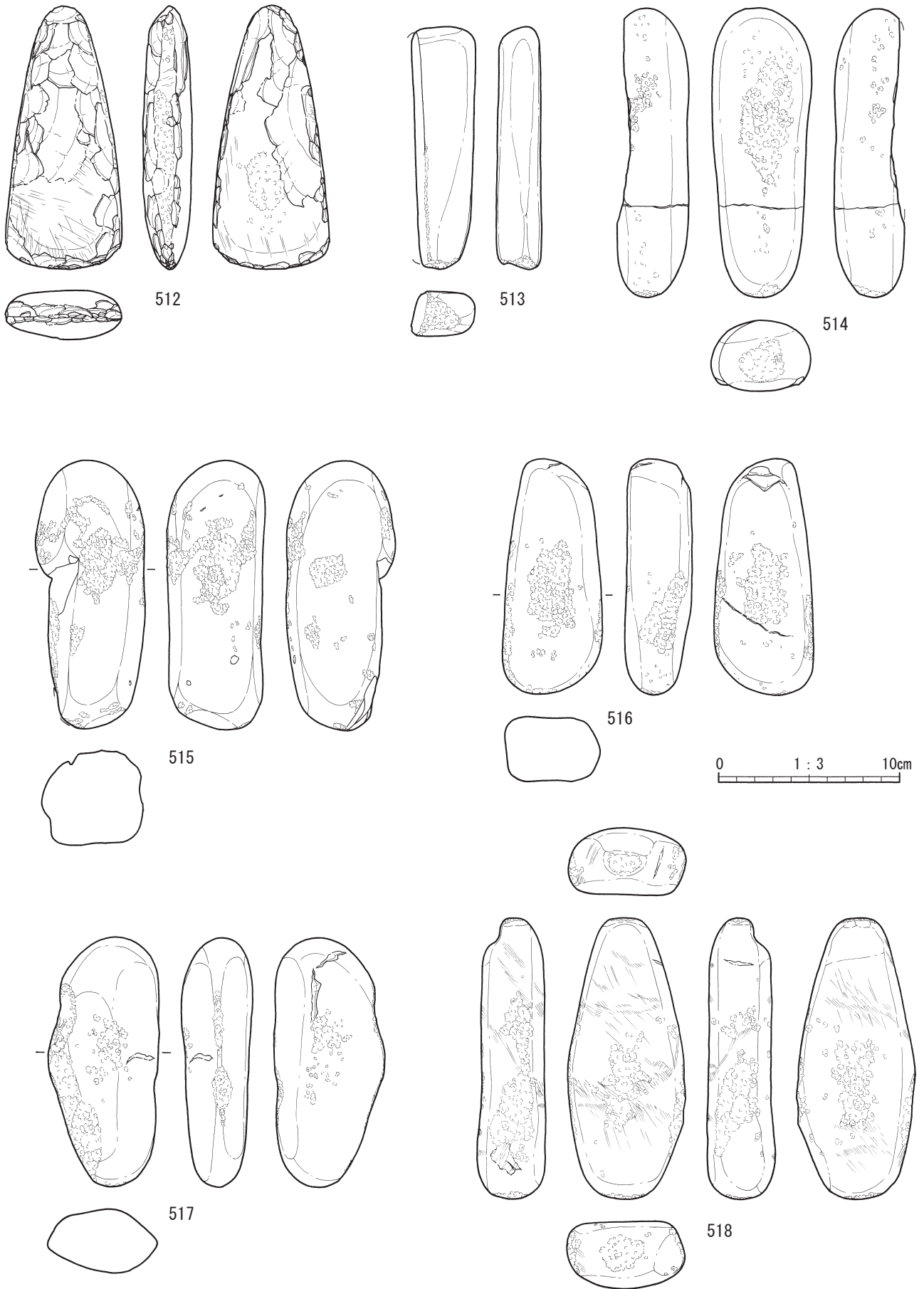
（3）床面

竪穴埋土とIV層は類似しており、サブトレンチで立ち上がりを確認した後、床面を検出した。

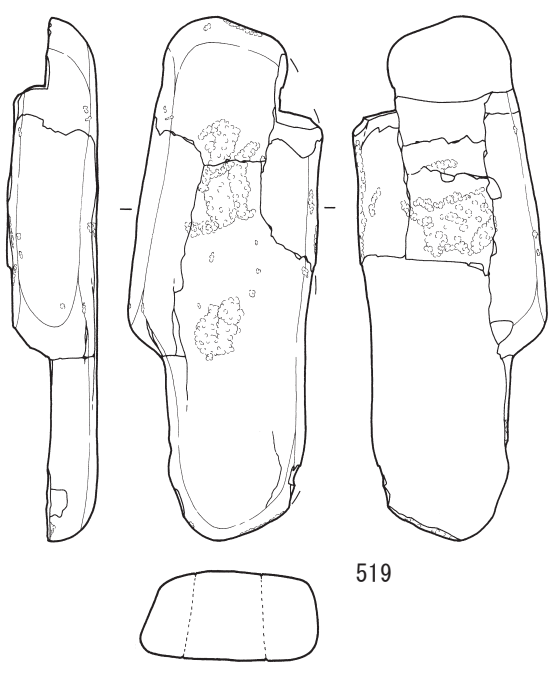
床面の基盤層はIV層である。遺構検出面からの深さは約10cmを測る。硬化面は確認できなかった。

（4）生活施設・柱穴

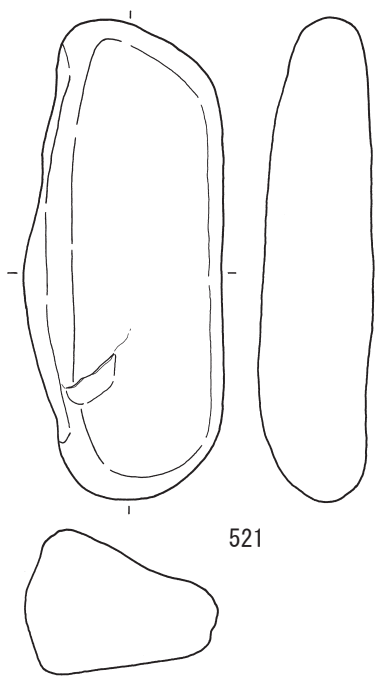
遺構そのものがほとんど残っていないため、炉や土坑



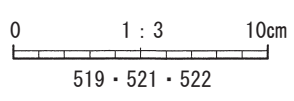
第90图 20号竖穴建物跡 出土遺物（9）



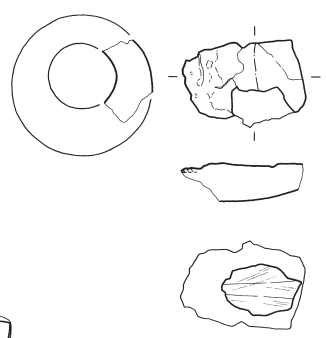
519



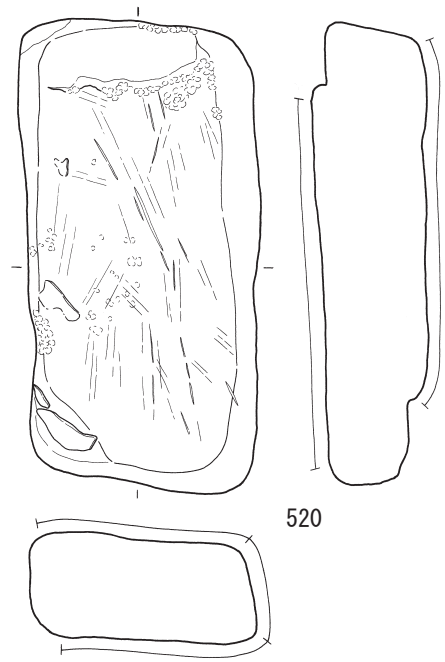
521



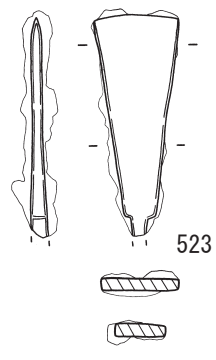
519 · 521 · 522



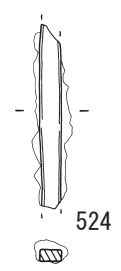
522



520



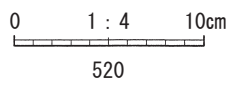
523



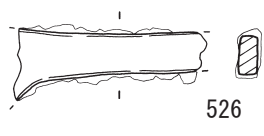
524



525



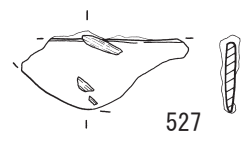
520



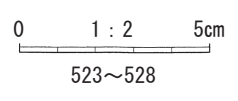
526



528



527



523~528

第91图 20号竖穴建物跡 出土遺物 (10)

などの生活施設や柱穴は確認できない。

(5) 遺物

埋土内から遺物は認められなかった。

14 21号竪穴建物 (SI21) (第92図)

(1) 検出

H・I-4区の調査区北壁側のIV層上面で検出した。検出レベルは31.48～31.28mで、西側では検出レベルが低い。II層掘り下げ時から周囲に比べて土色が異なり、III層掘り下げ時も遺物が出土し続けたことから、遺構の存在は予想されていた。

平面形は、3.5×3.5mの正方形を呈する。北西側は調査区外に延びる。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は4層(a～d)に分けられ、埋土a～cは竪穴埋没土、埋土dは貼床土である。埋土aは調査区北壁において確認できる。

a：黒色(10YR2/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層(VIa層)土をわずかに含む。白色化した池田降下軽石(1cm以下)を含む。II層との違いは、池田降下軽石の含有量のみであり、色調は同じであるため、II層と埋土aの境は判別できなかった。

b：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石(1cm以下)とアカホヤ層土を含む。

c：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック(3～5cm)を多く含み、池田降下軽石(1～2cm程)をわずかに含む。

d：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック(3～5cm)を多く含み、池田降下軽石(1cm程)をわずかに含む。層厚は5～20cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土dを検出し、その面を床面(生活面)と捉えた。

床面の検出レベルは30.94～30.90mで、遺構検出面からの深さは約50cmを測る。硬化面は確認できなかった。

(4) 炉

ベルトを床面まで掘り下げると、床面において焼土面を検出した。貼床土(埋土d)上面が赤く焼けている。焼土面は、0.7×0.4mの楕円形を呈する。掘り込みは確認できなかった。

(5) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第92図下)。

掘方床面は二段になっている。掘方の基盤層はアカホヤ層で、一部はVII層に達している。最深部のレベルは30.72mで、遺構検出面からの深さは約65cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(6) 柱穴

柱穴は、床面そして掘方床面でも確認できなかった。

(7) 遺物(第93・94図529～549)

遺物は、番号取上分で264点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると404点を数える(一括取上分除く)。埋土bからの出土が多い。

土器、須恵器、石器、棒状礫、軽石、鉄器が認められ、22点図示した。

ア 土器(529～544)

土器は、甕、甑、壺、坏、高坏を確認した。

甕(529～536)

3類(529・530)

口縁端部でやや外反するもの。

529は接合痕で割れている。530は突帯にユビナデ上げ刻みを施す。胎土に金色ウンモを含む。

4類(531)

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。

脚台(532～534)

532は胴部と脚部の境に突帯を施す。534は胎土に金色ウンモを含む。

平底(535・536)

535は、外底面に木葉痕が残る。

壺(538)

刻みのない突帯を施す。

坏(537・539～542)

全て在来系の1類である。

537は、外底面に木葉痕らしい圧痕が残る。539は、黒色処理が行われる。541・542は、口縁部が逆「く」字状に屈曲する。

高坏(543・544)

543は外面にヘラ記号を施す。胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品の可能性がある。544は精製赤彩土器の脚部である。

甑

筒抜け形の底部片を1点確認した。

イ 須恵器(545～546)

須恵器は、坏蓋、高坏、甕を確認した。

545は坏蓋である。器高がやや低く、天井部から屈曲するように口縁部に至る。

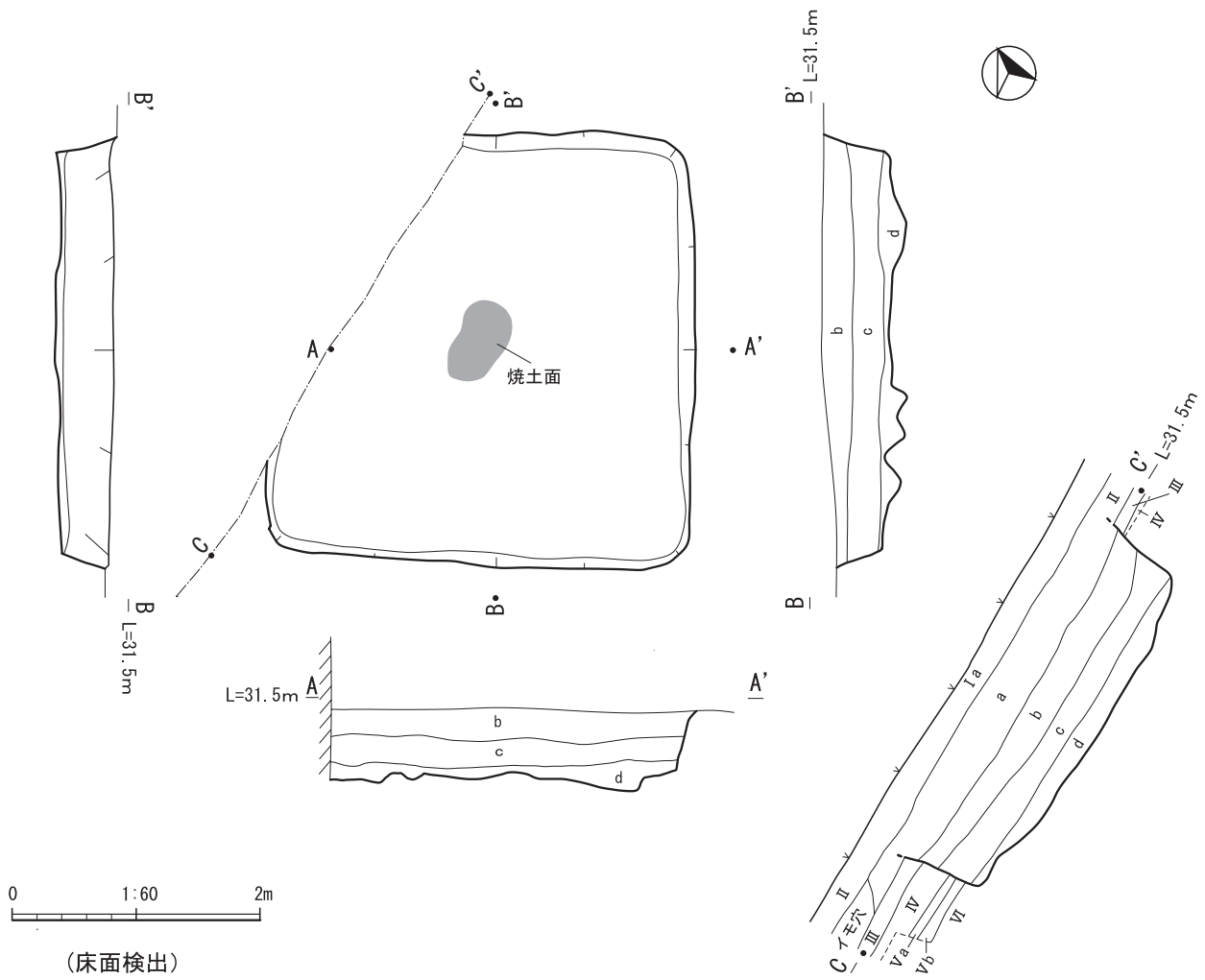
546は高坏の脚部である。透かしと沈線が認められ、端部は上下につまみ上げている。

547は甕の胴部である。外面は灰被りで白くなっており、断面は紫褐色である。

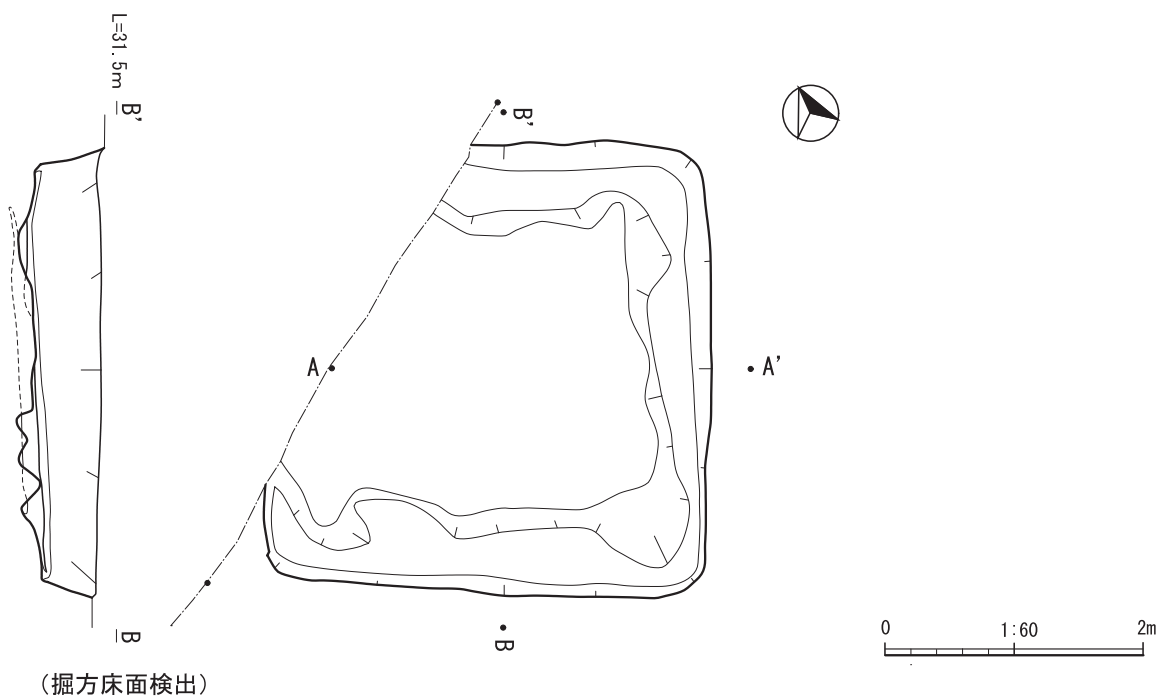
ウ 石器(548・549)

石器は、石槌と鉄床石を確認した。

548は棒状を呈する2類の石槌で、両側面に敲打痕が認

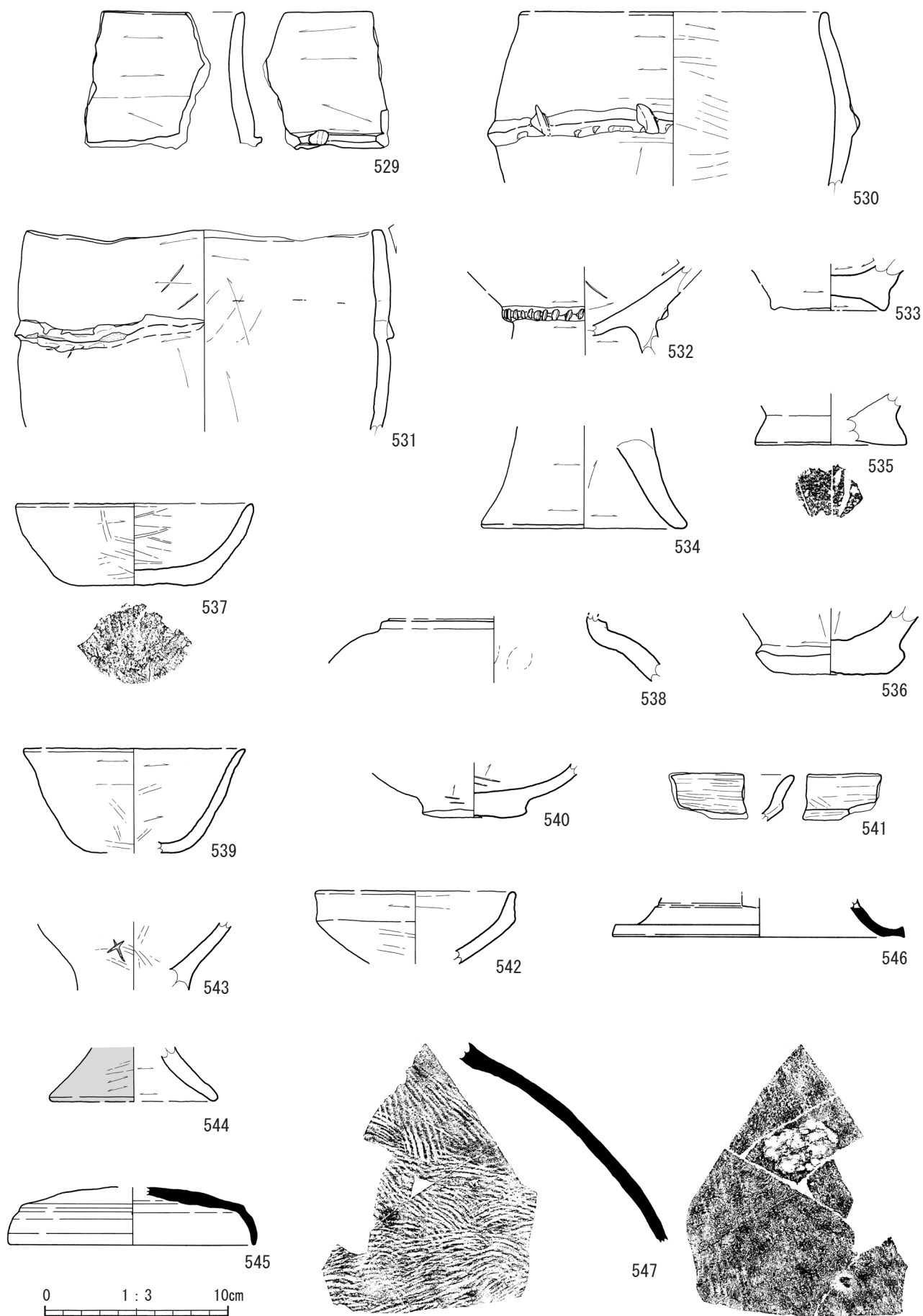


(床面検出)

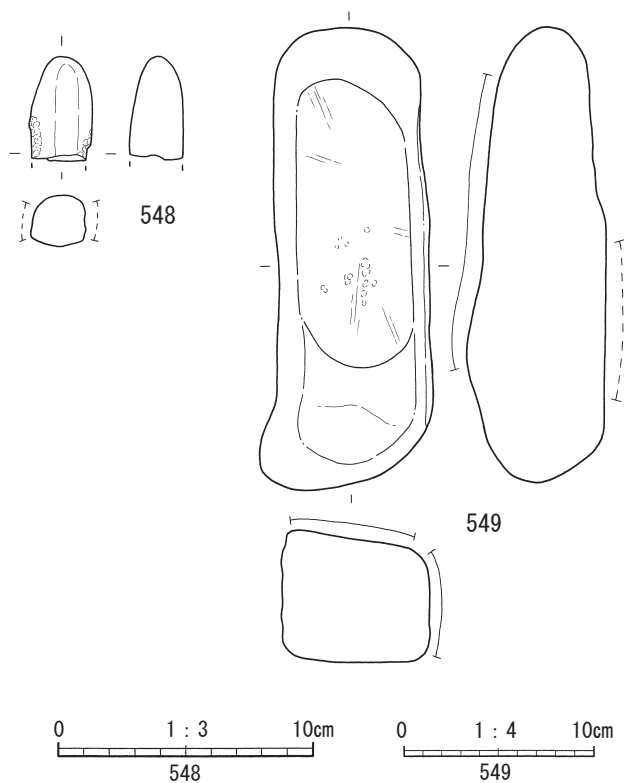


(掘方床面検出)

第92图 21号竖穴建物跡 平・断面图



第93图 21号竖穴建物跡 出土遺物（1）



第94図 21号竪穴建物跡 出土遺物(2)

められる。

549は鉄床石で、正・右側面に磨面があり、特に正面が顕著である。正面には、磨る前の敲打痕が残る。床着出土。

エ 棒状礫

4点確認した。

オ 軽石

長径10cm以下のものが20点程認められた。赤化したものや長径30cm程の大型のものも1点ある。

カ 鉄器(第136図772)

鉄鏃基部の可能性があるので、竪穴埋土内可能性遺物である。鉄器はこの1点のみ確認した。

15 22号竪穴建物(SI22)(第95・96図)

(1) 検出

D-4区のIV層上面で検出した。検出レベルは、31.10～31.08mである。II層掘り下げ時から周囲よりも遺物の出土が多く、遺構の存在が予想されていた。

平面形は、4.1×4.0mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は4層(a～d)に分けられ、埋土a～cは竪穴埋没土、埋土dは貼床土である。埋土cは一部壁際にのみ存在する。

a：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石(1cm以下)やアカホヤ層(VIa層)土を含む。

b：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック(1～5cm程)を多く含み、池田降下軽石(1～2cm程)をわずかに含む。

c：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。IV層土に類似しており、御池火山灰が目立つ。

d：黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック(3～5cm)を多く含み、池田降下軽石(2cm程)を含む。層厚は15～20cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土dを検出し、その面を床面(生活面)と捉えた。

床面の検出レベルは30.62～30.58mで、遺構検出面からの深さは約50cmを測る。北壁側と東壁側はアカホヤ層(VIa層)を床面にしている。

硬化面の明確な広がり確認できなかったが、部分的には残存している。

(4) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第96図)。

掘方床面は二段に落ち込んでおり、かなり深い。掘方の基盤層はVII層で、砂質土であるVIb層を掘り抜いた可能性がある。最深部のレベルは30.24mで、遺構検出面からの深さは約80cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

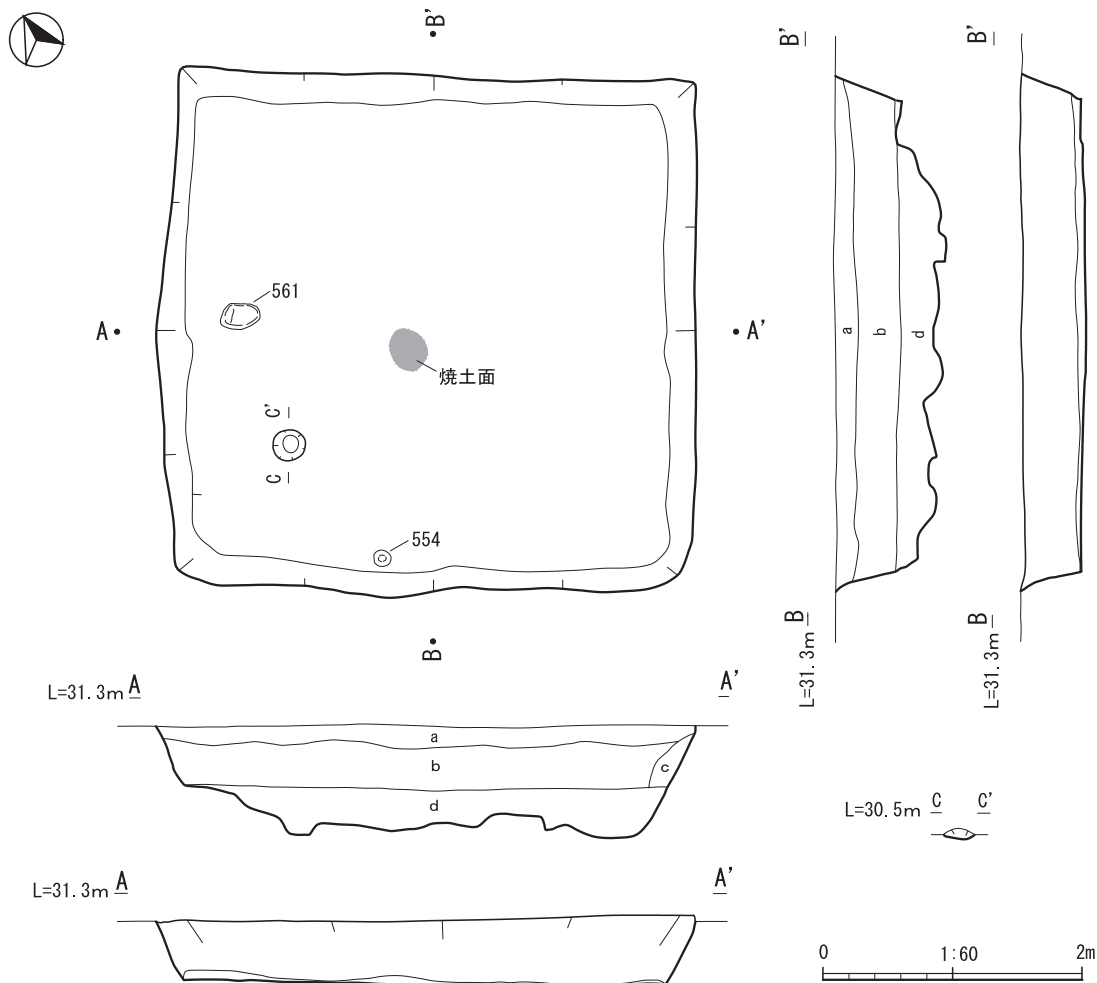
(5) 炉

炉は、床面検出時に確認できなかったが、貼床土掘り下げ時に残したベルトを5cm程掘り下げた際、竪穴中央付近で焼土面を検出した。

焼土面は、0.18×0.15mの円形を呈する。掘り込みは確認できず、貼床土(埋土d)が赤化していることから、検出した焼土面は炉の床面と考える。

(6) 土坑

土坑は、床面と掘方床面検出時には確認できなかったが、埋土断面(A-A')の東壁際に土坑のような落ち



第95図 22号竪穴建物跡 平・断面図

込みが認められた。他の竪穴建物では、壁際に土坑が存在するものもあることから、土坑の可能性もある。

(7) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは床面において確認できず、掘方床面において1基検出した。床面はVII層である。

とても浅く、柱穴のような凹みであったため、柱穴と判断したもの、掘方掘削痕の可能性もある。一方で、他の柱穴を見落とした可能性もある。

属性(長径×短径×深さ)は、0.18×0.12×0.08mである。

(8) 遺物(第97・98図550~561)

遺物は、番号取上分で57点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると314点を数える(一括取上分除く)。

土器、須恵器、石器、棒状礫、軽石、鉄滓が認められ、13点図示した。

ア 土器(550~555)

土器は、甕、壺、坏、高坏を確認した。

甕(550~553)

2類(550)

口縁部が直行するもの。

5類(551)

口縁端部で外湾するもの。

脚台(552)

脚部上位に意図的な凹みが巡る。

平底(553)

壺

小片を1点確認した。

坏(554・555)

ともに在来系の1類である。

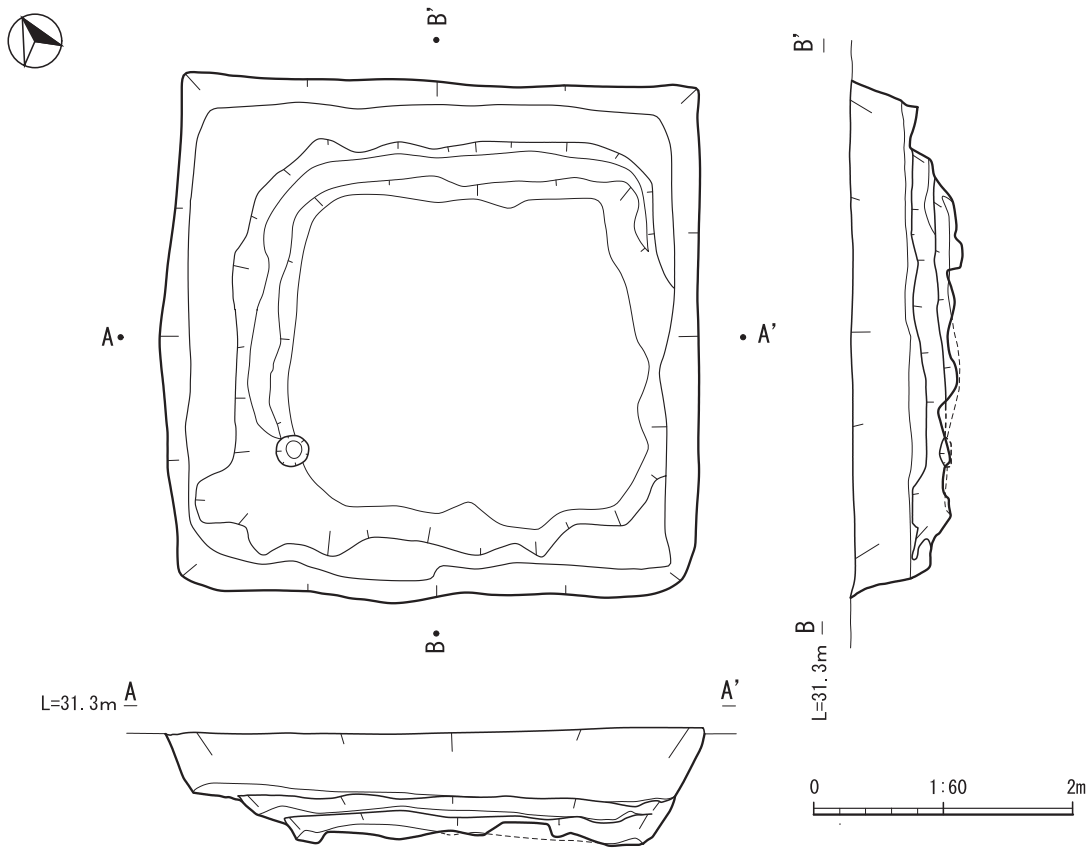
554は、口縁部に意図的な打ち欠きが認められる以外完形である。外底面にヘラ記号がある。床着出土。

高坏

脚部片を1点確認した。

イ 須恵器(556・557)

須恵器は、坏蓋と提瓶を確認した。



第96図 22号竪穴建物跡 掘方平・断面図

556は坏蓋で、不明瞭であるものの沈線が1条巡っている。沈線が施されていることから坏Gの可能性も考慮したが、口縁部の外反具合や底部にあまり張りがなく、沈線もあまり明瞭に刻まれたものではないことから坏蓋と判断した。竪穴埋土内可能性遺物。

557は提瓶の胴部で、外面にはカキメの中心が確認できる。貼床土（埋土d）内出土。

ウ 石器（558～561）

石器は、石槌、砥石、鉄床石を確認した。

558・559は棒状を呈する2類の石槌である。

558は上・下面を主に使用しており、下面は被熱により黒化している。559は、正面と右側面の使用が著しい。

560は砥石で、正面の中央付近に顕著な磨面が認められる。やや赤化しており、裏面には鉄分が付着する。床着出土。

561は鉄床石で、正・裏面に磨面と敲打痕が認められる。ともに敲打後磨っている。正面には、磨った際の傷が残る。器面には、鍛造剥片のようなものや鉄分が付着する（写真図版参照）。床着出土。

エ 棒状礫

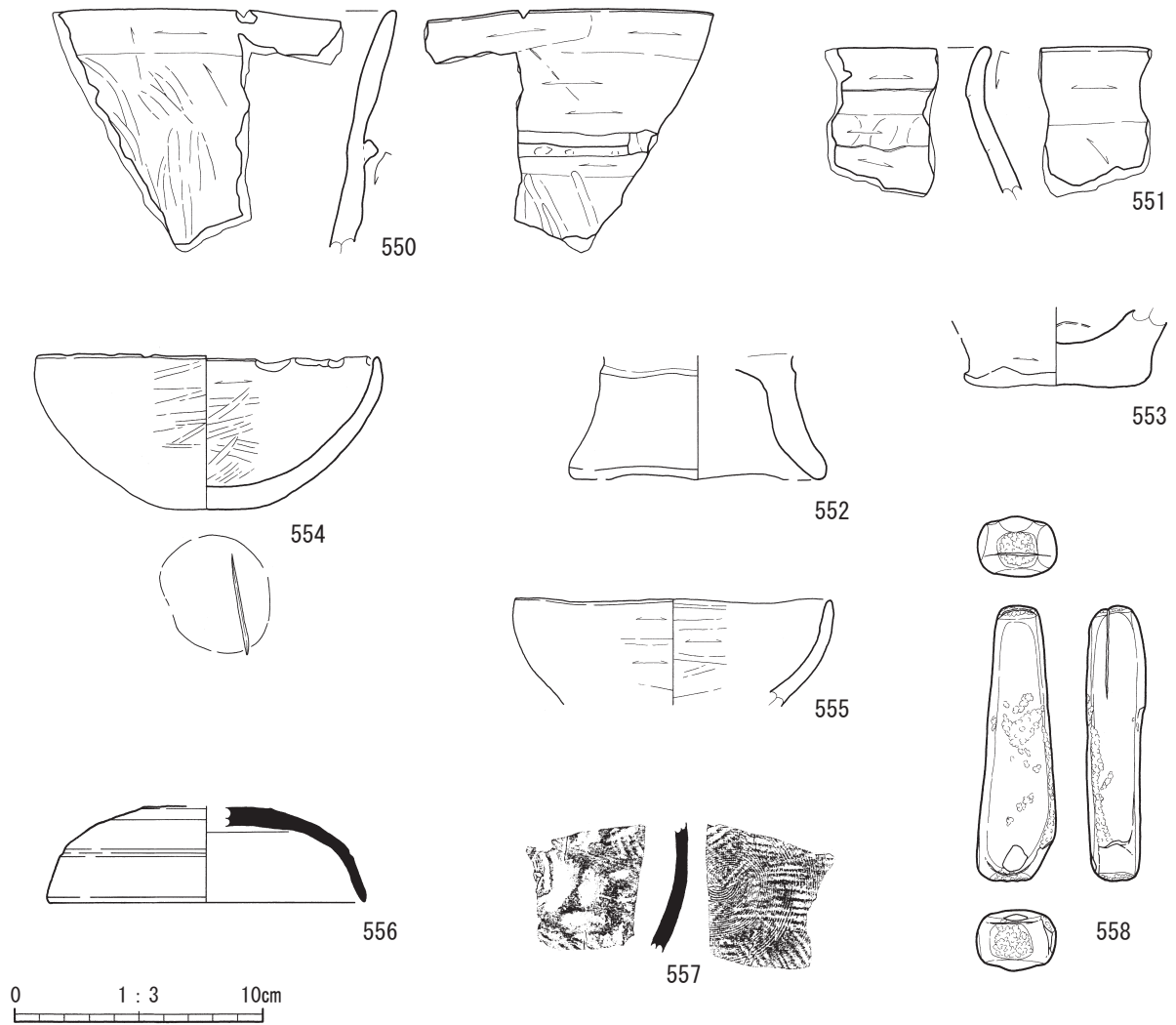
3点確認した。

オ 軽石

長径10cm程のものや長径20～30cm程のものなど、10点程認められた。長径20～30cm程のものには、一部面取され、赤化したものもある。

カ 鉄滓（第137図790）

炉壁で、竪穴埋土内可能性遺物である。詳細は第9節で述べる。



第97図 22号竪穴建物跡 出土遺物（1）

16 23号竪穴建物（SI23）（第99・100図）

（1）検出

D・E-5・6区のIV層上面よりもやや下位で検出した。検出レベルは、31.08～31.00mである。南側は調査区外に延びる。

平面形は、(5.7)×6.5mの方形を呈しており、全体形は長方形を呈すると考える。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

（2）埋土

竪穴埋土は4層（a～d）に分けられ、埋土a～cは竪穴埋没土、埋土dは貼床土である。埋土bは部分的に存在する。

a：黒褐色（10YR3/1）シルト質土で、締まりがある。白色化した池田降下軽石（1cm程）を多く含む。アカホヤ層土（VIa層）をわずかに含む。

b：暗褐色（10YR3/3）シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石（1cm程）を多く含む。酸化しており、赤

味を帯びる。

c：黒褐色（10YR3/2）シルト質土で、締まりが強い。アカホヤ層土を多く含む。

d：黒褐色（10YR3/3）シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック（5cm大）を含む。層厚は5～25cm。

（3）床面

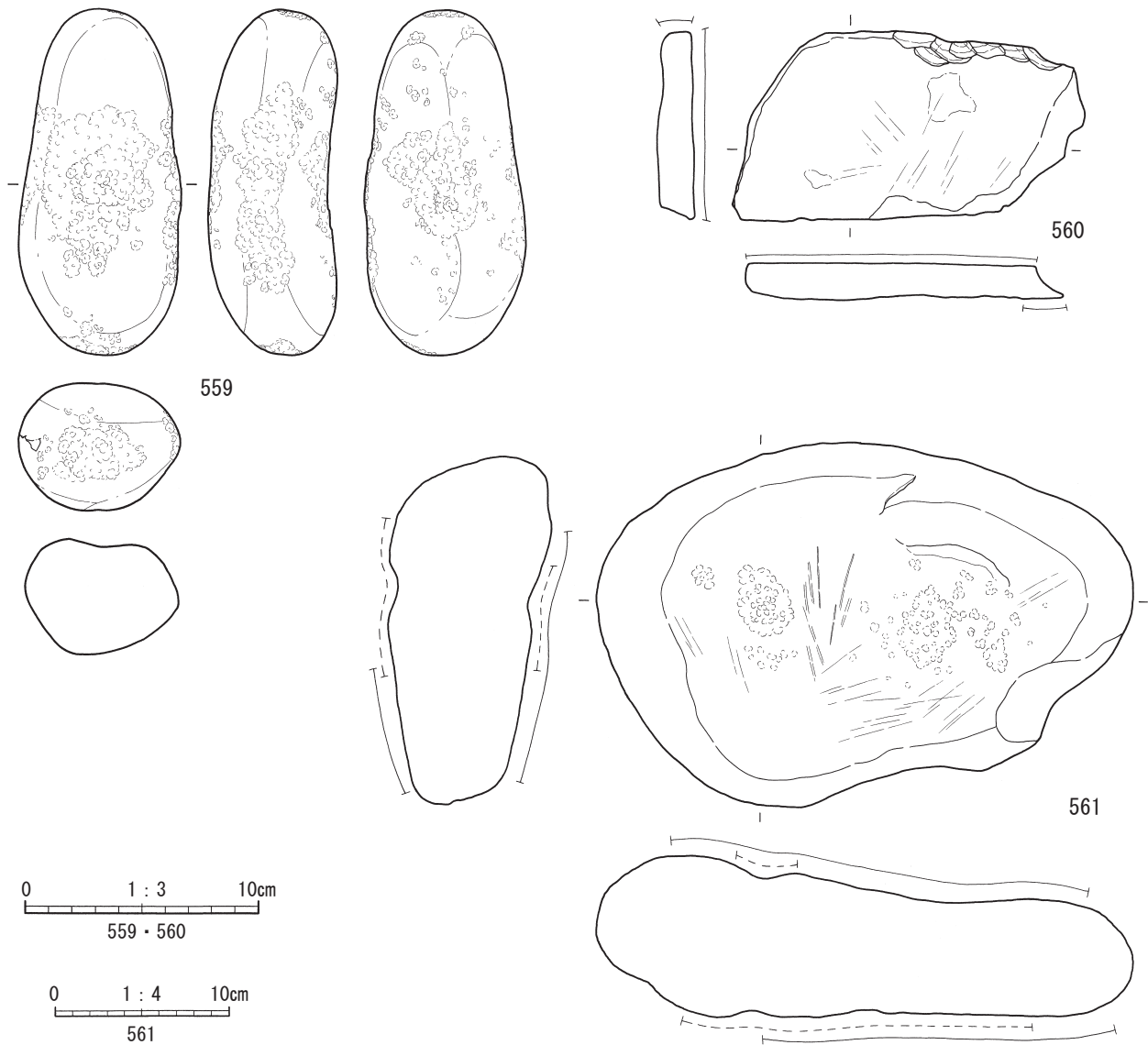
埋土掘り下げ後、埋土dを検出し、その面を床面（生活面）と捉えた。

床面の検出レベルは30.72～30.70mで、遺構検出面からの深さは約35cmを測る。

明確な硬化面は確認できなかったものの、床面は締まっている。

（4）炉

床面よりレベルがやや下がったところで、赤味を帯びた土の範囲が確認されたため、炉と捉えた。貼床土（埋土d）を除去後に炉を確認したため、東側の一部は形状が不明である。



第98図 22号竪穴建物跡 出土遺物（2）

平面形は、 $(0.35) \times (0.45)$ mの楕円形を呈すると考える。深さは約10cmを測る。床面は貼床土とアカホヤ層で、アカホヤ層土が赤化している。

埋土は、暗褐色(7.5YR3/4)シルト質土で、締まりがない。赤化したアカホヤ層土を含む。粒子が均質でさらさらしており、所々焼き締まったところがある。

(5) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第100図)。

掘方の基盤層はアカホヤ層(VIa層)及びVIb層である。東側は溝状に一段下っており、最深部のレベルは30.48mで、遺構検出面からの深さは約60cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

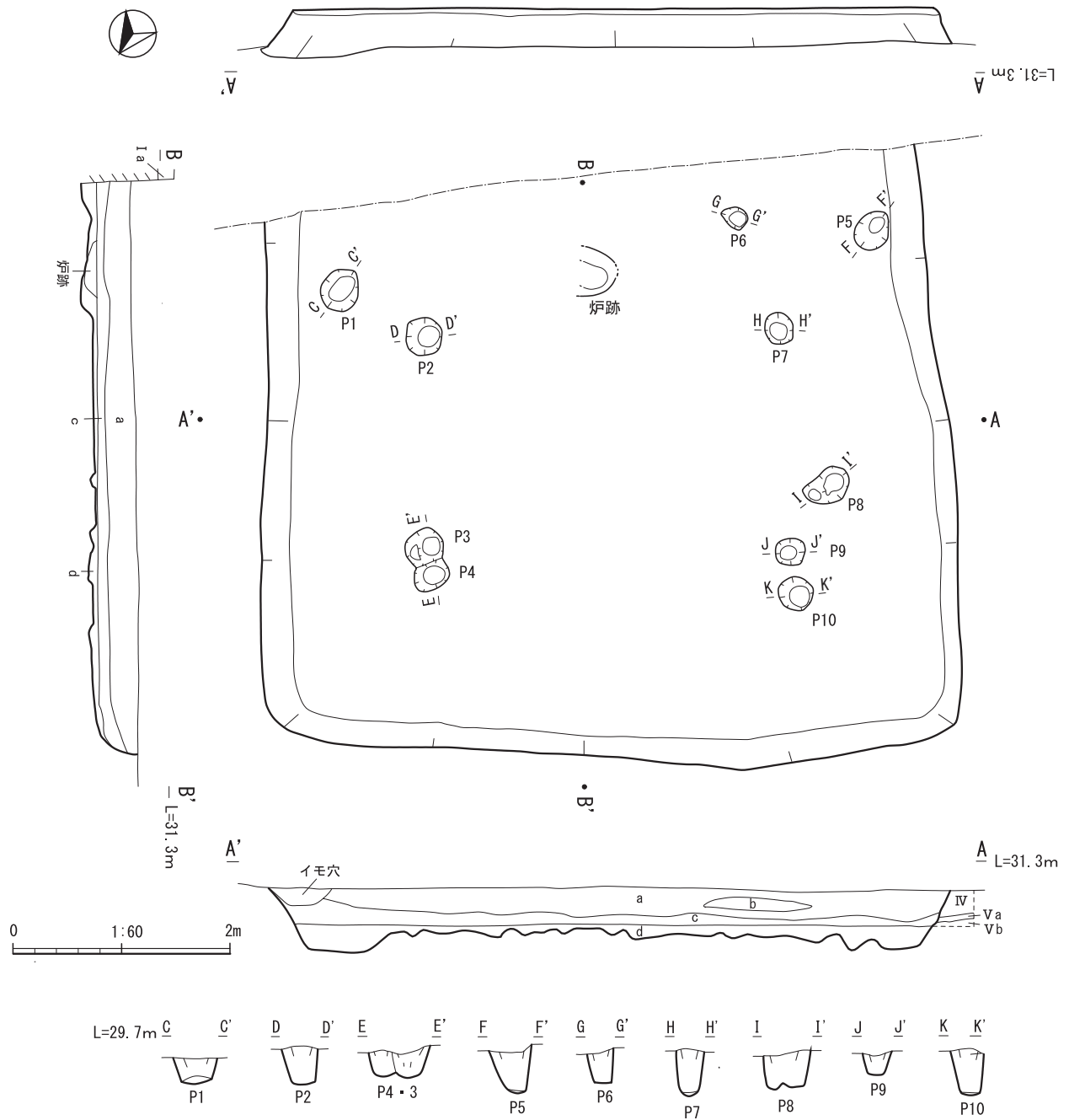
(6) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは床面において確認できず、掘方床面において10基検出した。床面は、P1がVIb層下位、それ以外はVII層に達している。

埋土は、黒褐色(10YR3/1~10YR2/1)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土を含む。

各柱穴・ピットの属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

- P 1 : $0.42 \times 0.35 \times 0.26$ m
- P 2 : $0.35 \times 0.35 \times 0.35$ m
- P 3 : $0.35 \times (0.30) \times 0.30$ m
- P 4 : $0.33 \times (0.25) \times 0.25$ m
- P 5 : $0.40 \times 0.30 \times 0.45$ m
- P 6 : $0.25 \times 0.20 \times 0.32$ m
- P 7 : $0.30 \times 0.28 \times 0.42$ m



第99図 22号竪穴建物跡 平・断面図

P 8 : 0.45×0.30×0.34m

P 9 : 0.30×0.30×0.22m

P 10 : 0.33×0.33×0.38m

竪穴の平面形と柱穴の配列から、「P 3 (P 4) - P 2 - ○ - ○ - P 7 - P 10 (P 9)」の6本柱建物と考える。

(7) 遺物 (第101~103図562~604)

遺物は、番号取上分で909点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると1,022点を数える(一括取上分除く)。埋土aからの出土が多い。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄器、軽石が認められ、43点図示した。

ア 土器 (562~582)

土器は、甕、甑、壺、鉢、坏、高坏を確認した。

甕 (562~571)

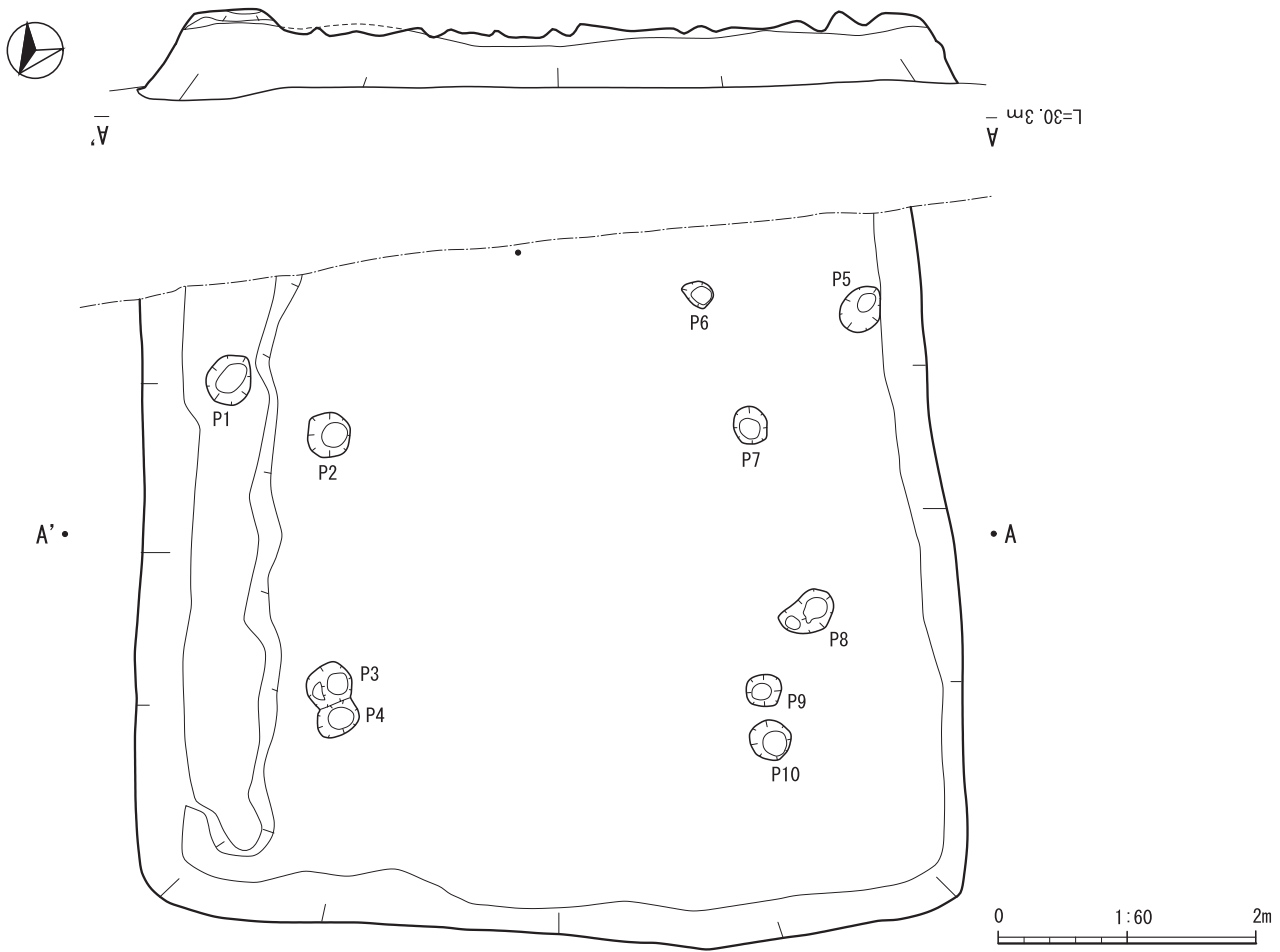
1類 (563)

口縁部が内湾するもの。

2類 (564・565)

口縁部が直行するもの。

564は、口縁端部に白色物質が付着する。柱穴3・4



第100図 23号竪穴建物跡 掘方平・断面図

の埋土一括遺物を含んでおり、竪穴廃絶時には破片化していたと考える。

2類あるいは3類 (566)

大きさに割に薄手である。胎土に金色ウンモを含む。

4類 (562)

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。かなり厚く肥厚している。突帯に竹管文を施す。

脚台 (567~569)

567・568は接合痕で脚部が外れており、製作技法がうかがえる。

平底 (570・571)

ともに外底面に木葉痕が残る。570は胎土の特徴から、都城盆地部からの搬入品の可能性がある。

甑 (572)

筒抜け形である。

壺 (573)

丸平底を呈する。

鉢 (574)

SI20埋土内遺物と接合している。胎土の特徴から、宮

崎平野部からの搬入品である。

坏 (575~578)

575は在来系の1類で、外面にススが付着する。

576~578は2類で、搬入品の可能性がある。

576は一部床着出土。577は、口縁端部に意図的な打ち欠きが認められる。

高坏 (579~582)

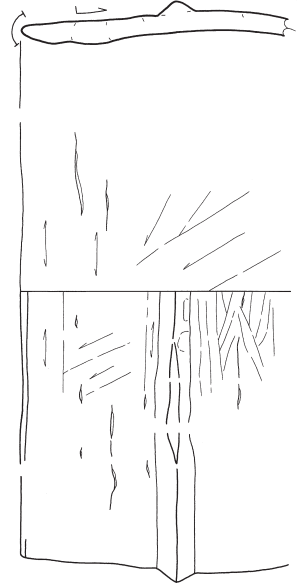
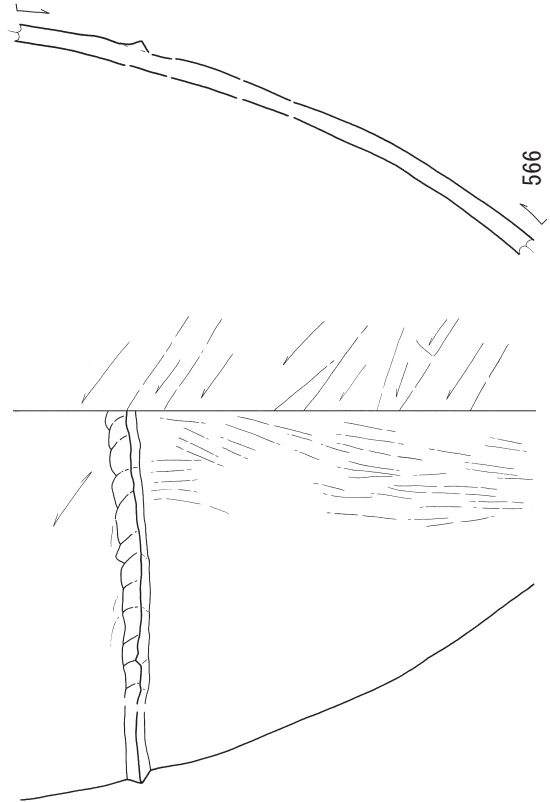
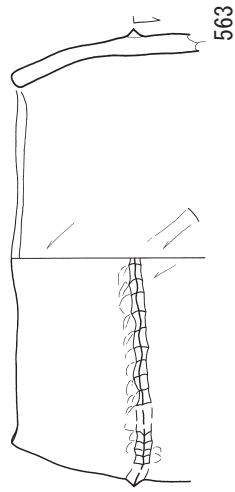
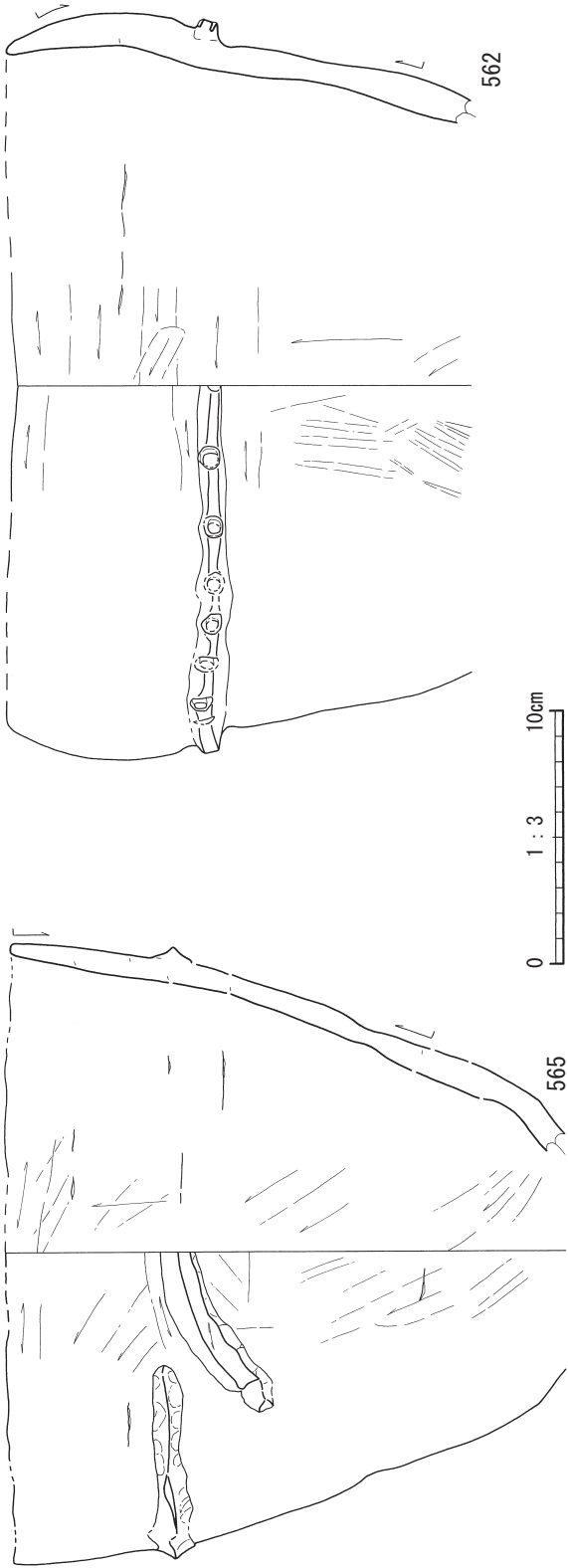
579は接合痕で脚部が外れている。黒色処理が行われる。胎土に金色ウンモを含む。580は胎土の特徴から搬入品の可能性がある。あるいは时期的に古い可能性がある。581は2箇所「||」のヘラ記号がある。胎土に金色ウンモを含む。582は精製赤彩土器である。

イ 須恵器 (583~589)

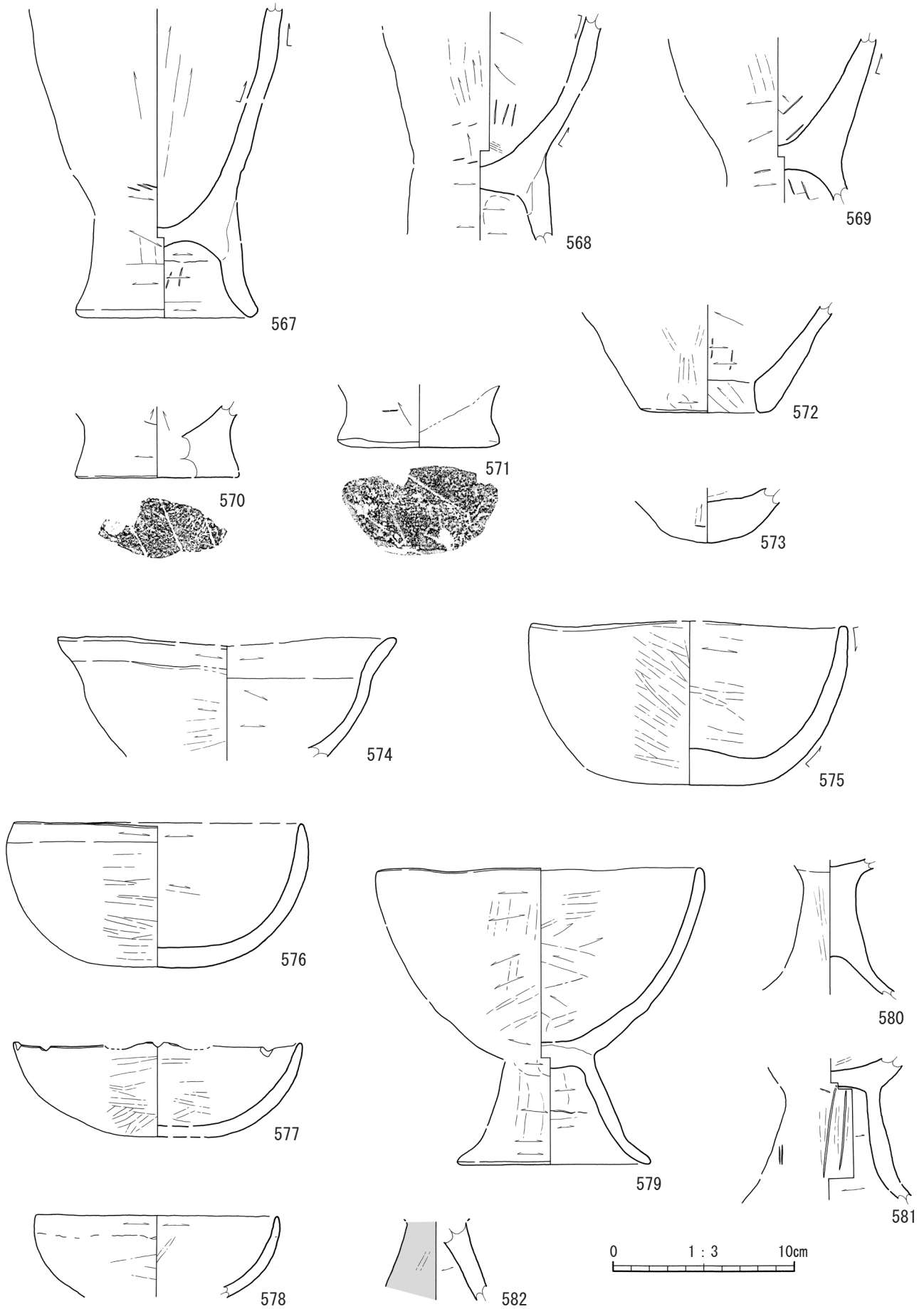
須恵器は、坏蓋、坏身、提瓶、平瓶、甕を確認した。

583・584は坏蓋である。583は少し屈曲するようにして口縁部に至る。584は、天井部にヘラ記号が施されている。SI20埋土内出土遺物と接合している。

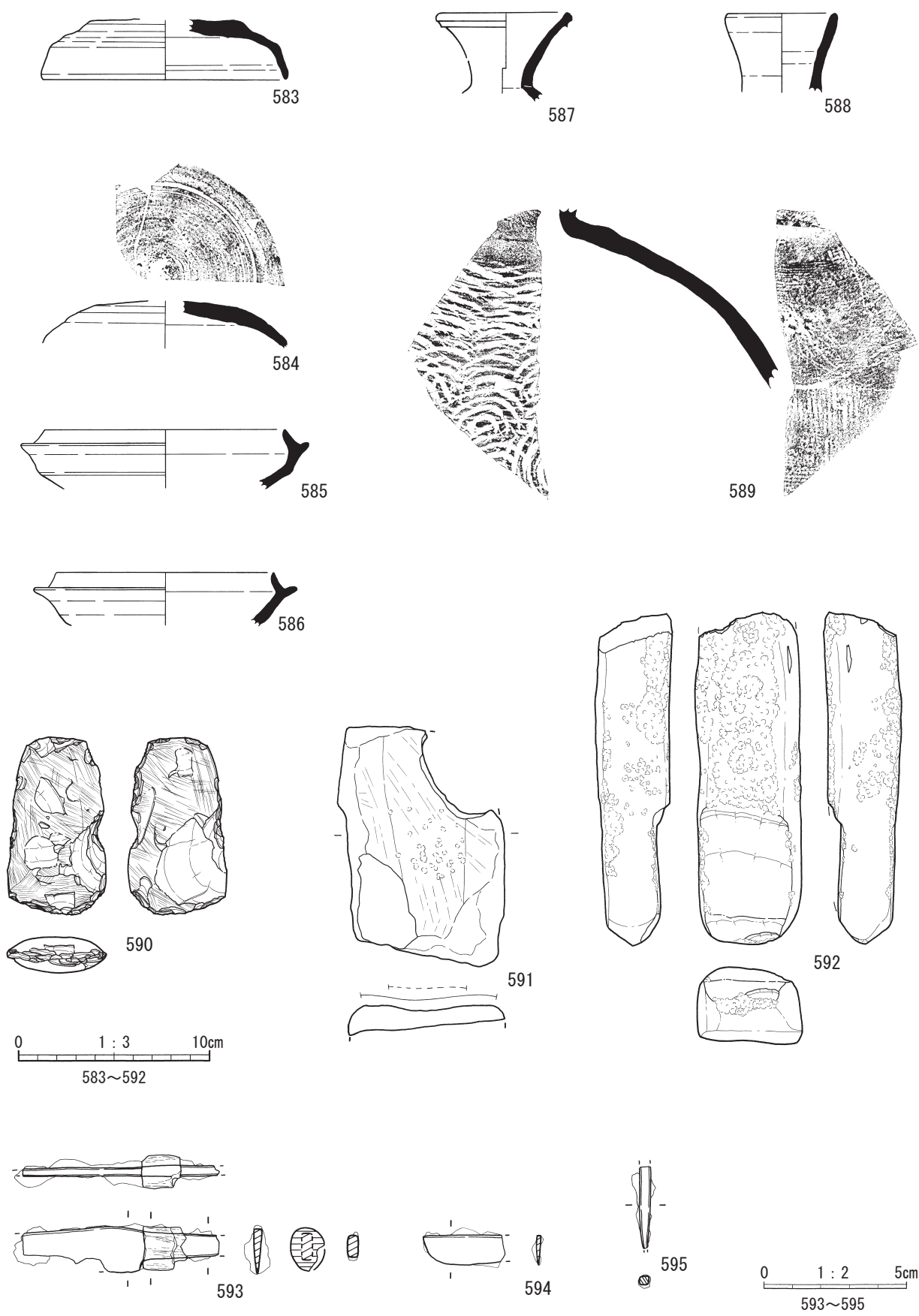
585・586は坏身で、どちらも立ち上がりは内傾している。底部は残存していないため、調整は不明である。



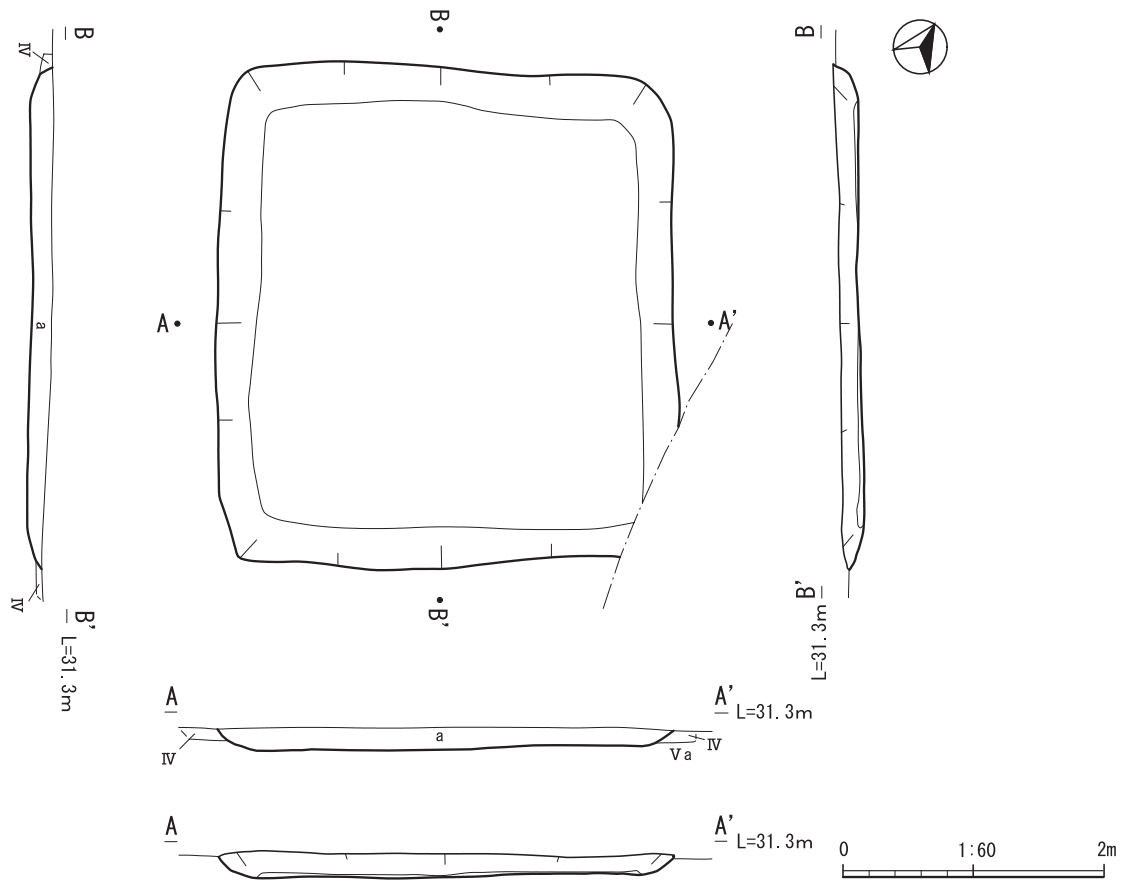
第101图 23号竖穴建物跡 出土遺物(1)



第102图 23号竖穴建物跡 出土遺物(2)



第103图 23号竖穴建物跡 出土遺物(3)



第104図 24号竪穴建物跡 平・断面図

587は提瓶の口縁部である。端部に稜が2箇所あり、頸部では接合痕がみられる。

588は平瓶あるいは提瓶の口縁部と考えられ、沈線や突帯などはみられない。

589は甕の頸部から胴部が残存したものである。外面は灰被りにより、調整が確認しにくい。

ウ 石器 (590~592)

石器は磨製石斧、打製石斧、石鎚、砥石を確認した。

590は磨製石斧で、刃部に刃こぼれが認められる。

591は砥石で、わずかの敲打後、顕著に磨っている。赤化し、被熱破砕している。

592は棒状を呈する2類の石鎚で、正面に凹みが2箇所認められる。

エ 棒状礫

4点確認できた。

オ 鉄器 (593~595)

鉄器は、刀子と棒状工具を確認した。

593・594は刀子で、593は茎部に木質が残る。595は棒状工具の可能性はある。

カ 軽石

赤化した10cm以下のものが、10点程認められた。

17 24号竪穴建物 (SI24) (第104図)

(1) 検出

H-6区のIV層中位で検出した。検出レベルは、31.20~31.12mである。

平面形は、3.9×3.5mの長方形を呈する。東側の一部は調査区外に延びる。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は単一層 (a) で、竪穴埋没土である。

a : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石やアカホヤ層 (VIa層) 土をわずかに含む。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、Va層を検出したことから、その面を床面 (生活面) と捉えた。

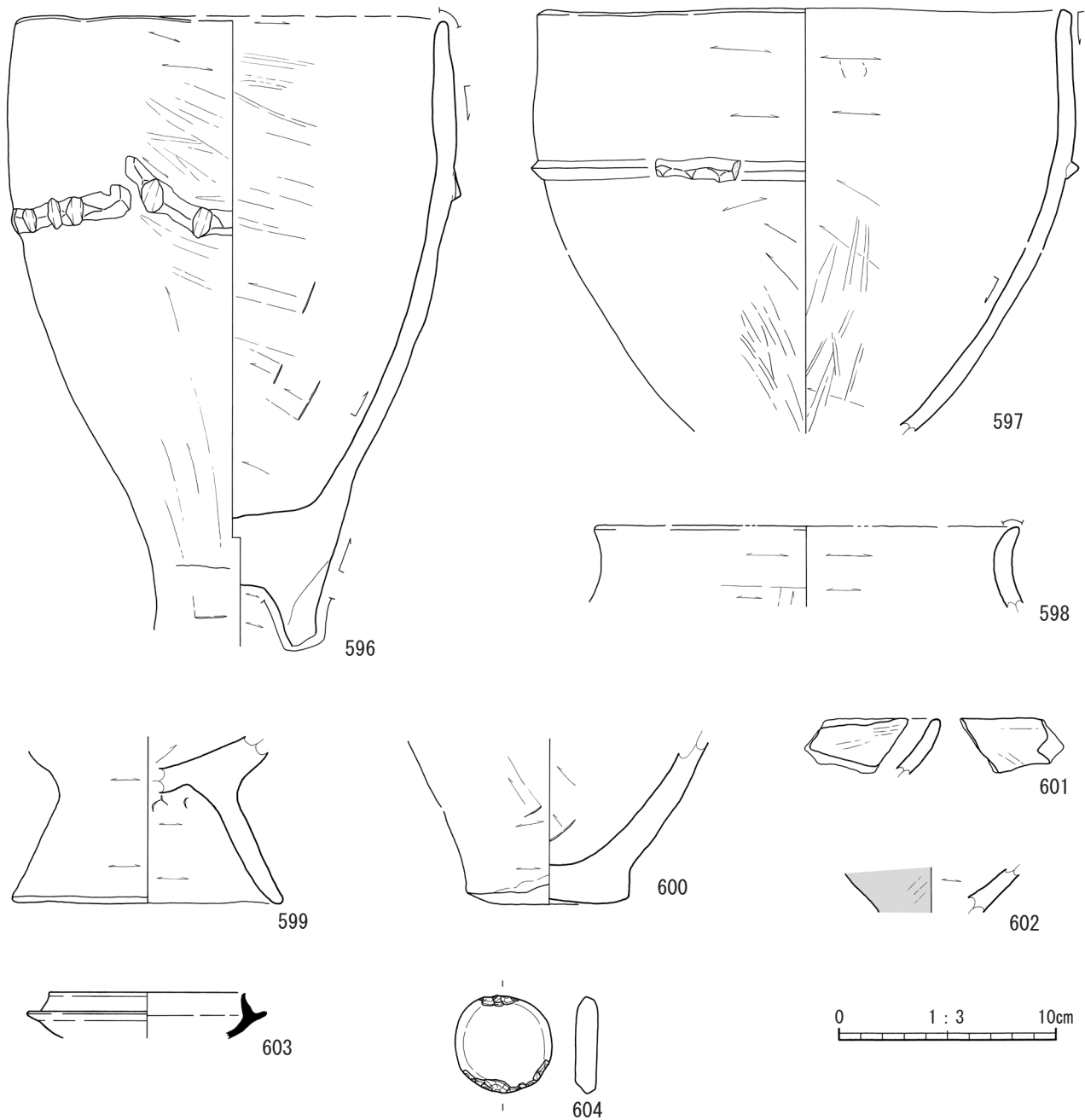
床面の検出レベルは31.05~31.00mで、遺構検出面からの深さは約10cmを測る。硬化面は確認できなかった。

なお、竪穴建物の立ち上がりは、サブレンチを設定して確認した。

(4) 生活施設・柱穴

炉や土坑などの生活施設は確認できなかった。

柱穴も床面では確認できず、さらに床面をアカホヤ層上面まで掘り下げたものの確認できなかった。



第105図 24号竪穴建物跡 出土遺物

(5) 遺物 (第105図596~604)

遺物は、番号取上分で81点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると160点を数える (一括取上分除く)。

土器、須恵器、石器、軽石が認められ、9点図示した。

ア 土器 (596~602)

土器は、甕、坏、高坏を確認した。

甕 (596~600)

2類 (596)

口縁部が直行するもの。口縁端部に白色物質が付着する。外面胴部下半と底部内面の器面はあばた状に剥離している。脚台破損部分の断面にも白色物質が付着してい

ることから、脚台破損後も使用していた可能性が高い。厚手で、大きさの割に重量感がある。胎土に金色ウンモを含む。床着出土。

3類 (597)

口縁端部でやや外反するもの。

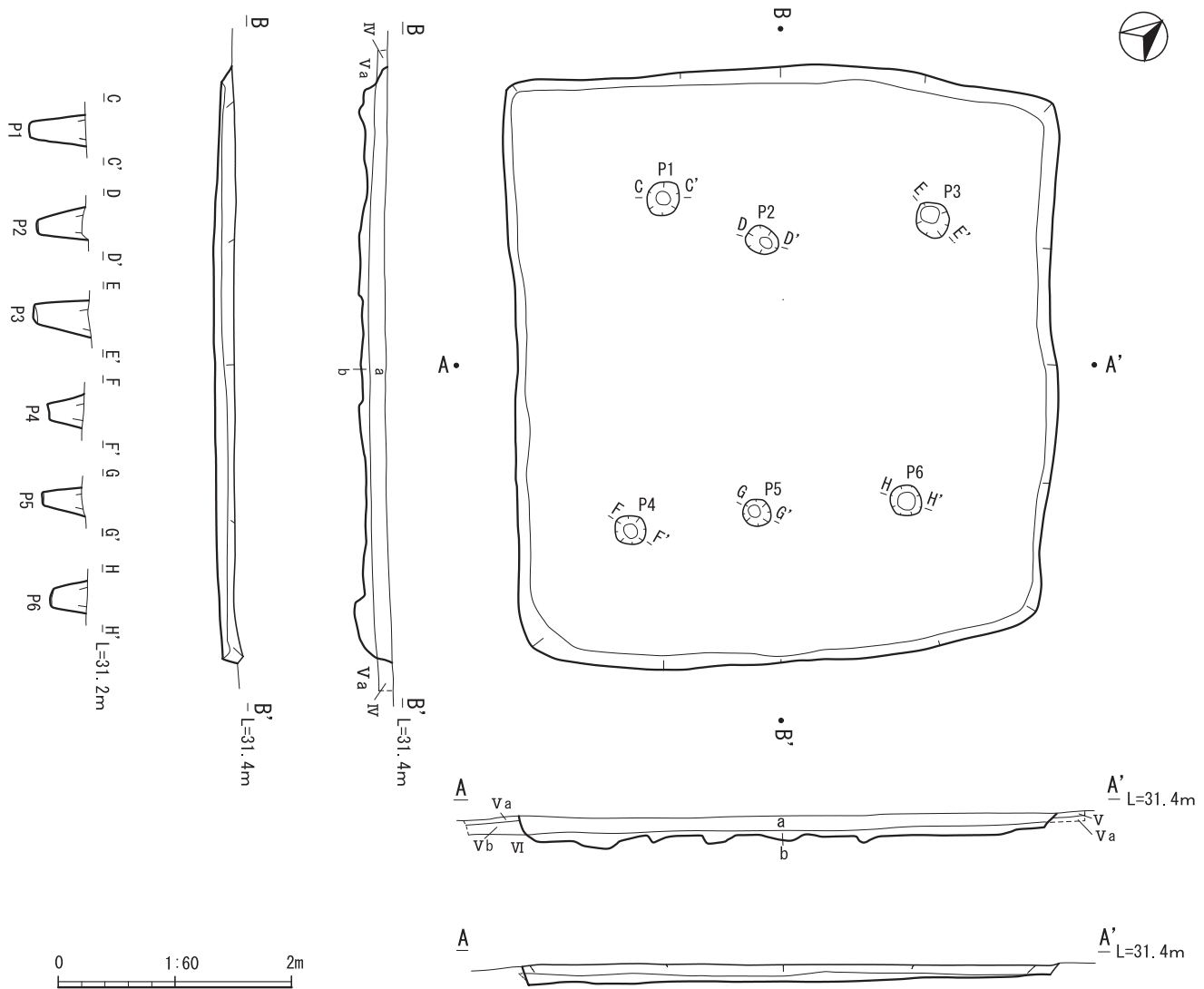
6類 (598)

口縁端部に白色物質が付着する。器面調整から搬入品の可能性がある。

脚台 (599)

胎土に金色ウンモを含む。

平底 (600)



第106図 25号竪穴建物跡 平・断面図

坏 (601)

2類で、胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品の可能性がある。

高坏 (602)

精製赤彩土器の坏部である。

イ 須恵器 (603)

須恵器は、坏蓋、坏身、甕を確認した。

603は坏身の口縁部で、立ち上がりが少し高い。推定される口径は9.0cmである。竪穴埋土内可能性遺物。

ウ 石器 (604)

石器は、石槌、砥石、打製石斧を確認した。

604は小型の4類の石槌で、上・下面に敲打時の剥離が認められる。器面の一部は黒化しており、鉄分も附着している。

エ 軽石

赤化したものを1点確認した。

18 25号竪穴建物 (SI25) (第106・107図)

(1) 検出

J-8区のIV層中位で検出した。検出レベルは、31.30～31.24mである。II層掘り下げ時から周囲よりも遺物量が多く、遺構の存在が予想されていた。

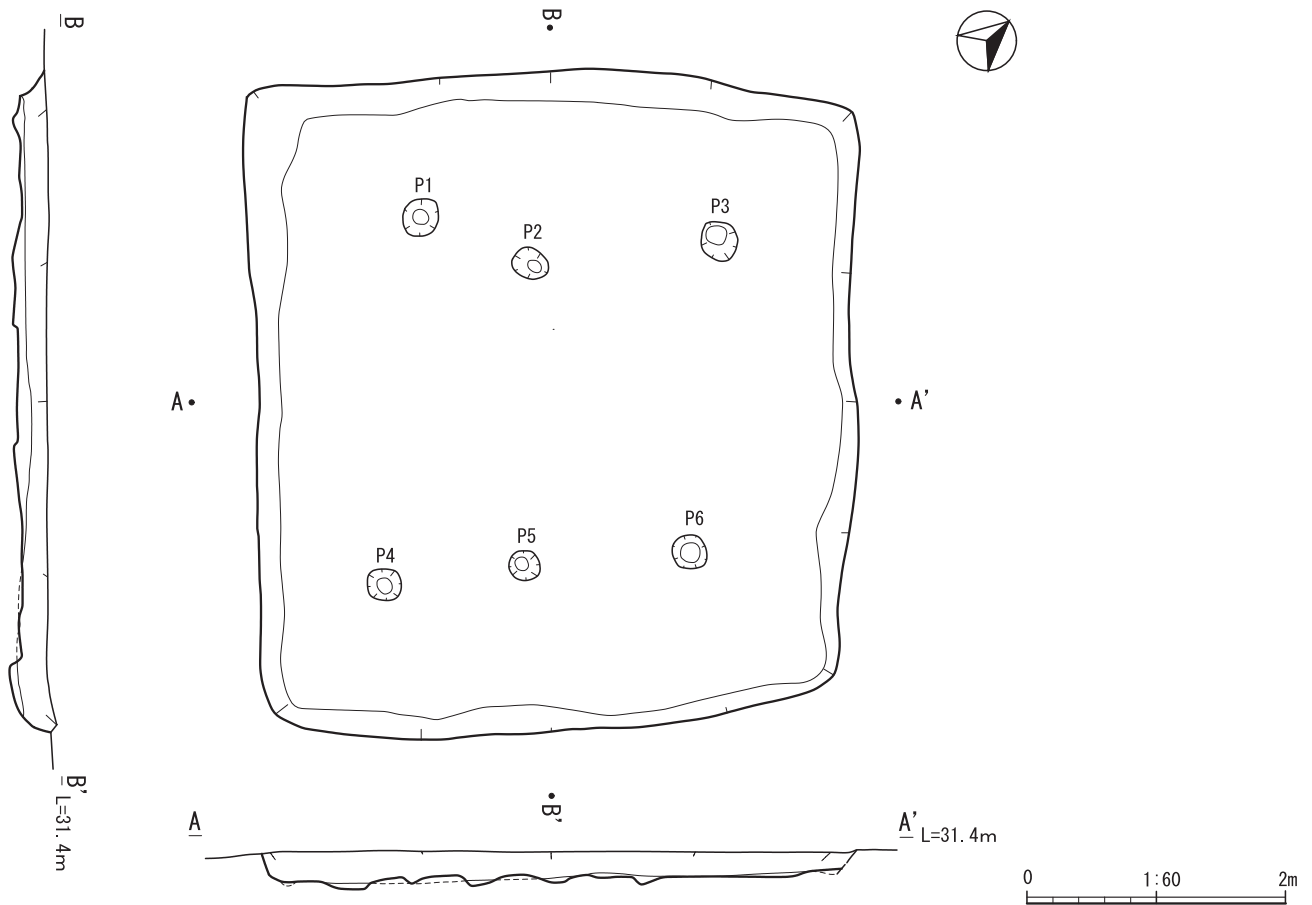
平面形は、5.1×4.7mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

竪穴埋土は2層 (a・b) に分けられ、埋土aは竪穴埋没土、埋土bは貼床土である。

a: 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石 (1～2cm程) をわずかに含み、アカホヤ層 (VIa層) 土を含む。下部ほどアカホヤ層土が多い。IV層土よりも色調がわずかに淡い。

b: 黒褐色 (10YR3/2) シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック (3～5cm程) を多く含む。層厚は5～10cm。



第107図 25号竪穴建物跡 掘方平・断面図

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土bを検出し、その面を床面（生活面）と捉えた。

床面の検出レベルは31.12~31.10mで、遺構検出面からの深さは約15cmを測る。硬化面は確認できなかった。

(4) 生活施設

炉や土坑などの生活施設は確認できなかった。他の竪穴建物で確認されたような、掘方床面が焼けた箇所も認められなかった。

(5) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した（第107図）。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは30.98mで、遺構検出面からの深さは約25cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(6) 柱穴 柱穴は床面において確認できず、掘方床面において6基検出した。床面は、P1・P4・P6がVIa層最下部、それ以外はVII層に達している。

埋土は、黒褐色（10YR3/1）シルト質土で、締まりがなく、池田降下軽石やアカホヤ層土を含む。

各柱穴の属性（長径×短径×深さ）は以下のとおり。

P1 : 0.32×0.30×0.50m

P2 : 0.30×0.25×0.40m

P3 : 0.33×0.30×0.50m

P4 : 0.30×0.25×0.30m

P5 : 0.25×0.25×0.37m

P6 : 0.30×0.28×0.32m

その配列から、6本柱建物と考える。

(7) 遺物（第108~110図605~625）

遺物は、番号取上分で204点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると284点である（一括取上分除く）。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄器、軽石が認められ、21点図示した。

ア 土器（605~617）

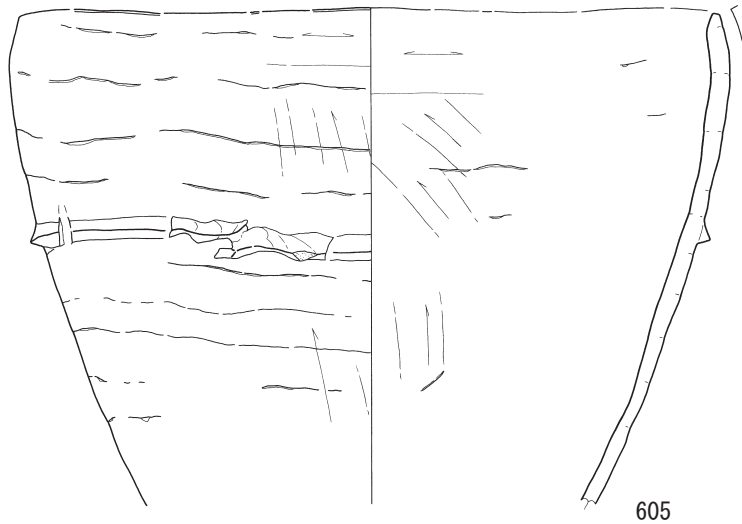
土器は、甕、坏、鉢、壺、高坏を確認した。

甕（605~612）

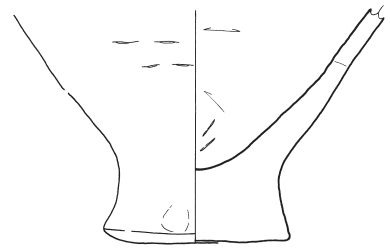
1類（605）

口縁部が内湾するもの。絡縄突帯にユビナデ上げ刻みを施す。外面に接合痕が目立つ。黄橙色系を呈し、大きさの割に薄手のつくりである。

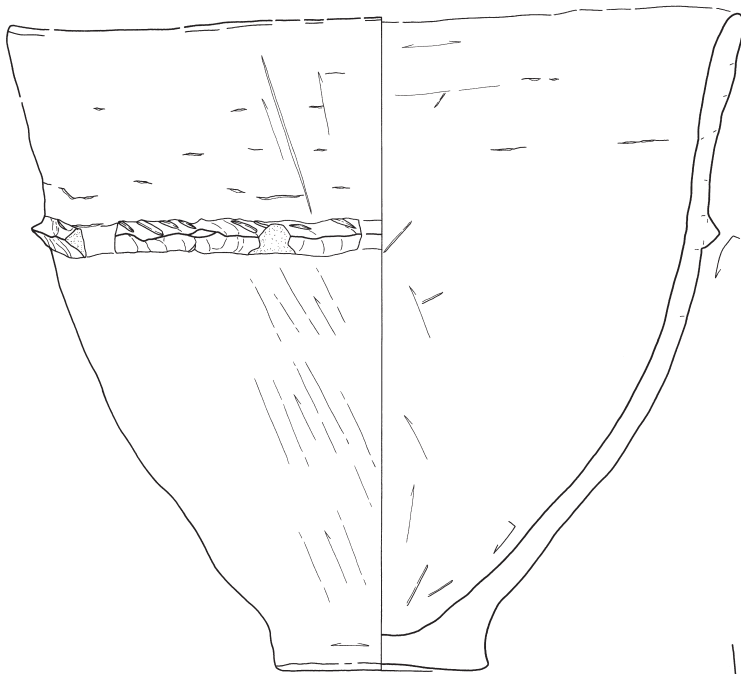
2類（606）



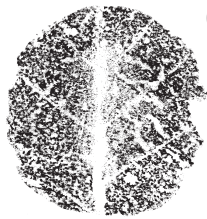
605



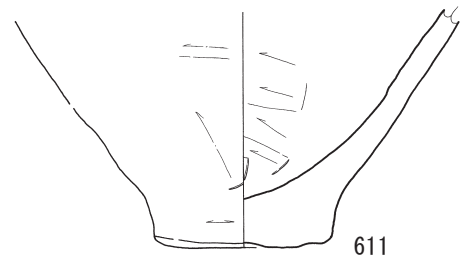
609



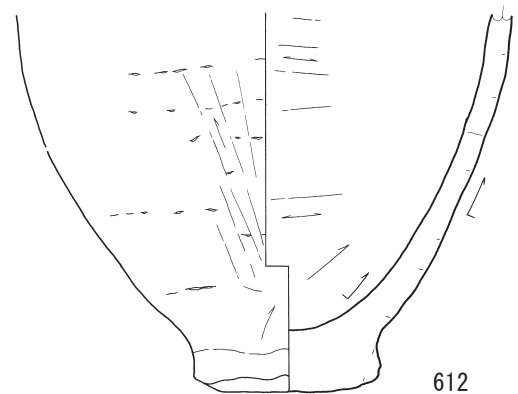
606



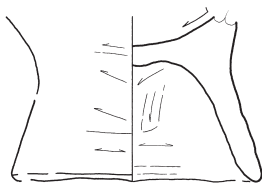
610



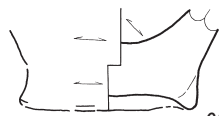
611



612



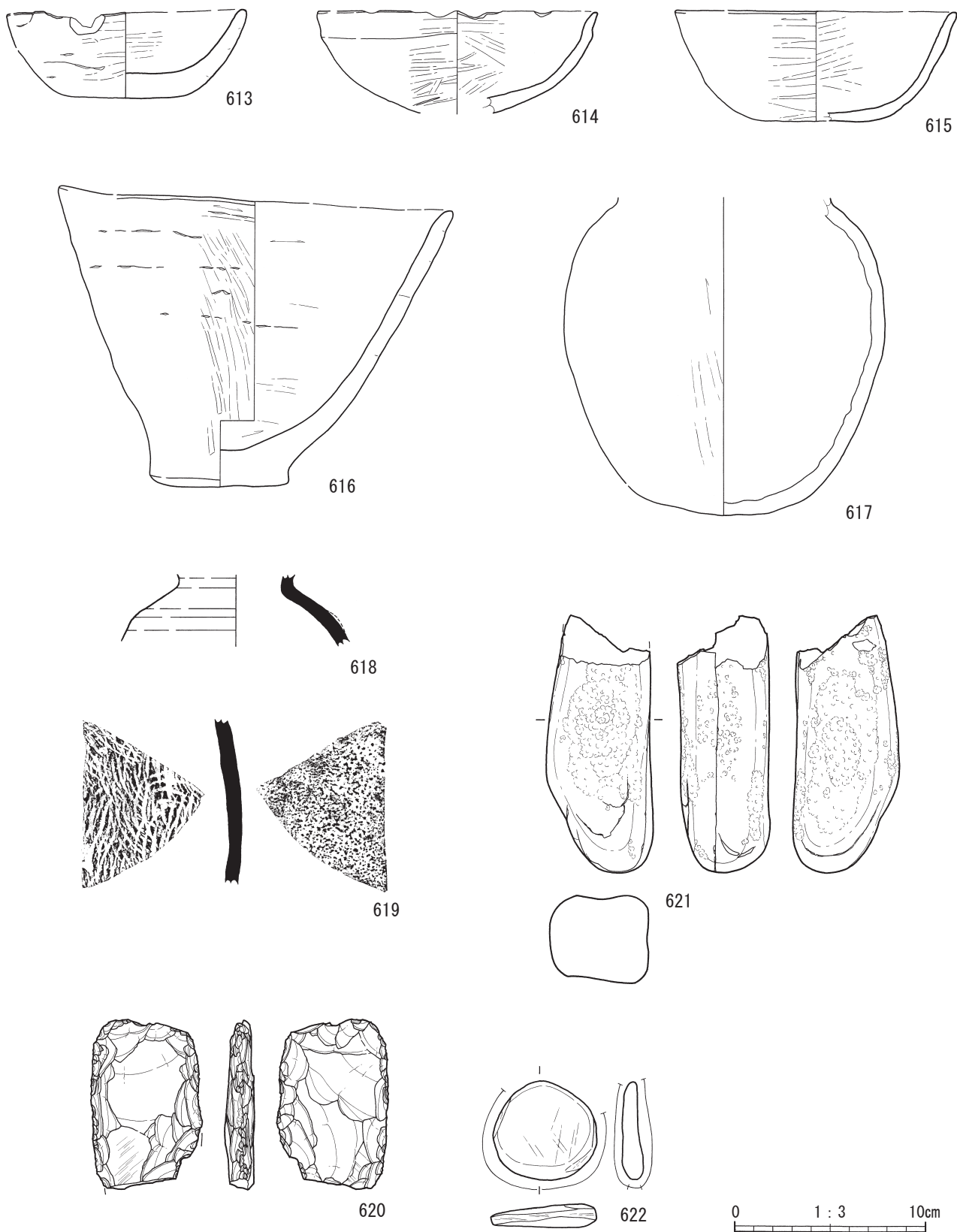
607



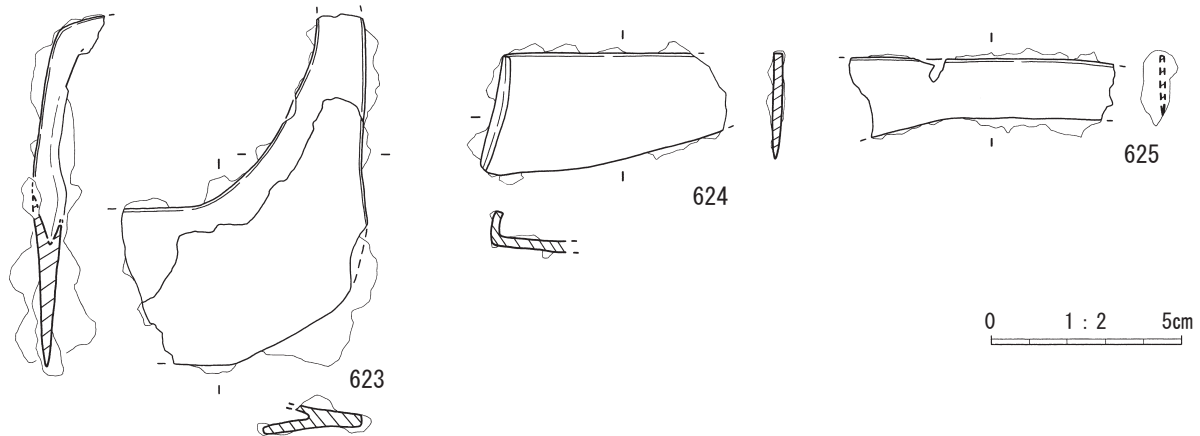
608

0 1 : 3 10cm

第108图 25号竖穴建物跡 出土遺物(1)



第109图 25号竖穴建物跡 出土遺物(2)



第110図 25号竪穴建物跡 出土遺物（3）

口縁部が直行するもの。口径が器高より大きい。外底面に木葉痕が残る。一部床着出土。

脚台（607・608）

607は胎土に金色ウンモを含む。608は低脚である。

平底（609～612）

609・610は、外底面に木葉痕が残る。609～611は床着出土。

612は底端部に粘土を貼付して張り出しを形成している。外面に接合痕が目立つ。

坏（613～615）

613は1類で、在来系のものである。口縁端部に意図的な打ち欠きが認められる。

614・615は2類で、搬入品の可能性がある。

614は、口縁端部に意図的な打ち欠きが認められる。

底部外面にヘラ記号のような沈線がある。一部床着出土。

鉢（616）

器形がやや歪んでいる。外面に接合痕が残る。

壺（617）

小型のもので、内面はあばた状に剥離している。胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品と考える。一部床着出土。

高坏

精製赤彩土器の小破片を1点確認した。

イ 須恵器（618・619）

須恵器は、提瓶と甕を確認した。

618は提瓶の胴部と考えられ、外面に把手痕と想定される膨らみがある。

619は甕の胴部である。外面は灰被りで、調整が確認できない。

ウ 石器（620～622）

石器は、打製石斧、石鎚、砥石を確認した。

620は打製石斧で、短冊形を呈する。

621は棒状を呈する2類の石鎚である。正面は凹んで

おり、下面は被熱により黒化している。床着出土の破片と包含層出土の破片が接合している。

622は小型の砥石で、周縁を特に使用している。

エ 棒状礫

6点確認した。

オ 鉄器（623～625）

鉄器は、鍬鋤先、鎌、棒状工具を確認した。

623はU字形鍬鋤先である。耳部は屈曲して、欠損している。V字溝の表面側は欠損している。

624・625は鎌で、接合しないが、同一個体である。折り返しが左側にある「乙折り返し」である。

カ 軽石

10cm以下のものを10点程確認した。黒化したものもある。

19 26号竪穴建物（SI26）（第111・112図）

（1）検出

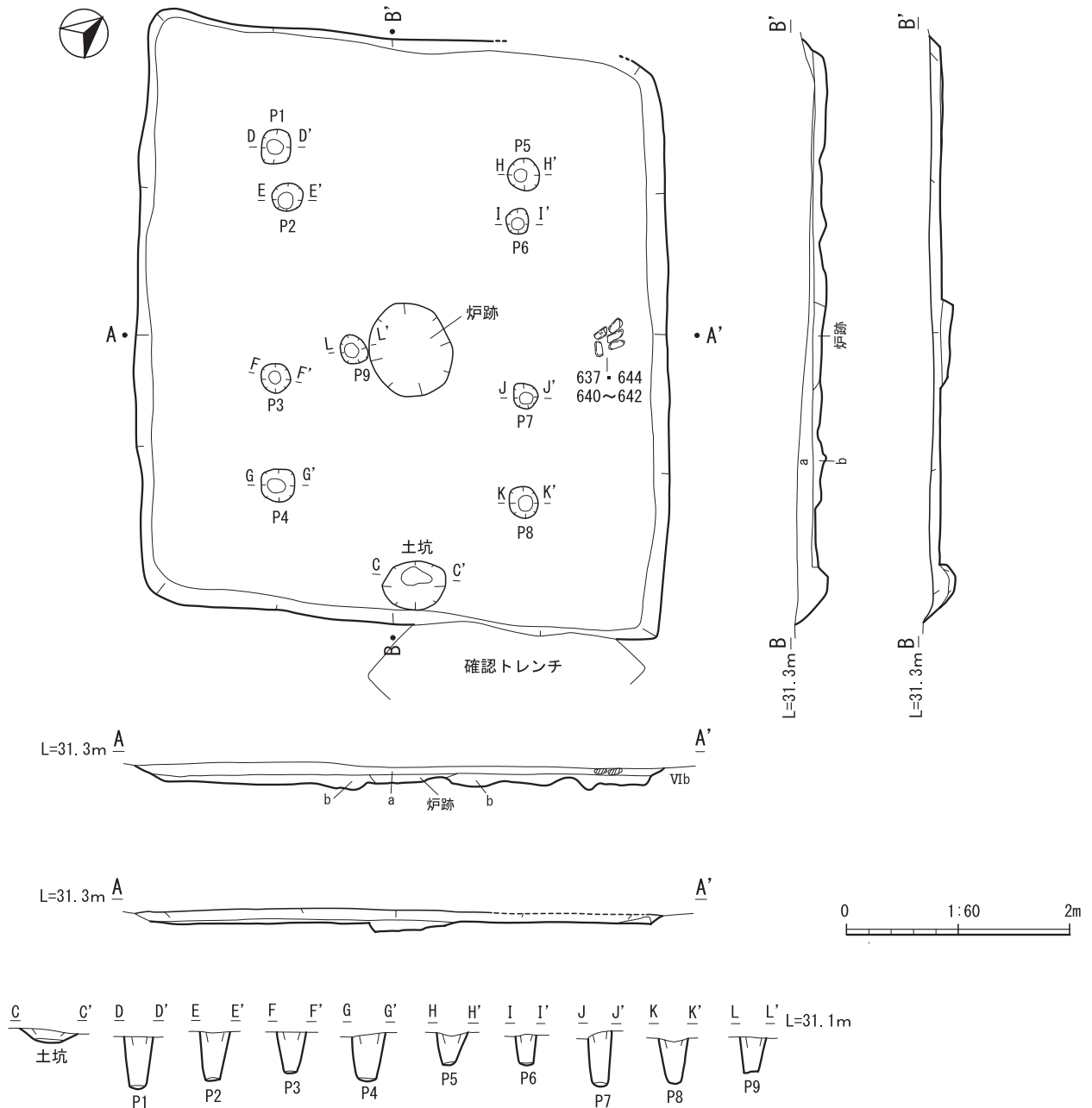
J・K-9区のVa層下位及びVb層上面で検出した。検出レベルは、31.26～31.16mである。検出レベルが低かったため、竪穴上場ラインの北側一部は不明である。また、南側には確認調査4トレンチがある。

平面形は、5.3×4.6mの方形を呈する。やや平行四辺形気味である。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

（2）埋土

竪穴埋土は2層（a・b）に分けられ、埋土aは竪穴埋没土、埋土bは貼床土である。

a：黒褐色（10YR3/1）シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層（VIa層）土を多く含み、池田降下軽石（1cm程）をわずかに含む。



第111図 26号竖穴建物跡 平・断面図

b : 黒褐色 (10YR3/2) シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック (5 cm程) を多く含み、池田降下軽石 (1 cm程) をわずかに含む。層厚は10~15cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土 b を検出し、その面を床面 (生活面) と捉えた。

床面の検出レベルは31.10~31.08mで、遺構検出面からの深さは約10cmを測る。

硬化面の明確な広がりには確認できなかったが、部分的に残存している。

(4) 炉

ベルトを床面まで掘り下げると竖穴中央付近において、貼床土とは異なる赤味を帯びた土の範囲が確認されたことから、そこを炉と捉えた。

平面形は、0.85×0.70mでの楕円形を呈する。深さは7cmを測る。床面はアカホヤ層土で、赤化している。

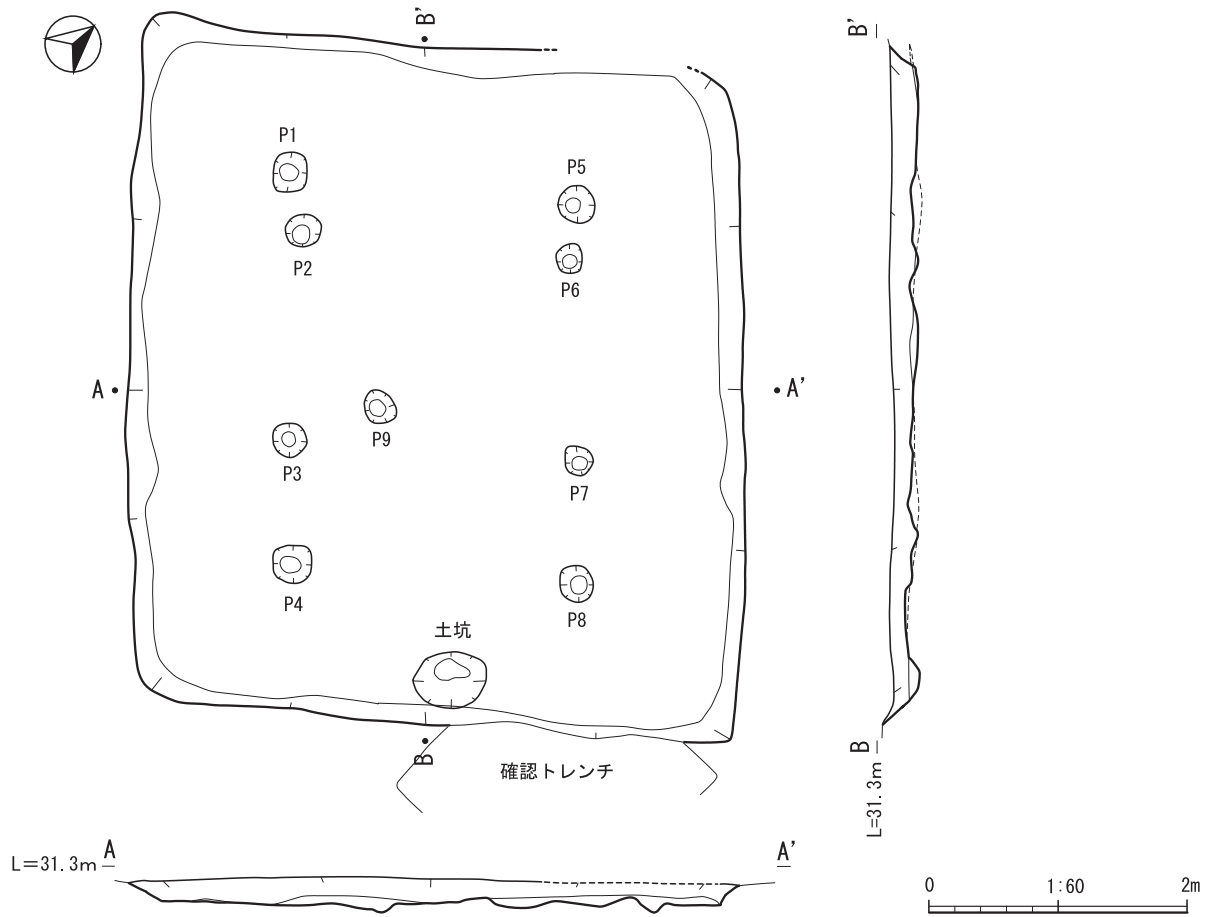
埋土は、褐色 (7.5YR4/3) シルト質土で、締まりが弱く、さらさらしている。

なお、炉下場ラインは記録漏れである。

(5) 土坑

床面検出時に、竖穴南壁際において土坑を確認した。

平面形は、0.55×0.45mの楕円形を呈する。深さは15cm



第112図 26号竪穴建物跡 掘方平・断面図

を測り、床面はアカホヤ層である。埋土は、竪穴埋土 a と同じである。

(6) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第112図)。

掘方の基盤層はアカホヤ層である。最深部のレベルは30.95mで、遺構検出面からの深さは約20cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(7) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは床面において確認できず、掘方床面において9基検出した。床面は全てⅦ層に達している。

埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりがなく、アカホヤ層土を含む。

各柱穴・ピットの属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

- P 1 : 0.30×0.25×0.50m
- P 2 : 0.30×0.25×0.46m
- P 3 : 0.30×0.25×0.35m
- P 4 : 0.30×0.30×0.45m
- P 5 : 0.30×0.30×0.40m

P 6 : 0.25×0.23×0.30m

P 7 : 0.25×0.25×0.50m

P 8 : 0.30×0.28×0.40m

P 9 : 0.28×0.25×0.30m

その配列から、「P 2-P 3-P 7-P 6」と「P 1-P 4-P 8-P 5」の2セット、あるいは「P 1-P 3-P 7-P 5」と「P 2-P 4-P 8-P 6」の2セットが考えられる。ともに前者の4本柱建物から後者の4本柱建物へ増築した可能性を考える。

(8) 遺物(第113~115図626~646)

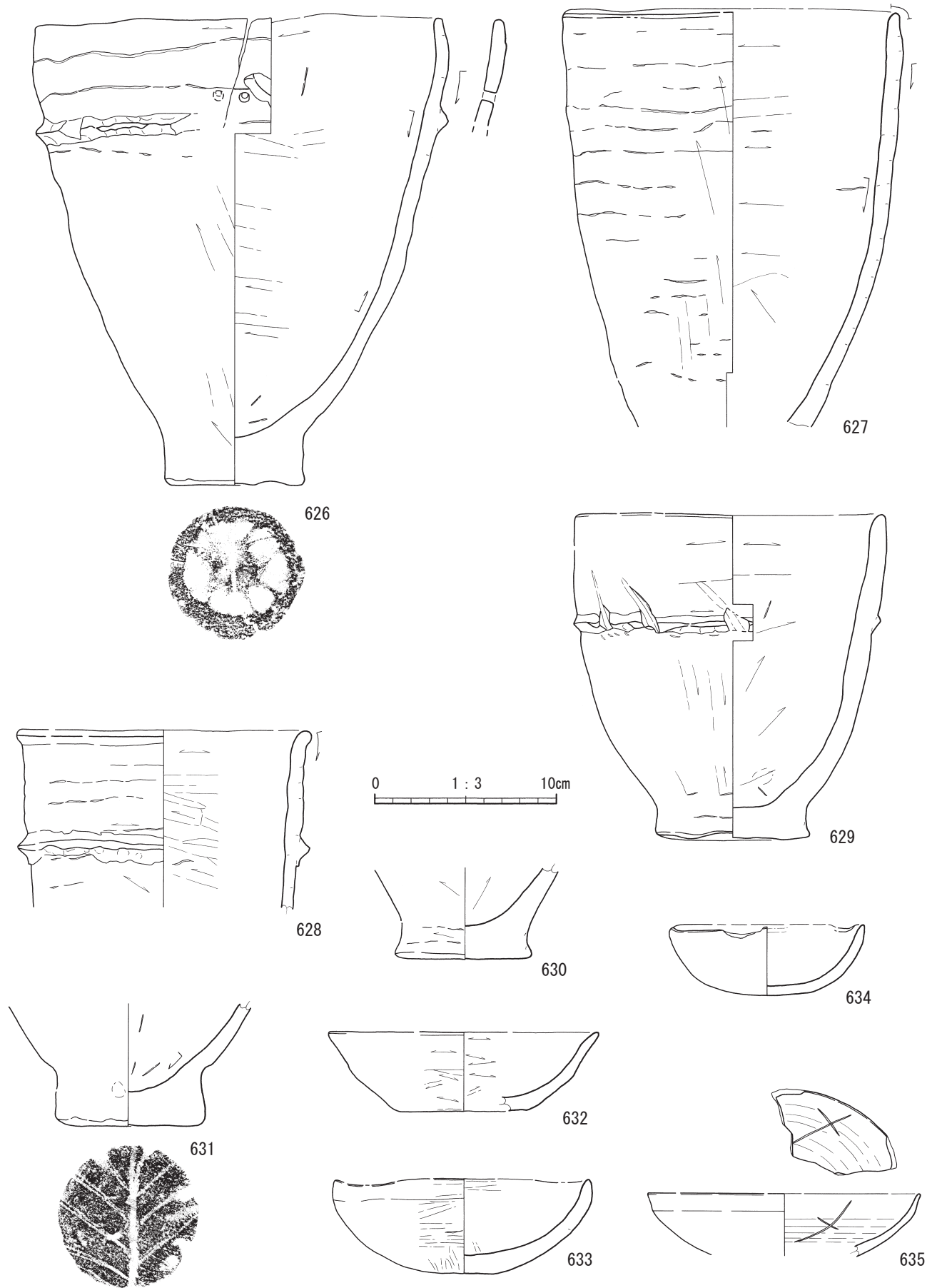
遺物は、番号取上分で185点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると197点を数える(一括取上分除く)。石鍬4点と棒状礫1点がまとめて床面に置かれていた(写真図版参照)。

土器、須恵器、石器、棒状礫、鉄器、鉄滓、軽石が認められ、21点図示した。

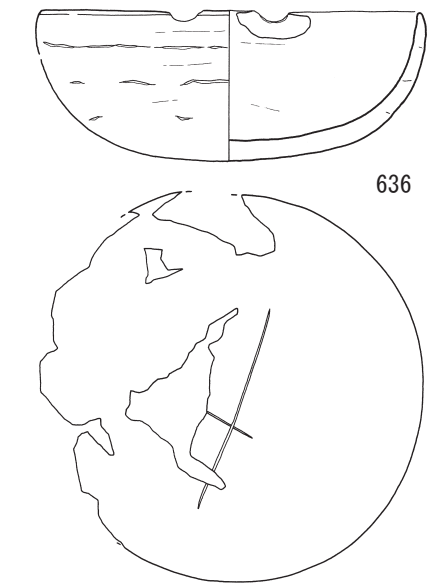
ア 土器(626~636)

土器は、甕、甌、坏を確認した。

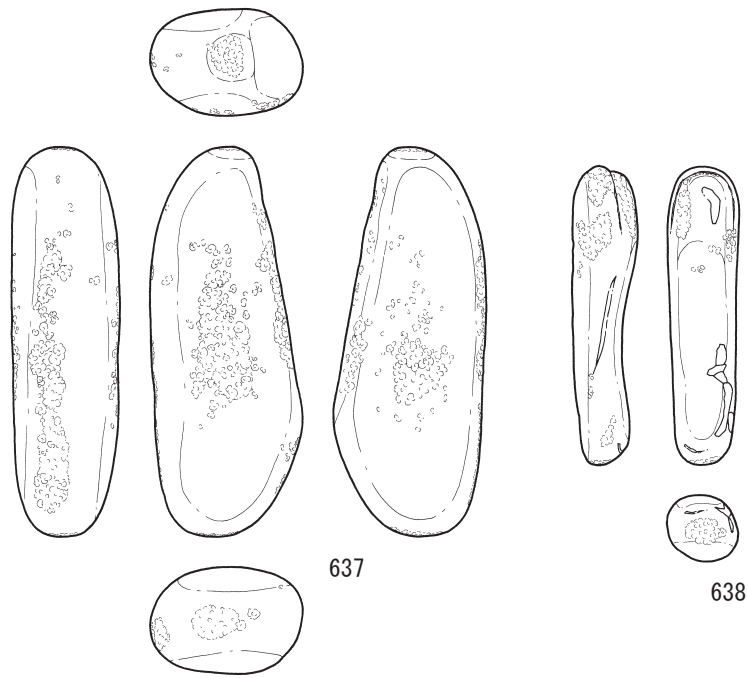
甕(626~631)



第113图 26号竖穴建物跡 出土遺物(1)

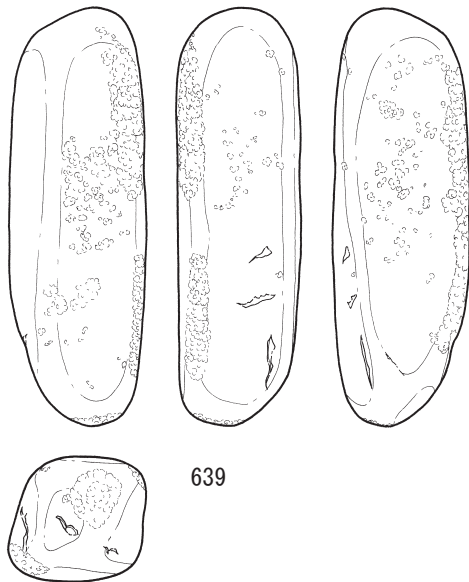


636

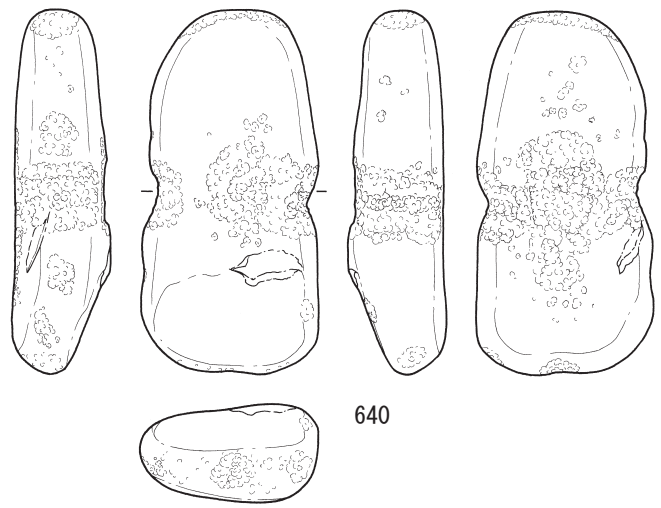


637

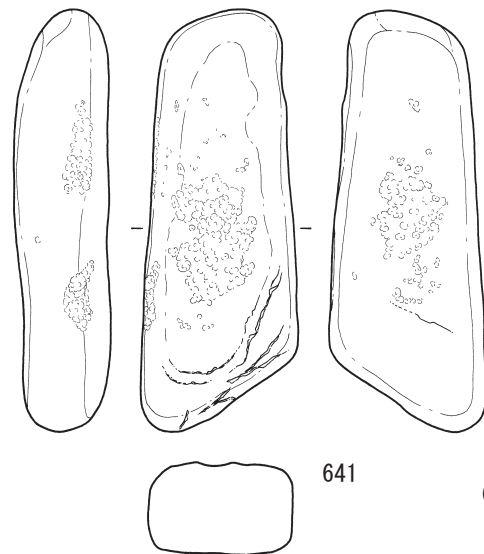
638



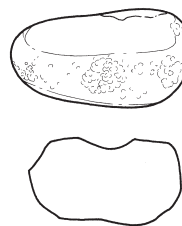
639



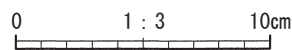
640



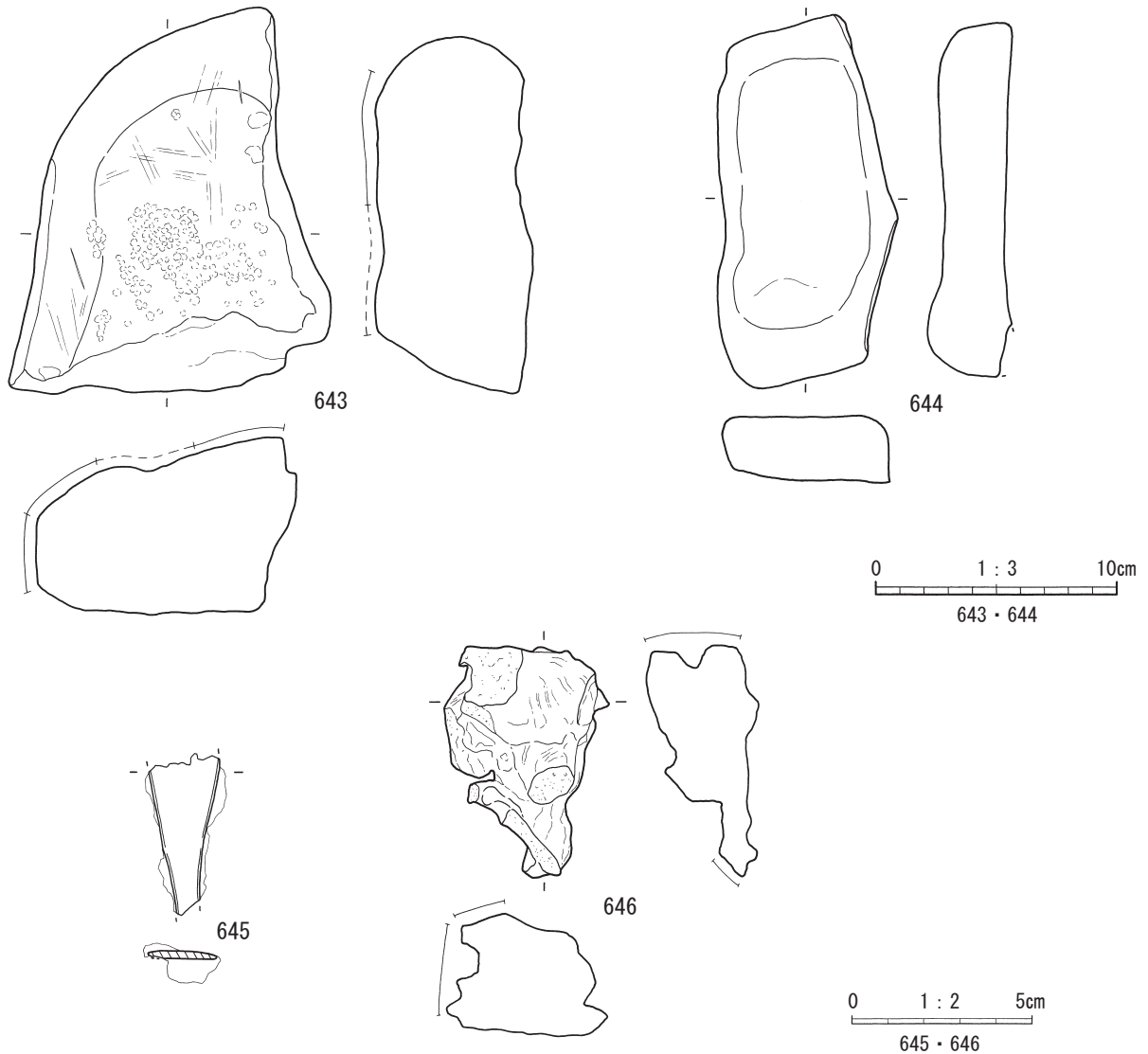
641



642



第114图 26号竖穴建物跡 出土遺物(2)



第115図 26号竪穴建物跡 出土遺物（3）

1類（626）

口縁部が内湾するもの。口縁部に補修孔が認められる。外底面には、ユビオサエ痕が巡る。黄橙色系を呈する。一部床着出土。

2類（627・629）

口縁部が直行するもの。

627は、口縁端部に白色物質が付着する。突帯を施さず、外面に接合痕が目立つ。一部床着出土。

629は突帯にユビナデ上げ刻みを施す。器高が低く、器面にススやコゲが認められないことから、鉢の可能性もある。

3類（628）

口縁端部でやや外反するもの。外面に接合痕が目立つ。一部床着出土。

平底（630・631）

631は外底面に木葉痕が残る。内面に炭化物が付着する。

甑

筒抜け形の底部小片が1点認められた。

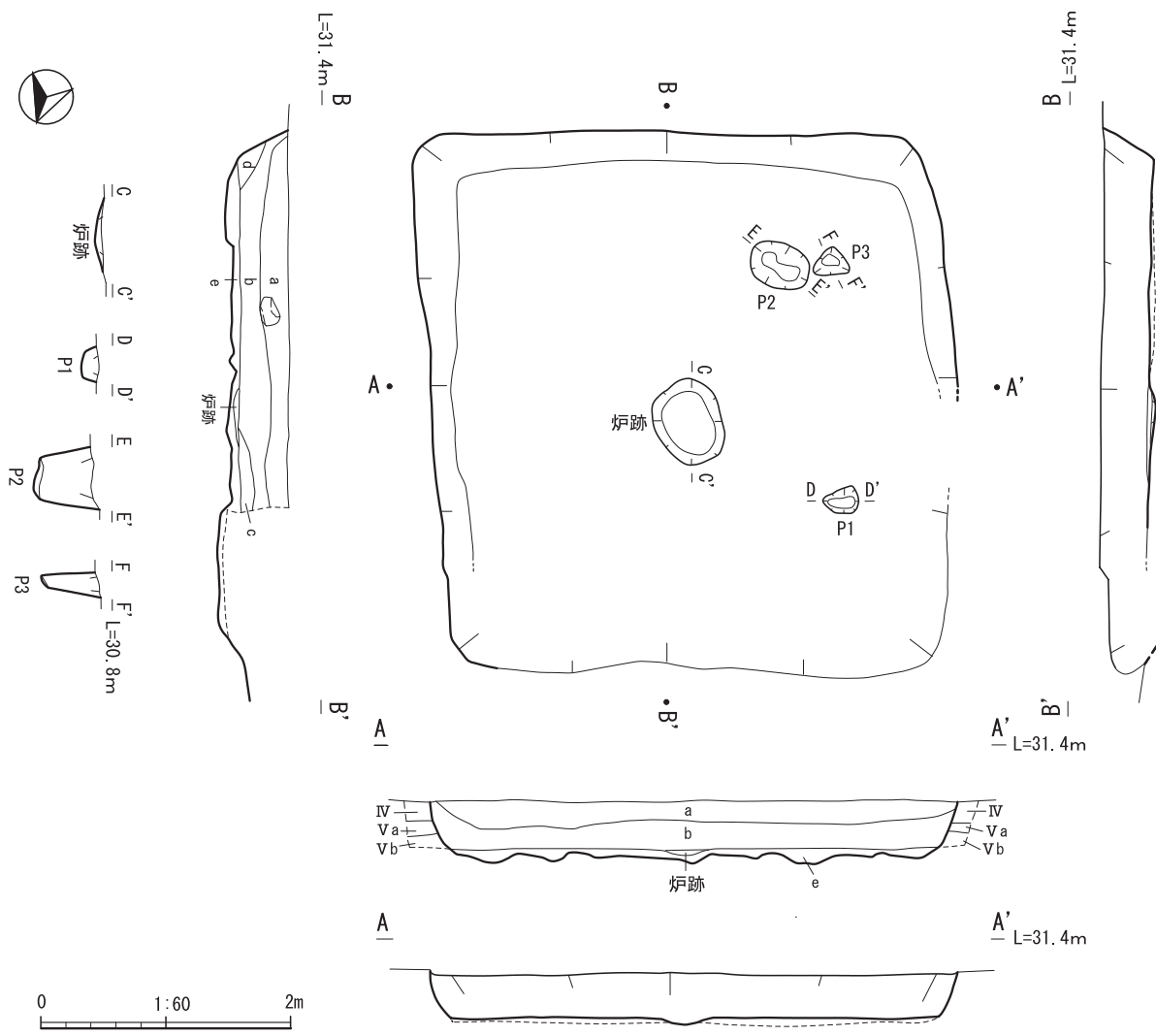
坏（632～636）

632・633は1類で、在来系のものである。633は一部床着出土。

634～636は2類で、搬入品である。634は、口縁端部に意図的な打ち欠きが認められる以外は完形品である。床着出土。

635は内面に回転ナデ痕がかすかに認められることから、回転台土師器の可能性が高い。内面にヘラ記号がうすく残る。精緻な胎土である。

636は、口縁端部に意図的な打ち欠きが認められる。外



第116図 28号竖穴建物跡 平・断面図

底面にヘラ記号がある。床着出土。

イ 須恵器

須恵器は、坏蓋あるいは坏身片を1点確認した。

ウ 石器 (637~643)

石器は、石鏃と鉄床石を確認した。

637~642は石鏃で、全て床着出土。

637~639は棒状を呈する2類である。638は、中央~下面にかけて鉄分が付着する。

640~642は、断面が扁平となる3類である。

640は、両側面が抉れるほど、そして下面が凹むほど使用されている。凹みに鉄分が付着する。642は、下面に鉄分が付着する。

643は鉄床石である。正・左側面に磨面が認められ、特に左側面が顕著である。正面は敲打後磨っている。器面に鉄分が付着する。床着出土。

エ 棒状礫 (644)

2点確認できた。644は断面扁平で、床着出土。

オ 鉄器 (645)

鉄器は、鉄鏃と棒状工具を確認した。

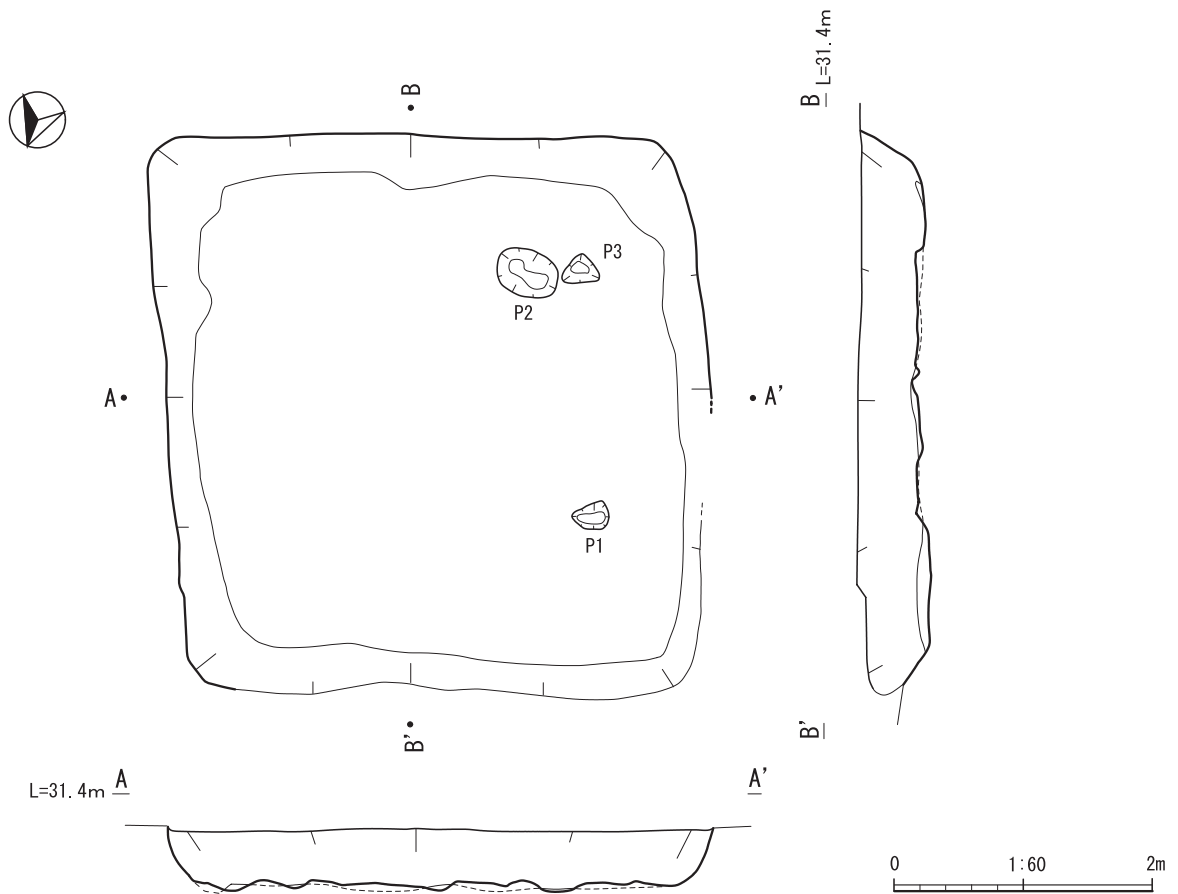
645は鉄鏃の鏃身部で、方頭斧箭式と考える。

カ 鉄滓 (646)

646は流動滓で、金属分析試料No.4である。

キ 軽石

5 cm程のものが1点認められた。



第117図 28号竪穴建物跡 掘方平・断面図

20 28号竪穴建物 (SI28) (第116・117図)

(1) 検出

E-6区で検出した。北半部は遺構の存在を見落とし、アカホヤ層 (VIa層) 上面まで掘り下げたところで竪穴建物の存在を認識した。その後、調査範囲を拡張し、IV層上面において検出した。検出レベルは、31.16～31.12mである。

平面形は、4.3×4.2mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

なお、第116図の竪穴建物上場ラインの北側 (細い線) は、アカホヤ層上面での上場ラインである。

(2) 埋土

竪穴埋土は5層 (a～e) に分けられ、埋土a～dは竪穴埋没土、埋土eは貼床土である。埋土c・dは一部壁際に存在する。

a : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、b層より締まりがない。池田降下軽石 (0.5cm程) をわずかに含む。

b : 黒褐色 (10YR3/1) シルト質土で、締まりがある。池田降下軽石 (1cm程) やアカホヤ層土 (1cm程) をわずかに含む。

c : 黒褐色 (10YR3/2) シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土 (2～3cm程) を含む。

d : 黒褐色 (10YR3/2) シルト質土で、締まりがある。アカホヤ層土 (1cm程) を含む。

e : 黒色 (10YR2/1) シルト質土で、締まりがある。アカホヤブロック (3～5cm程) を多く含み、池田降下軽石 (1cm程) やV層土をわずかに含む。層厚は5～15cm。

(3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土eを検出し、その面を床面 (生活面) と捉えた。

床面の検出レベルは30.78～30.74mで、遺構検出面からの深さは約40cmを測る。なお、北半部は埋土eの一部まで掘り下げており、床面を確認できなかった。

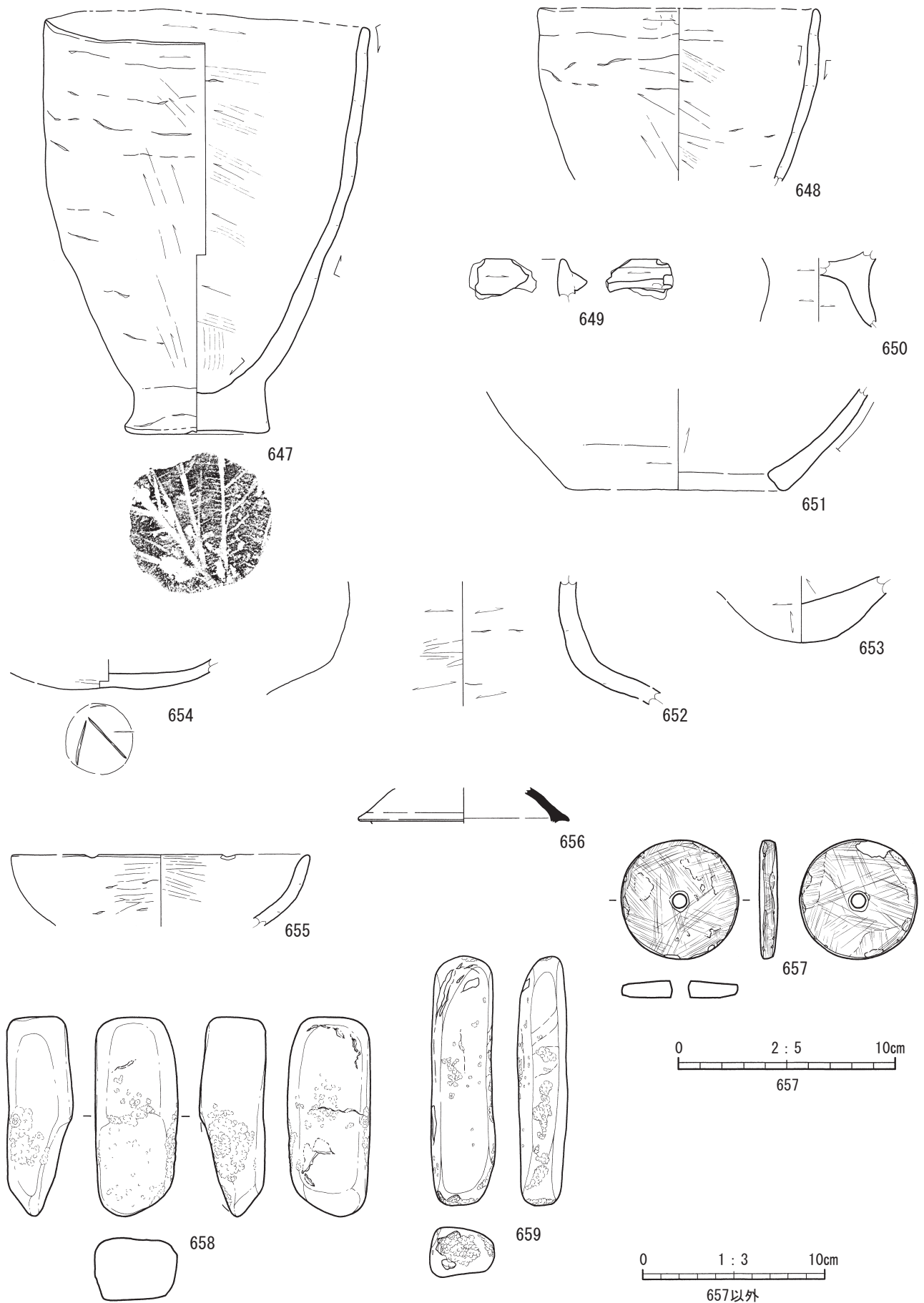
硬化面の明確な広がり確認できなかったが、竪穴中央付近に部分的には残存している。

(4) 炉

ベルトを床面まで掘り下げると、竪穴中央付近に貼床土とは色調が異なる箇所を確認し、そこを炉と捉えた。

平面形は、0.70×0.55mの楕円形を呈する。深さは約7cmを測る。床面は貼床土 (埋土e) で、アカホヤ層土が焼けて赤化しており、焼き締まっている部分もある。

埋土は、黒褐色 (10YR2/1) シルト質土で、締まりが弱くさらさらしている。炭化物をわずかに含む。アカホヤ層土やV層土を含むが、貼床土に比べると含有率が低い



第118图 28号竖穴建物跡 出土遺物

ため、掘り込みの確認ができた。

(5) 掘方

竪穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第117図)。

掘方の基盤層はアカホヤ層最下部である。最深部のレベルは30.58mで、遺構検出面からの深さは約55cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

(6) 柱穴・ピット

柱穴・ピットは床面において確認できず、掘方床面において3基検出した。床面は全てⅦ層に達している。

埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、縮まりがなく、池田降下軽石をわずかに含む。

各柱穴・ピットの属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

P 1 : 0.30×0.20×0.12m

P 2 : 0.50×0.35×0.53m

P 3 : 0.25×0.25×0.47m

P 1 と P 3 は、平面形が不定形で、床面もいびつであることから、柱穴ではない可能性もある。

(7) 遺物(第118図647~655)

遺物は、番号取上分で177点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると363点を数える(一括取上分除く)。

土器、須恵器、石器、棒状礫、軽石が認められ、13点図示した。

ア 土器(647~655)

土器は、甕、甑、壺、坏、高坏を確認した。

甕(647~649)

2類(647~649)

口縁部が直行するもの。

647・648は突帯を施さないものである。647は、外面に接合痕が目立ち、外底面に木葉痕が残る。器形が歪んでいる。

649は口縁端部に近い箇所に突帯を貼付している。

甑(651)

筒抜け形で、胴下半部に白色物質が付着する。白色物質下端径は16.8cmである。

壺(652・653)

652は、頸部が直立気味である。

坏(654・655)

ともに1類で、在来系のものである。

654は、外底面に沈線が認められる。木葉痕を模した可能性がある。655は、黒色処理が行われる。

高坏(650)

胎土の特徴から、搬入品の可能性が高い。このほか、精製赤彩土器の小片が認められた。

イ 須恵器(656)

須恵器は、坏蓋と壺を確認した。

656はかえりをもつ坏蓋である。口縁端部が欠損しているが、口径10.0cm程と推定される。外面は、自然釉がまんべんなく付着しており、調整が確認できない。

ウ 石器(657~659)

石器は、紡錘車と石鎚を確認した。

657は完形の紡錘車で、器面に擦痕が目立つ。

658・659は、棒状を呈する2類の石鎚である。658は、右側面に著しい敲打痕がある。床着出土。659は下面を主に使用している。

エ 棒状礫

4点確認した。

オ 軽石

長径30cm程の大きさで赤化したものが2点、その他は5cm以下の赤化したものが5点程認められた。

21 29号竪穴建物(SI29)(第119図)

(1) 検出

J・K-10区のⅣ層掘り下げ途中で検出した。検出レベルは、31.34~31.32mである。

平面形は、2.5×2.2mの方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

(2) 埋土

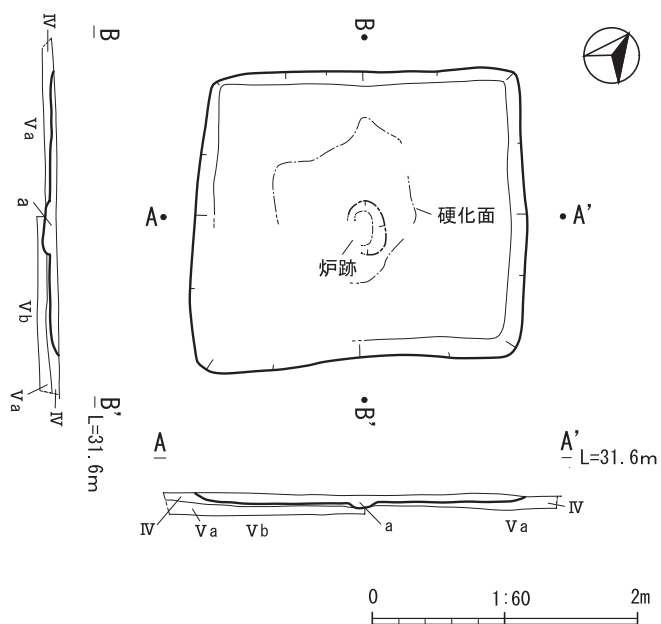
竪穴埋土は単一層(a)で、竪穴埋没土である。

a : 黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、縮まりが弱い。御池火山灰をまんべんなく含む。

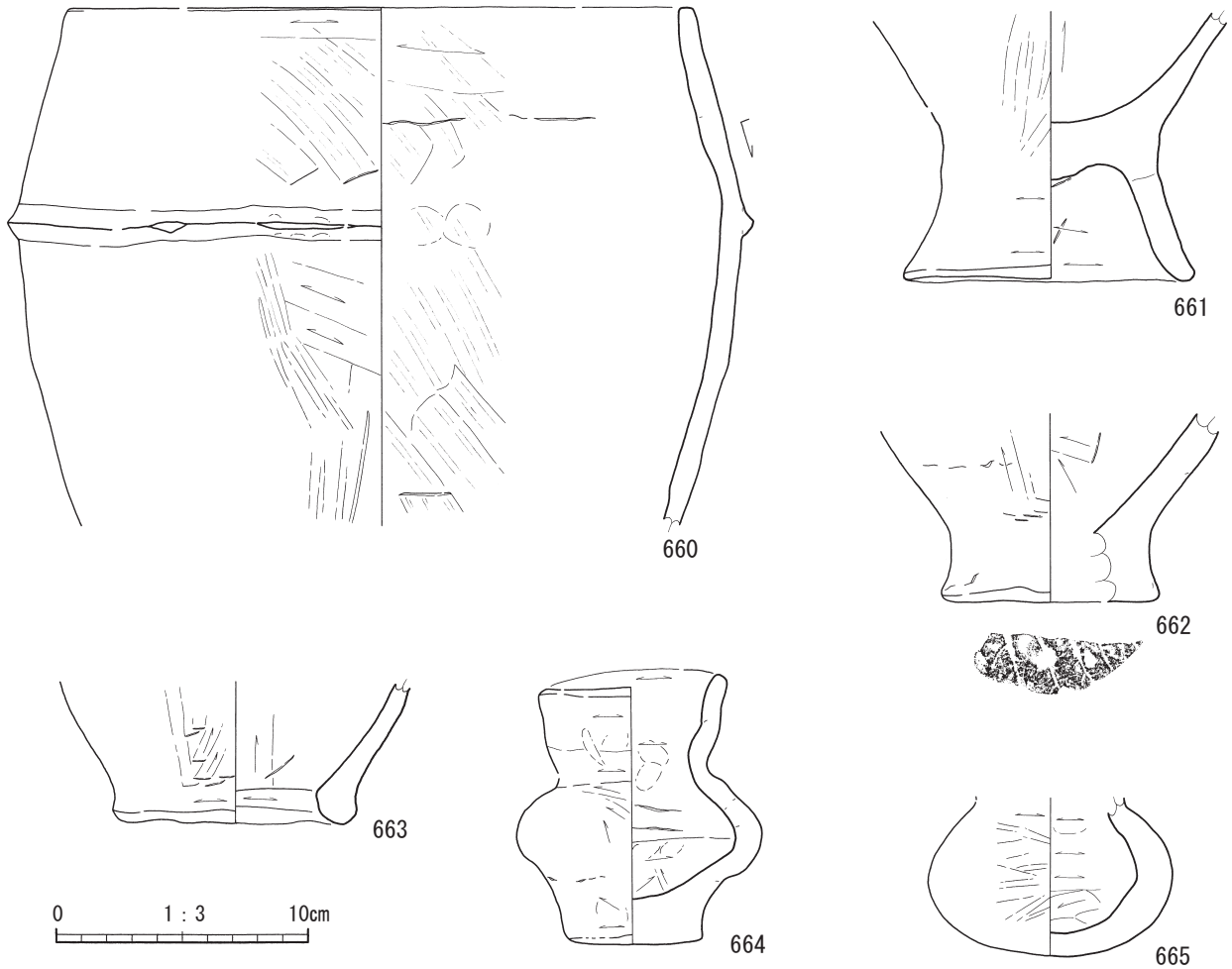
(3) 床面

竪穴埋土と床面の色調にほとんど違いがないため、南側は掘りすぎており、床面下場が確認できていない。

このように床面の検出が困難であったため、ベルトに



第119図 29号竪穴建物跡 平・断面図



第120図 29号竪穴建物跡 出土遺物

沿ってサブトレンチを設定し、床面と立ち上がりを把握した。その結果、IV層下部を床面としていることがわかり、そして中央付近では硬化面を確認した。

床面の検出レベルは31.26mで、遺構検出面からの深さは約5cmを測る。

(4) 炉

ベルトを床面まで掘り下げると、竪穴中央で炉を確認した。平面形は、0.40×(0.25)mの楕円形を呈する。深さは5cmを測り、床面はVa層で、一部焼けて赤化している。埋土は、赤味を帯びた土を含む以外、竪穴埋土aとほぼ同じである。

(5) 柱穴

柱穴は床面において確認できず、さらに床面をVb層上面まで掘り下げたものの、確認できなかった。

(6) 遺物 (第120図660~665)

遺物は、番号取上分で22点、竪穴埋土内可能性遺物を含めると64点を数える(一括取上分除く)。

土器、軽石が認められ、6点図示した。

ア 土器 (660~665)

土器は、甕、甑、小型壺、高坏を確認した。

甕 (660~662)

1類 (660)

口縁部が内湾するもの。突帯に刻みが確認できない。

脚台 (661)

胴部と脚部の境に接合痕が認められる。

平底 (662)

外底面に木葉痕が残る。

甑 (663)

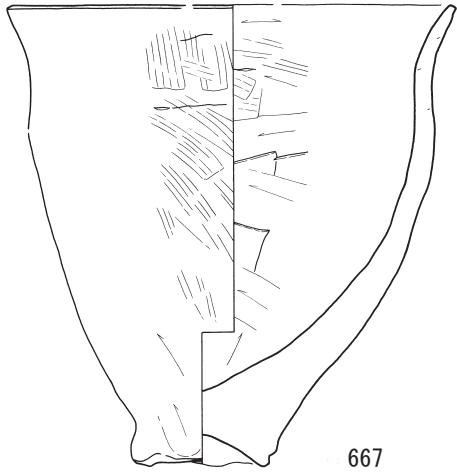
筒抜け形である。外面に器面調整工具の打ち込み痕が目立つ。

小型壺 (664・665)

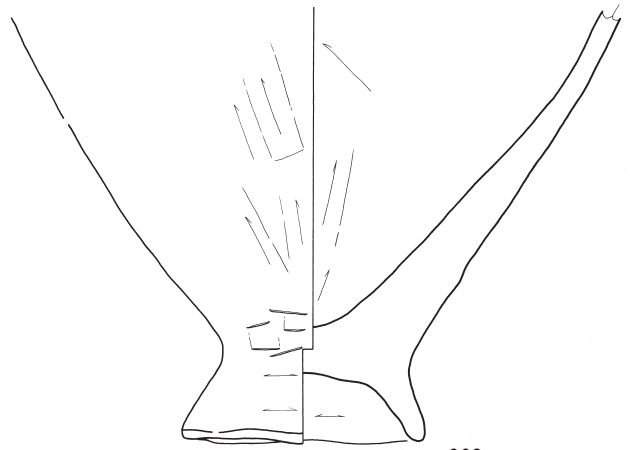
664は口縁部が長く、平底となる。665は丸底を呈する。

イ 軽石

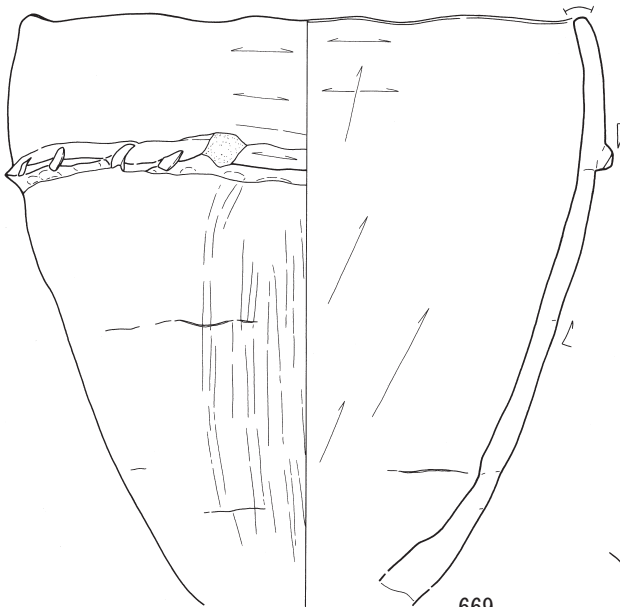
1点認められた。



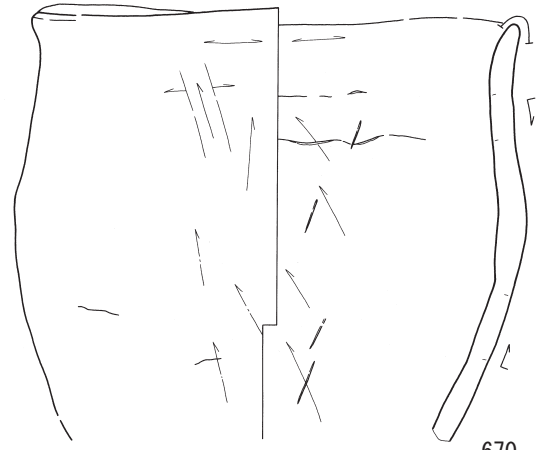
667



668



669



670



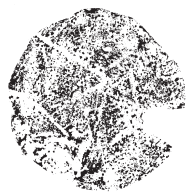
671



672



674

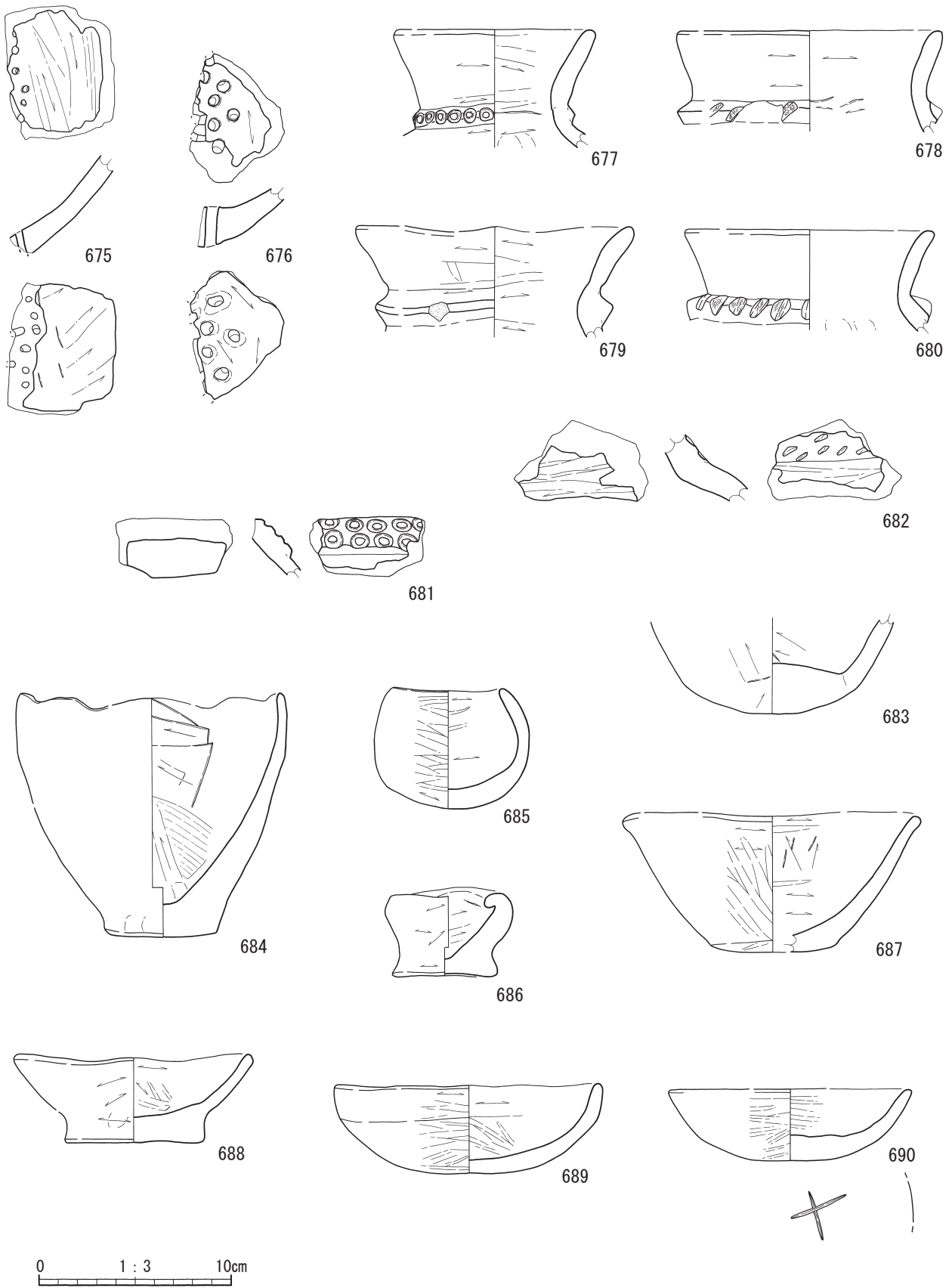


673

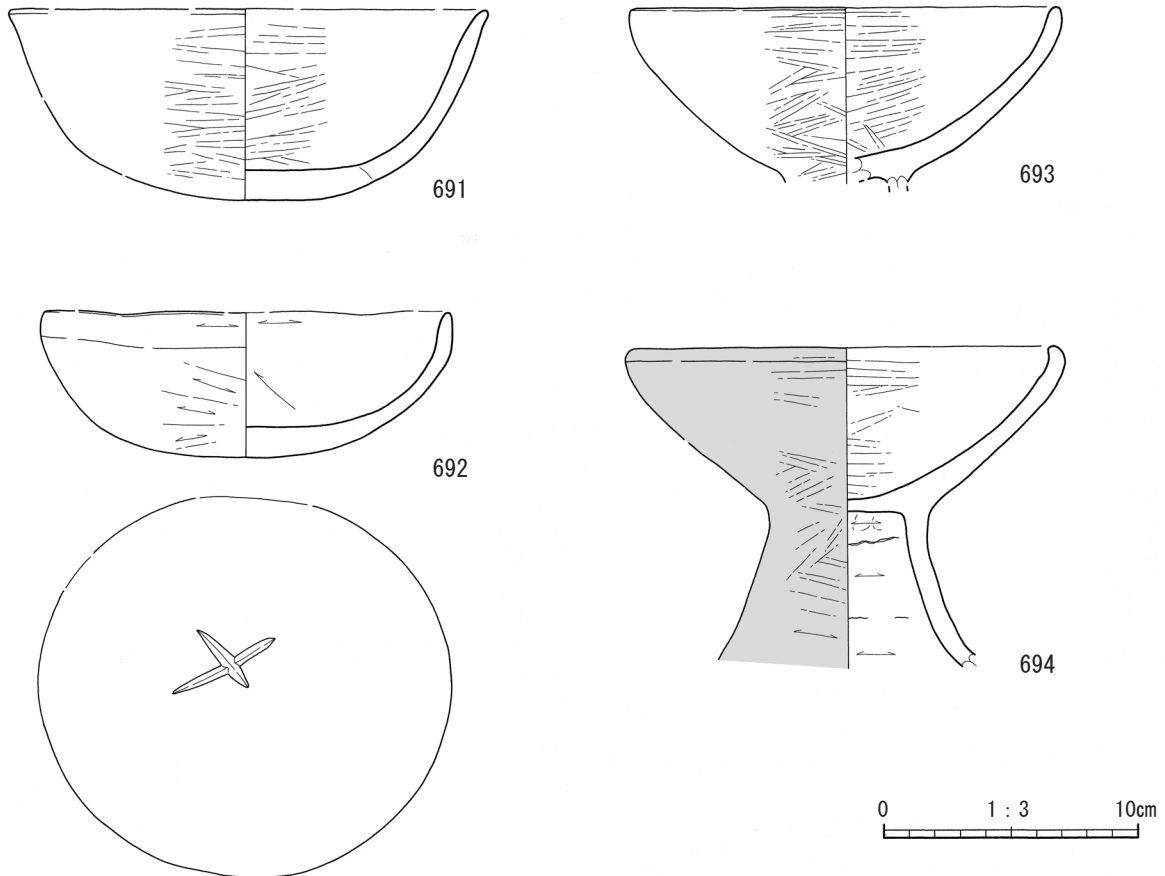


0 1 : 3 10cm

第121图 包含層出土土器(1)



第122图 包含層出土土器（2）



第123図 包含層出土土器（3）

第7節 包含層出土の古墳時代土器・須恵器

1 土器（第121～123図667～694）

古墳時代に属すると判断できる土器は、番号取上分で約8600点を数える。甕、甗、壺、鉢、坏、高坏、小型壺を確認した。ただし、出土土器のほとんどは、甕あるいは甗の無文胴部片である。

古墳時代に属する土器は、器形や器面調整の特徴から後期～終末期のものとする。一方、第5節で述べたように、前期に属すると判断できたものは、甕の2点のみである。

（1）前期の甕（667・668）

古墳時代前期のものとして判断できる甕である。

667は緩やかに外反し、外面にタテハケメ調整を行う口縁部をもつ。底部は上げ底気味で、平面形が不定形である。

668は脚台で、30号竪穴建物近くから出土していることから、前期に属する可能性が高いと考えた。

（2）後期～終末期の甕（669～673）

3類（670）

口縁端部でやや外反するもの。突帯を施さない。口縁端部に白色物質が付着する。

4類（669）

口縁部が突帯上位から肥厚するもの。口縁端部に白色物質が付着する。突帯にヘラ状工具による刻みを狭い間隔で施す。

脚台（671～673）

671・672は、脚台内面天井部に「一文字形」の突起をもつ。671は、脚部が接合痕で剥離しており、その剥離面にユビオサエ痕が残る。

平底（674）

外底面に木葉痕がわずかに残る。胎土の特徴から、都城盆地部の搬入品の可能性がある。

（3）甗（675・676）

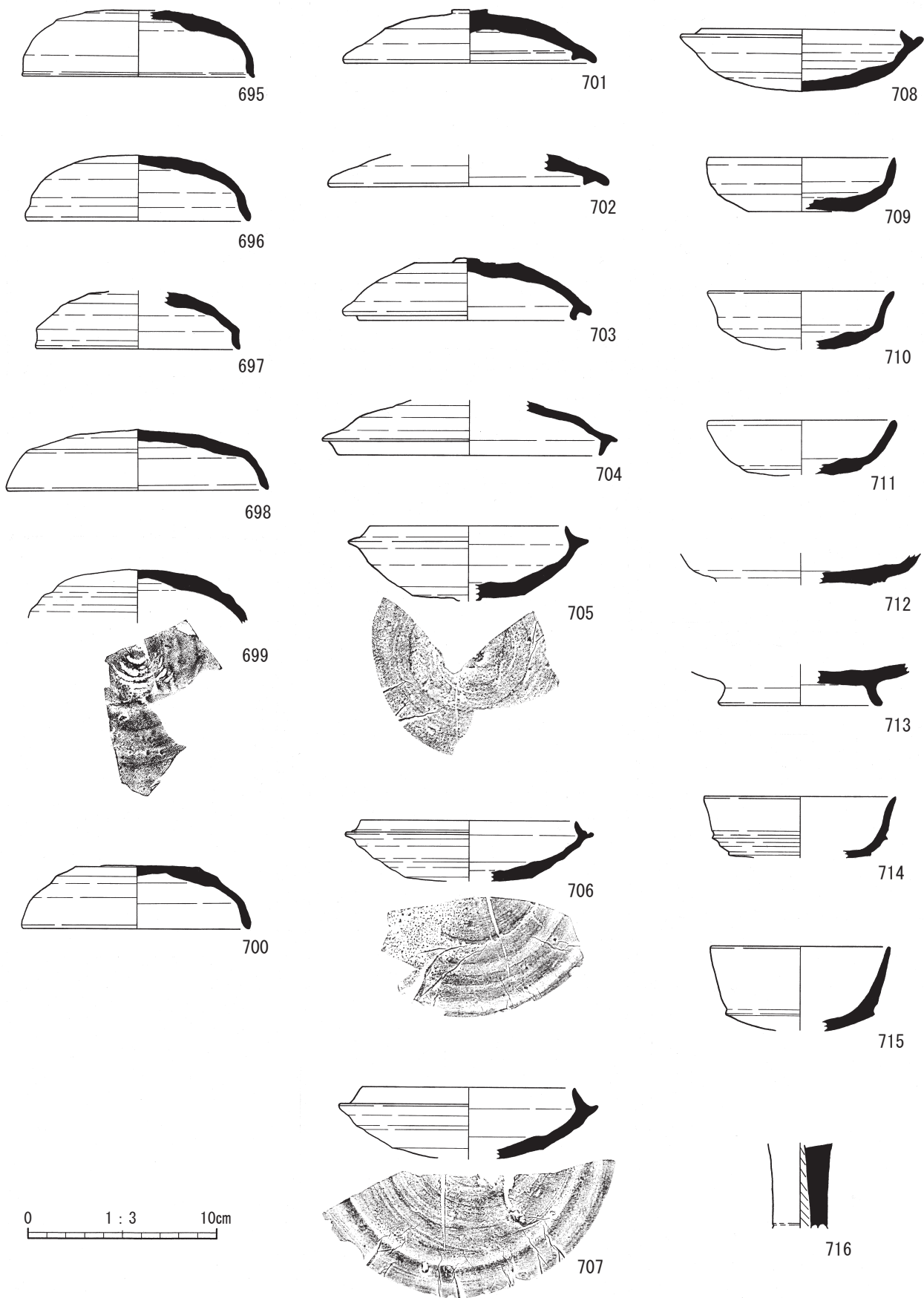
675・676は、ともに多孔式である。

675は胎土の特徴から、宮崎平野部からの搬入品の可能性がある。

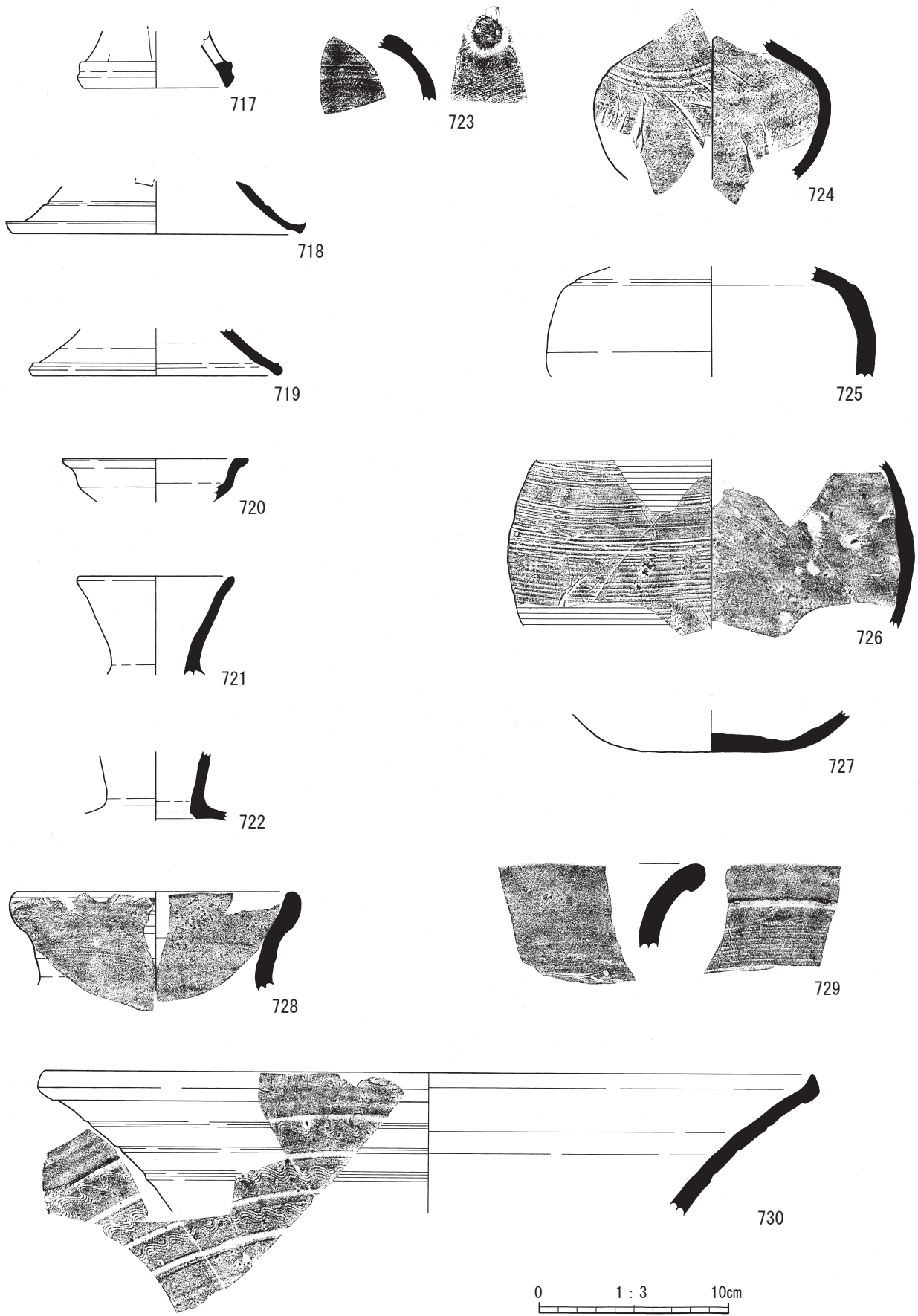
676は、孔径が675に比べると大きく、孔は内外面両方から穿っている。

（4）壺（677～683）

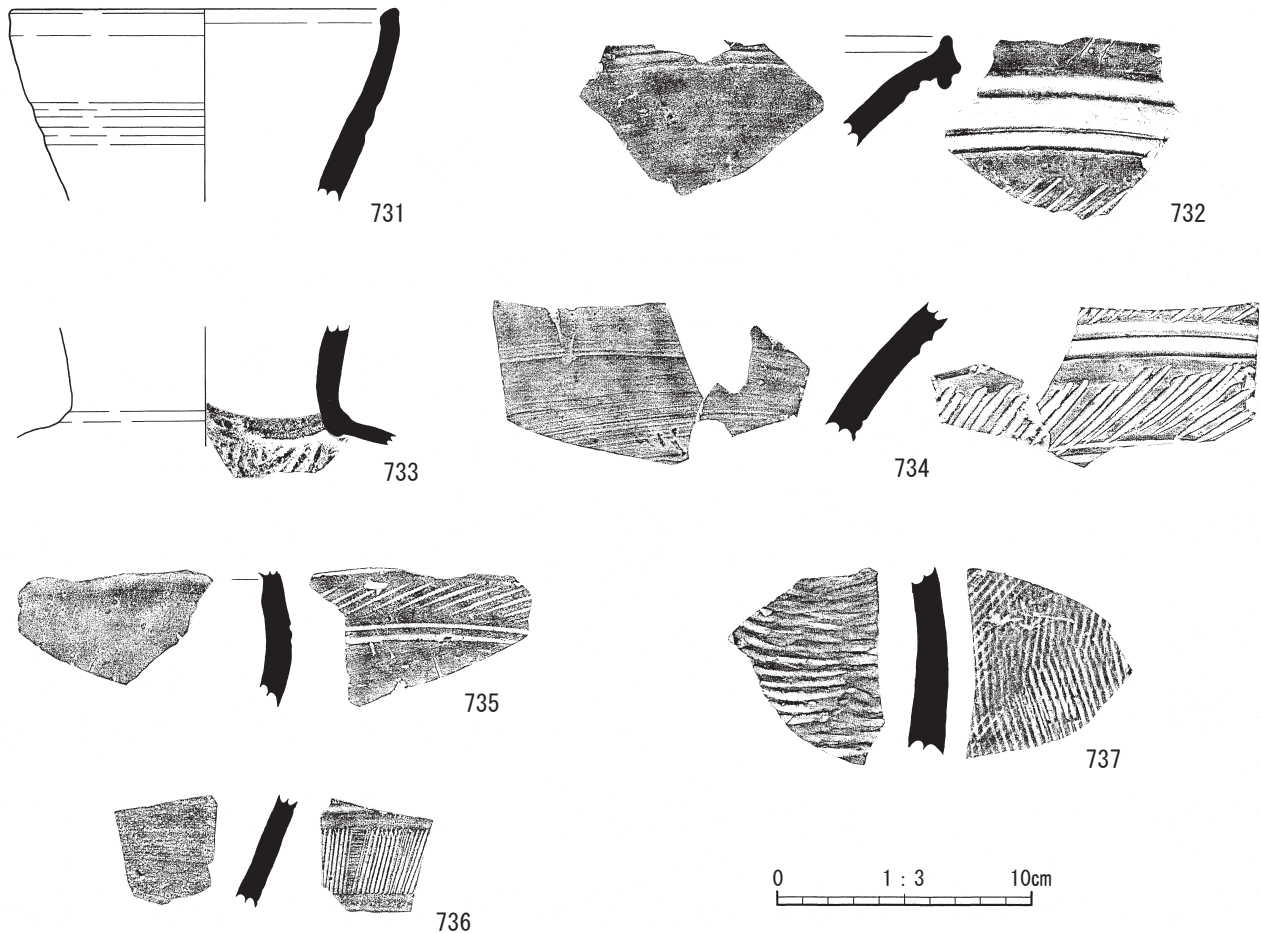
677～680は短頸のものである。頸部の突帯は、竹管文やヘラ状工具による刻み・刺突文などを施す。674のように施文されないものもある。



第124图 包含層出土須惠器(1)



第125图 包含層出土須惠器（2）



第126図 包含層出土須恵器（3）

680は胎土の特徴から、都城盆地部からの搬入品の可能性がある。

（5）鉢（684～686）

684の外表面は、軽いユビオサエ調整が行われ、指紋が多数残る。出土区から、前期に属する可能性もあり得る。686は欠損のない完形品である。

（6）坏（687～692）

687～690は1類で、在来系のものである。687以外は全て黒色処理が行われる。690は、外底面にへら記号がある。

691・692は2類で、胎土と色調の特徴から、宮崎平野部からの搬入品である。692は、外底面に太めのへら記号がある。

（7）高坏（693・694）

693は黒色処理が行われる。694は精製赤彩土器である。

2 須恵器（第124～126図695～737）

包含層出土の須恵器は、番号取上分で約490点を数える。坏蓋、坏身、高坏、提瓶、平瓶、甕、壺などを確認した。全て古墳時代後期～終末期に属する。

（1）坏蓋（695～704）

695～700は坏Hとセットになる坏蓋で、口径は10.5～13.5cmの範囲となる。

695～699の天井部調整は回転へらケズリ、700はへら切り未調整である。

695は口縁端部に段が認められる。697は体部で強く屈曲して端部に至る。

699は、内面中央部に同心円状の溝がみられ、シッタ痕と考える。

701～704はかえりをもつ坏蓋である。701はつまみを有しており、断面は橙色である。702は外面が白い一方で、断面は橙色であるため、701と同一製品であると考えられる。

703は天井部がへら切り未調整のため、中央部が盛り上がっている。そのため図面上ではつまみのように見えるが、中央に寄せられた胎土の高まりである。

（2）坏身（705～713）

705～708は坏Hで、口径は10.3～11.5cmの範囲である。いずれも底部調整は、回転へらケズリが施されている。705～707は底部にへら記号がある。

705は、受部が凹まず扁平になっている。708は底部のヘラケズリ調整が粗く、表面に砂粒が多くみられる。

709～711は坏Gである。底部調整をみると、710は回転ヘラケズリが施されており、709・711はヘラ切り未調整である。口径はいずれも9.8cmに復元できる。

712・713は坏Bである。いずれも底部から脚部が部分的に残存しているもので、体部の形状は不明である。

712は、高台が接合痕で剥がれており、その剥がれた面にはヘラによる沈線がみられる。

(3) 高坏 (714～719)

714・715は坏部で、口径は9.5～10.0cmに復元できる。714は薄くシャープな作りで、沈線が複数施される。715には沈線が1条巡る。

716～719は脚部である。716は透かしに沿って割れており、沈線が1条みられる。

717は、残存部に透かしが二箇所みられ、本来は三方向の透かしが施されていたと考える。他の高坏の透かしと比べると幅広になっている。

718にも透かしが施され、沈線が1条巡る。端部は上方に鋭利につまみ上げている。

719は、透かしがみられず、端部は外側に厚みをもって盛り上がっている。

(4) 器種不明 (720)

口縁端部が平坦になっているもので、短頸壺の蓋あるいは坏と想定される。口径は10.0cmに復元できる。

(5) 提瓶 (723)

提瓶の胴部である。外面は、カキメが確認できるが、全体的に灰被りである。把手の退化したつまみがみられる。

(6) 壺 (721・722・724～727)

721は口縁部である。外面が灰被りにより調整は確認できない。口径は8.0cmに復元できる。

722は頸部で、内外面に灰被りが部分的にみられる。

724～726は胴部である。724・725は、肩部に沈線が施されており、726は、外面全体にカキメが施されている。

727は底部である。内面に灰被りがみられ、断面は暗紫色である。

(7) 甕 (728～737)

728～732は口縁部である。

728は端部で外側に膨らむ無文のものである。

729は端部に段があり、厚みを持つ。無文だが、外面には強い回転ナゲ調整による細かな線がみられる。

730は段がついて外面端部に厚みを持ち、内側につまみ上げている。外面は3条の沈線と3段の櫛状工具による波状文が施されている。

731は外反しながら端部で直立気味になる口縁部で、浅い沈線が2条巡る。胎土から733と同一個体と考えられる。

732は、沈線が2条施され、垂下するように突帯が巡る。端部は上方向につまみ上げ、ヘラ状工具による斜線文が施されている。胎土や文様から734と同一個体と考えられる。

735～737は胴部である。735は、沈線が3条確認でき、沈線間に櫛状工具による刺突文が施されている。

736は、櫛状工具による沈線文が施され、文様を挟むように浅い沈線が巡る。

737は外面に平行文タタキ、内面には平行文当て具痕が施された後に擦り消しが行われている。

第8節 時代不明の調査

1 調査の概要 (第127図)

遺構は1～6区において、土坑が1基、溝状遺構が2条検出された。

これらは土層断面の観察から時期的に新しいと判断できるものの、詳しい時代は判断できない。

2 1号溝状遺構 (SD1) (第128・129図)

(1) 埋土

Ⅲ層下位において検出した。C-2区からI-6区の北東-南西方向に約70m延びる。検出面での幅は0.5～0.8mである。C-2区西壁断面から判断できる最大幅は1.35mで、深さは約40cmである。

(2) 埋土

埋土は2層(a・b)に分けられる。

a: 黒色(10YR2/1)シルト質土で、締まりがある。白色軽石や橙色パミスを含む。

b: 黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりが強い。白色軽石や橙色パミスを含む。下部はかなり締まるが、底面が硬化するまでには至らない。

(3) 性格・時期

床面が硬化していないものの、道跡と考える。Ⅱ層の上位から掘り込まれており、時期的に新しいと判断できる。

(4) 遺物 (第130図738～740)

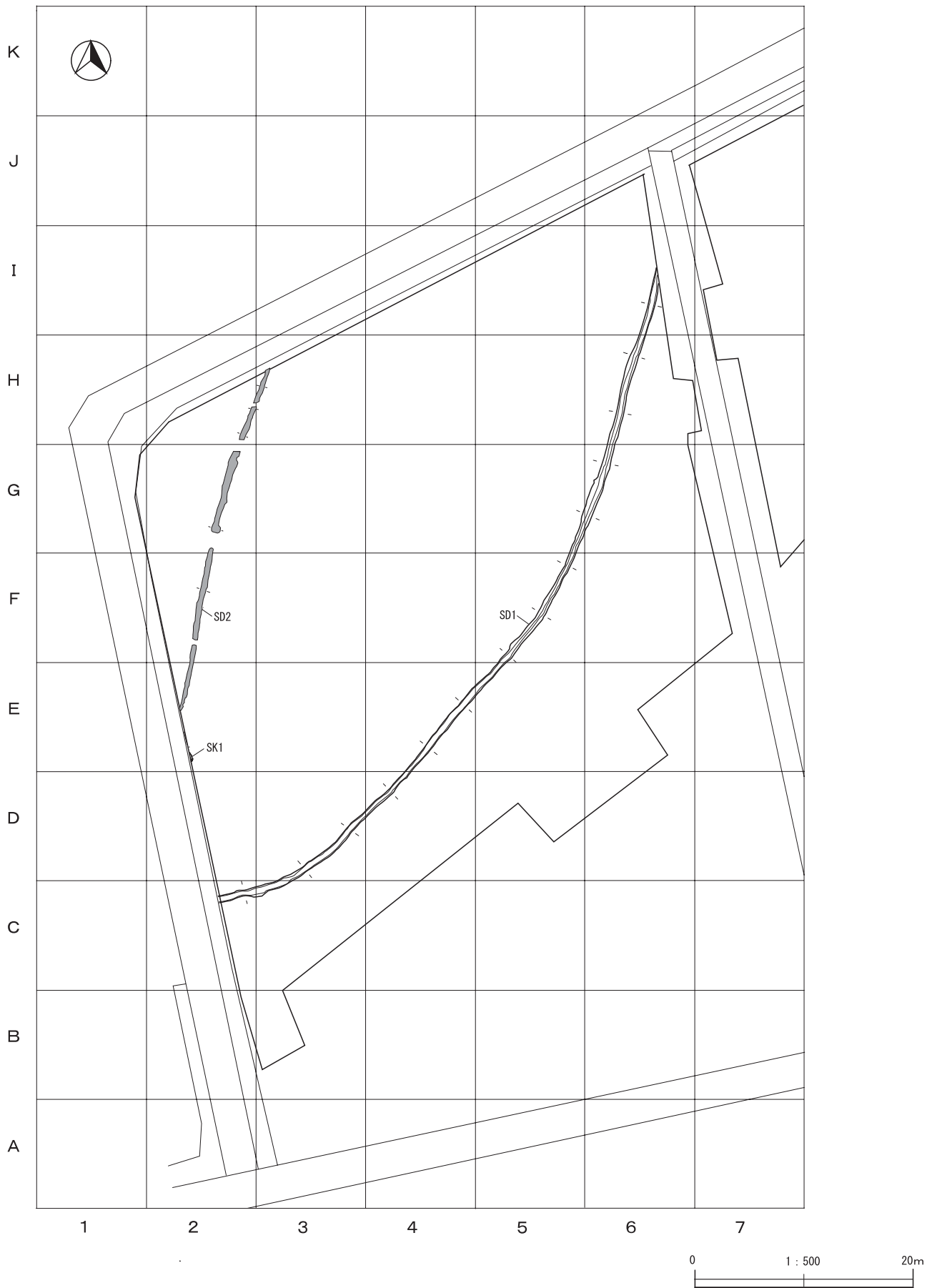
埋土内から弥生時代中期土器、古墳時代後期～終末期土器、須恵器、石器(石鏃、石鎚)、棒状礫、軽石が番号取上分で230点認められ、3点図示した。

出土遺物は、溝の埋没過程でⅡ層から流れ込んだものとする。

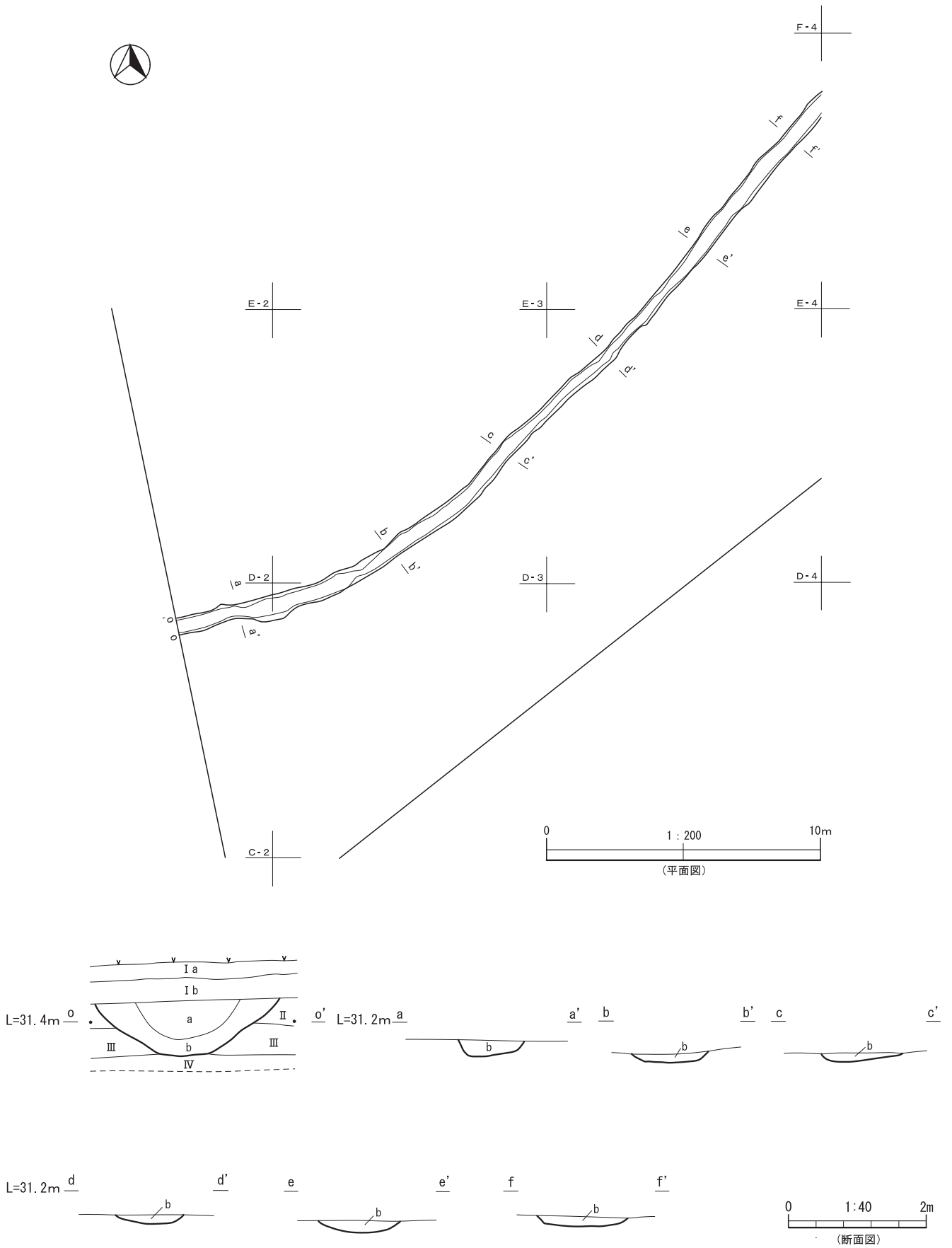
738は古墳時代須恵器の坏身である。立ち上がりは低く内傾し、底部には粗い回転ヘラケズリが施される。

739は黒曜石製の石鏃である。縄文時代晩期末～弥生時代初頭に属する可能性がある。

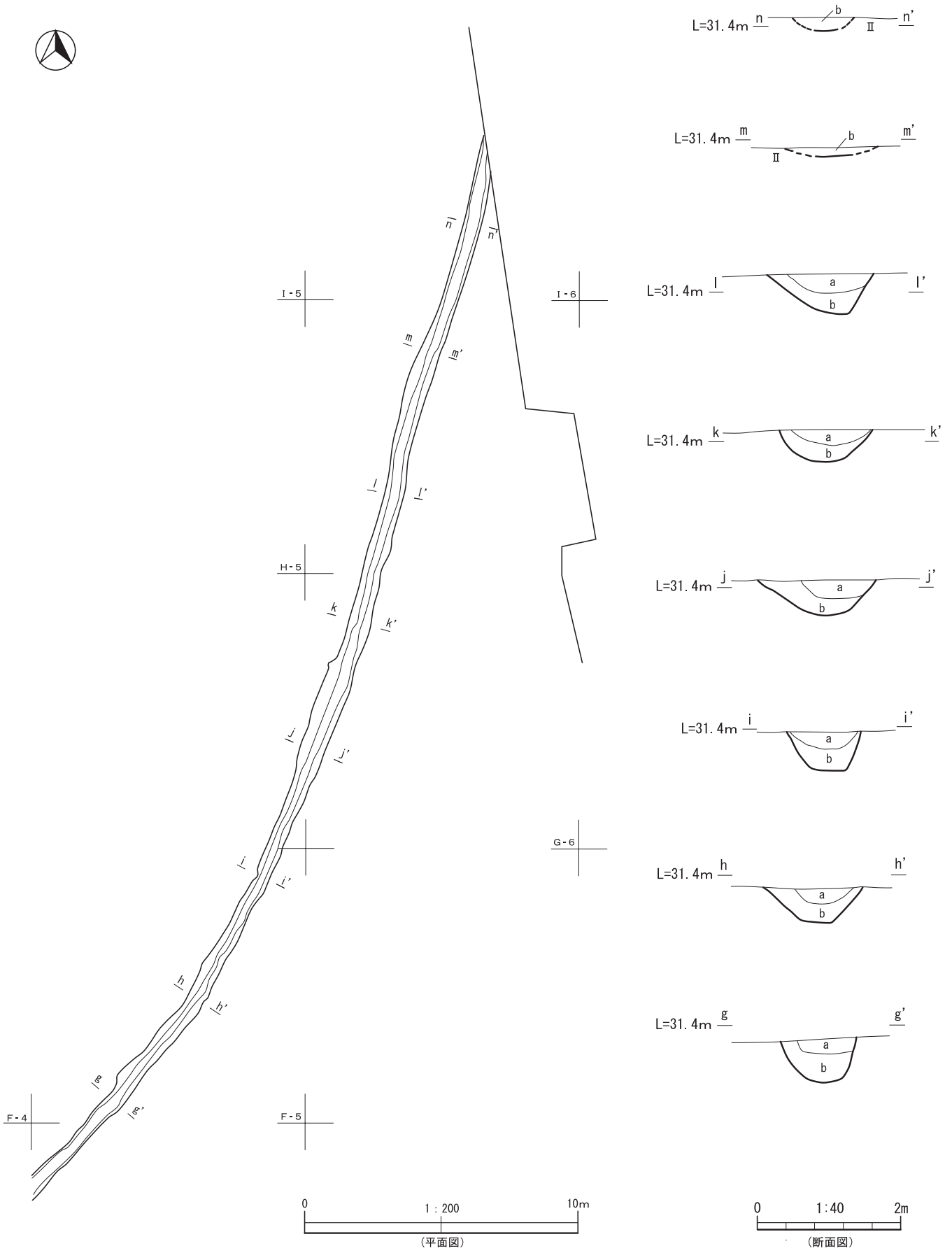
740は古墳時代の碗形鍛冶滓である。金属分析試料No. 7。



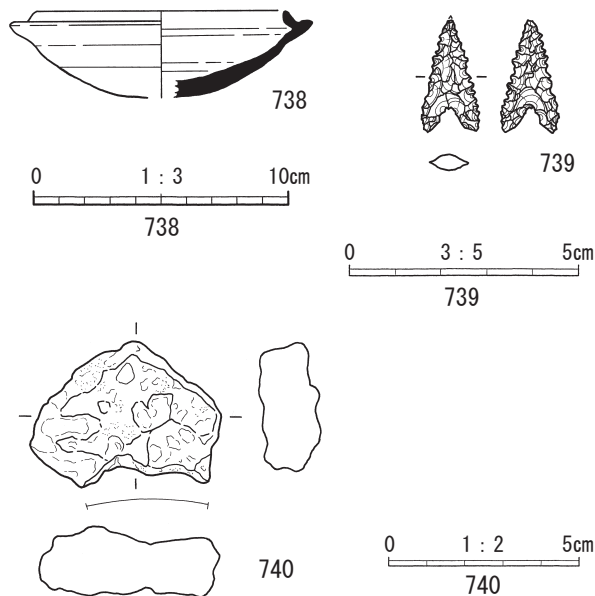
第127図 時代不明 遺構配置図



第128图 沟状遺構(SD 1) 平・断面図(1)



第129图 溝状遺構(SD1) 平・断面図(2)



第130図 1号溝状遺構(SD1) 出土遺物

3 硬化面 (SD2) (第131図)

(1) 検出

E～H-2・3区のⅡ層掘り下げ中に、北東-南西方向に約30m延びる硬化面を検出した。硬化面の幅は0.4～0.8m。E-2区西壁断面から判断できる溝状遺構の上場幅は約2.9mで、深さは約30cmである。

(2) 埋土

埋土は3層(a・b・硬化面)に分けられる。

a:黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、やや砂質を帯びる。色調がⅡ層より淡い。

b:黒(10YR2/1)シルト質土で、やや砂質を帯びる。砂粒を含む。

硬化面:黒褐色(10YR3/2)シルト質土で、硬く締まる。黄橙色パミスを含む。硬化面の上部は、黒褐色土と暗褐色土が縞状に堆積している。

(3) 性格・時期

E-2区西壁の断面観察から、硬化面は溝状遺構の床面であり、道跡と考える。Ⅱ層の上位から掘り込まれており、時期的に新しいと考える。

4 1号土坑(SK1) (第132図)

(1) 検出

E-2区西壁際のⅢ層掘り下げ中に検出した。Ⅲ層掘り下げ時に埋土bが確認できたことから、遺構の存在が把握できた。東半は調査区外に延びる。

平面形は、(0.74)×(0.25)mの円形を呈する可能性が高い。検出面からの深さは約25cmを測り、床面はⅣ層である。

(2) 埋土

埋土は2層(a・b)に分けられ、埋土aは西壁断面でのみ確認している。

a:黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、やや締まっている。白色軽石が若干混じる。

b:黒褐色(10YR3/1)シルト質土で、締まりが弱い。アカホヤ層(Ⅵa層)土が混じる。

(3) 埋土

遺物は、埋土bから長径20～25cm程の軽石が2点出土した。

(4) 時期

Ⅱ層の上位から掘り込まれており、時期的に新しいと判断できる。

第9節 包含層出土の石器・鉄器等

1 石器・石製品 (第133～135図 741～765)

包含層から出土した石器は、番号取上分で167点を数える。石鎚、砥石、鉄床石、火打石、打製石斧、磨製石斧、磨製石鏃、紡錘車、玉類を確認し、25点図示した。

これらは一部の石鎚と磨製石鏃を除くと、古墳時代後期～終末期に属する可能性が高いと考える。

(1) 石鎚 (741～751)

1類 (741・742)

肉厚の石材を利用するもの。

741は全面使用しており、正・裏面は凹みほど使用している。742も全面使用しており、正・裏面だけでなく、側面にも凹みがある。凹みには鉄分が付着する。

この1類は、31号竪穴建物と30号竪穴建物で認められることから、弥生時代中期あるいは古墳時代前期に属する可能性が高い。

2類 (743～748)

棒状のもので、断面形には丸いものや方形のもの、三角形のものが認められる。

743は両側面と下面を顕著に使用している。正面には、磨面も認められる。744は、裏面が凹むほど、側面が抉れるほど使用している。凹みに鉄分が付着する。

745は、正・裏面に凹みがある。746は、正・上・下面に敲打痕が認められる。747は、正面に凹みが、右側面に抉れが認められる。赤化している。748は、正面が凹むほど、そして右側面が抉れるほど使用している。

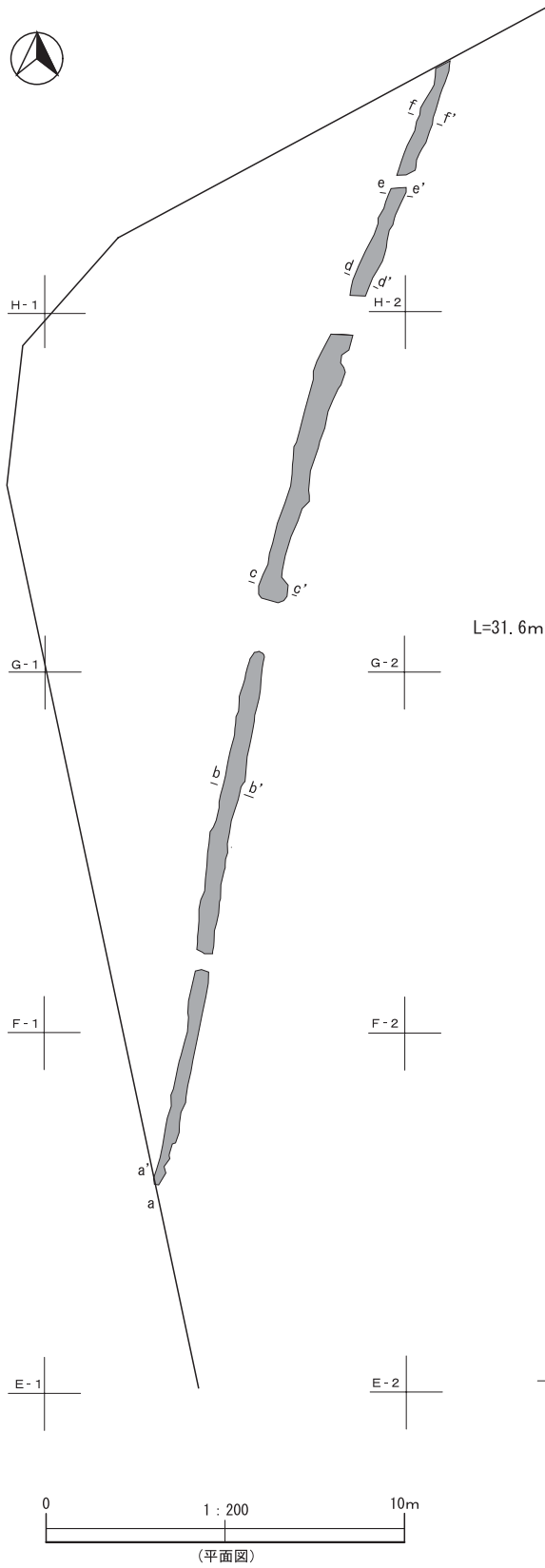
3類 (749～751)

断面が扁平なもの。

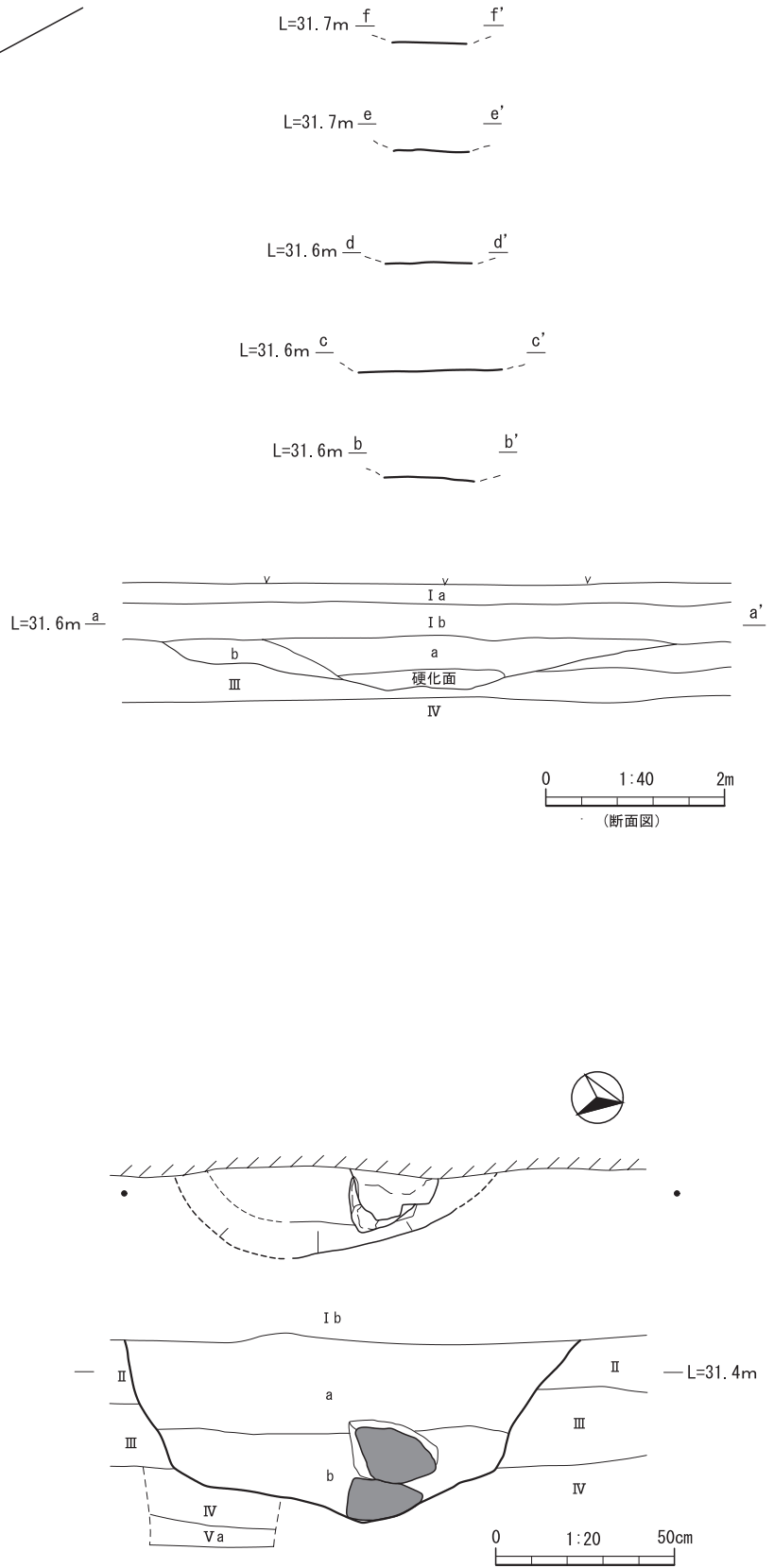
749は、両側面が抉れており、赤化している。

750は、正・裏面に凹みがあり、右側面は抉れている。赤化している。751は、右側面に敲打痕が認められる。

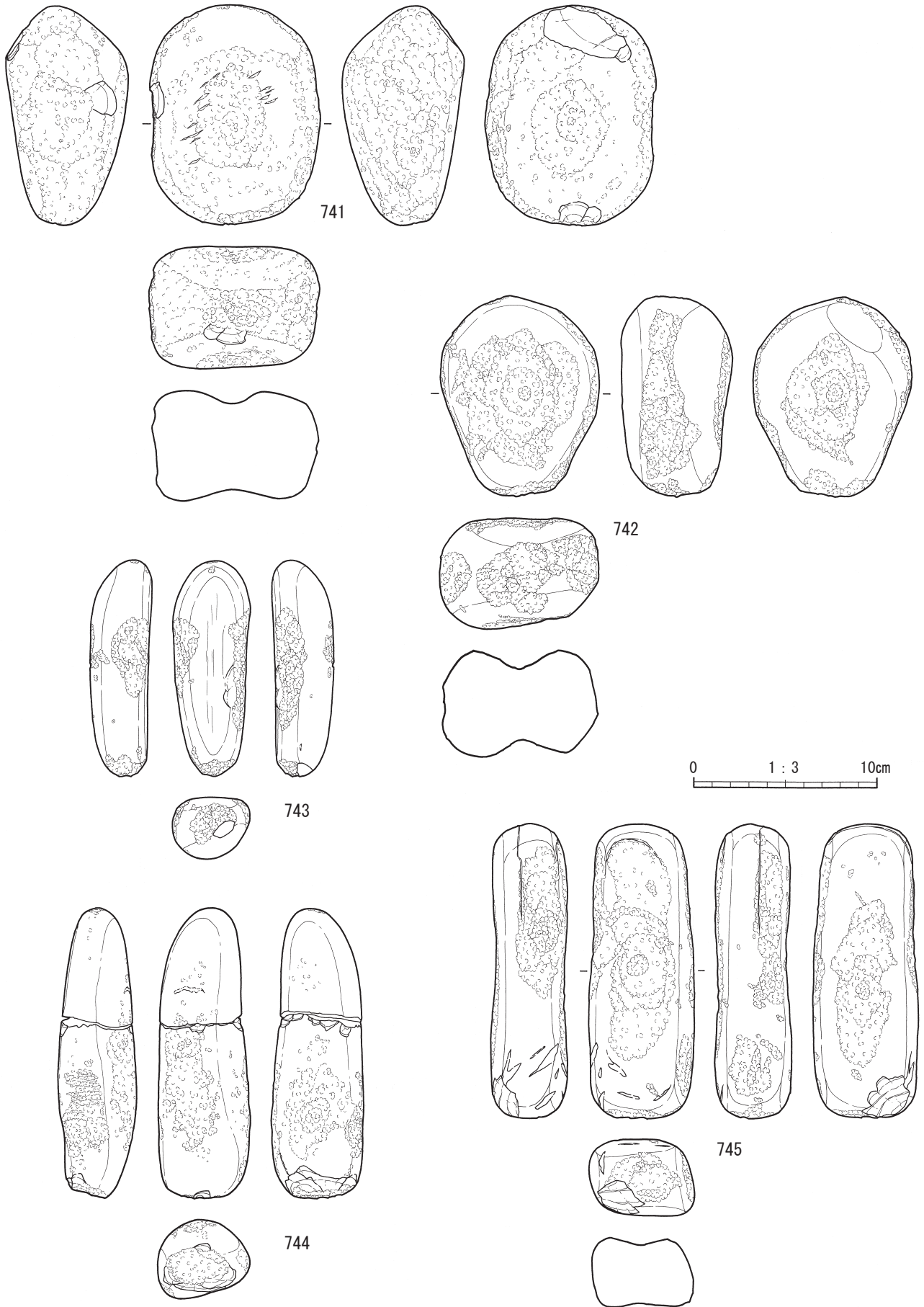
(2) 砥石 (752～755)



第131图 硬化面(SD 2) 平·断面图



第132图 1号土坑 平·断面图



第133图 包含層出土石器（1）

752は天草石を石材とする。上面以外を顕著に使用しており、使用時の傷が残る。裏面は、磨った後の敲打痕が認められる。753は全面を顕著に使用し、下面は欠損後も使用している。

754は、穿孔があり、提碇である。正・裏面には、使用時の傷が残る。755は小型のもので、正・下面に磨面があり、特に下面が顕著である。器面に鉄分が付着する。

(3) 鉄床石 (756)

正・裏面に敲打痕があり、敲打後磨っている。凹みに鉄分が付着する。赤化しており、被熱破碎している可能性がある。

(4) 火打石 (757)

チャートを石材とする。稜線が磨滅しており、擦痕らしい筋も認められることから、火打石の可能性を考えた。全出土遺物の中で、チャートはこの1点のみである。

(5) 打製石斧 (758・759)

758・759は、両側面に抉りのあるヘラ形を呈する。抉れ部付近はやや磨滅しており、着柄痕の可能性はある。

(6) 磨製石斧 (760)

両側面がやや抉れている。

(7) 磨製石鏃 (761)

縄文時代末～弥生時代初頭、あるいは弥生時代中期に属する可能性が高い。

(8) 紡錘車 (762・763)

ともに全面を磨っており、器面に擦痕が認められる。763は、正面に文様が描かれている。

(9) 玉類 (764・765)

764は勾玉の可能性が高いもので、白地に黒色が縞状に入る石材である。15号竪穴建物埋土内出土可能性遺物である。

765は管玉である。孔径が一定ではない(孔径0.1～0.3cm)。

2 鉄器 (第136・137図766～787)

包含層から出土した鉄器は、30点を数える。鉄鏃、刀子、鉄斧、鍬鋤先、鉄鎌、棒状工具、建築部材などを確認し、22点図示した。

これらは、古墳時代後期～終末期に属する可能性が高いと考える。

(1) 鉄鏃 (766～774)

766～769は方頭斧箭式で、刃部幅は様々である。766はナゲ関で、刃部の錆膨れが目立つ。

770は三角形式である。刃部裏面に繊維が付着している。直角関である。771はナゲ関である。

772・773は茎部の可能性がある。772はナゲ関のようにも見えるが、はっきりしない。21号竪穴建物埋土内出土可能性遺物である。

774の口巻きは樹皮巻きで、長さ2.0cmにわたり、4～5回巻いている。

(2) 刀子 (775～781)

775は刃部先端である。777は、使用による刃こぼれが認められる。778は、錆化が著しい。779は、鉄鏃茎部の可能性もある。781は刀子としたが、はっきりしない。

(3) 棒状工具 (782・783)

棒状工具としたが、建築部材の可能性もある。

(4) 建築部材 (784)

U字形を呈するもので、左側端部はねじれている。

(5) 鉄斧 (785)

木製の柄が残存しており、柄表面には鉄分が付着する。刃部がややねじれている。

(6) 鍬鋤先 (786)

U字形鍬鋤先である。耳部と刃部は接合しないが、同一個体である。刃部から耳部にむかって反っている。

(7) 鉄鎌 (787)

刃部端は、錆化が著しく、破損している。折り返しは左側で、「乙折り返し」である。

3 製鉄・鍛冶関連遺物 (第137・138図788～807)

包含層から出土した製鉄・鍛冶関連遺物は、31点を数える。炉壁、炉内滓、含鉄鉄滓、流動滓、碗形鍛冶滓、ふいご羽口を確認し、20点図示した。

これらは、古墳時代後期～終末期に属する可能性が高いと考える。

なお、金属分析を実施しているものもあり、それら遺物の詳細は、第5章の分析報告を参考にされたい。

(1) 炉壁 (788～791)

788～790は、裏面にスサ痕や砂粒が認められる。789は19号竪穴建物埋土内出土可能性遺物、790は22号竪穴建物埋土内出土可能性遺物である。791は金属分析試料No.1である。

(2) 炉内滓 (792～794)

792は金属分析試料No.2である。793は、裏面にスサ痕と砂粒が認められることから、一部炉壁が付着している可能性がある。794は、側面に木炭痕が認められる。

(3) 鍛冶滓 (795・796)

795は金属分析試料No.13で、796は金属分析試料No.12である。

(4) 含鉄鉄滓 (798・806)

798は金属分析試料No.11で、806は金属分析試料No.9である。

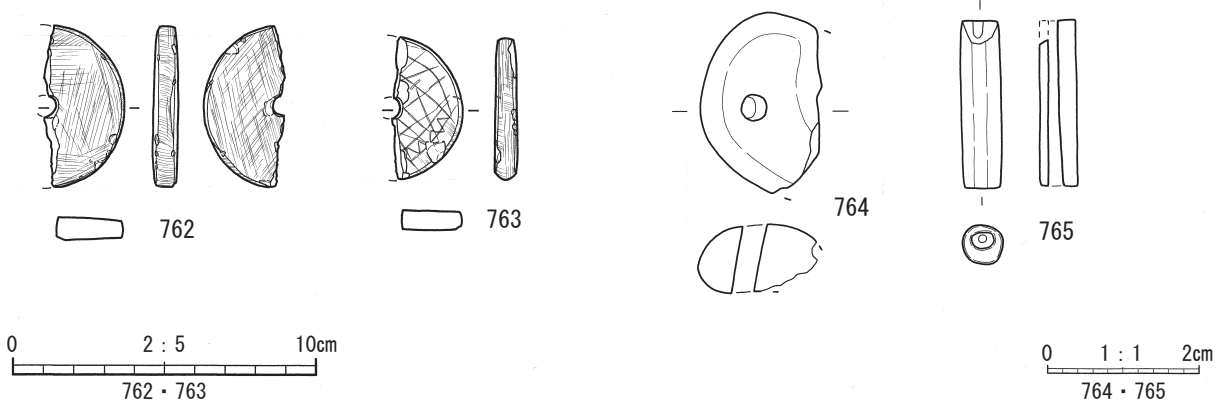
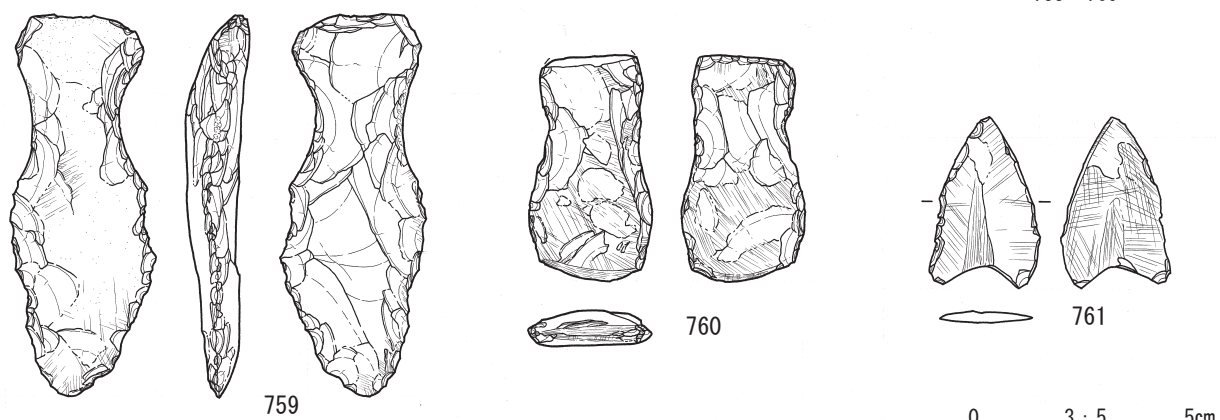
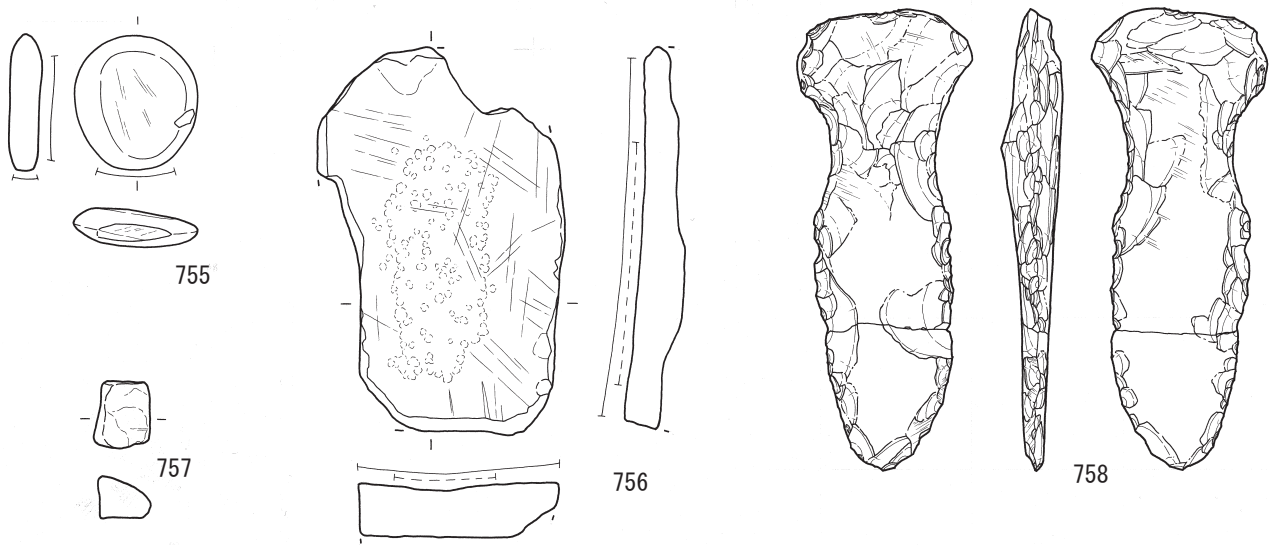
(5) 流動滓 (797・799・800)

797は、裏面に砂粒が付着している。

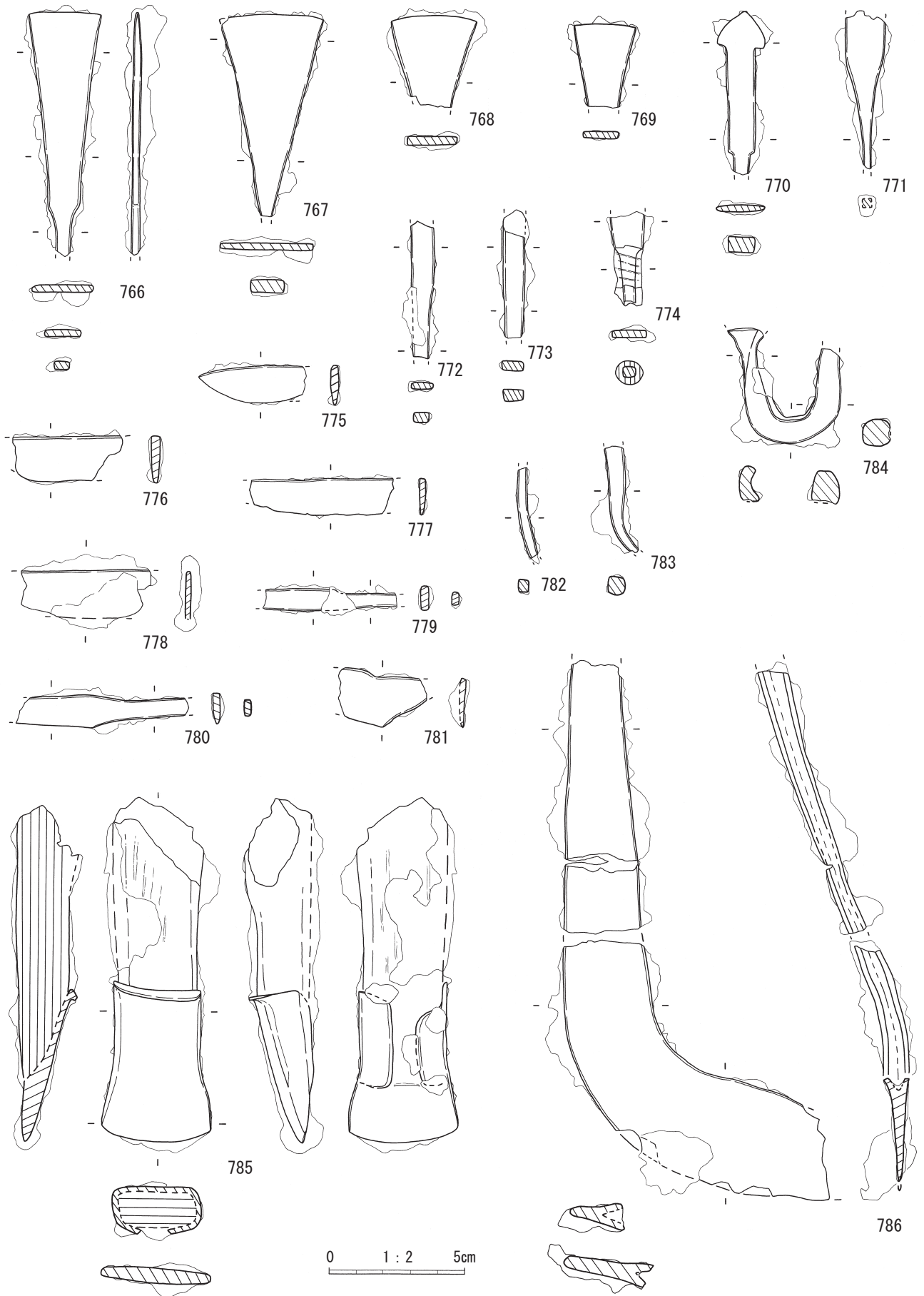
799は3面にハツリ痕があり、金属分析試料No.3である。800は裏面に砂粒が付着する。799・800は19号竪穴建物埋土内出土可能性遺物である。



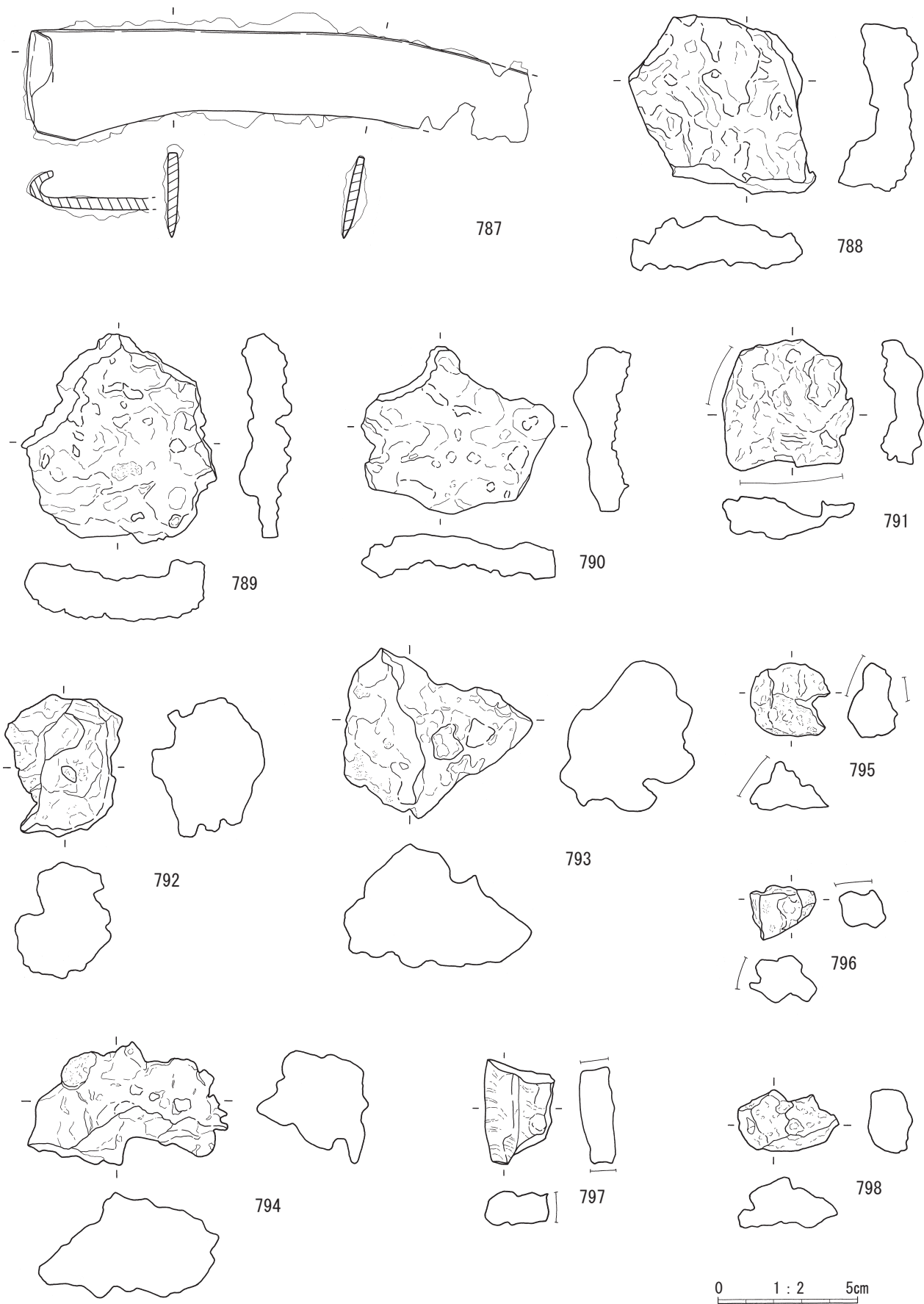
第134图 包含層出土石器(2)



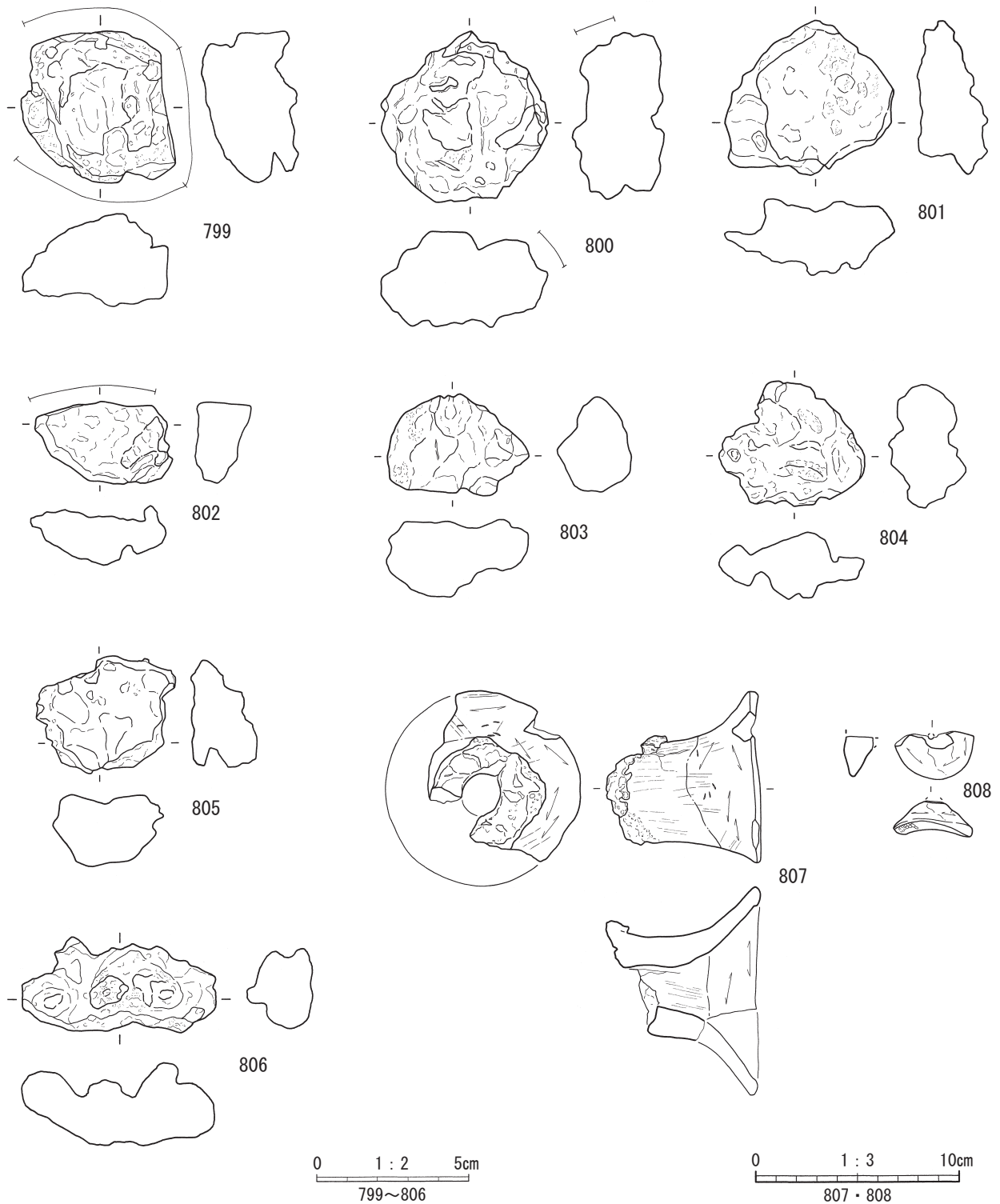
第135图 包含層出土石器·石製品



第136图 包含層出土鉄製品



第137図 包含層出土鉄製品および製鉄・鍛冶関連遺物



第138図 包含層出土製鉄・鍛冶関連遺物および土製品

(6) 碗形鍛冶滓 (801~805)

801は金属分析試料No.8で、802は金属分析試料No.5である。804は裏面に砂粒が付着する。805は裏面に気泡が目立つ。

(7) ふいご羽口 (807)

中央から先端部は灰白色を呈する。灰白色部分は斜め

になっており、羽口を斜めに設置していたと考える。先端部は、石が発砲したものが付着し、ガラス質化している。先端部が欠損後も使用している。内径は2.0cm。

4 土製品 (第138図808)

土製の紡錘車である。三角錐状であるが、歪んでいる。底面に縄目の圧痕が認められる。

第5章 自然科学分析

第1節 上苑A遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の分析調査

日鉄テクノロジー株式会社 八幡事業所
鈴木 瑞徳

1 いきさつ

上苑A遺跡は鹿児島県志布志市有明町野井倉字上苑地内に所在する。発掘調査地区からは、6世紀末から7世紀後葉の竪穴建物跡が20基検出された。

それに伴い炉壁・羽口・鉄滓などの製鉄～鍛冶関連遺物が出土しており、主に7世紀代の鍛冶遺跡と推測されている。

そこで遺跡周辺での鉄～鉄器生産の実態を検討する目的から、出土遺物を分析調査した。

2 調査方法

2-1. 供試材

第2表の出土製鉄～鍛冶関連遺物13点を調査した。

2-2. 調査項目

(1) 外観観察

遺物の外観の特徴など、調査前の所見を記載した。

(2) マクロ組織

外観の特徴から観察位置を決めて、試料を切り出し、エメリー研磨紙の#150、#320、#600、#1000、およびダイヤモンド粒子の3 μ mと1 μ mで順を追って研磨した。その後、試料断面の全体像を撮影した。

(3) 顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成の観察を目的とする。金属反射顕微鏡を用いて観察後、特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。

(4) 化学組成分析

出土鉄滓の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C) : 燃焼容量法、硫黄 (S) : 燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K₂O)、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、五酸化リン (P₂O₅)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO₂) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) : 誘導結合プラズマ発光分光分析法。

3 調査結果

UEZ-1 (報告書No.791) : 炉壁

(1) 外観観察

ごく小形で薄手の炉壁破片 (40.6g) であった。強い熱

影響を受けて、内面表層からガラス質化が進んでいる。また内面側には着磁性があるが、金属探知機反応はなく、まとまった鉄部もみられない。外面側には灰褐色の炉壁粘土が薄く残存する。また、ごく短く切ったスサの痕も多数確認される。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 42①～③に示す。素地は炉壁内面表層のガラス質滓で、滓中には灰褐色多角形結晶マグネタイト (Magnetite : FeO・Fe₂O₃) が晶出する。炉内に装入された製鉄原料が、熱影響を受けて分解・滓化したものと推測される。

(3) 化学組成分析

第3表に示す。全鉄分 (Total Fe) は 12.66%であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は 0.13%、酸化第一鉄 (FeO) が 4.34%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) 13.09%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) の割合は 79.08%と高く、このうち石灰 (CaO) は 3.16%であった。通常砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン (TiO₂) は 1.31%、バナジウム (V) が 0.01%であった。

出土鉄滓 (UEZ-2～9) と比較すると若干高めで、これはもともと炉壁粘土に含まれる微細な砂鉄 (含チタン鉄鉱) の影響と考えられる。また酸化マンガン (MnO) は 0.23%、銅 (Cu) は <0.01%であった。

当炉壁の内面表層には、マグネタイト (Magnetite : FeO・Fe₂O₃) が確認された。これは炉内に装入された製鉄原料が分解・滓化したものと考えられる。

UEZ-2 (報告書No.792) : 製錬滓 (炉内滓)

(1) 外観観察

やや小形の鉄滓破片 (84.4g) である。滓の色調は暗灰色で着磁性がある。幅 20 mm程の大形の木炭痕が残存しており、製錬滓 (炉内滓) と推測される。破面には大形の気孔が散在する。また表面には広い範囲で茶褐色の錆化鉄が付着するが、まとまった鉄部はなく、金属探知機反応もみられない。下面表層には灰褐色の炉床粘土が付着する。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 42④～⑥に示す。全面に発達した淡灰色結晶ファヤライトが晶出する。さらに部分的に白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。⑤はその拡大で、ウスタイトの周囲の微細な暗灰色結晶はヘルシナイト (Hercynite : FeO・Al₂O₃) である。また⑥の不定形灰褐色部はマグネタイトで、炉内に装入された製鉄原料が分解・滓化したものと考えられる。

(3) 化学組成分析

第3表に示す。全鉄分 (Total Fe) 34.68%に対して、

金属鉄 (Metallic Fe) は 0.06%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 35.36%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 10.20% の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) の割合は 50.21% と高めで、このうちライム (CaO) は 3.54% であった。

また、製鉄原料が砂鉄 (含チタン鉄鉱) の場合、製錬滓～精錬鍛治滓に含まれる二酸化チタン (TiO₂) は 0.49%、バナジウム (V) が <0.01% と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は 0.62%、銅 (Cu) は <0.01% であった。

当鉄滓は砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂、V) は低値で、スカルン^(注1) 鉱床で採取された鉄鉱石 (塊鉄) 起原の脈石成分 (CaO) が高値傾向を示すことから、鉄鉱石 (塊鉄) を始発原料とする製錬滓の可能性が考えられる。

UEZ-3 (報告書No.799) : 製錬滓 (炉外流出滓)

(1) 外観観察

製鉄炉の操業中、炉外に排出された滓 (炉外流出滓) の破片 (118.5g) と推定される。滓の色調は黒灰色で、着磁性はごく弱い。上下面は滑らかな流動状で、側面はほぼ全面が破面で、大小の気孔が散在するが緻密である。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 43①～③に示す。全面に発達した淡灰色結晶ファヤライトが確認された。さらに微細な白色樹枝状結晶ウスタイト、暗灰色多角形結晶ヘルシナイトが晶出する。また、③の中央は、鉄滓の下面表層に付着した土砂中の鉄滓片である。内部の灰褐色結晶はマグネタイトで、炉内に装入された製鉄原料が分解・滓化したものと考えられる。

(3) 化学組成分析

第 3 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 39.02% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.04%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 47.51%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 2.93% の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は 45.86% で、このうちライム (CaO) は 5.78% と高値であった。

また、製鉄原料が砂鉄 (含チタン鉄鉱) の場合、製錬滓～精錬鍛治滓に含まれる二酸化チタン (TiO₂) は 0.53%、バナジウム (V) が <0.01% と低値であった。酸化マンガン (MnO) は 0.32%、銅 (Cu) <0.01% であった。

当鉄滓も製錬滓 (UEZ-2) と同様、砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂、V) は低値で、スカルン鉱床で採取された鉄鉱石 (塊鉄) 起原の脈石成分 (CaO) が高値であったことから、鉄鉱石 (塊鉄) を始発原料とする製錬滓の可能性が考えられる。

UEZ-4 (報告書No.646) : 製錬滓 (炉外流出滓)

(1) 外観観察

製錬滓 (UEZ-3) と同様、炉外に排出された滓 (炉外流出滓) の破片 (103.4g) と推定される。色調は黒灰色

で、着磁性はごく弱い。表面は流動状で、部分的に細かい皺状の凹凸がみられる。側面には木炭痕が残る。破面の気孔は少なく緻密である。また下面表層には、微細な炉壁粘土が点々と付着する。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 43④～⑥に示す。滓中には微細な白色樹枝状結晶ウスタイト、暗灰色結晶ヘルシナイト、発達した淡灰色結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微小白色粒は金属鉄、不定形明灰色～青灰色部は錆化鉄である。⑥は錆化鉄部の拡大で、かすかにパーライト (Pearlite) 組織の痕跡が残存する。本来は亜共析 (C<0.77%) 組織であったと推測される。

(3) 化学組成分析

第 3 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 39.42% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.09%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 45.17%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 6.03% の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は 45.98% で、このうちライム (CaO) は 7.10% と高値であった。

また、製鉄原料が砂鉄 (含チタン鉄鉱) の場合、製錬滓～精錬鍛治滓に含まれる二酸化チタン (TiO₂) は 0.51%、バナジウム (V) が <0.01% と低値であった。酸化マンガン (MnO) は 0.52%、銅 (Cu) は <0.01% であった。

当鉄滓も製錬滓 (UEZ-2、3) とよく似た組成で、ライム (CaO) の高値傾向が顕著であった。鉄鉱石 (塊鉄) を始発原料とする製錬滓の可能性が考えられる。

UEZ-5 (報告書No.802) : 椀形鍛治滓

(1) 外観観察

ごく小形の椀形鍛治滓の側面端部破片 (37.0g) と推測される。上面には、羽口先端の溶融物と考えられるガラス質滓が部分的に付着する。ガラス質滓の表層には細かい気孔が密にみられる。滓の地の色調は黒灰色で着磁性は強い。また上下面には細かい木炭痕による凹凸が目立つ。破面の気孔は少なく緻密で重量感がある。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 44①～③に示す。発達した白色粒状結晶ウスタイト、微細な暗灰色結晶ヘルシナイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(3) 化学組成分析

第 3 表に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合が 59.11% と高値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は 0.07%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 49.03%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 29.92% であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は 23.98% で、このうちライム (CaO) は 2.25% であった。

また、製鉄原料が砂鉄 (含チタン鉄鉱) の場合、製錬滓～精錬鍛治滓に含まれる二酸化チタン (TiO₂) は 0.14%、バナジウム (V) が <0.01% と低値であった。酸化マンガン (MnO) も 0.08% と低値で、銅 (Cu) は 0.04% とやや

高めであった。

当鉄滓は製鍊滓(UEZ-2~4)と比較すると、鉄酸化物(FeO)の割合が高く、ライム(CaO)は低めであった。これらの特徴から、鉄鉱石(塊鉄)を始発原料とした精鍊鍛冶滓の可能性が考えられる。

UEZ-6(報告書No.110): 椀形鍛冶滓

(1) 外観観察

上苑A遺跡出土鉄滓中では比較的大形の椀形鍛冶滓(62.4g)と推測される。表面には広い範囲で茶褐色の錆化鉄が付着するが、まとまった鉄部はなく、金属探知機反応もみられない。上面は比較的平坦で、端部にガラス質滓が付着する。羽口先端の熔融物と考えられる。また滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。下面は細かい木炭痕による凹凸が目立つ。破面には細かい気孔が点在するが、重量感がある。

(2) 顕微鏡組織

写真図版44④~⑥に示す。滓中には発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また⑤⑥は滓中の微小金属鉄粒の拡大である。素地は白色のフェライト(Ferrite: α 鉄)で、黒色層状のパーライトが析出する亜共析($C < 0.77\%$)組織であった。

(3) 化学組成分析

第3表に示す。全鉄分(Total Fe)57.06%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.45%、酸化第1鉄(FeO)が55.52%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)19.24%の割合であった。造滓成分($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$)20.59%で、このうちライム(CaO)は3.22%であった。

また、製鉄原料が砂鉄(含チタン鉄鉱)の場合、製鍊滓~精鍊鍛冶滓に含まれる二酸化チタン(TiO_2)は0.11%、バナジウム(V)が $< 0.01\%$ と低値であった。酸化マンガン(MnO)も0.08%と低値で、銅(Cu)は0.02%と若干高めであった。

当鉄滓は椀形鍛冶滓(UEZ-5)とよく似た組成であり、鉄鉱石(塊鉄)を始発原料とした精鍊鍛冶滓の可能性が考えられる。

UEZ-7(報告書No.740): 椀形鍛冶滓

(1) 外観観察

やや小形で扁平な椀形鍛冶滓の破片(47.7g)である。表面は茶褐色の錆化鉄で薄く覆われるが、まとまった鉄部はなく、金属探知機反応もみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸がある。破面の気孔は少なく緻密である。

(2) 顕微鏡組織

写真図版45①~③に示す。発達した白色粒状結晶ウスタイトが、素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また②③は滓中の微小金属鉄粒の拡大である。②の金属鉄粒

の素地はパーライトで、白色針状のセメンタイト(Cementite: Fe_3C)が析出する。過共析($C > 0.77\%$)組織であった。これに対して③の金属鉄粒の素地はフェライトで、少量パーライトが析出する亜共析($< 0.77\%$)組織であった。

(3) 化学組成分析

第3表に示す。全鉄分(Total Fe)58.11%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.16%、酸化第1鉄(FeO)が57.54%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)18.91%の割合であった。造滓成分($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$)は18.76%で、このうちライム(CaO)は2.99%であった。

また、製鉄原料が砂鉄(含チタン鉄鉱)の場合、製鍊滓~精鍊鍛冶滓に含まれる二酸化チタン(TiO_2)は0.15%、バナジウム(V)が $< 0.01\%$ と低値であった。酸化マンガン(MnO)も0.10%と低値で、銅(Cu)は0.02%と若干高めであった。

当鉄滓も椀形鍛冶滓(UEZ-5・6)とよく似た組成で、鉄鉱石(塊鉄)を始発原料とした精鍊鍛冶滓の可能性が考えられる。

UEZ-8(報告書No.801): 椀形鍛冶滓

(1) 外観観察

上苑A遺跡出土鉄滓中では、比較的大形の椀形鍛冶滓(70.2g)である。表面は茶褐色の錆化鉄で薄く覆われるが、まとまった鉄部はなく、金属探知機反応もみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。側面から下面にかけて細かい木炭痕による凹凸が目立つ。破面の気孔は少なく緻密である。

(2) 顕微鏡組織

写真図版45④~⑥に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また微小明白色粒は金属鉄である。ほとんど炭素を含まないフェライトであった。

(3) 化学組成分析

第3表に示す。全鉄分(Total Fe)50.37%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.09%、酸化第1鉄(FeO)が41.00%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)26.32%の割合であった。造滓成分($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$)25.40%で、このうちライム(CaO)は2.30%であった。

また、製鉄原料が砂鉄(含チタン鉄鉱)の場合、製鍊滓~精鍊鍛冶滓に含まれる二酸化チタン(TiO_2)は0.22%、バナジウム(V)が $< 0.01\%$ と低値であった。酸化マンガン(MnO)は0.09%と低値で、銅(Cu)は0.03%とやや高めであった。

当鉄滓は椀形鍛冶滓(UEZ-5~7)と比較すると、やや鉄酸化物の割合が低く、粘土の熔融物(SiO_2 主成分)の割合が高いが、ライム(CaO)、銅(Cu)の割合が高めである点は一致する。

この特徴から、やはり鉄鉱石（塊鉱）を始発原料とした精錬鍛冶滓の可能性が考えられる。

UEZ-9(報告書No.806)：含鉄鉄滓

(1) 外観観察

やや細長い形状の含鉄鉄滓(45.2g)である。上面側に茶褐色の鉄部が確認される。この部分は金属探知器反応があり、まとまった金属鉄が残存していると考えられる。また、その周囲は暗灰色の滓部である。全体に軽い質感で、粘土溶融物の割合の高い滓と推測される。

(2) マクロ組織

写真図版 46①に示す。断面中央にやや偏平な金属鉄(褐色～明白色)部が確認された。その上下の明白色部は鍛冶滓である。

(3) 顕微鏡組織

写真図版 46②～⑧に示す。②は鍛冶滓部分の拡大である。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また薄膜状の明灰色部は鍛冶剥片で、鍛冶炉内で熱影響を受け、分解・滓化しかけたものと推測される。

また③～⑧は金属鉄部の拡大である。③④は最も炭素量の高い箇所である。素地はパーライトで白色針状のセメントイトが析出する過共析組織であった。

これに対して、⑦⑧は最も炭素量の低い箇所である。素地は白色のフェライトで、少量パーライトが析出する亜共析組織であった。この組織の特徴から、当試料中の金属鉄部の炭素量は0.1～1.3%程度と推定される。

(4) 化学組成分析

第3表に示す。滓部を供試材とした。全鉄分(Total Fe)の割合は34.40%とやや低めであった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.53%、酸化第1鉄(FeO)35.66%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)8.80%であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)の割合は51.27%と高く、このうちライム(CaO)は4.42%であった。

また、製鉄原料が砂鉄(含チタン鉄鉱)の場合、製錬滓～精錬鍛冶滓に含まれる二酸化チタン(TiO₂)は0.47%、バナジウム(V)が<0.01%であった。酸化マンガン(MnO)は0.11%、銅(Cu)も<0.01%と低値であった。

当鉄滓中には熱影響を受けた鍛冶剥片が確認された。また、他の椀形鍛冶滓(UEZ-5～8)と比較すると、滓部の鉄酸化物の割合が低く、粘土の溶融物(SiO₂主成分)の割合が高いが、ライム(CaO)、銅(Cu)の割合が高い点は一致する。

これらの特徴から、鉄鉱石(塊鉱)を始発原料とした精錬鍛冶滓の可能性が考えられる。さらに比較的まとまりの良い金属鉄部が確認された。炭素量は部位によるばらつきが大きく0.1%～1.3%程度の鋼と推定される。

UEZ-10(報告書No.111)：鍛冶滓

(1) 外観観察

ごく小形の鍛冶滓破片(3.3g)と推測される。素地は微細な凹凸のある暗灰色の滓で、表面全体が茶褐色の銹化鉄で覆われる。着磁性が強く、弱い金属探知機反応もあるため、内部に金属鉄が残存する可能性がある。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 47①～③に示す。①の右上はガラス質滓で、②はその拡大である。滓中には微細な石英粒が含まれる。羽口などに混和された砂粒と推定される。素地は鍛冶滓で、滓中には発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微小白色部は金属鉄、不定形青灰色部は銹化鉄であるが、まとまった鉄部はみられなかった。

当鉄滓は内部に発達したウスタイトが確認されることから、鍛冶滓破片の可能性が考えられる。

UEZ-11(報告書No.798)：含鉄鉄滓

(1) 外観観察

ごく小形の鉄滓破片(18.4g)である。素地は暗灰色の緻密な滓で、ほぼ全面が破面と推定される。部分的にガラス質滓が付着する。ガラス質滓の表層には細かい気孔が密にみられる。また全体に茶褐色の銹化鉄で薄く覆われる。着磁性が強く、弱い金属探知機反応もあるため、内部には微細な金属鉄が残存する可能性がある。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 47④～⑥に示す。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、発達した淡灰色結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の不定形明白色部は金属鉄である。ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織から、フェライト素地に少量パーライトが析出する亜共析組織が確認された。炭素量は最も高い箇所でも0.1%前後と推定される。

当鉄滓は断面の観察結果のみで、製錬滓か鍛冶滓か判断するのは困難であった。また、滓中には金属鉄が含まれるが、非常に微細で鍛冶原料になり得るまとまったものではなかった。

UEZ-12(報告書No.796)：鍛冶滓

(1) 外観観察

ごく小形の鍛冶滓破片(8.7g)と推測される。素地は微細な凹凸のある暗灰色の滓で、破面には細かい気孔が散在する。表面全体が茶褐色の銹化鉄で覆われる。着磁性が強く、弱い金属探知機反応もあるため、内部に金属鉄が残存する可能性がある。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 48①～③に示す。滓中には発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微小白色部は金属鉄、不定形明灰色～

青灰色部は銹化鉄であるが、まとまった鉄部はみられなかった。

当鉄滓は内部に発達したウスタイトが確認されることから、鍛冶滓破片の可能性が考えられる。

UEZ-13(報告書No.795)：鍛冶滓

(1) 外観観察

ごく小形の鍛冶滓破片(19.0g)と推測される。上下面は試料本来の表面で、微細な凹凸がみられる。一方側面は全面破面で、中小の気孔が散在する。表面全体が茶褐色の銹化鉄で覆われる。着磁性が強く、弱い金属探知機反応もあるため、内部に金属鉄が残存する可能性がある。

(2) 顕微鏡組織

写真図版 48④～⑥に示す。滓中には発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。またウスタイト粒内に点在する微細な暗灰色結晶はヘルシナイトと推定される。滓中の微小明白色部は金属鉄、不定形明灰色～青灰色部は銹化鉄であるが、まとまった鉄部はみられなかった。

当鉄滓は内部に発達したウスタイトが確認されることから、鍛冶滓破片の可能性が考えられる。

4 まとめ

上苑A遺跡から、主に7世紀代と推定される製鉄～鍛冶関連遺物を調査した結果、当遺跡には鉄鉱石(塊鉄)を製錬してつくられた鉄(製錬系鉄塊)が鍛冶原料として搬入され、金属鉄と分離不十分な滓を除去する精錬鍛冶作業が行われたと推定される。詳細は以下のとおりである。

4-1 製鉄関連遺物

(1) 炉壁(UEZ-1)の外面には、多数のスサの痕跡が残る。これは、古代の製鉄炉の炉壁片にはよくみられる特徴である。

また炉壁粘土のライム(CaO)の含有割合は通常1%前後であるが、炉壁(UEZ-1)は3.26%と高めであった。これは炉内に装入された鉄鉱石(塊鉄)の特徴を反映した可能性が考えられる。

(2) 鉄滓3点(UEZ-2～4)は、鉄鉱石(塊鉄)を製錬した反応副生物と考えられる。炉壁(UEZ-1)と同様、ライム(CaO)の含有割合が3.54%～7.10%と高い。これはスカルン^(注1)鉱床で採取された鉄鉱石(塊鉄)を製錬した反応副生物(鉱石系製錬滓)の特徴といえる。

岡山県や滋賀県など、鉄鉱石(塊鉄)を原料とした古墳時代後期～古代の製鉄遺跡群が多数確認される地域でも、同様の特徴が確認されている(第139図^(注2))。

鹿児島県下では、これまでも古代～近世の製鉄関連遺物が多数調査されている。それらはほぼ地域に分布する火山岩起原の砂鉄(含チタン鉄鉱)を原料としたもの

であった。こうした砂鉄を始発原料とする場合、製錬滓や精錬鍛冶滓にはチタニア(TiO₂)の影響が確認される。志布志市内の採取砂鉄や製鉄遺跡から出土した砂鉄も、チタニアが10%前後含まれる。製錬滓も同等以上チタニアを含有している^(注3・4)。しかし、今回上苑A遺跡から出土した製鉄関連遺物は、こうした在地の鉄資源を利用したものではないことは確かである。

なお幕末には、宮崎県えびの市の真幸鉄山から集成館の溶鉱炉に鉄鉱石が供給されたことが知られている^(注5)。しかし、古代の製鉄遺跡の原料供給元とするには遠距離であり、周辺で古代に遡る製鉄遺跡の確認例もない。

このため、鉄鉱石(塊鉄)をどこから調達して、どの程度遺跡近傍で鉄を生産していた可能性があるのか。もしくはこれらの製鉄関連遺物が、遺跡内に搬入された鍛冶原料鉄中の混在物であったとしても、その供給元がどこであったかなど、多くの点が今後の検討課題といえる。

4-2 鍛冶関連遺物

(1) 椀形鍛冶滓(UEZ-5～8)は、製錬滓(UEZ-2～4)と比較すると鉄酸化物(FeO)の割合が高く、ライム(CaO)の含有割合が低い。鍛冶原料鉄の不純物(金属鉄と分離不十分な製錬滓)除去で生じた精錬鍛冶滓と考えられる。遺跡内で鍛冶作業が行われたことを示す遺物群といえる。

(2) 鍛冶滓(UEZ-10、12、13)は、滓中に発達した白色粒状結晶ウスタイトが確認された。この特徴から、鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。

完形の椀形鍛冶滓が少なく、ごく小形の鍛冶滓破片が多数出土するのは、滓中に取り残された金属鉄を回収して、鉄器製作にあてていたと推測される。

4-3 含鉄鉄滓

含鉄鉄滓2点のうち1点(UEZ-9)は、滓中に熱影響を受けた鍛造剥片が確認された。また滓部のライム(CaO)、銅(Cu)の割合が高めであった。

これらの特徴から、鉄鉱石(塊鉄)を始発原料とした精錬鍛冶滓の可能性が考えられる。金属鉄部は小形であるが比較的同時性が良く、炭素量は0.1%～1.3%程度の鋼と推定される。

もう1点(UEZ-11)は、断面の観察結果のみで、製錬滓か鍛冶滓か判断するのは困難であった。金属鉄部は非常に微細で、鍛冶原料になり得るまとまったものではなかった。炭素量は全体に低めで最も高い箇所でも0.1%前後と推定される。また上述の椀形鍛冶滓中の微小金属鉄粒のなかにも、亜共析(C<0.77%)組織や過共析(C>0.77%)組織を呈するものが確認された。

以上の調査結果から、当遺跡にはさまざまな炭素量の鉄塊が鍛冶原料として搬入されていたと推測される。このうち少なくとも一部は硬さや焼き入れ性を要する刃先の製作に適した「刃金」(高炭素鋼)にあたる原料も搬入

されていたものと考えられる。

【註】

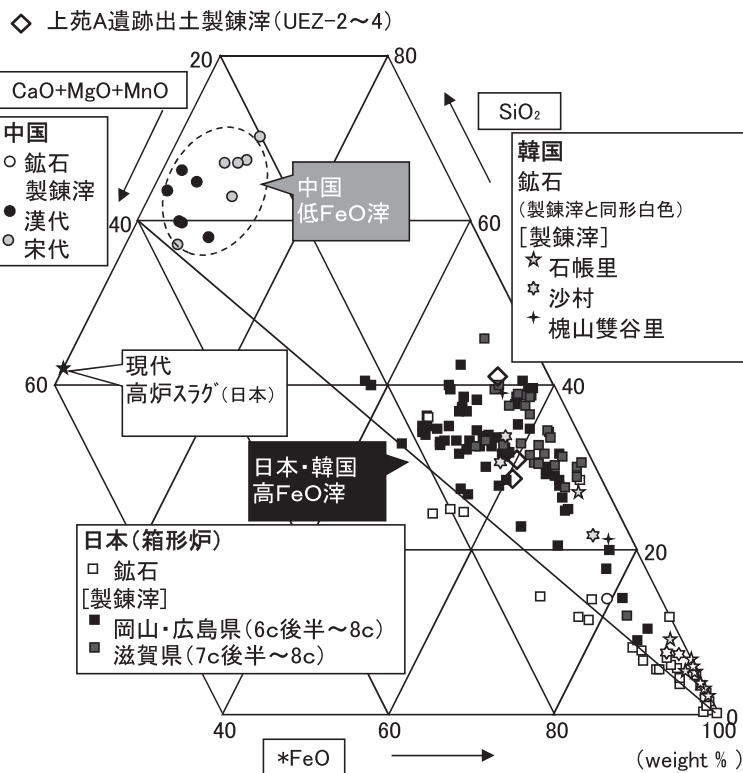
- (1) スカルク (skarn) とは、石灰岩や苦灰岩などの炭酸塩岩中に、花崗岩などのマグマが貫入した際、その接触部付近にできる鉱物の集合体（接触変成岩の一種）である。マグマから珪酸や鉄などが、石灰岩や苦灰岩の方に移動しカルシウムやマグネシウムと反応して、カルシウム、鉄、マグネシウムなどに富む珪酸塩鉱物（スカルク鉱物）ができる。
- (2) 鈴木瑞穂 2016 「韓・日の製鉄技術分析結果の比較研究」

『古代製鉄技術研究における融・複合研究の現状と課題』国立中原文化財文化財研究所〔韓国〕

- (3) 大澤正己・鈴木瑞穂 2004 「宝満製鉄遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『宝満製鉄遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (33) 志布志町教育委員会
- (4) 鈴木瑞穂 2007 「鹿児島県の高嶺 (P) 砂鉄が製鉄技術に及ぼした影響について」『ミュージアム知覧紀要』11
- (5) 松尾千歳 2006 「真幸鉄山について」『薩摩のものづくり研究 近代日本黎明期における薩摩藩集成館事業の諸技術とその位置付けに関する総合的研究』薩摩のものづくり研究

第2表 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器 反応	調査項目			備考
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	化学分析	
UEZ-1	上苑A	H-5	炉壁	7c代	48×45×18	40.6	なし		○	○	
UEZ-2		D-4	製錬滓(炉内滓)		41×40×49	84.4	なし		○	○	
UEZ-3		I-5(SI19?)	製錬滓(炉外流出滓)		48×49×30	118.5	なし		○	○	
UEZ-4		SI26	製錬滓(炉外流出滓)		64×45×35	103.4	なし		○	○	
UEZ-5		D-4	椀形鍛冶滓	7c代	44×26×17	37.0	なし		○	○	
UEZ-6		SI12	椀形鍛冶滓		45×37×27	62.4	なし		○	○	
UEZ-7		SD1	椀形鍛冶滓		46×34×18	47.7	なし		○	○	
UEZ-8		D-2	椀形鍛冶滓		59×47×22	70.2	なし		○	○	
UEZ-9		E-6	含鉄鉄滓		65×33×23	45.2	L(●)	○	○	○	
UEZ-10		SI12	鍛冶滓		15×17×3	3.3	H(○)		○		
UEZ-11		F-6	含鉄鉄滓		34×23×11	18.4	L(●)		○		
UEZ-12		H-I-4	鍛冶滓		22×16×18	8.7	H(○)		○		
UEZ-13		I-5	鍛冶滓		29×18×26	19.0	H(○)		○		



第139図 日中韓の出土塊鉱石・製錬滓と上苑A遺跡出土製錬滓の化学組成の比較

第3表 供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	ハフニウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	Σ *		
																								造澤成分 Total Fe	造澤成分 Total Fe	TiO ₂
UEZ-1	上苑A	H-5	炉壁	7c代	12.66	0.13	4.34	13.09	47.96	25.50	3.16	0.91	0.69	0.86	0.23	1.31	0.06	0.01	0.27	0.05	0.01	<0.01	0.04	79.08	6.24645	0.10348
UEZ-2		D-4	製錬滓(炉内滓)		34.68	0.06	35.36	10.20	34.44	9.44	3.54	1.07	1.22	0.50	0.62	0.49	0.02	0.05	0.46	0.10	<0.01	<0.01	0.01	50.21	1.44781	0.01413
UEZ-3		I-5(SI19?)	製錬滓(炉外流出滓)		39.02	0.04	47.51	2.93	26.95	10.84	5.78	0.99	1.02	0.28	0.32	0.53	0.02	0.05	0.71	0.08	<0.01	<0.01	0.02	45.86	1.17529	0.01358
UEZ-4		SI26	製錬滓(炉外流出滓)		39.42	0.09	45.17	6.03	24.58	11.93	7.10	1.17	0.86	0.34	0.52	0.51	0.02	0.04	0.66	0.10	<0.01	<0.01	0.02	45.98	1.16641	0.01294
UEZ-5		D-4	柳形鍛冶滓	7c代	59.11	0.07	49.03	29.92	11.91	3.38	2.25	0.57	0.36	0.21	0.08	0.14	<0.01	0.08	0.21	0.10	<0.01	0.04	<0.01	18.68	0.31602	0.00237
UEZ-6		SI12	柳形鍛冶滓		57.06	0.45	55.52	19.24	12.69	3.10	3.22	0.53	0.60	0.45	0.08	0.11	<0.01	0.04	0.30	0.12	<0.01	0.02	<0.01	20.59	0.36085	0.00193
UEZ-7		SD1	柳形鍛冶滓		58.11	0.16	57.94	19.91	10.43	3.64	2.99	0.69	0.64	0.37	0.10	0.15	<0.01	0.04	0.23	0.22	<0.01	0.02	<0.01	18.76	0.32284	0.00258
UEZ-8		D-2	柳形鍛冶滓		50.37	0.09	41.00	26.32	16.18	4.83	2.30	0.85	0.91	0.33	0.09	0.22	<0.01	0.07	0.17	0.28	<0.01	0.03	<0.01	25.40	0.50427	0.00437
UEZ-9		E-6	含鉄滓		34.40	0.53	35.66	8.80	31.62	11.02	4.42	1.42	1.67	1.12	0.11	0.47	0.02	0.03	0.32	0.17	<0.01	<0.01	0.01	51.27	1.49041	0.01366

第4表 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成(%)							所見		
						Total Fe	CaO	MgO	MnO	TiO ₂	V	造澤成分		P ₂ O ₅	Cu
UEZ-1	上苑A	H-5	炉壁	7c代	内面表層がラ質滓、M	12.66	3.16	0.91	0.23	1.31	0.01	79.08	0.27	<0.01	製鉄炉の炉壁片[製鉄原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる]
UEZ-2		D-4	製錬滓(炉内滓)		滓部:W+微細H+M	34.68	3.54	1.07	0.62	0.49	<0.01	50.21	0.46	<0.01	製錬滓[原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる]
UEZ-3		I-5(SI19?)	製錬滓(炉外流出滓)		滓部:WH+F、M付着	39.02	5.78	0.99	0.32	0.53	<0.01	45.86	0.71	<0.01	製錬滓[原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる]
UEZ-4		SI26	製錬滓(炉外流出滓)		滓部:WH+微細H+M、 鉄化鉄部:重共析組織遺跡	39.42	7.10	1.17	0.52	0.51	<0.01	45.98	0.66	<0.01	製錬滓[原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる]
UEZ-5		D-4	柳形鍛冶滓	7c代	滓部:WH+微細H+F	59.11	2.25	0.57	0.08	0.14	<0.01	23.98	0.21	0.04	精錬鍛冶滓[始発原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる]
UEZ-6		SI12	柳形鍛冶滓		滓部:WH+F、微小金属鉄粒:重共析組織	57.06	3.22	0.53	0.08	0.11	<0.01	20.59	0.30	0.02	精錬鍛冶滓[始発原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる]
UEZ-7		SD1	柳形鍛冶滓		滓部:W、 微小金属鉄粒:重共析組織、過共析組織	58.11	2.99	0.69	0.10	0.15	<0.01	18.76	0.23	0.02	精錬鍛冶滓[始発原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる]
UEZ-8		D-2	柳形鍛冶滓		滓部:WH+F、微小金属鉄粒:エト小	50.37	2.30	0.85	0.09	0.22	<0.01	25.4	0.17	0.03	精錬鍛冶滓[始発原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる]
UEZ-9		E-6	含鉄鉄滓		滓部:WH+F、被熱鍛造剥片、 金属鉄部:重共析~過共析組織	34.40	4.42	1.42	0.11	0.47	<0.01	51.27	0.32	<0.01	精錬鍛冶滓[始発原料:鉄鉱石(塊鉱)と考えられる] 金属鉄部:0.1~1.3%Cの鋼
UEZ-10		SI12	鍛冶滓		炉内質滓(石英粒混在)、 滓部:WH+F、微小金属鉄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓破片と考えられる
UEZ-11		F-6	含鉄鉄滓		滓部:WH+F、 金属鉄部:エト小単相~重共析組織	-	-	-	-	-	-	-	-	-	製錬滓か鍛冶滓かの判断は難しい。金属鉄はごく微細で鍛冶原料とはばり得ず廃棄されたものと推測される
UEZ-12		H+I-4	鍛冶滓		滓部:WH+F、微小金属鉄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓破片と考えられる
UEZ-13		I-5	鍛冶滓		滓部:WH+F、微小金属鉄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓破片と考えられる

W:Wustite (FeO)、M:Magnetite (FeO·Fe₂O₃)、H:Hercynite (FeO·Al₂O₃)、F:(2FeO·SiO₂)

第2節 上苑A遺跡出土土器に付着する白色物質についての検討

鹿児島国際大学博物館実習施設 鐘ヶ江賢二
鹿児島大学機器分析施設 大倉寛一

1. はじめに

上苑A遺跡出土の成川式土器は、古墳時代後期から古代に相当する時期を中心とするが、甕形土器の口縁部や甕の下部に白色物質の付着がみられることがある。上苑A遺跡において甕による蒸し調理が行われたとすると、甕は湯沸かし鍋として甕の下に設置されることになり、白色物質は、甕の上に甕を設置した場合双方が接する場所に付着するようである。その点を勘案すると、白色物質は蒸し調理の際に甕と甕を固定する接着剤のような役割を果たしていたとも考えられる。ただし、白色物質の実際の役割を推定するためには、白色物質の化学的な性質を把握することが不可欠である。

そこで、白色物質が付着する上苑A遺跡出土の土器破片に対して、電子線マイクロアナライザ（以下EPMA）による定量分析と定性分析を実施したので、以下報告する。

2. 分析方法

分析対象の甕の破片（第140図）に対して、薄片を作成した。試料は、土器片の上下断面に沿って切断し、表面を研磨した後、スライドガラスに接着させ、約0.03mmの厚さまで研磨し、偏光顕微鏡下で鉱物の観察を行った。顕微鏡下では、土器片の表面上に白色物質が付着する状況が確認できたため、EPMAで白色物質を2か所、土器部分を2か所測定した。測定ポイントは、第141図に示している。EPMAの測定条件は以下の通りである。

分析装置名：鹿児島大学機器分析施設 EPMA (JEOL JXA-8230)

・観察条件 加速電圧：15.0 kV 照射電流：1.00E-8A

・分析条件

定性分析 加速電圧：15.0 kV 照射電流：1.00E-8A
分析エリア：φ 50 μm

面分析 加速電圧：15.0 kV 照射電流：1.00E-8A
ステージスキャン・ピーク+BG 両側

エリア 1200 μm × 900 μm (400ピクセル × 300ピクセル / 3.0 μm) 収集時間：30ms

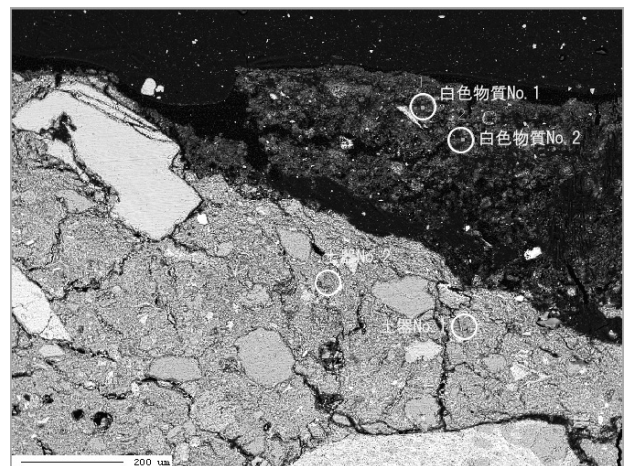
3. 分析結果

最初に定量（半定量）分析の結果を検討したい。白色

物質と土器胎土部分の化学組成は、第5表に示している。炭素を含めた半定量分析では、白色物質の方が炭素を多く含んでおり、またSiO₂とAl₂O₃も高い値を示している。このことから、白色物質には炭素や粘土が多く含まれていると推測される。また白色物質は、主にカリ長石類に由来するとみられるK₂OとNa₂Oの値、およびTiO₂が欠落するが、ピークが低く定量データとして示すことがで



第140図 分析対象の土器片



第141図 定性分析の測定ポイント（BSE像）

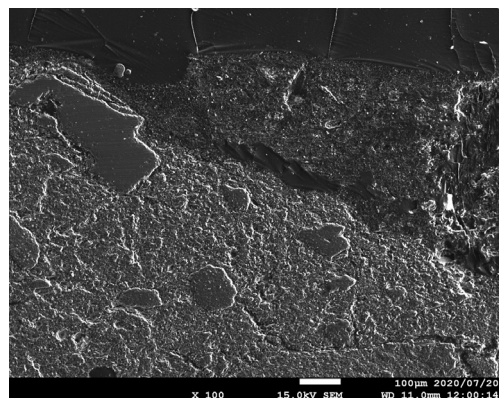
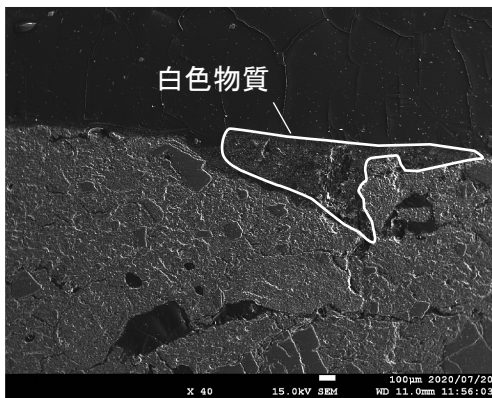
第5表 白色付着物および土器胎土部分の化学組成 (wt. %)

半定量分析結果 (C 含む)

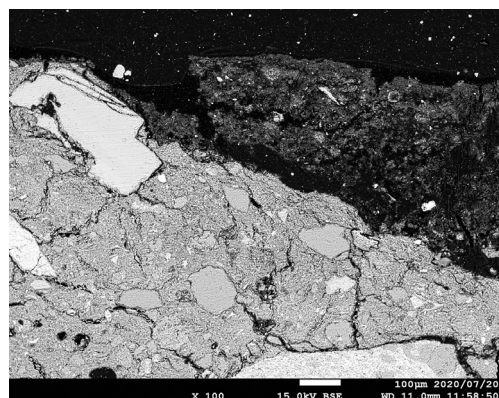
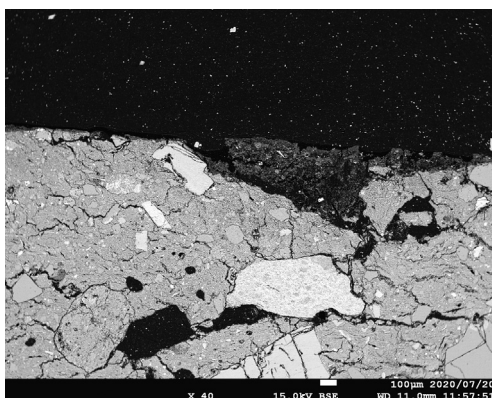
	白色物 No. 1	白色物 No. 2	土器 No. 1	土器 No. 2
CO ₂	82.161	87.966	47.003	40.864
SiO ₂	7.518	5.926	34.574	37.133
Al ₂ O ₃	6.892	3.937	9.918	14.611
FeO	0.843	0.879	2.833	3.468
CaO	1.090	0.237	—	0.539
MgO	0.684	0.805	0.597	0.613
P ₂ O ₅	0.400	—	0.700	0.916
MnO	0.413	0.250	0.569	—
TiO ₂	—	—	2.034	0.597
K ₂ O	—	—	1.178	1.258
Na ₂ O	—	—	0.595	—

半定量分析結果 (C 除去)

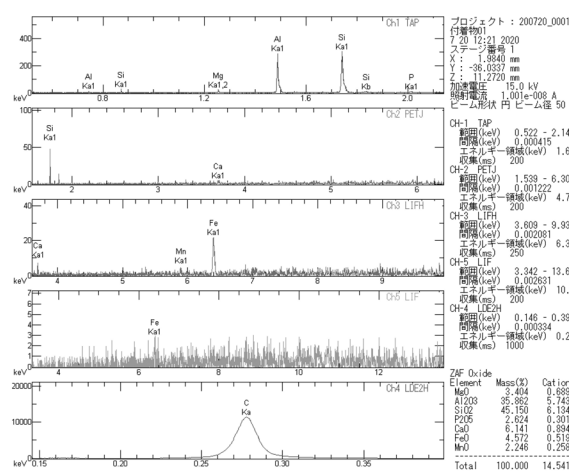
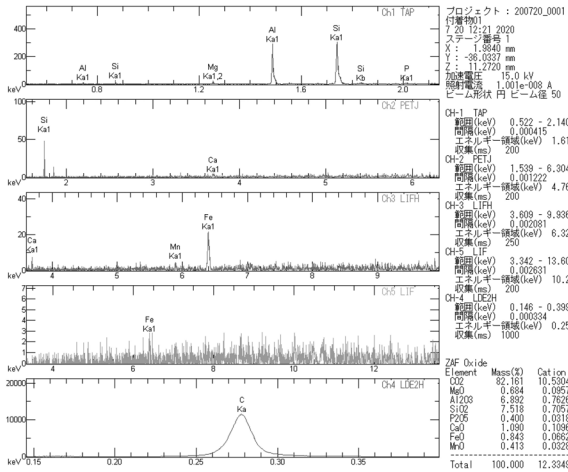
	白色物 No. 1	白色物 No. 2	土器 No. 1	土器 No. 2
CO ₂	/	/	/	/
SiO ₂	45.150	52.512	65.941	63.651
Al ₂ O ₃	35.862	30.596	18.021	23.772
FeO	4.572	7.005	5.292	5.808
CaO	6.141	1.981	—	0.923
MgO	3.404	5.898	1.070	0.983
P ₂ O ₅	2.624	—	1.455	1.685
MnO	2.246	2.007	1.065	—
TiO ₂	—	—	3.842	1.010
K ₂ O	—	—	2.272	2.168
Na ₂ O	—	—	1.043	—



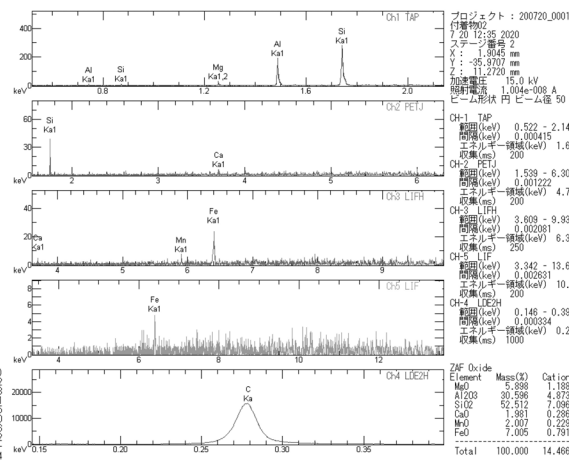
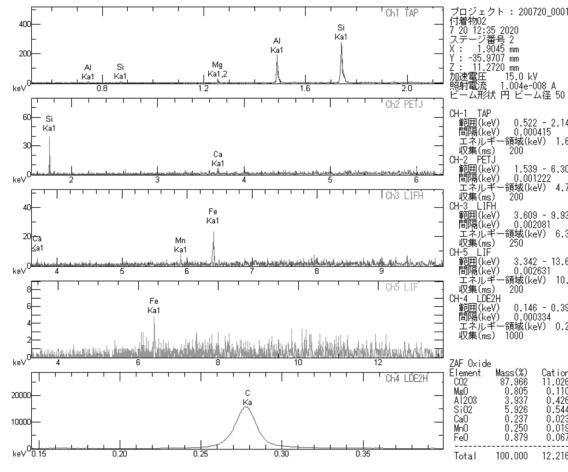
第142図 SEM像 (スケール100 µm)



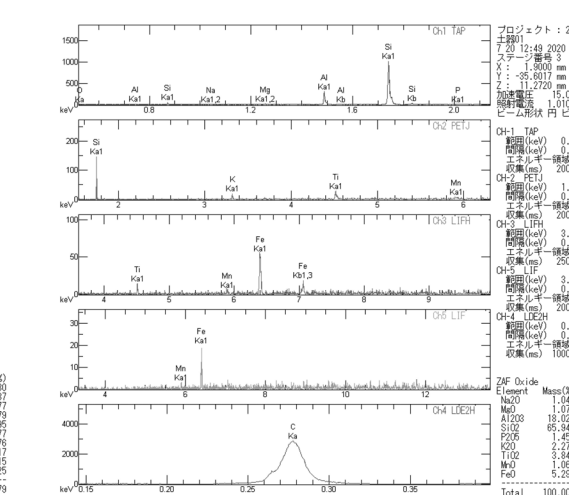
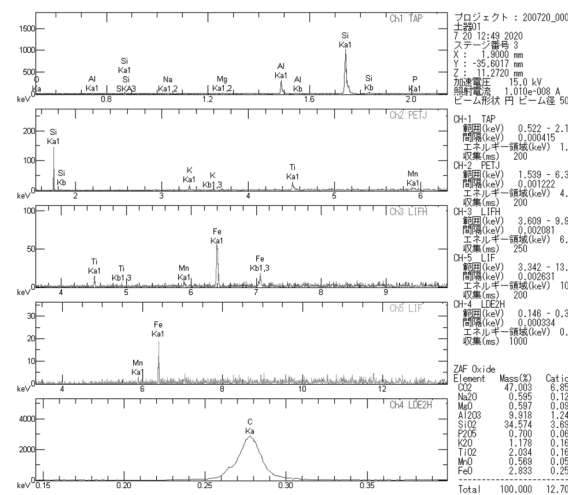
第143図 BSE像 (スケール100 µm)



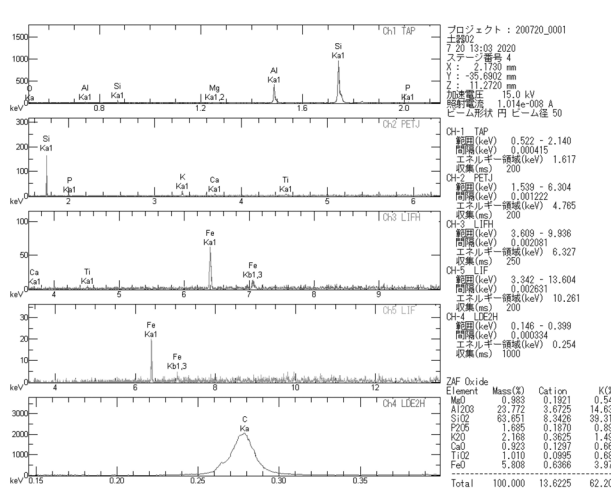
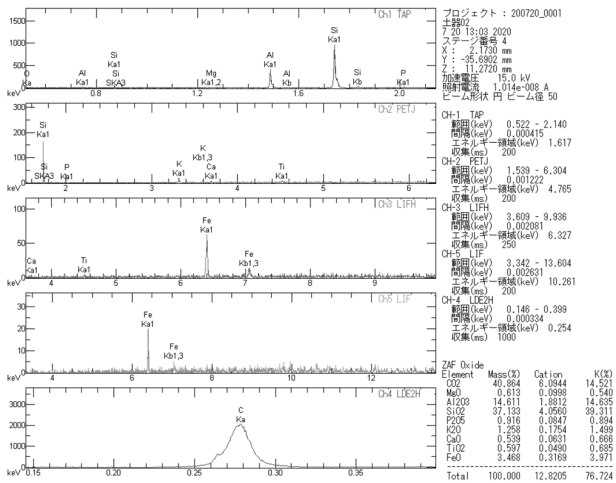
第144図 白色物質No. 1の定性分析 左：C含有 右：C除去



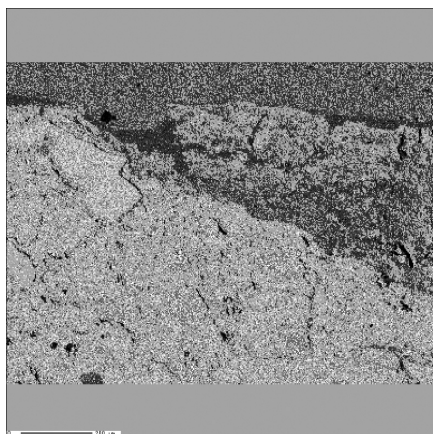
第145図 白色物質No. 2の定性分析 左：C含有 右：C除去



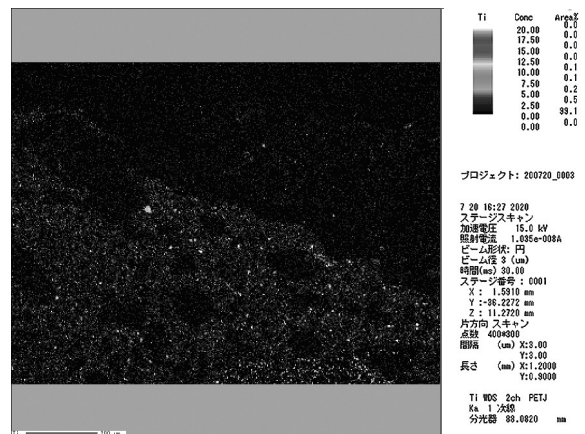
第146図 土器No. 1の定性分析 左：C含有 右：C除去



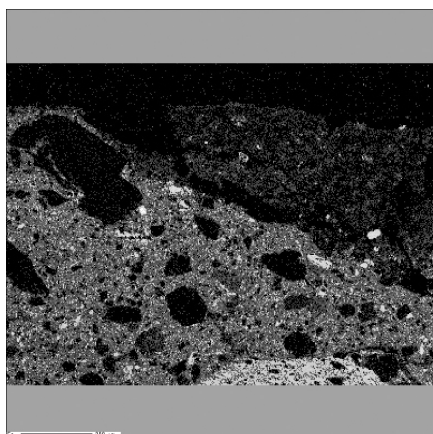
第147図 土器No. 2の定性分析 左: C含有 右: C除去



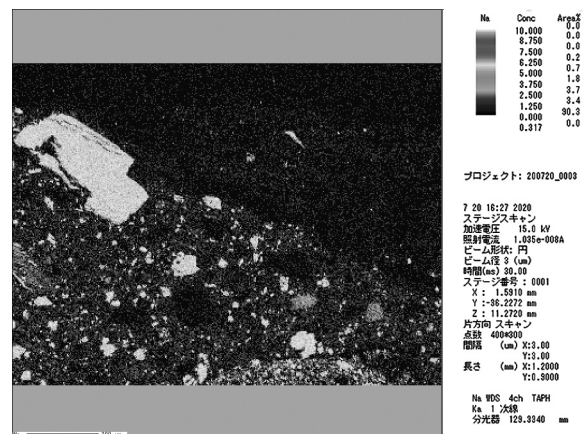
O



Ti

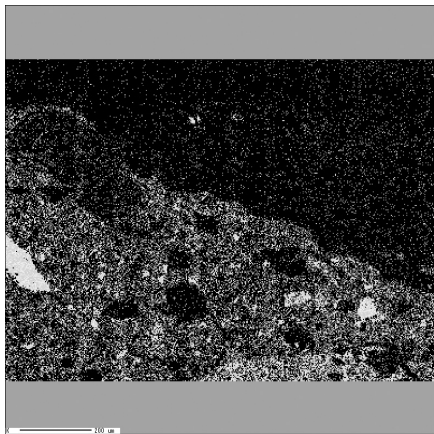


Fe

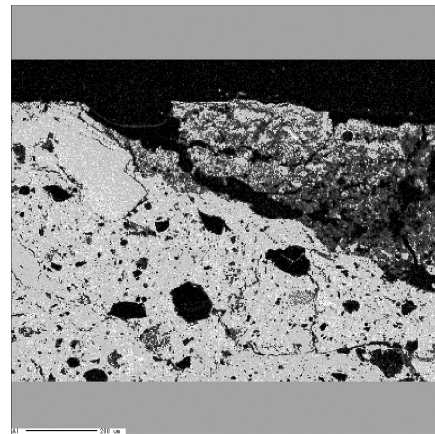


Na

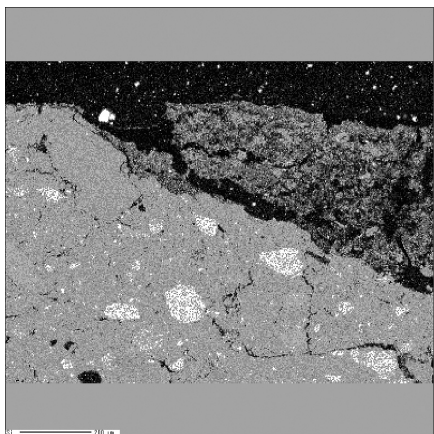
第148図 面分析による各元素の分布 (1)



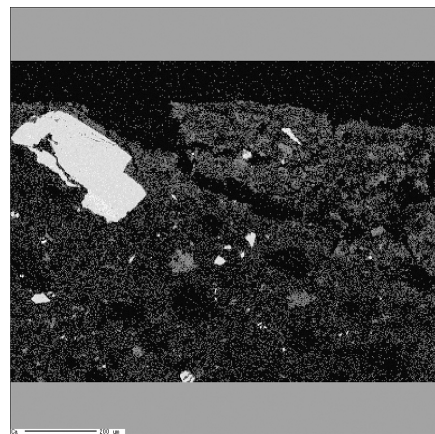
K



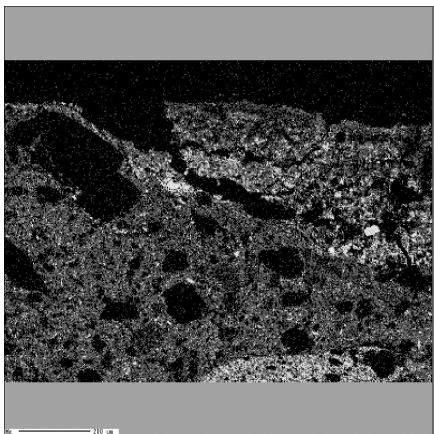
Al



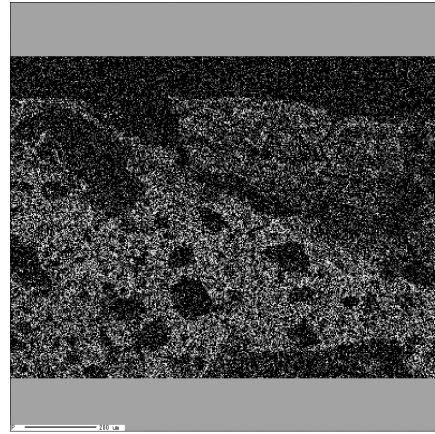
Si



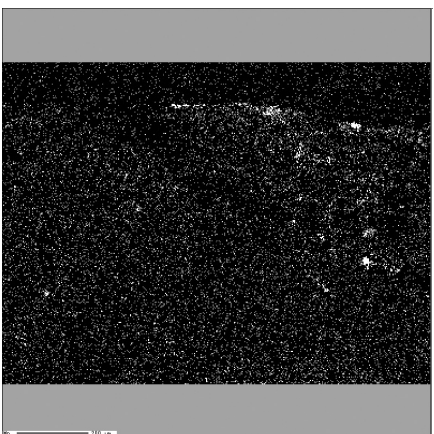
Ca



Mg



P



Mn

第149図 面分析による各元素の分布 (2)

きなかったことによる。白色物質には、CaO や MnO が少量含まれていることにも注目されるが、これが何に由来するかは判然としない。いずれにしても、こうした結果は白色物質に炭素と粘土も含むこと、一方カリ長石類の含有量は少ないことを示唆している。なお、炭素を除いた場合の定量分析でも、同様な傾向が認められる。

白色物質に炭素が含まれることは、BSE(後方散乱電子)像でも推測でき、BES 像では白色物質の部分の方が黒っぽくみえており、軽元素が多いと判断される(第 143 図)。

定性分析の結果についても検討すると、白色物質の方に C の高いピークが確認される(第 144・145 図)。面分析については、分析の際炭素を蒸着させており、炭素分は除いているが、白色物質は主に Si や Al から構成されており、Mg や P も少量含まれることが見て取れる(第 149 図)。Mg は、雲母類の粘土鉱物に由来する可能性があるが、有機物由来の可能性もある。

4. 考察

以上のように、上苑 A 遺跡出土成川式土器の白色物質について分析を実施した。白色物質は、分析の結果主に炭素と粘土から構成されると推測した。白色物質は、甕の上に甌を設置した場合双方が接する場所に付着する。このことから、白色物質は有機物と粘土を混ぜた物質であり、調理時にそれを塗布することで、二つの土器を固定し、蒸気が漏れるのを防いだとも推測されうる。また洗浄などの際は甕と甌は取り外す必要があることから、白色物質に粘土が含まれることは、可塑性や取り外しやすさという点を考慮して加えられた可能性もある。

次に、白色物質に含まれる炭素が何に由来するかが課題であるが、植物由来の炭素であれば、K が含有されることも想定される。しかし今回の分析では、K はほとんど検出されていない。そこで、炭素は膠などの動物由来の接着剤の可能性が考えられるが、詳細な性質の把握のためにはさらなる分析が必要である。

これまで、南九州では縄文土器に白色物質の付着が指摘され、白土や粘土鉱物の検出が報告されている(鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000 ; 赤崎 2020)。特に赤崎広志による宮崎県の縄文中期～後期土器の底部に付着する白色物質の分析では、火山灰と比較しながら詳細な分析が試みられている。本稿の分析では、火山灰など土壌との比較や有機物の由来などについては十分に追究できず、課題が残されているが、成川式土器の白色物質の性質について、EPMA を用いることで有機物と粘土の混合物という見通しを得ることができた。今後も多角的に検討を進めたい。

なお、本稿は令和 2 年度科学研究費基盤研究 (C) 「離島の食資源利用解明の方法論的研究—古墳時代の南九州

甌島列島を対象として—」(研究代表者:大西智和)(課題番号 19K01102)の成果の一部である。

文献

赤崎広志 2020 「縄文土器の底部に付着する白色物質」『宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第 5 集: 1-12
鹿児島県埋蔵文化財センター 2000 「鹿児島県出土の赤色顔料—日本最古級の赤彩土器をはじめとして—」『人類史研究』12: 163-169

第6表 土器・土製品観察表(1)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
7	1	26082	SI18	貼床内	30.510	縄文早期	石坂Ⅱ式	-	-	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	明赤褐(2.5YR5/6)		
	2	23432	K-11	Ⅱ	31.637	縄文後期	宮之迫式	-	-	ヨコ貝条	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)		
	3	6487他	G-5	Ⅱ	31.452	縄文後期	編物底	深鉢	-	胴:丁寧なナデ 底:網代底	ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	にぶい褐(7.5YR5/3)	復元底径:12.8cm	
	4	14006他	F-5・6	Ⅱ	31.069 ~31.334	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	板状工具ヨコナデ	ヨコナデ	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)		
	5	29他	H-7・8 SI15	Ⅱ	29.822 ~30.362	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	丁寧なヨコナデ(一部ミガキ状)	丁寧なヨコナデ	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	復元口径:49.0cm	
	6	6721他	G-5 SI18	Ⅱ	31.511	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	ヨコミガキ	にぶい赤褐(5YR4/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)		
	7	18668	E-6	Ⅱ	31.254	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	ヨコミガキ	暗赤褐(5YR3/3)	にぶい褐(7.5YR5/3)		
8	8	15129他	G-5・6	Ⅱ	31.479 ~31.498	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	ヨコミガキ	黒褐(10YR3/1)	褐灰(10YR4/1)		
	9	6483	G-5	Ⅱ	31.438	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)		
	10	18599他	J-10	Ⅱ	31.644 ~31.662	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	板状工具ヨコナデ	黒褐(5YR3/1)	明赤褐(5YR5/6)	火山ガラス 多く含む	復元口径:25.0cm
	11	一括	4T	Ⅱ	-	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	板状工具ヨコナデ	褐灰(10YR5/1)	にぶい赤褐(5YR4/6)	火山ガラス 多く含む	
	12	15183他	G-6	Ⅱ	31.439 ~31.505	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	板状工具ヨコナデ/ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(5YR3/1)	にぶい赤褐(5YR5/4)		補修孔あり
	13	14473他	F・G-6	Ⅱ	31.319 ~31.408	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	板状工具ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐(7.5YR3/1)	にぶい赤褐(5YR4/4)		
	14	14428他	F・G-6	Ⅱ	31.359 ~31.390	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	板状工具ヨコナデ	板状工具ヨコナデ	黒褐(10YR3/1)	にぶい赤褐(5YR4/4)		
9	15	8319他	H-5	Ⅱ	31.551 ~31.569	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	丁寧なヨコナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)		復元口径:22.0cm
	16	20032他	K-9	Ⅱ	31.720 ~31.763	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	板状工具ヨコナデ後ヨコミガキ	丁寧なヨコナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	火山ガラス 多く含む	
	17	10308他	H・I-6	Ⅱ	31.411 ~31.583	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	ヨコミガキ	暗赤褐(5YR3/3)	にぶい褐(7.5YR5/3)		
	18	14654他	F-6	Ⅱ	31.251	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコナデ(ケズリ状)	ヨコナデ(ケズリ状)	灰褐(5YR5/2)	褐灰(10YR4/1)		
	19	表採	-	-	-	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	板状工具ヨコナデ	板状工具ヨコナデ	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい赤褐(5YR4/4)		補修孔あり
	20	4他	G-7	Ⅱ	30.321 ~30.374	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	ナナメミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)		補修孔あり
	21	43	H-7	Ⅱ	30.339	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコミガキ	ヨコミガキ	にぶい赤褐(5YR4/3)	にぶい赤褐(5YR5/4)		
10	22	4462	I-5	Ⅱ	31.724	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	板状工具ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰(10YR4/1)	にぶい黄褐(10YR5/4)		
	23	20039他	K-9	Ⅱ	31.698	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	ヨコナデ後タテ・ナナメミガキ	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5YR8/4)		
	24	10349	I-6	Ⅱ	31.560	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	胴:ミガキ 底:丁寧なナデ	ナデ	黒褐(10YR3/1)	灰黄褐(10YR4/2)	復元底径:9.0cm	
	25	9810	-	Ⅱ	-	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	胴:タテナデ 底:ナデ	ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	復元底径:9.6cm	
	26	24729	SI18	埋土	-	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	胴:ナデ 底:ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	褐灰(10YR4/1)	復元底径:22.0cm	
	27	10510	C-3	Ⅱ	31.267	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	甕	-	胴:ヨコミガキ 底:丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい黄褐(10YR5/3)	褐灰(10YR4/1)	復元底径:13.0cm	
	28	15180他	G-6	Ⅱ	31.508	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	ヨコミガキ	ヨコナデ	褐灰(10YR4/1)	橙(7.5YR6/6)	火山ガラス 多く含む	
10	29	13150他	D・E-5	Ⅱ	31.252 ~31.278	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	赤色粒目立つ	
	30	6512他	G-5	Ⅱ	31.374 ~31.383	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	ヨコナデ	ヨコナデ/ヨコケズリ	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	復元口径:16.0cm	
	31	一括	E-4	Ⅱ	-	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	ナデ	ナデ	浅黄(2.5YR8/4)	浅黄(2.5YR8/4)		
	32	14722他	G-5・6	Ⅱ	31.421 ~31.516	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)		
	33	15496	G-6	Ⅱ	31.423	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	ヨコナデ/ヨコミガキ	ヨコナデ	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)		
	34	14649	F-6	Ⅱ	31.266	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰(10YR4/1)	黒褐(10YR3/1)	復元口径:22.6cm	
	35	15218他	G-6	Ⅱ	31.412 ~31.454	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	ヨコナデ	丁寧なヨコナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)	火山ガラス 多く含む	
	36	14485	E-6	Ⅱ	31.308	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	胴:タテ・ナナメミガキ 底:ナデ	ナデ	黒褐(5YR2/1)	にぶい赤褐(5YR4/4)	復元底径:5.4cm	
	37	17407	SI20	埋土	30.791 ~31.269	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	浅鉢	-	胴:ヨコミガキ 底:丁寧なナデ	ナデ	黄橙(10YR8/6)	灰黄褐(10YR5/2)	復元底径:11.0cm	
	38	15507	G-6	Ⅱ	31.420	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	組織痕 土器	-	ヨコナデ/組織痕?	板状工具ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	褐灰(10YR4/1)		
	39	14939	-	Ⅱ	-	縄文晩期末 ~弥生初頭	刻目 突帯文	組織痕 土器	-	ヨコナデ/組織痕	板状工具ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)		

第7表 土器・土製品観察表(2)

掛図 No.	報告 No.	取上No.	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
14	40	12880他	SI31	II	30.881 ~31.018	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	ヨコナデ/ナナメナデ	ユビオサエ後一部ハケメ後ヨコ ナデ/タテナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	-	口径: 25.2cm
	41	26071他	SI31	埋土	30.974 ~31.105	弥生中期	山ノ口II 式	壺	-	ヨコナデ/ヨコナデ/タテミガキ	ヨコナデ/ナナメハケメ/タテナ デ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	金色ウンモ 含む	口径: 16.8cm
	42	26036他	SI31	埋土	30.891 ~31.126	弥生中期	山ノ口II 式	壺	-	丁寧なタテナデ/タテミガキ・ 丁寧なタテナデ	ユビオサエ後ヨコナデ/工具ヨ コナデ/タテナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	金色ウンモ 含む	復元口径: 22.4cm
	43	9383	SI31?	III	31.112	弥生中期	山ノ口II 式	壺	-	ナナメナデ/ヨコナデ	摩滅により不明	にぶい赤褐 (5Yr5/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	金色ウンモ 含む	底径: 9.5cm
	44	26119	SI31	埋土	30.969	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	胴: タテ工具ナデ/タテハケメ 底: ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	-	底径: 6.0cm
15	48	5453他	G-2	II	31.317 ~31.426	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	ヨコナデ/タテナデ	ユビオサエ後ヨコナデ/ナナメ ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	金色ウンモ 含む	復元口径: 39.2cm
	49	7533他	E-2	III	31.296 ~31.313	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	ヨコナデ	摩滅により不明	橙(5YR7/8)	橙 (7.5YR7/6)	-	
	50	9452他	F-3	II	31.350~ 31.366	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰褐 (7.5YR5/2)	金色ウンモ 含む	
	51	6559	G-4	II	31.451	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	ヨコナデ	ヨコナデ/ナナメナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	金色ウンモ 含む	
	52	6713	G-4・5	II	31.297~ 31.563	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	ヨコナデ/タテハケメ・タテナ デ	ヨコナデ(一部ハケメ状)/ナナ メ工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/8)	金色ウンモ 含む	復元口径: 24.8cm
	53	12184	D-3	II	31.297	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	摩滅により不明	工具ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	-	底径: 6.8cm
	54	12602	D-3	II	31.185	弥生中期	山ノ口II 式	甕	-	ミガキ状の丁寧なナデ	ナデ	黒褐 (10YR3/1)	浅黄 (2.5Y7/4)	金色ウンモ 含む	底径: 7.8cm
	55	5355	F-3	II	31.425	弥生中期	山ノ口II 式	壺	-	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (7.5YR6/6)	灰黄 (2.5Y6/2)	金色ウンモ 含む	復元口径: 24.6cm
	56	15337	F-6	II	31.274	弥生中期	山ノ口II 式	壺	-	ヨコナデ/ナナメナデ	ヨコナデ/ユビオサエ後ナナメ ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	-	復元口径: 11.6cm
16	57	15320他	G-6	II	31.420~ 31.476	弥生中期	山ノ口II 式	壺	-	ヨコナデ/タテミガキ	摩滅により不明	赤(10R5/6)	暗黄 (2.5Y5/2)	-	復元口径: 14.8cm 赤彩土器
	58	11597他	SI19	埋土	31.237~ 31.345	弥生中期	山ノ口II 式	壺	-	ヨコミガキ	摩滅により不明	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰黄褐 (10YR6/2)	金色ウンモ 含む	
	59	20025	K-9	II	31.699	弥生中期	山ノ口II 式	壺	-	ヨコミガキ	ヨコナデ	赤(10R5/8)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	-	復元口径: 13.8cm 赤彩土器
19	60	7753	F-3	III	31.207	弥生中期	山ノ口II 式	鉢	-	ヨコナデ/タテ・ナナメナデ	ヨコナデ/タテナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	-	復元口径: 23.8cm
	61	26051他	SI30	埋土	31.278~ 31.654	古墳前期	東原式	甕	-	タテハケメ後ヨコナデ/タテハ ケメ後ナデ/タテナデ	ヨコハケメ後ヨコナデ/ナナ メ・タテナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙(5YR6/8)	金色ウンモ 含む	復元口径: 32.8cm
	62	24602他	SI30	埋土	31.338	古墳前期	東原式	甕	-	タテハケメ後一部ヨコナデ/縦 斜ハケメ	ヨコナデ/ナナメハケメ後一部 ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	-	復元口径: 26.0cm
	63	一括	SI30	土坑内	-	古墳前期	東原式	鉢	-	タテ工具ナデ	タテナデ	橙(5YR6/6)	黒褐 (10YR3/1)	-	底径4.1cm
	64	21178	SI30	埋土?	31.487	古墳前期	東原式	小型壺	-	細かいナナメハケメ後ヨコナデ /ヨコナデ・ナデ	ユビオサエ後ヨコナデ/タテナ デ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	-	
	65	18502	SI30	埋土?	31.767	古墳前期	東原式	壺	-	摩滅により不明	工具痕あり	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	砂粒を多量 に含む	口径10.7cm 都城盆地部搬入品?
22	66	26053	SI30	埋土	31.316	古墳前期	東原式	鉢	-	ヨコナデ/ナナメハケメ後タテ ナデ	ヨコハケメ/タテナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	-	口径14.8cm
	69	15921他	SI10	床着	30.400~ 30.488	古墳後 ~終末期	笹貫式	甕	3類	ヨコナデ/ヨコナデ後一部タテ ナデ・ミガキ	ヨコナデ/タテ・ナナメナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)	-	
	70	15920他	SI10	床着 他	30.404~ 30.563	古墳後 ~終末期	笹貫式	甕	-	タテミガキ/タテナデ	胴: ヨコ工具ナデ後一部タテミ ガキ 脚: タテナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい赤褐 (5Yr5/4)	金色ウンモ 含む	
	71	15929	SI10	床着	30.478	古墳後 ~終末期	笹貫式	甕	-	ヨコナデ	胴: ヨコ工具ナデ 脚: ヨコナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	金色ウンモ 含む	底径: 6.4cm
	72	10443	SI10	埋土?	31.185	古墳後 ~終末期	笹貫式	甕	-	胴: ナデ・ヨコナデ 底: ナデ	工具ナデ後ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/8)	-	底径: 7.4cm
	73	16397	SI10	土坑 内?	30.400	古墳後 ~終末期	笹貫式	甕	-	胴: ナナメナデ・ナデ 底: 木葉痕	工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR6/8)	-	底径: 6.0cm
	74	15665	SI10	埋土	30.611	古墳後 ~終末期	笹貫式	壺	-	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコナデ/ナナメナデ	褐灰 (10YR4/1)	橙 (7.5YR6/6)	-	
	75	12850	SI10	埋土	31.184	古墳後 ~終末期	笹貫式	壺	-	タテミガキ/ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	-	
25	76	16275	SI10	床着	30.429	古墳後 ~終末期	笹貫式	坏	1類	ヨコナデ/ミガキ	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	-	口径: 8.3cm
	77	15403	SI10	埋土	30.915	古墳後 ~終末期	笹貫式	高坏	-	タテミガキ	タテナデ	赤(10R4/8)	灰黄褐 (10YR5/2)	-	赤彩土器
	78	12841	SI10	埋土	31.046	古墳後 ~終末期	笹貫式	坏	1類	ナデ	ミガキ	橙(5YR6/8)	黒褐 (10YR3/1)	-	
	81	3043他	SI11	埋土	29.927~ 30.332	古墳後 ~終末期	笹貫式	甕	1類	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ	ヨコ・ナナメ工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	-	復元口径: 18.2cm
	82	2739	SI11	埋土	-	古墳後 ~終末期	笹貫式	甕	4類	ヨコナデ/ナデ/ナナメナデ	ヨコナデ/タテ工具ナデ	橙(5YR6/8)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	-	復元口径: 18.0cm
	83	1168他	SI11	埋土	30.089~ 30.212	古墳後 ~終末期	笹貫式	甕	1類	胴: ヨコナデ/ナデ/ヨコ・ナナ メナデ/タテ工具ナデ/ユビオサ エ後タテナデ 底: ナデ	タテ工具ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR7/8)	赤色粒わず かに含む	底径: 7.5cm

第8表 土器・土製品観察表(3)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選標	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
25	84	3038	SI11	床着	30.168	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	4類	ナナムエナデ/ナナムナデ/ユ ビオサエ後タテナデ/ヨコナデ	胴：一部ユビオサエ後ヨコナデ /ナナムエナデ(ハケメ状) 脚：ユビオサエ後タテミガキ・ タテナデ/ナナムナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)		口径：19.5～19.0cm 復元底径：10.5cm 器高：28.2cm
	85	1172他	SI11	埋土	30.014～ 30.187	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ヨコ・ナナムエナ デ/ヨコナデ/タテナデ	ヨコナデ/ヨコエナデ/タテ工 具ナデ	淡黄 (2.5Y8/4)	黄橙 (10YR8/6)		口径：24.9cm
	86	3232他	SI11	埋土	29.971～ 29.987	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ナナムエナデ/ナ ナムナデ	ヨコナデ/ヨコエナデ/タテ工 具ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)		復元口径：24.4cm
26	87	3007	SI11	床着	30.278	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ナナムエナデ後一 部ミガキ	ヨコナデ/ナナムエナデ後タ テナデ/ナナムエナデ/タテ工 具ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)		口径：18.0cm
	88	2960	SI11	床着	30.162	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ヨコエナデ/タテ工 具ナデ	ヨコナデ/タテエナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)		口径：21.8～20.4cm
	89	1440他	SI11	床着	30.128～ 30.248	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	5類	ユビオサエ後ヨコナデ/ハケ メ状タテエナデ/タテエナデ 後ヨコエナデ	ヨコナデ/ハケメ状タテエナ デ/タテエナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	橙(5YR7/8)		口径：21.2～20.4cm
	90	2742	SI11	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴：エナデ後ナデ 脚：ヨコナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙(5YR6/8)		復元底径：10.0cm
	91	1444他	SI11	埋土	30.044～ 30.304	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	ヨコナデ/ナナムエナデ/ナ ナムエナデ(一部ケズリ状)	ヨコナデ/ユビオサエ後ナデ/ ナナムエナデ/ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		
	92	1572	SI11	埋土	30.135	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)		
	97	3274他	SI12	床着	29.950～ 30.025	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/ヨコ・ナナムエナ デ/ヨコナデ	ヨコナデ/ユビオサエ後ナナム エナデ/ナナム・ヨコナデ	橙(5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：21.6cm
30	98	2365	SI12	埋土	29.982	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)		
	99	2363他	SI12	床着	29.948～ 30.026	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテミガキ/ナデ 底：ナデ	エナデ	橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)		底径：8.5cm
	100	1640他	SI12	埋土	30.093～ 30.095	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ヨコナデ・ナデ 底：木葉痕	エナデ	明黄褐 (10YR7/6)	黄橙 (10YR8/6)		底径：8.8cm
	101	3229	SI12	埋土	30.068	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコ・ナナムミガキ	ヨコ・ナナムミガキ	黄灰 (2.5Y4/1)	黄灰 (2.5Y4/1)		口径：11.4cm 器高：6.3cm
	102	1624他	SI12	床着	30.055～ 30.098	古墳後 ～終末期	篋貫式	小型壺	-	ヨコナデ/ヨコエナデ一部 ミガキ	ヨコナデ/ヨコエナデ一部 ミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元口径：8.1cm 器高：7.0cm
	103	1656	SI12	埋土	30.083	古墳後 ～終末期	篋貫式	小型壺	-	タテナデ/ヨコナデ/ナナム ナデ	摩滅により不明	明黄褐 (10YR7/6)	黄橙 (10YR8/6)		
	112	3337他	SI13	埋土	29.992～ 30.350	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ/タテナデ	ヨコナデ/ヨコエナデ後タ テナデ/タテ・ナナムナデ	橙(5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)		復元口径：28.6cm
32	113	299他	SI13	埋土?	30.219～ 30.344	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	エナデ/ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		復元底径：12.0cm
	114	3341他	SI13	埋土	29.970～ 30.022	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテエナデ/ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄褐 (10YR6/2)		底径：10.6cm
	115	3338他	SI13	埋土	30.095～ 30.319	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ/ナナムエナデ/タ テエナデ(一部ケズリ状)/丁 寧なタテナデ(ミガキ状)	ヨコエナデ後一部ヨコミガ キ/タテエナデ後ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	金色ウソモ 含む	復元口径：(21.0cm)
	116	3315他	SI13	埋土	29.968～ 30.315	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/丁寧なタテエナ デ(ミガキ状)	ヨコナデ/ヨコエナデ/ハケ メ状エナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙(5YR6/6)		復元口径：19.4cm
	117	261他	SI13	埋土?	30.300～ 30.331	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテエナデ/ヨコナデ 底：ユビオサエ	ナナムエナデ	明赤褐 (5YR5/6)	褐灰 (10YR4/1)		復元底径：7.6cm
	118	3311他	SI13	埋土	30.013～ 30.328	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：丁寧なタテエナデ(ミ ガキ状)/タテエナデ/エナ デ後ヨコナデ 底：木葉痕	ハケメ状エナデ/ヨコエナ デ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	橙(5YR6/6)		底径：8.2cm
	120	1681他	SI14	床着 他	30.078～ 30.094	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ナデ後タテエナデ/タ テナデ 底：ナデ	エナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)		底径：9.4cm
121	1619	SI14	床着 他	30.084～ 30.126	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	ナデ/タテエナデ後ナデ	ナナムエナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)			
37	124	1701他	SI15	埋土	29.741～ 30.326	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ	ユビオサエ後ヨコ・ナナム エナデ/エナデ後ヨコナデ	淡黄 (2.5YR8/4)	明黄褐 (10YR7/6)		復元口径：57.4cm
	125	1771他	SI15	埋土	29.783～ 29.787	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ナデ/ヨコナデ/タテナデ	ナナムエナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	金色ウソモ 含む	
	126	3010	SI15	床着	29.687	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/ナデ・ヨコナデ/ヨ コナデ	ヨコナデ/ナナムエナデ・ナ デ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元口径：22.2cm
	127	1749	SI15	埋土	29.770	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい橙 (5YR6/4)		
	128	122	SI15	埋土?	30.177	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ナナムエナデ/ヨコナデ	ナナムエナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)		
	129	1796	SI15	埋土	29.901	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテナデ/ユビオサエ後ヨ コナデ	胴：タテエナデ 脚：ナナムエナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙(5YR6/6)		
	130	1728他	SI15	埋土	29.718～ 29.734	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ/ナナムエナデ/ヨ コナデ 後一部ナナムエナデ	胴：ヨコエナデ 脚：ユビオサエ/ヨコナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)		底径：9.4cm

第9表 土器・土製品観察表(4)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
37	131	1392他	SI15	埋土	29.716~ 29.809	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ後タテナデ 底:ナデ	ナナメ工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙(5YR6/6)		底径:8.0cm
	132	2219	SI15	埋土	29.830	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ/ナデ 底:ナデ	工具ナデ後タテナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/8)		底径:9.8cm
	133	1722他	SI15	埋土	29.738~ 29.891	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	工具タテナデ/ヨコナデ	タテ工具ナデ・丁寧なヨコナデ (ミガキ状)	橙(5YR6/6)	灰黄褐 (10YR5/2)		底径:8.0cm
	134	2228	SI15	埋土	29.919	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ/タテ工具ナ デ後タテナデ・ヨコナデ 底:ナデ	丁寧なタテナデ	黄橙 (10YR8/8)	黒褐 (10YR3/1)		底径:9.4cm
38	135	54	SI15	埋土?	30.263	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ/ヨコナデ 底:木葉痕	ナナメ工具ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR7/8)	白色砂粒多 く含む	底径:9.9cm
	136	1710他	SI15	埋土	29.736~ 29.904	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ/ヨコナデ 底:木葉痕	ナナメ工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)		底径:9.4cm
	137	1397	SI15	埋土	29.757	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ/ナデ 底:木葉痕	タテ工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)		底径:8.8cm
	138	1737他	SI15	埋土	29.759~ 30.062	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ/タテナデ/摩滅により 不明一部タテナデ	ヨコナデ/ナデ	橙(5YR7/8)	明黄褐 (10YR7/6)		
	139	一括	SI15	埋土	#N/A	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ナナメナデ	ナナメナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元底径:5.0cm
	140	2182他	SI15	埋土	29.747~ 29.813	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	胴:ヨコナデ/タテケズリ(一部 ミガキ状)/ユビオサエ後タテナ デ 底:木葉痕	ヨコナデ/タテ・ナナメ工具ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)		底径:8.5cm
	141	1713	SI15	埋土	29.719	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ヨコナデ/ヨコミガキ	ナナメ・ヨコナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)		
	142	1703	SI15	埋土	29.765	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)		
	143	477他	SI15	埋土?	30.063~ 30.068	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴:ヨコナデ後タテミガキ/タ テ工具ナデ後タテ・ナナメミガ キ/タテ工具ナデ 底:ナデ	タテ・ナナメ工具ナデ後タテ・ナ ナメミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/8)		口径:12.6cm 底径:6.6cm 器高:9.0cm
	144	1751	SI15	埋土	29.774	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴:ヨコミガキ/ヨコナデ・ヨ コミガキ 底:木葉痕	ヨコナデ/丁寧なナナメナデ/ナ ナメナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR6/8)		口径:18.6cm 底径:10.4cm 器高:8.7cm
	145	1706	SI15	埋土	29.749	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコナデ/ナナメナデ後一部タ テミガキ	橙(5YR7/8)	橙(5YR6/6)		復元口径:9.8cm
	146	2198他	SI15	埋土	29.753~ 29.889	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	ハケム状ナナメ工具ナデ・ナ ナメナデ	ハケム状ナナメ工具ナデ・ナ ナメナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/3)		復元口径:14.0cm
39	147	2221	SI15	埋土	29.894	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコナデ/ヨコ・ナナメミガキ	丁寧なヨコナデ後ナナメミガキ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい褐 (7.5YR5/3)		復元口径:10.4cm
	148	2215	SI15	埋土	29.826	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	ヨコ・ナナメミガキ	丁寧なナデ・ミガキ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (7.5YR7/6)	頁岩円礫含 む	復元口径:13.0cm 宮崎平野部搬入品?
	149	3246	SI15	埋土	29.645	古墳後 ~終末期	篋貫式	高坏	-	ヨコミガキ/タテミガキ	胴:ヨコミガキ 脚:ユビオサエ/ヨコナデ	黒褐 (2.5Y3/1)	灰黄 (2.5Y6/2)		
	150	2379	SI15	埋土	29.720	古墳後 ~終末期	土師器	高坏	-	タテミガキ/ヨコナデ	ヨコナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (7.5YR7/6)	赤色粒含む	復元底径:8.6cm 宮崎平野部搬入品?
	151	1741他	SI15	埋土	29.770~ 29.871	古墳後 ~終末期	篋貫式	小型壺	-	タテナデ/摩滅により不明	タテナデ/ユビオサエ後ヨコナ デ/タテ工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/4)		
42	161	2444他	SI16	埋土	30.065~ 30.153	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコ・ナナメナデ/ヨコナデ/ヨ コ・ナナメナデ/タテナデ	ユビオサエ後ヨコナデ/ヨコナ デ・ナナメナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		復元口径:21.0cm
	162	2897他	SI16	床着 他	29.901~ 30.273	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/タテナデ	ナナメヨコナデ/ユビオサエ後 タテナデ/ヨコナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR7/8)		復元口径:22.2cm
	163	2643他	SI16	埋土	30.080~ 30.087	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/ユビオサエ後ヨコナ デ/ヨコ工具ナデ/タテミガキ	ヨコナデ/タテ工具ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/8)		復元口径:25.2cm
	164	2304他	SI16	埋土	30.121~ 30.127	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコ・ナナメ工具ナデ/ヨコナ デ/タテナデ	ヨコ工具ナデ(一部ミガキ状)	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	金色ウンモ 含む	復元口径:19.8cm
	165	2019他	SI16	埋土	30.195~ 30.242	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコ工具ナデ(ミガキ状)/ナ ナメナデ	ヨコ・ナナメ工具ナデ(一部ミ ガキ状)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)		復元口径:25.6cm
	166	1295他	SI16	埋土	30.077~ 30.235	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコ・ナナメ工具ナデ・ナデ/ ヨコナデ	ヨコナデ/ナナメ・タテ工具ナ デ	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)		口径:19.8~18.0cm
43	167	1314他	SI16	埋土	30.147~ 30.316	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/ナデ後部分的に丁寧 なタテナデ	ヨコナデ/タテ工具ナデ/ユビオ サエ後ヨコナデ/ナナメ工具ナ デ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	明黄褐 (10YR7/6)		復元口径:24.2cm
	168	1809他	SI16	埋土	30.045~ 30.258	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	胴:ヨコナデ/タテナデ/ヨコナ デ/タテナデ/ヨコナデ 底:木葉痕一部ナデ	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		口径:22.8~21.6cm 底径:7.8~7.2cm 器高:24.6cm
	169	2069他	SI16	埋土	30.048~ 30.081	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコ・ナナメミガキ	黒褐 (7.5YR3/1)	明赤褐 (5YR5/6)	金色ウンモ 含む	
	170	1906他	SI16	埋土	30.047~ 30.218	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ナナメナデ	ユビオサエ(部分的)後工具ナ デ・ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		口径22.9~21.2cm
	171	2473他	SI16	埋土	30.025~ 30.137	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ナナメナデ/ヨコナ デ/ナナメナデ	ヨコナデ/ナデ/ユビオサエ後/ タテナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		復元口径:26.0cm
	172	2609他	SI16	埋土	30.026~ 30.046	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ	ナナメナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		口径:25.2cm
44	173	1944他	SI16	埋土	30.013~ 30.207	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ユビオサエ後ナデ/ナ デ	にぶい橙 (5YR7/4)	明黄褐 (10YR6/6)		口径:26.8cm
	174	3130他	SI16	埋土	30.143~ 30.329	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	胴:丁寧なタテナデ/タテナ デ(ケズリ状)/ナデ 底:ナデ	タテナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙(5YR6/6)		底径:8.4cm
	175	1857他	SI16	埋土	30.057~ 30.085	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/タテナデ(一部ケズリ 状)	ヨコナデ/ナナメナデ/ナナメ工 具ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (7.5YR7/6)		口径:20.0cm

第10表 土器・土製品観察表(5)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選標	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
44	176	2737他	SI16	埋土	29.971~ 30.013	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ユビオサエ後ナデ(一 部ミガキ状)	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		口径: 22.6cm
	177	2523他	SI16	埋土	29.980~ 30.055	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ユビオサエ?/ナメ ナデ (一部ミガキ状)	ヨコナデ/ヨコ・ナメナデ/ユ ビオサエ後ヨコナデ/ヨコナデ/ ナメナデ (ケズリ状)	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)		
	178	1889他	SI16	埋土	30.003~ 30.065	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコ・ナメナデ/タテナデ/ヨ コナデ/ナデ後ミガキ状のナデ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ/ハケメ 後ヨコ工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	金色ウソモ 含む	口径: 20.6cm
45	179	2140他	SI16	埋土	29.986~ 30.054	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	口・胴: ヨコナデ/ナメ工具 ナデ/ナメナデ/ヨコナデ後タ テナデ 脚: タテナデ	口・胴: ヨコナデ/ユビオサエ 後ナメ工具ナデ/ナメ工具 ナデ 脚: ヨコナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	金色ウソモ 含む	口径: 27.2~25.4cm
	180	1317他	SI16	埋土	30.057~ 30.297	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	胴: ヨコナデ/タテナデ/タテナ デ(一部ケズリ状)/ユビオサエ 後ヨコナデ 底: 木葉痕後ナデ	工具ナデ後ヨコナデ/ユビオサ エ後ヨコナデ/タテナデ/工具 ナデ	にぶい黄 (7.5YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)		口径: 19.8cm 底径: 8.4~8.0cm 器高: 26.9cm
	181	2949	SI16	埋土	30.026	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ	ヨコナデ/ナメ工具ナデ後タ テナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	明黄褐 (10YR7/6)		
	182	1936	SI16	埋土	30.289	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコ・ナメナデ/ヨコナデ後 タテナデ	ハケメ状工具ナデ後ヨコナデ/ タテナデ(一部ミガキ状)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	褐灰 (7.5YR4/1)		
	183	1239他	SI16	埋土	30.029~ 30.172	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ/ヨコ・ナメ工具ナ デ/ヨコナデ/ヨコナデ後タテ ミガキ	ヨコナデ/ナメ工具ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR4/4)		
	184	1838他	SI16	埋土	30.014~ 30.154	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ/タテナデ(一部ケズリ 状)	ヨコナデ/ユビオサエ後ヨコナ デ/ハケメ後ヨコ工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)		復元口径: 26.5~ 25.0cm
46	185	3052他	SI16	埋土	30.197~ 30.270	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ/ユビオサエ後ヨコナ デ/ナメタテナデ	ヨコナデ/ナメナデ後タテナ デ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)		復元口径: 23.6cm
	186	2546他	SI16	埋土	29.992~ 30.064	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	5類	ヨコナデ/タテナデ/ヨコナデ/ タテ工具ナデ(一部ケズリ状)	ユビオサエ後ヨコナデ/ヨコ工 具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		口径19.4~19.0cm
	187	1891	SI16	埋土	30.041	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	5類	ヨコナデ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ後タ テナデ	橙(5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)		
	188	2686他	SI16	埋土	29.986~ 30.033	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	5類	ヨコナデ/ナメナデ	ヨコナデ/ヨコケズリ	黄橙 (10YR8/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		復元口径: 17.2cm
	189	2624他	SI16	埋土	30.106	古墳後 ~終末期	土師器	甕	6類	ヨコナデ/タテナデ	ヨコナデ/タテナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	赤色粒わず かに含む	復元口径: 18.8cm 宮崎平野部搬入品
	190	3139他	SI16	埋土	30.072~ 30.240	古墳後 ~終末期	土師器	甕	6類	タテケズリ後ヨコナデ/タテケ ズリ	ヨコナデ/ナメナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元口径: 24.0cm 宮崎平野部搬入品?
	191	2094他	SI16	埋土	29.978~ 30.104	古墳後 ~終末期	土師器	甕	6類	ヨコナデ/タテ工具ナデ/タテ キ/ナデ	ヨコナデ/タテナデ/ヨコナ デ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黄(2.5YR8/6)	頁岩円礫多 く含む	口径: 18.0cm 器高: 32.7cm 宮崎平野部搬入品
	192	1217他	SI16	埋土	29.973~ 30.276	古墳後 ~終末期	土師器	甕	6類	ヨコ・ナメナデ	ヨコナデ	橙(5YR7/8)	橙 (2.5YR8/8)	赤色粒・頁 岩円礫含む	口径: 23.7cm 宮崎平野部搬入品
	193	1993他	SI16	埋土	30.038~ 30.176	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ナメ・ヨコナデ後一部タテ ミガキ/ユビオサエ後ヨコナデ/ ヨコナデ	胴: 工具ナデ後ヨコ・ナメナ デ/ユビオサエ 脚: 工具ナデ後ナデ/ヨコナ デ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)		復元底径: 11.6cm
	194	2105他	SI16	埋土	29.938~ 30.110	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ユビオサエ後ヨコナデ/ヨコ 工具ナデ/ヨコナデ	胴: 工具ナデ 脚: ヨコナデ・ヨコ工具ナ デ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)		底径: 11.0cm
47	195	3163他	SI16	埋土	30.067~ 30.104	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	丁寧なヨコナデ/タテミガキ	胴: タテナデ/ユビオサエ 脚: ヲビオサエ後ヨコナデ/ ヨコナデ	明黄褐 (10YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/4)		復元底径: 11.2cm
	196	1976他	SI16	埋土	29.952~ 30.034	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ナデ/ヨコナデ	胴: タテナデ 脚: 工具ナデ後ナデ	橙 (7.5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)		
	197	2668他	SI16	埋土	30.040	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	タテナデ/ユビオサエ後ヨコ ナデ	胴: ナメ工具ナデ 脚: ヨコナデ・ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)		
	198	2338他	SI16	埋土	30.077~ 30.211	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ後タテ工具ナデ/ヨ コナデ	丁寧なヨコナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)		復元底径: 8.6cm
	199	2890	SI16	床着?	29.978	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: タテナデ 底: ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	灰黄褐 (10YR4/2)		復元底径: 8.2cm
	200	2451	SI16	埋土	30.000	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: ヲビオサエ後タテナ デ 底: ナデ?	タテ工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		底径: 7.2cm
	201	3104他	SI16	埋土	30.078~ 30.093	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: タテ工具ナデ後タテナ デ 底: ナデ	ヨコ工具ナデ後ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)		底径: 8.8cm
	202	1282他	SI16	埋土	30.030~ 30.060	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: タテ工具ナデ/ヨコナ デ 底: 木葉痕	ヨコ工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙(5YR6/6)		底径: 9.2cm
	203	1887他	SI16	埋土	30.107~ 30.127	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: タテ工具ナデ/ユビオサ エ後タテナ 底: 木葉痕 (ややナデ消し)	タテナデ・ヨコナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		底径: 8.5cm
	204	2514	SI16	埋土	30.014	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: タテナデ・ヨコナ デ 底: ナデ	ハケメ状工具ナデ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙(5YR7/6)		底径: 8.4cm
	205	2572他	SI16	埋土	30.049~ 30.084	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: ヨコナデ後タテ工具ナ デ/ 丁寧なナ 底: 木葉痕	工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)		底径: 8.6cm
	206	2035	SI16	埋土	30.124	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: タテ工具ケズリ/ヨコナ デ 底: 木葉痕 (中央ややナデ消 し)	ナメ工具ナデ後タテナ デ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)		底径: 7.6cm
	207	1232他	SI16	埋土	30.011~ 30.127	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴: タテナデ/ヨコナ デ 底: 木葉痕	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙(5YR7/6)		底径: 10.6cm
	208	2594	SI16	埋土	30.035	古墳後 ~終末期	土師器	甕	-	胴: タテ工具ナ デ 底: 木葉痕	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (10YR6/6)	頁岩円礫含 む	復元底径: 7.8cm 宮崎平野部搬入品

第11表 土器・土製品観察表(6)

押図 No.	報告 No.	取上No.	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
48	209	1927他	SI16	埋土	30.055~ 30.194	古墳後 ~終末期	篋貫式	瓶	-	タテ工具ナデ後ヨコナデ/タ テ・ナナメ工具ナデ(一部ミガ キ状)/タテケズリ	ヨコナデ/タテナデ/ヨコナデ後 工具ナデ(一部ミガキ状)	橙(5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)		口径: 23.8cm 底径: 8.2cm 器高: 25.7cm
	210	2151他	SI16	埋土	29.991~ 30.133	古墳後 ~終末期	篋貫式	瓶	-	ヨコナデ/タテナデ	ヨコナデ後タテナデ/ヨコ工具 ナデ後タテナデ/ユビオサエ後 タテナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)		復元口径: 28.8cm 復元底径: 8.0cm 器高: 16.3cm
	211	1812他	SI16	埋土	30.172~ 30.339	古墳後 ~終末期	篋貫式	瓶	-	ヨコナデ/タテナデ/ヨコナデ/ ヨコ・ナナメナデ/工具ナデ/ナ デ	ヨコナデ/ナデ/工具ナデ(ミガ キ状)	黄橙 (10YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		口径: 27.0cm~ 26.8cm 底径: 8.8cm~8.6cm 器高: 21.4cm
	212	1897他	SI16	埋土	30.101~ 30.177	古墳後 ~終末期	篋貫式	瓶	-	ヨコナデ/ユビオサエ後タテナ デ/ヨコナデ/タテナデ	ヨコナデ/ユビオサエ後ナナメ 工具ナデ/ナナメ工具ナデ/タテ ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径: 25.6cm
	213	2534他	SI16	埋土	30.013~ 30.072	古墳後 ~終末期	篋貫式	瓶	-	タテナデ/ヨコナデ	タテ工具ナデ/ヨコナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		底径: 7.6cm
49	214	1299他	SI16	埋土	30.142~ 30.332	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	丁寧なナデ・一部ミガキ状	ユビオサエ後ヨコナデ/ヨコナ デ	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	金色ウンモ 多く含む	
	215	1912他	SI16	埋土	29.990~ 30.178	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	丁寧なナデ(大部分摩滅)	ヨコナデ(大部分摩滅)	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y8/4)		頸部径: 16.0cm
	216	2013他	SI16	埋土	30.031~ 30.252	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ナナメ丁寧な工具ナデ/タテナ デ	摩滅により不明	浅黄橙 (10YR8/4)	黄橙 (10YR8/6)		底径: 4.4cm
	217	2757	SI16	埋土	28.378	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ヨコ・ナナメナデ/ナデ	摩滅(ナデ?)	明赤褐 (5Yr5/6)	橙(5YR6/6)		
	218	2134他	SI16	埋土	30.060~ 30.157	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	胴: タテ工具ナデ(一部ミガキ 状) 底: ナデ	工具ナデ(一部ミガキ状)	明黄褐 (10YR7/6)	橙(5YR6/8)		底径: 7.4cm
	219	217他	SI16	埋土?	30.190~ 30.322	古墳後 ~終末期	篋貫式	高坏	-	ヨコナデ/ナナメナデ/タテ工具 ナデ後ヨコナデ/ヨコナデ	胴: ヨコナデ/ヨコナデ後一部 ミガキ 脚: ヨコナデ後一部タテナデ/ ユビオサエ	橙(5YR6/8)	橙 (7.5YR6/6)		復元口径: 18.6cm 復元底径: 11.3cm 器高: 13.8cm
	220	1069	SI16	埋土?	30.175	古墳後 ~終末期	篋貫式	高坏	-	風化のため不明	胴: 風化のため不明 脚: 風化のため不明	黄橙 (10YR8/8)	黄橙 (10YR8/8)		復元底径: 8.4cm
221	1940他	SI16	埋土	30.160~ 30.217	古墳後 ~終末期	篋貫式	高坏	-	ヨコナデ/タテナデ(一部ミガキ 状)後ヨコナデ/ヨコナデ	胴: ヨコナデ 脚: ヨコナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR7/8)		口径: 20.0cm 復元底径: 10.5cm 器高: 14.2cm	
50	222	1837他	SI16	埋土	30.057~ 30.293	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴: ヨコミガキ/ヨコナデ 底: ナデ	ヨコミガキ/丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)		口径: 21.2cm 底径: 7.0cm 器高: 11.5cm
	223	2348	SI16	埋土	30.138	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴: タテナデ/ユビオサエ後ナ デ 底: ナデ	ミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)		復元底径: 8.0cm
	224	3171	SI16	埋土	30.107	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴: タテ工具ナデ後ナデ/ヨコ ナデ 底: ナデ	丁寧なナデ(ミガキ状)	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)		復元底径: 9.0cm
	225	3103	SI16	埋土	30.152	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴: ヨコナデ/ケズリ状のタテ 工具ナデ 底: ナデ	ミガキ/工具ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)		口径: 11.9cm 底径: 7.9cm 器高: 7.1cm
	226	713	SI16	埋土?	30.203	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴: タテ・ナナメナデ/ユビオ サエ後タテナデ 底: ナデ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ/タテナ デ	明赤褐 (5Yr5/6)	明赤褐 (5Yr5/6)		口径: 9.3cm 底径: 5.4cm 器高: 7.6cm
	227	953他	SI16	埋土?	30.060~ 30.130	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴: ヨコナデ/ナナメ工具ナデ/ ユビオサエ後ヨコナデ 底: ナデ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ後タテ ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	明黄褐 (10YR7/6)		口径: 13.4cm 底径: 7.0cm 器高: 9.8cm
	228	1883	SI16	埋土	30.215	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴: ユビオサエ後丁寧なタテ工 具ナデ(一部ミガキ状) 底: 丁寧な工具ナデ	ヨコナデ/タテナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		口径: 8.2cm 底径: 6.7cm 器高: 8.0cm
	229	2888他	SI16	埋土	29.877~ 29.881	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	胴: タテ工具ナデ 底: ナデ	ヨコナデ一部ナデ/ユビオサエ 後ヨコナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	黄橙 (7.5YR8/8)	頁岩円礫多 く含む	復元口径: 11.4cm 復元底径: 7.6cm 器高: 4.2cm 宮崎平野部搬入品?
	230	3083	SI16	床着	29.952~ 30.069	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	ヨコナデ/丁寧な工具ナデ(一部 ミガキ状)	丁寧なヨコナデ(一部ミガキ状)	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR7/8)	赤色粒含む	復元口径: 17.1cm 宮崎平野部搬入品?
	231	一括	SI16	埋土	-	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	ヨコナデ/ナナメ丁寧なナデ(一 部ミガキ状)	丁寧なヨコナデ(一部ミガキ状)	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	赤色粒含む	宮崎平野部搬入品?
	232	27068	SI16	埋土	30.017	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ナデ	丁寧なナデ(一部ミガキ状)	明黄褐 (10YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/4)		
	233	2627	SI16	埋土	30.006	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ミガキ・丁寧なナデ	ナデ後ミガキ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)		楕円形坏
	234	一括	SI16	埋土	-	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	頁岩円礫多 く含む	宮崎平野部搬入品
235	27067	SI16	埋土	30.046	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	丁寧なヨコナデ/ミガキ	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)			
236	3216	SI16	埋土	29.877	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ミガキ	丁寧なヨコナデ	にぶい赤褐 (5Yr5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)			
55	261	16787他	SI17	埋土	30.824~ 30.880	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	胴: ナナメナデ/ヨコナデ/ナデ 後部分的にタテミガキ/ナナメ ナデ/タテナデ後ヨコナデ 脚: ユビオサエ後ナデ/ヨコナ デ	ナナメケズリ後ヨコナデ/ナ メケズリ後一部タテミガキ/ミ ガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	金色ウンモ 含む	口径: 21.0~20.5cm 底径: 10.0~9.8cm 器高: 32.5cm
	262	16771他	SI17	床着他	30.740~ 30.894	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/タテ・ナナメミガキ	胴: ヨコナデ(一部ケズリ状)/ タテナデ(一部ケズリ状)後一部 タテミガキ 脚: ユビオサエ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)	金色ウンモ 含む	復元口径: 21.6cm
	263	16733他	SI17	埋土	30.745~ 30.828	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	4類	ナデ/ヨコナデ/タテ工具ナデ/ タテケズリ/タテナデ後ヨコナ デ/ヨコナデ	胴: ユビオサエ後ヨコナデ/丁 寧なタテナデ 脚: 一部ユビオサエ/工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		口径: 21.6cm 底径: 9.8cm 器高: 33.7cm

第12表 土器・土製品観察表（7）

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考	
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面			
55	264	16342	SI17	埋土	31.011	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ	ユビオサエ後ナデ	灰褐 (7.5YR5/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)			
	265	16604	SI17	埋土	30.958	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテナデ/ヨコナデ	胴：工具ナデ 脚：ユビオサエ後ヨコナデ/ヨ コナデ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)		復元底径：10.8cm	
	266	16715	SI17	埋土	30.836	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ナナメナデ	胴：工具ナデ 脚：ユビオサエ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	黄橙 (7.5YR7/8)		底径：10.4cm	
	267	20590	SI17	埋土	31.050	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ナデ 底：木葉痕	板状工具ナデ	褐灰 (7.5YR4/1)	褐灰 (10YR4/1)		底径：7.6cm	
56	268	16726他	SI17	床着	30.776～ 30.853	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコケズリ/ヨコナデ	タテナデ/ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙(5YR6/6)		復元底径：8.8cm	
	269	16191	SI17	埋土	31.103	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	ヨコミガキ	タテナデ/ヨコナデ	灰褐 (7.5YR5/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)			
	270	20562他	SI17	埋土	30.900～ 31.006	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	ヨコナデ後タテミガキ/ナナ ミガキ/タテミガキ	ヨコミガキ/ヨコナデ/タテナ デ/タテナデ後一部ヨコミガキ	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)		口径：12.6cm 底径：7.6cm 器高：22.3cm	
	271	16728	SI17	床着	30.800	古墳後 ～終末期	篋貫式	環	1類	ヨコ・ナナメナデ後部分的にミ ガキ	ヨコナデ後ナナメナデ/ヨコ ナデ後ミガキ	橙(5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：17.7cm 底径：4.6cm 器高：9.1cm	
	272	16286他	SI17	埋土	30.946～ 30.990	古墳後 ～終末期	篋貫式	環	1類	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		口径：9.3cm 底径：3.6cm 器高：4.6cm	
	273	16204	SI17	埋土	31.099	古墳後 ～終末期	土師器	環	2類	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコミガキ/ナナメミガキ	黄橙 (7.5YR7/8)	黄橙 (7.5YR7/8)		復元口径：11cm 宮崎平野部搬入品?	
	274	16550他	SI17	床着他	30.844～ 30.897	古墳後 ～終末期	篋貫式	環	1類	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコ・ナナメミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元口径：15.0cm 底径：6.0cm 器高：6.4cm	
	275	22060	SI17	床着	30.883	古墳後 ～終末期	篋貫式	環	1類	ヨコナデ/ヨコケズリ後ナデ・ タテミガキ/ミガキ・丁寧なナ デ	ヨコナデ後一部ヨコミガキ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	黄橙 (7.5YR7/8)		口径：12.7cm 復元底径：6.6cm 器高：9.0cm	
	276	22055	SI17	床着	30.664	古墳後 ～終末期	篋貫式	環	1類	胴：丁寧なヨコナデ 底：木葉痕	ヨコ・ナナメミガキ	灰黄 (2.5Y6/2)	浅黄 (2.5Y7/3)		復元底径：6.8cm	
	277	16386	SI17	埋土	31.022	古墳後 ～終末期	土師器	小型壺	-	ヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ/ヨコ ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	赤色粒多 含む	宮崎平野部搬入品?	
	278	9357他	SI17	埋土	31.028～ 31.147	古墳後 ～終末期	土師器	高環	-	摩滅により不明	胴：摩滅により不明 脚：摩滅により不明（ヨコナデ 痕あり）	黄橙 (7.5YR7/8)	黄橙 (7.5YR7/8)	赤色粒含 む	宮崎平野部搬入品?	
	279	16612	SI17	埋土	30.863	古墳後 ～終末期	篋貫式	高環	-	タテミガキ	摩滅により不明	褐灰 (10YR6/1)	褐灰 (10YR6/1)			
	60	293	10033他	SI18	埋土	30.918～ 31.289	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/タテ・ナナメミガキ後 一部タテナデ	ヨコミガキ・丁寧なヨコミガキ /ヨコミガキ後タテナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元口径：29.0cm
		294	17925他	SI18	埋土	31.106～ 31.172	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ユビオサエ後ヨコナデ/ナデ/タ テナデ/タテナデ後タテミガキ	ヨコナデ/ハケメ状ナナメ工 具ナデ後タテナデ	黄橙 (10YR8/6)	浅黄 (2.5Y8/4)		復元口径：20.8cm
295		13536他	SI18	埋土	31.077～ 31.252	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	胴：ナナメナデ/ヨコナデ/タテ ミガキ/ナナメナデ/ナナメケ ズリ/タテナデ後一部ヨコミガ キ 底：木葉痕後丁寧なナデ	ヨコナデ/ナナメナデ/ナナメケ ズリ/タテナデ後一部ヨコミガ キ	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)		復元口径：25.0cm 底径：9.0～8.5cm 器高：30.0cm	
61	296	23974他	SI18	埋土	30.818	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ナデ後タテミガキ	ヨコナメミガキ・ナナメナデ /摩滅により不明	橙(5YR6/8)	橙(5YR7/8)		復元口径：31.0cm 補修孔あり	
	297	23951他	SI18	埋土	30.753～ 30.857	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	タテ工具ナデ後ヨコナデ/ヨ コナデ/ナナメナデ	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	明黄褐 (10YR7/6)		復元口径：20.8cm	
	298	25840他	SI18	埋土	30.885～ 30.977	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	5類	ヨコナデ/タテ工具ナデ	ヨコナデ/ナナメ・タテナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：23.2cm	
	299	7669他	SI18	埋土	31.141～ 31.307	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ/ナナメナデ/ヨコナデ /タテナデ	ヨコナデ/ナナメナデ後タテナ デ	黄橙 (7.5YR7/8)	黄橙 (7.5YR7/8)		復元口径：23.8cm	
	300	13621他	SI18	埋土	31.316～ 31.353	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	強いヨコナデ/ナデ/ハケメ状 タテ工具ナデ	ヨコナデ/ハケメ状タテ工 具ナデ	橙(5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：20.0cm	
	301	13419他	SI18 SI20	床着他 埋土	30.607～ 31.304 30.924～ 31.397	古墳後 ～終末期	土師器	甕	6類	ヨコナデ/ハケメ状工具による ヨコナデ/ナデ後ヘラ状工具に よるナデ/タテナデ（一部ケズリ 状）	ヨコナデ/ハケメ状工具による ヨコナデ後一部タテナデ/ハケ メ状工具によるヨコナデ・一 部タテナデ	黄橙 (10YR8/6)	浅黄 (2.5Y8/4)		復元口径：21.6cm 宮崎平野部搬入品	
	302	17668他	SI18	埋土	31.174～ 31.238	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテナデ・タテミガキ/タテ工 具ナデ後ヨコナデ	胴：ナナメミガキ後一部ナデ 脚：ヨコナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)		底径：9.2cm	
62	303	23997	SI18	埋土	30.896	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴：タテ工具ナデ 脚：ナナメナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)		底径：9.9cm	
	304	25460	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴：ナナメ工具ナデ 脚：ヨコナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)			
	305	24677他	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテミガキ後ヨコナデ	ユビオサエ後ナナメナデ/ヨ コナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	金色ウ ンモ 含む	底径：11.4cm	
	306	17281他	SI18	埋土	31.063～ 31.188	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテミガキ 底：ナデ	タテ工具ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	明赤褐 (5YR5/6)		底径：7.7cm	
	307	25465	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ヨコ・ナナメナデ 底：ナデ	工具ナデ	浅黄 (2.5Y8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		底径：6.4cm	
	308	24661	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ナデ 底：木葉痕後ユビオサエ	ヨコ工具ナデ・ナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄 (2.5Y7/3)		底径：9.0cm	
	309	25608	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ヨコナデ・ナナメナデ 底：丁寧なナデ	タテ工具ナデ後タテナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)		底径：7.8cm	
	310	13617	SI18	埋土	31.352	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテ工具ナデ/タテ工 具ナデ後ヨコナデ 底：木葉痕後一部ナデ	タテ工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		底径：9.0cm	
	311	21351	SI18	埋土	31.003	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ヨコナデ 底：木葉痕	工具ナデ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黄橙 (7.5YR7/8)		底径：8.0cm	
	312	24655	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ヨコミガキ/ヨコナデ 底：木葉痕後ナデ	ヨコミガキ・ヨコナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/8)		底径：7.0cm	

第13表 土器・土製品観察表(8)

掛図 No.	報告 No.	取上No.	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考	
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面			
62	313	23181	SI18	埋土	30.813	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴: ナデ 底: 木葉痕	タテ工具ナデ後ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)		底径: 6.0cm	
	314	13576他	SI18	埋土	31.231~ 31.340	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴: タテ工具ナデ後ヨコナデ 底: 木葉痕一部ナデ消し	摩滅により不明一部ナデ	橙(5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)		復元底径: 8.0cm	
	315	22322他	SI18	埋土	30.693~ 30.723	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコミガキ・丁寧なヨコナデ/ ヨコナデ	丁寧なナメ・ヨコナデ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)		復元底径: 10.0cm	
	316	17025他	SI18	埋土	31.174~ 31.199	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ナメナデ後ヨコナデ/ヨコナ デ/タテミガキ・タテナデ/ヨコ ミガキ	ヨコナデ/ナメナデ/タテミガ キ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (10YR8/6)		復元口径: 28.0cm 復元底径: 8.0cm 復元器高: 22.0cm	
63	317	24644他	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	土師器	甕	-	タテミガキ後一部ナメナデ	丁寧なタテナデ	黄橙 (10YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)	赤色粒含む	復元底径: 8.4cm 宮崎平野部搬入品	
	318	25714他	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	土師器	甕	-	タテナデ/ケズリ	タテナデ/ナメナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	灰黄褐 (10YR5/2)	赤色粒含む	復元底径: 13.6cm 宮崎平野部搬入品	
	319	19581他	SI18	埋土	31.106~ 31.115	古墳後 ～終末期	土師器	甕	-	タテケズリ/ケズリ	タテ工具ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)	赤色粒・頁 岩円礫含む	復元底径: 12.0cm 宮崎平野部搬入品	
	320	23957	SI18	埋土	30.768	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	ヨコ・ナメミガキ・丁寧な ナデ	ヨコミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	褐灰 (10YR4/1)		復元口径: 19.0cm	
	321	23851他	SI18	埋土	30.894	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	右英多く含 む	復元口径: 11.4cm 都城盆地部搬入品?	
	322	24645他	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	タテミガキ/ヨコナデ/ヨコミガ キ	ユビオサエ後ヨコ・タテナデ/ヨ コ・ナメナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)			
	323	24903他	SI18	埋土	30.501	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	丁寧なヨコナデ後タテミガキ	ユビオサエ後ヨコナデ/ヨコ工 具ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	金色ウンモ 含む		
	324	24959他	SI18	埋土	30.416	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	タテミガキ/ヨコミガキ	タテ工具ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	灰白 (10YR8/2)			
	325	7712他	SI18	埋土	30.617	古墳後 ～終末期	篋貫式	鉢	-	胴: ヨコナデ/タテ・ナメミガ キ・ヨコナデ 底: ミガキ後工具による織状痕	ナメ工具ナデ/タテ工具ナデ 後部分的にヨコミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/8)		復元口径: 16.0cm 底径: 6.8~6.5cm 器高: 13.1cm	
	326	19463	SI18	埋土	31.332~ 31.399	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	胴: ヨコナデ/丁寧なタテ・ヨ コナデ/ユビオサエ後丁寧な タテナデ 底: ナデ	ヨコナデ/ヨコ・タテナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)		復元口径: 9.0cm 底径: 4.5cm 器高: 4.9cm	
	327	17024他	SI18	埋土	31.060	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	胴: ヨコミガキ/ナメナデ 底: 木葉痕後一部ナデ消し	ヨコミガキ後一部タテナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	褐灰 (10YR4/1)		復元口径: 10.2cm 底径: 6.2cm 器高: 5.0cm	
	328	21330他	SI18	埋土	31.078~ 31.197	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ナメミガキ	ヨコ・ナメミガキ	褐灰 (10YR4/1)	灰黄褐 (10YR5/2)		復元口径: 11.5cm 底径: 5.0cm 器高: 6.7cm	
	329	25764	SI18	埋土	30.908~ 31.045	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコミガキ	ヨコ・ナメミガキ	にぶい赤褐 (5YR5/3)	にぶい赤褐 (5YR5/3)		復元口径: 12.6cm	
	64	330	23978他	SI18	埋土	30.790	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	胴: ヨコミガキ 底: ミガキ	ヨコ・ナメミガキ	黄橙 (10YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		口径: 12.5cm 底径: 4.0cm 器高: 5.4cm
		331	25391他	SI18	床着	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	胴: ヨコ・ナメミガキ/ナ デ: ミガキ	ヨコ・ナメミガキ	黄橙 (10YR8/6)	橙(5YR7/6)		復元口径: 14.3cm 底径: 6.0cm 器高: 6.1cm
		332	19437他	SI18	埋土	31.070	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコナデ/ヨコミガキ	丁寧なヨコナデ/丁寧なナメ ナデ/ミガキ	黄橙 (10YR8/6)	黒褐 (2.5Y3/1)		復元口径: 13.4cm 底径: 6.0cm 器高: 7.5cm
333		17801他	SI18	埋土	31.095~ 31.119	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	2類	丁寧なヨコナデ・ヨコミガキ/ ケズリ	ヨコナデ/ヨコミガキ/ケズリ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径: 12.2cm 器高: 4.4cm	
334		19299	SI18	埋土	31.147	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコナデ・ヨコミガキ	ヨコナデ・ヨコミガキ/ミガキ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)		復元口径: 19.0cm 器高: 7.0cm	
335		20638	SI18	埋土	31.083	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	胴: ナメナデ・ナメミガキ 底: ミガキ	ヨコミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元底径: 4.8cm	
336		20981他	SI18	埋土	31.143	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	胴: ヨコ・ナメミガキ 底: 摩滅により不明	ヨコミガキ・ヨコナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)		底径: 7.0cm	
337		19663	SI18	埋土	31.131	古墳後 ～終末期	土師器	坏	2類	胴: タテミガキ 底: ミガキ	ヨコミガキ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (7.5YR7/6)	赤色粒含む	底径: 5.0cm 宮崎平野部搬入品	
338		16954	SI18	埋土	31.204	古墳後 ～終末期	土師器	高坏	-	ヨコナデ	胴: ミガキ 脚: ヨコナデ	黄橙 (10YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)		宮崎平野部搬入品	
339		26080他	SI18	貼床内 他	30.492	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	ヨコ・ナメミガキ	ヨコミガキ	灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)		復元口径: 12.4cm	
340		24874他	SI18	埋土	30.516	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	タテミガキ/ヨコナデ/ヨコミガ キ	胴: ナメミガキ 脚: ナメ・ヨコナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (10YR8/6)		復元底径: 10.0cm	
341		21548	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	ヨコミガキ	ナメミガキ	赤(10R5/8)	橙(5YR6/6)		口径: 16.0cm 赤彩土器	
342		25620	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	ナメミガキ	タテナデ	赤(10R4/8)	にぶい黄橙 (10YR6/4)		赤彩土器	
343		16996	SI18	埋土	31.194	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	回転ナデ/カキ目/摩滅により不 明	回転ナデ	橙(5YR7/8)	黄橙 (7.5YR7/8)		回転土師器	
70	390	一括	SI18	埋土	-	古墳後 ～終末期	ふいご 羽口	-	-	ナデ	ナデ	灰白 (2.5Y7/1)	橙 (5YR6/6)		内径: 1.6cm	
74	401	12367	SI19	埋土	30.099	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/タテ工具ナデ後ヨ コ・タテナデ	ヨコナデ/ユビオサエ後ナメ ナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄 (2.5Y7/4)		復元口径: 21.0cm	
	402	12341他	SI19	床着他	31.055~ 31.113	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ナメミガキ/ヨコナ デ/タテミガキ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ後一部 ナメミガキ/ハケメ状工具ヨ コナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)		復元口径: 28.8cm	
	403	13910	SI19	床着他	31.014~ 31.469	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	タテナデ後ヨコナデ/ヨコナ デ/タテナデ	ヨコナデ/ハケメ状ヨコ工具 ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径: 27.0cm	
	404	12342他	SI19	埋土	30.032	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	胴: ヨコナデ/タテ工具ナデ/ タテナデ 底: ナデ	ヨコナデ/摩滅により不明	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		復元口径: 29.4cm 復元底径: 6.4cm 復元器高: 18.1cm	

第14表 土器・土製品観察表(9)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
75	405	14803他	S119	床着	31.025~ 31.092	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	口・胴：ヨコナデ/ナナメナ 後タテミガキ/タテ工具ケズリ 後タテミガキ/タテ・ナナメ工 具ナデ(一部ケズリ状) 脚：ヨコナデ	口・胴：ヨコ・ナナメナデ/ヨ コナデ(一部ケズリ状)/工具ナ デ後ヨコナデ/タテ・ナナメナ デ 脚：ユビオサエ/ヨコナデ	にぶい 褐(7.5YR5/4)	明赤褐 (5Yr5/6)	金色ウンモ 含む	口径：32.6~32.3cm 復元底径：11.2cm 器高：31.9cm
	406	14585他	S119	床着他	31.037~ 31.098	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	口・胴：ヨコナデ/ナナメナ 後一部タテミガキ 脚：タテ工具ナデ後ナナメナ デ/ヨコナデ	口・胴：ヨコナデ/タテナ デ 脚：ユビオサエ後ヨコナデ/ヨ コナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	金色ウンモ 含む	口径：32.6~32.2cm 底径：13.3cm 器高：35.3cm
	407	12331他	S119 S120	埋土	31.023~ 31.194 31.051	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/タテ工具ナデ後ヨコ ナデ/ヨコナデ/ヨコ・ナナメナ デ	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ後タ テ・ナナメナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)		復元口径：28.0cm
76	408	27011	S119	床着他	31.092~ 31.698	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ナナメ工具ナデ/ヨコナデ/ナ メ工具ナデ後ナナメ・ヨコナ デ/ナナメナデ/ヨコ・タテミガ キ後一部タテナデ	部分的ユビオサエ後工具ナ デ	にぶい 橙(7.5YR6/4)	橙(5YR6/6)		口径：23.2cm
	409	14123他	S119	埋土	31.136	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/タテナデ/工具ナ デ後タテナデ/タテナデ/工具 ナデ	ヨコナデ/ユビオサエ後工具 ナデ後ヨコナデ/ナナメナ デ/ナナメ工具ナデ	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)	赤色粒含む	口径：24.1cm
	410	12829他	S119	埋土	31.090~ 31.110	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ナナメナデ後ヨコナデ/ヨコ ナデ/ミガキ状の丁寧なタテ ナデ	ヨコナデ/ヨコミガキ後一部 タテナデ	にぶい 褐(7.5YR5/4)	にぶい 褐(7.5YR5/3)	金色ウンモ 含む	復元口径：23.5cm
	411	11632他	S119	埋土	31.232~ 31.257	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	4類	口・胴：ヨコナデ/ナナメ工 具ナデ 脚：ヨコナデ	口・胴：ヨコナデ/ナナメ工 具ナデ後一部ナナメミガキ/ヨ コナデ 脚：ユビオサエ後ヨコナデ/ヨ コナデ	にぶい 黄橙(10YR7/4)	橙(5YR6/8)		復元口径：30.6cm 復元底径：9.0cm 器高：24.4cm
	412	12332他	S119	埋土	31.512	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ/ヨコ・タテナデ	胴：工具ナデ・ナ デ 脚：ヨコ工具ナデ/ナ デ	黄橙 (10YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		底径：11.8cm
	413	14343	S119	埋土	31.285	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテ工具ナデ/タテナ デ 底：木葉痕	タテナデ/タテ工具ナ デ	橙(5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	白色粒多く 含む	底径：8.0cm 都城盆地搬入品?
	414	12393他	S119	埋土	31.130	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴：ヨコナ デ 底：木葉痕	ハケメ工具ナデ後ナ デ	にぶい 黄橙(10YR7/4)	浅黄 (2.5y7/4)		底径：7.9cm
77	415	12400	S119	埋土	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	摩滅により不明/ヨコナ デ	摩滅により不明	浅黄 (2.5Y8/4)	浅黄 (2.5Y8/4)		復元口径：13.0cm
	416	14801	S119	床着他	31.015~ 31.110	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ナナメミガキ後ナナメ・ヨ コナデ/タテミガキ	ヨコミガキ後部分的にタテ ミガキ/ナナメミガキ後ナ ナメナデ	明赤褐 (5Yr5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	金色ウンモ 含む	
	417	12337他	S119	埋土	31.053~ 31.455	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	-	胴：ヨコナデ/ヨコ・タテ ナデ/タテケズリ 底：木葉痕をナデ消し	ヨコ・ナナメナデ/タテ ナデ(一部ケズリ状)	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		口径：15.6~14.6cm 底径：6.9~6.6cm 器高：10.0cm
	418	12402	S119	埋土	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	胴：ナデ後タテミガキ 底：ナデ	ナデ後ヨコミガキ	橙(5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：14.2cm 底径：6.6cm 器高：7.1cm
	419	13894	S119	床着	31.041	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	胴：ミガキ 底：ミガキ	工具ナデ後ミガキ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)		復元底径：7.7cm
	420	14802	S119	床着	31.051	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	胴：ヨコ・ナナメミガキ/タ テナ 底：木葉痕後ナデ消し	ヨコナデ/ヨコ・ナナメミ ガキ	黄(2.5Y8/6)	浅黄 (2.5Y8/4)		口径：12.4~12.0cm 底径：7.2cm 器高：5.0cm
	421	14335他	S119	埋土	31.134~ 31.695	古墳後 ~終末期	篋貫式	鉢	1類	ヨコナデ/ナナメミガキ	丁寧なヨコナデ/ナデ後部 ミガキ	にぶい 黄橙(10YR6/4)	にぶい 黄橙(10YR6/4)		復元口径：15.0cm
	422	14591他	S119	床着他	31.009	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコナデ/ユビオサエ後タ テナ デ	ヨコナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/8)		復元口径：12.2cm 器高：7.0cm
	423	14347	S119	埋土	31.092	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ミガキ	大部分摩滅・一部ミガキ	褐灰 (10YR5/1)	褐灰 (10YR5/1)		口径：11.6cm 器高：3.8cm
	424	14331	S119	埋土	31.013	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	ヨコ・ナナメミガキ 丁寧な ヨ コナ デ	ヨコナデ/ヨコ・ナナメミガ キ 丁寧なナナメナ デ	黄橙 (10YR8/8)	黄橙 (10YR8/8)	赤色粒含む	復元口径：14.0cm 宮崎平野部搬入品?
	425	12374	S119	埋土	-	古墳後 ~終末期	土師器	高坏	-	ヨコナ デ	胴：ミガキ 底：ヨコナ デ	橙 (7.5YR7/6)	褐灰 (10YR4/1)	赤色粒含む	宮崎平野部搬入品?
	426	12353他	S119	床着他	31.038~ 31.094	古墳後 ~終末期	篋貫式	高坏	-	ヨコ・ナナメミガキ/ヨコ ナ デ後タテミガキ	胴：ヨコミガキ(一部ヨコ ナ デ) 脚：工具ナデ後ナデ/ヨコ ナ デ/ヨ コミガキ	黄(2.5Y8/6)	明黄褐 (10YR7/6)		口径：17.0~16.4cm 底径：9.0~8.8cm 器高：12.4cm
	82	441	23102他	S120	埋土	30.739~ 31.061	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	胴：ヨコナデ/ナデ後ナナメ ミ ガキ/ナナメ工具ナデ(ミガ キ 状)/タテ工具ナ デ 底：木葉痕	ヨコナデ/ナナメ工具ナ デ(ケズ リ状)/タテ工具ナ デ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)	
442		23010	S120	埋土	31.028	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/ナナメナデ後ヨ コ ナ デ	ナナメナ デ	にぶい 黄橙(10YR7/4)	にぶい 橙(7.5YR6/4)		
443		19837他	S120	埋土	30.997~ 31.074	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ナナメタテナ デ後 一部 タテ ミガ キ	ヨコナデ/ナナメ工具ナ デ後 タ テ ナ デ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)		復元口径：19.6cm
444		24854他	S120	床着	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ハケメ状ヨコ工 具 ナ デ後ヨコナデ/ヨコナ デ/ハ ケ メ 状 タ テ 工 具 ナ デ後 タ テ ナ デ	ヨコナデ/ナナメ工具ナ デ/タ テ 工 具 ナ デ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙(5YR7/6)		口径：21.8cm
445		24500他	S120	埋土	30.734~ 31.103	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/タテナデ/ヨコ ナ デ/ 丁寧な ヨコ ナ デ/タ テ 工 具 ナ デ 後 ヨ コ ナ デ/ 一部 ユビ オ サ エ 後 ヨ コ ナ デ	胴：ヨコナデ/タテ ナ デ 脚：ユビオサエ後タテ ナ デ/ヨ コ ナ デ	浅黄橙 (10YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：21.4cm 復元底径：9.0cm 器高：20.9cm
83	446	25335他	S120	床着他	30.734~ 31.194	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ナデ後一部工 具 ナ デ/ ヨ コ ナ デ/丁寧な ナ ナ メ ナ デ・ ナ ナ メ ミ ガ キ/タ テ ナ デ	ヨコナデ/ヨコ・ナナメ工 具 ナ デ/ 丁寧な ナ ナ メ ナ デ/工 具 ナ デ 後 丁寧な タ テ ナ デ	にぶい 橙(7.5YR6/4)	明赤褐 (5Yr5/6)	金色ウンモ 含む	口径：34.4cm
	447	22963他	S120	埋土	30.744~ 31.119	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ナナメナデ後ナ ナ メ 方 向 の 工 具 痕 ?/ヨ コ ナ デ/タ テ ナ デ	ヨコナデ/ナナメナ デ/ユビ オ サ エ 後 ナ ナ メ ナ デ/ナ ナ メ ナ デ 後 一 部 ヨ コ ナ デ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい 黄橙(10YR7/4)	金色ウンモ 含む	復元口径：28.6cm
	448	24846他	S120	床着他	30.797~ 31.032	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	胴：ヨコナデ/ナナメナ デ/タ テ 工 具 ナ デ(一部ミガキ 状) 脚：ヨコ・ナナメナ デ	胴：ヨコナデ/ナナメナ デ後 ナ ナ メ 工 具 ナ デ/丁寧な ナ デ 後 ナ ナ メ 工 具 ナ デ/丁寧な 工 具 ナ デ 脚：ユビオサエ/ヨコ・ナ ナ メ ナ デ	にぶい 赤褐(5Yr5/4)	明赤褐 (5Yr5/6)	金色ウンモ 含む	復元口径：30.0cm 底径：10.0cm 器高：32.4cm

第15表 土器・土製品観察表 (10)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
83	449	22999他	S120	埋土	30.938~ 30.996	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	タテナデ後ヨコナデ/ヨコナデ/ ナデ	ヨコ工具ナデ(一部ミガキ状)/ タテ工具ナデ(ミガキ状)	橙(5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)		口径26.6cm
84	450	25350	S120	床着	30.802	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	胴:ヨコナデ/ナデ 底:ナデ	ヨコ・ナメナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)		復元口径:15.6cm 底径:6.6cm 器高:14.6cm
	451	19865他	S120	埋土	31.039~ 31.199	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	胴:ヨコ・ナメナデ/ナメ ・タテナデ/丁寧なタテ工具 ナデ(ミガキ状) 脚:ユビオサエ後ヨコナデ	胴:ヨコナデ/ヨコ・ナメナ デ(一部ユビオサエ痕あり)/ハ ケメ状工具によるヨコ・ナメ ナデ後タテナデ(ケズリ状) 脚:ユビオサエ/ヨコナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	金色ウンモ 含む	復元口径:29.4cm 底径:10.8cm 器高:30.2cm
	452	18913他	S120	埋土	30.835~ 31.303	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ヨコナデ後タテミガ キ	ヨコナデ/ユビオサエ後ヨコ工 具ナデ/ナメナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR7/8)		口径:29.0cm 補修孔あり
	453	25038	S120	埋土	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ヨコナデ後タテナ デ	ヨコナデ/ユビオサエ後ナメ ナデ/ナメ・タテ工具ナデ	黄橙 (10YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径21.8cm
	454	17438他	S120	埋土	31.302~ 31.390	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ナメタテナ デ	ヨコナデ/ナメ工具ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)		口径:32.0cm
85	455	17432他	S120	埋土	30.017~ 31.323	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ/ヨコナ デ/ナメ工具ナデ後タテミガ キ	ヨコナデ/ナメ工具ナデ後ヨ コ・ナメナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)		口径:24.8cm
	456	22475	S120	埋土	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	5類	タテナデ後ヨコナデ/ヨコナ デ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ	浅黄 (2.5Y8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)		
	457	25346他	S120	床着	31.027~ 31.255	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	5類	ヨコナデ/タテミガキ後タテナ デ	ヨコナデ/ナメケズリ/タテナ デ	橙(5YR7/6)	橙 (2.5YR6/8)		復元口径20.0cm
	458	21880他	S120	埋土	30.733~ 31.629	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/丁寧なヨコ・ナメ ナデ	ナデ後ヨコ工具ナデ/ユビオサ エ後丁寧なヨコ工具ナデ/丁寧 なヨコ工具ナデ/丁寧なヨコ工 具ナデ(ミガキ状)/ナメナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)		口径:20.4cm
	459	21878他	S120	埋土	30.719~ 31.048	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ナメナデ/ヨコナ デ/タテナデ	ヨコナデ/ユビオサエ後タテ工 具ナデ/タテナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	金色ウンモ 含む	口径22.0cm
	460	22981他	S120	埋土	30.884~ 31.017	古墳後 ~終末期	土師器	甕	6類	ヨコナデ/ナメ工具ナデ後タ テミガキ	ヨコナデ/ナメ工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙(5YR7/6)	赤色粒含む	復元口径:23.6cm 宮崎平野部搬入品
	461	23084他	S120	埋土	30.990~ 31.043	古墳後 ~終末期	土師器	甕	6類	ヨコナデ/タテ・ナメミガキ後 ヨコ・タテナデ	ヨコナデ/ヨコ・ナメナデ	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)	赤色粒含む	復元口径20.0cm 宮崎平野部搬入品?
86	462	21884他	S120	埋土	30.774~ 31.097	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	タテミガキ/ヨコミガキ/ヨコナ デ	胴:丁寧なタテナデ 脚:ヨコミガキ	黄橙 (10YR8/6)	浅黄 (2.5Y8/4)		復元底径:13.2cm
	463	24853他	S120	床着他	30.251~ 30.762	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	タテ・ヨコナデ/ヨコナ デ	胴:タテ工具ナデ 脚:ヨコナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)	金色ウンモ 含む	復元底径11.5cm
	464	17328他	S120	埋土	31.325~ 31.384	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴:タテ工具ナデ 脚:ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		
	465	25333	S120	床着	30.721	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ/タテ工具ナデ後タテ ・ヨコナデ	胴:工具ナデ 脚:ヨコ工具ナデ後ヨコナ デ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙(5YR7/6)		底径:9.0cm
	466	24471	S120	埋土	30.763	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴:タテ工具ナデ 脚:木葉痕/ユビオサエ/ヨコナ デ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		
	467	22933	S120	埋土	30.804	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴:工具ナデ 底:ユビオサエ後ナデ	橙 (7.5YR6/6)	褐灰 (10YR4/1)	金色ウンモ 含む	復元底径:9.2cm
	468	24032	S120	埋土	30.870	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	タテ工具ナデ	胴:タテナデ 底:ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	金色ウンモ 含む	底径:6.8cm
	469	24469	S120	埋土	30.771	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ後タテ・ヨ コミガキ 底:ナデ	ナメナデ後一部ミガキ	浅黄 (2.5Y8/4)	灰黄 (2.5Y7/2)		復元底径:9.0cm
	470	19044	S120	埋土	31.212	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:ナデ 底:ナデ	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)		復元底径:9.0cm
	471	23001	S120	埋土	31.032	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:ナデ 底:ナデ	丁寧な工具ナデ	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)		底径:6.5cm
	472	22926	S120	埋土	30.826	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ/ナデ 底:木葉痕	ヨコ工具ナデ(ハケメ状)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黄橙 (10YR8/6)		復元底径:8.5cm
	473	23094	S120	埋土	30.937	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:ヨコ工具ナデ/タテ工具ナ デ 底:木葉痕	ヨコナデ/工具ナデ後タテナ デ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	石英粒多く 含む	底径:7.6cm 都城盆地搬入品?
	474	23037	S120	埋土	30.955	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ 底:木葉痕	タテ工具ナデ	橙(5YR6/6)	明赤褐 (5Yr5/6)		底径:7.1cm
	475	23756	S120	埋土	30.808	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ 底:木葉痕	工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元底径:7.4cm
	476	19855	S120	埋土	31.035	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ後ヨコナ デ 底:木葉痕+その他の圧痕	工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		底径:6.2cm
477	4234	S120	埋土?	31.554	古墳後 ~終末期	土師器	甕	-	胴:タテナ 底:木葉痕	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黄橙 (10YR8/6)	頁岩円礫含 む	底径:7.2cm 宮崎平野部搬入品	
87	478	22474他	S120	埋土	30.743~ 30.763	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	タテ・ナメナデ/ハケメ状工 具ナデ後タテナデ	タテナデ/ハケメ状工具ナデ後 タテナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	橙 (7.5YR7/6)		
	479	13405他	S120	埋土	31.389~ 31.470	古墳後 ~終末期	土師器	甕	-	タテ工具ナデ(一部ケズリ状)/ ヨコナデ	ヨコ・ナメ工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	赤色粒・頁 岩円礫含む	復元底径8.2cm 宮崎平野部搬入品?
	480	24052他	S120	埋土	30.742~ 30.922	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ヨコ・ナメミガキ/タテミガ キ	ヨコミガキ/ヨコナデ/タテナ デ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙(5YR6/6)		
	481	17351	S120	埋土	31.315	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ヨコナデ	工具ナデ後丁寧なナメナ デ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)		
	482	17406	S120	埋土	31.283	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	タテ工具ナデ	ユビナデ・工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙(5YR6/6)	金色ウンモ 含む	
483	17468他	S120	埋土	31.199~ 31.450	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	-	ヨコナデ/ヨコ・ナメミガキ	ヨコナデ/ヨコミガキ	褐灰 (7.5YR5/1)	灰褐 (7.5YR5/2)		復元口径:9.7cm 復元底径:4.9cm 器高:5.5cm	

第16表 土器・土製品観察表 (11)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選 別	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
87	484	22450	SI20	埋土	30.987	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	-	胴:ヨコミガキ 底:ミガキ	ヨコミガキ	にふい楊 (7.5YR5/3)	にふい楊 (7.5YR5/3)		復元口径:12.3cm 底径:6.2cm 器高:7.2cm
	485	13381他	SI20	床着他	31.357~ 31.382	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	-	胴:ナデ 底:ナデ	ミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/8)		底径:7.8×5.6cm 楕円形坏
	486	19046	SI20	埋土	31.124	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	-	ヨコミガキ	ナナメ・ヨコミガキ	褐灰 (10YR4/1)	黒褐 (10YR3/1)		復元口径:11.8cm
	487	25343	SI20	床着	30.779	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	-	胴:タテミガキ 底:ミガキ,ヘラ記号あり	タテミガキ	黄灰 (2.5Y4/1)	黒褐 (2.5Y3/1)		底径:6.5cm
	488	21834他	SI20	埋土	30.969~ 31.020	古墳後 ～終末期	土師器	高坏	-	タテミガキ後ヨコナデ	胴:ミガキ 脚:ヨコナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)	赤色粒含む	復元口径9.1cm 宮崎平野部搬入品
	489	21735	SI20	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	タテミガキ	タテナデ	赤(10R5/6)	灰黄 (2.5Y6/2)		赤彩土器
91	522	25055	SI20	埋土	-	古墳後 ～終末期	ふいご羽 口	-	-	ナデ	暗オリーブ (5GY4/1)	橙 (5YR6/6)		内径:2.7cm	
93	529	11568	SI21	埋土	31.200	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ナナメナデ	ヨコナデ/ナナメナデ	にふい楊 (7.5YR5/4)	にふい橙 (7.5YR6/4)		
	530	9983他	SI21	埋土	31.412~ 31.622	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/タテナデ	丁寧なヨコ工具ナデ(ミガキ状)	にふい黄橙 (10YR7/4)	にふい橙 (7.5YR7/4)	金色ウソモ 含む	復元口径:17.0cm
	531	8115他	SI21	埋土?	31.541~ 31.601	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコ工具ナデ後ヨコナデ/タテ ナデ	ヨコナデ/ユピオサエ後タテナ デ	にふい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径:18.4cm
	532	14807	SI21	埋土	31.224	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴:工具ナデ後ナデ 脚:ヨコナデ	にふい橙 (7.5YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/3)		
	533	14811	SI21	埋土	31.281	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴:ナデ 脚:ヨコナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	黒褐 (10YR3/1)		底径:6.4cm
	534	9840他	SI21	埋土	31.649~ 31.715	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	タテナデ/ヨコナデ	にふい黄橙 (10YR6/4)	橙(5YR7/6)	金色ウソモ 含む	復元口径:11.2cm
	535	9986	SI21	埋土	31.432	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴:ヨコナデ 底:木葉痕	器面剥離のため不明	にふい橙 (7.5YR7/4)	-		復元口径:8.3cm
	536	11578	SI21	埋土	31.240	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテナデ/ヨコナデ 底:ナデ	タテナデ	黄橙 (10YR8/6)	橙(5YR6/6)		復元口径:8.2cm
	537	9962	SI21	埋土	31.657	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	胴:ヨコ・ナナメミガキ(一部 ケズリ状) 底:木葉痕?	ヨコミガキ	にふい黄橙 (10YR7/4)	褐灰 (10YR5/1)		復元口径:13.0cm 復元底径:6.5cm 器高:4.5cm
	538	11536	SI21	埋土	31.235	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	摩滅により不明	摩滅により不明	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元頸部径:12.4cm
	539	14809	SI21	埋土	31.218	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ミガキ	ミガキ・ナデ	褐灰 (10YR6/1)	褐灰 (10YR6/1)		復元口径:12.1cm 器高:5.8cm
	540	14718	SI21	埋土	31.307	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	2類	胴:タテ工具ナデ 底:ナデ	丁寧な工具ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄 (2.5Y8/3)		復元口径:5.7cm
	541	11533	SI21	埋土	31.255	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	3類	ヨコミガキ	ヨコミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		
	542	14814	SI21	埋土	31.348	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	4類	ヨコナデ/ヨコミガキ	丁寧なヨコナデ	橙(5YR7/8)	浅黄橙 (7.5YR8/6)		復元口径:11.0cm
	543	10270	SI21	埋土	31.433	古墳後 ～終末期	土師器	高坏	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にふい楊 (7.5YR5/4)	にふい橙 (7.5YR6/4)	赤色粒含む	宮崎平野部搬入品?
	544	11565	SI21	埋土	31.365	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	ミガキ・丁寧なナデ	ヨコナデ	赤(10R4/8)	にふい橙 (7.5YR6/4)		復元口径:9.2cm 赤彩土器
97	550	13929他	SI22	埋土	31.115~ 31.341	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	ナナメ工具ナデ後ヨコナデ/ナ デ後タテミガキ	ヨコナデ/ナナメミガキ・ナナ メナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)		
	551	13938	SI22	埋土	31.138	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	5類	ヨコナデ/ナナメナデ	ヨコナデ/ユピオサエ後ヨコ ナデ/ヨコナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)		
	552	10623	SI22	埋土?	31.334	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄 (2.5Y8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)		復元口径:9.8cm
	553	12170	SI22	埋土?	31.156	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ナデ	ユピオサエ後ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)		底径:7.0cm
	554	16270	SI22	床着	30.692	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコ・ナナメミガキ/摩滅	ヨコナデ/ナナメミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元口径:13.2cm 復元底径:4.0cm 器高:6.0cm
	555	13941	SI22	埋土	31.101	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコナデ/丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元口径:12.2cm
101	562	25161他	SI23	埋土	30.736~ 31.311	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ/ナデ/ヨコナデ/タテ ミガキ	ヨコナデ/タテナデ	にふい楊 (7.5YR6/3)	橙(5YR6/6)		復元口径:26.8cm
	563	22723他	SI23	埋土	30.951~ 31.015	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ナデ/ナナメナデ	ナナメナデ/ナナメ工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)		復元口径:14.6cm
	564	24198	SI23	埋土	30.701	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/ヨコミガキ	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		復元口径:21.0cm
	565	19885他	SI23	埋土	30.987~ 31.283	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	ナナメ工具ナデ後ヨコナデ/ヨ コナデ/ヨコ・ナナメ工具ナデ/ タテ工具ナデ(ミガキ状)	ナナメ工具ナデ後ヨコナデ/ナ ナメ工具ナデ後タテナデ/ナナ メ工具ナデ	にふい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径:24.8cm
	566	22615他	SI23	埋土	30.819~ 31.009	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類 /3類	ナナメ板状工具ナデ/タテミガ キ・丁寧な工具ナデ	ナナメ板状工具ナデ	にふい橙 (7.5YR6/6)	橙(5YR6/8)	金色ウソモ 含む	
102	567	24225他	SI23	埋土	30.710~ 31.045	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテナデ/タテ工具ナデ後ヨ コナデ/ヨコナデ	胴:タテ工具ナデ 脚:ユピオサエ/工具ナデ後ヨ コナデ	にふい黄橙 (10YR7/4)	橙(5YR6/6)		復元口径:10.0cm
	568	22515他	SI23	埋土	30.800~ 30.987	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテ工具ナデ/ヨコナデ	胴:ナナメ工具ナデ(一部ハケ メ状) 脚:ユピオサエ後ヨコナデ	橙 (7.5YR7/6)	にふい橙 (7.5YR6/4)		
	569	23628他	SI23	埋土	30.938~ 31.033	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテ工具ナデ後ヨコナデ	胴:ナナメ工具ナデ 脚:ヨコ工具ナデ	黄橙 (10YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		

第17表 土器・土製品観察表 (12)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選稱	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面		内面			
										外面	内面	外面	内面		
102	570	24217	S123	埋土	30.804	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテ工具ナデ/ヨコナデ 底：木葉痕	タテナデ	浅黄 (2.5Y8/4)	黄橙 (7.5YR8/8)	石英粒を多 く含む	復元口径：9.0cm 都城盆地部搬入品?
	571	23605他	S123	埋土	30.922～ 30.929	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテ工具ナデ後タテナデ 底：木葉痕後ナデ	-	橙 (7.5YR7/6)	-		復元口径：9.0cm
	572	21117他	S123	埋土	30.905～ 30.918	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	タテナデ/ユビオサエ後ヨコナ デ	ヨコ工具ナデ後ヨコナメナデ /ナナメケズリ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：7.4cm
			S128	埋土	31.094										
	573	23593	S123	埋土	30.992	古墳後 ～終末期	篋貫式	壺	-	タテ工具ナデ/ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)		
	574	22539他	S123	埋土	30.707～ 31.059	古墳後 ～終末期	土師器	鉢	-	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ	ヨコナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄 (2.5Y8/4)	赤色粒・砂 粒含む	復元口径：18.8cm 宮崎平野部搬入品?
			S120	埋土	-										
	575	15593他	S123	埋土	30.987～ 31.086	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	ナナメミガキ/ナデ	丁寧なヨコナデ・ヨコミガキ/ヨ コミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	灰黄 (2.5Y6/2)		復元口径：17.6cm 器高：9.2cm
	576	25250他	S123	床着他	30.694～ 30.798	古墳後 ～終末期	土師器	坏	2類	ヨコナデ/ヨコミガキ	ヨコナデ/ヨコナデ(ほぼ摩 滅)	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)		口径：16.0cm 器高：8.1cm 宮崎平野部搬入品?
	577	22803他	S123	埋土	30.951～ 31.218	古墳後 ～終末期	土師器	坏	2類	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコミガキ・丁寧なヨコナデ	橙(5YR7/8)	黄橙 (7.5YR7/8)		口径：15.9cm 復元口径：4.6cm 器高：5.3cm 宮崎平野部搬入品?
	578	22703他	S123	埋土	30.909～ 31.999	古墳後 ～終末期	土師器	坏	2類	ヨコナデ/摩滅により不明(ミ ガキ)	ヨコナデ/丁寧なナデ・ミガキ	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (7.5YR8/8)		復元口径：13.4cm 宮崎平野部搬入品?
	579	23623他	S123	埋土	30.897～ 31.014	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	タテミガキ後丁寧なヨコナデ/ ナナメミガキ・丁寧なナデ/ユ ビオサエ後丁寧なヨコナデ/ タテミガキ後丁寧なヨコナデ	胴：ヨコナメ丁寧なナデ・ミ ガキ 脚：ユビオサエ後ヨコナデ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	明赤褐 (5YR5/6)	金色ウンモ 含む	口径：18.4cm 復元口径：10.6cm 器高：16.4cm
	580	24174	S123	埋土	30.833	古墳後 ～終末期	土師器	高坏	-	摩滅により不明(タテミガキ)	胴：摩滅により不明 脚：摩滅により不明	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)	赤色粒含む	宮崎平野部搬入品?
581	22691	S123	埋土	30.969	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	ナデ/タテミガキ	胴：ミガキ 脚：ヨコナデ	橙(5YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	金色ウンモ 含む		
582	22708	S123	埋土	30.980	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	ナナメミガキ/ナデ	ヨコナデ	赤(10R5/8)	灰黄褐 (10YR5/2)		赤彩土器	
105	596	21127他	S124	床着	31.115	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	胴：ヨコナデ/ナナメミガキ/ タテナデ後一部ナナメミガキ/ タテナデ 脚：タテナデ	胴：ヨコナデ/ナナメミガキ/ヨ コ工具ナデ 脚：ナナメナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	金色ウンモ 含む	口径：20.0cm 器高：29.0cm
	597	16797他	S124	埋土	31.126～ 31.430	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/ヨコナデ・ナナメナ デ/タテミガキ	一部ユビオサエ後ヨコナデ/ ナナメナデ/ナナメナデ後タテミ ガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)		復元口径：24.8cm
	598	16806他	S124	埋土	31.309～ 31.398	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	6類	ヨコナデ/ヨコ・タテナデ	ヨコナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR6/6)		復元口径：19.4cm
	599	24805	S124	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴：工具ナデ後ナデ 脚：工具ナデ後ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	金色ウンモ 含む	復元口径：12.6cm
	600	21132他	S124	埋土	31.131～ 31.380	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ナナメ工具ナデ/ヨコナデ 底：ナデ	ナナメ工具ナデ・ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		口径：7.4cm
	601	21145	S124	埋土	31.202	古墳後 ～終末期	土師器	坏	-	ヨコ・ナナメミガキ	ナナメミガキ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄 (2.5Y8/4)	赤色粒含む	宮崎平野部搬入品?
	602	21144	S124	埋土	31.115	古墳後 ～終末期	篋貫式	高坏	-	ミガキ	丁寧なナデ	赤(10R5/8)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		赤彩土器
108	605	17744他	S125	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/タテナデ	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ/タテ 工具ナデ	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (7.5YR8/6)		復元口径：27.8cm
	606	21453	S125	床着他	31.166	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	2類	胴：タテナデ/ナナメナデ(一部 ケズリ状)/ヨコナデ 底：木葉痕後ナデ	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ後丁 寧なタテ・ナナメナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	頁岩円礫・ 赤色粒含む	口径：29.3cm 底径：8.4cm 器高：26.2cm
	607	16453他	S125	埋土?	31.311～ 31.385	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ナナメナデ/ヨコナデ	胴：タテナデ 脚：ヨコナデ後一部タテナデ/ ミガキ状のヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙(5YR6/6)	金色ウンモ	復元口径：9.8cm
	608	17715	S125	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴：ナデ 脚：ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/3)		口径：7.0cm
	609	21459他	S125	床着他	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：ナデ/ユビオサエ後ナデ 底：木葉痕	ヨコナデ/タテナデ後ナナ メナデ	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)		口径：7.3cm
	610	21461	S125	床着	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテミガキ 底：木葉痕	ナナメミガキ	黒褐 (7.5YR3/1)	黒(10YR2/1)		復元口径：6.4cm
	611	21457	S125	床着	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	ヨコ・タテナズリ/ヨコナデ	ナナメ工具ナデ	黄(2.5Y8/6)	黄橙 (10YR8/6)		口径：7.0cm
	612	21903他	S125	埋土	31.211	古墳後 ～終末期	篋貫式	甕	-	胴：タテナデ/タテナデ 底：ナデ	ヨコ工具ナデ/ナナメナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		口径：7.4cm
109	613	21901	S125	埋土	31.248	古墳後 ～終末期	篋貫式	坏	1類	胴：ヨコミガキ 底：ナデ	ヨコミガキ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：12.8cm 底径：6.6cm 器高：4.9cm
	614	21491他	S125	床着他	-	古墳後 ～終末期	土師器	坏	2類	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコ・ナナメミガキ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (10YR8/8)	頁岩円礫多 く含む	復元口径：14.6cm 宮崎平野部搬入品
	615	16481	S125	埋土?	31.310	古墳後 ～終末期	土師器	坏	2類	ヨコナデ/ヨコミガキ	ヨコミガキ	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)	赤色粒含む	復元口径：14.8cm 復元口径：5.2cm 器高：6.0cm 宮崎平野部搬入品
	616	17783他	S125	埋土	-	古墳後 ～終末期	篋貫式	鉢	-	胴：ヨコナデ/タテナデ 底：ナデ	ヨコナデ/ヨコミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		口径：20.9cm 底径：7.4cm 器高：15.8cm
	617	21467他	S125	床着他	31.331	古墳後 ～終末期	土師器	壺	-	タテナデ/タテナデ	摩滅により不明	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)	頁岩円礫含 む	宮崎平野部搬入品

第18表 土器・土製品観察表 (13)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド /選 別	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
113	626	21924他	SI26	床着他	31.106~ 31.165	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	胴:ヨコナデ/タテナデ/ナメ ナデ 底:ユビオサエ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄(2.5YR/6)		口径:22.4cm 底径:7.8cm 器高:26.2cm 補修孔あり
	627	21957他	SI26	床着他	31.115~ 31.156	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ/タテナデ/タテ工具ナ デ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ/ナメ 工具ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (10YR8/6)		口径:18.7cm
	628	23392	SI26	床着	31.074~ 31.106	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ナデ/ヨコナデ/ナメナデ	ヨコナデ/ヨコ・ナメ工具ナ デ	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		復元口径:16.2cm
	629	21940	SI26	埋土	31.120~ 31.175	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	胴:ヨコナデ/タテ工具ナデ(一 部ケズリ状)/ナデ 底:ナデ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ後タ テ・ナメナデ/ユビオサエ後 ヨコナデ	黄橙 (10YR8/6)	浅黄橙 (10YR8/4)		口径:17.2cm 底径:8.6cm 器高:18.0cm
	630	23413	SI26	床着	31.126	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:ナメナデ 底:ナデ	ナメナデ	黄(2.5YR/6)	黄(2.5YR/6)		底径:7.5cm
	631	22015他	SI26	埋土	31.161~ 31.215	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:摩滅により不明(ユビオサ エ痕あり 底:木炭痕	工具痕残る	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)		底径:8.3cm
	632	一括	SI26	埋土	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコナデ/丁寧なナメナデ(ミ ガキ状)	丁寧なヨコナデ(ミガキ状)	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)		復元口径:15.0cm 復元底径:7.4cm 器高4.4cm
	633	23778他	SI26	床着他	31.076~ 31.189	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコミガキ/タテミガキ	ミガキ	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (7.5YR8/8)		口径:14.2cm 底径:3.4cm 器高:5.3cm
	634	23399	SI26	床着	31.131	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	摩滅により不明	摩滅により不明(ヨコミガ キ?)	黄橙 (10YR8/8)	黄橙 (10YR8/6)	頁岩円礫含 む	口径:10.8cm 底径:8.0cm 宮崎平野部搬入品
	635	21969	SI26	埋土	31.110	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	摩滅により不明	摩滅により不明	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)		復元口径:15.0cm 回転土師器
114	636	23429他	SI26	床着	31.104~ 31.203	古墳後 ~終末期	土師器	坏	2類	ヨコミガキ	ミガキ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	頁岩円礫わ ずかに含む	口径:14.8cm 底径:6.0cm 宮崎平野部搬入品
118	647	16412他	SI28	埋土	30.893~ 30.932	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	胴:ヨコナデ/タテナデ/ナデ 底:木炭痕	ヨコナデ/板状工具によるナメ ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)		口径:17.8cm 底径:8.0cm 器高:23.6cm
	648	22072他	SI28	埋土	30.921~ 30.961	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ユビオサエ後ヨコナデ/ヨコナ デ/ナメナデ	ヨコナデ/ハケメ状ナメ工具 ナデ	橙(5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)		復元口径:15.6cm
	649	22082	SI28	埋土	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	2類	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		
	650	21115	SI28	埋土	31.001	古墳後 ~終末期	土師器	高坏	-	ヨコナデ	胴:摩滅 脚:ヨコナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	黄橙 (10YR8/6)	赤色粒含む	宮崎平野部搬入品?
	651	21232	SI28	埋土	31.009	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	タテナデ	橙 (7.5YR6/6)	暗灰黄 (2.5Y5/2)		復元底径:12.0cm
	652	21276他	SI28	埋土	30.891~ 30.931	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ヨコナデ(一部ヨコミガキ)	ヨコナデ(大部分摩滅)	明黄褐 (10YR7/6)	黄橙 (10YR8/6)		
	653	21081	SI28	埋土	31.049	古墳後 ~終末期	篋貫式	壺	-	ヨコナデ/ナデ	ナメナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)		
	654	18730他	SI28	埋土?	30.973~ 31.375	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ミガキ	ミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)		底径:3.8cm
	655	21080	SI28	埋土	31.068	古墳後 ~終末期	篋貫式	坏	1類	ヨコミガキ	ヨコ・ナメミガキ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	明赤褐 (2.5YR5/6)		復元口径:16.4cm
	120	660	20554他	SI29	埋土?	31.416~ 31.539	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	1類	ヨコナデ/ハケメ状ナメ工具 ナデ/ナメナデ後タテミガキ	ハケメ状ナメ工具ナデ後ヨコ ナデ/ハケメ状工具ナデ後ユビ オサエ/ハケメ状ナメ工具ナ デ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	
661		21517他	SI29	埋土	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	タテミガキ/ヨコナデ	胴:ヨコナデ 脚:工具ナデ後ヨコナデ/ヨコ ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙(5YR6/6)		底径:11.6cm
662		18615他	SI29	埋土?	31.647~ 31.700	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:タテ工具ナデ/ナデ 底:木炭痕	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙(5YR7/8)		復元底径:8.6cm
663		18624他	SI29	埋土?	31.682~ 31.718	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	タテ工具ナデ/ヨコナデ	タテ工具ナデ/ヨコナデ	明黄褐 (10YR7/6)	黄橙 (10YR8/6)		復元底径:9.6cm
664		23786他	SI29	埋土	31.294~ 31.313	古墳後 ~終末期	篋貫式	小型壺	-	胴:ヨコナデ/ユビオサエ/ヨコ ナデ/ヨコ・ナメナデ/ユビオ サエ後ナメ・ヨコナデ 底:ナデ	ヨコナデ/ユビオサエ/ユビオサ エ後ヨコナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)		復元口径:7.6cm 口径:19.0cm 器高:10.9cm
665		21498他	SI29	埋土	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	小型壺	-	ヨコナデ/ヨコミガキ	ユビオサエ後ヨコナデ/ヨコナ デ・ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)		
667		18575	K-10	II	31.705	古墳前期	東原式	甕	-	タテハケメ/タテ・ナメハケ メ後ナデ/タテナデ	ヨコハケメ後ナデ/ヨコ工具ナ デ/タテナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)		器高:17.1cm 口径:19.0cm 底径5.0cm
121	668	20194他	L-10	II	31.673~ 31.688	古墳前期	東原式	甕	-	タテ工具ナデ/ヨコナデ	丁寧なタテ・ナメナデ	橙(5YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)		底径:9.1cm
	669	15915	F-6	II	31.034	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	4類	ヨコナデ/丁寧なタテナデ	ヨコナデ/ナメナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙(5YR6/8)		口径:22.2cm
	670	15801他	F=5・6	II	-	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	3類	ヨコナデ/タテナデ/タテケズリ	ヨコナデ/ナメ工具ナデ後ナ メナデ	橙(5YR6/8)	黒褐 (7.5YR3/2)		口径:18.0cm
	671	6434	G-5	II	31.509	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ	胴:工具ナデ 脚:ヨコナデ	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)		
	672	3455	H-4	II	31.663	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	ヨコナデ/タテナデ	胴:ユビオサエ後ナデ 脚:タテナデ/ヨコナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		
	673	4085	G-5	II	31.545	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	タテナデ/ヨコナデ	胴:工具ナデ後タテナデ 脚:木炭痕後ナデ/ユビオサエ 後ヨコナデ	黄橙 (10YR8/8)	黄橙 (10YR8/8)	赤色粒含む	
	674	5143他	F=4・6	II	31.479~ 31.492	古墳後 ~終末期	篋貫式	甕	-	胴:摩滅により不明 底:木炭痕後ナデ	ヨコ工具ナデ	黄橙 (10YR8/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	白色粒多く 含む	底径:7.4cm 都城盆地部搬入品?

第19表 土器・土製品観察表 (14)

掛図 No.	報告 No.	取上No.	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類			調整		色調		特徴的 胎土	備考
							L1	L2	L3	外面	内面	外面	内面		
122	675	7275	G-4?	II	-	古墳後 ～終末期	笹貫式	瓶	-	タテケズリ	ヨコ工具ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)	頁岩円礫含 む	都城盆地部搬入品
	676	一括	D~F- 2・3	II	-	古墳後 ～終末期	土師器	瓶	-	ナデ	ナデ	褐灰 (7.5YR4/1)	にぶい褐 (7.5YR5/3)		搬入品?
	677	5677	-	II	-	古墳後 ～終末期	笹貫式	壺	-	ヨコナデ	丁寧なヨコナデ/ユピオサエ後 ヨコナデ	褐灰 (10YR4/1)	褐灰 (7.5YR4/1)		復元口径：10.0cm
	678	14310	F-6	II	31.362	古墳後 ～終末期	笹貫式	壺	-	ヨコナデ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：13.0cm
	679	3483	H-4	II	31.580	古墳後 ～終末期	笹貫式	壺	-	ヨコナデ/タテ工具ナデ後ヨコ ナデ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ	黒褐 (10YR3/1)	灰黄褐 (10YR5/2)		復元口径：13.8cm
	680	15963	H-6	II	31.512	古墳後 ～終末期	笹貫式	壺	-	摩滅により不明	摩滅により不明/ユピオサエ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	白色粒多く 含む	復元口径：12.4cm 都城盆地部搬入品?
	681	一括	F・G- 2・3	II	-	古墳後 ～終末期	笹貫式	壺	-	ミガキ	摩滅により不明	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		
	682	7226	G-4?	II	-	古墳後 ～終末期	笹貫式	壺	-	ミガキ	ミガキ/ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)		
	683	15274	G-6	II	31.452	古墳後 ～終末期	笹貫式	壺	-	タテ工具ナデ/ナデ	ヨコ工具ナデ後ナメナデ/ナ デ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)		
	684	20182	K-10	II	31.563	古墳後 ～終末期	笹貫式	鉢	-	胴：軽いユピオサエ 底：ナデ	ヨコ工具ナデ/ハケメ状工具ナ デ後タテナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)		復元口径：13.2cm 底径：5.2cm~4.6cm 器高：12.2cm
	685	4988	G-3	II	31.622	古墳後 ～終末期	笹貫式	鉢	-	ヨコ・ナメミガキ(一部ナデ)	丁寧なヨコナデ(一部ミガキ状)	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		口径：5.6cm 器高：6.1cm
	686	16403	E-6	II	30.947	古墳後 ～終末期	笹貫式	鉢	-	胴：ヨコ・ナメナデ 底：ナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)		口径：5.5cm 底径：5.2cm 器高：4.5cm
	687	5483	-	II	-	古墳後 ～終末期	笹貫式	坏	1類	胴：ヨコナデ/タテ工具ナデ(ミ ガキ状) 底：工具ナデ(ミガキ状)	ヨコナデ/工具ナデ後タテナデ/ ヨコナデ一部ミガキ	橙(5YR7/8)	橙(5YR6/6)		復元口径：14.7cm 底径：6.4cm 器高：7.0cm
	688	12453	E-4	II	31.300	古墳後 ～終末期	笹貫式	坏	1類	胴：丁寧なヨコナデ/ユピオサ エ後ヨコナデ 底：ナデ	工具ナデ後ミガキ(一部ナデ状)	褐灰 (7.5YR4/1)	黒 (7.5YR2/1)		復元口径：11.8cm 底径：6.9cm 器高：4.5cm
122	689	6292他	G-5	II	30.559~ 30.565	古墳後 ～終末期	笹貫式	坏	1類	ヨコナデ/ミガキ	ヨコナデ/ミガキ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)		復元口径：13.2cm 器高：4.5cm
	690	6767他	H-3	II	31.601	古墳後 ～終末期	笹貫式	坏	1類	ミガキ	ミガキ	褐灰 (10YR4/1)	黒褐 (10YR3/1)		復元口径：12.0cm 復元底径：3.6cm 器高：3.6cm
123	691	16713他	F-6	II	31.009~ 31.236	古墳後 ～終末期	土師器	坏	2類	ミガキ	ミガキ	黄橙 (7.5YR7/8)	橙 (7.5YR7/6)	赤色粒わず かに含む	口径：17.8cm 器高：7.2cm 宮崎平野部搬入品
	692	16135他	E-6	II	30.949~ 31.000	古墳後 ～終末期	土師器	坏	2類	ヨコナデ/丁寧なナデ	ヨコナデ/ナメナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)	頁岩円礫含 む	口径：15.1cm 器高：5.5cm 宮崎平野部搬入品
	693	3531	H-4	II	31.618	古墳後 ～終末期	笹貫式	高坏	-	ミガキ	ミガキ	褐灰 (10YR4/1)	褐灰 (10YR4/1)		復元口径：16.0cm
	694	10414他	H-4	II	31.492~ 31.511	古墳後 ～終末期	笹貫式	高坏	-	胴：ミガキ 脚：ユピオサエ後ヨコナデ/ヨ コナデ	赤(10R5/6)	橙(5YR6/6)		復元口径：16.4cm 赤彩土器	
138	807	6553他	G-4 F-4	II	31.429	古墳後 ～終末期	ふいご羽 口	-	-	タテミガキ後丁寧なヨコナデ	ヨコナデ・タテナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)		内径：2.0cm 胴部径：9.6cm
	808	3664	G-4	II	31.689	古墳後 ～終末期	土製紡錘 車	-	-	ナデ	-	橙 (5YR6/6)	-		長さ：(2.4)cm 幅：(3.9)cm 重さ：(9.0)g

第20表 須恵器観察表(1)

押図 No.	報告 No.	取上No.	グリッド 遺構	レベル	層	時期	分類		調整		色調		備考
							L1	L2	外面	内面	外面	内面	
22	79	12840	SI10	31.076	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	平行文タタキ後回転ナデ	同心円文当て具痕	オリーブ黒(10Y3/1)	灰(10Y5/1)	
26	93	1454	SI11	30.179	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y8/1)	灰白(7.5Y8/2)	復元口径: 10.0cm
30	104	2356	SI12	30.026	床着	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	オリーブ黄(5Y6/3)	オリーブ黄(5Y6/3)	復元口径: 11.0cm かえり有
	105	1631	SI12	30.062	床着	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y8/2)	灰白(7.5Y8/2)	復元口径: 19.5cm
34	122	1361	SI14	30.112	埋土	古墳後 ～終末期	提瓶/甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	
39	152	1731	SI15	29.681	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	復元口径: 13.5cm
	153	3228他	SI15	29.724~ 29.795	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏B	胴: 回転ナデ 底: 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰オリーブ (7.5Y5/2)	灰オリーブ (7.5Y5/2)	口径: 12.0cm 器高: 4.8cm
	154	526他	SI15	29.983~ 30.271	埋土?	古墳後 ～終末期	高坏	-	坏: 回転ナデ後カキメ 脚: 回転ナデ	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	復元底径: 9.0cm
	155	2222	SI15	29.901	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	格子目タタキ後回転ナデ	同心円文当て具痕	青灰(10BG5/1)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	
51	237	2041	SI16	30.155	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	かえり有
	238	3207	SI16	30.016	床着	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	自然釉	回転ナデ後不整ナデ	オリーブ(5Y5/4)	オリーブ黄(5Y6/3)	口径: 12cm かえり・つまみ有
	239	2298他	SI16	29.982~ 30.140	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y6/2)	灰オリーブ (7.5Y5/2)	口径: 9.0cm 器高: 3.4cm
	240	1939	SI16	30.262	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏G	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	
	241	1864他	SI15	30.049~ 30.112	埋土?	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/2)	灰(N5/)	復元胴部最大径: 18.0cm 復元頸部径: 11.4cm
			SI16	30.123	埋土								
242	2015	SI16	30.264	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	灰被りのため不明	同心円文当て具後回転ナデ	灰白(7.5Y7/2)	灰(7.5Y6/1)		
56	280	16555他	SI17	30.889~ 31.424	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	浅黄(7.5Y7/3)	暗オリーブ灰 (2.5GY4/1)	
	281	16319	SI17	31.005	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	灰(N6/)	復元口径: 10.0cm
	282	22047	SI17	30.637	床着	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	復元口径: 13.0cm
	283	16332	SI17	31.006	埋土	古墳後 ～終末期	平瓶	-	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ (7.5Y5/2)	灰(7.5Y6/2)	復元口径: 7.0cm
	284	9343	SI17	31.166	埋土	古墳後 ～終末期	提瓶	-	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	復元口径: 10.8cm
	285	20597	SI17	30.900	埋土	古墳後 ～終末期	提瓶	-	回転ナデ後カキメ	回転ナデ	灰(10Y5/1)	灰(10Y5/1)	
57	286	16576他	SI17	30.798~ 30.899	床着他	古墳後 ～終末期	提瓶	-	カキメ	回転ナデ後ユビオサエ	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	
	287	16584他	SI17	30.880~ 31.418	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	平行文タタキ	同心円文当て具痕	灰白(7.5Y8/2)	灰白(7.5Y8/2)	復元口径: 23.0cm
65	344	18290	SI18	31.221	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ(5Y5/3)	灰(7.5Y5/1)	復元口径: 15.0cm
	345	24369	SI18	30.734	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(N6/)	灰(N5/)	復元口径: 13.5cm
	346	10055他	SI18	30.929~ 31.287	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	口径: 12.0cm
	347	23230他	SI18	30.869~ 31.402	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰オリーブ (7.5Y5/2)	灰オリーブ (7.5Y5/2)	復元口径: 14.0cm
	348	26024	SI18	30.683	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰(10Y4/1)	灰(10Y4/1)	復元口径: 15.0cm
	349	10148他	SI18	31.301~ 31.456	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	復元口径: 13.5cm
	350	17045他	SI18	30.955~ 31.207	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	暗緑灰(10GY3/1)	緑灰(7.5GY5/1)	口径: 11.0cm 器高: 3.5cm
	351	22277	SI18	-	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	灰被りのため不明	回転ナデ後不整ナデ	灰白(5Y8/1)	灰(5Y6/1)	復元口径: 10.5cm
	352	24426	SI18	30.702	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	復元口径: 12.0cm
	353	22190他	SI18	-	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰白(7.5Y7/1)	灰(7.5Y6/1)	復元口径: 10.5cm
	354	17551他	SI18	31.286~ 31.384	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏G	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	灰(N5/)	
	355	3872	SI18	31.573	埋土?	古墳後 ～終末期	坏蓋	坏G	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰(N3/)	灰(N6/)	復元口径: 8.7cm
	356	16970他	SI18	31.114~ 31.239	埋土	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ後カキメ	回転ナデ後不整ナデ	灰褐(5YR4/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	口径: 9.8cm
	357	26083	SI18	30.510	貼床内 他	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗緑灰(10GY4/1)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	口径: 11.0cm
	358	17607他	SI18	31.188~ 31.461	埋土	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ後カキメ	回転ナデ	暗オリーブ灰 (5GY4/1)	暗オリーブ灰 (5GY4/1)	底径: 12.0cm

第21表 須恵器観察表(2)

押 図 No	報 告 No	取上No	グリッド 番号	レベル	層	時期	分類		調整		色調		備考	
							L1	L2	外面	内面	外面	内面		
65	359	20902	SI18	31.019	埋土	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	灰(N7/)	復元底径: 13.0cm	
	360	21614	SI18	-	埋土	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(N7/)	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	復元底径: 16.0cm	
	361	20685他	SI18	30.965～ 31.019	埋土	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白(2.5GY8/1)	灰白(2.5GY8/1)	復元口径: 13.0cm	
66	362	18013他	SI18	31.130～ 31.198	埋土	古墳後 ～終末期	平瓶/壺	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/2)	灰(10Y5/1)	復元口径: 11.7cm	
	363	24735	SI18	-	埋土	古墳後 ～終末期	壺?	-	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒(5Y3/1)	オリーブ黒(5Y3/1)	復元口径: 7.0cm	
	364	25716	SI18	-	埋土	古墳後 ～終末期	平瓶?	-	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ(5Y5/2)	灰(5Y6/1)	復元口径: 6.7cm	
	365	17562他	SI18	31.186～ 31.599	埋土	古墳後 ～終末期	平瓶	-	回転ナデ後カキメ	回転ナデ後不整ナデ	灰オリーブ (7.5Y4/2)	灰オリーブ (7.5Y5/2)	復元口径: 5.3cm	
	366	25200	SI18	30.753	埋土	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	灰オリーブ (7.5Y5/2)		
	367	19509	SI18	31.110	埋土	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ナデ後カキメ	回転ナデ	灰(10Y6/1)	灰(10Y6/1)		
	368	7063他	SI18	31.470～ 31.475	埋土?	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ナデ	回転ナデ後不整ナデ	灰オリーブ (7.5Y5/2)	灰(N4/)		
	369	10132他	SI18	31.303	埋土	古墳後 ～終末期	提瓶	-	灰破りのため不明	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ (7.5Y4/2)	灰(7.5Y6/1)	
		E-5・6	31.086～ 31.395											
	370	9339他	SI18	30.841	埋土	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ (7.5Y5/2)	灰白(7.5Y8/2)		
SI120			-	埋土										
SI121			31.150	埋土										
F・H-4・ 6			31.372～ 31.470	II										
67	371	3864	SI18	31.537	埋土?	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	浅黄(7.5Y7/3)		
	372	12395他	SI18	30.771～ 30.817	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	格子目タタキ後回転ナデ	同心円文当て具痕	灰白(7.5Y8/2)	灰白(7.5Y8/2)		
			SI19	-	埋土									
	373	17839他	-	30.505～ 31.596	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	平行文タタキ後回転ナデ	同心円文当て具痕	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	復元口径: 12.0cm	
	374	19245	SI18	31.137	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	平行文タタキ	同心円文当て具痕	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)		復元口径: 11.5cm
SI120			31.372～ 31.471	埋土										
68	375	7123	SI18?	31.472	埋土?	古墳後 ～終末期	甕	-	平行文タタキ後カキメ	同心円文当て具痕	黄灰(2.5Y4/1)	灰(7.5Y5/1)		
	376	16864他	SI18	31.401～ 31.558	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	格子目タタキ	同心円文当て具痕	灰(10Y4/1)	灰(10Y5/1)		
	377	17254他	SI18	31.137～ 31.184	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	平行文タタキ後回転ナデ	同心円文当て具痕	暗オリーブ (7.5Y4/3)	灰(N6/)		
			SI120	31.360	埋土									
SI127			31.437	埋土?										
	G-5	31.594	埋土											
78	427	9476他	SI19	31.452～ 31.624	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(10Y5/1)	浅黄(5Y7/4)	復元口径: 15.0cm	
	428	15209	SI19	30.984	貼床内	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	暗オリーブ (7.5Y4/3)	灰オリーブ (7.5Y5/2)		
	429	14581他	SI19	31.006～ 31.031	床着他	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y5/1)	口径: 13.0cm 器高: 3.7cm	
	430	13909他	SI19	31.090	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	灰破りのため不明	回転ナデ後不整ナデ	淡黄(5Y8/4)	灰(10Y5/1)	口径: 9.2cm 器高: 2.7cm	
	431	14804他	SI19	31.058	床着他	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	緑灰(7.5GY5/1)	暗緑灰(10GY4/1)	口径: 11.0cm 器高: 3.5cm	
	432	14117	SI19	31.189	埋土	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y6/1)		
	433	13890他	SI19	31.080	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白(2.5GY8/1)	灰白(7.5Y8/2)		
			SI120	30.855	埋土									
	434	12406他	SI120	31.159	埋土?	古墳後 ～終末期	甕	-	格子目タタキ後回転ナデ	同心円文当て具痕	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	灰白(2.5GY8/1)		
			SI121	31.341	埋土									
	435	13914他	SI19	31.092	埋土	古墳後 ～終末期	甕	-	格子目タタキ後回転ナデ	平行文当て具痕	灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y5/1)		
SI121			31.580～ 31.592	埋土?										
88	490	24088他	SI20	31.084～ 31.401	埋土	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	暗オリーブ灰 (5GY4/1)	灰(N4/)	口径: 12.3cm	
	491	23730	SI20	30.783	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰(N7/)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	復元口径: 13.4cm	
	492	23073	SI20	30.950	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰白(5Y8/1)	灰(5Y6/1)	復元口径: 11.5cm	
	493	23103他	SI20	30.731～ 30.986	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y6/2)	口径: 11.5cm 器高: 3.5cm	
	494	19834他	SI20	30.776～ 31.014	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(5Y6/1)	灰(10Y5/1)	口径: 10.5cm 器高: 4cm	
	495	22467他	SI20	30.874～ 31.073	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y6/2)	口径: 11.8cm 器高: 3.6cm	

第22表 須恵器観察表(3)

押 図 No.	報 告 No.	取上No.	グリッド 遺構	レベル	層	時期	分類		調整		色調		備考
							L1	L2	外面	内面	外面	内面	
88	496	19784他	SI20	30.973~ 31.102	埋土	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰オリーブ(5Y5/2)	灰(7.5Y5/1)	復元口径: 9.8cm
	497	17322	SI20	31.353	埋土	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	灰(5y5/1)	灰(5Y6/1)	復元口径: 11.0cm
	498	9261他	SI20	31.429~ 31.663	埋土?	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	オリーブ黒(5Y3/2)	灰(7.5Y6/1)	口径: 9.3cm
	499	20333	SI20	31.121	埋土	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	灰被りのため不明	回転ナデ	灰白(5Y8/1)	灰オリーブ(5Y5/2)	復元口径: 11.5cm
	500	17343他	SI20	31.049~ 31.330	埋土	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	復元口径: 12.5cm
	501	25351	SI20	30.833	床着	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	復元口径: 13.0cm
	502	19821他	SI20	31.261~ 31.408	埋土	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	灰(N6/)	復元口径: 9.5cm
	503	23673	SI20	30.966	埋土	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	復元口径: 11.0cm
	504	6431	SI20	31.507	埋土?	古墳後 ~終末期	坏身	坏G	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ	灰(7.5Y6/2)	オリーブ黄(5Y6/3)	
	505	18853	SI20	31.335	埋土	古墳後 ~終末期	高坏	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	
	506	23020他	SI20	31.027~ 31.390	埋土	古墳後 ~終末期	高坏	-	回転ナデ	回転ナデ後不整ナデ	灰(N7/)	青灰(10BG6/1)	
	507	20260	SI20	31.133	埋土	古墳後 ~終末期	提瓶	-	カキメ	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y6/2)	
	89	508	22964	SI20	30.818	埋土	古墳後 ~終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(10Y4/1)	灰オリーブ (7.5Y4/2)
509		4333他	SI20	31.524~ 31.667	埋土?	古墳後 ~終末期	甕	-	回転ナデ後不整ナデ	不整ナデ	灰(N6/)	灰(N4/)	
510		18840他	SI20	31.284~ 31.516	埋土	古墳後 ~終末期	甕	-	平行文タタキ後回転ナデ	同心円文当て具後回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	灰(N5/)	復元頸部径: 13.7cm
511		8399他	SI20 SI15	31.390~ 31.589 30.008~ 30.294	埋土 埋土?	古墳後 ~終末期	甕	-	格子目タタキ	同心円文当て具痕	暗緑灰(10GY4/1)	灰(7.5Y5/1)	
93	545	9984他	SI21	31.351~ 31.392	埋土	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰オリーブ (7.5Y4/2)	灰(N4/)	復元口径: 13.0cm
	546	11546	SI21	31.321	埋土	古墳後 ~終末期	高坏	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(10Y6/1)	灰(7.5Y6/2)	復元底径: 16.0cm
	547	15435他	SI21	31.219~ 31.721	埋土	古墳後 ~終末期	甕	-	灰被り	平行文当て具痕	灰白(2.5GY8/1)	灰(N6/)	
97	556	11072他	SI22	31.384~ 31.464	埋土?	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	復元口径: 12.7cm
	557	16399	SI22	30.603	貼床内	古墳後 ~終末期	提瓶	-	カキメ	不整ナデ	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	灰オリーブ (7.5Y4/2)	
103	583	25112他	SI23	30.733~ 30.972	埋土	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	灰(5y5/1)	灰(5Y6/1)	復元口径: 12.7cm
	584	18819	SI23 SI20	30.874~ 31.184 -	埋土	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰(10Y5/1)	灰(10Y5/1)	
	585	23483	SI23	30.931	埋土	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰(7.5Y6/1)	灰(5Y6/1)	復元口径: 12.5cm
	586	22817	SI23	30.999	埋土	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	復元口径: 11.4cm
	587	19922他	SI23	31.099~ 31.138	埋土	古墳後 ~終末期	提瓶	-	回転ナデ	回転ナデ	黒(5Y2/1)	灰(5Y4/1)	復元口径: 7.0cm
	588	23570	SI23	30.914	埋土	古墳後 ~終末期	平瓶/提瓶	-	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒(10Y3/2)	灰オリーブ (7.5Y5/2)	復元口径: 5.6cm
	589	23463他	SI23	30.917~ 31.017	埋土	古墳後 ~終末期	甕	-	平行文タタキ	同心円文当て具痕	灰(7.5Y6/1)	灰(N4/)	
105	603	15831	SI24	31.278	埋土?	古墳後 ~終末期	坏身	坏H	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	復元口径: 9.0cm
109	618	17749	SI25	-	埋土	古墳後 ~終末期	提瓶	-	回転ナデ	回転ナデ	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	
	619	17706	SI25	-	埋土	古墳後 ~終末期	甕	-	灰被りのため不明	同心円文当て具痕	灰白(5Y7/1)	灰(5Y6/1)	
118	656	14628	SI28	31.198	埋土?	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	自然釉	回転ナデ	灰黄褐(10YR4/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	
124	695	6211	G-4	30.487	II	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	淡黄(7.5Y8/3)	淡黄(7.5Y8/3)	復元口径: 12.2cm
	696	9622	I-6	31.705	II	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	復元口径: 11.7cm
	697	4916	G-3	31.542	II	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰オリーブ (7.5Y5/2)	灰(7.5Y5/1)	復元口径: 10.7cm
	698	一括	D-2	-	II	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y6/2)	灰(10Y6/1)	復元口径: 13.8cm
	699	10229	G-3 H-4	31.516~ 31.531	II	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	オリーブ黒(10Y3/1)	灰(10Y4/1)	シッタ痕有
700	4782	I-6	31.736	II	古墳後 ~終末期	坏蓋	-	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	オリーブ灰(5GY5/1)	灰(N5/)	復元口径: 12.0cm	

第23表 須恵器観察表(4)

押 図 No	報 告 No	取上No	グリッド 番号	レベル	層	時期	分類		調整		色調		備考
							L1	L2	外面	内面	外面	内面	
124	701	15747	H-6	31.600	II	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	オリーブ黄(5Y6/3)	黄褐(2.5Y5/3)	復元口径:13.2cm かえり・つまみ有
	702	15578	H-6	31.579	II	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y8/2)	浅黄(2.5Y7/3)	復元口径:14.5cm かえり有
	703	一括	F-2	-	II	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ	淡黄(7.5Y8/3)	淡黄(7.5Y8/3)	復元口径:11.0cm
	704	10292	I-6	31.527	II	古墳後 ～終末期	坏蓋	-	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰(10Y4/1)	灰(10Y5/1)	かえり有
	705	一括	H-5	-	II	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	復元口径:10.3cm
	706	6853他	F-4・6	31.329～ 31.496	II	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(5Y6/1)	復元口径:11.5cm
	707	8478他	H-5	31.540～ 31.749	II	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰オリーブ (7.5Y5/2)	灰(7.5Y5/1)	復元口径:11.3cm
	708	4867他	G-3	31.388～ 31.545	II	古墳後 ～終末期	坏身	坏H	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	暗青灰(10B64/1)	暗オリーブ灰 (5GY4/1)	復元口径:10.5cm
	709	9936	G-4	31.597	II	古墳後 ～終末期	坏身	坏G	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	暗青灰(6B4/1)	復元口径:9.8cm
	710	一括	G-4	-	II	古墳後 ～終末期	坏身	坏G	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y4/1)	復元口径:9.8cm
	711	8869	I-5	31.654	II	古墳後 ～終末期	坏身	坏G	回転ナデ後ヘラ未調整	回転ナデ後不整ナデ	淡黄(7.5Y8/3)	浅黄(7.5Y7/3)	復元口径:9.8cm
	712	4187	G-5	31.555	II	古墳後 ～終末期	坏身	坏B	胴:回転ナデ 底:回転ヘラケズリ	回転ナデ後不整ナデ	灰(10Y5/1)	灰(10Y4/1)	
	713	4255	SI20	31.649	埋土?	古墳後 ～終末期	坏身	坏B	胴:回転ナデ 底:回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白(7.5Y8/2)	灰白(7.5Y8/2)	復元底径:8.3cm
	714	一括	E-G- 2～4	-	II	古墳後 ～終末期	高坏		回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰(7.5Y4/1)	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	復元口径:10.0cm
	715	3893他	G-4	30.549～ 31.561	II	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ後カキメ	回転ナデ	オリーブ黒(10Y3/1)	灰(10Y4/1)	復元口径:9.5cm
	716	4565	H-6	31.592	II	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ	不整ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	
125	717	3442他	H-4	30.569～ 31.683	II	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y4/1)	復元底径:7.5cm
	718	15296	G-7	31.483	II	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ	回転ナデ	暗緑灰(7.5GY3/1)	灰(N6/)	復元底径:15.2cm
	719	9510	F-3	31.440	II	古墳後 ～終末期	高坏	-	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ(5Y5/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	復元底径:13.0cm
	720	一括	F-2・3	-	II	古墳後 ～終末期	蓋/坏	-	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ(5Y6/2)	灰白(7.5Y8/2)	復元口径:9.8cm
	721	10954	E-4	31.496	II	古墳後 ～終末期	壺	-	灰破りのため不明	回転ナデ	灰白(7.5Y8/2)	灰(7.5Y6/1)	復元口径:8.0cm
	722	一括	F-4	-	II	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ (7.5Y4/2)	灰(7.5Y5/1)	復元頸部径:5.2cm
	723	一括	F-3	-	II	古墳後 ～終末期	提瓶	-	回転ナデ後カキメ	回転ナデ	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	
	724	4762	I-6	31.712	II	古墳後 ～終末期	壺	-	カキメ	回転ナデ	灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y4/1)	
	725	5764	-	-	II	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y8/1)	淡黄(7.5Y8/3)	
	726	14524他	F-6	31.273～ 31.346	II	古墳後 ～終末期	壺	-	カキメ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y6/1)	胴部最大径:21.6cm
	727	13001	E-5	31.413	II	古墳後 ～終末期	壺	-	回転ヘラケズリ後不整ナデ	回転ナデ後不整ナデ	灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y5/1)	
	728	6527	G-4	31.495	II	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y6/2)	復元口径:14.5cm
	729	4495	I-5	31.761	II	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/2)	灰白(7.5Y7/2)	
	730	3925	G-4・5	30.452～ 31.578	II	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	復元口径:40.5cm
126	731	11082他	D-3・4	31.447～ 31.451	II	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(N6/)	灰(7.5Y5/1)	復元口径:15.0cm
	732	一括	-	-	I	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/2)	灰オリーブ(5Y4/2)	
	733	一括	D-3	-	II	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	復元頸部径:10.8cm
	734	一括	F-2	-	II	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰オリーブ(5Y5/3)	
	735	一括	G-3	-	II	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	灰(7.5Y5/1)	
	736	5890	-	-	II	古墳後 ～終末期	甕	-	回転ナデ	灰破り	灰(7.5Y4/1)	オリーブ黄(5Y6/3)	
	737	16040	E-6	31.079	II	古墳後 ～終末期	甕	-	平行文タタキ	平行文当て具後すり消し	淡黄(5Y8/3)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	
130	738	15633	SD1	30.994	埋土	古墳後 ～終末期	坏身	-	回転ヘラケズリ後粗い回転 ヘラケズリ	回転ナデ	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	灰(N4/)	復元口径:9.8cm

第24表 鉄器観察表(1)

挿図 No.	報告 No.	取上No.	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類 L1	分類 L2	長さ	厚さ	幅	重量 (g)	備考
40	158	一括	S115	埋土	-	古墳後 ~終末期	鉄鏃	方頭斧箭式	残存長:9.3 鏃身長:4.8 茎部長:4.5	鏃身厚:0.4 茎部厚:0.45	鏃身幅:2.4~1.2 茎部幅:0.7~0.4	20.8	鏃身断面平造、ナゲ開
	159	2258	S115	埋土	29.756	古墳後 ~終末期	鉄鏃	方頭斧箭式	残存長:9.8 鏃身長:4.6 茎部長:5.2	鏃身厚:0.15 茎部厚:0.6	鏃身幅:2.3~0.8 茎部幅:0.6~0.3	15.3	鏃身断面平造、ナゲ開
	160	一括	S115	埋土	-	古墳後 ~終末期	鉄鏃?	茎部?	2.7	0.3	0.8~0.6	1.9	
52	249	3117	S116	埋土	30.146	古墳後 ~終末期	鉄鏃	方頭斧箭式	残存長:5.5 鏃身長:4.0 茎部長:1.5	鏃身厚:0.25 茎部厚:0.35	鏃身幅:2.7~1.3 茎部幅:0.7	15.1	鏃身断面平造、ナゲ開
	250	967	S116	埋土?	30.123	古墳後 ~終末期	鉄鏃	方頭斧箭式	残存長:5.5 鏃身長:4.5 茎部長:1.0	鏃身厚:0.4 茎部厚:0.5	鏃身幅:3.2~1.2 茎部幅:0.6	15.6	鏃身断面平造、ナゲ開
	251	957	S116	埋土?	30.053	古墳後 ~終末期	鉄鏃	方頭斧箭式?	残存長:8.3 鏃身長:4.3 茎部長:4.0	鏃身厚:0.2 茎部厚:0.35	鏃身幅:1.7~0.9 茎部幅:0.5~0.3	11.3	鏃身断面平造、ナゲ開
	252	1058	S116	埋土?	30.160	古墳後 ~終末期	棒状工具?	-	残存長:3.2	0.4~0.3	0.5~0.3	1.4	
	253	一括	S116	埋土	-	古墳後 ~終末期	刀子	刃部	残存長:5.4	0.2~0.1	1.3		
	254	1113	S116	埋土?	30.187	古墳後 ~終末期	刀子	刃部	残存長:3.6	0.3	1.2	6.3	
	255	3184	S116	埋土	30.037	古墳後 ~終末期	刀子	刃~茎部	残存長:7.0 刃部長:2.6 茎部長:4.4	刃部厚:0.3~0.2 茎部厚:0.3	茎部幅:1.2~0.7	9.4	
	256	2676	S116	埋土	30.034	古墳後 ~終末期	刀子	刃~茎部	残存長:4.6	刃部厚:0.35~0.2 茎部厚:0.4	刃部幅:1.3 茎部幅:0.6	4.9	
	257	1265	S116	埋土	30.196	古墳後 ~終末期	鍛冶残片	-	2.9	0.4~0.3	1.3	3.8	
57	290	16610	S117	埋土	31.159	古墳後 ~終末期	建築部材?	-	残存長:5.0	0.65	0.65~0.4	8.6	
	291	16729	S117	埋土	31.139	古墳後 ~終末期	建築部材?	-	残存長:5.8	0.65	0.6~0.3	11.7	
	292	一括	S117	埋土	-	古墳後 ~終末期	刀子	刃部	残存長:3.6	0.4~0.2	1.4~1.0	7.0	
71	391	26079他	S118	貼床内	30.481・ 30.505	古墳後 ~終末期	鉄鏃	長三角形	残存長:10.7 鏃身長:4.7 頸部長:3.6 茎部長:2.4	鏃身厚:1.8 頸部厚:0.9~0.7 茎部厚:0.3	鏃身幅:0.3~0.2 頸部幅:0.45 茎部幅:0.4	15.3	鏃身断面両丸造
	392	21628	S118	埋土	-	古墳後 ~終末期	鉄鏃?	茎部?	残存長:9.2	0.5~0.3	0.7~0.4	10.9	
	393	25652他	S118	埋土	-	古墳後 ~終末期	鉄鏃?	茎部?	残存長:9.4	0.4~0.3	0.4	7.2	
	394	24785	S118	埋土	-	古墳後 ~終末期	棒状工具?	-	残存長:4.8	0.4~0.3	0.4~0.2	2.8	
	395	17058	S118	埋土	31.222	古墳後 ~終末期	刀子	刃~茎部	残存長:12.6 刃部長:8.2 茎部長:4.4	刃部厚:0.3 茎部厚:0.25	刃部幅:1.8 茎部幅:0.7	21.5	
	396	一括	S118	埋土	-	古墳後 ~終末期	刀子	刃~茎部	残存長:4.5 刃部長:1.7 茎部長:2.8	刃部厚:0.3~0.1 茎部厚:0.2	刃部幅:1.1 茎部幅:0.6	3.9	
	397	一括	S118	埋土	-	古墳後 ~終末期	器種不明	-	残存長:3.7	0.2	2.8~2.6	6.3	孔あり
79	439	4403	S119	埋土?	31.698	古墳後 ~終末期	鉄鏃?	-	残存長:4.1	0.3	0.7	3.2	
	440	11616	S119	埋土	31.242	古墳後 ~終末期	鉄鏃?	-	残存長:3.9	0.5~0.3	0.5~0.3	2.3	
91	523	24934	S120	埋土	-	古墳後 ~終末期	鉄鏃	方頭斧箭式	残存長:5.9 鏃身長:5.4 茎部長:0.5	鏃身厚:0.4~0.3 茎部厚:0.5	鏃身幅:2.3~0.8 茎部幅:0.4	14.2	鏃身断面平造、直角開
	524	13383	S120	埋土	31.369	古墳後 ~終末期	鉄鏃?	茎部?	残存長:4.9	0.4	0.5	3.8	
	525	22431	S120	埋土	-	古墳後 ~終末期	鉄鏃?	-	残存長:5.2	0.4~0.3	0.5~0.3	3.4	
	526	24130	S120	埋土	30.790	古墳後 ~終末期	刀子	刃~茎部	残存長:5.1	茎部厚:0.5	刃部厚:1.9 茎部厚:1.3~1.1	10.4	
	527	24818	S120	床着	-	古墳後 ~終末期	刀子	刃部?	残存長:4.4	0.3	1.9	6.6	
91	528	18902	S120	埋土	31.312	古墳後 ~終末期	建築部材?	-	残存長:1.6	0.7	0.6~0.4	2.7	

第25表 鉄器観察表(2)

種目 No	報告 No	取上No	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類 L1	分類 L2	長さ	厚さ	幅	重量 (g)	備考
103	593	22595	SI23	埋土	31.008	古墳後 ～終末期	刀子	刃～基部	残存長:6.9 刃部長:4.3 茎部長:2.6	刃部厚:0.3~0.1 茎部厚:0.4	刃部幅:1.7 茎部幅:0.8	8.8	
	594	一括	SI23	埋土	-	古墳後 ～終末期	刀子	刃部	残存長:2.9	0.2	1.0	1.8	
	595	24354	SI23	埋土	30.708	古墳後 ～終末期	棒状工具?	-	残存長:2.9	0.4~0.2	0.4~0.2	1.2	
110	623	17731	SI25	埋土	-	古墳後 ～終末期	U字形銀鋤先	-	残存長:9.2 刃部長:4.0 耳部長:5.2	刃部厚:2.5 耳部厚:2.9~5.4	刃部幅:6.3 耳部幅:2.5~1.3	46.2	
	624	21902	SI25	埋土	31.227	古墳後 ～終末期	鉄鎌	基部	残存長:6.5	0.35~0.15	3.2~2.3	17.9	乙折り返し
	625	21902	SI25	埋土	31.227	古墳後 ～終末期	鉄鎌	刃部	残存長:7.0	0.2~0.15	2.1~1.5	11.9	
115	645	22000	SI26	埋土	31.077	古墳後 ～終末期	鉄鎌	方頭斧箭式?	残存長:4.3	0.3~0.2	1.9~0.7	6.8	
136	766	9731	I-6	II	31.772	古墳後 ～終末期	鉄鎌	方頭斧箭式	残存長:9.1 鎌身長:7.5 茎部長:1.6	鎌身厚:0.3 茎部厚:0.35	鎌身幅:2.7~1.2 茎部幅:0.7~0.5	29.7	鎌身断面平造、ナデ開
	767	一括	G-3	II	-	古墳後 ～終末期	鉄鎌	方頭斧箭式	鎌身長:7.6	鎌身厚:0.5~0.3	鎌身幅:3.8~0.5	26.6	鎌身断面平造
	768	1146	J-10	II	30.411	古墳後 ～終末期	鉄鎌	方頭斧箭式	鎌身長:3.4	鎌身厚:0.4	鎌身幅:3.1~1.5	13.6	鎌身断面平造
	769	14274	F-6	II	31.473	古墳後 ～終末期	鉄鎌	方頭斧箭式	鎌身長:3.2	鎌身厚:0.25	鎌身幅:2.3~1.2	6.4	鎌身断面平造
	770	一括	E-4	II	-	古墳後 ～終末期	鉄鎌	三角形	残存長:6.0 鎌身長:1.3 頭部長:4.0 茎部長:0.7	鎌身厚:0.2 頭部厚:0.6	鎌身幅:1.8 頭部幅:1.1~1.0 茎部幅:0.6	12.3	鎌身断面平造、ナデ開
	771	一括	H-5	II	-	古墳後 ～終末期	鉄鎌	-	残存長:5.8 鎌身長:2.4 茎部長:3.4	茎部厚:0.4?	鎌身幅:1.5 茎部幅:0.3	13.7	
	772	8175	SI21	埋土?	31.572	古墳後 ～終末期	鉄鎌?	-	残存長:5.2	0.4~0.3	0.5~0.3	5.7	
	773	一括	F-6	II	-	古墳後 ～終末期	鉄鎌?	-	残存長:4.8	0.5~0.4	0.8~0.6	5.7g	
	774	一括	I-4	II	-	古墳後 ～終末期	鉄鎌	-	残存長:3.6	鎌身(頭)厚:0.3 茎部厚:0.5	鎌身(頭)幅:1.3~1.1 茎部厚:0.5	5.9	ナデ開
	775	7039	F-4	II	31.448	古墳後 ～終末期	刀子	刃部	残存長:3.9	0.3~0.1	1.4	4.5	
	776	7896	H-3	II	31.490	古墳後 ～終末期	刀子	刃部?	残存長:4.0	0.4	1.7	7.8	
	777	4493	I-5	II	31.721	古墳後 ～終末期	刀子	刃部	残存長:5.3	0.2	1.3~1.2	6.1	
	778	10447	C-3	II	31.179	古墳後 ～終末期	刀子	刃部?	残存長:6.4 刃部長:2.9 茎部長:3.5	刃部厚:0.4 茎部厚:0.3	刃部幅:1.2~1.0 茎部幅:0.6	6.5	
	779	一括	F-2	II	-	古墳後 ～終末期	刀子?	-	残存長:5.0	0.3	0.8~0.5	3.4	
	780	8596	G-4	II	31.542	古墳後 ～終末期	刀子	刃～基部?	残存長:6.4	0.3	1.3~0.6	6.5	
	781	15471	H-6	II	31.675	古墳後 ～終末期	刀子?	刃～基部?	残存長:3.2	0.2	1.3	9.2	
	782	8562	F-4	II	31.356	古墳後 ～終末期	棒状工具?	-	残存長:3.4	0.5~0.4	0.4	2.1	
	783	5013	G-3	II	31.562	古墳後 ～終末期	棒状工具?	-	残存長:4.0	0.8	0.7~0.4	5.5	
	784	9686	I-6	II	31.742	古墳後 ～終末期	建築部材?	-	残存長:4.2	1.2~1.0	0.9~0.5	24.2	
	785	16653	F-6	II	31.078	古墳後 ～終末期	鉄斧	-	残存長:6.0 刃部長:2.0	刃部最大厚:0.5 袋部厚:0.2	刃部最大幅:4.1 袋部最大幅:3.2	100.6 (箱含む)	
786	5719	G-3	II	-	古墳後 ～終末期	U字形銀鋤先	-	残存長:19.6 刃部長:4.6 耳部長:15.0	刃部厚:0.6~0.2 耳部厚:1.0~0.3	刃部幅:9.1 耳部幅:3.3~2.1	121.4		
137	787	5859	H-3	II	-	古墳後 ～終末期	鉄鎌	-	残存長:18.0	0.4~0.2	4.0~3.0	81.9	乙折り返し

第26表 炉壁・鉄滓観察表

挿図 No.	報告 No.	取上No.	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類	横(cm)	縦(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	分析試料 No.
30	110	1644	SI12	埋土	30.144	古墳後～終末期	碗形鍛冶滓	4.6	3.6	2.7	62.5	着磁性あり	6
	111	一括	SI12	埋土	-	古墳後～終末期	鍛冶滓	1.7	1.5	1.1	3.3	着磁性あり	10
32	119	一括	SI13	埋土	-	古墳後～終末期	製錬滓?	1.0	2.2	1.2	3.6	着磁性なし	
52	258	一括	SI16	埋土	-	古墳後～終末期	炉壁	3.3	3.2	3.0	25.8	着磁性あり	
	259	一括	SI16	埋土	-	古墳後～終末期	鍛冶滓	2.2	2.5	2.0	7.7	着磁性なし	
	260	一括	SI16	埋土	-	古墳後～終末期	製錬滓?	2.8	2.4	2.0	13.2	着磁性ややあり	
71	398	21042	SI18	埋土	31.152	古墳後～終末期	炉壁	8.4	6.8	3.4	101.2	着磁性なし	
	399	一括	SI18	埋土	-	古墳後～終末期	鍛冶滓?	3.6	3.1	1.8	17.1	着磁性ややあり	
	400	一括	SI18	埋土	-	古墳後～終末期	製錬滓?	1.9	1.8	1.5	6.5	着磁性なし	
115	646	21946	SI26	埋土	31.075	古墳後～終末期	流動滓	4.3	6.4	3.5	103.3	着磁性なし	4
130	740	一括	SD1	埋土	-	古墳後～終末期	碗形鍛冶滓	5.0	3.9	1.9	47.7	着磁性あり	7
137	788	12741	D-3	II	31.072	古墳後～終末期	炉壁	6.7	6.5	2.6	101.9	着磁性なし	
	789	8286	SI19	埋土?	31.603	古墳後～終末期	炉壁	7.1	7.7	2.1	94.8	着磁性なし	
	790	11123	SI22	埋土?	31.314	古墳後～終末期	炉壁	7.0	6.1	2.9	59.2	着磁性なし	
	791	一括	H-5	II	-	古墳後～終末期	炉壁	4.8	4.7	2.0	40.6		1
	792	12441	D-4	II	-	古墳後～終末期	炉内滓	4.2	5.2	4.2	84.3	着磁性あり	2
	793	5390	F-3	II	31.489	古墳後～終末期	炉内滓	7.0	6.3	4.8	137.3	着磁性ややあり	
	794	一括	E-3	II	-	古墳後～終末期	炉内滓	7.4	3.9	4.5	122.6	着磁性あり	
	795	一括	I-5	II	-	古墳後～終末期	鍛冶滓	2.9	2.7	1.9	19	着磁性あり	13
	796	一括	H・I-4	II	-	古墳後～終末期	鍛冶滓	2.4	2.0	1.7	8.7	着磁性あり	12
	797	一括	F-6	II	-	古墳後～終末期	流動滓	2.5	3.8	1.5	22.1	着磁性ややあり	
	798	16633	F-6	II	31.025	古墳後～終末期	含鉄鉄滓	3.6	2.3	1.9	18.4	着磁性あり	11
138	799	4489	SI19	埋土?	31.696	古墳後～終末期	流動滓	5.0	5.1	3.2	118.5	着磁性なし	3
	800	8278	SI19	埋土?	31.656	古墳後～終末期	流動滓	5.4	5.4	3.6	119.6	着磁性あり	
	801	7197	D-2	II	31.219	古墳後～終末期	碗形鍛冶滓	5.6	5.2	2.5	70.1	着磁性あり	8
	802	一括	D-4	II	-	古墳後～終末期	碗形鍛冶滓	4.7	2.9	2.1	37.1	着磁性あり	5
	803	一括	J-7	II	-	古墳後～終末期	碗形鍛冶滓	4.7	3.5	2.7	34.4	着磁性かなりあり	
	804	一括	F-4	II	-	古墳後～終末期	碗形鍛冶滓	4.9	4.2	2.7	52.0	着磁性かなりあり	
	805	一括	H-6	II	-	古墳後～終末期	碗形鍛冶滓	4.8	3.7	2.4	48.9	着磁性ややあり	
	806	16360	E-6	II	30.950	古墳後～終末期	含鉄鉄滓	6.4	3.1	2.8	45.2	着磁性あり	9

第27表 石器・石製品等観察表（1）

挿入 No.	報告 No.	取上 No.	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類 L1	分類 L2	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
14	45	一括	SI31	炉内	-	弥生中期	石鏃	2類	砂岩	13.08	5.40	2.92	283.05
	46	26100	SI31	埋土	30.898	弥生中期	石鏃	1類	砂岩	10.85	8.22	7.57	884.14
	47	26074	SI31	埋土	30.854	弥生中期	石鏃	3類	砂岩	11.40	8.03	4.38	500.22
19	67	21181	SI30	埋土?	31.647	古墳前期	打製石斧	-	ホルンフェルス	7.70	8.12	1.79	145.85
	68	26058	SI30	埋土	30.744	古墳前期	石鏃	1類	砂岩	9.33	6.60	5.99	443.75
22	80	12857	SI10	埋土	31.190	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	13.67	6.57	4.68	602.70
27	94	1490	SI11	埋土	30.168	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	15.16	6.52	4.18	485.40
	95	1455	SI11	埋土	30.217	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	19.90	11.20	6.40	2351.00
	96	1566	SI11	埋土	30.176	古墳後～終末期	棒状礫	-	砂岩	8.30	3.40	1.80	79.22
30	106	2390	SI12	埋土	-	古墳後～終末期	棒状礫	-	砂岩	15.50	8.20	2.50	607.14
	107	2386他	SI12	埋土	-	古墳後～終末期	棒状礫	-	砂岩	14.70	5.60	4.10	533.39
	108	2383	SI12	埋土	-	古墳後～終末期	棒状礫	-	砂岩	10.00	4.90	3.50	172.12
	109	3218	SI12	埋土	29.828	古墳後～終末期	砥石	提砥	砂岩	4.00	4.30	0.60	16.30
34	123	854	SI14	埋土	30.168	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	16.20	6.51	5.04	728.34
39	156	1378	SI15	埋土	29.927	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	(24.50)	(11.30)	(7.90)	(3200.0)
	157	2180	SI15	埋土	29.741	古墳後～終末期	棒状礫	-	砂岩	15.30	6.80	4.30	644.36
51	243	3055	SI16	埋土	30.256	古墳後～終末期	打製石斧	-	変成岩	13.13	7.40	1.80	197.62
	244	2882	SI16	埋土	29.956	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	11.98	5.20	3.17	255.92
	245	3160	SI16	埋土	30.083	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	10.41	7.80	2.40	218.03
	246	1880	SI16	埋土	30.129	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	10.90	9.94	4.29	493.08
52	247	3087	SI16	埋土	30.192	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	14.30	13.30	4.70	963.09
	248	2062	SI16	埋土	30.036	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	12.00	12.10	2.60	510.34
57	288	25439	SI17	床着	-	古墳後～終末期	鉄床石	-	砂岩	19.80	16.70	6.70	2950.00
	289	16309	SI17	埋土	31.045	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	5.60	4.10	1.70	66.71
69	378	16855	SI18	埋土	31.300	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	15.05	5.58	4.52	545.76
	379	22289	SI18	埋土	-	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	11.30	4.18	3.90	275.76
	380	17873	SI18	埋土	-	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	8.35	4.05	3.30	150.81
	381	7356	SI18	埋土?	31.408	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	13.50	5.90	4.44	603.42
	382	25432	SI18	床着	-	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	14.00	5.40	4.00	437.66
	383	17245	SI18	埋土	31.297	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	12.32	9.71	3.59	600.85
70	384	16850	SI18	埋土	31.271	古墳後～終末期	石鏃	3類	凝灰岩	16.65	4.42	2.37	237.42
	385	17803	SI18	埋土	30.192	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	9.28	10.29	4.18	544.08
	386	19484	SI18	埋土	31.083	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	16.70	11.20	2.50	448.91
	387	25395	SI18	床着	-	古墳後～終末期	棒状礫	-	砂岩	9.90	2.90	2.40	91.82
	388	25434	SI18	床着	-	古墳後～終末期	棒状礫	-	砂岩	14.30	5.00	4.60	521.11
	389	一括	SI18	炉内		古墳後～終末期	玉製品	小玉	頁岩?	0.50	0.45	0.40	0.05
79	436	13898	SI19	埋土	31.072	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	14.80	6.24	4.29	577.02
	437	15506	SI19	貼床内	30.935	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	10.92	3.19	3.52	196.33
	438	14587他	SI19	床着	31.061	古墳後～終末期	棒状礫	-	頁岩	13.80	5.00	4.20	506.96
90	512	24837	SI20	床着	30.250	古墳後～終末期	磨製石斧	-	変成岩	14.50	6.40	2.68	336.99
	513	22453	SI20	埋土	-	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	13.39	3.50	2.45	196.88
	514	24817	SI20	床着	-	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	15.96	5.02	3.92	468.26
	515	25319	SI20	埋土	30.793	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	14.83	6.06	5.40	728.71
	516	22915	SI20	埋土	30.912	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	13.06	5.50	3.72	442.61
	517	24838	SI20	床着	-	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	13.82	6.10	3.97	436.15
	518	24844	SI20	床着	-	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	15.50	6.50	3.69	550.98
	519	25347	SI20	床着	30.782	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	20.53	7.64	3.50	610.80
91	520	24861	SI20	床着	-	古墳後～終末期	鉄床石	-	砂岩	25.00	13.00	5.80	3400.00
	521	25342	SI20	床着	30.790	古墳後～終末期	棒状礫	-	砂岩	17.80	7.60	5.40	918.83
94	548	10005	SI21	埋土	31.455	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	4.20	2.60	2.00	30.95

第28表 石器・石製品等観察表（2）

種図 №	報告 №	取上 №	グリッド /遺構	層	レベル	時期	分類 L1	分類 L2	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
94	549	12816	SI21	床着	31.026	古墳後～終末期	鉄床石	-	砂岩	24.40	9.20	7.40	2626.00
97	558	11152	SI22	埋土?	31.365	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	11.05	3.17	2.38	117.88
98	559	11189	SI22	埋土?	31.405	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	14.80	6.92	5.47	765.03
	560	15943	SI22	床着	30.892	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	15.20	8.20	1.70	306.07
	561	16269	SI22	床着	30.764	古墳後～終末期	鉄床石	-	砂岩	30.90	20.00	9.40	7700.00
103	590	22756	SI23	埋土	-	古墳後～終末期	磨製石斧	-	頁岩?	9.24	5.12	1.82	117.56
	591	22637	SI23	埋土	30.982	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	12.60	8.70	1.50	211.30
	592	13167	SI23	埋土?	31.220	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	17.73	5.57	4.02	620.38
105	604	15767	SI24	埋土?	31.447	古墳後～終末期	石鏃	4類	砂岩	4.60	4.50	1.10	31.65
109	620	16478	SI25	埋土?	31.468	古墳後～終末期	打製石斧	-	変成岩	8.85	5.77	1.56	102.31
	621	21468他	SI25 J-8	床着 II	- 31.346	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	13.45	5.60	4.83	536.39
	622	一括	SI25	埋土	-	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	5.10	5.50	1.20	40.60
114	637	23420	SI26	床着	31.193	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	15.28	6.00	4.20	574.17
	638	23400	SI26	床着	31.346	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	11.77	2.83	2.56	104.68
	639	23402	SI26	床着	31.140	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	16.47	5.40	4.90	725.56
	640	23417	SI26	床着	31.236	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	14.30	7.00	3.80	527.75
	641	23419	SI26	床着	31.182	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	16.60	6.20	3.82	642.76
	642	23418	SI26	床着	31.182	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	13.12	6.13	3.52	369.27
115	643	23406	SI26	床着	31.066	古墳後～終末期	鉄床石	-	砂岩	21.30	17.90	8.90	4450.00
	644	23416	SI26	床着	31.193	古墳後～終末期	棒状鏃	-	砂岩	14.60	7.10	2.60	513.95
118	657	22902	SI28	埋土	31.402	古墳後～終末期	紡錘車	-	変成岩	5.45	5.36	0.80	36.77
	658	23388	SI28	床着	30.772	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	10.92	4.51	3.63	287.13
	659	16411	SI28	埋土?	31.189	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	13.69	3.53	2.75	208.72
130	739	20571	SD1	埋土	31.004	縄文晩期末～弥生初頭	石鏃	-	黒曜石(三船)	2.42	1.25	0.37	0.67
133	741	9422	F-4	II	31.361	弥生中期/古墳前期	石鏃	1類	砂岩	12.00	9.32	6.68	1017.20
	742	5929	-	II	-	弥生中期/古墳前期	石鏃	1類	砂岩	10.91	8.68	6.05	752.19
	743	12186	D-3	II	31.272	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	11.75	4.20	3.35	217.54
	744	14474	F-6	II	31.418	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	15.30	5.02	4.25	446.75
	745	12505	E-4	II	31.350	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	16.02	5.76	4.13	642.48
134	746	20004	K-9	II	31.635	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	12.20	6.63	5.40	533.60
	747	4176	G-5	II	31.567	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	13.98	7.06	4.22	545.25
	748	4608	H-5	II	31.651	古墳後～終末期	石鏃	2類	砂岩	7.80	5.40	3.59	224.21
	749	5281	F-4	II	31.439	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	9.59	4.49	2.08	149.23
	750	5387	F-3	II	31.532	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	12.10	7.29	3.06	365.34
	751	15144	G-6	II	31.513	古墳後～終末期	石鏃	3類	砂岩	14.18	6.10	3.28	374.10
	752	5023	G-3	II	31.549	古墳後～終末期	砥石	-	天草石	(7.50)	6.10	3.30	(234.14)
	753	7182	F-3	II	31.373	古墳後～終末期	砥石	-	凝灰岩?	5.65	4.00	4.62	97.03
	754	19940	K-10	II	31.655	古墳後～終末期	砥石	提砥	頁岩	13.70	4.40	1.30	94.40
135	755	7935	I-5	II	31.656	古墳後～終末期	砥石	-	砂岩	5.40	4.90	1.50	53.75
	756	13279	F-5	II	31.528	古墳後～終末期	鉄床石	-	砂岩	15.00	9.70	(2.20)	(394.96)
	757	一括	F-6	II	-	古墳後～終末期	火打石	-	チャート	2.70	2.30	1.70	14.87
	758	6492他	G-5 F-4	II	31.448	古墳後～終末期	打製石斧	-	ホルンフェルス	18.10	6.85	2.35	236.80
	759	5358	E-3	II	31.329	古墳後～終末期	打製石斧	-	頁岩	15.03	5.70	2.50	199.95
	760	9813	-	II	-	古墳後～終末期	磨製石斧	-	変成岩	8.90	4.80	1.40	75.27
	761	5391	F-3	II	31.402	縄文晩期末～弥生初頭 /弥生中期	磨製石鏃	-	粘板岩	3.76	2.40	0.30	2.55
	762	6924	F-4	II	31.425	古墳後～終末期	紡錘車	-	頁岩?	5.30	2.60	0.81	16.88
	763	5724	-	II	-	古墳後～終末期	紡錘車	-	凝灰岩?	4.69	2.30	0.72	10.85
	764	922	SI15	埋土?	29.893	古墳後～終末期	玉製品	勾玉?	チャート(繻状)	2.40	1.60	1.00	3.26
	765	11101	D-5	II	31.361	古墳後～終末期	玉製品	管玉	緑色片岩?	2.20	0.60	0.60	0.85

第6章 総括

第1節 平成16年度調査との関係

今回の調査範囲に隣接する道路部分は、平成16年8～11月に旧有明町教育委員会が発掘調査を実施している(志布志市教委2008)。

ここでは、今回調査で見つかった遺構と平成16年度調査(一次調査)での遺構との関係を検討する(第150図)。

一次調査の主な遺構として、弥生時代中期の竪穴建物1基(SI4)と竪穴状土坑1基(竪穴状土坑3)、古墳時代後～終末期の竪穴建物8基(SI1～3、5～9)と竪穴状土坑5基(竪穴状土坑1、2、4～6)、そして硬化面1、溝2がある。

今回調査との関係について、10号竪穴建物は竪穴状土坑5と同一遺構である。1号溝状遺構(SD1)は溝2と、硬化面(SD2)は硬化面1と同一遺構である。なお、硬化面1と溝2は、一次調査報告時に古墳時代のもつとされたが、今回の調査結果から判断すると、古墳時代よりは新しいと考える。

第2節 縄文時代早期・後期

1 縄文時代早期

縄文時代早期の調査について、ほ場整備工事の掘削深度の関係上、アカホヤ火山灰層以下の調査は実施していない。しかし、掘方の掘削がアカホヤ火山灰層下位まで達している18号竪穴建物の貼床土内から、早期土器が1点出土している(第7図1)。

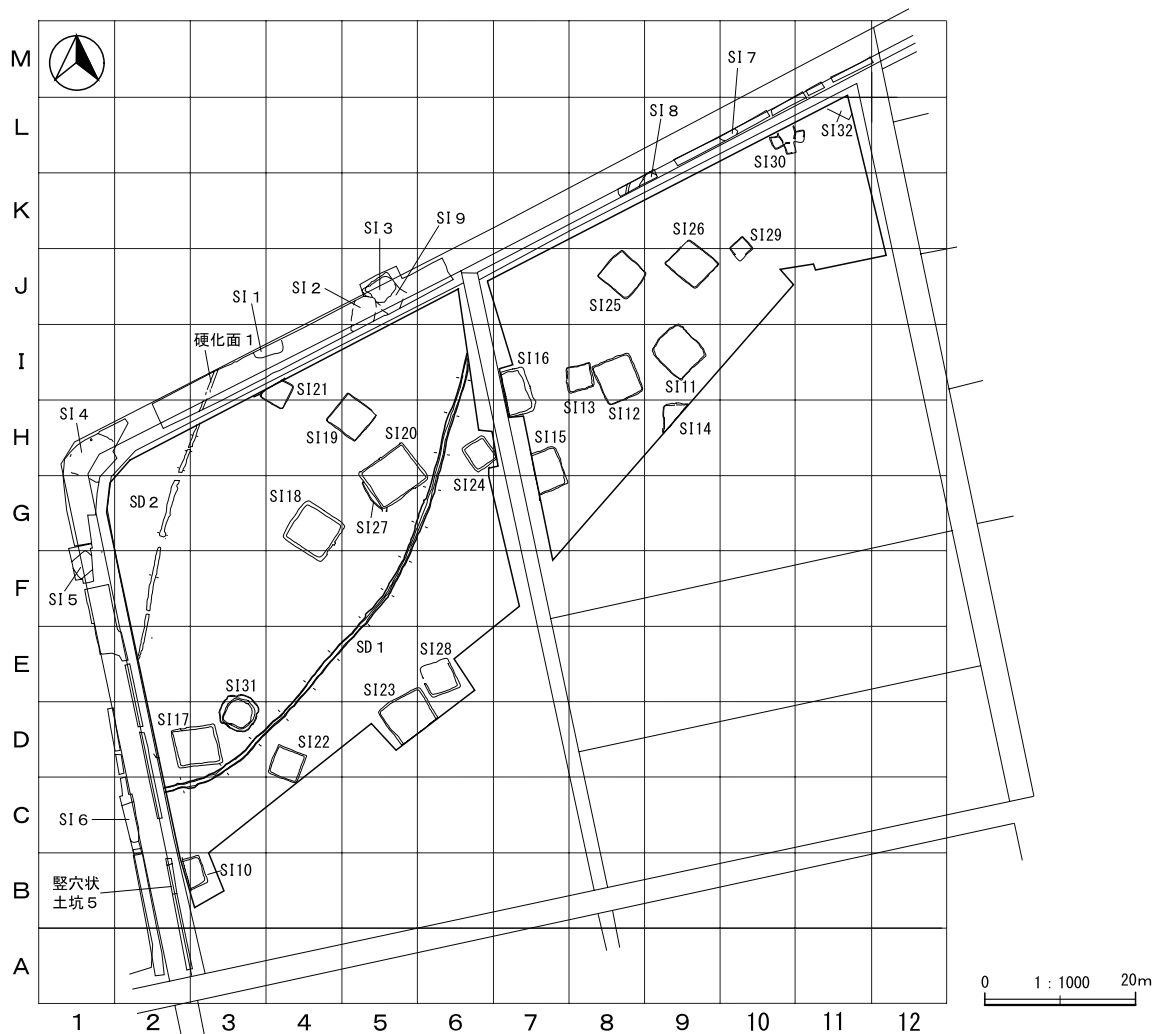
1は、その特徴から石坂Ⅱ式に比定できる。したがって、本遺跡には縄文時代早期前葉の遺物包含層が存在していると判断できる。

2 縄文時代後期

縄文時代後期の調査について、後期に比定できる土器が確認できた(第7図2・3)。

2は、その特徴から宮之迫式に比定できる。

2を含む口縁部2点は10区以東から出土しており、縄文時代後期前葉の遺物分布の中心は今回調査範囲よりも東に位置すると考える。



第150図 一次調査を含めた遺構配置図

第3節 縄文時代晩期末～弥生時代初頭

土器は、刻目突帯文土器の甕と浅鉢、組織痕土器が認められた。

甕は、胴部屈曲型や砲弾型がある。口縁部の突帯は、口唇部に接して貼付するものがほとんどであり、器面調整にヨコナデ調整が多いことから、新しい様相を示す(藤尾1993、川口2019)。

浅鉢は、逆「く」字形口縁部で、端部が肥厚するものとやや肥厚するものが確認できることから、刻目突帯文土器Ⅱa～Ⅱb期(宮地2008)に比定できる。

石器は、打製石斧が認められてはいるものの、古墳時代にも存在する石器であり、縄文時代晩期末～弥生時代初頭のものとして断定できない。

第4節 弥生時代中期

遺構は、竪穴建物が1基検出された。31号竪穴建物は円形を呈し、全周にベッド状施設をもつものである。

竪穴建物内から、甕や壺、石槌、砥石などが認められた。逆「L」字状を呈する口縁部で、口縁部が長く、口唇部に凹みをもつ甕や、頸部に多条突帯をもつ壺は、その特徴から山ノ口Ⅱ式に比定でき、中期後半に位置づけられる。土器は、胎土に金色ウンモを含むものが多い。

竪穴建物埋土や炉埋土からは、石槌が出土し、砥石も認められている。したがって、竪穴建物内で鉄器製作関連の作業を行っていたと考える。しかし、炉内や炉周辺の土を水洗し、微細な鍛冶関連遺物を確認する作業を行ってはいないため、断定はできない。

包含層からは、甕や壺、鉢などの土器のほか、弥生時代中期に属すると考える磨製石鏃や石槌が出土した。土器のほとんどは、胎土に金色ウンモを含む。

甕のほとんどは、竪穴建物出土の甕と同じ特徴から、山ノ口Ⅱ式に比定できる。なお、52(第15図)の甕は、口縁部上面がわずかにふくらみ、口唇部に凹みが認められないことから、やや新しい様相をもつ。

壺も二又状口縁をもつことや頸部に多条突帯をもつ特徴から、山ノ口Ⅱ式に比定できる。

第5節 古墳時代前期

遺構は、竪穴建物が1基検出された。30号竪穴建物は、張り出しをもつ花卉型竪穴建物である。

竪穴建物内から、甕や壺、鉢、小型壺、石槌、打製石斧が認められた。

甕は、口縁部が「く」字状に外反し、頸部内面に稜線が認められず、また口縁部にタテハケメ調整が行われ、胴部に丸みが残るなどの特徴をもつ。これらの特徴から、東原式もしくは東原Ⅱ式(松崎2017)、成川Ⅱa式(橋本2019)に比定できる。

最近、本遺跡の菱田川を挟んだ対岸にある志布志市春

日堀遺跡出土資料について、緩慢な型式変化を示す甕ではなく、広域流通品である高坏を基準にした編年作業が行われている(川口2020)。

本遺跡では高坏が認められていないものの、その編年と比較すれば、甕の特徴から古墳時代初頭～前期前半に位置づけられそうである。

なお、橋本達也氏は北部九州の土器編年との併行関係から、成川Ⅱa式を古墳時代中期初頭に位置づけている。今回の報告では古墳時代前期として扱ったが、東原式もしくは成川Ⅱa式に比定できる土器群の年代観をどのように捉えるかは、今後の課題となる。

打製石斧は、南九州の古墳時代には一般的に存在するものであり、土掘り具として利用されたのであろう。石槌は、肉厚の礫を石材としたもので、鉄器製作に利用されたと考える。

包含層からは、古墳時代前期に比定できる土器がわずかに認められた。

第6節 古墳時代後～終末期

本遺跡の中心となる時期である。竪穴建物が21基検出され、集落跡であったことが判明した。

1 遺物

本遺跡出土遺物の中で最も量が多い。土器や須恵器、石器・石製品、鉄器、炉壁・鉄滓、土製品、軽石などが認められた。そのほとんどは、古墳時代後～終末期の笹貫式土器新段階(中村2009)に位置づけられる土器である。

(1) 土器

土器は、笹貫式土器新段階、あるいは成川Ⅳc式(橋本2019)に位置づけられる。器種は、甕、甗、壺、鉢、高坏、小型壺が認められた。また、宮崎平野部などからの搬入土器も認められた。

以下、器種ごとに説明を行い、その後、搬入土器や特記事項について述べていく。

ア 甕

①器形について

口径をみると、20 cm前後のものと30 cmを超えるものの2種類が目される。

前者は厚手で、重量感があり、脚台や平底となる(第25図84、第45図180、第55図261、第105図596など)。

一方、後者は薄手で、大きさの割に軽く、脚台をもち、胎土に金色ウンモを含むものが多い(第75図405・406、第83図448など)。

口縁部形態から、内湾するもの(1類)、直行するもの(2類)、口縁端部でやや外反するもの(3類)、口縁部が突帯上位から肥厚するもの(4類)、口縁端部で外湾するもの(5類)に細分した。一括性の高い16号竪穴建物出土資料から、これらは同時併存すると考える。

なお、4類は「内湾肥厚型口縁」や「肥厚型口縁」と呼称されたもの（坪根 1986）に相当する。

口縁端部で外湾するもの（5類）は、他地域の土師器の影響を受けたものであり、口縁端部でやや外反するもの（3類）は5類と1・2類との折衷形と考える。

②器面調整について

口縁部外面調整について、端部にヨコナデ調整を行うことで、擦痕が残るものが多い。宮崎平野部の土師器甕も同様の調整を行っているとのことであり¹⁾、宮崎平野部の影響と考える。

胴部調整について、タテ工具ナデやタテナデ、タテミガキ調整などが行われる。特に、口径が30 cmを超え、薄手で大きさの割に軽いものは、全てタテミガキ調整を行っている。

内面に接合痕が残るものも多く、外面に接合痕が目立つものも存在する（第82図441、第43図168など）。

③突帯について

突帯は、全体的に貼付があまく、剥離しているものが多い。突帯上位はヨコナデによって貼付しているが、突帯下位は突帯貼付時のユビオサエ痕を残すものが多い。

突帯施文は、バリエーションがある。ヘラ状工具による刻み（刻み内に筋や布目圧痕が認められるものもある）や指頭のナデ上げによる刻み（ユビナデ上げ刻み）、竹管文などがあり、施文されないものや絡縄突帯もある。また、2～4条1単位に刻みを施すものもある。

なお、甕の突帯施文としての竹管文は、成川式土器において稀であり、興味深い資料である。

刻み間隔は、狭いものから広いものまで様々である。また、突帯を貼付しないものも若干認められた（第26図88、第113図627、第118図647など）。

④底部形態について

底部形態は、平底と脚台がある。その比率は、感覚的ではあるが、ほぼ1：1のようである。

平底を呈するものの中には、外底面に木葉痕が残るものもある。葉の樹種は判断できないものが多い。ただし、オオタニワタリは確認できた（第62図314）。

胎土に金色ウンモを含むものは全て脚台であり、大隅半島南部からの搬入品である可能性が高い。しかし、脚台内面天井部に木葉痕が残るものもあり（第86図466、第121図673）、在地でも脚台をもつ甕を製作していたと言える。

脚台内面天井部に「一文字型」の突起（本田 1997）を施すものもある（第62図304、第86図464など）。

⑤補修孔について

口縁部付近に補修孔を施すものを4点確認した（第61図296、第84図452、第113図626など）。補修孔は、成川式土器においてほとんど確認できないものであり、その存在は注意したい。

⑥使用痕について

口縁部～胴部上半にススが付着しているものが多い。内面にコゲが確認できるものもあり、底部内面が黒いもの（第108図606など）や胴部以上が黒いもの（第105図596）がある。295（第60図）は、オキ火上蒸らしの痕跡がある²⁾。

口径が20 cm前後のものの中には（第45図180など）、口縁端部に白色物質が付着するものが認められた（実測図断面の矢印部分）。これは、甕使用法に関係するものであり、後で詳述する。

イ 甕

甕は、多孔式が3点（うち2点は同一個体）包含層から認められたのみで、筒抜け式がほとんどである。

16号竪穴建物からは、全形の分かるものが複数出土しており（第48図209～211）、これらから大型、中型、小型の3種類存在していたことが判断できる。

胴部外面に白色物質が付着しているものが認められた（実測図断面の矢印部分と平面図の一点破線部分）。これは、甕使用法に関係するものであり、後で詳述する。

ウ 壺

壺は量的に少ない。大型のもの（第26図91や第77図416など）と小型のもの（第56図270など）がある。

肩が張るものとナデ肩状のもの（第87図480）がある。無突帯あるいは頸部のみに突帯を貼付する。底部は、平底あるいは丸平底を呈する。

大型のものには、胴部にススが付着しているものもあり（91・416）、煮炊きに使用されていたことがわかる。

エ 鉢

鉢は量的に少ない。深めのものを基本としたが、坏との区別が困難なものもある。コップ状のものもある。

平底を呈するものがほとんどで、外底面に木葉痕を残すものもある（第77図417）。外面にミガキ調整を行うものが多い。口縁部が凹んだ箇所があり、注口を意識した可能性があるものも存在する（第63図325など）。

オ 坏

坏は、口が開く浅めのものを基本とした。在来のもの（1類）と搬入品（2類）がある。

在来のもは、厚手のつくりで、黒色処理が行われているものもある。ミガキ調整を行うものが多い。底部形態は平底と丸底があり、底面にヘラ記号を施すものがある（第97図554ほか）。平底を呈するものには、木葉痕が残るもの（第77図420）や木葉痕を模した可能性のある沈線を施したもの（第77図419）などが認められた。

口縁部が逆「く」字状に屈曲するものもあり（第93図542など）、須恵器模倣坏と考える。また、楕円形を呈するものも認められる（第50図233、第87図485）。

搬入品は、薄手のつくりで、底部形態は丸底あるいは丸平底を呈する。底面にヘラ記号を施すものもある。また、回転台土師器も確認できた（第113図635）。詳細は後述する。

在来のものや搬入品に限らず、口縁部に意図的な打ち欠きが認められるものがある。17・19・22・26号竪穴建物の床面からは、口縁部に意図的な打ち欠きがある以外、ほぼ完形の坏が出土しており（第56図275、第77図420、第97図554、第113図634）、竪穴建物廃絶時に行われた祭祀行為に使用された土器と考える。

カ 高坏

高坏は量的に少ない。坏部が碗形のものと同縁部でや屈曲するものが認められた。ともにミガキ調整を行うものが多い。

前者（第77図426、第49図219・221、第102図579など）は、脚部径が太く、台付鉢にも見えるものである。宮崎平野部の高坏にも同様の器形があり（今塩屋・松永2002）、外来系の高坏と考える。宮崎平野部からの搬入土器も認められる。

後者（第64図339・341など）は、全形がわかるものが少ない。坏に分類したものの中に含まれている可能性もあろう。

精製赤彩土器の高坏は、そのほとんどが脚部径の細いものであり、在来系の器形と考える。

坏部下半にカキ目を施す回転台土師器（第64図343）も認められた。

キ 小型壺

小型壺は量的にとても少ない。丸底のもの（第30図102、第120図665）と平底のもの（第120図664）が認められた。29号竪穴建物では、両者が共存していることから、同時併存していたと考える。なお、大隅半島側では、丸底が新しい時期まで残るとのことである³⁾。

須恵器長頸壺を模倣した可能性のあるものも認められた（第39図151）。

ク 搬入土器について

本遺跡からは、胎土などから判断すると搬入土器と判断できるものが幾つか認められている。

「宮崎小石」と呼ばれる頁岩類の小円礫や「高師小僧」と呼ばれる赤色粒を胎土に含むものは、宮崎平野部からの搬入土器であり、一定量認められる。

胎土に石英類などの砂粒を多く含む、都城盆地からの搬入土器と推定できるものもわずかではあるが確認でき

る。ここでは、主に宮崎平野部からの搬入土器について述べる。

宮崎小石を含む甕（第46図191）や壺（第109図617）が出土していたことから、宮崎平野部からの搬入土器が存在していることは、発掘調査時には認識していた。

そこで、今塩屋毅行氏（宮崎県埋蔵文化財センター）と津曲大祐氏（西都市教育委員会）に出土遺物を見ていただいたところ、甕や壺以外にも甗や坏、高坏、鉢など全ての器種で宮崎平野部からの搬入土器あるいは搬入土器の可能性のあるものが存在していることがわかった。

以下、器種ごとに説明する。

①甕

甕は、16号竪穴建物の189～192（第46図）、18号竪穴建物の301（第61図）、20号竪穴建物の460・461（第85図）で、これら以外にも外底面に木葉痕が残る底部（第47図208、第86図477）や未報告分の口縁部（写真図版26）がある。

191は、今塩屋毅行氏・松永幸寿氏による編年（今塩屋・松永2002）における中型長胴甕A類の8～9期（TK217～46型式併行）に比定できる。なお、191はその色調から、宮崎県小丸川～一ツ瀬川流域からの搬入品の可能性があると⁴⁾。

192は、今塩屋・松永編年の大型球胴甕Ab類の8期に比定可能性である。

301・460・461は、今塩屋・松永編年の中型球胴甕A類の8～9期に比定可能性である。

②甗

甗は、18号竪穴建物の317～319（第63図）、20号竪穴建物の479（第87図）がある。

317は、胴部外面に白色物質が付着しており、在来系の甗と同様の方法で使用されていたことがわかる。

③壺

壺は、25号竪穴建物の617（第109図）である。

なお、617は小型の短頸壺と判断したが、今塩屋氏からは、宮崎県下耳切第3遺跡の3号地下式横穴墓（TK217古～新併行期）出土の小型鉢（報告書No.985）に類似しているとの指摘を受けている。

④坏

坏は、15号竪穴建物の148（第39図）、16号竪穴建物の229～231・234（第50図）、17号竪穴建物の273（第56図）、19号竪穴建物の424（第77図）、23号竪穴建物の576～578（第102図）、24号竪穴建物の601（第105図）、25号竪穴建物の614・615（第109図）、26号竪穴建物の634・636（第113図）、包含層出土の691・692（第123図）がある。

坏は、口縁部が直行あるいは外傾するものである。宮崎平野部では、口縁部が内湾するものが古く、直行・外傾するものが新しい（7世紀代）とされる（今塩屋・松

永 2002、今塩屋 2006)。したがって、本遺跡出土資料も、概ね 7 世紀代に位置づけることが可能であろう。

⑤ 高坏

高坏は、15 号竪穴建物の 150 (第 39 図)、17 号竪穴建物の 278 (第 56 図)、18 号竪穴建物の 338 (第 64 図)、19 号竪穴建物の 425 (第 77 図)、20 号竪穴建物の 488 (第 87 図)、21 号竪穴建物の 543 (第 93 図)、28 号竪穴建物の 650 (第 118 図) などである。

本遺跡出土の高坏は、脚部のみが残存したものである。その形態から、今塩屋・松永編年の高坏 E 形式 (椀・坏状の坏部をもつ) と判断できる。なお、高坏 E 形式は 7 期以降 (TK43~209 型式併行以降) を主体とする (今塩屋・松永 2002)。

⑥ 鉢

鉢は、20・23 号竪穴建物の 574 (第 102 図) である。今塩屋氏からは、6 世紀末~7 世紀前葉に位置づけられる可能性があるとの指摘を受けている。

ケ 回転台土師器について

18 号と 26 号竪穴建物埋土内から回転台土師器が認められた。前者は高坏で (第 64 図 343)、後者は坏の可能性が高いもの (第 113 図 635) である。

それぞれの竪穴建物の時期について、詳細は後述するが、18 号は豊前編年 V 期併行、26 号は豊前編年 VI 期併行であり、本遺跡資料は概ね 7 世紀中~後葉におさまると考える。

九州地方の回転台土師器について検討を行った網田龍生氏によると、北部九州や肥後地方では 6 世紀後半以降に、須恵器の器形をした土師器が認められるとのことである (網田 1994)。

日向地方では、網田氏の第 3 段階以降 (8 世紀前半) に回転台土師器が認められるとのことである⁵⁾。

鹿児島県においては、少なくとも薩摩国府や大隅国府周辺では 8 世紀前葉に回転台土師器が出現するとされる (中村和 1997・2006、深野 2012)。

本遺跡資料は時期的に古く、在地で製作されたものではないと考える。したがって、本遺跡資料がどこから持ち込まれたものなのかという問題が残る。

しかし、現在九州地方における 7 世紀代の回転台土師器の研究は少ないようであり、解決には至らなかった。

なお、本遺跡からは瀬戸内系大甕の須恵器も認められていることから、九州以外の地域の可能性も考慮しておきたい。

コ 甎の使用法について

本遺跡では、甎が一定量確認でき、九州南部の他地域よりも出土量が多い。

全形のわかるものから判断すると、全て突帯を貼付しており、「九州南部型甎」(松崎 2020) とされるものである。蒸気孔の形態は、多孔式が 2 点認められた以外、全て筒抜け式である。

甎は、カマドと甕のセットで使用されることが基本であるが、本遺跡では造り付けカマドや移動式カマドは確認できていない。また、本遺跡出土の甎には、外面にススが付着しているものもある (第 48 図 209・210 など)。

つまり上記の理由から、従来指摘されているように (松崎 2020 ほか)、本遺跡の甎はカマドを使用したのではなく、甎を甕にのせ、それを地床炉に設置し、直接火を受けるような方法を用いていたと考える。

ところで、本遺跡の甎には、胴部外面下半に白色物質が巡るものが認められた。また、甕の口縁端部にも白色物質が付着するものもある。

甎胴部に付着した白色物質の下端径は 21.6~14.0 cm の範囲である。一方、白色物質が付着した甕の口縁部内径は 24.1~16.8 cm の範囲であり、その径は概ね近い値を示す。

つまり、口縁端部に白色物質が付着する甕は、蒸し調理の際に甎と組み合わせて使用したと考える。

16 号竪穴建物からは、甎の白色物質下端径と甕の口縁部内径がほぼ一致する甎 (第 48 図 211) と甕 (第 45 図 180) が出土しており、使用法を復元すると第 151 図及び写真図版 28 のようになる。なお、菱田川を挟んで本遺跡の対面にある志布志市春日堀遺跡の報告書でも、同様の使用法が想定されている (鹿児島県埋調セ 2020a)。

えびの市天神免遺跡出土の甎と甕の関係から九州南部の甎使用法を検討した松崎大嗣氏によると、口縁部の屈曲する甕が甎と組み合わせる可能性が高いとしている (松崎 2020)。

本遺跡出土の白色物質が付着する甕の口縁部形態をみると、口縁部が屈曲するもの (第 46 図 186) 以外にも内湾するものや直行するもの、口縁端部で外反するものなど様々である。

志布志市宮脇遺跡 (志布志町教委 2001) や安良遺跡 (志布志市教委 2012、鹿児島県埋調セ 2020b)、鹿屋市中尾遺跡 (鹿児島県埋調セ 2005) など、志布志湾沿岸における他の遺跡でも、口縁部が直行・内湾する甕に白色物質が付着している。したがって、志布志湾沿岸では様々な口縁部形態の甕を甎と組み合わせていたのだろう。

ところで、白色物質が付着する甕は、口径が 20 cm 前後のものである。つまり、甎を設置した際に容器内に没入しないように、小さめの口径をもつ甕を選択していたと考える。つまり、甕の口縁部形態よりも口径を重視していたのだろう。

18 号竪穴建物出土の甎胴部片に付着した白色物質について、鐘ヶ江賢二氏らに分析をしていただいた。その

結果、白色物質は有機物と粘土の混合物との見通しが得られている（第5章第2節参照）。

つまり、鐘ヶ江氏らが指摘するように、甕と甑の接点部から蒸気が漏れることを防ぐための目張りとして白色物質を使用したと考える。

他地域では、甑の胴部や甕の口縁部に白色物質が付着する事例は認められないとのことであり⁶⁾、志布志湾沿岸地域にのみ認められる手法と言える。

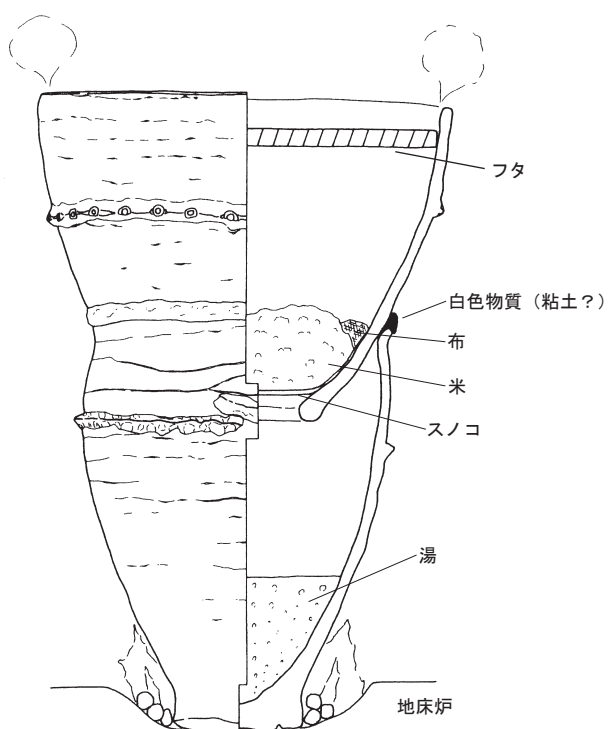
ちなみに、5世紀後半に位置づけられる志布志市原田3号地下式横穴墓から見つかった軽石製組立式石棺の目張りにも白色の粘土が使用されており、興味深い。

筒抜け式の甑は、その使用の際に甑内部に調理対象物が落下しないように何かを敷く必要があり、竹製などのスノコが可能性として高いであろう。

ここで注目したいのが、18号竪穴建物出土鉄器の397（第71図）である。X線写真で見ると（第157図）、孔がほぼ均等な間隔で複数開けられている。想像の域は超えないものの、397が鉄製のスノコとして使用されていた可能性もあったのではないだろうか。

外面にスガがあり、内面にコゲがない甕は、甑使用時の水炊き専用のものであった可能性が高い⁷⁾。しかし、295（第60図）はオキ火上蒸らしの痕跡があり、180（第45図）や444（第82図）、455（第85図）、596（第105図）、627（第113図）は内面にコゲが認められる。

したがって、本遺跡の甕は水炊き専用ではなく、甑使用以外にもコメの炊飯や汁物の煮沸などにも使用していた可能性がある。



第151図 甑使用法想定図

【註】

- 1) 今塩屋毅行氏のご教示による。
 - 2) 鐘ヶ江賢二氏のご教示による。
 - 3) 中村直子氏のご教示による。
 - 4) 今塩屋氏と津曲氏のご教示による。
 - 5) 津曲氏のご教示による。
 - 6) 松崎氏と鐘ヶ江氏のご教示による。
 - 7) 鐘ヶ江氏のご教示による。
- (相美)

(2) 須恵器

本遺跡からは、番号取上分だけで約970点の須恵器が認められている。これだけ多数の須恵器が、そして7世紀代に位置づけられる須恵器が出土することは、鹿児島県内ではとても稀である。

ところで、古墳時代後期の6世紀後半以降になると地方窯が数多く開かれ、須恵器の地域性が認められるようになる（長2009ほか）。

そこで、7世紀代の須恵器に精通し、本市と同じ九州東半にある豊前・豊後地域の須恵器編年（長2012ほか）を行っている長直信氏（大分市教育委員会）に本遺跡資料を実見していただいた。

その結果、本遺跡資料は豊前編年Ⅲ-3期からⅥ期の前半頃（TK217～TK46併行）、つまり6世紀末から7世紀第3四半期（古墳時代後期末～終末期）に位置づけられる可能性が高いことがわかった（第152図参照）。

本遺跡資料は、坏身・坏蓋・高坏・甕・平瓶・提瓶・壺の器種構成で、供膳具のほか貯蔵具も認められた。

以下、まず出土須恵器から竪穴建物の時期比定を行い、その後器種ごとに説明を行う。

ア 須恵器からみた竪穴建物の時期

竪穴建物ごとに須恵器から想定できる時期を比定すると、以下のようになる。

① 豊前編年Ⅲ-3期併行：20・21・22号

20号竪穴建物で出土した坏身・坏蓋の多くは（第88図）、回転ヘラケズリ調整が施されている。坏身の口径は9.3～13.4cmの範囲となり、高坏の506（第88図）は長脚で二段の透かしが施されているなど、豊前編年Ⅲ-3期の様相を呈している。

21号竪穴建物から出土した須恵器（第93図）は少量だが、坏蓋の545は復元口径13.0cmで、回転ヘラケズリ調整が施されたものである。高坏脚部の546は透かしが確認でき、復元底径が16.0cmという大きさであるため、長脚で透かしの施された古手の高坏であることが想定できる。

22号竪穴建物から出土した須恵器（第97図）は少量で、坏蓋の556のみでの時期判断となる。調整は、回転ヘラケズリが施され、復元口径が12.7cmとなる。

②豊前編年Ⅳ期併行：17・19・23号

17号堅穴建物は、坏蓋の280と坏身の281に回転ヘラケズリ調整が施されている（第56図）。坏身の281・282は、復元口径が10.0～13.0cmとなる。281の回転ヘラケズリ調整は、少し粗く施されている。復元口径の大きさも考慮すると、坏Hの法量が縮小化し、調整の省略が始まる豊前Ⅳ期と判断できる。

19号堅穴建物では、429と431（第78図）が床着で出土している。坏身の431はヘラ未調整であり、口径が11.0cmであることから豊前編年Ⅳ期と判断する。

23号堅穴建物では、坏蓋でヘラ切り未調整と回転ヘラケズリの両方がみられ、坏身の口径は11.4～12.5cmとなる（第103図）。調整の省略化と法量の縮小化段階にあると考えられ、豊前編年Ⅳ期とする。

③豊前編年Ⅴ期併行：11・12・18・24・28号

11号堅穴建物は、坏蓋の93（第26図）が出土しており、1点のみでの判断となる。復元口径が10.0cmと、坏蓋でも小さな部類となるため、豊前編年Ⅴ期と考えた。

12号堅穴建物も出土した須恵器が少ないものの、104

（第30図）がかえりをもつ坏蓋であるため、豊前編年Ⅴ期と考えた。

18号堅穴建物では、坏身・坏蓋に回転ヘラケズリとヘラ切り未調整の両方がみられる。また、伊藤田窯系高坏CⅠ3類に分類される359（第65図）や、坏部が丸みをもつ低脚の361（第65図）など、豊前編年Ⅴ期に相当する遺物も出土している。

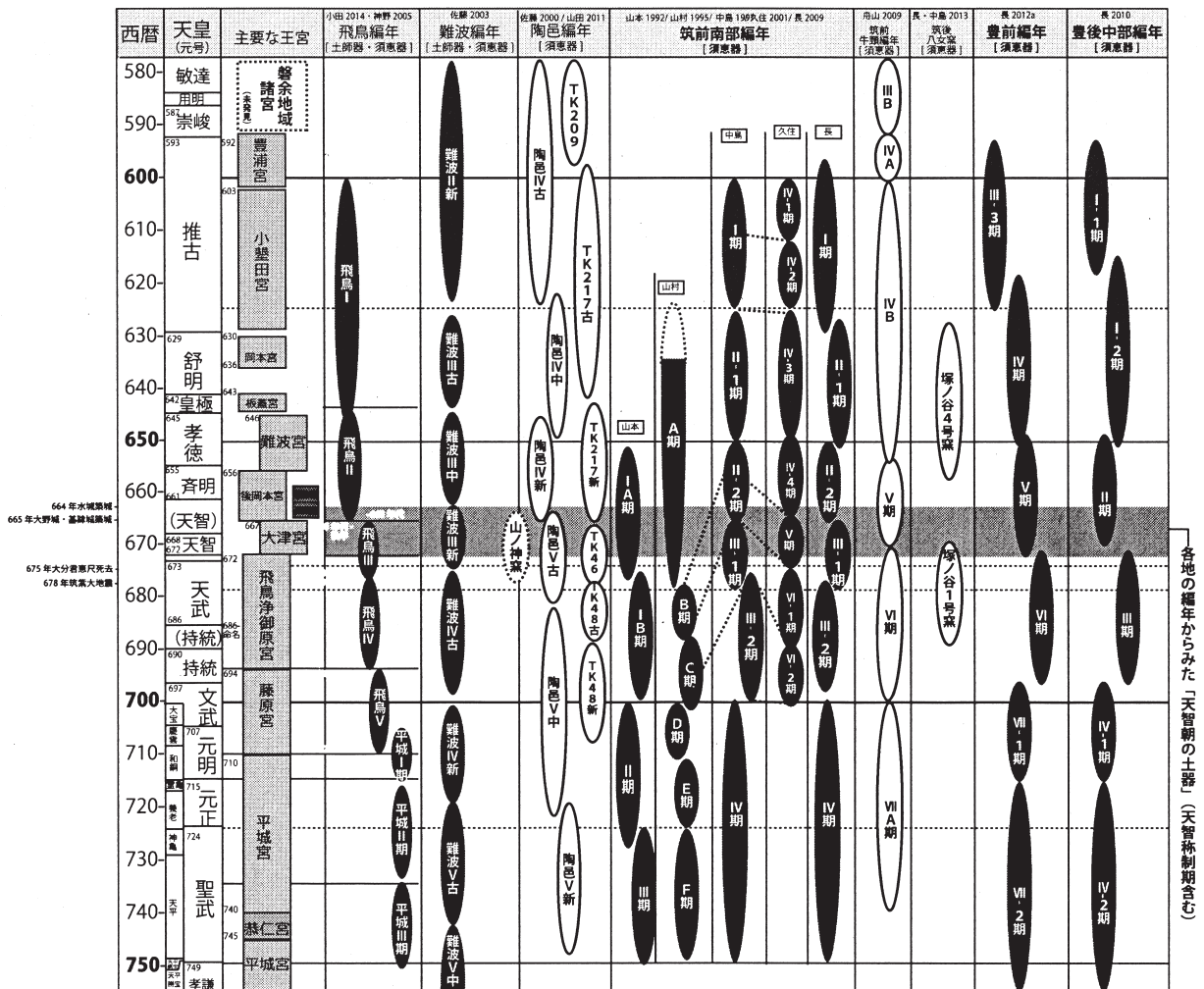
24号堅穴建物では、時期判断可能な資料は603（第105図）の坏身のみだが、復元口径が9.0cmと小さく、坏Hの最小化段階と位置づけられる。

28号堅穴建物の須恵器は、656（第118図）の1点のみである。口縁端部と天井部が残存していないが、自然釉が外面に全体的に付着していることから、かえりをもつ坏蓋であると考えた。

④豊前編年Ⅵ期併行：15・16号

15号堅穴建物からは、小型高坏である154、坏Bに分類される153などが出土している（第39図）。坏Bが出現するのは、豊前編年Ⅵ期である。

16号堅穴建物は、ヘラ切り未調整で口径9.0cmの坏身で



第152図 土器編年比較図（長2019より引用）

ある239、坏Gでヘラ未調整の240、かえりもつまみも有する坏蓋の238が出土している（第51図）。238は扁平で薄いつくりであり、坏Bとセットになる坏蓋と判断できるため、豊前編年VI期と想定した。

イ 器種ごとの様相

①坏身・坏蓋

須恵器の中でも多く出土した坏身・坏蓋は、奈良文化財研究所分類における坏H、坏G、坏Bである。

最も多く出土したのは、古墳時代以来の伝統的な合子状の器種である坏Hで、次に体部が直線的に立ち上がる坏G、最も少ないのは高台を持つ坏Bである。

出土した坏Hの口径は9.0～13.5cmの範囲となり、底部調整は回転ヘラケズリを施すものと、回転ヘラケズリを施さないヘラ切り未調整の2つに分けられる。回転ヘラケズリを施さない作業工程を簡略化した製品の出現は、7世紀の坏身・坏蓋における画期の一つとされる（佐藤1989）。

坏蓋は、坏Hとセットになるものと、坏G・Bとセットになるかえりやつまみがついているものが出土している。坏Hとセットになる蓋が大半を占め、天井部に回転ヘラケズリが施されたものが多い。口縁部のみ残存のためつまみの有無が不明なものもいくつかあるものの、天井部まで残存しているかえりをもつ坏蓋の多くは、つまみがついている。

その他の特徴的な坏蓋として、699（第124図）の内面には、製作の際に使用したとされるシッタ痕が同心円状に残されている。

竪穴建物ごとに坏身・坏蓋の出土状況をみると、18号竪穴建物では坏身と坏蓋がほぼ同じ割合で出土しているのに対し、20号竪穴建物では坏身が多く出土しているのに比べて坏蓋はほとんど出土していない。坏身・坏蓋は最も多く出土した器種ではあるものの、その様相は竪穴建物ごとに異なる。

ヘラ記号が施されている坏身・坏蓋も多く確認された。直線が1本、もしくは2本平行するように刻まれた「|」や「//」のヘラ記号がほとんどで、曲線を描くものはみられない。ヘラ記号の施された須恵器の多くが破片資料のため、全体像を復元できるものは少ない。全て、底部あるいは天井部に施された外面ヘラ記号である。

出土した坏Hの量と比べると、坏G・坏Bの数はごくわずかである。坏Gは、底部のみの残存がほとんどであり、全体的に小ぶりで、ヘラ記号が施されているものは現状確認できない。

坏身・坏蓋の量の多寡から、坏Gや坏Bが供膳具として主体を占める豊前編年VI期と、上苑A遺跡が利用されていた時期はほとんど重ならないことが考えられる。しかし、宮都から離れた集落である上苑A遺跡の性格を考

えると、宮都で坏Gや坏Bが使用される段階でも、坏Hの使用されていた時期が一定期間存続していることも想定される。

②高坏

高坏は、その多くが坏部もしくは脚部のみの残存であり、全体を復元できるものは少ない。脚部のほとんどで透かしが確認できる。透かしの多くは、二方向に一段もしくは二段施されたものだが、358（第65図）は二段四方向に透かしが施されている。

717（第125図）は、他の高坏と比べて幅の広い透かしが三方向に入れられていたと考えられ、脚端部の形状なども考慮すると、5世紀末頃に位置づけられる可能性が高い¹⁾。

高坏坏部のほとんどは、坏Gに類似した屈曲して口縁部に立ち上がる形態のものだが、361（第65図）は丸みを帯びた坏部をもつ。

これは、高坏C II 1類とされたもので、豊前編年V-2期から確認でき、VI期で安定的に認められる（長2012）。豊前・豊後・日向など東九州一帯で多く認められる形態で、瀬戸内沿岸部にも類例が多く、その主要生産地は瀬戸内沿岸域が想定されている。

包含層から出土した714（第124図）は、他の高坏に比べて薄手で沈線が多く巡るなど、八女系須恵器の属性と一致する（長・中島2010）。

八女系須恵器は、福岡県、佐賀県、熊本県北部が主要な分布範囲であるため、本遺跡からの出土は分布域から大きく離れている。加えて、八女系須恵器は八女地域以外では古墳や横穴墓といった墳墓から出土する事例が多いため、主要な分布範囲から大きく離れた集落遺跡である本遺跡で八女系須恵器が出土したことは、イレギュラーな要素が強いと思われる。

脚端部の形態は、丸みを帯びて肥厚しているものと上下につまみ上げているものの2つが主要な形態である。359（第65図）は端部をはね上げており、伊藤田窯系高坏C I 3類の属性をもつ。

③甕

甕は、口縁部の形態にそれぞれの製品の特徴が表れている。いくつか特徴的なものを取り上げると、371は内傾気味に直立し、突帯2条に櫛歯文が施されている。内傾気味の口縁部に装飾性の強い文様など、瀬戸内系大甕の特徴がみられる²⁾。

433（第78図）は、出土した甕の多くが外反する口縁部をもつ中で、端部で内側につまみ上げている。105（第30図）や508（第89図）も少し内側につまみ上げているが、433は際立って明瞭である。また、433には垂下するように突帯が巡っており、これも他の甕にはあまりみられない特徴である。

文様については、371の櫛歯文、433のヘラ状工具によ

る斜線文、508の楯状工具による刺突文、730（第125図）の三段波状文などがみられるが、多くは無文である。

287（第57図）は、甕の中で唯一頸部にヘラ記号が描かれている。

ヘラ状工具による斜線文がみられる734（第126図）は、志布志市小牧1号墳出土の甕（上村1984）と文様がとても類似しており、興味深い。

甕の体部調整は、そのほとんどが外面に平行文もしくは格子目タタキ、内面に同心円文当て具を施している中で、737（第126図）は内面に平行文当て具痕がみられる。これは、筑紫甕の特徴的技法のひとつである（寺井2004・2008）。内面に平行文当て具を用いた甕が、かつての筑紫国の範囲内に所在する生産地でのみ分布しているため、筑紫甕と呼称されており、737も筑紫国からの搬入品と考えられる。

④平瓶・提瓶・壺

平瓶・提瓶・壺に関しても高坏と同様に、全体を復元できるものは少ない。

出土した平瓶の中では、365（第66図）のみほぼ全体を復元可能で、それ以外は口縁部である。365は、底部は残存していないがカキメを多用するなど装飾的であることから、豊前編年Ⅲ-3～Ⅴ期に相当する。

提瓶は、カキメが施された胴部が出土しており、把手やその痕跡がみられるものもある。723（第125図）は、把手の部位が残存しているもので、付いているのは把手が退化したボタン状のものである。

365や369（第66図）、507（第88図）のように、平瓶や提瓶の内面にくり抜き痕がみられるものがある。

壺の胴部は無文のものが多いが、367（第66図）や726（第125図）のようにカキメが施されたものもみられる。366（第66図）は台付長頸壺の台脚であり、ハの字状に広がる。

⑤小結

須恵器全体の様相としては、坏Bのように律令の様式の土器も出土しているが、主体を占めるのは古墳時代以来の伝統的な器種である。

また、瀬戸内系大甕や筑紫甕、八女系須恵器の高坏など、様々な地域色のある製品もみられるため、多様な地域間交流があったことが想定される。

【註】

- 1) 長氏のご教示による。
- 2) 岡山県倉敷市寒田窯産の製品である可能性が高い。

（川路）

（3）土器・須恵器の変遷について

本遺跡では、7～8世紀に位置づけられる笹貫式新段階の土器が認められた。また、6世紀末～7世紀後葉の須恵器が竪穴建物から出土している。つまり、その出土須恵器を基に、笹貫式新段階の細分が可能である。

上述したように出土須恵器から各竪穴建物の時期比定を行っており、その時期比定を基に、竪穴建物の床着出土遺物を中心に抽出して、土器・須恵器の変遷図を作成した（第153・154図）。

ア 各器種について

①甕

甕について、笹貫式を含むいわゆる成川式土器の甕は、口縁部形態が概ね「外反→直行→内湾」と型式変化する（中村直1987）。また、内湾口縁の後に肥厚口縁を位置づける見解もある（坪根1986、甲斐2015）。

本遺跡の様相をみると、内湾口縁や肥厚口縁以外にも、口縁端部が外湾するものや口縁端部でやや外反するものなど、様々な口縁部形態が認められ、これらは同時共存すると考える。在来系や外来系など複数の系譜をひく形式が同時共存しているのであろう。

つまり、口縁部形態に限れば、型式学的変化は認められない。しかし、巨視的に言えば、型式学的変化が認められる。

まずは、甕の小型化である。豊前編年Ⅲ-3期併行の20号・21号竪穴建物では、口径が30cmを超えるようなものが多く認められる。一方、豊前編年Ⅵ期併行の16号竪穴建物では、口径が20cm前後のものが多くなる。

ただし、20号には小型のものも、16号には大型のものも存在することから、時期が下るにつれてその比率が逆転していくと考えたい。

次に、突帯の刻み間隔の狭いものが多い傾向から、刻み間隔が広いものや刻みを施さないものが多くなる傾向に変化することである。

肝付平野や都城盆地における笹貫式新段階の特徴として、突帯に太くまばらな刻みを施すことが挙げられている（中村直2009）。また、突帯の刻みが減少から消失していくことも指摘されている（橋本2019）。つまり、これまで指摘されてきたような傾向が看取できる。

なお、底部形態については、全期通して平底と脚台の比率（概ね1：1）は変化しないようである。

甕の小型化について、成川Ⅳc式では中・小型甕主体となることが指摘されており（橋本2019）、その容量は土師器甕と共通化していることを想定している（橋本2015）。

前述したように、口径が20cm前後の甕は、甗と組み合わせられて利用されることが多い。つまり、甗を導入したことにより、様々な口径の甕を製作していたものが、口径が20cm前後の甕を中心に製作し、それを米の炊飯や汁物の煮炊き、そして甗の水炊き用など複数の調理場面で使用していたのではないかと考える。

志布志湾沿岸に限って言えば、甕の小型化の背景として、甗の導入もその一つであると考えたい。

②甗

甗は全期通して認められるが、豊前編年Ⅴ期併行の18

号堅穴建物や豊前編年VI期併行の16号堅穴建物のように、時期が新しいほど出土量が多くなる傾向がある。特に豊前編年V期併行以降増加する傾向が看取できる。

③坏

坏は基本的に平底となり、外底面に木葉痕を残すものもある。資料が少ないため断定はできないものの、口縁部が直行するものから、外傾するものへと型式変化する可能性もある。

口縁部が逆「く」字状に屈曲する須恵器模倣坏は、豊前編年Ⅲ-3期併行の20号(第87図483)と21号(第93図542)で認められるものの、豊前編年IV期併行以降は確認できない。宮崎平野部でも、須恵器模倣坏は8期(TK217新段階併行)までには消滅しているとのことであり(今塩屋・松永2002)、その様相と連動している可能性がある。

④壺・高坏・小型壺・鉢

壺・高坏・小型壺・鉢は全期通して存在するようであるが、資料が少なく、型式変化の有無は確認できない。

イ 器種組成について

堅穴建物内の器種組成は、そのほとんどを土器が占めており、須恵器は1割にも満たない。土器は、甕がほとんどを占め、次いで坏、甗、その他という割合になる。須恵器は坏身・坏蓋のような供膳具以外にも甕や壺、平瓶などの貯蔵具も認められる。

一般的に土器と須恵器は、煮沸・供膳・貯蔵などの用途によって使い分けがなされるが、本遺跡の場合は使い分けがなされているとは言い難い。

須恵器は器種組成の中では客体的であり、土器が煮沸・供膳・貯蔵など全ての用途を担っていたと考える。

なお、宮崎平野部の集落遺跡では、高坏がほとんど確認できず、供膳具では坏が卓越するとのことである(今塩屋2006)。つまり、器種組成の主体を坏が占めるといふ汎日本的な器種組成が形成されている。

一方、本遺跡では、坏も多いが高坏も少ないながらも認められる。坏がある程度存在するものの高坏主体の器種組成となる6世紀代(辻堂原～笹貫式古段階)の様相(相美2004)とは異なるが、坏の比率が高いながらも高坏もある程度存在する様相は、宮崎平野部とは異なる点である。

(4) 石器・石製品・棒状礫・軽石

ア 石器・石製品

石器・石製品は、打製石斧、磨製石斧、紡錘車、玉類、火打石のほか、石槌、砥石、鉄床石などの鍛冶関連の石器も認められた。

打製石斧は縄文時代晩期にも認められるが、南九州の古墳時代では一般的な器種であり、両側面に抉りのある

ヘラ形は、古墳時代後～終末期に属する可能性が高いと考える。

これまで指摘されてきたように、土掘り具として使用されていたと考える。また、鉄器のU字形鋤先も認められており、石器と鉄器を併用していたのだろう。

石槌は、形態などにより4類に細分した。第4章第9節で述べたように、肉厚な礫を石材とする1類は、古墳時代後～終末期よりも古い時期のものである可能性が高い。

石槌は、被熱により赤変・黒変したものや、凹みに鉄分が付着するものもあり、鍛冶の際に鉄を叩くために使用されたと考える。また、正・裏面が著しく凹んだり、側面が抉れるほどの使用痕が認められるものがあり、それらの中には被熱による赤変・黒変が認められないものや鉄分が付着しないものもある。これらは、鉄滓の小割りの際に使用した可能性が想定できる。

砥石は、砂岩を素材とした荒砥石と推定されるものと、天草石などを素材とした仕上砥石と推定されるもの(第134図752など)が確認できた。細かい箇所を砥ぐ際に使用した、小型の砥石もある(第109図622)。穿孔のある提砥も認められた(第30図109、第134図754)。これらの中には、鉄分が付着しているものもある。

床面直上から台石が出土している堅穴建物がある(17・20・21・22・26号)。台石には、敲打痕や砥面が認められ、鉄分が付着しているものもあり(写真図版37)、鉄器製作の鉄床石であったと考える。また、砥石とした11号堅穴建物の95(第27図)や15号堅穴建物の156(第39図)も、鉄床石の範疇に含まれる可能性がある。

イ 棒状礫

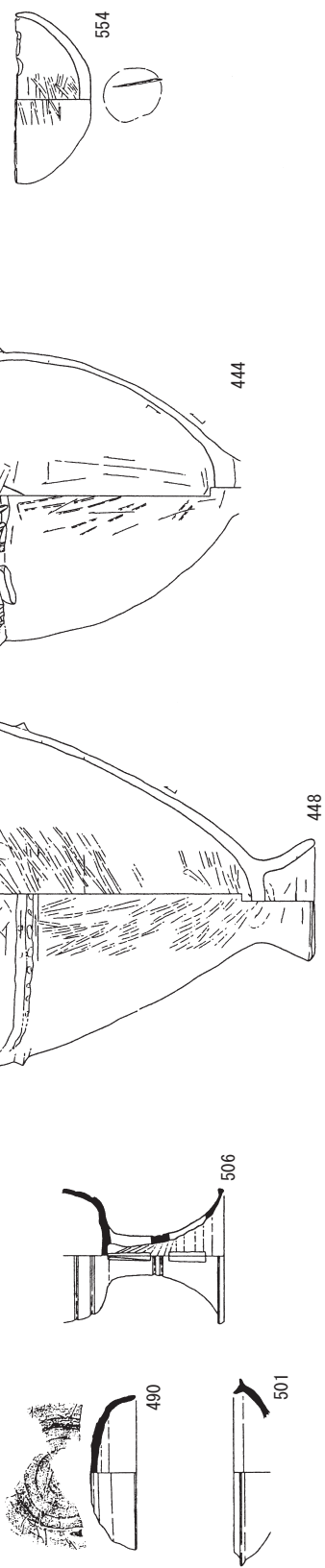
堅穴建物内や包含層からは、283点の棒状礫が認められた。12号・18号など堅穴建物の床面に散在しているものもあれば(写真図版4)、28号のように石槌とともにまとめて床面に置かれていたものもある(第111図、写真図版15)。

棒状礫が堅穴建物の床面にまとめて置かれる事例は、南九州各地で認められる(黒川2012、寒川2015ほか)。棒状礫について使用痕観察などの検討を行った寒川朋枝氏によると、遺跡によって大きさや使用痕の特徴が異なる場合もあるが、一部礫に関しては錘具や製鉄・鍛冶関連具、砥石などの機能があったことを指摘している(寒川2015)。

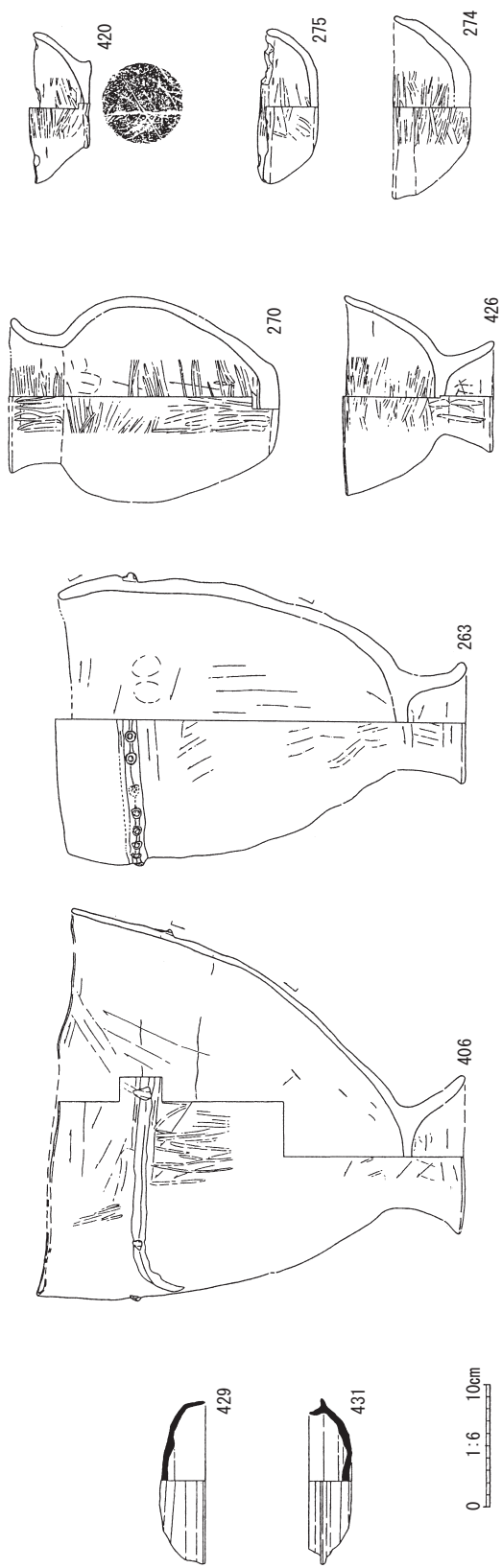
本遺跡の棒状礫は、石槌や砥石のストックとして集落内に持ち込んでいたと考えたい。

なお、本遺跡では、出土した礫は全て取り上げて、肉眼観察を行った。その結果、使用痕があるものを石槌や砥石とし、使用痕が認められなかったものを棒状礫とした。ただし、肉眼で確認できないほどの使用痕が存在し

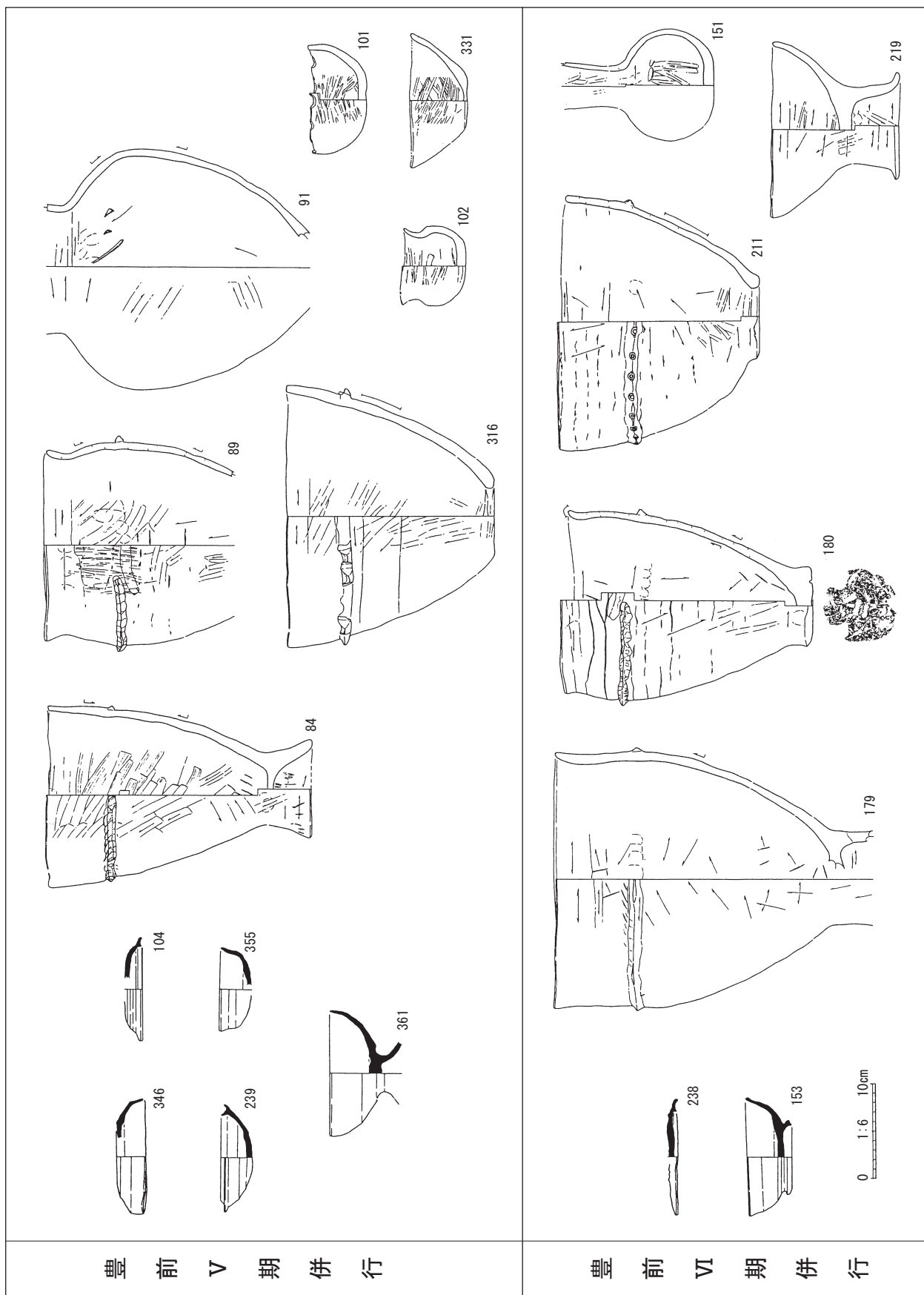
豊前Ⅲ - 3期併行



豊前Ⅳ期併行



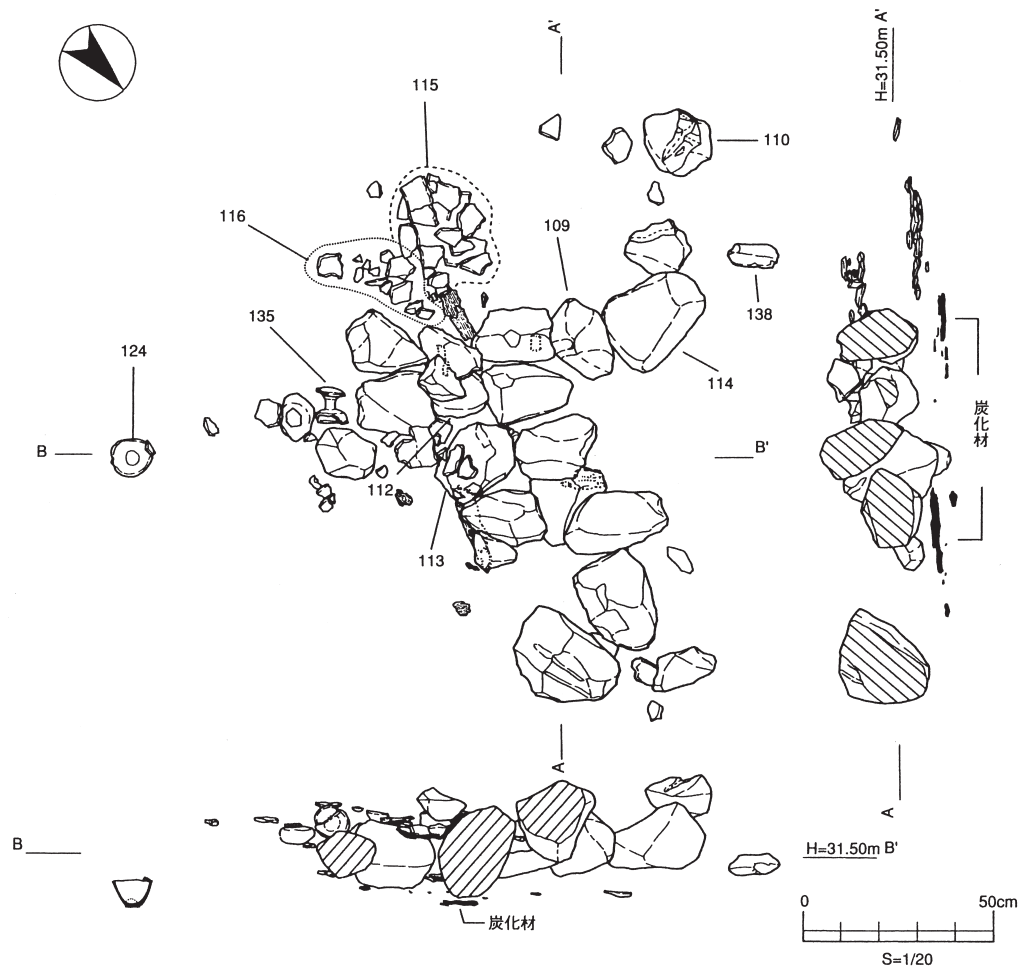
第153図 土器・須恵器変遷図(1)



豊前 V 期 併行

豊前 VI 期 併行

第154図 土器・須恵器変遷図(2)



第155図 3号竪穴建物検出の軽石集積遺構（志布志市教委2008より引用）

ている可能性は否定できない。

ウ 軽石

竪穴建物内から多数の軽石が認められた。埋土内や床面に散在した状態で出土した。

大きさは、長径が 30 cm を超える大型のものから、10 cm 以下のものなど様々である。そして、表面が赤変・黒変したものや、加工痕が認められるものもある。

一次調査の 3 号竪穴建物（出土須恵器から豊前編年 V 期併行に比定できる）では、大型の軽石が集積した（並んだ）状態で検出されている（第 155・156 図）。そして、その下位からは炭化材も認められている。

以上のことから、軽石は鍛冶の際に壁状に並べて、遮熱壁として利用していたと考えたい。

なお、曾於市高篠遺跡では、9 世紀前半～後半に位置づけられる軽石集積遺構が 5 基検出されている。軽石集積遺構から鍛造剥片も出土しており、鍛冶炉と推定されている（鹿児島県立埋蔵 2004・川口 2004）。大隅半島では、鍛冶炉の遮熱壁として軽石を利用する伝統があるの

かもしれない。

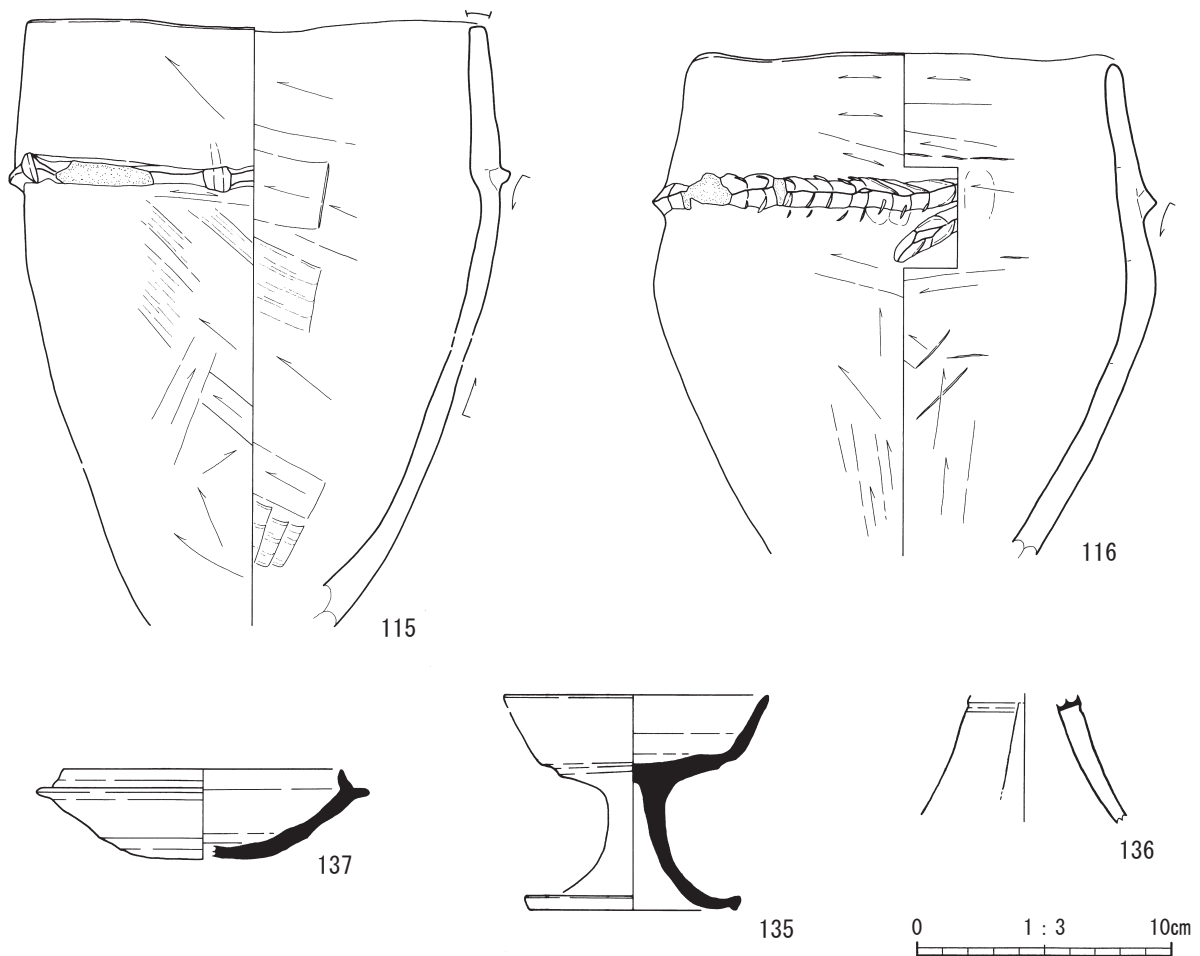
（5）鉄器（第 157 図参照）

鉄器は、竪穴建物内や包含層から 78 点出土している。弥生時代中期と古墳時代前期の竪穴建物からは、鉄器が認められないため包含層出土鉄器も古墳時代後～終末期に属する可能性が高いと考える。

鉄器は、鎌、刀子、斧、鋤鋤先、鎌のほか、穿孔具として用いられた棒状工具や建築部材の可能性のあるものなど、武器や農工具が確認できた。折れ曲がっているものや歪んでいるものなどもあり、使用後廃棄されたものが多いと考える。

鉄鎌は、方頭斧箭式が多く、長三角形式や三角形式も認められている。

方頭斧箭式は、鎌身幅の狭い I 式（津野 2007）に相当する。I 式は、7 世紀後半以降西日本全域に主体的にみられるものであり、本遺跡の様相も西日本の様相と合致したものである。なお、規格性はあまり認められないようである。



第156図 3号竪穴建物出土の主な遺物（再実測）

鋤鋤先は2点あり、ともにU字形鋤鋤先である（第110図623、第136図786）。平面形は、刃両端角がなく、着柄溝のある内縁の両側がほとんど垂直に落ちており、外縁両側が内縁より直線的になっていることから、ともに魚津分類A2b類に相当する（魚津2003）。

魚津氏によると、A2b類は古墳時代中期中葉に出現し、中期後葉に盛行し、後期にも存在するという。

鉄鎌は2点あり（第110図624・625、第137図787）、ともに曲刃鎌である。基部折り返しは、辺全体を折り返す「辺折り返し」で、折り返しを表に向けた時に鎌が右を向くことから、「折り返し乙技法」である。辺折り返しは、穂切り鎌もしくは刈鎌としての用途が推測されている（魚津2003）。

棒状工具としたものの中には、途中で曲がっているものがあり（第57図290・291）、釣針の可能性も指摘しておきたい。

（6）炉壁・鉄滓・ふいご羽口

炉壁や鉄滓は、竪穴建物埋土内や包含層から46点出土している。鉄器同様、包含層出土の炉壁や鉄滓も、古墳時代後～終末期に属する可能性が高いと考える。

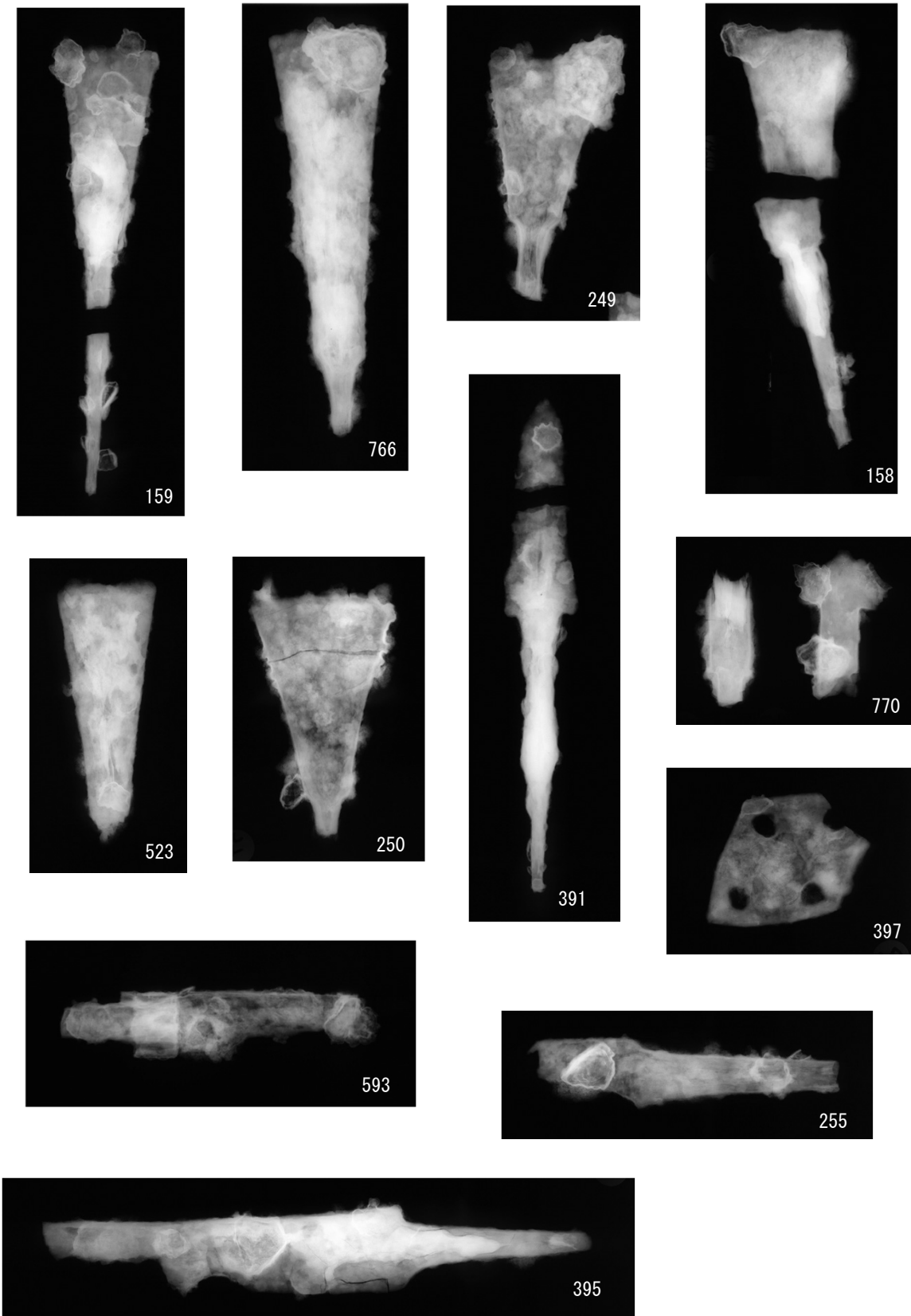
鉄滓は、製錬滓（炉内滓、流動滓）、含鉄鉄滓、碗形鍛冶滓が確認された¹⁾。

炉壁は、スサの痕跡が残るもので、製鉄炉の炉壁である。炉内滓・流動滓・碗形鍛冶滓は、木炭痕が残るものもある。炉壁や鉄滓には、剥離面が認められるものがあり、小割りしたことがわかる。

なお、炉壁や製錬滓などの製鉄関連資料は6世紀末～7世紀に位置づけられるものであり、現時点において県内最古の製鉄関連遺物である。

金属分析の結果から（第5章第1節参照）、炉壁や鉄滓は、鉄鉱石を原料としたものであることが判明した。分析を行った鈴木瑞穂氏は、鉄鉱石を製錬してつくられた鉄が鍛冶原料として遺跡内に搬入され、金属鉄と分離不十分な滓を除去するための精錬鍛冶が行われたことを指摘している。

ふいご羽口は、18号・20号竪穴建物内と包含層から3点出土している。鹿児島県内で確認されている古墳時代のふいご羽口は、全て高坏の脚部転用のものである（黒川2012）。一方で本遺跡資料は、高坏の脚部とはつくりが異なっており、専用羽口と考える²⁾。



第157図 主な鉄器のX線写真

第29表 製鉄・鍛冶関連資料一覧表

No.	時期	石槌	砥石	鉄床石	ふいご羽口	鉄滓炉壁	鉄器	棒状礫
31	弥生時代中期	3	1					5
30	古墳時代前期	2						
20	6世紀末～ 7世紀初 (Ⅲ-3期併行)	20	2	1	1		11	18
21		3		1			1	4
22		4	1	1		1		3
17	7世紀前～中葉 (Ⅳ期併行)	1	1	1			5	16
19		6	1			3	2	14
23		1	3				4	4
25		1	1				3	6
11	7世紀中～後葉 (Ⅴ期併行)	2	1					7
12		2	1			2		13
18		19	4		2	3	13	41
24		2	1					
28		5						4
15	7世紀後葉 (Ⅵ期併行)	2	1				4	15
16		7	2			3	11	19
26		12		1		1	2	2
10	古墳時代後 ～終末期	1						
13						1		2
14		1						1
27								
29								
包含層ほか		115	23	4	1	32	22	109
合計		209	43	9	4	46	78	283

【註】

- 1) 村上恭通氏と鈴木瑞穂氏のご教示による。
- 2) 村上氏のご教示による。

(7) 製鉄・鍛冶関連資料について

本遺跡では、製鉄の炉壁や製鉄滓(炉内滓・流動滓)、製鉄鍛冶滓(碗形鍛冶滓)のほか、ふいご羽口、そして石槌・砥石・鉄床石などの鍛冶や鉄器製作に関連する石器、鍛冶炉の遮熱壁として利用した軽石が認められた(第29表参照)。

本遺跡はほぼ平坦な河岸段丘面上に立地している。その立地環境から判断すると、遺跡内では製鉄を行っていないようである¹⁾。

上記の出土資料や立地環境から、本遺跡では以下のような作業を行っていたと考える。

- ①遺跡外から製鉄滓や炉壁を持ち込み、それらを石槌で小割りする。
- ②その小割りした鉄滓から不純物を除去し、金属鉄を得るための製鉄鍛冶を行う。
- ③最終的に鍛冶を行って、鉄器製作を行う。

製鉄滓などを小割りする際に利用したものが、被熱の痕跡が認められない石槌と考える。精錬鍛冶や鍛冶の際に利用したものが、ふいご羽口や鉄床石、被熱痕のある石槌、遮熱壁としての軽石、砥石であろう。

ただし、鍛冶関連遺跡の可能性を想定して調査を行っていないために、堅穴建物の床面や炉内・炉周辺の土壌サンプリングをほとんど行っておらず²⁾、鍛造剥片や粒状滓などの微細遺物を検出できていない。

また、鉄床石が床着出土した堅穴建物(17・20・21・22・26号)のうち、17号の炉はかなり焼けているために鍛冶炉の可能性も有り得るが、断定はできない。他の炉も、鍛冶炉と認定できるものではない。

このような理由から、遺跡内で製鉄鍛冶や鍛冶を行っていたとは断定できない。

ところで、金属分析の結果から、炉壁や製鉄滓、製鉄鍛冶滓は鉄鉱石を原料としている。志布志湾の海岸では砂鉄が採取できるものの、在地の原料は利用していない。

鈴木氏が指摘するように、そこで問題となるのが、遺跡内に持ち込まれた製鉄滓などがどこで生成されたのか、あるいはどこから持ち込まれたのかということである。

そこで、以下の二つの可能性が想定できる。

①鉄鉱石をどこからか調達して、遺跡近傍で製鉄を行い、そこで生成された製鉄滓や炉壁を遺跡内に持ち込んだ。

②鉄鉱石を原料とした製鉄遺跡が多数確認されている中国地方や北部九州などから(鈴木2016)、炉壁や製鉄滓が遺跡内に持ち込まれた。

第30表 竪穴建物属性表

No.	規模(m) 縦×横×深さ(床面まで)	時期	形態	柱穴	貼床		硬化面	炉
					有無	厚さ(m)		
20	7.3×6.0×0.6	6世紀末～7世紀初頭 (豊前編年Ⅲ-3期併行)	方形	6	○	0.15	○	○
21	3.5×3.5×0.5		方形	無	○	0.2	×	○
22	4.1×4.0×0.5		方形	無	○	0.2	△	○
17	5.9×5.2×0.5	7世紀前～中葉 (豊前編年Ⅳ期併行)	方形	4	○	0.15	×	○
19	4.9×4.7×0.4		方形	4	○	0.25	○	○
23	6.5×(5.7)×0.35		方形	6	○	0.25	×	○
25	5.1×4.7×0.15		方形	6	○	0.1	×	×
11	5.9×5.4×0.15	7世紀中葉～後葉 (豊前編年Ⅴ期併行)	方形	4	○	0.2	○	○
12	5.7×5.2×0.2		方形	4	○	0.15	△	○
18	6.5×6.0×0.7		方形	4	○	0.2	○	○
24	3.9×3.5×0.1		方形	無	×	-	×	×
28	4.3×4.2×0.4		方形	無?	○	0.15	△	○
15	5.5×4.1×0.25	7世紀後葉 (豊前編年Ⅵ期併行)	方形	無?	○	0.15	×	○
16	6.0×(3.6)×0.05		方形	4?	○	0.2	?	○
26	5.3×4.6×0.1		方形	4	○	0.15	△	○
10	4.1×(2.5)×0.6	6世紀末～7世紀後葉	方形	4?	○	0.15	×	△
13	3.6×3.4×0.1		方形	4	×	-	△	○
14	(3.5)×(3.2)×0.2		方形	4?	×	-	△	?
27	(4.3)×(0.6)×0.1		方形	-	×	-	?	?
29	2.5×2.2×0.05		方形	無	×	-	○	○
32	(3.2)×(0.6)		未調査					

本遺跡では、須恵器の瀬戸内系大甕や高坏CⅡ1類、筑紫甕が認められている。したがって、中国地方や北部九州の製鉄遺跡から炉壁や製錬滓が持ち込まれた可能性が高いことを指摘しておきたい。

【註】

- 1) 村上氏のご教示による。
- 2) 18・19・20号の炉埋土の土壌サンプリングは行っている。

2 遺構

竪穴建物が21基検出された。ただし、1基(32号)は現地保存され、調査を実施していない。

竪穴建物は全て方形である。24号・25号以外は地床炉を確認した(14号・27号は不明)。竪穴南側の壁際床面に土坑をもつものが多い。各竪穴建物の属性は第30表のとおりである。

(1) 竪穴の構造

ア 規模

検出された竪穴建物は全て方形である。正方形を呈するものもあれば、長方形あるいは平行四辺形状のものも認められる。

規模は、以下のように区分できる。

- ①一辺が3.0m以下のもの(29号)
- ②一辺が4.0m前後のもの
(10・13・14・21・22・24・27・28号)
- ③一辺が5.0m前後のもの(19号)

④一辺が5.5m前後のもの

(11・12・15・25・26号)

⑤一辺が6.0m以上のもの(16・17・18・20・23号)

ここで注意したいのが、④一辺が5.5m前後のものは、全て7区以東で検出されたものということである。7区以東では、Ⅳ層(御池火山灰含有層)上面ではなく、Ⅳ層を少し掘り下げたところ、もしくはⅤb層上面での検出のため、検出レベルが低くなっている。したがって、本来の規模はもう少し大きくなる、つまり一辺が6.0m以上になると考える。

本遺跡の竪穴建物は、一辺が4.0m前後のもの(小型)と、一辺が6.0m以上のもの(大型)の2種類に大きく分けることができそうである。

深さについて、検出レベルが高い18号や20号は、検出面から床面までの深さが0.7～0.6mを測る。土層断面から判断すると、実際の掘削レベルはあと20cm程高いと考える。つまり、実際の深さは1m弱あったと推定できる。

なお、例えば18号(6.5×6.0×0.9m)は最低でも35.1m³、20号(7.3×6.0×0.75m)は最低でも32.85m³というように、構築時にはかなりの土量が生じる。

それらを集落外に持ち出すことは考えられず、竪穴建物の外周に盛って、周堤を造っていた可能性が高い。そして、竪穴建物廃絶時には、その土砂が竪穴に埋没したのであろう。

イ 貼床・掘方

検出された竪穴建物は、13・14・24・27・29号以外、貼床を有している。なお、貼床を有しない竪穴建物は、全て小型の竪穴建物である。

貼床は概ね0.1～0.2mの厚さで、黒色土やアカホヤブロック、池田降下軽石など竪穴建物を構築時に掘り上げた土で形成されている。

貼床除去後の掘方床面は、ほとんどがアカホヤ層（VIa層）を基盤としているが、18号や20号はアカホヤ層下位のVII層まで達している。18号・20号の竪穴壁断面を見ると、噴砂起源の砂層（VIb層）が確認できる。

つまり、竪穴構築時に砂層を除去したために、VII層に達したと考える。なお、23号の掘方床面には、溝状に掘り下げられた箇所があり、そこは噴砂脈があったところと考える。

掘方床面は、全体をほぼ均一に掘削しているものがほとんどであるが、中央付近が一段下がり、二段になっているものもある（19・21・22号）。これらは、砂層を除去した可能性がある。

掘方床面は、掘削痕と推定できる凸凹が残る。小さな凸凹であり、掘削棒のような工具もしくは打製石斧で掘り下げた可能性があろう。

ウ 硬化面

生活面（床面）上に、アバタ状の凸凹をもち、移植ゴテでは容易に削れないほどの硬化面をもつ竪穴建物も認められた。

11・18・19・20・29号のように明瞭に残っているものや、12・13・14・22・26・28号のようにわずかに残っているもの、そして10・15・17・21・23・24・25号のように確認できないものもある。

硬化面が確認できないものやわずかに残っているものは、竪穴建物使用時に床面がそれほど踏み固められなかった可能性がある。

一方で、竪穴建物廃絶後にしばらく放置され、床面が日光や風雨に晒された結果、硬化面が消失した可能性も考えたい。実際、17号の床面直上において、廃絶後に水が溜まっていた時間があつた可能性を示す痕跡が認められている。

硬化面が明瞭に残っているものは、廃絶後あまり時間を置かず埋められた、もしくは埋まった可能性がある。

エ 柱穴（第158～160図）

柱穴は、4本柱、6本柱、そして無柱穴もしくは不明瞭なものがある。

4本柱（可能性があるものも含む）は、10・11・12・13・14・16・17・18・19・26号である。

6本柱（可能性があるものも含む）は、20・23・25号

である。

無柱穴もしくは不明瞭なものは、15・21・22・24・28・29号である。

無柱穴もしくは不明瞭なものは、小型の竪穴建物（一辺が4.0m前後）がほとんどである。

オ 建替・増築

検出された竪穴建物には、柱穴の配列から建替・増築した可能性を指摘できるものもある。それは、11・17・20・26号である（第161図）。

11号は、「P1-2-3-4」→「P5-6-7-8」→「P9-10-11-8」の2回の建替・増築を考える。

17号は、「P4-2-1-3」→「P4-7-5-6」の建替・増築である。

20号は、「P3-9-11-13」→「P1(2)-5-8(7)-10-12-15(14・16)」の、4本柱から6本柱への建替・増築である。

26号は、「P2-3-7-6」→「P1-4-8-5」、もしくは「P1-3-7-5」→「P2-4-8-6」の建替・増築である。

17号の掘方床面には、建替前の掘方床面の痕跡と炉が残っている。

20号のP4は、建替前の建物に付属する土坑であつた可能性がある。

（2）竪穴建物の変遷

上述したように、出土須恵器から豊前編年に依拠した形で、各竪穴建物の時間的位置づけを行っている。

須恵器が出土していない、あるいは時期比定可能な須恵器が出土していない竪穴建物のうち、25号と26号は宮崎平野部からの搬入土器である坏が認められており、その坏を基に時期比定を行う。

25号の614（第109図）は、口縁部が短く外反し、丸底を呈する可能性が高いことから、下耳切C期（TK217新段階併行）に比定でき、豊前編年IV期併行と考えたい。

26号床着遺物の634（第113図）は、口縁部が外傾し、丸平底を呈していることから、下耳切D期（TK46併行）に比定でき、豊前編年VI期併行と考えたい。

上記の結果と出土須恵器からの時期比定を以下にまとめた。各期の遺構配置図を第162・163図に示した。

①豊前編年Ⅲ-3期併行（6世紀末～7世紀初頭）

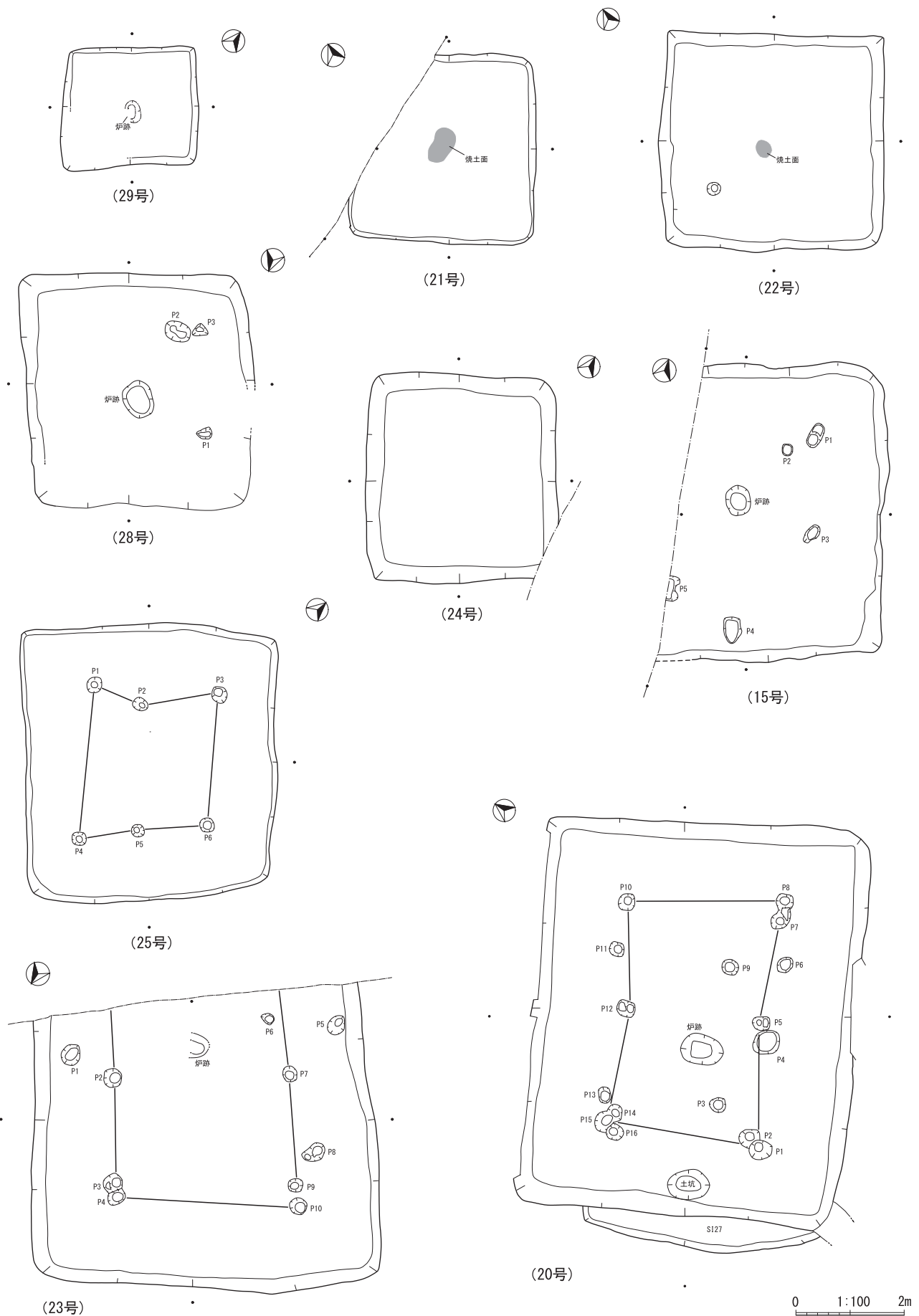
20・21・22号

②豊前編年IV期併行（7世紀前葉～中葉）

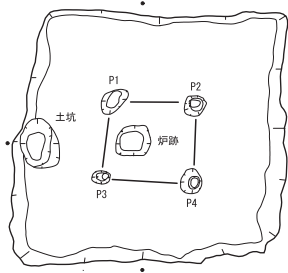
17・19・23・25号

③豊前編年V期併行（7世紀中葉～後葉）

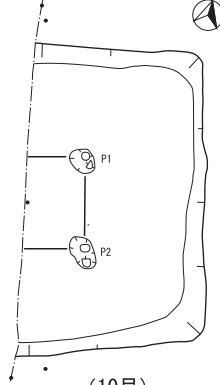
11・12・18・24・28号



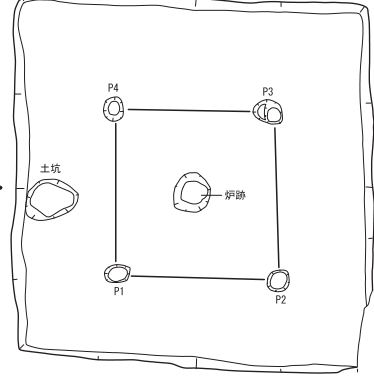
第158図 古墳時代後～終末期における竪穴建物（無柱穴・6本柱）



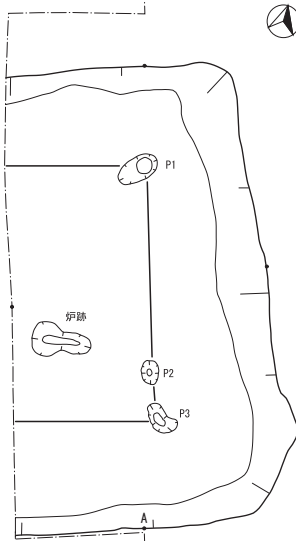
(13号)



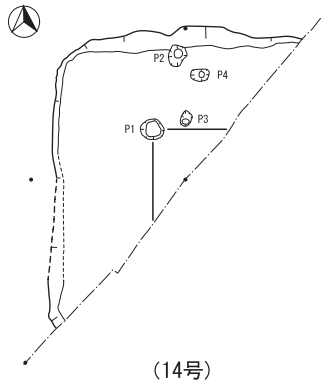
(10号)



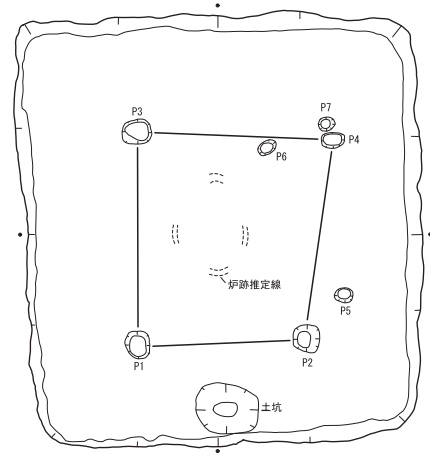
(19号)



(16号)



(14号)



(12号)

0 1:100 2m

第159図 古墳時代後～終末期における竪穴建物（4本柱）

④豊前編年VI期併行（7世紀後葉）

15・16・26号

⑤時期不明

10・13・14・27・29・32号

遺構配置図を見ると、各期の竪穴建物は調査範囲にまんべんなく広がっており、偏在性はうかがえない。

なお、時期が下がるにつれ、竪穴建物の配置が西から東へ移っている傾向が看取できる。

（3）竪穴建物の性格

日常道具としての土器や須恵器が出土し、地床炉も存在することから、多くの竪穴建物は住居としての性格があったと考える。

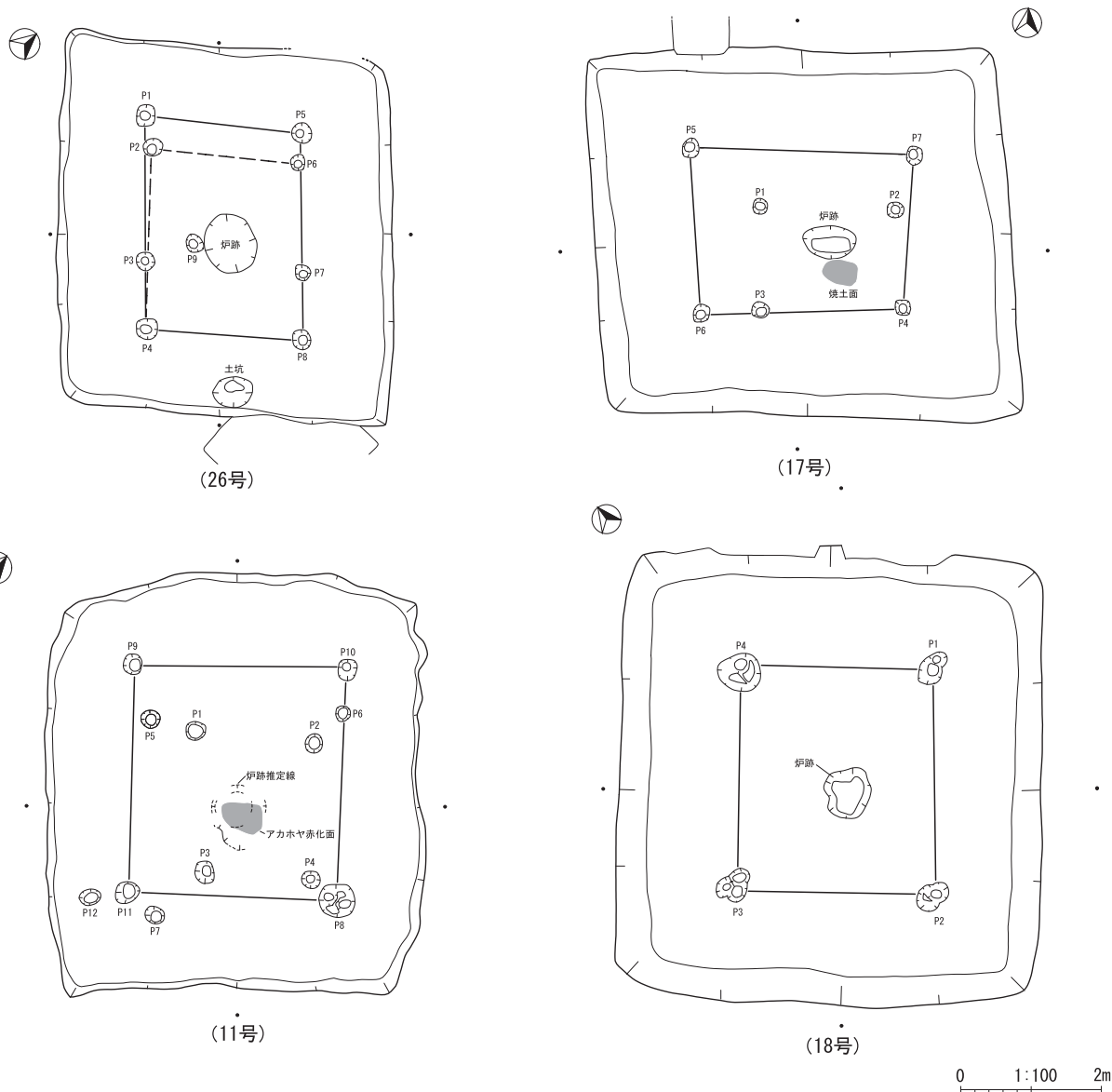
ただし、一辺が3.0m以下のもの（29号）や一辺が4.0m前後のもの（10・13・14・21・22・24・27・28号）は、面積が狭いことから、倉庫や工房など住居以外の性格も想定できる。

また、床面直上から鉄床石が出土している17・20・21・22・26号は、鍛冶工房の可能性もあるが、上述したように断定はできない。鍛冶工房の可能性のある竪穴建物の規模を見ると、小型のものもあれば、大型のものもあり、偏在性は認められない。

24号と25号は、炉が確認できなかったことから、倉庫のような性格の可能性が想定できる。ただし、中村直子氏によれば、鹿児島県内の竪穴建物は廃絶時に炉を掃除するために炭などが確認できない事例もあるとのことである。24号と25号も、炉が存在はしていたが、廃絶時に掃除をしたために、調査で確認できなかった可能性も捨てきれない。

（4）廃絶時の祭祀行為

17・19・22・26号など、床面直上から、口縁部の一部に意図的な打ち欠きがある以外完形の坏が出土した竪穴が認められた。これらは、竪穴建物廃絶時の祭祀行為に使用した後、口縁部を打ち欠いて床面に置いたと想定で



第160図 古墳時代後～終末期における竪穴建物（4本柱）

きるものである。

18号の炉埋土の一部を水洗したところ、5mm以下の玉製品が3点認められた（第70図389）。村上恭通氏によると、鍛冶工房の廃絶時に玉類を床にまく事例もあるとのことであり、18号の事例も祭祀行為によるものであろう。

（5）遺構間接合について

整理作業の際、須恵器について竪穴建物間の接合を試みた。その結果、第164図に示したような接合関係が認められた。

18・19・20・21号の近い場所の接合のほか、18号と23号、15号と21号などやや離れた竪穴建物間での接合も認められた。

竪穴建物埋土内の出土レベルも含めた検討を行う予定であったが、時間的余裕がなく断念した。今後の課題としたい。

3 歴史的背景について

本遺跡の調査から、

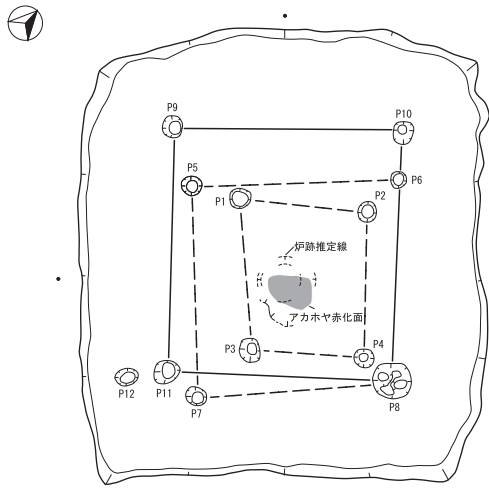
① 6世紀末～7世紀後葉に位置づけられる須恵器が多数認められ、北部九州や瀬戸内地域などの製品もある。

② 宮崎平野部からの搬入土器が一定量認められた。

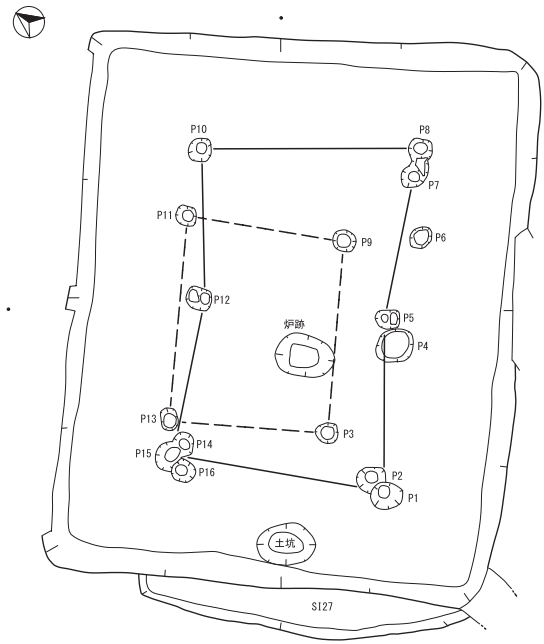
③ 炉壁や製錬滓、精錬鍛冶滓、そして鍛冶関連の石器が認められ、精錬鍛冶作業などを行っていたことが確認され、さらに鉄滓や炉壁は鉄鉱石を原料としたものであることが判明した。

という、注目できる成果が得られた。最後に、その歴史的背景について考えてみたい。

宮崎平野部との関係について、甕に接合痕や木葉痕が認められ、7世紀後半に土器埋設炉も認められることから、志布志市を含む志布志湾北岸域は宮崎平野部の様相に近いことが指摘されてきた（相美2014）。

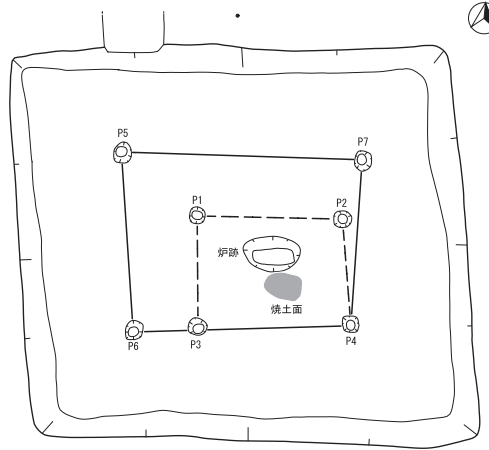


(11号)

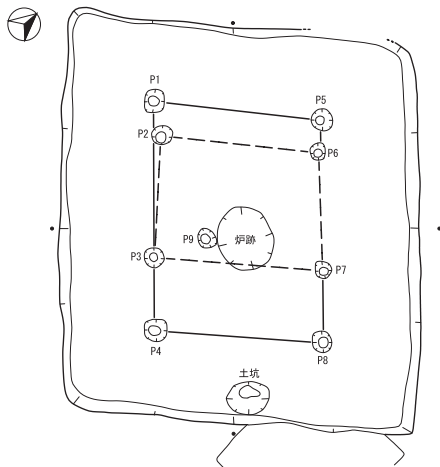


(20号)

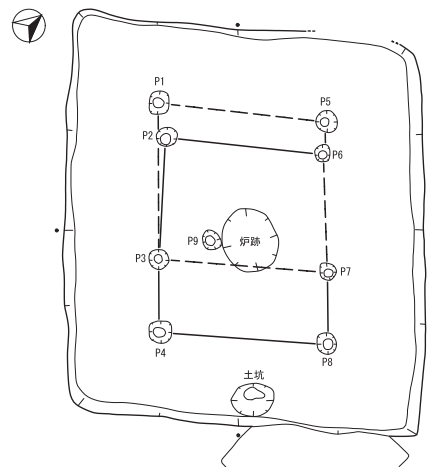
0 1:100 2m



(17号)



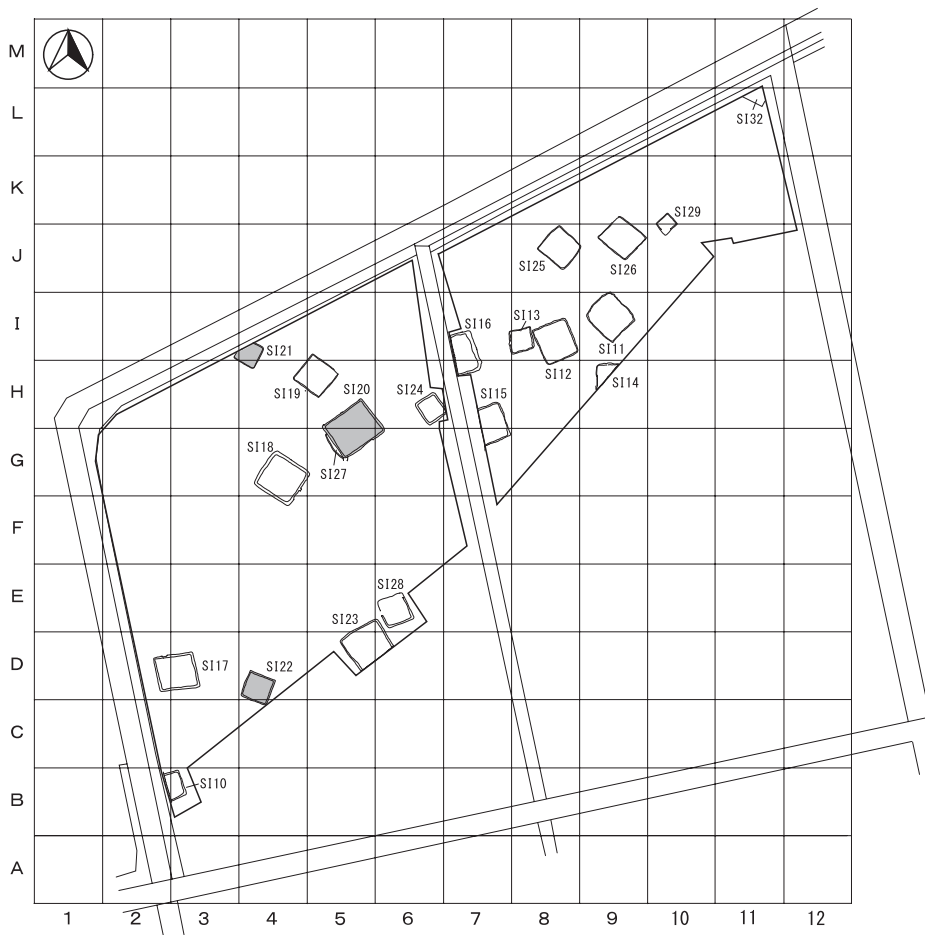
(26号)



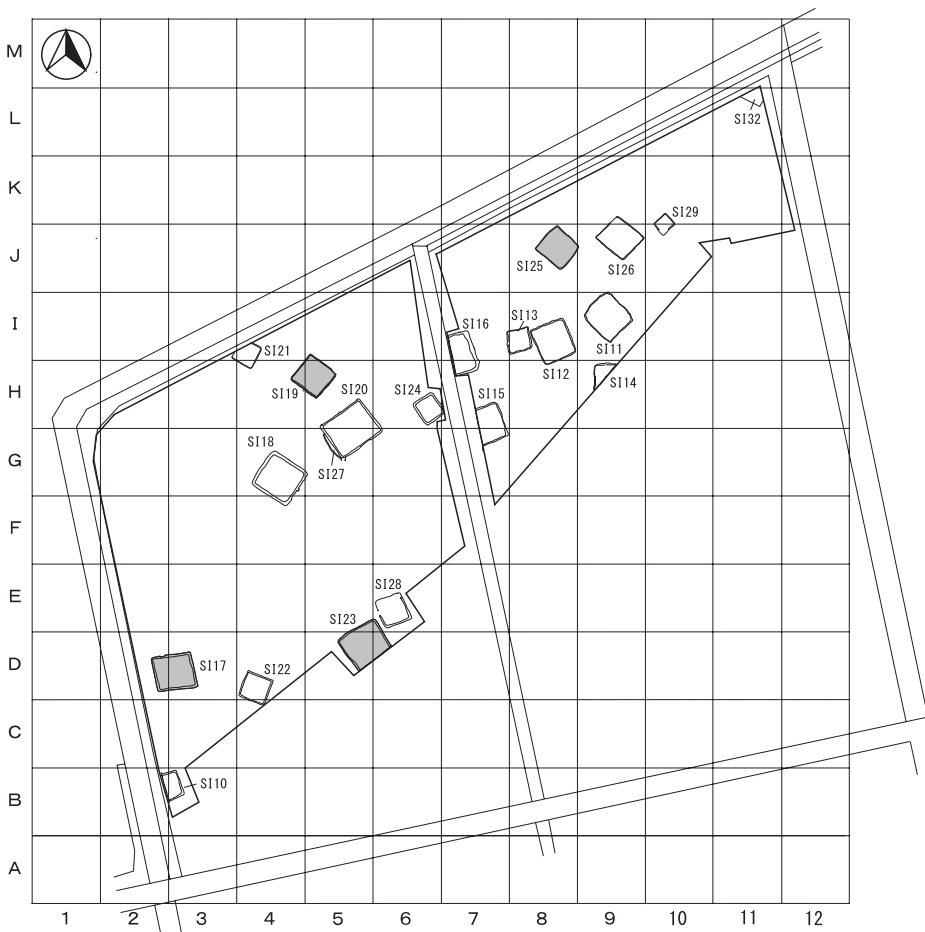
(26号)

第161図 建替えの可能性のある竪穴建物

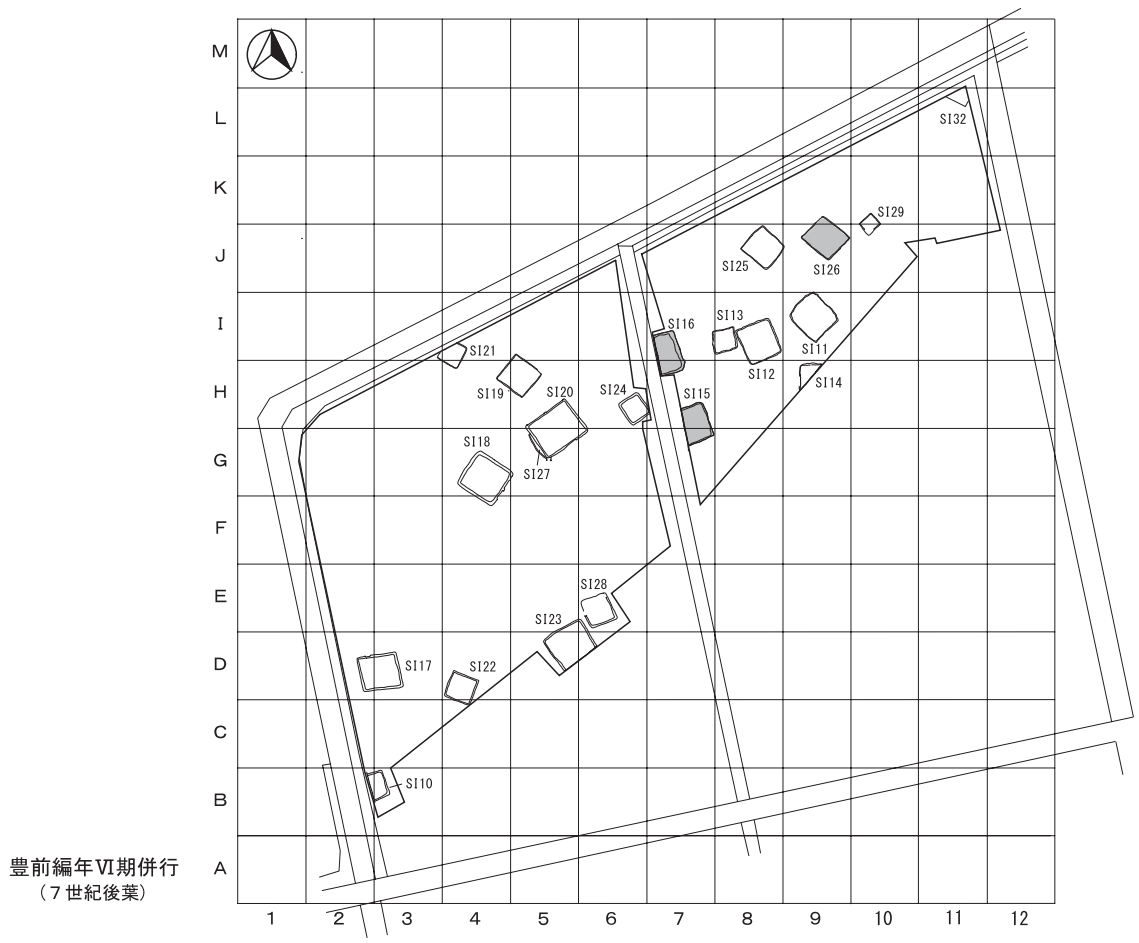
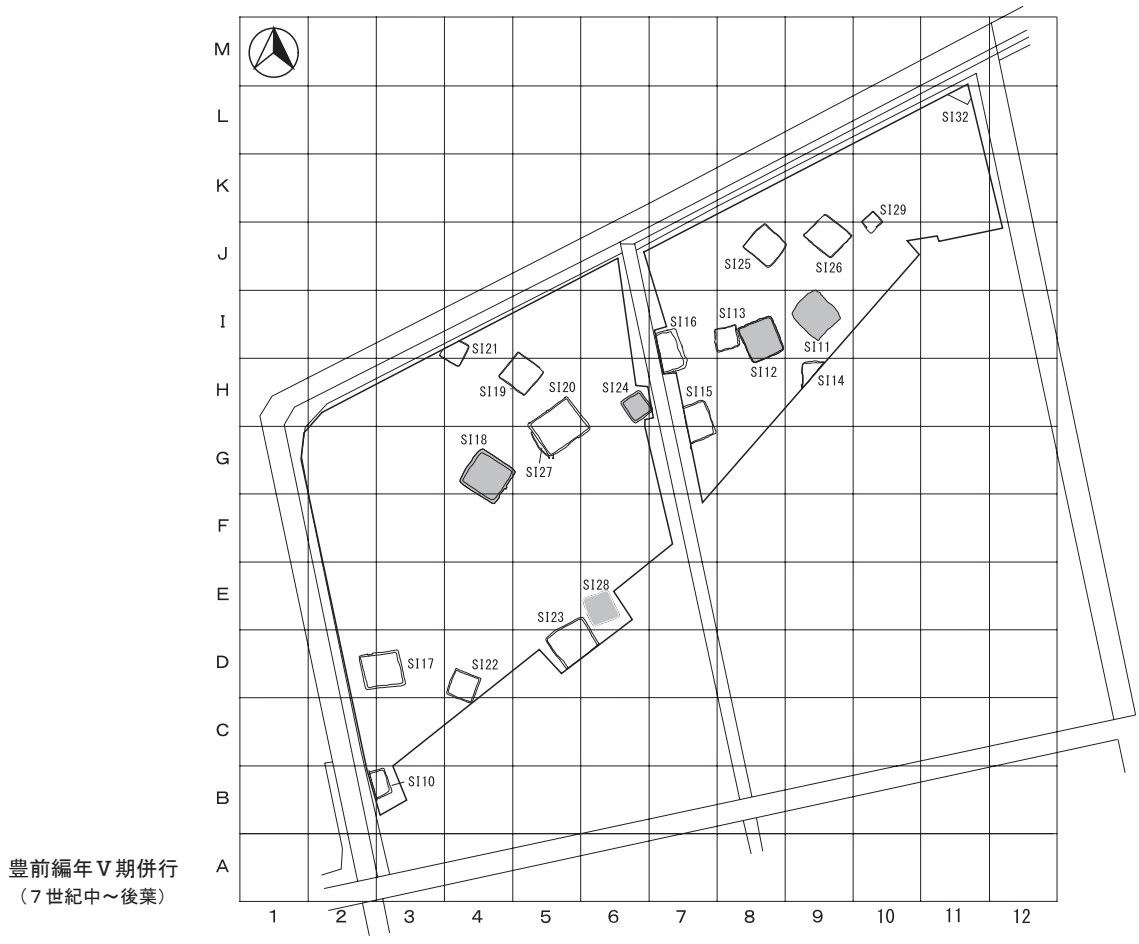
豊前編年Ⅲ-3期併行
(6世紀末～7世紀初頭)



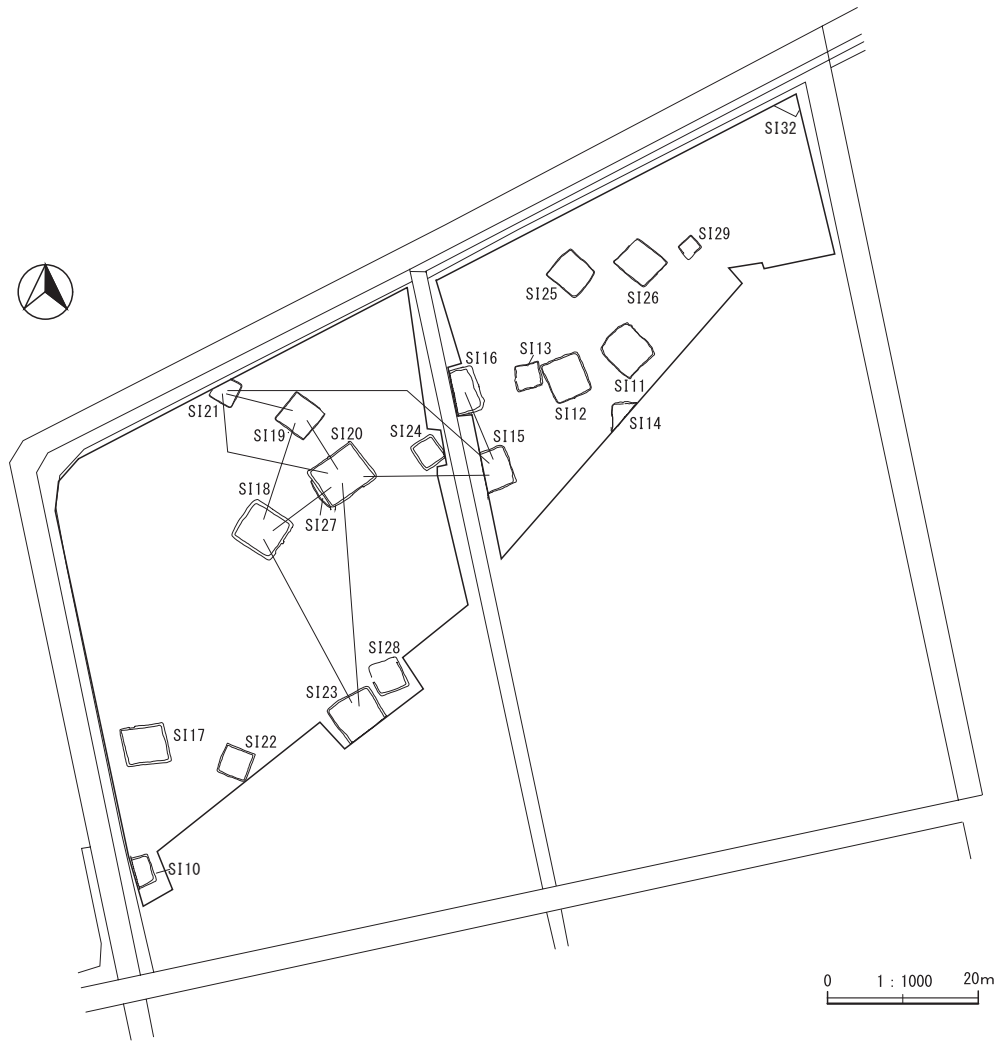
豊前編年Ⅳ期併行
(7世紀前～中葉)



第162図 古墳時代後～終末期における竪穴建物変遷図(1)



第163図 古墳時代後～終末期における竪穴建物変遷図(2)



第164図 遺構間遺物接合関係

墓制についても、志布志湾北岸域には横穴墓—7世紀前～後半に位置づけられる六月坂横穴墓—が存在していた地域でもある（志布志市教委2013）。横穴墓が数多く分布する宮崎平野部から飛び地的存在しており、宮崎平野部との関係の中で造られた移住者の墓との指摘もある（橋本2012）。

今回の調査では、宮崎平野部からの搬入土器が一定量認められ、坏や高坏の供膳具以外にも甕や甑の煮沸具が認められていることが判明した。

このように、7世紀代の志布志湾北岸域は宮崎平野部との関係が強いことが看取できる。橋本氏が指摘するように、移住者が存在していた可能性もあろう。

宮崎平野部との関係が強まる歴史的背景について、後に南島覓国使剽劫事件を起こす大隅半島南部の肝衝氏との関係、そして種子島との地理的關係から、中央政権が志布志湾北岸域を重視したためとの指摘がある（相美2014）。

このような中央政権との関係も、数多くの須恵器が搬入された背景にあろう。

なお、南島覓国使剽劫事件とは、698年に南島での国制施行のための調査や遣唐使の南東路開発を目的として（中村明1993ほか）派遣された南島覓国使が肝衝難波らによって剽劫されるという事件である。なお、肝衝難波は肝衝郡など大隅半島南部を拠点とする隼人の有力者と考えられている（中村明1977）。

志布志市安良遺跡や春日堀遺跡、そして大隅半島南部の鹿屋市中尾遺跡では、古墳時代後期後半以降（6世紀後半以降）に位置づけられる大型溝が集落内から見つかった。

この大型溝出現の背景について、志布志湾沿岸域の集落遺跡において6世紀後半以降に鉄鏃の出土が増加することも根拠に挙げて、何らかの社会的緊張が存在した可能性が想定されている（鹿児島県埋調セ2020a）。

本遺跡において大型溝は確認できなかったものの、今回調査範囲よりも東側に存在している可能性も否定できない。また、方頭斧箭式などの鉄鏃も認められている。

したがって、7世紀末に発生した南島覓国使剽劫事件の前段階から、志布志湾沿岸域において社会的緊張関係

が生じていた可能性もあろう。

その南島との関係について、6世紀後半～11世紀前半の奄美諸島に分布する兼久式土器の甕も外底面に木葉痕が残る。そして全体的な器形や口縁部形態、文様などの特徴が志布志湾北岸域の甕と類似していることから、両地域の関係が指摘されている（相美2014・2015）。

兼久式の甕は、突帯施文として竹管文が認められており、本遺跡資料にも竹管文は存在する。また、高梨修氏（奄美市教育委員会）によると、本遺跡資料と兼久式の甕底部の製作方法はとても類似しているとのことであった。このように、志布志湾北岸域の甕と兼久式との類似性は高く、両地域の関係がうかがえる。

ところで、古墳時代前・中期において、畿内地方（近畿中央政権）と南島を結ぶ広域交流ルートは、九州東岸ルートがメインルートと考えられている（橋本2010ほか）。この九州東岸ルートは、琉球列島産貝流通の検討から、古墳時代後期後半～終末期にも存在していたことが推定されている（中村友2014）。

また、文献史学の成果から、616年などの掖玖（夜勾）人の来朝や629年の掖玖への遣使派遣など、7世紀代には南島と中央政権との交流が活発になるとされている。

以上のことから、九州東岸ルート上にある志布志湾北岸域が、中央政権の九州本土における南島との交流の第一中継地もしくは窓口であった可能性も想定できるのではないだろうか。

本遺跡出土の炉壁や製錬滓は、中国地方や北部九州から搬入された可能性があることを指摘した。もしかすると、九州東岸ルートを通して、瀬戸内系大甕や瀬戸内沿岸域に主要生産地の存在が指摘されている高坏CⅡ1類、大分県伊藤田窯系須恵器などとともに、製錬滓や炉壁が搬入され、遺跡内で鉄器製作が行われていた可能性もある。

ところで、7世紀前半に位置づけられる奄美市小湊フワナク遺跡では、釣針などの鉄器が認められており（名瀬市教委2005）、7世紀以降において鉄器普及の様子がうかがえるとされる（高梨2005）。

想像の域は超えないが、本遺跡で作られた鉄素材や釣針などの鉄器が、九州東岸ルートを通して奄美諸島へ搬出されていた可能性もあるのではないだろうか。

志布志市は現在の行政区分では鹿児島県に属するが、中～近世において日向国に属していた。日向国は7世紀末までには成立しており、713年に大隅国が日向国から分立したものの、志布志市一帯は日向国に含まれていた可能性が高いとされる（喜田1929ほか）。

その背景には、九州東岸ルート上に位置し、そして大隅半島南部や南島との関係のために、中央政権が志布志湾北岸域を重視していたことがあると考える。

その結果、志布志湾北岸域は「非隼人」居住域とされ、

日向国諸県郡に属することになったのだろう。

本遺跡の調査から、志布志地域の7世紀代の様相をうかがい知ることができる大きな成果を得ることができた。

第7節 時代不明

時期が明確に判断できなかった遺構として、溝状遺構と硬化面、土坑がある。

1号溝状遺構（SD1）は、床面が硬化していないものの、道跡と考える。硬化面（SD2）は、溝状遺構の床面であり、道跡と考える。本遺跡が位置する段丘面へ菱田川から登ってくる道であった可能性がある。

ともにⅡ層の上位から掘り込まれており、時期的に新しいと考えるが、詳しい時代は判断できなかった。

1号土坑（SK1）は埋土内から大きめの軽石が出土している、それ以外土坑の性格を判断できるような痕跡や遺物は確認できなかった。

1号土坑もⅡ層の上位から掘り込まれており、時期的に新しいと考えるが、詳しい時代は判断できなかった。（相美）

【引用・参考文献】

- 網田龍生 1994「肥後における回転土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器学会
- 今塩屋毅行 2006「第2節古墳時代集落の検討」『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）
- 今塩屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器」『古墳時代中～後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会
- 魚津知克 2003「曲刃鎌とU字形鋤先－「農具の画期」の再検討」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11 帝京大学山梨文化財研究所
- 甲斐康大 2015「九州南部の古墳時代食膳具の変化－精製赤彩土器の出現－」『Archaeology from the South』Ⅲ 本天道輝先生退職記念事業会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『高篠遺跡・踊場遺跡・九養岡遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『中尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（87）
- 上村俊雄 1984「鹿児島県」『古代学研究』102 古代学研究会
- 川口雅之 2004「鹿児島県における古代の鍛冶遺構について」『縄文の森から』2 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 川口雅之 2019「薩摩半島南部西海岸における弥生時代早前期土器の編年」『鹿児島考古』49 鹿児島県考古学会
- 川口雅之 2020「春日堀遺跡における弥生時代終末期から古墳時代前期の土器編年」『春日堀遺跡Ⅰ』（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（32）
- 喜田貞吉 1929「第3編中古史」『日向国史』上巻 東洋堂

- 黒川忠広 2012「鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介」『縄文の森から』5 鹿児島県立埋蔵文化財センター
(公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2020a『春日掘遺跡Ⅰ』
(公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(32)
(公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2020b『安良遺跡』(公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (34)
- 相美伊久雄 2004「成川式土器」の器種組成について(予察)『縄文の森から』2
- 相美伊久雄 2014「南九州東端域における7～8世紀の土器様相」『Archaeology from the South』Ⅱ 新田栄治先生退職記念事業会
- 相美伊久雄 2015「木葉痕をもつ成川式土器」『Archaeology from the South』Ⅲ 本天道輝先生退職記念事業会
- 佐藤浩司 1989「古墳時代須恵器蓋坏の研究(1)―製作技術と流量変化からみた須恵器生産の画期について―」『研究紀要』3 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 寒川朋枝 2015「住居内に持ち込まれた礫―主に南九州古墳時代の事例について―」『Archaeology from the South』Ⅲ 本天道輝先生退職記念事業会
- 志布志市教育委員会 2008『上苑A遺跡 穴倉B遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 志布志市教育委員会 2012『安良遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 志布志市教育委員会 2013『(伝)六月坂横穴墓』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 志布志町教育委員会 2001『宮脇遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
- 鈴木瑞穂 2016「韓日の製鉄技術分析結果の比較研究」『古代製鉄技術研究における融・複合研究の現状と課題』
- 高梨修 2005『ヤコウガイの考古学』 同成社
- 長直信 2009「九州島における7世紀の須恵器―九州北部周辺の土器様相とその並行関係―」『終末期古墳の再検討』第12回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会
- 長直信 2012「豊前地域の土器様相と須恵器生産―7世紀を中心に―」『古文化談叢』67 九州古文化研究会
- 長直信 2019「西海道の土器編年研究―7世紀における土器編年の現状と課題」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集(1) 九州国立博物館
- 長直信・中島圭 2010「福岡県内出土の八女系須恵器について」『還暦、還暦?、還暦! ―武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集―』 武末純一先生還暦記念事業会
- 津野仁 2007「古代西日本の鉄鎌―地域性と古墳時代との関連―」『古墳文化』Ⅱ 國學院大學古墳時代研究会
- 津野仁 2015『日本古代の軍事武装と系譜』 吉川弘文館
- 坪根伸也 1986「成川式土器小考―甕型土器突帯における一試論―」『鹿大史学』 鹿児島大学史学地理学教室
- 寺井誠 2004「第2節 古代難波の外來遺物」『難波宮址の研究』第十二 (財)大阪市文化財協会
- 寺井誠 2008「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」『九州考古学』83 九州考古学会
- 中村明蔵 1977『隼人の研究』 学生社
- 中村明蔵 1993「第三章隼人と南島」『隼人と律令国家』 名著出版
- 中村和美 1997「鹿児島県における古代の在り土器」『鹿児島考古』31 鹿児島県考古学会
- 中村和美 2006「土師器と須恵器」『先史・古代の鹿児島』通史編 鹿児島県教育委員会
- 中村友昭 2014「琉球列島産貝製品からみた地域間交流」『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会予稿集 九州前方後円墳研究会
- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』6 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子 2009「7・8世紀の成川式土器」『南九州縄文通信』20(中巻) 南九州縄文研究会
- 名瀬市教育委員会 2005『奄美大島名瀬市小湊フワガネク(外金久)遺跡』名瀬市文化財叢書7
- 橋本達也 2010「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートとの文化交流と地域間交流の研究』 高知大学人文社会科学系
- 橋本達也 2012「九州南部と古墳文化」『古墳時代の考古学』7 同成社
- 橋本達也 2015「成川式土器と鹿児島の古墳時代研究」『成川式土器ってなんだ?』 鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也 2018「古墳と南島社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』211 国立歴史民俗博物館
- 橋本達也 2019「大隅・薩摩地域における古墳時代中期の集落と古墳」『集落と古墳の動態Ⅱ』第22回九州前方後円墳研究会 宮崎大会発表資料集 九州前方後円墳研究会
- 深野信之 2012「薩摩・大隅国における8世紀の土師器」『菟原Ⅱ―森岡秀人さん還暦記念論文集』 菟原刊行会
- 藤尾慎一郎 1993「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』27 鹿児島県考古学会
- 本天道輝 1997「南部九州における脚台付甕の底部成形について」『人類学研究』9 人類学研究会
- 松崎大嗣 2017「薩摩・大隅の古式土師器と在り土器」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会発表要旨集・基本資料集 九州前方後円墳研究会
- 松崎大嗣 2020「九州南部における甕形土器の導入と変容」『日々の考古学』3 東海大学文学部考古学研究室
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(125)
- 宮地聡一郎 2008「凸帯文系土器(九州地方)」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』 青木書店
- 村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』 青木書店